# 八文字屋集

全

# 近代日本文學大系 第五卷目次

## 風流曲三味線

## 傾城歌三味線

安藤自笑　江島其磧

## 世間子息氣質……………………江島其磧……七九七―八七九

## 浮世親仁形氣

## 世間母親容氣……多田南嶺……九六三—一〇三七

巻之二



巻之三



巻之四



巻之五





目次終

# 解題

## 書肆八文字屋

文學博士　笹川種郎

　八文字屋本若しくは八文字屋物とは、書肆八文字屋の出版したもの、及び同種類のものを併せ稱した名で、井原西鶴の創めた浮世草紙の系統を引いた上方小說である。

　八文字屋八左衛門は、氏を安藤と云ひ、京都麩屋町通誓願寺下る所にて、世々書肆を營んでゐた。「抑も八文字屋八左衛門と申す草紙屋は、何にて世間へ廣く名を發し候哉、二條正本や（二條通寺町西へ入ル正本屋山本九兵衛）、同じく鶴屋（同所南側鶴屋喜右衛門）は古來より淨瑠璃本にて名を取り、八文字屋は京芝居の歌舞伎本を板行仕候。」と、江島屋其磧の云へる如く、もとは多く歌舞伎本を板行してゐたが、元祿の頃に至り、當代の八左衛門は號を八文舍自笑と稱し、頗る世才に富んでゐたこととて、盛んに役者評判記、浮世草紙を出版して、出版界に牛耳を執り、八

文字屋本は當時の浮世草紙を代表することとなつた。

自笑は延享四年、「自笑樂日記」を出版するまで多くの書籍を刊行した。其の序に、「僕若かりしより狂言綺語を草紙にあやなせること數十部、筆とることもいたづき多くは其笑に物かきして書かせしに、今是を書き納めと思ひ、ふるへる筆に任せ、（中略）此後其笑が書ける草紙、としごろ僕と共に筆をめぐらしぬれば、常磐の松の色變らず、弘く讀み傳へ給ひなんことを願ふと書きをさめぬ。」と云ひ、同じ書の跋文にも、「其笑は子なり、瑞笑は孫なり、向後の作意袋等に命せぬれば、常磐の松の色かはらず、綠の竹の久しき惠みを仰ぐと云ふ詞を以て、毫を納め侍りぬ。千代に八千代の限りなき濱の眞砂と盡せずよませ給へとなん心を込めて。」とありて、「濱千鳥はふみあれ鹽の長濱」と一句を題してゐるがごとく、其の子八左衞門郎も八文舍其笑に貧袋の業をつがしめ、延享四年十一月十一日、八十八歳を以て歿した。二條寺町の本覺寺に葬る。孫を八左衞門郎も八文舍瑞笑と稱し、相ついで、戲作の書を著はし評判記を出したが、孰れも其の祖に劣つてゐた。四代目の八左衞門に至りては、其の才遙かに父祖に及ばなかつた。自笑と號して、漸く評判記を出すに過ぎなかつたが、寬政の初年、京都の大火に類燒して家運大いに衰へ、遂に大阪に下りて、心齋橋筋安堂寺町に微に渡世を營みて、評判記を出してゐたが、此の

人歿して後は、其の子某なるもの放蕩無頼の破落戸にて、産を破り家を失ひ、評判記を作る事さへ出來なかつた。然るに四代目自笑が家に子飼より召仕ひたる卯作といへる者、記憶よく、評判記の綴り方を覺え、八文字屋沒落後、御靈前瓦町に住して、和泉屋卯作と稱し、梅枝軒泊鶯と號して、新古の芝居繪本番附類の賣買を業とし、時には淨瑠璃の作をなし、芝居の故事來歷に委しきより、專ら評判記を出したが、己一人の名を出さず、亡師八文舍自笑の名を署して、己と合作のごとく記してゐた。天保年間、五十餘齡にて歿した。「南水漫遊」に、「技藝の評書は、西鶴團水の頃より昌んに成りゆき、其頃自笑に移り、其の後其笑瑞笑など其の意を續ぎしときは、評判記といふもの京都を本阿彌のやうに思ひしかど、浪華の二十軒下狗、酒屋[illegible]馬宿、其外魚丸、泊鶯など評して、今なほ年毎に出板なし、當代にては大阪を本家とす」とある泊鶯は卽ち此の人であつた。

## 役者評判記

役者の評判記は、もと遊女の細見記に基づいて作られたもので、其の位付も遊女細見記の位付に據つたものらしい。明曆二年板の「役者の噂」が最初のものであると云はれてゐる。然し初期

の評判記に男色流行の世とて、多く婆色に關する品定めであつて、要するに遊女の細見記に對する男色細見記に外ならなかつたのである。萬治三年京板の『野郎蟲』、寛文二年江戸板の『剥野老』、同十一年二月板の『垣下徒然草』、延寶二年六月板の『野郎[illegible]〳〵』、同年、江戸板の『新野郎花垣』、貞享元年、江戸板の『野郎三座託』、元祿四年板の『蓑張草』など、多くはそれである。同五年板の『役者みゝかき』から位付を附して、技藝の評に及び、同六年正月板の『男色三杯機嫌』、同年の『四場居百人一首』、同十年の『役者大鑑』、同十一年の『役者樓欄帯』など次第に體裁が鋭利に、批評が精密になつて來た。翌元祿十二年板の『役者口三味線』は、初めて八文字屋が刊行した評判記で、これからして、八文字屋は盛んに評判記を刊行した。『三國役者舞臺鏡』『役者舌鼓』『役者萬年暦』『役者談合衝』『役者登はしご』『役者評林咄』『役者略請状』『役者二挺三味線』『役者舞扇子』『役者三世相』『役者友吟味』『役者稽古三味線』『役者胎内捜』『役者謀火燵』『役者大福帳』『役者懷世帯』『役者箱傳授』『役者座振舞』などである。

役者評判記の變遷を示さんが爲に、左に數書の文例を載せる。

四　村山座　　　玉川千之丞

面白き事いづれと申すべきやうなし。女とおもきを好まれ給ふこと在五中將にも劣らずし、されども年の寄、二十

日ばかりの月を見るが如くなれば、野郎の雛ゝ今少しにて一しほ情ふかく思はる、花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかはと云ひし人もあれば、又頼もし。

玉容輝ニ四隣一　河畔往來人

千歳一時來　蒸民陷ニ溺身一

玉川の流れをたつる身なりとも袖に浪こす人を問はばや（野郎蟲）

松島市之丞　面體美しく、心にくき笑み顔、むかしの乳濃やかに、わけて情けの深かりしとなん、いとなつかしき野文字のおぼつかな様と、かはれ給ふは今日此頃なりしかど、人の心は飛鳥川、とのまにかはる習ひとて、とやかくと罵ることうたてく思ひ侍る、よはひ暮春の花の如しと云ふもあり

いちの上あつたまりてはならさかへ（垣下徒然草）

菊　前河粂之助

一此君姿美しく、面體篝の内に咲きそふ菊とも云ふべし、但し御目つき竹の子の御香紫とも云はんか、されどいとしほらしく情け深く、景面白からねど、御贔屓の方ありて、取廻しは一興しき事には出られず、さてこそ情けあるなれ、心意氣もあるかなと、野郎集讃む、

淡めに没めけには葉ときく雨の誰が流れより前河の水（新野郎化粧）

れがよいといふ人もあり。いのち〳〵。(『雨夜三杯機嫌』)

位付のことは『南水漫遊』に、「評判記に著はす位付の昇進は明暦萬治の頃より相見えたり。それより次第に進へ出でる事年々に其數不レ知といへども、位は上々吉を頭とす。其の後元祿の末より寶永正德享保の頃に至り、位を六品に分つ

三ケの津總巻頭　無類　極上上吉　至極上上吉　大至極上上吉

大上上吉　眞上上吉　功上上吉　至上上吉

外に畫の白字裏表附等の識贊に好士の知れる所なれば爰に略す。評書在ての偉の内に寸延尺縮の傳を發して、一すぢゝゝ延びて行く、人に逢つては行く船の岸は跡へさがるやうに見ゆる故ありて、次第に出世すると、老いこむ役者の見合には創評祕事あることなり」と見ゆ。

# 江島屋其碩

八文字屋自笑も多少の文才はありしなるべけれど、彼の得意とするところは、其の世才であつた。彼の名を以て著はした評判記にしろ浮世草紙にしろ、多くは江島屋其碩の手になつたのである。

其磧は通稱を市郎右衛門と云ふ。京都京極通誓願寺は淨土宗の本山にして、本尊は春日佛師の大佛であつた。此の寺の門前に昔より餅を鬻ぐ家ありて、大佛餅として世にもてはやされ、繁昌して巨萬の富を作つた。其磧は即ち此の家の後裔であつた。然るに豐太閤が洛東六波羅の南に方廣寺を營みて、大佛建立の擧ありてより、他の餅屋新たに其の門前に大佛餅を開いて、繁昌したりしがために、京極通の餅屋は業を轉じ、誓願寺通、柳馬場に移ることとなつた。其磧は家の富を襲いで、驕奢を事とし、遊里に出入して、風流自ら喜んでゐたが、文才があるので、自笑に聘せられて、彼の爲に幾多の戲作をものしたのである。然るに自笑と其磧との間には、感情の衝突より遂に確執となり、正德四年正月其磧は自笑と分離して『役者目利講』を著はし、其の序に於て、從來のいきさつを一切ぶちまけた。自笑に取りては、まことに一大打擊であつた。

東西々々、取わけて御斷りを申しますは、役者評判本は中頃出水通和泉屋八左衛門と申す草子屋板行致し、年年古板に書き加へて、或は「役者舞臺鏡」又は「櫻欄帶」などと外題を替へて出し候處に、此の「役者目利講」の作者其磧と申す好き者、三ケ津を三卷にわけ、一切づゝの序をつけ、御慰みに、上中又は白字の上などと申す位付を致して、「役者口三味線」と題號をつけ、麩屋町通八文字屋八左衛門方へ遣し申せば、早速板行に致し候。それより毎年せがまれ、斟酌しながら年々作り遣し候處に、又二條通り正本屋九兵衛方よりも、一とせ餘儀なく頼まれ已むことを得ずして、「役者一挺鼓」と申すを仕遣し候。しかれども八文字屋と、正本屋兩方をか

て造らせ候作者へ申分も用ゐず、作者一所の江島屋をけづり、一人の功に可レ仕存念、是によりて當年より江島屋方に役者評判本板行仕候。已來は毎年仕出候間御求め可レ被レ下候。八文字屋方には、今迄名を取らせ候作者の功を奪ひ、自分の功に仕度存念に有レ之候へば、右の所世間へ披露致す事私の毒に存じ、歌舞伎本、計りかんばん等に、此方似せ本の、或は紛らはしき本のなどと小書をして、八文字屋より出し候。右の通に少しにても違ひこることをかく、長々數書を顯し、板行に可レ成ものに候や、紛らはしきと申す小書仕る手間にて、眞實紛らはしき事にて候はば、此長口上をとめ申す次第にて候。惣じて紛らはしきの似せ本のと申すは、譬へば八文字屋八郎左衞門板なんどと仕りし出し候はば、紛らはしきとも可レ申候。あの方は八文字屋板、此方は江島屋板と仕候に、紛らはしきと申す謂は無二御座一候。八文字屋抔もの評判本、又は當世本の作者は、其磧と申すに紛れ無レ之候を、その以前の作者の仕りたるふりにて新作出し候八文字屋こそ紛らはしきと申すべけれ、近ごろ傍若い字無、此方のは數年お馴染の作者、御位佩の評判本、新規の作の八文字屋評判と御見まがへ不レ被レ遊、御求御覽可レ被レ下候。只京芝居の評判は、一度づゝ、座分に仕候間、御神妙に御一覽奉二願上一候、追付評判初り、左様に御心得被成ませう。

正德四年正月　　　　江じまや市郎右衞門

まことに僞らざる告白であつた。其磧は其の子に市郎右衞門の名を讓り、本屋を營ませ、八文

字屋と版權共有の出版をしようと自笑に申込んだのであるが、自笑は頑として聽かず、感情の衝突に加ふるに利害の問題を以てして、遂に此の破裂をしたのである。自笑は狼狽してこれが反駁を試みたが、更に要領を得なかつた。兩書肆は互に競つて評判記を出版し、正德四年正月の江島屋板『役者目利講』に對して、同年三月、八文字屋にては『役者色系圖』を出し、同五年正月には江島屋板の『役者返魂香』、同月の八文字屋板『役者懷世帶』、享保元年正月の江島屋板『役者我身寶』、同月の八文字屋板『役者鯰鯉』、同二年正月の江島屋板『役者斷雙六』、同年四月の八文字屋板『野傾髪透油』、同三年正月江島屋板の『役者[illegible]』なども出版された。其間が自笑に加へた打擊は非大なもので、自笑は相當な痛手を負うたのである。然し永年賣り込んだ八文字屋の信用は決して一朝にして覆滅するものではなかつた。『京攝戯作者考』に、「全體其磧が製作の才は、自笑よりは遙に優れたる者なれども、如何せん不才にや、其頃一作の書は、世間にもてはやされず、唯八文字屋本をのみ諸人めで翫びぬ。」とあるが如く、其頃は他の出版書肆と聯合して八文字屋に當つたけれども、八文字屋を壓するに至らず、八文字屋もまた作者其磧を失つたのみならず、殊に江島屋初め他の書肆どもに壓迫されるので、其が狷介な自笑のことゝて、遂に和議を申し入れ、兩者の扞格も次第に和ぎて、享保四年正月、兩家の相板にて『役者金化粧』を出し、目出度く手打ちをす

と有り、此の書は、八文字屋八左衛門、江島屋市郎右衛門の相板になつてゐる。然し自笑の厚顔なる、『自笑樂日記』の序に、「僕若かりしより狂言綺語を草紙にあやなせること數十部」と云ひ、同じ書の跋に、「愚老若かりしより、數多の戯書を著すこと、十萬言に過ぎたり、僕はいつも白雪と見、紅葉は常に錦の詠め、如何に珍らしからしめんとて、夏雪を降らせ、冬雉子の物好は、化物語にひとしく、綺語の中の變體、取るに足らざらんや。『樂日記』を著して、筆を止むるにつきて、はた思ひ出しぬ。昔者『禁短氣』を述べて板行し、其の後『傷寒』の狂言によせて、『禁短氣』の後篇を書き置けりしが、校合疎なりしを取り出し、箱中に全備ならしめ、『花月論』と題し、一年は『樂日記』を出し、一年には『花月論』を流布せよと、遺事せしめぬるも、子孫長く御贔屓に預り、是れより年々我が志を繼ぎて、彫り傳ふる新板物の、いやさかえに御求め下さるゝやうにと、一備藥の因を便りに、大畧は序に記しぬれども、『樂日記』を出したる翌年、『禁短氣』の後日卷と仕立てし、『花月論』を弘めよと申し置きし仔細を、各樣へ御知らせ申上度。」と云ひて、其頃の歿後たるを幸に、飽くまでも『禁短氣』其の他の諸篇を自作の如く吹聽してゐる。然し自笑の文才は固より採るに足らぬほどのもので、其頃以後に多田南嶺を八文字屋附の作者となして、相も變らず、八文舍自笑の名を以て刊行したほどであつたから、恐らく、彼自身の著述は殆んど無

かつたであらうと思はれる。

八文字屋物として知られたる浮世草紙は次の如し。

傾城色三味線　傾城連三味線　傾城卵子酒

諸色見通野白内證鏡　風流曲三味線　寛闊平家物語

傾城傳授紙子　魂膽色遊懷男　男女伊勢風流

愛敬昔色好　傾城二挺三味線　傾城繼三味線

傾城禁短氣　頼朝三代鎌倉記　傾城杯軍談

百姓盛衰記　今川一睡記　西海太平記

風流今平家　義經風流鑑　世間息子氣質

丹波太郎物語　野傾旅葛籠　通俗諸分床軍談

寛闊役者氣質　手管仕樣帳　分里艶行脚

當世名代男　世間娘氣質　風俗傾性野群談

諸國武道容氣　野傾髪透油　國姓爺明朝太平記

傾城鑑昭君　武德鎌倉舊記　役者不斷容氣

野傾咲分色孖
義經倭軍談
風流宇治賴政
女曾我兄弟鑑
商人家職訓
互先碁盤忠信
女將門七人化粧
記錄曾我女黑船
御伽平家
善惡身持扇
風流東大全
傾城歌三味線
風流友三味線
商人軍配團

傾城新色三味線
花實義經記
役者色仕組
商人世帶藥
櫻曾我女時宗
晴明白狐玉
大內裏大友眞鳥
本朝會稽山
風流扇軍
富士淺間裾野櫻
[illegible]後の卷 奧州軍記
楠軍法鎧櫻
高砂大嶋臺
三浦大助節分寿

玉依輪廻薰物
楠三代壯士
日本契情始
千代袖算盤
風流七小町
出世握虎昔物語
賴朝鎌倉實記
開分二女櫻
契情御國歌舞伎
世間手代氣質
曦太平記
那智御山手管瀧
鬼一法眼虎の卷
梅若丸一代記

眞盛曲輪錦
風流連理[illegible]
渡世身持談義
武道近江八景
其磧置土產
御伽名代紙衣
丹波與作無間鐘
赤松圓心緑陣幕
女曾我兄弟鑑
龍都俵系圖 上同
[illegible]對杯 上同
名玉女舞鶴 上同
雷神不動櫻 上同
大系圖蝦夷噺 上同

愛護初冠女筆始
畧平家都遷
浮世親仁形質
兼好一代記
善惡兩面常盤染
武遊雙級巴
當世御伽曾我
風流畧雛形
傾白ぬり團
逆澤瀉鎧鑑 上同
刈萱二面鑑 上同
薄雪音羽瀧 上同
弓張月曙櫻 上同
其磧諸國物語

風流西海硯
咲分五人娘
諸商人世帯形氣
風流東海硯
忠孝壽門松
花襷巖柳島
當流曾我高名松
[illegible]情雛形
忠盛祇園櫻 自笑其笑
善光倭丹前 上同
女非人綴錦 上同
鎌倉諸藝袖日記 上同
契情太平記 上同
阿漕浦三巴 自笑其笑

萬福富貴自在 二世自笑　禁短氣次編 同上　同三編 同上
加古川本艸綱目 自笑　寶法花出家氣質 二世自笑　風流茶人氣質 龜友
手行燈袖日記 同上　當世銀持氣質 同上　風流酒吹噓 龜友
嬉競大王日記 其風　敵討會稽錦 同上　赤烏帽子都氣質 龜友
逆故三番續 二世自笑　世間姑氣質 龜友　小兒養育氣質 同上
世間旦那氣質 同上　笑談醫者氣質 同上　珍術罌粟散國 其風
世間仲人氣質 龜友　浮世一分五厘 二世自笑　立身銀野蔓卷 龜友
月華通鑑 其風　當世宗匠氣質 其風　太平記綱說 其風

（○○○を附したのは其磧作。——は自笑其磧合作とあるもの。）

八文字屋物と稱するものは、此の外にもまだ澤山ある。又此等の書は八文字屋板、江島屋板のみでなく、菊屋、谷村などの刊行したものもある。

八文字屋物に於て其磧が大立物であつたことは云ふまでもない。西鶴後に於ける最も優れた作家は實に其磧であつたのである。

八文字屋本の初期のものは、多く讀本と云へる横本であつて、傑作は此の種のものに多い。西鶴

城色三味線」を初頭として、いはゆる三味線物の「連三味線」「曲三味線」「二挺三味線」となり、『禁短氣』に至りて、其碩の高潮を示し、自笑と分離して、氣質物となり、傳奇物となり、次第に好色物が薄らいで行つた。

其碩の觀察は深刻ではなかつたが、鋭利であり、奇抜であつた。文章も西鶴ほどの精采はよしなかつたにせよ、垢抜けがしてゐて、土臭くなく、流麗にして又酒脱を極めてゐた。彼も亦苦勞人であつただけ、萬事に透徹してゐた。西鶴後に於ける第一人者である。八文字屋物が西鶴以後に流行したのも、決して偶然でない。

其の初に於て其碩は隱れたる作家であつたが、自笑と分離後に於て、初めて其の眞價を認められた。然し其の傑作は寧ろ隱れた時代にあつた。元文元年六月歿し、年六十、其の子を其瑞と稱した。

## 多田南嶺

其碩の後に八文字屋附の作者となつた人に多田南嶺がある。通稱兵部、名は義俊、字は公實、桂秋齋の別號がある。壺井鶴翁に從つて國學故實を學び、また半時庵淡水の門に入りて俳諧に遊

んだ。「女非人綴錦」「鎌倉諸藝袖日記」「教訓私儘育」「世間母親容氣」などは、此の人の作にかゝると云はれてゐるが、まだ此の他にもあらう。「京攝戯作者考」には、「己が才智に誇りし故か、その國學故實の書にも臆説と牽強附會あり、是れぞ英雄人を欺くなるべしとて、識者の謗を受けたり。」と非難してゐる。寛延三年九月十二日、五十三歳にて歿した。

八文字屋本を以て上方文學は一段落を告げたが、後年起つた江戸の小説に八文字屋本の影響は少なくなかつた。

## 傾城色三味線

枕本五冊、元祿十四年板。

京、大阪、江戸、鄙、湊の五卷に分ち、遊女の細見を附した、一篇づゝ讀切りの小話で、頗る氣の利いたものである。京は花、大阪は梅、江戸は月、鄙には伏見の撞木町、大津の柴屋町、奈良の木辻、和泉の乳守、湊には播磨の室、同國鶴野、下關の稻荷町、長崎の丸山などがある。高雄の全盛を云ふ所で、西鶴の敍事を殆んど其の儘に踏襲してゐるが如き間々無いではないが、才筆縱横にして、前後の文脈が難解なるところも西鶴に似てゐる。稻荷町に於ける安宅の狂言の作

り替へ、それよりして、常陸坊海尊（買損）の洒落となり、轉じて堰かれて逢へぬ戀の逢引に移るなど、息をもつかせぬ面白味がある。丸山の段に三十石の夜船情調を敍するくだりなど、作者の才氣は絢爛として煥發してゐる。

西鶴本の上方板は西鶴若しくは蒔繪師源三郎が插畫を描き、江戸板は菱川師宣の筆に成つてゐるが、八文字屋本は多く西川風の畫で、西川祐信若しくは其の派の畫家の手に依りて描かれたものと覺しい。此の書の出板された元祿十四年は、祐信が三十四歲の時である。八文字屋本中、果してどれが祐信か明らかでないが、祐信以外には川島重信の描いたものが多く、川島信清もまた畫いてゐる。祐信の畫いた繪本には、『百人女郎品定』『繪本學話鑑』『文章に其頭作』『教戒女家訓』『繪本筑波山』『繪本常盤草』『繪本喩艸』『女中風俗玉鏡』『繪本美なの川』『風俗色めとき』『最明寺殿教訓百首』『繪本有磯海』『繪本つたかつら』『四季形勢歌』『繪本磯馴松』『繪本勇者鑑』『繪本淺香山』『繪本池の心』『繪本千年山』『繪本徒然草』『繪本朝日山』『繪本千代見草』『繪本和泉川』『繪本重小松』『繪本倭比事』『女教文章鑑』『繪本大和錦』『繪本寢覺種』『繪本武者考鑑』『繪本ひめつばき』『繪本若草山』『繪本福祿壽』『繪本鶴の棲』『繪本都草紙』『繪本貝歌仙』『繪本花の鑑』『繪本十寸見鑑』『繪本武者備考』『繪本勇武鑑』『雛遊の記』『貝合の記』『繪本垣衣草』等

漢水土の異なるが故なり。本朝にも古より英士秀才なきにしもあらねど、古人其の人物を圖せざれば、世人見ることなし、此の國にして此の國の風俗を見畫せば、豈樂しからざらんや。嘆息せずんばあるべからず。予專ら和畫に心を入れて晝くも此の意にして強ひて偏なるにはあらず。唐様の人物山水等は、先古の妙手より〳〵、畫きて缺くる事なし、和流の物はやゝ見る事稀なり。今此の書に依つて本朝の故事古今の人物及び山水草木等を摸寫して參見に備ふ。聊か闕けたるを補ふの微志ならんか。蓋し家宅を書きて人物を其の中に書ける事も、唐土の法は人と家宅との分量大いに相違す。吾が朝の法は人形の所作思ふまゝに書きなされて、しかも家宅と人とのわりふ少しも違はず、本朝畫法の妙なることを此の一頭をもて量知すべし。總べて和畫に發明したること枚擧するに遑あらず、仍つて著く頻に渉り一事に泥み偏るべからずとぞ。

と云へるが如き、其の見識を窺ふべきである。自笑が、作者として其の頃、畫家として祐信及び其の一派を自家の薬籠中に入れたところに、其の並々ならぬ世才が偲ばれるのである。

## 風流曲三味線

枕本六冊、寶永七年板。

「色三味線」以後、寶永二年に、「傾城連三味線」が刊行せられ、其の後八文字屋の浮世草紙は暫

く絶えてゐたが、寶永七年には、本書の他に、『傾城卯子酒』『諸艶見通野白内證鏡』『寛闊平家物語』「一名永代男」と『傾城傳授紙子』とが、自笑の名に於て述作刊行されてゐるが、いづれも其磧の作たることは云ふまでもない。『魂膽色遊懷男』と云へる豆男を題材としたものは寶永年間の刊行であるが、其の年月を詳かにしない。其磧の作である。一たび『色三味線』が好評を博してから、三味線と題する書の刊行せられたものは少なからず、寶永元年には風音堂作の『風流連三味線』、同五年に西澤與志作『野傾友三味線』、寶永年間の西澤朝義作『傾城伽羅三味線』があり、八文字屋本にては『傾城連三味線』『風流曲三味線』の他に寶永年間の『傾城二挺三味線』『傾城[illegible]三味線』、享保十七年版の自笑其磧合作の『傾城歌三味線』、同十八年の同上合作の『風流友三味線』などがある。

寶永年間の浮世草紙作家としては、其磧の他に錦文流、西澤與志、北條團水、白梅園鷺水、森田吟ゝ、月尋堂、林義端、桃の林蝶麿、善教寺猿算、風音堂、市中軒、京花堂斧麿等があつた。其のうちで最も多く著作を公にしたのは、西澤與志で、『傾城武道櫻』『伊達髪五人男』『野傾友三味線』『風流三國志』『茶傾ひその顔』『[illegible]御前二代男』『衆道戀慕櫻』『野傾百物語』『男傾城文枕』『傾城伽羅三味線』などは、何れも此の年間の刊行にかゝつてゐる。錦文流の『棠大門屋敷』『風

流今兼好』『當世乙女織』『熊谷女編笠』『諸ヒ百家記』『好色手術端』も、北條團水の『新武道傳來記』『晝夜用心記』も、月尋堂の『鎌倉比事』『子孫大黒柱』『今樣二十四孝』『兄弟善惡事』『武道眞砂日記』も、白梅園鷺水の『御伽百物語』『近代因果物語』『本朝新堪忍記』『新玉櫛笥』も、森田吟夕の『宇津山小蝶物語』も、市中軒の『美景蒔繪松』も、善教寺猿算の『色道懺悔男』、京花堂斧麿の『當世誰が身の上』も、忍岡やつがれの『關東名殘袂』も、東の紙子の『■■男色比翼鳥』も、柳絲堂の『拾遺御伽婢子』も、風音堂の『風流連三味線』も、山之軒政房の『誰袖海』も、菅女軒の『心中大鑑』も、此の年間に刊行されたものであつた。

洛西雙ヶ岡の麓に住へる歌舞伎若衆のなれの果てと云へる老爺と、同じ一軒家を中より仕切つて、老爺とは火の取りかはしもした事のないと云ふ、これは六條三筋町の傾城の果てなる老婆とが、御室の花見に末社四五人召連れてそぞろあるきせる大盡に、過ぎし昔を語ると云ふ趣向で、女色男色取り交ぜての小說。二人の翁媼たることは陰陽の神で、男女の道を守る女道衆道二つの穴神、白狐の形を顯はして椿の都へ歸つたと云ふ。

三の巻に、魔道に陷ちた一代男世之助と槐久との處が現はれ、心中の願押をさうとの事に話がまとまつて、九十に近い堅い老爺と今年やつと十四になる綺羅の小女郎とが深い仲となつて、末

には死なうとするや、心中止めの靈藥に依りて、夢の覺めた如くになつたなどの可笑味があり、見るところに才氣が迸つてゐる。

## 傾城歌三味線

横本五冊、自笑其磧合作、享保十七年版。

享保四年に、自笑と其磧とが和解して、合作名で著述を公にしてからずつと後の作にかゝる。手までなしたる三國の小女郎と、「たらふくつるてん〱夕は格子に松の尾の吉兵衛殿」と小唄にまで歌はれた土屋吉兵衛との情事を骨子とし、三國、島原、吉原、新町の郭情調を書いたものである。同じ三味線の物のうちではずつと劣つてゐる。

## 傾城禁短氣

横本六冊、正德元年版。二世自笑が明和二年、次編三編を著はしてゐる。

其磧が得意の作で、又傑作である。佛法の談義になぞらへての命名で、萬事がお說法式に出來てゐる。第一卷に島原、吉原、新町、撞木町の遊女を主題としての小話。第二卷は、男色女色宗

劣の詮義雙方負けず劣らずの爭論ありて、一其の時判者婬亂居士を始め、滿座一同にどつと笑ひ、前髪を切つて男色の形を失ひ、則ち女道色論に勝ちたるしるし、末の世まで殘すべしと、男色方の負けたる者共の中間より揚屋の牀人の間の夜敷を補にていたさせ、末代までも損ぜぬやうにこしらへさせぬ。まことに女色門繁昌の浮世ぞと聞えける。」にて、女色の勝となる。第三卷は巾着山白人寺と題して、白人の内幕話。『本朝色鑑』に、

素人は娼女の種類なり、或は白人に作る、又白拍子と曰ふ。古の素人は皆舞妓なり、以て白拍子の號あり。また攝の浪花、古は風呂屋女を以て素人の始とす。故に今素人を呂[illegible]に作る。又宜なるかな。凡そ素人は京師の祇園町、先斗町、宮川町、浪花の道頓堀、堀川にありて、東武に未だ白人あるを聞かず、餘國にまた此の輩なし。頭を無帽前帶の娘を本店と曰ひ、有帽後帶の娘を中店と曰ひ、無帶白帶の娘を若店と曰ふ。蓋し素人は、もと貧家の女、親族の爲に身を賣り、或は行跡正しからざるの娼婦止むを得ずして妓となるの族なり。故に古、其の容は遊女の風を習はず、遊女の風俗をなすを以て尋常となす。今や其の風大いに廢して、尤も惡むべし。京師にては[illegible]を以て上品となす。味は太夫より稍劣ると雖も、佳なるもあり。風俗は太夫より大いに劣れり、言語正しからず、皆盜を以てす、行跡も又惡むべし。凡そ素人に會するの族を大臣となし、或は客と呼ぶ。客白人に會するに限る法あり、一日又は一夜約をなす、是れを揚又は約束と曰ふ。又皆く會するを以て惣買と曰ひ

或は一座買と言ふ。大抵午より未の時に至る、是れを大早と曰ひ、未より申に至る、是れを早出と號し、申より酉の前、芝居の終時に至る、是れを晝と曰ひ、酉の前より酉の半刻に至る、是れを暮と曰ひ、酉の半刻より子に至る、是れを後と曰ひ、子より寅に至る、是れを七と曰ひ、寅より朝に至る、是れを明と曰ひ、或は朝詰と號す。又朝詰より巳に至る是れを次と曰ふ。則ち晝夜の約たるや六會を以て之れを約し、夜のみの約たるや、三切を以て之れを約す。唯約に朝詰、次等を入れざるのみ。凡そ客揚屋に至り暫く素妓に會す、是れを切賣或は一座買と號す。廻男の素妓を携へ來り、歸り去つて又迎に來る、すべて是れを一座或は一切と曰ふ。迎ひ來ると雖も素妓を歸さずして留むるを、是れを詰と曰ふ。

とあるものにして、當初の白人狀態は本書善くこれを詳かにしてゐる。第四卷は吉原及び大津の柴屋町、第五卷は大阪新町の水揚談義に始まつて、新造が手管の悟を開き、禿の苦患を脫して、上品女郎の松の位に上ると云ふ戀の諸分、手練手管を說いたもの。第六卷は客への談義。女郎買五重相傳と云ふ秘法から、名妓吉野の一枚起請を證據にしての談話法問「誠に悟れば粹、迷へば月、八萬寶藏の金を以て此の道をあきらむべし、自ら無量の手管をはかり見る、分知りとはひとりなれり、只夢の浮世に無念無想にして遊ぶ所が極樂々々。」と云ふ大悟徹底に畢つてゐるが、まことに此の書は色道學の講座である。

# 鎌倉諸藝袖日記

五冊、自笑其笑合作とあるが、多田南嶺の作。寛保三年板。後篇として寛延三年板の「教訓私儘育」がある。

座頭の三味線、儒者の息子の色道修行、和尚の相撲、素人の丸裸、能囃子好きが若衆から女色への移り替り、天地を無と觀じたる哲學者、坊主の破戒、狸の腕の黒焼、下帯のない劍術遣ひ、唐音好きの若者と踊や淨瑠璃に浮身をやつす老爺、下手醫者、細工の上手の自慢、山伏の暴色、すばる流綸所の捕縄豆、連歌師の指南責など、鎌倉の諸大名が頼朝の前にて滑稽の諸藝を云ひ立てると云ふ趣向。さほどに面白いものではないが、黄表紙の先驅として見るべきものである。

# 世間子息氣質

五巻、其磧作。正徳五年板。

氣質物の名稱は、西鶴の「好色五人女」を、「當世女容氣」と改題したに始まつてゐる。然し其磧が自笑と離れて後、一たび此の書を述作し、其の後「寛闊役者氣質」「世間娘氣質」「役者不斷容

氣などを著はしてから、氣質物の全盛となり、自笑の『諸國武道容氣』、一洞の『寛濶大臣氣質』、其磧の『世間手代氣質』、作者不明の『和漢遊女容氣』、自笑其磧合作の『浮世親仁形氣』、其磧の『諸商人世帶形氣』、九二軒鱗長の『和國小性氣質』、其笑瑞笑の『世間長者容氣』、升瓢の『世間旗本形氣』、永井堂龜友の『風流俳人氣質』、和澤太郎の『世間妾形氣』、無跡散人の『世間學者氣質』、龜友の『風流茶人氣質』『當世銀持氣質』、增谷大梁、半井金陵合作の『世間化物氣質』、蛙文臺の『世間侍形氣質』、增谷大梁の『世間傾城氣質』、龜友の『赤烏帽子都氣質』、しら山の翁の『今昔私盡形氣』、龜友の『世間姑氣質』『世間旦那氣質』『笑談醫者氣質』『世間仲人氣質』、半井金陵の『當世芝居氣質』、其鳧の『當世宗匠氣質』などが續出してゐる。流石に他の氣質本とは違つて、其磧作のものは筆を拔いて、趣向も奇拔で、文章もまた酒脫にして流麗である。第四卷第二の冒頭、「扶桑第一の大湊、人の心も大氣にして、それほどの世を渡る難波橋より、西見渡しの百景、數千軒の問丸甍をならべ、繁盛の表藏構に映りて、夏ながら雪の曙かと思はれ、豐かなる御代の例、松に音なく、千年鳥は常に遊び、限りもなく打開き、蜆採る濱までも小借家建續き、それ〳〵の家職して朝々の煙立てける。」とあるが如きは流麗、末段、「今と云ふ今差詰り死なれぬ命是非もなく、三韓退治の花蛇を背中に負ひ、右の手に神代の杖をつき、左の手には銀閣寺の古器茶碗を持ちて袖を

に出でけるが、此の身に成つても古きを好む心止ます、お助けに古錢があらば一文下さりませ。」は第二卷第三の末段、「三男孫三郎は榮華の餘り、我儘に使うて遊びし人形なれば、操り芝居の間に合はず、抱へて無ければ内證のからくりの緣切れて、やう／＼に小見世物の木戸番に雇はれ、鐵枯れ聲出し、さあ錢に戾りおや、評判の三男孫三郎といふたはけものは是れおや／＼。」と同じく、作者得意の筆法で、洒落穎脫してゐる。

## 浮世親仁形氣

枕本五冊、其磧自笑合作、元文元年板。

既に息子氣質あり、豈親父氣質なかるべけんやと、此に此の書に著はされた。「子息氣質」は前出の如く大阪の繁昌を說いてゐるが、此の書にも亦大阪の繁昌を述べてある。

繁昌の難波津や、入江は次第に埋れて、水車も見えずなりにき、水鳥は陸にすだき、見世を構へて米屋の白とに喚りあふ、昔棹さした舟ならではゆかれぬ所も、近年の新築く、白壁づくりの家建てつゞき、色めきたる町も見え渡りて、流れをせばめ、昔、川にてありし溝になれるにや、今は新たなる町並と見えなりけり。

前出の分が楷書體なれば、これは行書體とも見るべきや、とにかく其磧の文章はどこまでも斬

り拔けた洗練されたものであつた。

## 世間母親容氣

五冊、南圭梅嶺(多田南嶺)作。寶暦二年板。

達筆によく書きなしてはあるが、儒者上りの南嶺として、時々漢語を和譯したやうなところもあつて、其前に比べると、一段と劣つてゐる。第四卷第一の「母から呑込む酒屋の聟殿」などは秀逸の方で、「浮世親仁形氣」の第四卷第二「娘を樂しむ遊山親父」と對照すると、其のけぢめが見えて面白い。

解　題　終

# 傾城色三味線

江島其磧
内藤白笑

# 傾城色三味線序

世に聞き馴れたる鶯の花に鳴くも、その身をうつ程にも面白からず、只何時聞いても、魂にこたへて感じ参らすは、島原の投節、吉原のつきぶし、新町の籬節なり。艶顔を少し背けて、紅舌の動く有様、月雪花紅葉に代へられたものでなし。誠に生あつて始終やむまじきは、此の分里の契緣、何か此の外に又楽しみのあるべきや。江戸の散茶に戀の寄太鼓、京の引舟、難波の鹿、歌に合はせて鳴かす色絲、引く手に靡く勤めなり、品々替れど諸分を載せて、色三味線と是れを名づけぬ。

八文字屋　自笑

# 傾城色三味線總目錄

## 京之卷

## 江戸之巻

扨も其の後袖崎から、すつし淨瑠璃語り出すから哀れなる太夫が内證、聞けば聞くほど遣手の種は分別もの。

## 湊之巻

第一　室の遊女に氣を播磨潟

女郎殘らず揃うたり、座敷踊色にかゝつて、身代棒にふるうどやり延助。

第二　燒鳥にする鶉野の仕掛け

御馳走は何かなしに食責め、彈くも唄ふも上方の跡面白いは床一ツで持つた女郎。

第三　稲荷町の化を顯はす手管男

上方にない下の關の女狂言、珍らしさは髮長排優、目角の強き小倉の大盡。

第四　詞に角だたぬ丸山の口舌

長崎まで後家を當てに下り舟、戀に利きめの強い朝鮮人參、氣の藥を男。

傾城色三味線總目錄　終

# 傾城色三味線　京之巻

## 第一　花の下紐ながと短かと

身はかりもの魂は彼の里にいたり大盡

せちべんなる心から、傾城と土風にはあはぬが秘密と、云ひ出せし者の面が見たし。物の哀れも是よりぞ知る、戀の只中少しの内も、浮世の暇さへあらば、此の美君を眺めまゐらせ、揚屋酒に氣を延ばす事、仙家の不老不死の妙藥よりは増りて、命の洗濯水遊びの上盛り、何か此の外に世界の娛しみ又有るべきや。人生七十古來稀なる世に、始末の二字に括られ、儲け溜めし使はぬ人の心が知れたし。今でも冥途から使が來れば、行かねばならぬ身を持ちながら、有る金を我が樂しみには使ひもせで、來年の何月までと切りきつて、金貸す人程大膽なる者はなし。今宵も知れぬは命なりと、一生役體もなう、身を浮雲の天水といふ男、書濟の隣寵しに、東邊へ出かけゐるに、向うから來る男を見れば、當流の後下りの天窗はやる時、厚鬢にして、然も髻を巻きたて、紬木綿とおもひしは、赤地の裏を狩衣につけたり、又大盡かと見れば續く結構もなし、芝居役者には色黑し、いか様一癖ある奴と、

近寄りて見れば、是れは〳〵古目に掛けてとらせし、落語の話をよう夕顔の、五條邊りに住みし、其江伊勢之助といひて、油辻までつと高上いたし、安倍やの浮氣者なり。其「今程は何處に居るぞ。」と問へば、「私の命目あれば、又た日に逢ふ」と、まだいひかけの口合にやます、京も住み憂く、多くの借錢も殘て伏見の里に、今は路の師なつて、二人口ゆるりと見事な暮し。「されど此の身に成つてもまだやまぬは御存じの惡性、是れも丈がならぬ因果、撞木町の龜屋の井筒に深き中、とと贅覺に供へたし日供に坂へ御下りあらば、必ず御立ち寄り待ち入るなり。」扨今日の出京は、餘計のない緣をさがし敎へつくして、外の番を毎日上京まで、一番づゝならひに參つて、又それが其の日に敎ふるいそがしさ。このみ是れは萬端にも任せぬが、折ふしお屋敷方の御留守居より、囃子のある時分召し出さるゝには困りはつるなり。拍子はかいもくの拙者め、鳴物が邪魔になつて、去りとは謡ひにくし」と云ひちらして、可笑しく首くふれしが、何うやら上から聲高に、鉦太鼓をうちならし、可笑氣なる人形を作り、此間の殿樣を書いて、大奉書色紙いたいた持ちて、傾城買ひを送るわ、おくるわ〳〵と、聲々にわめいて來る。是れはしたり、昔から風の神を送るといふ事はあれど、傾城買ひを送るといふことと、未だ年代記にも見當らず、去りとは替つた思付き、いかさま謂はれあるべし」と、後に下りしさい持つ親父に尋ねれば、「我らがあたりは近年老若共に家業に疎く、島原狂ひに賢くなつて、多くの金銀を

することにあらず。京の者は江戸へ〳〵と下り、江戸の者は上方へ登つて、當所なしに相應に請人屋あつて、惡性者を請け込む家あれば、立身して重ねて又各の町へ、遣ひ崩しに立ち歸るまじき者でもなし。爰が大事の思案所、同じくは雨降り續く水の出ばなに、川へさらりと流したし。是れ水は川へはまるの道理なり。」と、口拍子にのつて云へば、親父横手を打つて「智慧かな〳〵、成程其方の意見に任せ、五條の橋より下へ流すべし、何れも若い衆、是れから五條の橋へ向けて、送らるべし。」と下知すれば、伊勢之介又親父を招いて「何と其の人形に、各家々より十二燈を一つ宛添へて、我等へ渡されまじきや、さもあらば御町へ、道切の呪ひして參らせん。」といふ。元より愚かに作つたる親父、「是れ忝し。」と、町中の若い者共を片端より、天窗割に十二文宛出させ「子々孫々まで傾城買ひは申すに及ばず、茶屋狂ひ小宿狂ひもせぬやうに、御祈念頼む。」と、伊勢之助に人形共に渡して歸りぬ。其の後我を折つて伊勢之介に向ひ「汝それを引請けて何にかする。」といへば「されば是れには深き仔細のあつての事、私抔に此の人形が取りついて、お蔭で使ひくづす程の身になれば滿足なりわるい女房持ちて田舍商ひするを、獨法師の出あるきとは、留守に密夫と盜人の氣遣ひなきやうなものにて、我らに傾城買ひの生靈取付いた分では、何も遣はう種がないゆゑ、此の人形を煎じて吸うても氣遣ひなし、某これを貰ひしは、以前私五條に借屋して居りし筋向ひに、鎌倉屋の源と申して、

江戸大坂に店あつて、手廣く商ひせし分限者ありしが、其の身若うして然も兩親なく、自由なる身を持ちながら、色事に一錢も使はず、生まれ付いて吝い奴にて、じゆつながる銀共を、箱へ押し入れ押し入れ、内藏につめるを樂しみにして、一代絹の下帶かかず、口に魚鳥の味を知らず、色狂ひする者を呆氣とぬかして、拙者が身持など見ては、己が苦にもならぬ事おやに、向ひの筆屋とつきあふな、あいつ今の間に身代潰す仕果なりと、物憎さうに手代共へ意見の引き事、聞く度に無念重なれども、其奴がいふに違ひもなく、二番目の手代も我らが引導にて、桔梗屋の雲井に登りつめさせ、一年經たぬ内に、親方の手前不首尾にさせぬれば、いふも道理とは思ひながら、畢竟誘ふ者に科はなし、其の身器用にはだにて深入りしこ、己と仕損ふなれば、外に憾みはない筈なるに、二日寄合ひの序に會所にて此の噂、ぱつと尾ひれ付けて申せしゆゑ、律儀な家主にて、色狂ひする者は、切支丹の頭取程に恐がり、吝い心から半年餘の宿代の滯りを堪忍して、宿を替へさすし憎さ、偏に此の鎌倉屋の業か、頼まぬ口をきさし故なれば、此の人形を彼奴が門に捨て置き、ものの見事な傾城買ひになして、身代揉み潰して見て慰まん爲に、人形を貰ひしなり。まはり遠き事ながら、是れから厄病の神にて、敵とる思案。」と始終を語り、「只今是れから直に參る。」と、暇乞ひして立ち別れ、それより昔住み馴れし五條あたりの、彼の鎌倉屋の店へ投げ込み、跡をも見ずに伏見の里へ逃げ歸りぬ。抑も此の鎌倉屋の源と

申すは、親より家藏諸道具の外に、八百貫目の讓りを請けてより以來、假にも遊樂の道に心を寄せず、世渡りに賢く、朝暮小判を溜める思案をめぐらし、何によらず江戸大坂にきくべき物を、見立て聞きたてし、買ひ廻しては店に下し、其の身三十一歳になるとき、二千貫目餘に元手をふやし、溜めては箱に押し入れ、釘付けにして藏につめ置き、つひに揚屋の手にも渡さず、況して野郎宿の花にもならず、一生男を持たずに朽ち果つる美なる娘の如く、よいめにもあはずに、可惜金銀埋もれることこそ悲しけれ。然るに源州、ふと葉方より無常心になつて、つら／＼思ふに今もしれぬは人の身、何時まで憂に身をこらすべき、心に叶ふ嬉しみをせんが爲に、金銀ほしき願ひなり、其の望みなくしては石瓦も同然、分別する程分もなき今までの覺悟さらりと改め、思ひきつたる色遊びして、世を心の儘にさわぐべしと、始末せし身を忘れて、俄に男作り、今までは夢に見し事もなき島原に通ひ出し、きめの見事な色狂ひ、元より貝數持ち餘つて、遊び捨つるに分別極めたる大盡、親はなし、女房持たねば子もなし、浮世は暇なり、意見すべき重手代は、近き頃頓死する、世界我が物といふ男、奥州を面白かつて、朝夕通ひしが、上京の大銀持、何某といふ銀の員數計り難しとて、途方なしといふ大盡と張り合ひ、無性に募つて、急に取り出す萬金、しうち、毎日〇〇〇〇をわづらひ出し、里通ひをやめて、四五日養生せし間に、はや奥州は途方なしが根から引き抜き、庭前の花とながめ、我が物に

しての楽しみ、去りとは彼奴にだしぬかれ、我も無念々々と、切歯をして殘念がれども、今は人の物になれば是非なし、最早此の里も面白からずと、色川原の野郎遊びに、模様替ふる思案せし時、色友達は松原の闇の夜といふ、跡先しらぬ瓢簞の川流れ、浮きにうく男が、源をすゝめて「奥州がるぬとて、外にも樣はあるもの、仕掛けし女郎狂ひをやめて、野郎狂ひにせんとは、尻も結ばぬ締なし。針のみゝずより天襯くとは、汝が心ざし／＼。彼の太夫に美しさ增つて、智慧あつて功者で、一座が面白うて、また○によい所があつて、古今無類の太夫色、是れに惜け齒をかけて、今までの女郎と渡り比べて見よ。」といふ「其お名は。」と問へば、「露と答へてきゆる程の君、それは長門の義雄」「お茶の呑めるのか。」「それよ／＼その君、すぐれて美しきに、何とて出かねけるぞ、日本國の大社、かたの如く取持ちけるに、今に此の女郎に郭の住居させ給ふは、いかなる貧乏神の仕業ぞ、難澁の神となつて根引にせよ。」といへば、「我も其の君には戀あり、成程つかんで、途方なしにも世方にも、おそらく負けぬ名を取るべし。」と、それより又色をかへて、長門舟に乘り掛つて、留途のない大騒ぎに、年々うあきし眼前、あけくれの付けとゞけに、いつともなう皆になつて、家藏迄も賣りし時、源が懷より、かの傾城買ひの生靈、楊屋酒に醉うて赤色の玉となり、空中に飛び出で、丹波の方へ墜落しぬ。其の時源は正氣になつて、今までの遊びを夢のやうにおぼえ、去りとは我ながら合點のゆかぬ事と、

内藏へ入りて見渡せば、銀も小判もなかりけり。浦の苫屋の明箱許り、三百、鼠の下屋敷となつて、いかな／＼包紙も殘らず、是れはと、けふもあすもさゐはて、足摺して泣いても歸らず、兎角思案に落ちぬ所へ、御意に入りの末社、花笠佐七、按摩とりの道安、御見舞ひ申して、いつもの調子に、「是れ旦那、君よりの御書簡到來、さだめて身請の御事ならん、先づ是れは何として御延引、又奥州さまのやうに、だしぬかれ給ひて、跡での御後悔見るやうな、なんと道安左樣ではないか。中々あのやうな御心底の眞なる太夫樣は、日本廣しと申せども、ま一人あらばいうてござれ、此の首水もたまらず進上致す。我らよい身でござれば後ともいはずに抓む事ぢやに、何とて旦那は壽命の洗濯に、日和見て御座あるぞ、早う奥樣にして、お中のよいを見ましたい」と、そやし立てて嵩高な文御前に差し置けど、源は惡性の生靈去つて、正氣最中の時なれば、太夫が文も滿足がらず、苦々しき顏して道安に向ひ、「御自分には、拙者共よりはお年かさと申し、殊に御法體の御身として、日頃人魂に申し談すな甲斐には、不行跡にもござらば、御意見でもなされて下されうこなたが、傾城白拍子等の賤しき者を請出し、婦妻に致せなどとは、近頃本意を背いたおすゝめ、お恨みに存ずる」と、常と變つた挨拶すれど、兩人の飛びあがり共まだ氣がつかず、「扨は旦那はしやれて堅い御口上。神ぞ孔子もはだし、諸客に入るの門に入れては、朝に曲をして夕に○○ます／＼の、御感をきかでは面白からず、いさ

お出でことすゝむれば、大盡眼すわつて、「お身達は人を馬鹿にあさるか、神八幡堪忍ならぬといふては、まあ一言きかぬ男」と、脇差取りまはすを見て兩人驚き、「こりやならずの森の郭公」と、こくうに飛んで逃げて行きけり。其の後源は遣ひ捨てし銀のかへらぬ事を悔み、手代共をよせて勘定して見るに、現銀二千貫目、五年半にうつくしう皆になるのみならず、揚屋に五貫七百目の拂ひ殘りあり、其の外傾城屋、呉服屋、兩替屋よりの當座借りの金銀、合三十二貫六百三十一匁三分九厘の負銀、ある物とては居宅諸道具、二十貫目が物はありなしなり。然れば是れを殘してには、手と身とにて退くといふもの、何卒家藏此の儘にて、人手に渡さず續けて行きたしと、種々分別して見れども、兎角分散にせねば濟まぬに究まる時、薄智恵を出し、我を育てし乳母が亭主、南都手貝といふ所に居るを呼び寄せ、思案を申しきかせしに、「其の方年恰好人物よければ、今日より我らが實の親と頼む」とあれば、「是れは迷惑千萬」と、疊へ天窗をすりこむを、「いや是れお身共が仕出したり、元此の借銀色狂ひより出來し事、誰しらぬ者はなし、去るに因つて負はせかた殘らず呼びよせ、其の中にて其の方我が親源右衞門と名乘つて、久々江戸の店に罷り在る留守の中に、降つて大分の金銀をつかひ失ひ、所詮、各方まで借り事申し、存じもよらぬ引負ひを致す事、前代未聞のたはけ者、即ち只今勘當致す。[illegible]を精出しなりとも突いてなりとも取つて給はれ、濟まずあてがあればこそ、各々よりかりも貫ひもしたで

ござらう、最早拙者も法體致し、彼奴に諸事を渡し、隱居もいたし、樂々と後生をも願はうと存じた所に、去りとは／＼情ない事でござる、見れば瞋恚の炎の種ぢやと、此の脇差をぬいて、我等を追ひ走らかし給ふべし。時に手代共左右より取り付き、御尤も／＼じまひにして此の借銀をまひ納めん。貴方の中でむつかしう云はん者は、南拾屋の細かい手代共より外はなし、其の外は呉服屋、伽羅屋、色宿は今まで掛けし見殘りなれば、勘當せらるゝ上は役にたゝぬと、棒共なれば二言と云ふまじ、然らば我らは江戸店へくだり一稼ぎすべし、京都は其方手代共心を合はせ、隨分仕末し銀を溜めらるべしこと、此の手にて借銀を云ひ延ばし、それより五年たつて後、大分金銀を仕出し、江戸より都へ立ち歸り、借錢らを皆濟し、二度富貴の家を榮え、島原より吹く風は、魚屋の南風をいやがる程に恐れ、太鼓を見ては、雷よりはおぢおそれける。

## 第二　花を請ふ桐木の衣紋

身を隱し物、妾は酒樽に入りまひのよい親父

昔より今は商ひがない／＼と、獨りして氣をやむ親父あつて、子供の行末の事まで、無用の思ひおき、是れ其の身愚かにして富貴の道に疎く、身過の種を工夫して、黄金の花さく春を、知らぬから起つての案じ過しなり。されば都の廣き事、小さい心から計り難し。頃日九州より商賣廻しの小人登り

きこしと、九州の子供も恥かる程に、さま〴〵の曲獨樂、何れも我を折り、「可惜お手が旦那にある事、既に我をかあの如くまはせば、早速金になる事ぢや。」と羨む。「それは平生の所作を恨むべし。大盡は金をまいて廻す事を得給ふ、末社は廻る役目にして、遂に人を廻して見た事なし、草木心なしとは申せども、此の道理を獨樂も合點して、末社の手にあうては廻りが惡さうな、若し汝等にまはさるる獨樂ならば、よもや大盡獨樂ではあるまい。」といへば、「獨樂は根本の廻し手からが小人ぢや。」と、笑ひ立にして東山へ參りぬ。されば道々によつてさかしき世とは今なるべし。宮川町の子供屋の主、不斷常香盤まる、無器量不器用で暇日の多い若衆に、枕かへし扇の曲、まる〳〵の仕目やめて、同じ慰みならば、獨樂まはしこそ面白けれと、親方許して、黒塗の獨樂を買うてあてがひけるに、渡りに舟と悦び、其の身の腰元役やめるまで、樂屋に入りても一心不亂に獨樂を廻して慰みけるが、下地器用なる子利なれば、其の格をもつて早速上手になつて、初太郎もはおる程になりしかば、大盡の御機嫌とりに參りし役者共が噂して、若衆は曾て思ひ付きなく、獨樂の曲見ん許りに、諸方より招きて、はききの太夫子よりは、格別流行つて其の名高し。我等もさる暇の女郎に、二三度もお情にあづかりし事あり、其の恩謝に此の狛の思ひ付きをさせて、くれ〴〵と流行らし、幾人知らぬよい事に過ふべし。鳥帚の忠內と申す太鼓持が笑みを含む。是れ大きなる料簡違ひなり。太夫達狛の曲見たきと

との願ひなれば、何時にても大盡點頭き、早速九州より來る根本の廻し手を金にあかして呼び寄せ、居ながら自由に見せらるれば、今から取り付いて精根盡して廻し習ふが損ぞかし。惣じて色里の事は何によらず、ひすらこけなくおほやうなるが好し。過ぎし頃まで毎年定まつて正月十六日に、人形見世出して、揚屋の門々押し分け難く、いかなる太夫も其の日は大盡の迷惑もかへりみず、我が物いはぬくせに、價に構はず、十兩二十兩が翫びを調へ、暫時の慰みに、人形屋數千兩の商ひをして悦びけるが、郭の中に世智賢き男あつて、前日に人形屋手前より多くの人形を買ひきり、郭中に店を出し一匁の物を百目といふても値ぎり手のない商ひ。只取りとは是れなるべし。是れ憎き仕業と其の頃の大盡云ひ合はして、又來る春を待つて、面々手よりの人形屋を呼び寄せ、美を盡したる人形を五兩七兩宛前かたに求めおき、大盡一人に人形屋一人づゝ召連れ、十六日の晝から揚屋に來りて、太夫禿の望み次第の人形、抓み取りにやがてにと座敷中に蒔き散らせば、金銀の箔の光り家内を照らし、錦の衣裳著そこらきらめき、紅のぱつとしたる慰み、又此の外にあるべきやと騷ぎ合ひて、せちな男のまはし者の人形店には誰か一人買ふ者なく、多くの仕込み其の儘に腐りて、大分の損となつて、是れより人形店飾る力らなくて今の十六日遊び、去りとはをかしからず。兎角色里は内につゝむ心ありとも表向きはおほやうにして、大盡を登らせ、そだてゝ取るが肝要なり。又大盡も世智賢くよはつて、金

銀少なう出して、よい事せうと思ふ氣からは、神ぞ傾城買はゐる筈はなし。それよりは諸道具の取り賣りに買つて、掘り出しして遊ぶがましなるべし。惣じて今時の悪賢き大盡、大こといふもの費えの至り、兎に身の爲にも、女郎の爲にもならず。さすがに取らする物を留めて、ひそかに太夫に逢つたがましと、ひすい料簡。こんな氣で太夫にも見事に物やる者にはなし。殊更色町は男つきにも座配にも限らず、金で萬が濟む所なれば、男作るは前方なる僉議と、木綿の仕立着物で出かける人あり。此の心で太夫にあふよりは、〇〇の古きに遠慮なく、面々〇〇〇におもひ出さして慰むが德爲なり。女郎狂ひといふは、男も衣裳好みして色作り、伽羅も惜しまず焼きすて、引舟に小歌うたはせて、それには耳も傾けず、末社相手にいたり話して、金も手づからは遣らず幇間に摑かせ、萬事大名氣になつてこそ、總女郎買ひの甲斐はあれ。百貫目の銀を仕末して、十年に遣うて遊ばうより、半年程に時を散らして、名を色里にぱつと殘し、しやんと早くつかひやむこそ、此の道の粹とにいはめ。女郎も宿も悦ばぬ小遣に運びして、隱居の養療の學寮捌やるやうに、まだら／＼と銀を細長う遣ふ人の心が知りたし。兎角女郎狂ひの仕末、必ず無用なり。其の銀とて殘るものにはあらず、只嬉しかる物やらいでは、をかしからぬ所なり。傾城は高う登つて、位を取り給ふ歷々の太夫達でも、つまる所が金次第で運ぶのよい事水車の如し。淀鯉といふ男、此の里の水を吞んで、粹ともいはれし身なりしが、今少し

著し、大杯を手にもたせ、よもつきじ〳〵萬代までの酒の大盡と猩々の足元して大盡を祝へば、半吏に其の意を得ず、「まづ來た所の先はどこぢやこ」といはるゝ時樽の内に聲あつて、「來所は氣遣ひますな、先は憶なき身共ぢや。」と、内より樽の鏡取つて出でたる者をよく〳〵見れば、半が親父苦々しき顔して息子を睨み、數度の意見を尻にきかし、野郎狂ひに大分の金を費しける時勘當すべき所を、町衆の詫言故胸をさすつて堪忍すれば、又品をかへて此の里狂ひに、金をあけをるやくたいなし。宿にて勘當せんと思へど、又々親類町中の扱ひ噯ひ、去るによつて此の所にて恥を與へ追ひ失はんと、此の頃爰に尋ね來れども、宿屋がさとくて風をくひ、つひに汝に逢はせぬ故、此の方便にて今月今日、逢ふが親子の緣の切目、未來をかけて勘當なり、手振で傾城買はれうならば、万年も爰に居て、仕度い事して遊ぶべし、揚屋の爺も金取らずに客にしやらば、それはそちの勝手次第、勘當するからは、向後いか程の出入り有つても、身共は必ず知らぬぞや。」と、跡の跡まで念を入れて、座敷を蹴んで歸られける。太夫を始め座中の女郎泣き出して、譯もなう成りにける。太鼓持の中に手まりの才助といふ頓輭者驚かず、大盡に力を付けて、「是れ旦那。男は裸百貫と申す、氣落なされな。親父樣も棺桶の試みに酒樽へ入つて御座つた、追付け芽出度く御往生のするさう、去りとは爰が揚屋でなうて、寺でもあらば、一度桶に入つてござつた親父なれば、かへさぬ法ぢやと、こりや見事に生きながら上葬にする事

おやに、大盡のお目が惡うて、才でなかつた許りに、此の理窟が云はれぬ。」と、頭をかいて悔めば、何れも淚片手に笑ひ出し、是れを肴に亦酒を呑みかけ、責めては半を諫めけるに、はや宿屋にはけんを見せて、手を叩いても返事せず、茶呑まうと云へば、兩の手に天目二つ持ちて來て、立ちながら差し出し、歸りざまに、蠟燭消して油火に仕替へて行く。宵からお前に罷り出で、輕薄盡して御機嫌とりし揚屋の男も、勝手から呼びもせぬに、まつかせといひながらに這入つて後は出でず、臺所には吸物仕掛けかゝつた鍋の下をひいて、女郎たち〳〵に呼び立てる。扨も〳〵替るは色宿の習ひ、人の情は金ある內なり、太夫身にしては悲しく、獨り跡に殘り淚に沈みければ、半も口惜しさ胸に迫り、命を捨てると極めしが、太夫が同じ道にといふべき事を悲しく、兎や角思ふ中に、女郎色を見澄まし、一方樣は身を捨て給はん御氣色、近頃それは愚かなる思ひ立ち、此の儘にて無理死遊ばしては、恥の上の恥なり。子として親御の勘當受けるが世になき習ひにてもなし、我が身事は如何にしても世に名殘り、勤めはそれ〴〵に變る心なれば、何事も逢はぬ昔な、是れまでの御緣」と立ち行くに、半とは思違ひ、半も我を折りて、如何に傾城なればとて、今までの好情を捨て淺ましき心底、かうは有るまじき事ごと淚を溢し立ち歸り、其の夜は日比目をかけ置きし鄭が方にて明かし、兎角生きては居られぬ所、とても死なうなら心底太に寄りし太夫を刺し殺し、其の後潔く腹掻き破つて、未來までも

付き添ひ、此の恨みをいふべしと、覺悟を極めて身を行水にて清め、死ぬるに思ひつめて、翌日揚屋に行きて内儀に逢うて「先づ親共の機嫌直るまで、江戸の手代共の方へ立ち退くなり、然れば太夫に又逢ふ事も稀なれば、暇の杯せん爲參つた、竊かに是れへ呼うで給はれ。」と昨日に變るあいさつ、慇懃に述ぶれば内儀も涙ながら「夫れとは御可愛しい御事、成程太夫樣へもお知らせ申すべし、先づ先づ奧へ」と情深う申すに付いて、これ等さへ斯く誠ある志なるに、如何なれば太夫はと、愈にくさゝ増りて、酒も胸につかへて通らず、枕引きよせ世を味氣なう寢るより外はなかりき。太夫其の日は風呂屋の作左方に藤六と出で合ひ、何か申し出して甚しき口舌仕出し、互にふんつ踏まれつ杯みぢんになつて、かん鍋に小濃たつて、座敷は暴風の朝見る如く、分もなう亂髪して、太夫がいふ程の事みな無理にして、揚屋一家罷り出で、樣々宥むれども聞かず、「兎角方樣に飽きました、向後女郎替へてもらうて給はれ。」と云ふ。そもやそも男たるもの、金でなる女に嫌はれ、何と一分立つものぞ。生きてはゐられぬ所と、藤六ははたし眼になつて立腹する。所へ遣手がまゐつて「半樣御越し」と耳語けば、女郎聲高に「何の面目が有つて、心汙なう半さまには逢ひに御座つたぞ。昔の如くよい身になつて御座らぬ内は、千年立つても逢はぬ太夫ぢやと申すと云うて、歸しましてたも。」と、すげなくいひ切り、偏に狂女の如くにて、前後揃はぬ事のみ。一座不思議をなして、物慣れたる末社が罷り出

は、折角私が半様へお爲に致した不心中が、誠の不心中となるが悲しさに、女郎替へて逢うて下さんせとは申しました。其の所思は、此方樣と云ふ幅のある男があるゆゑ、今まで深い半樣を見捨てたと世間の人にいはれては、此の云ひ譯成り難し。誠我が身事不便と思召し下されなば、半樣御勘氣免され給ひ、昔の如くならせられての上に、御心變らずば今までの如く御不便加へられ下さるべし。此の後變らぬ心底は、毎月文して申し上ぐべし。御見に入る事今暫しの間遠慮致したし」と、涙を流して語り給へば大盡苦い顏して「それでは半への心中には成り申さうか、更に身共への心入れはないと云ふもの」と急き心にて言はるれば、「さう思召すも理ながら、世上にて不心中者と我が事惡しく評判致さば、逢うで御座る此方樣までが御心ようは御座るまい。但し御念比なさるゝ太夫が不心中なといはれても苦しうないか、其れでは御一分弱し。」とあれば、一座是れはもつともと心入れを感じぬ。時にねだひの又右衞門といふ、物事念を入れる素人末社進み出で「扨太夫樣には、親の勘當するに、許す勘當許さぬ勘當といふ賦味、何うして御存じ。」と云ふ。「さて親が子に勘當するに所を見立てゝすべきや、其の儘お主の内にて何と樣にも竊かに勘當の成され樣有るべきに、お年寄られて身を酒傳の中に晒し、窮屈な目をして此の里までござつて、大勢の付合ひの中で勘當なさるゝは懲らしとより外見えず、夫れも半樣が主人懸りにて此の首尾なれば、親方腹立の上にて、責めての腹いせに斯く有るべ

て往來の人絶えず。或日表の店に出でて通りの旅人を見れば、町人らしき者四五人連れ立ち、「兎角あなたのござる所は、新町近くか道頓堀邊にて有るべし、先づ此の二所を第一に尋ねん。」といふ聲聞けば、皆手代共なり。「是れはしたり何處へ行くぞ。」と、懐しさに思はぬ涙を漏らせば、「お悦び遊ばしませ、大旦那の歸依有淨土寺の和尚樣、色々御詫び遊ばされ、頃日御勘氣を許さるゝに極まつて、諸方へ人を差遣はされ御尋ね遊ばし、我々も大阪へ御迎ひにまゐる所に、幸ひ爰でお目にかゝる事、私共が仕合。」と喜ぶ事限りなく、其にも一議なう、半を駕籠に乘せ申し、都の住所の御供申せば、親父の隱居母の悦び、親類家來出入人まで、祝ひの酒盛限りて、夫れより親父は萬事を半に渡して、岡崎に隱居し給ひ、思ふ儘なる仕合、聞くとひとしく藤六尋ね來りて、對面し、「太夫が辛き詞も、今此の時を未然に知つての事なり。」と、具に語り、扨其の後は二人連れにて、同じ太夫に枕を並べながら、下卑て首尾する譯もなく、味な事どもばかり、前代未聞の傾城買ひと、世上に是れ沙汰、事知りとは是れなるべし。

## 第三　花は時實のる玉の輿

身は捨て物命は無しに打ち付けた太鼓持

五臟は違ひなくて、人程變れる物なし、前生にて善き種蒔き置きけるにぞ、たとへば忍び駕籠に乘

必ず笑はぬ様に、上する女共にもよく〳〵云ひ付けらるべし。お金の蒔き時分おそくば、我等まで差し込み給ふ可し。八幡其處等は抜からぬ男、壹歩というた初心な事、頭から小判の花を降らす事ぢやが。」と亭主が悦ぶ上を云へば、「萬事は貴公を頼み奉る。」と、疊へ頭を植ゑて悦び、「扨女郎様は何れにか。」とお伺ひ申せば、大盡仰せらるゝは、「今も彌七がいふが如く、遠國者なれば、重ねて上るもしれ難し。只國方の話の種に、此の所の御太夫様に逢はして。」とあれば、「先づは夕霧さま、柏木さま、長門さま、さんごさま、花崎さま、惣じて斯様の太夫様達、俄にはなりがたし。」と申す。「如何にもさこそ有るべし、併し汝が働きにて、貰ふとやらは成るまいか。先づ是れまで見事な智慧を出し、何卒お覺致すべし。」と、小判一兩投げ出さるれば、「去りとは旦那は京にも稀なお粋さま、どなたなりとも命にかけてもらうて見ません。」と罷り立ち、暫くあつて、「先づ以て大盡様の御仕合、拙者が満足は、花崎様今日は一文字屋方に御座いますが、只今御内證聞かしましたに、ちと様子ござりまして、貰ひがなりさうな。」と申す。「やれ夫れこそ取り遁すな、人橋かけよ。」といらち給へば、畏まつて追々人を遣はし、愈ござるになつて来た、是れありがたの影向やと、一座勇みて待つ所へ、御機嫌よく太夫様入らせられ、のつしりと座に付き給へば、囀出でて御引合はせ申し、夫れより酒面白くなつて、「押へたしもせい、しめた間、合點か彌左衛門、心得たたほ、嫁菜交りの輕い吸物、春めいて呑めるわ。」

と、無性に呑んで、片端から行きつくゐ、直にと牀へ片付け、太盡も寝所へ入らせられ、太夫としめやかなる物語、初會のしこなし、此の里の日口かわきのそれしやも、我を折る程の牀の首尾にて、諸事を捨てて此の君ならではと、大方ならぬ打ち込みやう。明日から當月中まで外へ約束無用と亭主に仰せ付けらるれば、「明日明後日は京の大盡樣、即ち此所にてのお約束。」と申す。「然らば明々後日から必ず晦日まで堅く極め置くべし。」とあれば、「其の段は明日京のお客樣に尋ねましてから、お返事申上ぐべし。」といふ。時に大盡むつとしたる顏にて、「扨は身を田舍者のいびり助と思ひ、張合ひをかけ、さしますると見えたり、愛宕、白山、出やうが悪いと聞かぬ氣な男。」と、六かしき顏付き。「成程御尤もながら、明日のお客は兒玉黨の何某、立賣の下中樣とて、太夫樣とは深い御馴染、此の里に隠れもなき御方、あすの御きげん次第で、當年中もその儘と仰せ出さるゝ事あれば、あなたの御意聞かずにはお約束なり難し。何卒其の日の首尾次第に、又今日の樣に貰ひまして遣せませう。」といふを、いや〳〵金銀出しながら恩に著て、貰ふなどといふ事、大きにいやなる穿鑿。第一其の男め、恩知らずめな、金銀の威光に任せ、外の戀をせきて、郭に置きながら餘の人の自由にさせず、縦たる盡其の驕を焦させる段、是は臣といふ事知らぬ畜類に、鼻あかせて、一代思ひをかけて後悔させん。さあ此の智慧出して見よ。」と七八人の太鼓共を近くへ寄せて仰せらるれば、「いづれも實に一思案。」と宵の酒の醒め

る程案するに、「兎角太夫樣を引き拔き給ふより外はなし。」と口を揃へて申し上げる。「成程々々、我等が思案も夫れに極め置くべし。」と少しの事に氣を持ちて、ばつとしたる宗盤、女郎も夫れ程に滿足がらぬ事に、八百五拾兩の內證約束、亭主落付く爲とて、紙入に有合はせの小判渡して、再び歸らぬ金子、殘りは四五日に才覺して指越すべし、今少しの事にて、跡々にてさもしき噂もいやなれば、此の上に二百兩三百兩、餘計の入分は苦しからず、萬事分けあしからぬ樣に賴む。」と大場に出でて、扨太夫置所は、櫻木町の伊與やうら座敷と極めて、「お內儀、木屋町の家見に何を以て御座るぞ、芝居がてら朝とくより御出でを待つなり、恐らく日本廣しと雖も、初會から受け出すといふこと、我ならでは有るまいが。」と、いづれもよい機嫌で笑ひ立てにして歸りぬ。翌日玉中爰に來りて、樣子を聞くより胸塞がり、「去りとは無念千萬、兼ねて我受出す所存なりしが、今少し心得かぬる所あつて、その心底を見屆けるまでと延引して、今の後悔、太夫と我が中、凡そ西三十三ヶ國には誰知らぬ者も無きに、今外の手に渡しては、此の里知りの男共に後指さゝるゝ所、生きてはゐられぬ首尾、死しては猶又此の上の恥辱。」と大方は亂氣の如く狂はれしを、亭主を始め末社ども取付き止めて、「昔より身請けに貰ひといふはなき事ながら、是れ許りにはどうぞ貰ひがなりさうな所あり。」と亭主申し出すに力を得、「金銀づくでなる事ならば、郭中に金をしくべし、隨分智慧を出せ。」とあつて、當座に見事な御事「兎角

時、亭主肝を潰して、やにはに取り付き、先づ樣子を問へば、「死んで跡で知れる事。」と語らず、兎や角いふ聲に驚き、奥より大盡を始め末社殘らず驅け出で、何がなしに先づ脇差を引き取り、「兎角樣子を語りての上、兎も角も汝心任せ。」といふ。「然らば仔細を語るべし、昨日供して參りし東の大盡、太夫樣を請け出すに極めて歸りしゆゑ、愈堅めに、只今知恩院門前の旅宿へ參りしに、朝未明に宿をあけて、茶の下の灰もないやうに仕舞うて立ち退きける、左樣の大管者とも知らず、眞實と思ひ入れ、此事を高高に披露き、各々を我等がちよろまかしたと思はるゝ手前、如何にしても面目なし。」とかくは死んで、我等がためには、欺されたる所を、お目にかけん。」と、涙を流して申す。各橫手を打つて、「これは格別なる首尾、玉中さまのお爲には、またなきお仕合、去りとは彌七いひ出しやうが早し、今少し待ちて、あなたの事を聞きてから覺悟極めれば、兼ての願ひの東川の家が手に入るものを兎角果報のない曾我耳なや。」と、大盡の思召しいれ殘らず話せば、彌七死ぬるを止めて、「扨も殘念千萬、此方から花口ではすに、あなたから言はせます事ぢやに。」と、大笑ひになつて、愈太夫の身請に究まり、千兩の光、郭に輝き、梅花の花崎威勢の盛り、幾千代かけて御中よく、太夫さまは九十九まで、相生の松風、小歌の聲で樂しむ。

## 第四　花は散れど名は九重に殘る女

御出での折から、驟雨には何時なりとも、下駄、傘の御用には立ちませう」と、物堅き口上すんで扱女郎さまは一文字屋の天職、ともゑといふ若女郎に内證申して、内儀つれまして出でられ、近付に致され、それから盃事始まつて、座中御機嫌にもんさく盡して高笑ひすれど、大盡は膝も直さず、盃手前へ來る時は、手習寺でならうた通り、念いれていたゞき、大事にかけて雫も酒をこぼさず、一滴七十五粒が所と、過ぎてもあけるといふ事なく、さされたかへ乾度返し、其の度毎に肴をはさみ其の箸を我と戴いて下におき、さまあ＼可笑しき身振、一座堪忍し兼ねて「こりやたまらぬわ」とわらひ出せば、わが事ともしらず、おなじ様に大笑ひ、亭主夫婦も我を折り「天地開けて、揚屋といふもののはじまつてより此のかた、かやうの珍らしきお客はなし、親仁さまとは格別世界」と申しあへり。さて膳出づれば、座いせんぎ暫時して、各膳に向へば、大盡亭主に丁寧なる時宜をのべ、一献過ぎて、燒鳥蒲鉾を、上する女が見ぬ内に、鼻紙だして手ばしかく包み、懐に入れる時、三人の連衆を招。して「兎角此の世の人ではなし、長崎より来る稀物のかきあき」と鼻にも入らずつれ鎮かし、世にはかかる息子もあれば、世界の事一概にはいひ難し、豊後の半九と云ふ大盡の元より、[illegible]重包一つ、藏人らしき供の男が、あけやへ持参して「御亭主に直に渡し度い」と申す。主罷り出て請け取り「御大儀に存じ、御茶でもまゐつて休んでござれ」と云へば「まづそれをあけて見て下され」といふ

申改めて受取書いて進するに及ばず、追付け此方から御國元へ御返事を申し上ぐべし」と云へば、亭主ぎよつとして、「其の中に私が金がござります、改めて見て傾城買はして下されませ」と申せば、亭主改めて見れば、紙包ほどき見れば、島桐の小箱の中に金子百兩、半九大盡の添状一通開き見れば、「此の善藏と申す男、一文字屋の天職「巴」と申す女郎を、去る春御影供の歸るさに、ちよと見しよりも、大方ならぬ思ひとなつて、此の度態々と其の女郎に逢ひに許り、罷り登るの間、隨分馳走いたさるべし。先づ色狂ひの手付金に百兩相渡さるゝ。是れに限るべからず、いかほどにても入用次第、其の元我等定宿へ申し遣はされ、其の里の分惡しからぬ樣に頼む。」の由「懇」に書かれたり。亭主俄に詞を替へて、「よくこそ御入り、先づ奥へお通り遊ばし、御酒でも召し上られました上にて、思召し入りも承り奉らん。」と、内儀も出でられ、總で座はき紅はき詞に色を付けて、さまざまのもてなし、「扨女郎樣けふはならしやりませぬ。」と遣手が申す詞にすがり、けふのお客のおもはく、詳しく語りて、家主夫婦ひたすら頼めば此の遣手後世願ひにや、よく聞き入れて女郎に申し入れれば、情にまはる巴にて御志の嬉しければ、此方のお客に斷り行くべき由、大盡へ文を遣はし捨てて其の儘のお出で、忝きは揚屋の仕合、お引合の酒事すぎて〇〇〇〇ども、吉藏醉うて何の事なく手さへ握らず、其の夜は明けて其の儘歸りさまに、又の日から千日續けて契約いたし、此所に碇をおろさせまうし、沖を漕ぎたる遊興、未

見えず、よもや意にて引き抜き給ふにてはあるまじ、さあれば方樣に連れられて參る事嫌。」と申し切る。今日は姉遣手まで、「是れは一興なる太夫さまのお詞、此の里を出で給ふは御身の譽れと申し、御一生の片付、何とか心得給ふ。」と叱り申せば、大盡聞かれて、「いやいや是れは女郎の道理なり、今は誠をあかして聞かせん。我事實は越後の者に非ず、皆も知らるゝ當地に於て隱れなき、曲水と替名を申して、此の女郎の姉御菊川といふ美君を、先達て根引きにし給ふその大盡の家來、吉藏といふ者なり。頃日菊川我が旦那に願ひ申されけるは、我が身事御影にて、郭の苦患を遁れ出で、かく榮花に誇る傳ふること、深き御恩死しても忘れ難し。併し御存じの如く、獨りの妹を郭に殘し、憂き勤めをさせぬる事、此の身になりて思ひやる程可愛し。とてものお情に、妹巴も我に同じき身となし給ひ、兄弟共に御不便加へられなば、何れか此の上の望みあるまじと割りなき心底、大盡聞き屆けられ、夫れこそ安き望み、早速今日にも請けて逢はすべけれど、そなたを請けてまだ間もなきに、又引きぬきしと世間の人に各りの樣に、沙汰せられんもむつかしとあつて、即ち昔の色友達、越後の半九樣へ此の趣を仰せつかはされ、あなたの添狀もつて、越後者と僞り、表向は我等がつかむ分にして、内證は御兄弟一所におかせらるゝ心入れ、必ず外へは沙汰なし。」と、一家の口を堅め、直に姉御の方へ御乘物を擔き入れ、郭を離れて兄弟の對面、是れ許りには譯のない涙を流し、悦び泣きとは、妹の外にもあ

ることかと、吉蔵が一代の出来口、先づ取りあへず杯事しまうて、是れから中橋がはじまり。うれしい時の酒は胸にたゝへず、何時よりは大酒となつて、曲水大盡もよい機嫌して、菊川といふも流れに近き名なれば、けふよりして人のほしがる物の色に譬へて、山吹とあされ、月にも花にも、雪にも螢にも、尻付のよい兄弟の女郎をながめ、あした夕の樂しみに、姉に色縫ひかせ、妹に歌はし、よろづ自由の暮し、其時此の家の大將木曽殿の鑑して、右左に巴、山吹をおいて、菊の飾れ、是れぞ此の世の極樂なるべし。されば今の世の人間、假の生死を繰へ、一日なりとも色道の道樂、又もなき樂しみと、短う定めけることこそ上分別なれ。申さば早うたれど、朝に紅顏あつて、揚屋にはこらるゝといへども、夕には白骨となつて、甚言吐いた太夫さきたら、郭を出でずに寡い所へ参られんを思へば、夢の浮世ぞや、假の○に密變へかして、○○○○○○を、哀しがらせておかるゝ女郎は、内心如來又と申すべし。夫れも振られて皆にならぬ大盡、鄽引きて此の恨みをしかけ、物の見事な騙さうとする和郎と、二割半にまはる借金の内を、慾なればこそ持つて來て使ふ資なる男を、同じ前に見るゝはいたましい事なり。後生こそ願ひ給はずとも、哀な男にも逢時の離付あらむと思うて、おもなてゝふさうてやり給ふならば、大きな功德になるべし。年寄所のが死ぬるものでもなし、色ら命の若女郎、今日九重と時めき給ふ盛ん、名の鳴りて花は咲く頃、其の身に散りて花の下露、消えて情の深き

事は、今に我人申し出して惜しみ侍る。あゝ夢ぢやもの〱。

## 第五　花にも負けぬ三五の月

身は病の人物願ひは先の見えぬ目病みの地藏

秋の夜の長きに退屈するとは、色狂ひせずに宵から寢る、しはい奴が申せし事なり。千夜を一夜にくゝり合ひて、其の上に閏月までこめて、晝のない國に生まれても、色さへあれば夜にあくといふ事のない、遊び好きの末社共二三人、御目かけらるゝ大盡、御親類の中に不祝儀な事あつて、一兩日が の里御遠慮につき、不思議に昨日今日揚屋の疊を踏まず、今宵も又無色にて、我が宿での夜の永さ、近頃草臥れ判官靜平人、片岡彌市、伊勢の三ぶなど、寂しさに打ちより、今まで見つくせし色里の噂さ仕盡して、是れよりの末の世の色里のことを推量して見るに、次第に灑れて變つた事のみあるべし。既に今さへ常なる事を、何によらず古しとして用ゐず、名の木も鼻に付くとて燒物を留めるなど、香りのよきにはあらねど、變つた事をしやれたというて悦ぶ人心なれば、蕎麥切を酢で、温飩を茶で食ふなど味にやる許りにして、手重き事をやめて、萬事を輕く小切目にして、繕ひなくしらつくにしてすぐばけな事のみ多かるべし。然れば女郎狂ひをして、一座が面白いの、器量がよいの、意氣が惡いのといへども極まる所は○の事一つなり。そればかりに一夜の夢に、七十六匁の銀を出せば、是れ第一

の遊興と、大盡御出で其の儘揚屋の亭主が挨拶もせず、先づ牀とつて寢さしまし、女郎が親方の手前にて、伽羅とめて來るやいなや、直に○に入りて、萬事を仕舞ひて表()から出ての酒事、是れは今に替らず。面白く呑んで、夕飯にもせよ、夜食にもせよ、喰ひ立ちにして大盡は歸るべし。女郎も今まで樣々の衣裳仕盡し、風俗も袖下の小さい時もあり、寛りとする今もありて、色々に變れば、此の後の物數寄洒落て、髪はかはらず島田にして、平髷に金唐かみをたゝみ、衣裳もくわらりと當小紋などつけて、廣袖のたかに、反古染の上下を著て、素足に脊はいて道中せらるべし。二布は紋紗にして、素肌に白く清らなる肌すき通つて、かんじんの所に生ゆる○を、首筋より大事にかけて拔き揃へ、むつくりとした、しゝおきの所へ金箔を押して、○○には匂ひの玉を入れて、一節ぎりの中を掃除するやうに、切々出し入れをして、今までの如く網に伽羅もとめられまじ。兎角女にも御身のいたはり顧みますなど、舌甘い事はかなはれまじ。増して昨日は逢ひましてなどとは猶なり。あたまから、御歸りの後はとしてかくしてと、其の品をかかるべし。御内の御首尾如何、聞きましたう存じまするらするは、千年過ぎてもやめられまじ。左りとは是れ計りは氣づかひし給ふが嘘で有るまじと、大盡も誠にうけらるゝ事なり。首尾そこねては、現在商ひ旦那を取り失はるゝが實正なれば、傾城買ひの本阿彌に見えてしも、是れは眞に極む可し。さて物前にやらるゝ女は、康直高値にして、封じたる上に此

方無事と、南國から書いて來る格を以て、此の内に何も無心事なしと、披かぬ先に早速敵か安堵するやうにしてやらるべし。又大臣も書翰の好み變つて、表は日野紙、又は鳥屋紙の細かいに、裏に唐紙の美を盡し、楊枝に書き出し曲書な物好き、延紙の切口を銀箔でだみ、下帯に青漆りの畫入か時代切の錦かして、其の外處に結構を盡し、至りといふて珍重がるべし。女郎にも髪を切らせ指を切らせ或は爪をはなさし、起請を書かする事など、一向初心の至りとて、怪我にもさせまじ。此の替りには我が逢ふ女郎の親元を、僞りなしにいはせ、今までの心底に少しにても違うた所あるなれば、そんじやう何といふ女郎は、今太夫風を吹かせ、公家方のお歴々さま顔して、小判は何の木になる物やら、酒はどこの井戸で汲んで來る物やらと、世の事しらぬ顔はし給へども、あれは西の京の御前通りに、微な扇の骨削りの、太郎助といふ者の娘にまがひ御座なく候と書きて、門口に張り付け恥辱を與へて、誠に外の女郎に乘り替へる契約、是れ誓紙に勝る心中堅めといふ事に變るべし。只何時までも替るまじき験、○○○○○○、○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○、○○○○○○、どうまたらすの森の郭公、晴きてきかして其の後、頭が痛いとて、暫く物いはず居て、惡や男めと背を叩き、人より遲く○を離れ、座敷に出て、私のそこなひました鬢付、故の如くの殿振にと、太鼓女郎もあるに、手づからさし櫛抜いて、なでつけさまに

ば、宿屋夫婦遣手のはつも、早敵に先をこされ、心にこめし願ひ事の裏をかかれて、呆れて言ひ寄るべき手掛りなきに、「江戸へお下りなさりませうば、太夫樣へ嘆置土産がうなつた事でござりませう」と、いひかゝれば、一際別見えもして、其の上の事。」ときよわりとした顏。客でなくば、面へ水がかけたい程に、先ばしり許りに智慧が走りて、本大盡の心の廣きが、次第に少なくなるべし。是れからは我々が商賣とても心元なし、今までの調子に味な手付きして、これ旦那許りいうて、盃り合したり、輕口いふ分では、よもやつれまじ、算用もしたり、目安もかいたり、少し針もたて習ひ、按摩もとつて小料理もきき、小刀細工も得て、大盡床に入りてござる内に、桃の核にて猿を作つて御目にかけ、竹の切にて耳かき拵へ、當座の御用にたてるやうな、かりそめのことにも、爲になる事せずしては、太鼓にはつれまじ。かうよつた二人の中、何れも無藝にして、何の取得なく、只酒を吞むと、遊ぶ事に進退せぬと、物貰ふ事と、かるた業に目がひかると、大盡の不便がらるゝ女郎を、透を見て横を致したがると、醉うて刃物三昧すると、精進料理が嫌ひと、無事で濟んだ事を引きおこして腰をつと、人の嫌がる程の事は好物の男共、思ひ續ける程、此の後の事心元なし。今までの如く、よい大盡がかゝらぬとて、此の身が餘の商ひ物の樣に、芝居通に、二十軒茶屋の門口に見世だしもならず、盆でもないに、太鼓持はノヽと、揚屋町の飯時心掛けて賣りにも廻られまじ。まだしも溫まりの有るうちに、貰

手に、慾で仕揚げた眼なれば、お役にたたぬがまし。」と笑ふ。「いか樣云へば云ふ通り、女郎は無慾で持つた者、又大盡も金銀の沙汰なく、賢過ぎた方より、少し鈍き方が大樣にしてよし。去れば今日病の地藏へ代參仰せ付けられし大盡は、絲屋町に隱れなき、色狂ひの旗頭、熊谷笠の新平と名のつて、島原陣に一度も不覺を取られず、金銀の矢種盡きねば、當るを幸ひに、はらり／＼蒔き散らし給へば揚屋一家はいふに及ばず、犬まで見しり奉つて、尾を振つてお出でを喜ぶ。同じ人間と生まれて、斯かる浮世を面白いめにあひたまふは、よく／＼前の生で、よき種を蒔きおきたまひ、今女郎に拔かせらるゝ鼬とは、生え出で侍るかと、高足駄はく行人も、此の大盡を見て、又の世の事願らしく修行致しぬ。こんな大盡に合はせらるゝ太夫樣は、大果報者といふ者、追付根引の花やつて、乘物の内より東山の春を詠めやり給ふべし。」と、四十末社の者共、大盡の御意に入るべしとてもて囃せば「去りとは太鼓持には似合はぬ、不物好きな事を申す者共かな、世間の大盡女郎を請出すは、皆若い心から算用づくで請けるなり。例へば一度に千兩出して引拔けば、當座は大氣に聞ゆれども、揚げづめの算用して見た時は、三年過ぐると只になるなり。我等が物好きは、其の算用づくには構はず、慰みを專にすれば、何時までも此の里において見るが面白し。色里離れて町家においては、常の女の少し取りなりのよい分なり。下屋敷において通ひ女にと思ひよれど、是れも半分は汝等が物になれば、我が逢

ふ内は人に逢はせず、千年も揚げづめにして遊ぶこそ心よけれ。」と、何日手を替へ品を替へての大騒ぎ。殊更過ぎし名月の遊び、月宮殿にて玄宗と楊貴妃雨吟して、曲狗を舞はされしも、またの遊き慰み、ほしがる物はつく〳〵と遣つて、人をまはして見る程の遊び、又外にあるべきや。いつもといひながら今宵の為には、分けて柏屋權右が二階座敷、南うらはれて夕眺め、月は手池にして、烏丸のきんご夜中笹月の色深く、三千里の外まで廻らせ、色線ひかせて謡はして、面白過ぎてけうといほどに騒ぎぬ。爰に此の大盡のお友達、「大文字の山様といふを知つてか」「成程夫れは酒落た事のお好きな一文字屋の井筒大盡か。」「如何にも〳〵、浮世の遊び事仕盡して、萬に酒落た物すきで、酒がもたる提重こしらへ、近所ののふを誘ひて、都一番の月の見所を我等案内して見せ申さん」と、島原の南なる揚屋の、塀の下なる畠の中に、酒事始めて、愛の月のおもしろき事、人は知らずありけるといはるゝ時、菊屋の二階にきこえ、大盡耳をすまし、「今の聲は慥かに面ではないか、何として其處には居るぞ、是れへまゐつて醋白き酒を吞めこ」と、詞をかけられしに、「そこへ行けば氣がはつて、嘸みに引目なり、心をそこにゐんして愛での月見、塀一重の違ひ許り、物の入らぬ遊興、ねざめの心やすし」にといへば、二階も下らざつと笑うて興になる時、其の座に八鷺皆ちれしが、聲をかけて「是れは替つた出掛けやう、由ずま、うまき物を進しますると、一重に取入れて、帯にて下げられしを請取り、二道ニ号お氣の付いた女

郎さま、是れ忝し。」とかへし樣に、前巾着より錢十五文取り出し、重箱に入れて返されしに、八鹽は紅葉を顏に散らし、赤面して、「此の錢は。」と問はるれば、「慥か當年は一升が十五文かと存じた。」と又大笑ひに腹を痛めける。其の夜の事なるに、ある女郎好物の由にて、臺所にて芋を健かせしめられ、口拭うて二階へ揚り樣に、箱階子の中程にて取りはづしての高鳴り、座敷に響き渡り、へ風烈しく、二階のおの〳〵驚き、「女郎樣さうながら、天晴見事な秋のゆふべかな。」といふ時、太鼓の吉介下に居しが、頓て女郎の尻を突けば、手を合はして拜まるゝ。すかさぬ男なれば、「合點でござるか。」と、詞をかけて女郎を下して、吉介二階に上れば、「末社の身として人も無氣なる振舞。」と、大勢立ち重なつて胴を打たされて濟みぬ。いで其の時のへを負けし其の返報に、加賀一匹當座に貰ひ、其の上に此の女郎の年の明くまで、毎夜錢入らずによい目に逢ふ事、こんな身替りには、我々とても立ちたしと、髭の喜八が噺聞けば、又氣を死なさうものでなし、太鼓がきかずば、隨分男作つて、生まれ付きの低い鼻を引き延ばしてなりとも、見せ附きを拵へて、金後家に思ひつかるゝ仕掛けすべし。さりとは世をせきせばう思ひ給ふな人々と、諫めて其の夜を明かしけり。

傾城色三味線京之卷　終

# 傾城色三味線　江戸之卷

## 第一　月にも增る高雄の紅葉

智恵がやめて一時なりとも化される德

月花に心を寄する歌人も、梅が香を櫻の花に匂はせ、柳の枝に咲かせて見たき願ひ、何れよい事は揃はぬものなり。男は優れて、然も分の道に賢く、心も賤しからずして、女郎にかけたらば、初會から打ちとけ、二度目には門まで送りて、人にも光らかすべき器量の男は、揚屋に近づきさへなく、宵から寢て面白い醉ひをしらず。又不男にして片言交りに物いふ親仁、金の威光で歴々の太夫に足摩らせ、宿の嬶に酒つがせ、寢ながら吞むもあるぞかし。是を以て叶はぬ浮世と申すなり。されば昔より風俗器量は、島原の女郎にして、吉原の張を持たせ、難波の九軒で遊びなば、かゝる者ではあるまじと、三ケの津の色里を驅け巡り、色道一遍上人といふ樂坊主、藤澤を越えて江戸に下りしに、吉原は寂しく見えて、昔の繁昌、兎角自由な所故なり。さるによつて女郎の意氣、自から強くなりぬ。凡て遊女は其の時々の能き男次第にて、一入色を增す紅葉、高雄は生れついての太夫職、風儀といふ

までもなし。宿に歸りて衣裳仕かへる事なく常なり。如何にしても上方の太夫のならぬ事なり。揚屋の程を勤め、身仕舞に歸るに、對の禿に三味線を、挾箱の如くにかたげさせて、一行に先へ歩ませ、其の身は道中豐かに、知れる人にも詞掛けず、帶胸高にして、身を据ゑての足取り、眠れる程靜かに位をとつて、操人形の歩くごとし。後備へは達手のこはい奴が、何時とても水へ入らぬ布子著て、夕日に紛ふ赤前垂かゝはゆきは、太夫と同じ顏して練つて行くも可笑し。揚宿近くなれば連れたる六尺を先へ走らせ、門口より高雄樣お歸りと、流行齊者の宿歸りの如く、ぱつとしたる事、是れこそ眞の太夫なれ。爰に神風や、伊勢町に數年僅かな錢店出し、一貫と買ひにくれば、先づ三百渡して、殘りは追付あとから進ぜませうと、其の錢とつて近所を飛び巡りて、やう／＼七百の錢才覺するほどなせはしき世渡りにも、戀は分別の外にして、淺草の觀音參りの供に誘はれ、三谷に行きて、前巾著のあるだけ、局あるきして、取留めるを緣にして、少しの間に女郎五六人にあうて、隨分強藏自慢を申し、汝は鱠何杯もつたと、所々の流行詞にて、牀に入る事を鱠盛りとは申し習はせしが、何處の野張が申し出せしやらん。都にても一頃うんそどりといひ廣めし事久しかりき。扨取り集めて十兩に足らぬ錢も皆になつて腰纏ひに氣遣ひなく、うつかりと辻に立つて歷々の太夫達の揚屋歸りを見渡せば、花も紅葉も一つに聚めし高尾が歸り姿に、かの小錢屋の助四郎見初め參らせ、局の樂しみを忘れ、禿

美形、人に見られたき風情もなく、黒羽二重の紋なしに、龍門の中幅帯、目立たぬ樣にて目にたち、成程構はぬ歩み振なれども、上着の蹴出し腰の捻り、素足に薩摩草履の歪り加減、何れか憎らしからざる所なし。是れはと死躍惜しい男も、色には目がつき、近寄るやよう見る程、誰やら見た面影と思ひ出す時、彼の女聲をかけて、一助さま私を見知つてか。」といふ。「成程見ました御顏なれども、何處でお近付になりしやら、急には思ひ出されぬ。」と申せば、「朝夕戀ひ慕うて下さんすには似合はぬ、戀人さへ見知らいで、あの現ない男め、これ高雄が里を離れて出でし姿なるわ。」と取りつく。是れは嬉しの俤と、天にも登る助四郎、手の舞ひ足の踏み付け所を忘れて、悦ぶ事大方ならずして、「是れへの御來迎は、何れの衆生を救はん爲にか。」と、問ひまゐらすれば、「愚かや御身我が事を戀にして、此の社に歩みを運び祈らるゝよし、或夜の夢に稻荷大明神枕に立たせ給ひ、新たに告げて宣はく、錢も持たずに太夫をたゞといふ、不承ながら願ひ事、無理とは知れてありながら、神の役なれば、是れも叶へて遣らねばならず。汝急ぎ彼の男に見え、一夜契りを込めて取らせよとの御事、即ち主樣に夢物語を致しぬれば、戀は互なれば情かけてやれと、少しのお暇嬉しく、是れまで忍び參りたり。幸ひ此の邊に我が賴みし方の遊山屋敷あれば、是れへともなひ、緩りと御見なりましたき。」と、助を伴ひ一町ほど行けば、日頃は見馴れぬ竹一村の構へ、見た所は左もなくて、門に入りて美々しさ。高尾案内して幾

若菓子にしたこのやうな物が出でしがと、今思ひ出して胸を惡がるも可笑し。兎角佛神の力にも、銀つくの事は叶はぬと見えたり。此の男も稻荷へ日參を止めて、家業に是れ程精を出せば、近道に利を得る事もあるべしと、大笑ひになつて、日待側のねぶりを醒しぬ。

## 第二　月にも花にもたゞ濃紫

百三十里戀を稼ぎに下り大盡

武者振よく生まれついて、ゐんつう持つて、浮世を隙にして遊べば今なりと、萬に事の缺けぬ持丸長次として、上方にての分知り、難波の色の善惡を見つくし、都の花も實もある男と、西島にて用ゐられ、一个の太夫を手にいれ自慢して、是れよい名に聞きし、武藏野の色深き小紫を見に下り、こゝ案內のために、吉原雀の茂吉といふお町知りを先にたて、其の外京大坂の口利き末社共に、皆定紋の揃へ小袖を着せて、此の度此の里始めて一見、よろづ大形に、宿へ黄金の花を降らし、頭から大束に出て、當流の手を盡したる料理、せゝり箸して、亭主が氣を付けし初物も構はず、諸事引きこなせば、如何なる女郎も位を呑まれ、彼方此方になつて、自ら身に嗜み出來て、見落されぬ氣づかひせらるべきに、流石高上なる事を見盡せし小紫ほどあつて、さつに惡びれたる體なく、詞少なに鷹揚過ぎる程にゆつたりと遣つて、初會過ぎての明の日、成程心よく□に入つて、すこし我が方から行つて居る

事を申し出せば、太夫細かい返答なく、「殿振は好いた風なれども、恐らく味をやると思召す一座のしこなし嫌なる、誠我が事思召さば、我が心の解くるまで通ひ給へ」と離れ切りたる詞に、大盡興を醒し「然らば今日より女郎替へて遊ぶ可し」といへば「たれにどうなりとも御心任せ、上方の物和かな女郎かこなし給ふ土氣の落ちぬ間は、打解け參らする事嫌よ」と、脇柱にもたれかゝりて顔を背け、心を暗の下に納めて、少しも騷ぎ給はぬ風情、是持の御內儀樣見る心地。上方とは格別に合違ひて、手だれの大盡此の張の強さに、弓矢八幡きかぬ氣ごしもたよわくなつて、自然と我が方より機嫌取る樣になつて、位取る事も上手ごかしも中々及ばず。又分もなう宿に歸りて、爰の太夫を手に入れて、心の如く廻す大盡あらば、近付になりて、女郎の意氣方買手のしこなし、尋ね聞きたしと、吉原雀の茂吉に僉議させけるに、三木といへる三谷第一の大盡、御町我が物にして、今での色知り、是れこそ好む友よと、初對面から互に心安く申し合ひ、いざ是れからといふしほの、引かぬ氣な男共、捷立の舟をいそがせ、日ふる間に懇意の揚り場、船頭共に大儀々々と、詞殘して常の揚屋にいり、「今日は珍らしき一座、下りの大盡上らして、是れまで誘引致した。扨お馴染は小紫殿とや、お隙いりあらば、太夫殿に內證申して、何卒今日のお客へ斷り申されし、此方へ御來臨あらば、一入有り難からんと、申し參れ。といひ出すより、萬のしなせ、上方とは格別なる事共、隨分京であおやかり自慢の男、三木が幅

酷き仕方、懇する我までも心よからず。其の上長次は上方一番の分知り、且は京大坂の聞えも惡しければ、今日は拙者仲立致し、心よく長次に逢はせんため連立ちて參つた。此の心を無にして、我等手前を思ひ遣りて、逢ふまいなどゝ未熟な仰せらるゝと、忽ち今日切りといふ男、さあ返答は。」と酒氣もなくて誠を申せば、太夫感涙をながし「それ程までに私事を思召さるゝ御心、鎌倉に獨りある母を誓文にいれて、如何程か〳〵忝し。長次樣を振りましたは、我が事聞き及ばれて、美君多き京を捨て、遙々のお下りとの御事、今の世にはあんまり嘘らしく、頭から思はれたいとの仕掛と惡推まはり、誠か嘘かの御心底を見極めん爲、情なくも多くの日を振り參らせし悔しさ、何がさて其方樣御一座の上は、逢ひませいでおきませうか。」と、改めて長次と杯事して、はや○○らせて、三木樣○○ぞやと、何處やらに詞殘して、長次が手を採り、是れ戀男ぢやと手をとれば、長次は晝からの酒に心亂れて、言ふほどの事前後して、偏に現の如し。太夫も三木も氣の毒な顏を掻いて、二人が今日の志の無になる事を悲しみ、醉ひの醒める藥など飮めさせて、懇に物いふ如く、兩方より樣々いひこめば、ぎよろりとして人心地なければ、「去りとは是非に及ばぬ仕合、今宵は爰にとめて、醉ひの醒めなば、彼が心に叶ふ樣に慰めてくれらるべし。我等は是れより歸る。」と立たんとするを、太夫引き止め、「今日是れまでの御誘引にて、御連といふ名があれば、貴樣御一所にあらずしては、金輪際逢ふ事

せぬ。」と申しきる。「然らば今日が限りなるか、中々假令此の世は捨おき、永き來世まで御見ならぬと
ても、御一座でなくしては、御合點の上なれども、我が身にしては後暗き事ふつ／＼無し」と心底傾め
て申せば、三木も道理に責められて、重ねていふ言の葉もなき時、長次なく／＼と起きて涙を流し、
「去ゝとはお江戸の色遊びのいきかた、傾城買の聖人とも申すべし。我も實は湿らぬ酒に醉ふべき筈
はなけれども、兩人の心入を感じ、態と正體なく見せて、思ひ合にせし恰を抹に入れへしと、暫時
狂言をいたした。向後此の戀止め申す上に一つの願ひあり。とても〓の事に三木聞いてたもるまいか」
「して此あての上の願ひは」「去ればその事、勿論兩人の心底を感じ、一旦思ひ切るといへど、戀慕
の道は根深き者なれば、此の事に本意を遂げては、根が好色者といふ心にて、又ぞろと心迷ふまい物でも
なし。願ひとは變の事、貴殿太夫を今日の内に受出し、誰れの道をたてゝ、御内儀様と人に尊敬して
くれなば、我が思ひ速かに晴れて、永く物思ふ事あるまじ。此の願ひを聞き入れて、わが身に與へたら
く心の殘るべきやと、一夜に逢はして其の上の事なせと、深切過ぎたる心遣ひあらば、只今爰にて首
當世下さ」と、刀物を取り廻して、誠に思ひ切つたる風情。三木聞き届け「一定は下手なりしといふ所に
あらず、先の推量のためには十分よい事、如何にも」と、御の衣を屯へ、事の自由に働き山吹色の品を
を、馬二疋につけさせて、只今参れと申し遣はし、早速の身請、情知りの寄り合ひと、見し事を不申

出し、女郎も、とりんばうも、普く色道の鑑といたしぬ。

## 第三　月より上に名は高松

### 散茶に振られて喉のかわく男

世の中に、無分別者と銀の利程こはきものはなしと、朝比奈三郎が悪所銀の利におはれて、物前にてん／＼と、舞鶴のひたゝれも汗にしほたれ、鐵の門に破れども、銀なくては、力業にも預り手形の判に破られずと、自慢の髭も縮み上つて、當所のない銀を必ず遣ひ給ふなと、九十三騎の親類中へ隨分懲りて語りしは尤もぞかし。今時は身代柄よりは、遊び花麗になりて、思ひの外の仕過し多し。其の爲に身代相應の遊びを、色里にも拵へておけば、細元手の人太夫格子に及ばぬ戀をせうよりは、氣骨のをれぬ散茶に戯れ、又は近き頃の仕出しうめ茶で、咽の渇きをやめ、當座拂の氣散じ、たれからた寸三寸新町がしのかきたうれんは、定まつて百宛輔りと寝て咄した所、さらに生男抱いてねるやうにはあらず。内衣も絹物して、はし切りの鼻紙、口すほめて物いふ風情、末々にても御町の仕出しは格別なり。爰に本町傳馬町の邊に、旦那の爲になる手代共十人許り寄り合ひ、命の洗濯講といふを始め、先づ頭に一人前より金壹歩づゝ出し、是れを元手として、毎月一人に二人づゝ出し、格子女郎をまはり番に、一人づゝ買うて慰みける。是れよりして頭掛けを、世間に枕がけと申すは、此の因縁

と承る。又無盡といへるも、無いものをして、盡したがる者を、同じ心の友うち寄りて講を取り結び、盡きるゝ程に身上取り立て、大盡にしてやるより起つて無盡とも又は頼母子とも申すぞかし。其の中に店預りの少し大氣なる男の申すは、「とても此の講思ひ立つからは、今少しの事なれば、揚たる買つて慰むべし。」と、そろ／＼奢りを申し出せば、「成程それも取り結ぶ前方に、一相談致せし事なり。上方と違ひ、愛の太夫職は、初會などには身仕舞浮浪々々として、やう／＼八ッ前に揚屋に來てそこ／＼に杯盃して、又も御見と詞なしに立歸るの由。然れば、此の講中これとても同じ事にして毎月買手の人かはれば、いづれが逢ふも初會なれば、興出しながら、年中祝儀の光堂へ參つた如く、有り難いと思ふ許りで、尊い肌も拜まず歸りて、何の面白からん。」と云へば、四五人の我を折り、「去りとは太夫といふもの、躍銀にて買はれぬもの。」と、今までのを掛け捨てにして講をやめける。いか樣これ一つの思入れでゆく客に、初會なればとて寢道具を出さず素振りをするは、何程か心殘りにして、銀拂ひの時、養子親の借錢なすやうに思ひ、出し兼ねける、尤もぞかし。流石女郎は賣る身なれば、其の日の男に嬉しがる事絶く程〇〇〇、然もなうみたる顔付仕掛け、役日の外まで勤めさするが商ひ上手なり。客も是れよりの思ひ付き、後の美しい姿の、高家かの息女なり、金銀にて叶ふべき物にはあらず。其の道の者なればこそ、鬼にも見せぬ〇〇〇〇〇〇て、わかなる〇を自由に物しける。是

れには何か惜しからじと、ある程は参らせ上げける。三浦大助といへる末社の老人申しけるは、「昔の女郎は、何心もなく形を麗はしく作るを専にして、叶はぬ聲にても唄を謡ひ、三筋の絲さへ鳴らせば太夫と呼ばれて、其の日の男上戸なれば酒面白く酌み交し、または浄瑠璃好きなれば、嫌ながら、聞く度々聞き馴れし十二段の忍びの所、永閑節の可笑しげなるを、折々に三味線引きかけ、是れは細かにお語りなさるゝなどぞやしける。思へば病人に伽するに變る事なく、夫れは〳〵心の苦しみなるに、今の世は又好かぬ男にも、氣に入らぬ顔をして位をとり、様々に心を惱ませ、務めなればこそ、こんな男に人中でいはるゝ者かと、思ふ程の嫌らしさにも、ひた〳〵と持つて参り、身をそれが物になせる仕掛け、假令天眼通を得られし羅漢も、一泳ぎは泳がさるゝ程の賢さ、女郎の智恵の盛りとは、今此の時かや。爰に三鳥、三木とて二人の分知り、色道の傳授事までしりぬいて、凡そ一個の色里にかくれなし。抑く三木の内、川な草と申すは、流れの女の誘ふ水あらばと、客次第になるを、根のない草に譬へし事なり。おかさまの木といふは、松も根引きにせられてお内儀様になる事。又三鳥の中の呼子鳥と申すは、迎への男の聲などの様に世間では申せど、夫れは傳授せぬ人のいふ事。利口な末社が上方より稽古の生鯉を貰ひましてござる、是れ一種にてお出でとよぶ時必ず行かぬ物なり。霜先の無心いはるゝ大切なる物と、未だ前方なる素人大盡衆へ大事を語りぬ。此の三鳥といふ大盡、都の

末社の名鳥始めて下り、此の里にて十三がはりお囀りしを聞いて、近頃面白き色日和、是れ珍鳥と悦び勇み、爰の諸分を見せばやと、先づおれとつて京にない圖、一と捲打ちにせて、あれなる都鳥とは汝が事よといへば、あの如く終には粹が川へはまる事、打見には閑かなれども、水の中にて足鳥の忙がしさ、我等の身上も去りとは彼の鳥に變らず、内の苦しさと、はや耳語き、爰の大盡は隨分氣が長うて、急に物やる心つかず、何事もさう心得たがよしと、的面に持つて參つて、中々ばけしき男氣、上方の大盡とは格別の違ひと口をあきければ、扨今日の趣向は都の名鳥といふ男を、上方の歷々の大盡に仕立て、三谷の粹どもに手を採らして一興と、三甚、三木申し合はせて、其の行名鳥に申し渡せば、假初ながら色里にて、歷々の大盡になる事、萬事につけて六かしく、此の[illegible]に上方へ上る路銀、御意に掛けられたらばと、早速承申しければ、たれこそ安き事と、三島屋市[illegible]金子五兩取出し早速くゐれば、二朱しと紙入に納め、兩人が養絹よ、用意せし替衣裳出して、暫時にして、誠に本大盡に作りたて、舟つけば各揚りて、何時もの揚屋に行けば、皆待ち顔に撥音を止めて、一際下のる者共は、兩人が常に連れる若い者共、津輕久助、出額萬吉、半太鼓の助助、其の外何茶し幇間共、「お先へ參つて、御出では遲し、今まで騷いで居りましたこと、何れも下座に聞たる、時に兩人の大盡名鳥を正座に直し、我等は拙者共が、常に遊山所へ召し連れて參る末社共なり、我を兩人同然にお

目懸けられて下さるべし。」と、捧手をついて慇懃に申せば、才助を始め何れも、「旦那さへ彼の如く、結構なる御挨拶をなさるゝからは、只の御方にてはあるまじ。」と、一度に首を疊に摺りつけ、巻舌にて御返事申す。斯くて三木宿の隣へ近く招き、小聲になつて、「あれなるは我等兩人を、御引廻しなされ下さる上方の旦那衆、此度ふと御下りあつて、竊かに忍びの御遊山、常の客とは格別なり。何事も都は何方にても、花車な事にする所なれば、物事しめやかに、何れとも定めず、太夫格子を六七人つかみどり、小倉、勝山、初尾、大橋、きてう、八重霧、山の井交りに、酒も大方なるとさまで、各島も上方にしよい事見盡せし物師なれば、成程横柄を捌き兼ねず、切々手水にたつて、有る水を搾ぬかへさせ、暫し遣ふ時、山の井といふ女郎、「私かけて上げません。」と、杉楊枝とりてかけ参らすれば、「近頃氣のついたる女中、お名は。」と問へば、山の井と申す。「理かな、結ぶ手の雫に濁る山の井のあかでも人にと、貫之がよみし歌の心にも叶ひ侍る。何れ俊成卿の忠岑が、有明の歌にもをさをさ劣るまじ。」と、賞美し給ふ歌の箍あつて、幾度吟じても面白し。」と、打ちあがつたる歌ばなしなど申し出し、随分味をしこなす所へ、勝手から宿の男が丸裸になつて、總身を金箔でだみて、其の儘黄金の佛の奉加をなと膝行りて罷り出る。是れは一興なると皆々笑へば、「今朝朝酒に飲へ醉ひ、表の二階から落ちまして、總身をしたゝかに打ちまして、難儀致しましたを、金は打身の薬とて、臺所で皆がよ

つて、斯様に此の世から佛には致してくれましたれども、奉公を引いて養生致す飯代の奉加々々」と無遠慮に座敷を膝行り廻る。「是れは不便なる儀、今日の大盡へ取り付きて嘆きを申せ。酒興の上なれば、御許さるゝぞ。お懐中へ手をいれ、あつうかゝつて申し請け」と、兩人許せば勝つに乗り「是れ旦那お逃げなされな、愛宕白山手が悪い。」と、膝行りながら袂にしがみ付き、懐中に手をいれ、紙巾にて貰ひし左兩の小判に手をかくれば、名鳥辛なく「こりやならぬ。」と、女郎の手前も恥かすし「大盡止める。是れがあつてこそ」と置頭巾をとれば、扨は今日の大盡は纏ひ物かと、女郎末社腹の痛い程笑うて、又酒になして遊びぬ。裸佛は云ひぢらけになつて、責めて白毫になるほど露がねにても欲しやと、膝行つて勝手へはひるを呼び返し、兩人手前より一兩と投げ出せば「近頃殊勝な御志、永代裸佛の薬代の施主におなりなさるゝ事。」と、戴いて立ちて入りける。其の後三木は中松屋の高松に深く馴れての上に、引きかいて宿の花となして詠め暮しぬ。三鳥はかかるよい事もせずして、無性といふ者になつて、何時もいつもの様に遣ひ捨て、差引殘らぬ揚屋へも内證手薄くなれば、自ら身にひけ出來て、我が方から行かれぬ氣になり、此まゝ今なれども一日も色を見ずには居られぬ性にて、やうやう一角才覺して、しの腹止まずに散茶に係り、其の儘昔の氣を出して、薄雲、勝山など自由せし盛りの話耳に立てゝ、散茶女郎むつとさしをおし沈めて、床に入つて此の返報を以て参るべしと、帶

の結目堅くして、あちら枕にひんとした痛姿、近頃あつた物でないと御身に近寄り、耳の邊へ口を寄すれば、酒臭いとて夜著の襟へ顔を指し込み、夫れとは憎き仕方。昔は歴々の太夫格子にもこんな事はきかざりしに、無念千萬とは思ひながら、世に連れて一分の金が惜しく、振られては先づ差當つての損と、隨分律儀に息遣ひ止めて、「お手が外へ出ましたら」と勞れば、「それ程の事は覺えがござる」といふ。男今は堪忍袋の口を明けて、「是れは歴々の太夫達のなさるゝ振るとやらいふ事でござるか。拙者初心者でござれば、散茶とは振らぬといふ心なりといへる名によりて、振られぬ合點で參つたが、散茶の振らるゝは、扨はいなまと御出でなさるゝか」といへば、「私が名を薄雪と申せば、振りますこといふ事近ごろ冷い心意氣、是れは北國節の大雪よりは強い振りやう、きつと横に來つて、おもしろ見まするうこと、いやしなれつゝ、難なく首尾して立ち歸り、たりとは散茶にさへ振らるゝ身になり下つて、無用の色狂ひと、我とよく／＼得道して、最早今日ぎりと心再改めてしが、明くれば又身も無い立つる樣に思はれて、人目も恥ぢず通ひけるが、後には何になつて何處へ行きしか果てなし。是れは昔の薄雪、花鳥など打寄りて、質に勝れたる勤め物語の序に、心の眞の意見を聞くに、夫れは左もことあるべけれ、總じて買手儀に遣ひ來る時は、頓て燈火の消ゆる戀の闇路とは知れて悲しく、其の人愛しく、御宿の不首尾を意見して、少しは遠ざかる樣に仕掛けぬるに、神ぞ／＼微塵疊もなき所な

れども、男は悪しく聞きなし、猶しきつて毎日出で、事によつて外の女郎に变りて、此方へ見せる全盛に、せいでも苦しからぬ大騒ぎに、程なく身代潰れければ、是れ許りによい鑑といふ程はなし。兎角取らるゝ程はぱた／＼と取つて仕舞ひ、ふだしき時に分別さすれば、差替の一腰も、茶入の一つも残る者ぞかし。べん／＼と遣り繰りする内に、一色々々皆になし、手と身とになつて納まりは、お札箱の下組、願人の袋持坊主になれるより外はなし。よく／＼心得て深入りせぬ分別なりと、随分思に取り詰められし男の語りし。

## 第四　月に調ぶる琴浦の三昧

## 酒に強きこと燗鍋の綱

女郎は昔より一座賢く、酒事格別味やつて、嘘も男の好ける様にいうて、慰みになる事今ぞかし。されども勤めの日の外、物前の無心、我も人も忙はしき中へ、迷惑ながらも客の茶引は捨ておき、色町の付け届け身の一大事と覚えぬ。是れ一つに限らず、此の道に足を踏み込みて、深入りをする人皆ぞかし。爰に江戸町に請酒商賣する者ありけり。其の身上戸なれば、他所へ買ひにやらず、年中酒むだけを遊びにして、商賣酒の豪なる世渡り。此の酒家の家主が昔を知れる人のいへるは、故は生國宇都宮にて、彌三郎といへる大盡の果てなり。今こそあれなれ、以前はいんつう過分に、持つて開いて花を

やつたる男、其の時は三浦の琴浦にうらなく契り、互に命切りと申し交して、通はぬ日はなし。一日逢はねば、女郎も思ひに沈み、晝夜に十二の一時文、若しや御心地にても惡しきやと、外の勤めも中中心に染まず。名のたつ程に思ひ合ひしが、斯かる深き中も、變らば變れ川の瀬と、浮氣男の心は一時の内を知らず、頃は七月始めつ方、そろ／＼秋風の吹いて來る時、或女郎に惚れ掛つて竊かに宿を頼み、なましで色を口説けども、御志は嬉しけれども、琴浦樣のおぼし召し迷惑、此の戀さらりと御止め下さるべきとの返事。是れは一通りの女郎の作法なれば、斯うある筈とは元來合點して、惚れ出したものなれば、今更止める男でない。此の戀首尾よく取持ちなば、どなたでも小判の山を築いて、此度御禮申す事ぢやと、宿の夫婦若い者共末社まで申し渡して、深く頼めば、末社の中に、近野といへる三寸島の年の闌きしを女房に持つて、女郎の心意氣を、知つた顏する幇間の長兵衛といふ男、彌三大盡の惚れられし女郎に、問屋市左衛門方にて、一谷のお客と御供せし時一座いたし、大酒の上にてよき首尾を見合はし、竊かに彌三郎が、所思を語るに、「私もあなたならばと飛び立つ許り思ひますれど、如何にしても琴浦樣の手前あれば」と、大和心になつて大きに和いだる口上、扨はなりよつたる首ひと、上手を盡して申すは、「近頃それは初心の至り、問屋の實事にさへ勝手づくとて、兄の死跡へ弟を入るゝもある習ひなり。ましてや色里の情を商賣になさるゝ御身として、外の所思思召すは、

所、如何にも書いて遣はすべし。十日より内に逢はうとならば、金子五十兩とらすべし。二十日の内ならば三十兩、來月へ掛らば十兩、夫れより延びなば此の手形反古たるべし」と、早速書いてたびければ、長兵衛は手形請取つて御前を立ちて出でけるが、立ち歸り方々は、我が心を陸奥の會津の蠟にあらねども、流れを立つる女郎に好みの手形を書かせずば、二度太鼓持たせぬ法もあれと、高言はいて宿に歸り、先づ暖に酒の燗申しつけ、機嫌よくして一人の仕合は何時直らうも知れぬ者ぢや、物前とさへ言へば出違ひ、其方に許り苦勞さするに、今度は内に居て、當り前の事はおいて、古借錢まで拂うて、久しぶりにて掛乞の笑顏を見すべし。先づおつとつて、旦那から五十兩の御合力、運びのない所は如此仕合せ」と、手形を出して戴かせ、夫婦益仕舞ひ、落付いたる心地にて、「去年の鯖は小さかつた、蓮の飯の米は白きに飽きがない。今年は餅米二石許り買うて、大屋殿の碓借つて、前方から踏ませ置くべし」と、ありつ大名氣になつて悦ぶ所へ、家主の若い者案内なしに内へ入つて、「長兵衛殿不思議に内にござる。何時參つてもお留守とあつて、大分宿賃の滯りの算用をなされぬ。それ故旦那腹立致し、今日は右宿代を殘らず皆濟なさるゝか、さなくば今日のうちに家を明けて、何方へも御出でなさるゝか、二つ一つの埒をつけに參つた。後程と申す樣な手延びな僉議でござらぬ、お返事が聞きたうござれば、只今諸道具摑み出し、請人方へ運ばせ申す」と、苦り切つて申せば、「德右衛門殿、それ

程嚴しう仰しやられずば、今時の店借りは障張とは濟ましますまい。なる程惡うは承らぬ、久々延引いたした代りに、滯りたは申すに及ばず、先づ當年中の宿代は進じて置きませう。拙者もちと此の頃はよい仕合を致し、歩にもまはる屋敷もござらば、求めも致さうかと、存ずるほどの身になつてござれば、今までの如才屋の長兵衛おやとは思召して下さるな。後ほど夫れへかゐるみなしに宿代持參致すべし」といへば、德右衛門耳に入れず「此方の後程と紺屋の明後日とは、かんこう彌平で受付けないこと」と、頭振つてはうず「夫れとは夫れ程までに御見立に預る所、近頃心外に存ずれども、負うたが定でござれば、是非に及ばぬ。我等舊の申さぬ印には、先づ銀子持つて參るまで、是れを代りに進じおくこと」と、一腰を渡せば、德右衛門とくと改め「然らば必ず違ひなう、追付銀子御持參あるべし。先づ夫れまでは此の脇差我等預りおき申す。」と、暇乞して歸りぬ。兎角首尾當つて急しきなれば、道つて仕舞うて一腰を取り戻し、其の後二谷へ行くべしと思案極めて、材木町の木會屋の清平といふ、日頃目を掛けらるゝ大盡、度々御無心申し掛けて愛想をつかして、此頃は呼びにも下されねども、分知りにして頼もしき御方と、彼の大盡の許へ行き、大盡に御目に掛り、件の手形取り出し、彌三郎の戀の次第、女郎の返事の樣子つぶさに語り、「運守惡い仕合にして、來月までの中には二十兩費ひますには極つたる御手形、是れを質に留めおかれ、來月まで金子御借し」と嘆き申す。清平手形を開き

き見て、「尤も是れに僞りはあるまじ。然し其の女郎慥かに彌三に逢はうといふに證據なければ、何とも心元なき證文なり。五兩取り替へてやつた上に、若し其の女郎彌三に逢はずば、勿論此の書物反古となつて、現金出して損する者は我ら一人なり。こんな事に金を貸さうよりは、請のない半季居の奉公人に、一年分の先金貸したが、まそつと慥かさうな物ぢや。」といへば、「成程女郎も逢はる、筈に、今日晴う日を晴めて參りましたれども、旦那念者で、愈逢はうとある一札とつて參つたらば、逢ひ目の極り次第に、此の通りの金子くれらるべき證文にて、只今是れよりすぐに、此の女郎に一札書かせに參ります。此の一札さへ旦那へ採つて進ずれば、私は金を早速貰ひます契約、跡は逢はれうとも逢はれますまいとも、夫れからは拙者構ひませぬ。」と申す。「然らば此方より、手代を一人汝につけて三谷に遣はし、其の女郎の口もきかし、一札も見せての上に、如何にも貸してとらすべし。」とあれば、「是れ忝き御事や。」と悅び勇み、木曾屋の手代と同道し吉原にゆけば、はや暮に及びて、桐屋のお客もお歸りなされ、太夫樣も身仕舞に御宿へござつたが、今晩は鎌倉屋へ御出での由、市左衞門方の男が申す。扨はと鎌倉屋方に行きて先づ御內儀に對面し、彼の女郎の事を聞けば、今方御出でにて座敷にござりますとの事。「女郎にお爲によい事申しに參つた、鳥渡是れまで呼びまして下され。」といへば、心得たとて早速通すれば、自由に立つふりして勝手に入つて、「是れは嶋爺殿、なんとしてござん

した。」と立ちながらの挨拶。「先づ下にござりませ。晝仰せられました深切の段々、彌三樣へ濕まりの醒めぬ内に、直に持つて參つて聞かしましたれば、お悦びとも滿足とも、神八幡餘念はござりませなんだ。然し至盛の御身なれば、ふと其の内に引きかいてのける客があるまい者でなし。然らば焦れ死に死なうも知れず、兎角情の上からなれば、とてもの事に急なる御見に賴み奉るとの、御返事がてら御使に參りました。」と、少しでも早きが價値のある約束なれば、太鼓は早めて申しかくる。女郎ぎよつとしたる顔つきにて、「長兵衞殿はつがもない事いはんす。思うても見さんせ、彌三樣は琴浦さんと深い事は誰知らぬ者はなし。其のお方にそもやそも、どう逢はるゝものでござる。此方も太鼓持つて此の里へ年中はひり込んで居る樣でもない、愚かな事に使する人かや。夫れも琴浦樣と口舌でもなされて手が切れての上に、此方から琴浦樣へ、退かしやりやうの段々聞きに遣はし、付け屆け濟んでの上は、又逢ふも例ひなれど、是れともに取持つて、お馴染と中直し、元へ戻すが女郎の作法でござる。そんな事も辨へずに、ようも／＼太鼓はなさるゝ、面皮な。」と、目を据ゑて腹を立てらるゝ。「是れは以ての外の相違、今日晝此方樣には、沙汰さへなされずば竊かに逢うて進ぜうと、彌三樣へ御口傳を、大誓文で仰しやつた。扨は我らをお騙りなされたか、事によつては、女を相手にせまいものでもござらぬ。」と、大きにせいて申せば、「左りとは笑止や、先づ太鼓持は何が役目ぞ。繁いお客、我儘

大盡拆の無理な事を云はんすか、又は色里の諸分を知らすに、馴染の女郎ありながら、此の樣な仇惚れなせる遊ばすな、竊かに止めまし、其の大盡の名の出ぬやうにさしやるが第一の役目でないか。既に大盡の仕方が惡ければ、歴々の太鼓衆が付添ひながら、不調法と此方が外叱らぬぞや。其の上今日のお客は、此方も付いて御座つて知つてござしやる通り、一谷の蛇の助樣というて、朝から明くる夜明まで呑み續けにさんしても、きよろりとしてござる大上戸、そのお相手になつて大分酒に醉うて、現下居た私を捕へて、さゝやかしやるとは思うたが、何いにんしたやら何いうたやら、神さん／＼覺えませぬ。じき暖簾掛けてるさんす艷樣達さへ、夫れ／＼に差合はくり給ふ。まして私の身の上の事、酸いも甘いも知つて知る此方の、假令酒興にいへばとて、誠にさんすが聞えませぬ。にて斯ういふが無理かやと思うて腹がたたば、公事になりともゐやになりとも心次第になされ、た、素人らしい」といひ捨てて座敷へ立ちて行かるれば、長兵衛呆れて、今は悔みても埒の明かぬ手形を取り出し、廣げたり睨んだりして、何とも不首尾千萬。木曾屋の手代見兼ねて、こんな所に長居は無益とて、無骨となつて居る長兵衛を引立て門口へ出ければ、遣手の龜が來るに行き逢ふ。「是れは長兵衛樣色が惡い。お內儀樣へ、氣に入り樣が過ぎる物であらう」と笑へば、「そんなよい機嫌でない」と、腹立ちさうな顏可笑しや。今日書桐屋にまそつと御勤めなさるゝと、見事な目に逢はしやる所を、兎角早きお歸り殘り

はねば腹立る、とはいへど、只何事もいはぬに越した事はなし。爰に政都とて、唐人流の按摩揉つたり、三味彈いたりして、大盡といふ大鳥の羽がひの下にて、育つ座頭ありしが、旦那衆に連れられて大方吉原に這入り込うで、隨分腹立てぬ坊ちやと、女郎共に可愛がられて、毎日食悦いたしぬ。ある女郎少し頼むとて、肩を脫ぎかけて、美しき所を按らせけるに、政都は後より思はず心動きて、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、是れ〇〇の如し。女郎不便を掛けられ、よく〳〵思へばこそと、人の氣のつかぬ時、そつと〇〇〇〇〇〇〇〇、外へ語るなと口を堅めけるに、宿へ歸りて早此の事を語せば、男畢りはあるまじ、己にそんなよいめをさするものか、僞り坊主がいひなしと、其の後は大盡共言ひ合はせて、戀ふ所へ連れて行かざりければ、無用の手柄話に、其の身の遊山を缺くのみならず、日待にさへ呼ばれぬ樣になつて果てけり。大盡の御機嫌とつて、世を渡る者の心得惡き故ぞかし。太鼓の智慧立てするたとへ、色宿の亭主が客に横柄なとは、皆呆氣の沙汰にして、是れをよいとは申されず。兎角色の道に掛りて、身を過ぐるの人、利發をやめて、足らぬ顏して、大盡にまかれるが上手なり。都の色茶屋の亭主に、隨分智慧自慢して、客お出でといへば、花車押し除けてまかり出で、是れは旦那、よい衣裳付でござります。而し素見る茶は今時世間に流行り過ぎて、我らが樣な粹仲間の目にしみます。兎角何時見ても、山の端染に七子織の羽織でなければ、本大盡とはいはれませぬ。ちと物好を替へて

して大盡に思ひつかれ、彼方から心のつく樣に仕掛けるが粹なり。こんな事大盡が知つて、其の心に
なつてはふいきものか。又粹な女郎に逢うたらば、馴れてから酒事の面白いはずみを見覺え、座配もよく
氣もこなれて、自然と粹になる事あるべし。然し畢竟此の道の極意は只金銀なり。必ず粹になつて、
色道に於てはよく鍛錬したる男、えては揚屋の門を、夜も編笠著て通る樣なが多きなり。然れば何れ
もあんまり粹になる事を、よい事ぢやとおぼし召すな。粹になると金が皆になるとが一時ぢやと、大
笑ひ致さば、其の内に大商人の心の廣き、武藏野の色里、縱横十文字遣手の初が、私金の取つて置
所まで覺えたる男のいへるは、「粹にもせよ野暮にもせよ、兎角銀始末しては、片時も面白げのない所
なり。世間に商ひがないといへど、爰のぐわらりとしたる事、神鳴も虎の皮の褌解きかけ、太鼓打
つては大臣買ふ氣になり、散茶の見せかけ姿を眺めて、あはれ一角あらば、今宵一夜の稲妻にせんと
天にかへるさを忘れて、終に天竺浪人となる太鼓の可愛い事なり。況んや地を歩む人間、偶全盛の
世に生まれ、金銀づくでなる戀を、思ふ儘せねば無念なり。色里も次第に金の位詰になりける。此の
程家質に銀借るさへ、大方の吟味にては貸さざりしに、爰で遣ふ銀は何處で借り出して使ひけるぞ。
世にない物かと思へば、澤山に成る物は銀ぞかし。此の前吉原の太夫、其の身の重さに目替へにして
代銀渡し請出しけるさへ世界の取沙汰、又もなき事といひしに、今の世の薄雲隨分花車作りな女郎に

男にて、醉ひ紛れに、大盡可愛がらせらるゝ女郎の内懐○○○○、○○○○○○○○○○○先の届くまゝ、憎や男奴と、其處なる煙草盆引き寄せ、煙管の鴈首引き抜き、煙草の脂を左の頬へしたゝたかつけて、大盡へ此の品を竊かに囁き、燭火明らかにならば、左の頬先に煙草の脂のつきたる男こそ私を迷惑がらせし者と、よういふ顔して告げられければ、大盡思はれけるは、誠に美しい上を、我人の好く樣にこしらへたる色なれば、人として是れに迷はぬはなき筈を、太鼓持つ役と家業を大事に思へばこそ堪忍も致せ、十杯機嫌の上では、李下に冠を正さずと謹み給ふ聖人も、人の買ふ女郎にふと抱きつかれまい者でなし。こんな所を改めぬが分知りの第一と、座中の末社共に向ひて「汝等此の暗き中に、左の頬先に早く煙草の脂を塗つた者に、金一角はつむべし、遲きとならぬぞ。」と宣ふ聲を聞くと面々に長徳寺の仕事と、左の頬先に手早く脂を塗つて、此のしむこと當分には安い物ぢやと大笑ひする所へ、勝手より火を點し參つて蠟燭をうつせば、一座夜の明けたる如く、何れも我先に罷り出で「私は左の頬は殘らず念いれて塗つた。」と申せば、拙者は左のかけがへに、右の頬まで斯くの如くと、面を出してかしこまる。是れも一興と、約束の如く一角づゝ下さるゝ。何になる事やらと、人此の事を知らず過ぎけり。其の後大盡正月の事、氣策に受合ひ給へど、重手代意見最中の時にて、手前銀自由ならざれば、日比の末社共を竊かに召され、此の金才覺の内談、何れも彼の里へお供申す

な、惚れたといふ男に印をつけて、旦那の耳に入れらるゝ、心根如何にしても酷しつ情しらぬ大盡なれば、即座に蔭下され、重ねて連れられぬには究つた事。思へばこそ惚れも致せ、夫れを辛き目を見せんとは無知らぬなり。畢竟拙者大盡より、優つたる襟の厚き者にあらば、私銀の才覺男にと思召して其の夜も情あるべきが、いうても太鼓の身なれば、打つても叩いても、物にならぬといふ所を合點して、大盡への注進だて、先づは慾の深い心からなりしと、嫌に極めて申せば、總井もぢもの事に思うて、夫れよりして女郎替へて、今の小倉に進び染め、斷かる太夫に今まで逢はずに、過ぎ行きし月日を惜しみしも理りぞかし。兎角千人の中に撰れし所あればこそ、多くの數女の中より太夫職とはなり給ふなり。色あつて情あつて、面白い事あつて、牀に誠あつて、よい事揃うて、何時までも變らぬ御心は松の位にありと、買ひ覺えし男の申しぬ。

傾城色三味線江戸之卷 終

は、淨飯大王の御子悉陀太子と申せしが、十九才にて御出家ありと語り出すより、去りとは釋迦は若い時から、無分別な如來ではあつたぞ。此の面白い事を捨てて、何の當てがあつて、だんどく山へは夜迯けにせられしぞ。其の身大王の御子なれば、よもや金に事缺いての事ではあるまじ。」と、酒機嫌で申し出せば、其の座に坊主墮の西念といふ按摩取が申すは、「今の世界にも金銀大分持ちながら、此の里の有難き道をしらず、あつたら日を談義參りして暮し、無用の僧を養ひ、又は突鐘の寄進して、衆生に戀の別れた嘆き悲します、其の罪逃れ難し。只慈悲心におもむくの第一は、死に一倍の請判をして進ぜまし、此の所へそゝのかして、御供申して參つて、色にすゝむるを大善人といへり」と。昔衣かけて出家の文となへて、食いたゞいて喰うた時を知つて居る者もあるに、時々の商ひ口を申して、旦那の御機嫌を取りける。總じてかやうの繁昌の所に勤め給ふ女郎は仕合そかし。常さへかくはやらせらるれば、物日は嘸お隙があるまじ。三箇津の内にては、此の里の女郎許りは、借銀の事はおいて、年中に餘程宛延びがあるべし。勝繼銀があらば、竊かに內證で歩を安うして借りたい」と萬に細かい開帳場へ、錢見世出す細元手の男、大盡に連れられて、酒吞みを樂しみに宵から參りて、「何の役にも立たぬ事を歷々の太夫殿に尋ねかゝれば、「あのいはんす事わいの。物日紋日役日を勤めて貰へばとて、其の揚錢は親方の爲とこそなれ私が德にはならず、衣類の外の身拵へ、禿の仕出し親里への

百三十指、錢七貫、索麪百把、箔の團扇五十本、ほゝづき挑灯三千は、火の雨が降つても調へずにはおきません、太夫樣の外聞。」と、おつ取つて遣手がいふ。聞くにおつかしき付屆け、町屋にて手前よろしき人の、世間もつぱらにするも、是れ程の事にはあらず、色道なればこそ、今此の貸借の不自由なる銀を、ようはやる事なり。貰うて女郎の身にはつけず、兎角今程女郎のおつかしき事なし。義理は武士の如く立て、内證もさ苦しかるべしと、氣を慰めに參りて、世界の狹うなるやうな咄を仕出し、次第に調子づくになつて、三味の音たえ、聲賣る女郎も小歌機嫌になくて、連歌座敷の如く、一座しめつて、氣のつきる所に、その夜の大盡、何か女郎と花々しき口舌仕出し、とかく心底のみこまぬといふ時、習ひの涙をこぼし、その上に小指切つて投げつけ、跡は永々としたる恨み。これはどうでも旦那のが無理さうなと、末社共取り扱ひ、ざつと酒にして歸りしが、其の中にかの錢見世出す細かい男、此の口舌に氣を移して、大盡より先へ拔けて内に戻り、酒機嫌に内儀を呼びつけ、遊女の如く情の口舌を思ひ出して、今更我を憎からぬ心中なれば、指を切るといひ出す。女房驚き、「夫婦となれる身の中、何れか此方の物にあらずや、つがもない事。」と氣疎い顏をすれば、亭主眼色變へて、「我は此の男を振ると見えたり、さうした事なれば尙切らさねば一分たたず、左もなくば向後御目にかゝらぬ、只今爰を出てゆき、親の許へ身上りとやらをせよ。」と愈募りて出づれば、女心に悲しく、「去

男の名代にたゝて、一座の捌けるにあいたる事、勝手は兎もあれ世間は是れなり、今時新地の茶屋女さへ、不便をかけて小銀をとらせ、京郡内の著物をしてとらす男の事は、差しに逢うた時許り泣いて見せて、浮世男の名の高い者、輕口教へて歸るは、何の役にたたぬ事なるに、此の男にあうた事を、家毎に是非に噺しける。勤めの身は、内證の用に立つ男を、譬へば片面の耳がなくとも、いふ事さへ聞いてくるれば、澤山と愛しがる筈と思へど、勤めなればこそ嫌な男にも逢うてやらるれ、金でならぬ身ならば、不器量なる男は、美男によい事許りして取られて、無念度々なるべきに、有り難きは金の威光で、一代楊枝使はぬ口をもつて參つて紅舌を嘗め侍る。女郎もこんな男に逢はるゝ時は、よもや人間とは思ひては逢はれまじ。小判に逢ふと思ひ給ふ故に、酒の上にも迎ひ氣のない事と、隨分世間へ出されぬ男の申し侍る。爰に天滿に銀で自由自在に、天神を廻す男ありけり。生まれ付き不束なる上に、近い頃楊梅瘡の出た跡一面に潰えて、面は一度剝いた様になつて雲紙を見るに均しく、前生昔の見世物にしさうな男と、人皆蝦蟆大盡と申しあへり。是れをよい事と心得、伽羅之助といふ替名をやめて、いそらと申せば喜悅致しぬ。或時酒染みて末社共好き機嫌の餘りに、屏風を圍ひて其の内へ旦那を押し込み、何れも屏風の口に立つて「さあ／＼今度海中で往還し致し、龍宮城を夜抜きにして、始めて此の里へ出現致した蝦蟆と申す鳴物、毎日かかる物いへる女郎を三寸宛喰つて命を連ぐ、稀

者の生捕、錢は戻りぢや、さあ太夫樣方、奥に廣いこ」と喚けば、「爸相いふな、女郎樣方に奥の廣いは差合ぢや。」と、座中興といふて笑ひ、皆する程の事大盡を使うて太鼓共が慰み、「是れから蝴蝶に裸體で餓鬼踊所望ぢや。」といへば、「酒が過ぎたに。許せ。」といふを、「不仕付な。」と叱る。是非なく大盡樣になつて餓鬼踊をすれば、「旦那、踊の出來た祝ひに一角苞出さう。」と申せば、「踊は何篇も致さうが、是れは許せ。」と手を合はすを、「太夫樣のござる前で、ひけて見えるぞ。」とほやけば、爲方なく親の借錢なすやうに、不承々々に一角苞取らしける、是れ程裏腹なる事はあらじ。例へば妾に内儀の機嫌取つて給仕して飯喰はさるゝに似たり。何れも世界に廣し、隨分取り苦しい氣を取つて、連添ふ女房の匿す事まで人中で言はさせ、其の上嫌ひな酒呑んで、殊更大盡に惡い癖あつて、酒過ぎたると其の儘無理窟を申し出でられ、其の揚句に刃物三昧、命勝負をこしらへて、五六度も御供申して、やう／＼一生一つ下さるゝ、是れにも忝い百程いうて戴くに、其の上は蝶蝶に付いて歩行く末社共、果報過ぎて、追付太鼓冥加に盡きさうなものと、中間寄せての是沙汰、かく間長なる大盡に逢はるゝ女郎、嘸や心盡するべし。然し今時女郎の氣に入る大盡は、泣くさかれとつて勝手にならぬ事いふに及ばず、とても勤めの身なれば、二つ取りには紋日役日にへらず使はず、勤めてくるゝ男が、氣骨が折れいてお爲によかるべし。隨分洒落たる男自慢の人、大坂堺にも數多あれど、もぢやの口だてに皆になし、晝中

には揚屋の門を後通らぬ男多し。此の頃も難波一番の色男、始めて女房を迎へしに是れでは遊女と違ひ、一生の詠め者なるに、難波一番の悪女面も脇が臭く、ようも彼の樣な物に添へて居る事なと、近所の人等我を折りしに、五十貫目といふ敷銀の光で、楊貴妃に見ゆると、氣に入る樣に宵から寢て居ばしける。町に言へば此くの如し、增して小金で賣る身の、不男なりとて疎略に思ふ筈なしと、後家に掛つて、身代仕直したる男の申し侍る。爰に西の國に隱れなき男、松の位を根引にせし、十八公といふ大盡、暫く當地に逗留して、扇屋の萩野を面白がり、四五會して何の事なく引拔き、閑に住む所を求め、月雪の朝、紅葉の暮にも、萩野を眺め、萩の下露濡れ深く、此の家にありと、少し自慢で宵に色川原の名取、器量も諸藝も打揃うたる、具足屋といふ子を手活にして、面白く酒呑んで、夜深くなれば、萩野うは風身に當てじと、釣夜著の下に抱いて寢て、結構なる夢の見盡し、目が醒めると夫婦起きて、紙燭燈し連れて臺所に出でて、棚にさし寛り、卵子五つ、赤貝も煮る許りにして是れ幸ひと當の火を起し薄鍋をかけ、何も彼も打ち入れて、此の甘き事どうもいへずと、舌打ちして、女房共かんは好いかと、差向ひにさしつさされつ、さまん\/の戯れし、一しほ醉ひも面白かるべし。女郎請出しても、こんな事して暮してこそ、樂しみも深かるべきに、根引にすると其の儘紺の布子著せて、よろづの鑰を腰に下げさせ、一文が抓み菜をねぎらせ、味噌薪までの世話さして、しかも昔がたりし人に

も遠慮せず、出でてあいさつするなど、何としても其の心は殘る物を、世間構はずお内儀樣にする事無分別の至りなり。去れば此の萩野、夕霧に次いでの上作もの、美しいといふ又比べものなし。或時座敷踊の仕舞、亂れ姿の暮方に、召し替への浴衣腰より下の一重ねも、今日の汗にとて、そこ〳〵に解き捨てし、行水の御裸身、白くたへにして、彼の驪山宮の温泉を開かれし昔の品物も、中々此の君には及ぶまじ。去りとは此の里の男共、ようぞ命が有るぞ。是れに限らず、朝夕太夫達の○○せらるゝ姿を見て居て、目を廻さぬは不思議ぞかし。此の夕暮に九軒へ出入する、小料理のきいた六兵衛といふ男、近き頃母親相果てしが、死骨を高野へ納めよとの遺言に任せ、浮世の事共忘れて、目に涙、手に數珠持ちながら、兩人ある子供が事にいひ殘さず、火の用心と許りいひ捨て、大方は出家心になつて我が家を立ち出で、暇乞ひがてら留守の事も頼まんと、吉田屋喜左衛門方へ立ち寄りしが、萩野素肌の面影を見て、菩提の道を取り外し、我もと思ふより○○○○○○になりて、旅裝束の前の方可笑しくなつて、人の見るも恥ぢて帶に挾み、漸として高野の麓に付けば、此の所の在名といふにつけて、太夫の裸身忘れず、尚々○○出づれば、母の死骨よりは一物に難儀して、御廟の橋渡れば、蛇柳忽ち其の借錢などと變じ、手に書出し腰に帳、財布かたげてあらはれ、大節季も今の事ぢやと喚く聲に、耳ない奴が聞き込んで、ぐわらりとなつて、それよりは心靜かに奥の院に納めて下向いたし

ぬ。艸木心なしとは申せども、大晦日の苦しき事をばよく辨へけると、殊勝に存ずる。

## 第三　梅の花山にのぼり詰める男

### 晝寢の料理好み、喰はぬ先に醒める夢

商人の高利に取りなされ、元直で御座りますと、澤山さうに誓文をたつる。傾城の誠なき心から、起請書いて客をたらすも、品こそ變れ、夫れ〳〵と身過ぎ、女郎に限りて僞り言ふ樣に、惡口いへるは無理さうなり。既に我人老人は正直にして假にも譃つかぬものと、律儀に覺えて居れど、年寄程僞りいふものはなし。寺參りしては、今でもぽつくり往生と願ひ、此の苦界にうか〳〵との長生き、一日も早く往生したりといはるゝ片手に、隱居の庭に柿の核を植ゑて、八年したらば孫共に、木練のとり飽きさすべしと七四年なる事を巧み、常着る小袖も、女房は弱きとて花色紺を好み、子供が元服したを見て死なれば、もはや此の世に思ひ殘す事なければ、それからは人に飽かれぬ先に、一時も早う尊い所へ參りたしとの願ひ、程なく月日經ちて、息子成人して、元服致さば、あれに嫁をとつてと、其の願ひもすらりと濟めば、孫を見てからとの念願、孫が出でければ彦が見たし、兎角死にともないに極つた事を、いはれぬ口さきで往生をいそがるゝ譃が憎し。何故に天道次第にしては置かれぬぞ。持佛堂の佛も、毎日の看經每に、往生したきとの虛言は、嘸をかしう思召さん。歷々の息子持ちし親

ならびの膳に向ひ、二の汁も替へて、杉燒の目の僉議して、鯖の燒物引ッかゝへて、美しい口をあるほどあいて、頭からかぶらるゝは、いかに打解けて遠慮なく、喰うて下さるゝとは思ひながら、興冷むべし。其の上〇〇〇〇もはれて、かしらから〇〇〇〇になつて、〇〇〇〇〇〇、恥ぢらふ氣色なく手足を動かせ、身の草臥を知らず、鼾かしましく、肌着しどけなくぬけて、五月蠅き所の見ゆるも、其れなりけりに寢反りなど、遂には戀も醒むべし。只何時までも今の行儀にして、假令納戸では何をまゐらうと、夫れは見ぬ事、客と一所に物まゐらぬこそ見よけれ。今の半太夫うつくしい上にひすい所なく、歌よまぬ小町の如し。打見には不通女な仕出しにして、取り入りて見る程屹とした、面白い所のある女郎と、伊丹の大杯といふ男始めて御見なりしより、どうも動きがとれず、毎日出かけて、引舟の小蝶の戯れ。莊子が心よりも廣くなつて、大鵬といふ大鳥隨分高う飛んで、此の里を我が物にしての遊び、末は金からうす踏む身にならうと儘、遣はうならば、頭からぐわつたりとした遊びこそ、心よけれと、寄る程の末社共が、算用なしに奢らせける程に、一年半に大杯が身體のみ揚げて、一滴七十五粒のこま金さへない身となりて、伊丹を晝ぬけにして、玉造の出ばなれに草の屋かりて、世渡る種もなければ、深編笠に大脇差、日比ぬきあげたる額口、今似せ浪人の爲となり、家々に入りて、舌をなやして作り訛り、是れは御合力買ひとて、一文宛が耳かき、楊枝の突付け賣、扨も

はかどらぬ事に氣をつかして、新御靈の緣先に腰を掛けて休めば、其の側に我に變らぬ身體が一つ男、何賣る者とも見えず、あたら稼ぎ盛りに、宰予にはあらねど徒らに晝寢して、何をか夢見しやらん、よい機嫌の聲して、亭主が物見だかたしく、何も入れずに、蕪頭の葉のはしらかし汁、割鍋に、あらぬ置き合はせたる酒びて、これよりは古代青磁、鹽鴨ましてかし、兎角手づよのきいた、輕い料理よりは、へたくみしう旨きがましと、舌打して寢言を申す。扨は奢奴も味な事知り過ぎて、あの體とうなづき、是れは善い友と、蓬り起し、寢言の次第を語れば、「夫りとは過してくれて恨めしい、此の頃喰はぬ料理を坐つて、箸とつて喰ひかゝる所を、扨も殘念な〳〵。」と奥齒を鳴らして申せば、「先づ其方が昔を語れ、此の身も半太夫を面白過ぎて、我ながら、二年半によう皆あけける大杯といふ伊丹の大盡のなれの果てさうな。」と語れば、「扨はさうか、昔の像はなし、我等は扇屋の花山に逢ひそめし、こんだといふ大盡のおいがらしおや。」と、語る鷹揚が合うて、「夫れ一昨年の春、扇屋の中二階で、おびたゞしき大笑ひのありし時、汝は奥座敷にゐたげな、其の時の騒ぎの次第をあら〳〵語り聞かすべし。」「いで其の比は花山によい鳥が掛つて、要木かたにつかんで其の目も逢はせず、見ておては可笑しからず、兎角太夫貰へといへば、けふのお客はまだ深き御馴染にあらねば、ならぬ由遣手がさし心得ての返事贈し、其の客はと穿鑿するに、我等が手代に長堀に見世をだし、[illegible]と[illegible]を商ふものの其

の一番目の倅なり。』『扨は拙者家來の太郎助樣の御逢ひなさるゝ。』と、少し急心になれども、是れを口舌にすれば太夫がひける。何ぢややら知らぬが佛、明日は天王寺の藥師の緣日なればとて、八日續けて申してやれば太郎助聞きもあへず、十一日續けて爰に置くと募る。兎角は太夫が仕合、とても限りのある男、急に埓明けたゝ靖しと、服合掛けしに、人の埓の明かぬ先に、手前の埓が早う明いて、此の揃になつたか、其の日の面白さ、隙なる鹿許り十人取り寄せ、末社集めて、勝手口に暖簾かけ、十筋の繩を十人の女郎にもたせ、是れを緣の絲取、引きあうた女をどれでも直に〇〇〇〇〇よと、十所に牀をとらせ我等筆取にて、獨り〳〵引き合うて片附く者を書き付けしに、先づ一番に初野とたゞよい傳助と、折山と上繪屋の佐次兵衞と、其の外きんご、舟橋、大鹽、桂木、夜のおぎりを晝中にみしらすと、各一度に〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇合ひける。『〇〇せうなら今日ぢや。』と、可笑し過ぎる程笑うて、扨〇〇を見て廻れば、我が物いらずに末社共が樂遊び、樣々の曲を好み、色々の〇〇をかしき中に、かな頭の作右衞門といふ男、裸身に羽織をあちらこちらに著て、胸紐を後で結び、頭巾を折りかけ烏帽子のやうに被き、『我若い時から此の道すきにして、四十八手の外の曲までして見し内に、終に十二番ひの卷頭にある、道盛の圖許りし殘しければ、羽織を具足の心にて、一軍はじめる。』と、榮耀の上の上の物好き。『夫れは小宰相の局女郎にあうたとき仕まつれ、是れは鹿戀女郎ぢや。』と腹の痛

の面白さ、淸貧は常に樂しむといふは、我々が事なるべし。」と、たはけ盡して皆にしける事はいはずして、寒い時分に破れ帷子をきて、過ぎし半太夫との口舌噺、今は無用の至りなりと、權五郎殿も片目ふさいで笑うて御座るべし。あの氣でなければ皆にはせぬ筈と、若い息子をもちし親父共が、意見の引事になつてはたしぬ。

## 第四　梅の花笠にふりかゝる時雨

### 子を捨てて色に迷ふ親仁の仕果

人の親の、子故に迷ふは常の習ひなれば、古めかしとて、色の道に迷ひ、心は闇にあらねども、不斷の大酒に足も定めず、晝中にもしるき所へ踏み込み、無性といふもの騷ぎくらし、あたらしやの金太夫にふかくなつて、行年六十九歲まで分もなう通ひ死して、大分の借銀を一子に惜し氣もなく讓られける。此の息子迷惑なる親のあとを請取り、家藏諸道具分散にして、住み馴れし我が本町を立ち退き、次第に下り坂となつて、谷町に僅かの古道具店を出し、不目利の新助とて、常住掘かつき許りして、苦しき世渡りをせしが、流石親の子程あつて、ない銀を使ひたがり、透きさへあれば新町に出掛け河波座の采女といへる、貫匁取の女郎に逢ひ馴れ、責めて親仁が今鹿戀かふ程つかひ殘して置かるれば、又樂しみも深かるべきにと、過ぎ行かれし親仁の仕果を悔みぬ。かく子の事を思はずに、使ひ捨

り、傾色の盛りなる世に出生して、銀でなる榮花の自由にならぬ身と生まれける事無念の至りなり、何ぞ一度文取り女に戯れて、うか〳〵と暮す事、人と生まれし甲斐はなしと、油店の錢を貫いて、我大丈夫な身體となつて、太夫を自由にまはし、大盡と持囃され、浮世小路の駕籠に乗らさば、此の橋を再び渡るまじと、四ツ橋の橋柱に書き付け、直に宿へ歸り、何の日當もなきに、明日の日早々より京へ心ざし、京橋より枚方まで駕籠に乗り、遠法界に登りしが、佐田の天神前にて、上から來る駕籠が、「替らうではないか。」と詞かくれば、駕籠の者、「何處へおやる。」と問ふ。「ハテ京橋へおやる。」といへば、「そんな隙なものは米の安い時も嫌ぢや。」とかぶりをふるを、雀けんこ打つてかへるに極め、「旦那様おりて下されませい、爰までとほりましたに、もと御合力頼み上げます。」と、歎きをいふを不便におもひ、つまみ錢一十やつて、「替駕籠早うもつて來い。」といへば、小腰かゞめて、「何も駕籠に御座りませぬ。」と、少しの事にて悅び、先の人を乗せ替へて、大坂の方へ行けば、上より來りし駕籠は、乗手の男合力せぬと見えて、駕籠から打明けるごとくにして、「扨々きたない奴かな、少しの增しもくれずに、其の身は何を喰ふやら、牛のやうに肥えてをつて、肩も背もたまる事かい。あんな奴が駕籠かきの油盗人といふ者ぢや。」と、物憎さうに跡から睨みつけ、「さあ旦那召しませ。」と駕籠を直す。新助乗り様に駕籠の中を見れば、封じ文一つあり。「是れは最前上から乗つて來し旅人の、取忘れし文なる

り。」と讀みも果てず是れ天の與ふる幸ひと、心を靜め四五返繰り返して、讀んで見る程旨き事なり、先づ押し戴き懷中し、扨駕籠の者共にいひけるは、「我大坂に用ある事を失念して出でたれば、是れより立ち歸れば汝等に隙をやるぞ。」と駕籠を下さす。駕籠舁共は、「夫れは〳〵御大儀な。」と笑止な顔はすれど、空身で歸るを悦ぶ。新助は夫れより逸散に宿に歸り、妻子のなき身は心安く、俄に市を立てて諸道具殘らず賣り拂ひ、何か取り集めて、金十一兩貳歩を腰に引付け、家主に暇乞ひて直に件の草庵へ尋ね行き、品よく住持に貰ひ受けて金子十兩相渡し、二色の道具取つて又大坂に立ち歸り、伏見町の道具屋へ、三島茶碗を金五枚に賣り離し、扨定家の三首物は京へ持ち上り、表具を致し、上京の有德なる茶人の元へ、大分の銀にかへて、一夜撿挍の如く、よい身となつて暫く西寺内に宿を借り、一兩年は色事やめて掘出しを心掛けしに、必ずよい時はする程の事心に叶ひ、三年半と申す秋の頃、五千兩といふ小判の數になして、故鄕なれば浪花に歸り花、錦を飾りて親の住まれし本町の屋敷を二層倍で買ひ戾し、今ははや浮世小路の遊び駕籠に乘つても、餘り人に笑はるゝ程の身でもあらずと、女郎狂ひの志頻りなりしが、よく思案を巡らすに、五千兩の幅にては、太夫に掛つて、見事な騷ぎといはるゝ程にはならず、せめて一萬兩の身代にならでは、太夫を買うても、可笑しからずと思ひ直して、夫れより北濱の若い者と組んで、米事にかゝりしが、仕合よい時は吹き付ける風雲に、思ひの

り。」とて、廣き大坂中を尋ねしに、茶椀燒出す高原といふ所に、風の神と相住して、新町の名ある太夫天神の姿を紙幟に畫き、其の身は古き破編笠をきて、橋々を以て廻り、「さあ〳〵丹波屋の小薩摩、明石屋の唐土、吾妻、紫、桂木、吉田、瀬川、奥州、小琴が、苦みのはしたを、古釘に替へませう古釘に替へませう。」と、子供たらして其の日送りにする男、どうでも色知りの果てなればこそ、あの身になつても女郎のことは忘れず、昔をとへと呼び入れて、始めをきくに、「難波津に我がよしあしは御存知の事なれば、包むに及ばず、讓りを受取りてより、宿に一夜も寐ずして新町に通ひ詰めの男、太夫の金吾になづみて、算用なしに使ひ捨てて、此の今體。」と、恥かし氣なく語れば、新助枕を擡げて、「去りとは奇特な男、是れこそ色神の引合はせ。」と喜び、即ち養子と定め、一萬兩の金を殘らず讓りて、終に其の身は過ぎ行きぬ。紙子大盡思ひもよらぬ跡をしてやり、遺言に任せ、再び新町に通ひて、時めく太夫に盃の蓋をさせる程にしこなし、諸分知りと末社も尊め奉り、女郎も方樣ならずてはと、僞り去つて眞なる志堅まり、御腹次第に嵩高になつて、道中するも見苦し。願はくは此の里を出て、お屋敷でお子樣產みましたいとの訴訟、大盡聞き屆けられ、吉日を見て根引にすべき企て、諸事八百兩で埒のあく事、近頃心易き儀と、お敵の悅び大方ならず、里の住居も今二三日、太夫に名殘の杯事、揚屋一家罷り出で、さいつさされつ、妹女郎禿まで甘りませんと、喜悅の酒盛賑かなる

とて花車が一度程も出て、「是れは手織でござりますか、其の儘絹の様な碁盤縞をおしました。」と、輕薄いひける。「諸事丸取にしてから、揚屋の取は七知ぞかし。是れ程合はぬ者はあるまじ。」といへば、是れ尤も金屋の金五郎、息災で居し時罷り出て申すは、「是れよりあはぬものあり。」「夫れは何ぞや。」と聞けば、「野郎の病中。」と申す。「夫れこそしれた事、商賣止めて居喰にする事、野郎にかぎらず、知行とらぬ程の者は皆あはぬ筈なり。まそつとよい事を申せ。」と打ち込めば、「是れは何れも聞き樣が惡し。野郎の病中には、日比目をかけて、不便がらるゝ大盡ほどあはぬ者なり。其の譯は、常に小兒心になつて、愛らしき事のみして、可愛がられた若衆、病中には白粉氣絶えて、赤み勝なる顏色生ひ出で、其の儘島者を見る如くなれば、姿を恥ぢて誰人にも逢はぬ」といふ。夫れは其の筈なり、色を賣る身は其の心掛尤もぞかし。高島屋の、あづま路、十死一生の時、凡夫の昔より不便がらるゝ、半風といふ大盡、病中五十日餘、雨の夜も風の日も缺かさず、一日に三度づゝの見舞、藥の樣子食事の進みやう委しく尋ね、今一度の本復を諸神へいのり、庚申へ裸參りの代參をたて、住吉へ命乞の延神樂をまゐらせられ、身を擲つて祈られけれども、次第々々に頼み少なきよし、遣手が告げければ、一生の暇乞に對面すべき由、大夫方へいひ入れ給へども、「如何な如何な、此の世を思ひ切つて居る上は、何方にも御目に掛る事致さず、重ねて申し屆くるな。」と、去りとては心強き言分。妹女郎引舟、遣手の

出の三人衆、東路、唐土、八重霧、三太夫に手を揃へて逢ひ奉り毎日の騷ぎ。木左が連れし末社は作吹として、黒菊石のきんか頭、而もせいたんにして片足少し長く、何一ッ取得のない男なれども、恰好の人に變りて可笑しきと、頓瓢な淨瑠璃語るを與にして、何時も御供に連れらるゝ。扨朝原に付き從ふ太鼓持は、白髮町の留平とて、厚鬢にして色白く、聲よく端歌の名人、女の好く風にて、殊更鼻の高い所僞りなく、口拍子のきゝし若者、其の外の末社は西の芝居の囃子方、一兩人打ち交つての酒事、樂しみといふは大抵の事、罪も報いも女房子の事も忘れはてて、面白かる中に、留平は此の内の君達に戀すると見えて、馬刀の吸物喉を通らず、思ひに胸を苦しめる體、唐土敏い女郎にて、早速氣をつけ、竊かに密語きしは「汝戀するを見受けたり。」といへば、留平横手を打つて「扨は顯はれて恥かし、此のいつの頃よりか、方樣の御事を思ひ染めまして。」と手をしめる。唐土大笑ひして「鼻も動かさず、好うも〳〵ない事をいへる男奴。我に執心僞りなくば、後とはいはじ只今御心に從ひ奉る。そんな事は今からた六年も此の里の門松を見らるゝ、素い女郎にいはんしたが好い。泣かずに男に嬉しがらする程の女に、いかな〳〵存じともよらぬ事、其方の思ひ人は鳥が啼く方。」といへば「天晴見通し見通し。其の東路樣になんともなりませぬ、責めて此の事通じてなりともあらば、又何時ぞの時節もあるべき物を。」と嘆く「夫れが定ならば、神ぞ此の戀我等請取り、明日の別れに腹痛むとて殘り給

されけるよと、仰せに任せ二人は俄に作り病をおこしける。連れられし大盡は、此の内證夢にも知らず、「何が中腹つた。」と問はせられれば、留平は、「宵に喰べました蛸の手が胸に横はつて、太鼓持程あつて、腹がはつて痛む。」と申す。「今日の料理に蛸は使はぬが。」と、亭主不審さうな顔すれば、「何おや知らぬか、やれ腹を引き裂くわ。」とうめく。其の爲にこそと、柏正が連れられし道鐵といふ飛び上りの針立て、懐中より針を取り出し、片手に槌をもつて「腹の蟲を殘らず平らげ手並を見せん。」と、酒機嫌に喚いてかゝれば、留平は驚き、「生まれ付いて針が嫌ひ。」と勝手へ逃げ入り、「作政は何とした、宵から浮かなんだが。」と、木左懇に尋ねらるれば、「頭痛が致して欠伸が出て、目がまふ樣で、どうやら死ぬる樣でござりますが、てつきり血の道でござりませう。あゝ目がまふ／＼。」と煮え返る。内儀心得て、俄に好い茶を入れるも可笑し。道鐵ぬからぬ顏して「血の道は若衆にこそあれ。」といへば「それは侍の道の事ならん。」と、笑ひだちにして太夫達に暇乞ひ、兩人の病人を宿の男に咢頼むとあつて、捨てて何れも歸り給へば、八つの鐘より夜明までの樂しみ、大分なりと悦ぶ事大方ならず、唐土、八重霧は、面々に頼まれし戀男共が思はく、詞に品をつけ情を込めて、東路に我が事嘆く樣に頼まれければ、東路は二人がわりなき志を聞きて「昔生田川に身を捨てし二人も、一人の女を思ふからの戀死、思へば何れを何れといひ難し。而し留平殿にあひます事は、もし漏れ聞えて、世の人の譏

平家の一番ばえ、宗盛といへる本の大盡、六條通ひの志はあれども、第一の太夫職祇王祇女は、親仁手活にして通はれねばこそ、少しさしあひをくりて、是非なく磯ぜゝりにかゝつて、湯屋ぐるひをせられしが、其の頃のしだしとて、千枚形の肌著、黒羽二重に匿し裏、おなじ黒羽織に平といふ古文字の大紋、上繪なしにいたらせ、袴高く褄取りて、大小よしやがゝりにぼつ込み、朧富士といふ大編笠襞高に着し、懐紙も延は女めくとて、小菊の五つ折、爪楊子をさしこみ、奉書の反故包みに、名の木地附、鼻紙入はさみしきとて、つれたる散切の禿にいれさせ、いんでんの横ひだ、金剛時代の笹捨松の高蒔繪の平印籠に、袋打の長緒、あまかはの二つ玉、二十六夜の瓢簞根付と、更に可笑しく、踏み捨ての柔染足袋に細緒の藁草履、鵜どの腹の細杖けしやうについて、喜三太といふ小者に、紫絞りの風呂敷に、替著物楊弓の道具を包み添へ、替雪踏逆手に持たせ、踵にて尻を叩くほどに足を上げて、ひんくとあるかせ、難波瀬尾といふ至り末社を連れて、六原の門口より、斗鷄仕掛の人形の歩くやうに練り出し給ふを、其の時の若男六原流とて是れを學びぬ。よく内證知りし者のいへるは、宗州も今大盡顔したまへど、彼は元清水坂の傘張りの息子なり。不用ざる盛をやつて無用の奢り、追付内證はない大盡となつて、つひには八島の破れ口にあはるべし。總じての浮氣男、我より上手な人のする事を學びたがれども、ある袖は振りよく、ない袖は體の惡さ。木綿羽織の胸紐しめたは、究屈

親を殺し、隙が明いたらば一日なりとも世帯を見せて、悦ばしませうものをと、不斷仕掛の涙ほしき時に溢す。雨乞に此の人頼まば、端金使ふ百姓も世の中に逢ふ可し。耳訴訟に大盡聞き兼ね、石佛代とて金子五兩はとりも直さず七夕前の小拂ひとなしぬ。今時の慰み座敷、うつかりとは遊ばれず、遣手が近寄れば、此のほど宿をもつたる移り聞きて、無心をいはぬ先に此方から「追付家見にまゐるぞ、四つ橋に大分薪買ひ置きしに、木棚は拙者承る。」と、しかも束ね木二荷持質共に、八匁二分五厘が物にて、嵩高に見せ、太鼓末社が近づけば汗はかけども、羽織をぬぎ置かず、不斷兵法の師をなする人ほどに、油斷なく心がけねば、女郎狂ひもならずと、悪賢き男の粹顔して、手下の若い者に語るを聞いて、近頃の御たはけなり、銀つかうて氣苦勞せうよりは、銀つかはずに、用心のよい我が内に盆した事なし。大盡と色里で稱美せらるゝ程の身ならば、少し鼻の下の長いこそ壽命藥なれ、高が世間へ出ぬ遊び所なれば、利口ばつた方より、氣の付かぬといはるゝ程大樣なるがよかるべし。色遊びには金を出し、談合事には智慧を出すべし。必ず内證の薄い大盡が、よろづに賢立をして、末社が詞の先を折つて、皆までいふなと、早呑込んで先繰りを致し、骨牌の場で手目させぬやうに、八方へ目を配つて、心を許さず氣骨を折つて何が慰みになるべし。おのづから遊びも小さうなつて、可笑しからぬ事のみ多し。爰に家財かけて三拾壹貫五百目の大盡、北濱の根強い名題男と同じやうに連立ち

橋、其の外天職集めて、無性騒ぎの亂れ酒、宵から更け行くまで呑み明かされて、前後座の醒める事なし。頼田物好にて、四元の喜八といふ太鼓に仔細を申し聞かせ、わざと大橋に逢はせ、「牀の樣子を見たし、○○○○○首尾は仕るな。」といへば、「夫れは幸ひの事なるが、我等の仕掛に、ひた〳〵とやらぬといふ事なし。其の時は中々○○には措かれじ。」といふ。「其の處を堪忍する替りには、京にて抱へし妾の小なるに、一言はいつけて汝にすぐに取らするがいやか。」「夫れならば無分別起る所を押し曲げて、是非に堪忍仕るは、慾の世の中に喜八一人に限らず。」と、大笑ひして、牀は大盡の身にかはり、太夫に戀の山、峯まで登らせてから、「私は末社分、此方樣の大盡樣には勿體なし。」とよいはまらせ物、「ひとつはお慰みにもなりますこと。」と各内談堅め、其の通りに申し渡し、牀をとらせける。大橋は今宵の客達の出立ち、何れも一樣に揃へ著物なれば、此の内に末社の紛れ者あるには極まれりと、氣を付けて見れども、十二人の作り山伏のうち、判官殿を見分け兼ねたる、佐藤が後家の如く、何れが大盡いづれが末社と見極め兼ねて、禿のしゆんへ何やら竊かに申し含めて、身拵へに勝手へ立たれし間に、禿喜八に囁きけるは、「太夫さまにかくれて、お伊勢さまへ參ります、お初尾の小判十兩、御沙汰なく下さりませい。」といふ。喜八喫驚して、「夫れは我等が儘にもならぬ。」といふ。爰を言はせうとて、太夫智慧を出し、しゆんにもさもしき事をいひかゝらせ、大盡でない所を見出し、此

嬉しがる例には、喜八定家に自然と心通ひ、口の暮紛れに勝手へついて立ち、ぢつと鼻のほとりを舐めおきしが、今の便りになりぬと大笑ひに面白き夜を明けての御歸り、又近い內にや。

傾城色三味線大坂之卷　終

衛門方につきて、是れより駕籠を乘りはなし、八幡屋傳右衛門奥座敷に座を定め、女郎目利といふ事もなく、兼て聞き及びし一文字屋の夕霧を申してやれば、御約束あるよし、何方にかと、宿の男が罷り出でて極めたがる。然らば扇屋の井筒か、扇屋の浮舟かに承つて見るべしといふ。是れよい物好きと申し立ちにして、暫時あつて、「浮舟樣御出で。」と申す。先づ一段と見ぬ先から早や浮舟に焦れて、待つ内の退屈、肴の蒲鉾犬に喰はせてさんたさせ、是れも氣の張らぬ太鼓と同じこと、興にして居る所へ、又男罷り出でて「始めて御客樣に何とやら申し上げるも。」と、揉手をするを「皆までいやるな、繋ぎとめる男あつて、貰ひたいとの訴訟か。」といへば「八幡旦那は見透し、如何にも御意の如く。」と浮舟もいふ。「戀は互事、兎角先の首尾よき樣に。」と、餘り結構過ぎたる御料簡。「此の代りに夢川樣とて未だ世間のお客の御存じなき手入らずの飛び切り樣、是れ許りは相違なう連れまして參りませう。」と申す。「成程々々、其の君見たし。」と是れに極めて、早速御出で忝く、川海老の吸物も所とて面白く、九右衛門まじりに酒呑んで、昔に替る遊びながら、是れも宿に居て女房どもが、世の忙しき噺しかけ、耳擦りするを聞きて、溫い茶を堪忍して呑まうより、大きにましと樂しみ、○○○○て見るほど夢川が可愛らしさ。こりや○○○○と、遠慮なく○をやれば、物はつがりして、身を萎めて素人ふきたる所、如何にしても不審と、彌 ○○○下して見れば、柔かにして手障り常ならず、○○

と羨ましく思へど、我が物になつて不斷見れば鼻につくが如く、手前に少しも心止めず、間近なれば朝暮十町目に通ひても、呑み掛け引掛け樂しみ此の里にありと、心の儘の榮華、何れあらばせいでは、さながら心若やぎて、千歳といふ女郎に、抑水上げの日より逢ひ染め、今なほ深く言ひ替して淺からぬ中となつて、女郎も此の人ならではと、物になる客を外になして、文の遣り繰りさへせざれば、何時となく逢ふ人絶えて、物日の寂しきこと、皆二三請けとり、至り穿鑿になつて、一人に片附き、千歳と少し浮名のたつに、心の強き女郎にて、世間何とも思はず、誓紙、髮切、爪指、入痣、身を裂くとは是れなるべし。この上は命を捨つるの外はなし、だん／＼憎からぬ志、風俗洒落拵へ、其の年も勤め盛り、女はさもなくて、後付に叩き所あつて、○に玉の助けも及ばぬ祕曲自然と備はり、逢ふ人毎に戀を殘せり。或時二三絶えて二月餘りも行かざりければ、千歳は心ならず一日千度文して問ひ參らすれど、詞の返事さへなくて逢はぬ思ひに沈み、大方は涙で暮し、勤めも心に染まぬ所へ、二三が連の夜深法師といふ淺草邊の樂人、難波の人に誘はれ、大坂の色町見物に行く門出に、此の里へ立ち寄るを千歳早くも見つけ、格子より聲掛けて呼び入れ、二三が見えぬ樣子を問へば、この法師も摩れ者にて、少しせかして慰まんと、けうとい顏して「扨は貴樣は二三が此の頃の事御存じないか、近ごろ失れは遲蒔なり。今は島原通ひに隙なく、よしうを手に入れ、五條の古手大盡と張り合ふ最中、

れば、是れを頼みに罷り下るなり。然らば日頃互に申せし事も、勤めの障りにもなればなる、今よりは、我等死に失せし者と思ひて忘れ給へ。更に恨みに思はすこと、紙子の糊の解ける程涙を流し語れば「扨々かかる事とは知らずして、恨み申せし段々御許し給はるべし。さうした事にて中絶え申すは世にある習ひ、日頃の御心には似ずして、氣の弱き御事、假令身を捨て命をかけて、逢ひまさいでは置かぬ女なれど、浮世の習ひ、沈む瀬あれば浮む瀬あり、御身上の潰れし事さのみ御嘆き有るまじ、只御身の恙なきこそ嬉しけれ。兎角命は物種。」と樣々諫めて、宿へ斯くと知らさるれば、元より馴染の宿と申し、殊更下々までも御蔭を忘れず、是れはと一家驚き、先づ二樣を四疊敷の靜かなる方へいれまし樣々の待遇、流石京近き所なれば、下々までの心和かに、情ある心遣ひ、千歳身にしては數々嬉しく、先づ御杯と心よく呑みかはし、紙子脱がしまして、肌馴れし下著を著せまし、三味取り寄せて、何時よりは調子高く唄うて、昔になして勇める心、魂にこたへて嬉しく「扨も／＼今日の首尾以前に變らぬ志、身に餘りて滿足いたしたり。此の上は妻女にしても僞りなき心底頼もし。誠は其の心根を見て引拔き、一生宿の眺めものにせんため、身を窶して來れり。」と、一年の所を數百兩に替へて請出し、宿にも滿足致す程悅ぶ物をとらして、萬事首尾よく仕舞うて、隨分世を樂自慢して、夫婦よつて毎日の酒事、命を延ぶる千歳も、過れば毒に極まつて、夜晝の〇にかへつて命を縮め、二三は

しに座敷へ通り、歌仙、小太夫など申す君達を迎へて、都風の酒事の味な所を呑んで見せ、是れから寝る段ぢや、兩人が○○○にて、伊之は歌仙に膝枕してよい夢を見て後、牀の中へ杯銚子取寄せ、差向ひに酒など呑み交し、國分太郎の嬉しがる事いひ盡して、又の御見と起き別るゝ。抑此の男美男にして色に賢く、一座面白くて、聲よく唄うて、三味も小野川流をぬけて、其の上に○○○大分あつて、よろづ揃ひ過ぎて好いといふ上なり。是れにて女郎なづむまじき筈なし。先づ戀といひ慾と申し、何にあらば女郎の方から遣つてなりとも逢ふべき大盡、歌仙初會より深く此の男に心を移し、白石町の所思を外になして、語りたる明の日より、毎日都へ傳を求めて、始めの程は今一度あはましてと、同じ事許り書き續けしが、後には涙といふ字許り百二百も書いて、或時は爪をはなし、指を切つて、僞りならぬ心底も見せけれど、都の戀に隙なき男、何時では逢うてとらすべしと思ふ心から、返事だにせず打過ぎ、今日こそ色に暇あり、いでや大津の遊女に逢うて、此のごろ積りし思ひの算用濟ましてやるべしと、思ひ立ち、駕籠など申して男作る内に、昨日の酒氣に頭重く、何とやら心進まず、それなりけりに枕引き寄せ、二日醉の息をぬくべしと、張り上げて時行歌を唄ふに、天井に聲あつて、一能〳〵と褒めける。不思議さに林齋といふ小坊主を召され、己が謠ふ唄を賤しき身として襃めるは推參なりと、燒煙管したゝかに戴き、罪なくて叩かるゝ。お煙管と呟くを、腰打てと召さるれば、

きものはなしと、因果經にも說かれたる由、物知れる出家の申されしも、思ひ當れり。

## 第三　木辻鳴川に深入りする色男
### 千兩皆になして今日過ぎに一文の傾城買

奈良の京春日山の里に諸分知るよしにて、假初ながら心安い色ぐるひとても、奢ればはかのゆくものぞかし。京大坂のお上家な遊びもしらず、意氣張りといふ事も知らず、面白からぬ酒に長じ、我儘いうて、兎にも角にも捻上戸、百萬が廚子といふ町に、若草屋の吞助とて、木辻鳴川に大事にかける箱入の大盡、此の里の名取り秋篠といふ女郎と深くなつて、三年半に三千兩の身代揉み潰し、住宅を賣つて退く時も、如何な〳〵氣を死なさず、其のまゝ昔里通ひせし衣裳にて、靜かに町を練つて立ち退く。あの氣でなければこそ、あの樣にもならぬ筈と、近所の親仁共指さしをして嗤へば、吞助見返り「己が銀は遣ふまいし、身が物好でする事を、無用の指さし、色遊びの面白いといふ事を知らず、一生黑米の打込み茶を吞み、所がら奈良漬の香の物を、頰はねば喰はぬなりをして、鱶の刺身に生諸白、吞んで來た男を誘るは推參なり。」と、少しも憶せず、手前よい時に引きかきし秋篠を供に連れて、三條通で色里で附合ひ、心安くなつての上に兄弟の約束せし三笠屋の常といふ大盡、まさかの時は見捨てじとの詞を賴みに、落付鑓すと安堵してこの方へ尋ね行けば、此の男も算用無しの色狂ひに、身代崩

御支配なされ、兎角瓜の蔓に茄子はならぬといへば、此の子が成人の末も心元なし。只色事の自由なる、大坂近くに置く事、千里が野邊に虎の子を養ふが如し。先づ此の子十五歳になるまでは、傾城町のない、人家稀なる里住居さすべしと、御袋樣と御一所に、此の里に流され者の樣にしておかせらるる事、傾城狂ひの病を恐がり給ひての事なり。是れ長松樣御成長あそばし、堺の屋敷へ御歸りなされたりとて、必ず／＼傾城狂ひを遊ばすな、傾城狂ひ致しますと、あれあの男が樣に、夏も綿入著て、米買ひになります。よう見ておいて、こんどまで忘れさせ給ふな。」と、穴のあく程指さして、「熟と和子に見せまして、夫婦ともに大儀ぢや。最早よいに、去んでたも。」と、御簾の中へ這入りぬ。香助夫婦呆れて、「是れは格別なる所思違ひ。」と、少しは腹がたてど、強請るべき手掛りもなく、すご／＼と爰を立ち出で、其の後女は香助に暇貰ひて尼となり、昔の名によりて秋篠寺の邊に草を結びて庵とし、二六時中の勤め怠らず、後世を祈るのほか餘念なし。かかる佛縁あつて、よい出家になり場を、何の末に頼みもなき身の坊主を嫌うて、十錢溜れば、直に酒にして、香助が今の姿の見にくさ、何をかして今日を暮すぞと見れば、同じ樣なる破戸漢共を語らひ、大佛殿の新始めの寄集の場に莚を敷き、辻打太鼓始まり／＼と聲をたてて、見物集まれば、「扨お斷り申します、只今仕りますは、木辻鳴川流行女郎全盛のなりふりなり。買手の大盡一座のしこなし、同じく酒振り口舌の詰め開き、ならびに太

なされましたが今いうたとても、名残に汗水たらして、致しまする迄ではござりませぬ。責めては貰いて置いた様が日分一も生えましても、我々四人が目を懸けての存じましても仕ります。假初ながら、一人前に二十兩宛入れて置きましたを、で御座ります。其此の次に親目にかけますが、彼の里の已前の女郎共が方からくれました状文、其の外様々縫ひし物共を、今日の總切狂言に仕ります」と古葛籠より取り出しつ先つ是れが前の若紫が、外の男は勤め許りと、諸神をかき込みし起請文偽りのない所は、今の高尾が誠はいか。扨是れが只今まで、不便がりました秋篠が右の小指、當麻が血文、香久山が水上げの時、解き初めし緋縮緬の肉衣、中尾の小衣が手隙れし時、三笠が一人寝の鬢鏡、外の吉野が三味線の撥、葛城が根より切りし黒髪、古小野菊が道中にての一時ぶみ、相模が插櫛、さざなみがさらし布の腰帶、野瀬が手附は廿〇〇両、此の外は皆偽りの筆の跡、ひつさらへて反古の目、三貫目が百三十貫目余の物、何れも近う寄つて、誰のかたきに御縁の結ぼしやりませう、兎角御立會の人々、我々を見ならひ給はで、親より譲りの家業を勵み、其の家を確かに繁昌させて、世間を御子息方にお渡しなされ、浮世暇になつて、六十過ぎて年月の氣晴らしに、女郎狂ひはする物と御合點なさるべし。若い時参れば、血氣に進つて、よかう嵩高になり、漸うに募りはいたせど、止めるといふ事、彼の上る内には致し悪い物で御座ります。爰を以て傾城狂ひに、よい程といふ程がないと申すは、此の事で

抱へ、何かなしに堺の浦に櫓幕をあげて、近日よりと看板出し、旅芝居の人形役者を招き、只替つた思ひ付きの趣向をのみ相談すれども、道具少なく、役者足らず、先づ人數不足にて、今日いうに今日なる操り、法藏比丘がましといふ。それは好い太夫共、已前より度々してとり、今は阿彌陀でも錢の光か梨の木の花、素い見物も其のやうには喰ふまじ。兎角世間傾城事が好く時節なれば、何卒是れにたよりて思案して見るべしと、いろ／＼と工夫して、先づ大看板に墨黒に書かせしを見れば、牛若樣の達者、傾城千人切、並に辨慶七つ道具の賣り喰ひといふ總外題、是れはならぬと一座の役者、腹の痛いほど笑ひ入れば、勸進元の粹自慢の男腹をたつて「内輪から其の如く打ち込むといふ事、給銀とりながら太夫元を、始めぬ先から倒す分別か」と叱れば、口輕な役者が申すは「まだ手摺さへかけぬうち七つ道具の賣り喰ひとは、先づ先の悪い看板」といふ。是れに尤もと又思案を仕直し、然らば辨慶七つ道具の置所と替へんといふ。是れも聞き替し、第一七つ道具といふが、質物の樣で氣にかゝる、それに置所は尚々禁忌なりと、座中にがい顔をいたす。總じての事氣にかけだしては、留所のないものなり。太夫元總外題に精を盡かし、とかくこんな時に氣をかへて、心のわつさりとした時、思案するがよかるべしと、好太夫ともなひ、津守の神社に詣でて、夫れより高洲の色町乳守を眺め歩き、あれは鼻筋通り過ぎて思はしからず、是れは物いひが氣にいらず、そこなは藪睨めの白目勝なるが嫌なり。

嫌ではあるまい。何事も我等陰ぢやと思召して、今少し給金上げて給はれ。」と、はやもたれ口を申せば、人に折角満足からせておいて、跡で割り付け出す様な事ではないか。」と根を押す。「兎角すかさぬ男共。」と互に笑うて内に入り、二階へも上らず、梯子の下で山本太夫が呼くは、「好い仕合といふは、女郎を買うて貰うて、我が物入らずに遊ぶ事をいふにあらず。上にござる今日の大盡は、堺に隠れもない借銀屋、何卒今日取り入つて、此の度の芝居に五十はい程、出さする思案し給へ。」といへば、太夫も笑みを含み、「近頃好い氣のつけ所、天晴の働きと存ずる。人をふずくる事我らが得物、随分兩人心を合はせ、面白る可笑しう酒を強ひて、醉はせられた所を見合はせ、各の願ひを申しかける合點でござる。」といへば、「是れ然るべし。」と内談極むるを、臺所に種というて、新町の遣手に開山、爰の内儀と念頃にて、噺して居たりしが、二人の談合を聞いて笑ひ出し、「酒強ひて醉はす方便は昔の事、近き程は京も大坂も酒を薄う造るかして、利き目が見えず。それをなぜといふに、前々は大盡に面白く呑ませて、此の上に御無心を申せば、夢中になつて、拙者正月請取つたと、跡先なしに言はるゝを、町よりのお連を證人に、つい物になしたるが、此の程はお客の醉助を見濟まし、いひかゝれば、帷子時の事は耳にいれて、小袖時分の事は聞かぬ顔して、何時も定まつて一分やらるゝ人に、二朱つきつけて、いかう予は醉うたさうなとはいはるれど、醉はれぬ證據には、蚤とり眼をして、太夫殿は

左つに見えし時、何卒慥かに請け合はせたく思ふ所へ、件の大和屋が三年酒を、ばつたりと燗をいたして、勝手から持つて參れば、時分はよきではや盛れと、大杯は脇になつて、中椀平皿、後は錫鉢にて、合ひの又合ひ、大あひと申し出して、むすびのしに小板の燒味噌、漬鰯にはたではありやと、獻いつ酬されつする程に、先づ一番に無心の頭取致せし、肝入の太夫元大盡より先に片付けられ、もんたいがないて、されども山本太夫跡に扣へて、旦那亂れ姿を見合はせ、「最前太夫元が、申しかけて置きました五十兩の金子の事、芝居勤めます内お取り替へなされ下されなば、惣座中は申すに及ばず、木戸半疊、櫓太鼓を打ちます小坊主までが浮む儀、憚りながら女郎樣方、御取りなしを賴み上げる。」と甚口上申し出せば、「成程々々、其方勝手次第に手形認め、證人汝印判持つて取りに參れ。」「是れ忝し。」と悅び、「餘り氣策なる埒のあきやう、此樣なきほひ口には、何でもいうたらなりさうな物。」と又手をついて、「とてもの事に、私樂屋入りの衣裳二重ね、見事な事に預りたい。」と申す。「それ程の事今まで申さぬは、近頃小氣な男め、金子請取りに參る時分、染色定紋書き付けて參るべし。」との御意。有り難く畏まる時に亭主も罷りいで、「太夫殿最早御願ひはないか。」と口を閉ぢめ、「旦那へ申します、屋根が殊の外損じまして、雨降りの時分お客が致しにくうござります。御陰で漏りを止めます訴訟と女房共が私に心得て、何ぞ手輕い無心申してくれと、慥かに言傳仕りました。お前へ出ませぬは、

傾城色三味線部之卷　終

一通はすみ、先づ酒になりて遊ぶ所へ「太夫樣御出で」といふ。「是れ添し。」と床脇に直し奉り、杯事すんでの上に、聞き及びし唄を望めば、京大坂で萬屋遠柳が謡うて仕舞ひ、小歌比丘尼の手に渡り末の末になつた唄も此の里で面白く、天晴名譽のお上手、梁の埃も落ちぬる許り、虞公も跣にて、聞く人心浮き立つ所に、秋の末には珍らしき蝶飛び來りて、小唄に連れて舞ふ有樣、人間物を知らぬなり。「誠や花前に蝶舞ふ紛々たる雪の肌に近づく事、柳上に鶯囀を出し、妙なる歌を諳はせらるゝ故なるべし。此の蝶も片々たる金氣があらば、花前を揚げてまはすべきに、自身舞ひ歩くは大盡蝶ではあるまい。」といへば、松右衞門が申すは「惣じて蝶は太鼓の果てなり。既に露を嘗めて命を繋ぐからは。」と笑へば、亭主可笑しい男にて「あれ小藤樣。蝶が我と飛び上る樣は、宛然身上り蟲とも申すべき。哀れ茶挽草にとまらして見たし。」と、女郎の嫌がるゝ事申し盡して、一座是れを興にして、快き酒を呑めど、花前は更に可笑しからぬ風情にて、彼の蝶を扇に取り移し「今日も又ござつたか。」と人に物いふ如く、然も涙ぐみて「是れはけうとし。酒に醉はれてあれか、但しはあんな事が此の里の習慣か。」と大盡不審し給へば、松右衞門も合點のゆかぬ顔して「花前樣胸に手は御座りませぬか。」と申せば「成程胸から見さんしたら、氣も狂ひしかと思しめさん。始めてのお客に、淺猿しき我が思はくの人の姿を見する事。」と、遊女には珍らしき眞の涙を流さるゝ。「是れは奇體の例、扨は此の蝶は

親仁様の執心か、どうやら小氣味の悪い事ぢやと臆病なる大盡、少し擬へ聲にて尋ねらるれば、二寄しなが
ら此の蟲は、當國おほしに隱れなき有徳の人の三男、三四様と申せし人の執心なり。此の大盡十七の
年、手代衆御供にて此の里へ御出で、風俗當世流にして、然も角前髪の器量よし、若き盛りに、
生まれついての大氣に、御心を廣島風呂に入れ給ひ、我が身を殿御指圖にて、始めて御見なりしより、
眞實に愛しうくれて、初會から互の心底を顯はし起請まで取り交せしこと、凡そ江口の君此の方、遊
に始めたお客に誓紙かきしは我許り。それより深き中となり、逢はぬ日は戀して暮らし心を惱ませあ
へば、早別れのおしまれたふ思ひやりて、酒事止めて寝る夜も何時よりはつい明け易く思はれ、斯うした
事もいはうものと、兩殿の十倍なき鳥を恨み、お歸りの跡は何時までも、涙の雨に沈み入る程の御思
なりしに、世には手に餘る親御もありて、惣領次男は時に二人、家業の榮花に住ひ給ひ、お愛しや御
器量お智慧は兄様達にも勝りしものを、跡から生まれ給ふとて、父親の御仰せにて、一子出家すれば九
族天に生ずといへば、三四郎にも出家を遂げ、我々が亡き跡も弔ふべしと、惜しや過ぎにし頃、
十九歳にて剃りて出家になし給ひ、書寫山の何坊とかやる師と頼み、其の寺へ寄し給ふより、此の里
への縁切れて、逢はれぬ思ひに胸を焦し、戀しゆかしの數限りなく、文して寺へ遣はせしに、ゆかしき昔
の戀思ひにて、假令此の身は出家となり、逢はで此の儘此の山に住み果つるとも、我が一念は已前に

變らず、折節毎に見ゆへしと、御返事ありしより、形見に脱ぎおき給はりし、お小袖の定紋の揚羽の蝶に、お主の一念入りけるにや、小唄に引かれて何時とても、御紋の蝶抜け出で、斯様に戯れ給ふ、淺からぬ御所思を、思へば〳〵濡れを立つるといふ身の上、世に悲しき事はなし。我勤めの身ならずば末々逢ひます思案もあれど、唄の節にて籠の鳥かや恨めしき浮世ぢやと、分もなう取り亂されければ、大盡聰みは聞になつて、聞く程哀れなる物語、知らぬ事ながら貰ひ涙を流し、「遊女は氣を晴らす所かと存じて、大切な銀を持つて來て、是れは態々泣きに參つた樣なものでござる。何と太夫樣、御嘆きの上を申し兼ねてござるが、賦入りはなりますまいか。」と律儀なる大盡にて、差足して宣はる、「如何にも〳〵、寐ませいでは。併し私が好みあり。」と、宿の下男を招かれ、「我等の嚊に、前髪鬘があらば借りたいとの仰せ。「幸ひ當年拵へましたがござります。」と、早速取つて參つて奉れば、太夫こともない悦びにて、三四形見の小袖を取り寄せ、大盡に斷り申し、小袖を著せ替へ、鬘をかけて「お名をも三四樣と申さば御いらへあるべし。さもあらば床の中にて、御心任せになるべきとの望み。一鐶出しながら、悉皆それは人の形になつて、貴樣の持遊び者になるやうな物なり。是れは太夫殿に我等が買はるゝといふものなれば、今日の雜用其の元からなさるゝでござらう。とは言ひながら〇〇〇〇にならうとの事先づは耳よりなり、兎角拵られうより是れも幸し。」と御好みの如く鬘もかけ、

給へば、左は追從箔安といふ浮氣醫者、療治を捨てて、今日那藤下さらずの末社となり、物下さるゝ脈ならぞ窺ひける。其の外御機嫌とりの、可笑仲間六七人なみ居て、踊遲しと待ちかけたり。先づ但馬屋の紅、ぱつとしたる出立ち、裾は立つ浪に入日の模樣、一入色深い井筒が洒落たとりなり。如何にしても好いた風、命取りとは此の君〳〵と、見る人鼻毛の有る程延ばして、繰り返し〳〵も面白や、まだ卷が踊り樣り、其の次は大振袖を飜して、目に立つ風ながら、何所やら足どりに初心な處ありて、是れぞ踊りの手習ひなれば、只美しく、妻川が苦味のあるも一仔細ありてなり。姫路屋の若狭がすらりとしたも見よく、若紫、小紫、みのり、早川、いさご、微塵程も憎氣のない君達。揃うたる手拍子、腰付き何れも旨さうにて、蹴返し撥褄引く足の麗しく、大盡を始め合魂を飛ばし見る所に、一際優れて五人一樣に、住吉踊りの出立ち、笠につけたる紅の絹に隱れて、誰ともお顏の知れぬが氣の毒なり。「箔安あれは誰々ぢや指いて見よ。」との御意。畏まつて、足どり身の捻りに氣をつけ、「四人は知れて中一人が知れぬ。」といふ。「先づ四人は誰樣ぞ。」「夕霧、朝霧、雲井、揚卷なり。」「然らば中なは幾世か粂の介なるべし。」「いかな〳〵、そんな君にてなし、凡そ此の里に女郎衆百人あらうが我等の知らぬは一人もなし。暗りで足音許り聞いてさへ、何といふ姫ぢやと合點致す法師が、見違へる事でない。どうでも是れは紛れ物ぢや。」と申す。近頃粹自慢なる入道に、「さらば笠をとつて

て、淀川といふ惡米を靜かに足音させて、「さあ何がおや指して見よ」といへば「足音と聲とが變りて聞き得難し、今少し近くにてお聲聞きたし」と申せば、みふね傍近くよりての付聲聞く振りして「足音は構はぬ、御聲は隱れのない御舟樣に乘る氣ぢや」と頓て取り付き目隱しを取つて悅び、若々しくも離さぬ時、みふね賢くも、「それ〳〵懷から一歩が落ちる」といはれければ、「どれ〳〵何處に」と覗見する内に、袖振りきつて逃げ給ふ。「忙しき中にさりとは智慧かな」と、人みな褒めける。宿安は、嘆き立てて「嘘ついてなりとも、我を嫌うて逃げたがる君を、捕へてから面白からず」と不興して止めなされ。其れは汝が戀より慾の方が深き故なり。懷に入れた、覺えのない一歩が落ちたといはれて、大事の君を取り逃す、さもしい心入の法師に、何とて女郎思ひ付くべきや。是れぞ浮世の流行詞に、叶はぬ事をいしやぼんといふは汝が事よ」と笑はれし大盡も跡先の算用なしに、滅多奢りに奢り、遂には身代、棒に振つて、温飩屋して浦人に啜らせ、五十過ぎて始めて金銀は大切な物と知つて、責めて今まで遣ひ捨てし三分一程儲けたしと、隨分稼げど、延ばしたき銀は延びずして、願ひもせぬ温飩と、鼻毛は今に延びたり。

第二　燒鳥にする鶉野の仕掛け
　　掘出しは床に入つての誠

出し、諸國の人に出合ひぬれば、自ら好い事も見覺え、珍らしき事も聞き覺え侍る」と囁く。さてあるべし」と、暫時酒事して後、三所に〇〇〇〇〇〇〇〇なとすれば、女郎身拵への隙をとらず、〇に入ると其の儘上着下著を枕元に脱ぎ置き、肌著ばかりになつて〇〇〇暖め、男の來る間を待ち兼ね、頭揚げて勝手口見る事幾度か、是れ律儀な客に逢ひつけ、譃も少なうついて、誠多き心がらなり、更に憎からず。客〇〇入ると嬉しき顔付して、我が〇ぬくもりに男をおいて、遠慮なく〇〇に添ひて、「著る物ごしに見ましたより、御背中は細々として、物和かにいとしき殿ぢや。」と、〇〇〇て、「お前様は京でござりますか、定めて御内儀様がござりませうが、こんな事を聞かしやりましても、御腹立てられ投げ打ちなどはなされませぬか。御子様方は幾人ござりますぞ、必ずお子様のお爲なれば、惡い事に銀など遣はぬ様になされませい。一度でも逢ひました殿達の御身代がならぬと聞けば、中々苦になりまして、頭の毛の抜ける程に思へど甲斐なし。田舎商ひなされますなら隨分御精いれられまして、下り登りの時分此の里へ御出でなされまして、私許り買うて下さんせ。」と、いふ程の事一つも僞りなく、男よりは〇〇から〇〇、〇〇〇〇として、宛然町の女房めきて繕ひなしに、〇〇〇の姿を顯はし近所を〇からず、よく〇〇といふ心にて鶉野といへりと、噂かして見せた人の申し侍る。

## 第三　稲荷町に化けをあらはす手管男

じまりつゝと、先づ番付をお目にかける。

女歌舞伎女郎役者人替名付

當流義經北國落

付り　色狂ひは身の爲にあだかの湊

竝に　富樫が關をとほりものの寄合

一源の義經。　からはし。　一武藏坊辨慶　花まき。

一龜井の六郎。　あふさか。　一片岡の八郎。　もんの助。

一伊勢の三郎。　まんざん。　一駿河の次郎。　木々の。

一熊井太郎。　きん大夫。　一源八兵衛。　さかた。

一鷲尾の三郎。　しら玉。　一兼房。　からさき。

一富樫の左衛門。　かしの。

其の外女郎衆數多出でさんす

是れが此の頃の仕出し狂言、男の所作を女郎のいたさるゝゆゑに、色顔結んで取り合ひの臺詞にも憎い奴でござんすなどと、優しき所あつて又外になき粹の遊び、六軒の女郎殘らず愛に集まり、それ

ざれの役々極めて、罷り出でたる者は、富樫屋の左衛門といふ揚屋にて候。扨も源九郎義經樣には、都にて樣々の色狂ひ、ぱつと世上に名のたつて、こうとうこうとうまつなる賴朝樣のお耳に立ち、遂に御勘當遊ばし、都の戀草に御身の匿し所もなく、舊離切られて行く末は、東の惡所友達の、身代よしのあるを賴みに、日頃の末社貧乏神のつきものまで、今に離れず、以上十二人の虛無僧となられて、揚屋の分もたてまして、ぬけてお下り遊ばす由、近頃屆かぬ仕方なれば、此の所に催促の關を据ゑ、家質の櫓をあげ、借錢の淵に高利の石垣積み上げて、もがりのさかもぎきびしく打ち、書き出しひつしと並てならべ、銀取り錢取り財布かたげ、斷りも詑言も聞き入れぬ顏つきにて、くすみ返つて居る體は、宛然大晦日に異ならず。「如何に誰ぞあるかえ、虛無僧達のお通りならば、局女郎の如く、無理に袖をひきて止めましやや。」「旅の姿は淺慮無垢伽羅たく袖や匂ふらん。」痛はしや義經は、算用なしの仕過しに、都の諸分不埒にて、遊び所の味悪く、大盡振れど請け付けず、氣象を出せど金銀の、光も薄き星月夜、鎌倉殿の勘氣を得、京の住居もなりがたく、思ひも寄らぬ旅締め、行く先を何せ方、待ちかけ居ると聞召し、末社諸共虛無僧の、姿に變る浮世かな。かの槍印の編笠も、熊谷笠に著替へて、過ぎし奢りの戀風に、皆吹き上げし尺八の、寢ても醒めても忘れぬは、都の遊びなりけらし。扨御供の末社には、龜井、片岡、伊勢、駿河、鷲尾三郎、熊井太郎、辨慶は先にたち、十一人の太鼓持

未だ習はぬこも姿、墨のくわら袈裟かけまくも、我が旦那は頼朝殿の御舍弟にて、殿振ように吝からず、天晴婉の好く風にて、色里色町の詰め開きに、一度も不覺をとり給はず、色道無類の大盡を、思へば口惜しき勘當や。」と、年頃貰うたる物の數々、思ひだしてご嘆きける。扠當てのない旅なれば、路銀はあるかと面々が、巾著紙入搜しつゝ、十一人がその中に、取り集めて金子一兩一歩二朱、銀が五匁錢二百、昔旦那の世盛りには、編笠茶屋にも是れ程は、露にも打たせ給ひしが、今大切な銀なれば、隨分始末の夜を込めて、日數重なる山を越え、安宅の浦に著き給ふ。辨慶「いかに申し上げ候。暫時此の所に御休みあらうずるにて候。」判官「いかに辨慶。」辨慶「何でござんす。」判官「只今掛乞の申して通りつる事を聞いてあるか。あたかの戀の湊には、富樫屋の左衛門が殘り銀をせがまんと、催促人を語らひ、揚錢の關をする、似せ虚無僧を堅く吟味し、是非に皆濟さすとこそ申しつれ。」辨慶「言語道斷の御事にて候ものかな。扠は御下向を存じて、是非をひつめんと存じたち、先へまはりて待ちかけたると存じ候。物前の如く出違ふ事もなりがたう候。先づ此の傍にて、暫時銀の御談合あらうずるにて候。皆々近うよりてもがり分別をだされ、此の借銀を手をよく練る思案あらうずるにて候。」龜井六郎「私が存じますは、家質義理あひの手形銀にもあらず、何ぞや證文もなき揚錢の引き殘り、何程の事候べき。只書出しを引き破つて、御通りあれかしと存じ候。」辨慶「暫時。近頃夫れは張りの強

き言ひ分にてござんす。此の揚錢の書出し一卷、引き破つてお通りあらうするは、安き事にて候へども、左樣に横と出で候はゞ、山こかしの樣に申したて、死に一倍はいふに及ばず、恐ろしき手形銀まで襲ひ來らば、僅か二兩に足らぬ路銀にて、爭でか防ぎ申さるべき。只何ともして無興の義が然るべからうすると存じ候。」判官「兎も角も其方が計らはれ候へ。」曾平「畏まつて候。然らば隨分口先を以ておよろまかし見申すべく候。旦那にはお慾深々と召され、如何にも貧なる虛無僧の樣に、我等より引き下つてお通り候はゞ、よも大盡とは見申すまじく存じ候。さあ／＼皆々お通り候へ。」番門「何と虛無僧達のお通りあると申すが、心得てある。」「何々虛無僧達」是れは揚錢をおひ給ふ似せ虛無僧衆を吟味仕り、若し引き殘りあるに極まつたる虛無僧衆は、身の皮を剝いでなりとも、乾度算用相立てさせ候。さもなきに於ては、色里の大法に任せ、捕ふせに仕る事にて候。」曾平「委細承り候。それは揚錢をおひあらけたる虛無僧にこそ、吟味し給ふべけれ。色町の出入はいふに及ばず、家質米屋の銀までも、終に一錢も負うたる事なき眞の虛無僧を、いかで捕ふせにし給ふべき。何れも早く通られ候へ。」番門「いや／＼その手は喰はぬにて候。御身達が口幅な物いひ仕、噂な手つきなどの折々見え候は、何と包み給ふとも、末社達と見申してこそ候へ。四も五も喰はぬ、揚屋の亭主を僞り給ふは不覺なり。元よりの虛は我らが家、詞のあまさうさに、各とりもち給ひ、大盡のお名の

出ぬ様に、致されし候はゞ然るべう候。」幸齋「夫れはすねばまりと存じ候。尤も我々腹からの虚無僧にてもなく候。頼みし旦那三ヶ津の色里を見廻り給へども、御心に叶ふ美女なし、さるによつて筋目にも構ひ給はず、美なる娘あらばそれを乞ひ受け、一生の妻と定めん、望みは此の通りと、姿のしなじな一つ書きになされ、此の注文に少しも違はぬ娘を、尋ね出せし者には、その褒美として金子千兩取らすべし。汝等廣い世界なれば、さがし出せと仰せをうけて此のかた、諸國を尋ねめぐるに、家々へよい娘はあるかくと問はれもせず、かく虚無僧の姿となり、尺八の音に引かれて聞きに出る女を、注文に合はせて見てまはり候へども、千人の女、千人の男の目に入ればこそ、一人もあまらず、それの語らひをなせば、萬人の目によきと定むる女、いまだ見當らず、かく尋ねかね候。貴殿も揚屋とあれば、色の數見る商賣なれば、もし思ひ當りも候はゞ、御知らせ下さるべし、さもあらば褒美の千兩を裾分けに致さうずるにて候。」左衛門「近頃それは御苦勞なる事にて候。さりながら、もし尋ね當り給はゞ、一夜檢校になる事、路銀も旦那からの、あてがひにて候はゞ、どの道にも損の行かぬ事にて候間、隨分眼の惡うなるまで見歩かれ候へ。只今は大臣も末になりて、我等どきの揚屋商賣もあはぬ世となつて、たまくよき客と思へば、人の嫌ひ手をかづき、物にならぬ人數多にて、揚錢、夜食、御所柹まで、喰ひ損になるが悲しく、斯樣に先々へ出向ひ、催促致す事にて候。まだもして見ような

役割を致せし中に、常陸坊になる事は嫌と、どの女郎衆も役目を嫌ひ給ふ故に、せう事なさに此の下女を常陸坊にして頭数に入れて出しました。」とある「是れは愈合點參らず、何の六ヶ敷い役もない常陸坊、嫌はるゝは樣子のある事か。」と、大盡根を押して尋ねられければ、「されば遊女は何處も人樣の評判で、思ひつきのないお客もお心のむいて來る者でござんす。然らばされは見たよりは買ひ徳な女郎といはれてこそ嬉しうござんしよけれ、女郎の身で買ひ損といはるゝ役目は嫌と、常陸坊になりてがないに、杉を役人に加へました。」との理。さりとは言ひ廻しの上手な女郎、「其樣な事はまそへと前方なる男に仰しやれ。」と無體に笠を取れば、此の邊へ商ひに參る小間物賣の丁子の小平次なり「是れは。」と何れも肝を潰せば、辨慶になりし花巻といふ女郎涙を溢し、「今は包むべき樣なし。隠しながら此の三年が間、此の小平次殿とは人知れず逢ひませしに、此の頃親方の耳にたちて、堅くせかるれば、逢ひ見る事は思ひも寄らず、文の取り遣りさへ絶えて、懐かしさも床しさも大方ならぬ思ひなりしが、今日此の家にて狂言あるを幸ひに、朋輩の女郎二三人を頼み、役人の中へ入れて樂屋の首尾を見合はせ、ちよつとなりとも逢ひましてと思ふ心から、跡先の辨へなくかかる手管、さぞ憎う思召さん。抑言ひ替せし始めより、二人共に長う生きる所存にあらず、いかやうにも御心次第になされませ。」と、兩人共に思ひ切つたる氣色。大盡感じて「是れこそ眞戀なるべし。男は家業を脇になし、戀

大和には猫又が赤子に化けて、油を舐つたとの。いかにも〳〵坂田藤十郎は傾城買の名人でござる。兎角念佛さへ申せば、極樂へ行くに疑ひはない。近頃有り難い事、此年程鰯の高い事もござらぬ。此の頃の咳氣は敗毒散で參らぬ。昨夕の嵯峨の大黒屋の品が、肌はむつくりとしたぞや。西瓜と神鳴は差合ぢやとの。」大坂の間男は眞でござつたかと、思ひ〳〵に出任せに噺し、聞く程可笑しく乘合の氣散じは、詮其なしに横に寐て、空眠りして鄰を聞けば、血氣な男三人、辨當を開いて酒の最中にて、一人がいへるは、鴻食うて酒を呑めば、雨降りに合羽着て歩行く樣なといへる詞、誠に長崎者と思えたり。何卒是れは仕掛け次第で一杯は呑めさうな者と、暫くやめて火繩取り出し、「御なつかしながら火を一つ」と差し出せば、「火も進上致さうが、まづ此の間をして下されい。」と、中椀をあてがへば、望む所とむく起きにして、「何方のお杯でござります。お手元見ましてお聞いたさう。」と罷り出づれば、三人の男一度に手を打ち、「其方は茂太夫ではないか、扨も久しや。先づ其の姿は何うした事ぞ、國元にては兩親の歎き、御内儀の愁歎大方ならず、皆々日本の地を尋ねられぬ所なし。いかなる所存ありて、何方に隱れ居られしぞ。」と懇に尋ぬる程合點ゆかず、「私は左樣の者で御座りませぬ。生國は都にて、身代しもじれ、大坂へ稼ぎのため罷り下る。」と誠を申せど、いかな〳〵三人實に受けず。「さりとは茂太夫情なし。親達内儀に不足あつて、家出をいたされうとまゝ、竹馬よりの友達に

爰で逢うたる咄をして悦ばして給はるべし。此の度一所に歸國致したきものなれども、天狗に暇も乞はで參らば又攫まれんも知れず。先づは互に息災なる對面嬉しし。」と、夫れより酒を汲み交して、積る物語よい加減に返答うつて、日も西山に傾けば、船は八軒家につき、三人は伏見町に用ありとて暇乞して、歸宅の事を念入れて申して別れぬ。彼の男寢耳へ茂太夫が這入りし心地して、鷹は八百てんば長崎への行きに、茂太夫になつて樣子を見るべしと、幸ひ長崎へくだる船に便船して、恐き風にも逢はず、浪靜かにして、志す大湊につきて、何かなしに先づ上つて此の地の景色を見るに、寶の島とは爰の事なるべし。錦の山白絲の瀧、流れ木の伽羅を筏にくみ、麝香犬は和朝の猫より見え渡り、丁子は藥茶の煮殼の如く捨てありきて、金銀攫みどりの所、一夜に長者ともなるべきは爰なり。然も好物の酒事流行りて、樂しみ深き榮花の湊と見廻り、扨戸村屋の所を聞きて其の町を髮おしみだき、少し揃はぬ事を申して大道一杯になつて歩けば、近所より男女出でて是れを見、「やれ戸村屋の茂太夫殿氣違ひになつて戻られた。天狗が攫みしといひしは、實に誠なるべし。」と、人集まりて此の沙汰を致しければ、戸村屋一家走り出でて、よく／＼見る程茂太夫樣に紛れなしと、内儀の滿足手代の喜び、目の見えぬ母まで躍り出でられ、無理に内へ引込み、元より人參澤山なる所なれば、正氣にならるゝ樣にと、かたはしには獨參湯を煎じかゝる。祈禱坊を呼びに驅けいだす。上を下へとかへし、先づ行

帳を拵ふるまでもなく、中だめに年々の勘定高をいうて見すべし。此の高知つたものは、重手代の徳右衞門ならではなし、是れを證據に茂太夫を極むべし。」といへば、手代の徳右衞門至極いたし、「成程此の儀然るべし。」と傍に茂太夫に算盤を渡せば、「終に秤と算盤手にとつた事がない。傾城狂ひする者は、算用知つては遊びに始末出て可笑しからず、誠は我人間の種にあらずして、また人間に遠からぬ者、傾城買といふ化轉なしの固まりなり、富貴な家の二代目の、若代に算盤秤むつかしがり、親の意見を早合點する心に入れ替りて、金銀家藏諸道具まで、物の見事に皆にさする、我が通力を見よや。」とて、忽ち藁人形となつて、燒印の跡をかたふけ、日本の地を離れて、あつち者となりけり。抑此の傾城買は、胎卵濕化の四生の外に、色塊といふ一生より涌き出づると、取上婆の申し侍りき。此の生に取りつかれぬ樣の大事は、第一家業に精を出し、算盤に疎からず、秤目せゝりて始末を辨へ、衣裳好みを止めて大酒をせねば、永代傾城買に取り附かるゝ事なく、子々孫々まで繁昌し、永く家傳はり、大商長者となる事疑ひあるべからず、目出度し／＼。

傾城色三味線湊之巻　大尾

# 風流曲三味線

安藤自笑
江島其磧

# 風流曲三味線一之卷目錄

第五　色より思ひを掛け奉る曼陀羅

戀慕のやみの暗宿、あかゞり足の食焼

貧のぬすみに戀のうたてい出來心

# 風流曲三味線　一之巻

## 第一　女道樂道連の圖の隱れ家
### 南風に廻りのよい風車の客衆

昔より花紅葉月雪を眺めて、この樂しみとして興ずる事、恐らく誰かと存ずる。智慧ある顏に墨捺でて、朝から晩まで何として、終りには眺め飽きて首の骨を痛め、興盡きて欠伸せられ、よく思へば、物は畢竟外聞ばかりの樂しみにして、眞實面白きといふにはあらず。慮外ながら我等が物好き、物いはぬ花もおかしからず、紅葉が赤いとて酒の相手にもならず、たゞ常住見ても美女は名木、雨にいたまず嵐に散らず、晝は顋の下に首を入れて艶顏を眺め、夜はまたいふに及ばず、命を縮るほど面白き事あつて、朝夕飽くといふ事なく、世界に此の替りになる樣な樂しみ、釋迦の時代からないと見えて、世々の賢き人も何か此の外に榮華なしと詞を殘したまひぬ。されども富者の別れありて、艶なる嘆きなりにけり、爰に前生にてよい慰みの種を蒔き置き、今戀草としけり、高自由なる暮し、都の町中はつけとゞけやかましいと、閑靜といふ所に若隱居をかまへ、黒谷道行なれども佛の道を嫌ひ、歌舞業事に

も心を寄せず、たゞ人のもてあそびは女道と思ひ入り、金銀あるにまかせて酒姪美色に身をかため、浮世の隙を空樽といふ大盡、口輕な末社四五人召連れられ、輕い寐覺めに酒など持たせ、心うきたつ花の春、祇園邊へ出かけ、見わたせば花見乗物立ちつゞきて、鳥井よりは風俗をつくり、稀に土踏む蹴出しあゆみ、されば此の道者の詞に、來迎柱は金箔、女の内衣は緋縮緬といひしが、〇〇〇驕るたびにもなりと見えた所、いかなおちゝあな魂も、皆そこへ／＼と心ざすこそ殊勝なれ。殊更けふは暦見るまでもなく吉日に究るは、隨分都の上物揃うて出ると、おの／＼鼻をひこつかす所へ、智慧自慢と見えし男、大臣見知り奉るなりして目禮いたす。「あれ誰ぢや。」とあれば、藤七と申す太鼓罷出で、「いまだ御存知あらずや、あれこそ祇園町の色茶屋の亭主。」と申せば、「近頃なかしさうなる男め、是れへ召せ。」とある。御意畏まりて彼の男を招けば、「ゆるしたまへ、昨夕は風車の客あつて草臥れ果てた、御歸りの時分見苦しくとも、我等方へ御供々々。」と申す。「これは替つた客の名、よい風な客で廻るといふ心で、風車の客といふか。」と問へば、「いかな／＼、そんなおもい事でない、泊り客をなべて風車と申す。」といふ。「隨分洒落仲間の我々、今まで此の古事知らぬといふも無念の至り、さて其のいはれはいかに。」と問へば、「さればこそ大事の事をお尋ねあり、抑泊り客を風車といへるは、大豆でとまるといふ心。」と、何でもない事勿體つけて、是れはと是れも興になつて笑ひぬ。「扨あの物が名

は何とか。」と問へど答へず、「くちなし色の物大分もつて、色宿の亭主ながら大名貸の心懸けある男。」と又大笑ひの後は酒に亂れて、此の好い機嫌の勢ひに、いざ氣をかへて御室の花と、頓興なる末社が申し出す。「是れ變つて然るべし。」と、大臣勇みたまひ、辨當は最前の亭主仕出しと、直に仰せつけられ、町の内は駕籠にて急がせ、千本あたりの野道よりいづれも駕籠より飛びおり、さまざまのもんさく盡して行く程に、妙心寺を過ぎて、兼好の舊跡雙の岡山の麓に、竹垣なして一つ屋の軒まばらに、見越しの松杉枝をふらせ、ひやくしん籬に作り、つゝじの帆かけ舟、櫻山吹のおのれと咲きし外は、皆兼好の嫌はれし庭木、所に住みたがる徒然草さへ知らぬかと、淺ましく見入れば、一軒屋を中より仕切り、一方には二十年も浮世を盗みたるおやぢ、頭は不斷の霜をふらせ、花は昔に梅干の赤みがちなる顔して、上下に取り合はせて六七枚はかなき齒を、楊枝にて齒を磨きたり。さりとはしやらくさい親仁と、又一方を見れば、女房らしきたけに端歯染めし、髪に時ならぬ雪を戴き、今宵も知れぬ老の身の後世心もなきにや、持佛堂らしき所を見すて、片隅に當世の枕屏風、其他に寢道具、房枕ふたつ並べ、壁にはあばらに懐紙は上、下段の上るり本、さるほどに睦まじき住家ながら、夫婦の心ざし二世迄にかはてもしをらし。あの親仁めが無い齒を磨くも、此の女房に見せん爲なるべし。今さへあの所思、若い時のむかしを聞かば何よりをかしかるべしと、大臣先に立つて、かの親仁に煙草の火一つたまはれ」と火

首差し出せば、「ゆうべ遣いた儘で火がない。」といふ。「然らばこちと合住ゐの嬶が方へ手をさしのべて、「かゝ樣火を一つくだされ。」といへば、老女顔をしかめ、「隣の客へ火進ぜる事はならぬ。」とすげなくあしらふ。「是れはしたり、親仁殿とは御夫婦ならずや、其上に親仁齒が齊きて男つくらるゝゆゑに、外狂ひかと心まはりて、少しふり心ぢやの、さりとは面白からん。」と主人が背を叩けば、翁大きにむつとせり。「此上ばれてより以來、遂に女といふ者に詞をかはした事もない、十年ばかり合住ゐすれども、隣の嬶とは火の取り交しした事なし。たとへば日本無類の美なる女、心だて良くても、隨分いや風の鼻をけ若衆にても、一ツ口にて女道衆道を申す事勿體なし。總じて女の心ざしをたとへていはば、花の咲きながら藤葛のねぢれたるが如し。若衆は針はありながら初梅に等しく、得ならぬ匂ひ深し。皆達もさりやうは人なみにすぐれて見ゆれども、女の道が好きかして風俗がびたついて氣に入らぬ。衆道好みの衆中ならば、火を打つて進ぜう。」といふ。いづれも聞いて手を拍ち、「是れは格別の思はく違ひ、それ程に男色の面白きわけを知らず、成程翁の推せらるゝ通り、今日までは女道門にはまり、是れより有り難い事はない樣に思ふ我々、おと衆道の面白きいきかた承りたい。」といへば、隣の老女首差し出し、「是れお若いしゆ、必ずあの親仁めに眉毛よまれて、衆道門の窮屈な方へ落ち入りたまふな、彼奴はむかしえびすや吉郎兵衛座に勤めし野郎の果て、多くの僧俗をたらし、佛經家業をほろ

人の子はなすとも、地女に心ゆるすなと女道を見限り、今に名言を殘しぬ。わけて憎きは夫の死期に涙雨をなし、姑の見る前にて髪くる〳〵と束ねて切りかくるを、姑涙片手に押し止め、其方の心底尤もなれども、いまだ若い身なれば我が分別あり、待ち給へといふを振り離し、もはや私の髪の要る御分別はふつ〳〵嫌でございます、主にはなれ何が面白うて女房立てしてをりませうと、無理にはさみ切つて泣いて見せしわろが、月日のたつにしたがひ、帽子の下から切つた髪を見せかけ、浮氣男どもの魂を浮かせ、あちらから戀をしかけさす企て、さなければ鼻の高い坊主と念頃し、むかしより一倍好色になつて、亭主の忌日も忘れて、後は世間にぱつとした浮名のたつ事、皆天性の不心中、若道とは格別の違ひぞかし。我傾城の身の上を申さう、ちと耳いたくと聞いて下され。野郎々々と名だてがましう仰しやれど、同じ勤めの身ながら心中づくになつて、いかう思ひ入れの違ひあり、まづ傾城は打見には公家方の御息女めきて、小判といふものは鬢水入れの蓋か、酒はどこの井戸から汲んで來るぞと、世の事知らぬ顏つきはせらるれど、襟の厚い大臣と見らるゝと、たとへば鼻缺けにもせよ。兎脣にもせよ、近頃御前へは出しにくい男になうんだる顏つき、それもせめて形は陋しくとも、分里が撥ければまだしもなれ、隨分文盲無事なる男に逢ひました日より、私が命は貴樣の物と細目してぬくぬくとした譃、是れ慾のいたす所なり。其の上其の日の客をさしおき、いかに勤めなればとて〇〇

〇〇〇〇行かるゝなど、かりにも勤め若衆にない事。まだ酷い事を申さう、お婆にも定めし其のむかしは、しておおやつたであらう。好いた男には禿と心を合はせ、透間を見て中戸の構これ心中にあらず、いたづらからする事、しかも我が身の爲になつて、諸事を餘るほどに勤める男も、氣に入らねばたま／＼かすにも口說を仕掛けて、詞質を取りて振りつけ、はやる時は高う留つて、まだるい客は取つて飛ばし、隨分張りの強いやうなれど、根強き男離れて、節供正月請取つて、しつかりと見ての時は、件の鼻かけにも其の身を自由にまかせ、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇を、〇〇〇そこらまでも〇〇〇〇、繪にかける鬼の樣なる〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、肩癖の灸のあたりを掻けて、むさくさ延びた髭を齒でくはへて拔けのと、さま／＼いやれど、此の客取離してはと、美しう勤めふるゝ。殊更男色にない事に、納戸食上て纒錢衆とはづかしいほど參るげな、そなた定めて大分取りこんだ衆であらう、いかにしても下心がいやしい、なんとおや／＼、女道はいきかたの嫌なものではござらぬか、向後宗旨を替へて衆道門に入られかしと存ずる。」

御室の幕、張りのつよい婆が昔
なる瀧の螢、尻付のよいおぢいがむかし

鄰の婆は遠い耳に聞きかね、齒のないはぐきをくひしばり、なんぢや、納戸で働くふがをかしいと

や、女郎なればとて、飯食はすに何で命がある物ぞ。若衆とても人前では箸をも取られず、楊枝、はしやけ者なりと、向歯で花車ぶつてやらるれど、内證では何を食はるゝも知らず、これは知れてある事といふ親仁は、いまだ繭かなと至りた賓が心からは、いから可笑しう存ずる。素人女の事は知らず、傾城などをそなたの目から、若衆と一口には勿體なし。第一横を切らし、或は開たする事をいたづらなの、不心中なり、嘘だやりと、さまざまの悪口、さりとは笑止や。實なる女郎外聞を狂ひはせぬものぞ。其の故に年中男に乏しからぬ身が、傷になる客を龜屋にして、恐ろしき遣手が目を忍び、親方の眼を拔いて種々心をつくし、中戸の出合ひ、〇〇〇〇〇、これ慾にあらず、金銀くれる客に替へて思ひを運ぶは、情といひ、心中といひ、浮名にもかへ身にもかへ、心を碎くは至極の實なり。男にもすんだる風をするがつまらぬとは、是れも大きなる僻言、我思しめせばこそ大切なる金銀を捨てゝ、さのかたき門を揚屋に暮したまふ。其の心ざしの切なる人を、たとへば鼻かけ客なりとて龜屋にあしらふ理はなし。これ更に慾より勤むる譯にあらず、心ざしをうけて勤めるなり。總じて女郎といふもの、男ぐるひになづむものでなし、たゞ心底を感じて其の心ばへになづむものぞかし。たとひ美男にもせよ、いきすぎた惡き大臣はあたまで取つて飛ばすなり。われ敵の實不實を見て振りもし、又心よく逢ひもするなり、若衆のふつたといふ事を聞かず。〇のある時に斷りはいはるゝけな、今は知らずとつ

宿にては物縫女〇〇〇〇〇、またはおなじ若衆仲間の同士討ち、相手なしのてんがう、夜學のしるしには〇〇〇〇〇〇〇、顔に面皰あらはれ、姿の氣疎くなるも構はずさま／＼のいたづら、大方の客には〇〇〇〇〇を以て參り、實の譯を立てたる顔つき可笑し。兎角互の身の上、いふほど屑が出て我が身ながらはづかし。これ皆おかし／＼の事にして、有つて過ぎた事いへば鬼も笑ふとやらん、是れよりはなし、模樣をかへて、そなたが若いむかし、見及び聞きおよびたる變りし事を語りたまへ、みづからもいにしへ今の世の女郎の身の上さま／＼なりし事ども、ほつ／＼思ひ出して語し申さん。」と翁も婆も打ち寬いで、過ぎしむかしを語れば、大臣末社を始めとし、これ何よりの春慰みと、辨當を爰にて開き、花を見るよりは聞いて心の浮立つはなし、あら面白の花の三月。

## 第二　仕掛のよいからくり聟

### 惣領は高橋にかゝつておちた身代

世になき物は江の刀と化ものと、人の内證に金銀ぞかし。爰に都の眞中に代々の銀持、此の先祖無間の鐘を撞かれしや、末の今に至るまで銀のなる木の山なして、利銀請取針口の音、四方の貧家の耳を驚かし、我と其の名を持丸長人とて、六十餘歳になられしが、世の人の見分違ひて、いつとなく身代うすくなりて、世間むきはむかしに變らず、隨分氣がさに取りまはしけれども、おのづから不自由

方内へ聟合ひの養子を願ひぬ。見えわたりたる所は棟高うして庭廣く、世盛りのむかし、銀にあかして物好きにこしらへたる住居を、今からくりの幸ひに、入聟の敷銀にて此の家を續がすべき事をたくみ、拾貫目入十箱拵へ、中には分らぬものを仕込み、此の寶瓦石に劣れり、いかなる聟にもあれ、銀百貫目美なる娘相添へ、此の身は其の日より發心の望みといへば、昔戀の世の中、此の家の養子を望む事數知らず。其の中に難波の浦にかくれなき大盡のなれの果て、全盛のむかしは世の人のするほどの事仕盡し、新町前の荻野にのぼりつめ、身代は下り坂に腰押すごとく、財寶皆になし、さすが名高き大臣の幽かなる身と成つて、四季小紋のかさね小袖、三枚襠も大變りして、千種色の木綿布子の身せばにして、借屋住居の裏れに、やう／＼手代どもが情にて、主從二人の命を繫ぐ、上荷船の賃錢を一ヶ月に四十匁づゝあてがはれ、是れを酢にも味噌にも米薪にもして細き烟を立て、若盛りにうつゝとしてくらしぬ。其の生まれつき頓作にして氣さくなる事、大和屋甚兵衛が御影といふても苦しからず。殊に浮世離の名人、皆人和甚と渾名せり。今此の不自由な身になつて誰意見せねど、世に銀といふものの大切なることを知り、あはれ二三年以前に此の氣がつけば、ふしみほりの家は二軒取りともあるものをと、かへらぬ昔を歎き、俄に氣を替へて渡世の營みをと、思案なかばなる所へ、浮世小路の御宿の勘吉、都の入聟の口を聞き出し、「是れは和甚樣が幸ひの事。」と朝夜くはずに走り參つて、

果て、此の覺悟なるべし、定めて諸國の靈佛を拜みにめぐる修行、よき仕舞ひと羨む人多かりき。さて和甚は今こそなれと商ひに取り付くに、諸方の問屋ども聞きつけて、何をかけてもあぶなげなし、まづ有銀百三十貫目は目に見た身代と、絹布、絲、綿と、俵物、何なりとも好き次第に賴まねども人が肝煎り、千貫目が商ひもなるやうに仕掛けたるに、和甚思ひの外の仕あはせ、まづ見せかけ銀は濟ますべしと、右の三十貫目をば箱の封もたがへず、北濱の伯父が方へひそかにすまし、いまだ小づりの百貫目には手もつけず、外より來るあきなひ物にて利德大分あがり、末は知らず打見には長者の如く、嬉しやこれでこそむかし戀を仕殘したる、都の色里大坂屋の女郎に、是れ見たかと手をうたすべしと、又持病さしおこり、中頃の寒い事を忘れ、暑い時分のかさね著、下は黃八丈に紅のかくし裏、少し手ぬるき仕出し、上には何となく黑羽二重に香の圖の大紋、上繪なしに至らせ、魚子織の羽織、菊綴の大脇差、素足に細緒の藁草履、燒印の笠を傾け、鸚鵡が跡目孔雀の吉郎兵衞といふ事知らぬ末社、其の外同じ類なるくせ物四五人めしつれ、北の門よりさゞめかしてなりこみ、以前難波にありし時より定宿にして目をかけし揚屋に入れば、亭主是れはと口をあいてしばらくふさがず。あんまり肝をつぶし、「さてお久しや、難波のあしき噂聞きまして、噂とも申して半分死んでをりましたが、色里より外人は嘘つかぬものかと存ずれば、町から來るものにも油斷はならぬ世なり、旦那の事は今ほど

屋の嬉しがるより上をしてとらしぬ。其れより次第に募つて、「近々太夫根引きにして下屋敷に移し、手活にして眺めん。」と、亭主夫婦親方へ内證申し、「高橋借銀ともに高八百五六十両で相済む。」のよし請合ひ申せば、「近頃心易い事、然らば来る二十一日、日柄もよければ此の曲輪を出すべし、それまでは今日から十日計りもあり、最早他の人に艶顔見する所でなし、今日より身請の日までは爰に揚げ詰め。」と、萬事大氣に出でて高なしの酒機嫌、おつつけ向屋から火性の大臣、魂八つやしきも人の物になるは知れた世。

第二　一杯喰はして乞食にならふ命
見せかけ大臣はりあひの買論

木綿布子に絹衣裏かけて著たるも、人によりてとがめじ、又手織の紬花色に染めて肩に縫ひ上げして、淺葱の首卷きしたる男など、昔は女郎一座する事も嫌ひしが、近年には世につれて、たとひ革足袋をはき、塵紙の鼻紙入るほどの人にても、内證知れていうた事の違はぬ客を大事にするは、尤もの事ぞかし。紅裏見せかけ、あたまつきを仕事に拵へたる男にあふも、大勢のつきあひにはよけれど、必ず買ひがゝり清まさず、諸道具も賣り喰ひに暮し、次第に幽かになつて、何の口説も仔細なく、逢はぬ様になりぬ。とかく女郎に風なる仕出しして、思ひつかれんと思ふも物事むづかし。買うて遊ぶ

ほど埓のあいたる事はなし。必ず色遊びに、物もつかはず賢くなる時分は銀がないものなり。銀のあるうちに粋になるものならば、久離切らるゝものはあるまじ。昔より見及びしうちに、幾人か粋にならるゝと皆になるとが一時、あはれや實にいにしへはと謠うたひより、今少しふるき素紙子を著て、深編笠に竹杖、便りなき風情して揚屋の門口に立つて内を覗くを、下々の男はしたなく「手の隙がない、通りや。」といへば、此の男悄々と出て行く。花車が見て「今のお方呼び返せ、物貰ひにしてはいかにしてもいやしからぬ所あり。」と人までもなく跡を慕ひ「誰樣でもあれ、わざ／＼御出でまし／＼て、我に詞もかけ給はぬは、少しはお怨みも申し上げたし。」と手を取り内へ連れまして笠をとれば、藤内樣「これは、此の姿は。」と涙を流す。藤内恥ぢ捨てて顔をあげ「隙で存ずるも、此の態になつて此の所へ、男なれば參られぬ所なれども、さりとは此の身になれば、心までつれて昔の藤内ではござらぬ。先づは馴染を便りにこれまで參りしは、近頃わりない事を頼みに參つた。皆も聞かれつらふ、我事五年以前に勘當請け、少時乳母が方にかくれ、それより惡性友達方々に一夜三夜づゝ遣り番に泊りありき、命さへ恙なくば、何卒親仁へ勘氣の訴訟して、再び歸宅の願ひを頼みに、うか／＼今まで人の厄介になつて一日暮しにせし所に、今年妹に壻をとつて跡式を讓り、親仁は諸國修行とやら、又は高野へ引き籠り、後生一遍に斬らるゝとやら、今は佛の縁も切れ果てて、木から落ちたる猿ほどにお

こい身にはなりぬ。然れば男をたてても面白からぬ浮世出家と成つて、何地へなりとも死に次第に參る合點に心底を極めしか、世にある昔太夫高橋と、互にいつはりならぬ深き契約は、請け出す事のならぬ首尾ならば、年の明くを待つて夫婦となり、一生替らず添ひ果つべきとの誓紙を取り交せし事、思ひ廻せば罪深き事。出家になるからは此の起請一つは我が身の迷ひ、太夫がさきのゆく末の障りともなれば、夢の間おけしてたまはれ、互の誓紙を取り戻し、卽座に燒き棄て、塵も灰も殘らぬ樣に心中と清め、剃髮いたしたき願ひ。」と、淚を流して語れば、內儀も共に淚を流し、「おいとしや、何かさて太夫樣に逢はせませいでは。幸ひけふは奧座敷に御入り、先づはお仕あはせにて、近々身請あそばすはず、尤も主樣はおまへと深き契約ゆゑ、氣の毒さうにはおはすれど、勤めの御身なれば力ない御事、先づ酒一つ。」と手づから燗鍋取り持ち、昔に變らぬもてなし。「近頃々々滿足、扨何ものが引きぬくしと思ひ切りし心からも、少しはせき心にて尋ぬれば、「されば外でござんせぬ、今お物語の、おまへさまのお妹御のお連合樣、太夫樣の御借金共に八百五十兩にて首尾いたす。」と申せば、藤內呆れて物をもいはず、少時あつていへるは、「必ず內儀、酒の上にて何程の贅をいはうと誠にあされな、馳をいはねば理がきこえぬ、外へは沙汰なし、妹が夫に極まれば大きな噓とも〳〵、請け出す事はおいて揚錢が大分かさならばせがみにやられし。何をかくさう身どもが身代、此の男が五年以前うつくしう皆

御出でにて、身請けの義おききあそばし、何とぞ先様へ斷り申し、千兩にて急におや方に貰ひくれとの御事、尤もおまへ樣は先約と申しながら、此方はおなじみと申し、殊に金高二百五六十兩の違ひあり、何とも此の段私一分の料簡にては濟ましがたし。慮外ながら大臣樣におあひなされ、直に詰め開きなされ下されかし。」と眞顔になつて申せば、和甚せき心になつて、「扨は身ども千兩までは得出すまいと思ふか。今でもあれ物の見事に並べたて、太夫とつりかへにしてかへるきさし、其の大臣にあふらむつかし、とかく曲輪に一日も長置きする故にさま〴〵の障り出來、のむ酒までが快からず。所詮けふ金子取り來りて太夫と引きかへにして歸るべし。」とはちけんをはなせば、藤内中二階より飛びおり、奥座敷へ案内なしにつゝと入り、「腕なしのふりずんばいと無い袖がどうふられう。さあ千兩の事はおけ、八百兩でも只今爰へ持つて來て見よ、何としてなるまい。」と氣を持たせば、和甚いよいよ募つて、「汝にはいひぶんあれども、今いへば物に似てわろし、とにかくに立ちかへり、金子取りて來て見せうが、汝も身どもが三分一出すか。」「おゝ一萬兩でも汝が出すほどは、今なりとも出さう。」といふ、「成程それ聞き事なり、とかくの論はやめて小判の山を築いて見すべし。」と、末社共は座敷に殘し、おのれ我が内藏に手のつかぬ百貫目を知らずや、取り出して物の見事に積み重ね、太夫を引つかき、きやつに鼻をあかせんと、卸籠にものらず、足を中にして宿へかへり、さて藏を開き、彼の百

貫目の箱を六箱取り出させ、封を切つて見るに、是れはいかな事、銀にはあらず石瓦なり。和甚工夫におちず、一箱々々明けさせけるに、四番目の箱の中に一通の文あり。披き見れば、我先祖より代々身上よろしきものにて、大分金銀此の藏に入れ置き來りしを、惣領藤内いつの間にか傾城狂ひにうつかひすて、かく皆になせし故、早速勘當はしたれども、撒き散らせし金銀はかへらず、弟半内と内談せしに、是れもあぐみて國遠いたし、たゞ此の屋敷ひとつ殘れり、内證人に知られんも口惜しく、さいはひ乙の娘に此の銀をいつはりて聟を望みぬ。夫婦は二世の契のなればたゞ不便と思はれ、此の事人に知らせず、持參の敷銀にて跡を立て給へ、近頃はづかしけれども、世は張り物、かへす／＼頼むなと書きとゞめたり。和甚つく／＼思ひかへせば、無念やら道理やらさだめかねて、女房に此の事をかたれば、「私に少しもしらざる事」というて涙をながすに、恨みて詮なき事ながら、此の百貫目なれてに萬大がゝりに仕散らし、諸方買ひかゝり、當座の預り銀、第一に大夫身請のはづの首尾、手筈違うては男の一分たゝず、さりとては先の大臣が思ふ所も口惜しゝ、一期の安否爰に極まり、兎角死なねばならぬに極め、覺悟仕濟まし宿を出で、六波羅野を志して一筋に、蛇の辻の藪陰に一人の非人、面桶枕に晝寢せしを揺り起して、扨も其方は何として其の體にはなられたぞ、古郷にて朝夕噂して行方覺束なしといひ暮すに、爰にて逢ふは偏に六波羅の觀音の御利生、先づは姿の見苦しさに、

是れ著たまへ」と羽織を脫いで著せ、あたりの茶屋にて酒などもとめ、ひたと強ひければ、此の亡魂自分には覺えはなけれど、悪しからぬ事のみ。「是れは過分。」と、好い加減に挨拶〇〇、たわいのなきほど醉はせ、著物、帶、脇指、頭巾までやりての上に、吭笛を突き通し、其の身は其處を立ち退きぬ。跡にてこれを見付け、「やれ和甚こそ自害したれ。」と、はつと世間に沙汰ありて、繪草紙の種となつて過ぎし昔語。

## 第四　島原へ御來迎三尊の身替り

### 黄金の膚とは金につりがへの女郎

此の家屋敷裏に四間四方の內藏一ツあり、來る五月一日に入札にて賣り申し候、和甚一度は手廣く見せかけ、大盡顏して住みしが、可惜身代を傾城狂ひに皆になし、其の身も置き所なくて無分別よりの無理死に、若い者のよい手本と、負を仲間の親仁どもが打ち寄りての評判。いとしや內儀は夫に離れ、住み馴れし家も近日人の物になれば、歎きの上の歎き、ひそかに僧を供養して心ばかりの弔ひ、家來にも殘らず隙を出し、主手代城兵衛とて顏に悪相表はれ、男つき物いひまで三笠城右衛門が兄というても、叱りての無い程好く似て、面に實は飾れど生まれついて意地悪く、朋輩もようはいはざりし男なるが、此の度の仕誼、わたりなみの奉公人同前に、お暇申す所でなしと、後に殘りて內儀への

ら懐かしいやら悲しいやら。」取りまぜての涙片手に、「さぞ萬につけ御不自由におはすらむ、成程佛を參らせん。幸ひ今夜は我が夫の待夜なれば、御回向なされ下され、明日にお歸り遊ばせ。」と自ら草鞋をぬがせ申し、さま〴〵もてなし給へば、城兵衛はすまぬ顏して、「たとひ親旦那のおほせにても、三尊を進ずる事はならず。まだ奥樣には是れ程世に知れての分散をかくし、詞をつくろはせたまふ愚かさ、何か恥なる事ならむ。此の家には大分借銀有つて、負せ仲間はや先だつて家財に封をつけ、皆入札にいたせしが、諸道具の中に此の三尊がねうちありと、仲間共目をつけ、三十兩餘の入札、念もない唯はくれまじ、くれぬとて我々も衣類までつきたて布子一つの身なれば、何を替りにやる物なし。御出家も明日齋を參らば、負せ方に禮をいうてまゐれ。」とにがり切つて居るも道理ぞかし。內儀は血の涙を流し、「さりとは思ふにまゝならぬうき身、是れまで。」と、庭へ走りおりて、井の內へ身を投げ入れんとしたまふを、法師あわてて取りとめ、「成程心底ことわりながら、人間の盛衰はあざなへる繩の如く、昨日榮華に暮せし人も、今日は淺ましき身となり、人につかへて親をはごくむ子もあり、是れ皆浮世の習ひなれば、如何に女氣なればとて、強ひて悲しみたまふは愚癡の至り。とても身を捨てたまはむとならば、同じく親の願ひを叶へて、佛の爲に身をすてたまへ、然らば現世にては孝行の道にかなひ、來世は此の三尊今の心ざしを歡喜あつて、上品上生にむかひ取らせ給はむ事疑ひなし。」

と、鐵にまかせ諌むれば、城兵衛父おやとつて申すは、「是れなほならぬ談合なり、今時何奉公したれ
ばとて、五年や十年で小判二十兩とも溜る事でなし。既に我此のお家へ坊主の時御奉公に參つて、滿
二十五年つとめて、擧句の果てに手と身とで立ち退く仕あはせ、まして奥様は御誕生の日から、つひ
に手痛い事を御存じなく、朝暮琴三味線又は十種香歌がるた、さて月見花見芝居見、色作る事を仕事
にして、世上の事はかいしき、米が何になるわと笑はせられ、外に軍の道具かと、萬葉摺に育ちたま
ふ身として、なんとして御奉公はなるまじ。もしそれも傾城などに身を賣りたまへば、二十兩といふ
耳のそろひし小判にはなるべし。さもなくて外の事では思ひもよらぬ事。」といふ。内儀は赤面して、
「いかに佛さまの事なればとて、過ぎしたる手前もあれば、[illegible]の身とあり、多くの人に罵られん事
嗤うるさや。」と身をふるはして嘆かるれば、法師笑つて、「おろかや女中、それ佛果を證せんためには
六波羅密を行じ、鳩のかはりに肉身を施し、又は四句の文を聴いて鬼の餌食となりたまふ。さればむ
かし天竺波羅奈國王の第一の后扇陁女と申すは、一角仙人とて、枯木の如くなる身に木の葉衣を纏ひ
頭に角生ひ、偏に鬼神のごとくなる仙人に契りをこめ、つひに通力を失はしめたまひ、萬民の愁へを
すくひたまふ。是れ皆佛の化身にして、今に傳へて[illegible]
られん事嘆かしきことにあらず。亡たの爲には、[illegible]

し。」と、似あはしく理をならべて申しければ、女心の果敢なく實と聞きなし、「有り難き御教化、何か假なる此の體、佛のため親のために惜しむべきにあらず。此の上はいかなる方へも我が身を賣り、其の價にて三尊を取りもどし、父御に進じ申すべし。」とあれば、城兵衞も表向き悲しさうなる顏なして、「是非もなき事ながら、親御の御爲とあるからは止め申すべき事にあらず。」と、明の日色里に伴ひ名あるくつわの許に行き、內儀を見せて相談すれば、親方艶顏を一目見て、「是れは仕合はせがなほる瑞相。」と行末を悦び、何かなして金子百兩城兵衞に渡せば、「これ忝し。」と取りてかへり、件の法師にあうて、「御蔭々々、さりとは甘う食はせた、旦那かやうの首尾なれば、我此の儘にて姿を出しては、明日から何をせうも資本なし、さるによつて貴方を頼んでかうした修學、なんと智慧であらうが。」と百兩の內拾兩西心坊に、「御苦勞賃おやる。」と差し出せば、法師悦び、「何時でもこんな御用があらば、重ねてからも遠慮なしに仰せられ、よい事は存ぜぬ法師、ちと草庵へもお尋ねなされ、女房どもにも近付きに致さう。」と立ち別れぬ。さても內儀は城兵衞が、惡心にてたばかりしとは夢にも知らで、親の爲とて思ひよらざる勤め姿、名も琴浦と改め、つき出しとて俄に風俗をつくれり。萬町方の物好きとは違ひ、眉そりて置黛濃く、小枕なしの大島田、一筋がけのかくし結ひ、細疊の平髷、八端がけの八丈縞を二尺五寸袖、當世仕立てにして腰に綿を入れず、裙ひろがり、尻つきに味をやり、心なしの

一幅帶に緋縮緬の二布二重に袷縫にして、昔はなかりし差し櫛匂ひ油も常に變り、顏に白粉彩らず、口紅をさゝず、肌ありのまゝ見せかけ、素足道中腰すゑての練り出し歩みのつしりと、近づきならぬ人にも、好いた男の樣に見ぬやうにして見る事、是れ情目づかひとて女郎の傳授事なり。されば古代は身を拵へ、顏を作れるを傾城遊女の風俗とはいひしに、さりとは格別の世に變りける。其の頃大坂堺筋に中村屋西左平とて、物いひは岩井半四郎に似て、男つきなりふり其のまゝ中村四郎五郎に生きうつし、親四郎右衛門代々法華宗にして、都の何某所持せられし、日蓮上人眞筆の八枚續きの大曼陀羅、歷々の御上人たちの御添狀まぎれなきを、此の度金子千兩にもらふべき約束にて、一子西左平に金子を持たせ都へのぼしたまひぬ。元來此の男色の道にもなかなかに賢く、難波の半太夫を手に入れ自慢、男好くして米の來る風、先づまんだらの用はさしおき、京の名題末社に案内させて西島の色宿に立ち出で、琴浦を一目見て死ぬるばかりに思ひ入れ、隙日を幸ひにすゐやかたにて始めての御見にあきし、それより譯もなう取り亂して、親の事も曼陀羅の事も忘れ果てて面白がり、萬嵩高に出でて曼陀羅金の光強く、けににくい客にはねぬ題目にして、外の男には緋縮緬の戶帳拜ませず。逢ひ初めし日より揚げ詰にして、無上に上りて急に請け出す相談、何かそれしやの寄合共、虛空にそやしたてゝ、とき んまゝ上物になし千七百兩にも根引きにし、樵木町の借座敷に迎へて、我がものにして樂しむ最中に、

大坂の親父此の首尾を聞きつけ、今日もおすもさましで俄に上り、斷りなしに座敷へ驅け入り、「さておのれは胴より肝の太き奴かな、傾城買へとて此のまうけにくい金を持たせて上したか。佛の事も親の事もわきまへぬ、後先知らずのどうぶらく、刻んでも飽きたらぬ。これからすぐに勘當。」と紙入れ著るもの羽織脇指まで引つたくり、下著一つで追ひ拂へば、力及ばず四五平琴浦が手を引き、「氣づかひするな女ども、男は裸百貫といへば上三文錢にしても一貫三百目は身の內についてある。さりとは親父様よい年して文盲な、曼陀羅の尊いより、女郎の有り難い事を御存じないの。惣じてつかひ盛りの若者に、大分の金を預けらるゝからは、こなたも少しは合點の筈ぢやに、是れはあんまり胴慾おや。」と、此の詞を限りにいづくともなく出で行きけり。

## 第五　色より思ひを掛け奉る曼陀羅

れんぼの闇の暗宿、あかゞり足の飯燒き

古今女郎買ひの仕舞ひに、好い仕舞ひといふは稀なり。我が物ばかりを皆にして、人を大分倒さぬが上々の仕舞ひぞかし。あはれや和甚、世間へは死んだ分に見せかけ。深く其の身を隱し、昔の風俗はなくておのづから器量も下り、藤の森といふ所に隱れ家をもとめて、南に窗ありて東口に繩簾を懸け、軒は蔦かづらの茂り、袖ずりの長路地、爰ぞ宇津の細路の心地して、夢にも人にはあはず。物寂

しき夕は蚊ふすべの鋸屑賣り、あしたに日貸の錢取にまはるなど、せはしき事を聞きて、世をわたる業とて花筵を織り習ひ、悲しき暮し、かけ釜懸けて、昔醉ひ醒めに好みし青菜膾さへ水雜炊に、今は不斷喰り、是れもない時は腹をしめて寐るより外は、誰れかたのみにかかる不自由なる所へ、中村やの四五平、和甚とはさしわたしの從弟、親の機嫌のなほるまではかゝらう島もなくて、ひそかに和甚が隱れ家を聞き出し、琴浦を伴ひ、やう／＼たづね來り、表に女を置いて其の身ばかり内に入れば、和甚肝を潰し「我は此の世にはない分にして隱れゐるを、何として聞き出し、いかなる事で尋ね來たるぞ。」と問へば、「されば／＼細かう話せば長うなる。つまる所がそちと同じ身持にて親に勘當を受け、當分たよるべき方なければ、そちを賴みにして尋ね來りしが、我獨身にもあらず、勘氣はうけたれども女郎買ひの本望は遂げて、あひなれし琴浦といふ太夫を引きぬき、今は影の添ふるごとく二人身なや。」と語る。「出來した。其れこそ色道嗜むものの本意よ、此の後はいかなる貧な暮ししても、其の女郎さへあれば、浮世の樂しみはあるといふもの、まづ女郎にも知己になり、互に情の深き手前を汲ませ、三人倶稼ぎにして短き煙を立てば、どうもいへた事であるまい。それ太夫樣呼びにしやことと、昔忘れさせたゝり出せば、四五平悦び、表へ出て琴浦が手をひき、「これや此の君故に此の倫になつた、ひけらかすでは無いが、何と我等が物好き、惡うはあるまいか。」と見すれば、和甚は「はつ」と肝をつぶ

まこ琴浦は、ふさしう死なれしと聞きし夫なれば、「是れは。」としがみつきて消え入るばかり歎くを突き退け、ほつと溜息をつくゞゝ思案して、側にありし大小刀を取つて四五平に向ひ「最早死なねばならぬ所、他人でもある事か、親類の身として我に恥辱を與へる仕形、弓矢八幡堪忍ならぬ」と飛び蒐るを、琴浦中へ隔たり、「卒くあなたは御存知無い事、仔細はかやうゞゝ。」と、城兵衛法師が様子詳細しく語し、親の爲身を賣りしと次第殘らず語れば、兩人呆れて「是れはいかなる因果ぞ」と、三人一所に暫時泣いて、和甚がいふやう「なんとも城兵衛、法師が言分合點ゆかず、我が男ながら其方親の此人は、内證に機關をこしらへ置き、我に一杯くはせ置いたる覺えあれば、一度故郷へ音信もする覺悟にあらず。まして出家の願ひありて佛もいらば、我を壻にとられぬ先に三尊をのけらるべし。是れをよくゞゝ推するに、日頃城兵衛色も情も知らぬ大慾無道の男め、法師と心を合はせて其方をたばかり賣りて、金をしこためたるに疑ひなし。とかく憎きは城兵衛め、何卒尋ね出し、八裂きにして。」と身を悶く。四五平はそれには構はず「まづ此の女房どもはどちらのにしたものであらう」と早○○○○穿鑿すれば、琴浦申すは「其れは私が料簡あり。」と、和甚が持ちし小刀追つ取り、自害と見えしを、二人慌てゝおしとめ「死んではいよゝゝ恥の上の恥なれば、爰は何とぞ思案あるべし。かまへて聊爾すな。」とやうゞゝ止め、「さて四五平、よい智慧はないか。」と問ふ。「ハテ智慧を出すにおよばず、

昔から添ひ馴れし女房なれば、かく知れた上には、最早我等は添はれぬ首尾、とかく犬骨折つて高い女房共を進上いたすまで。」といふ。「近頃過分な料簡ながら、爰は又我等が一通りを聞いてくれ。尤も今不測に逢うたとはいひながら、もと我事は知略にもせよ方便にもせよ、一旦死んだ眞似をせしからは、最早我はないもの、然れば後家といひ勤め女といひ、傍からかまふ人はないはず。既に遠國の知らぬ大臣引きぬいて去んだ時は、此の詮議はない所、兎角其方が物にして好きにせい。」といへば、「いやいやそれでも寐心がさつぱりとせぬ。」と暫く工夫して、棚にありし古硯箱をおろし、鼻紙出して金子七百兩と書き付け、和甚に向ひ、「其方身體落ちぶれて嘸不自由にあるべし。よい一門持ちしは此の時のためなれば、身にかへて僅かながら此の金子を合力する。」と差し出せば、「是れは何とも心得ぬ事、こりやどういふ事ぢや。」といへば、「ハテ是れほどの事が合點ゆかぬか、親類なれば金銀を貢ぐまいものでなし、又貰ふまじきものでなし、其方此の合力金を得て我が好いた女郎を請け出し、心のまゝに添へといふ事ぢや。」と、否とはいはれぬ云分に、和甚感涙を流し、「成程々々、淺からぬ心ざし、忝し。然らば此の金子申し請けて、重ねて仕合せいたしたる時分、[illegible]申さう。」と、書付を押し戴き、「[illegible]浦に執心なれば早速請け出したい。」「其れは[illegible]、[illegible]の身は[illegible]で自由になること、突き出しより間もなければ借金も無い筈[illegible]、高か七百兩で[illegible]。」「是れ[illegible]近頃心[illegible]

すいせんさく、然らば此の金で引きぬきたい。」と、最前の書き付け出せば、四五平請け取り琴浦を渡し、「ざつと是れで相濟んだ。さて一所にゐるも氣詰りなれば、幸ひ鄰の明家借り度い願ひ。」「是れはともかくも心任せ。」と、家主へいひ込み、月に二匁五分の宿代、昔の色里へ文の使の賃よりやすいことも、今の身にてはすましかね、頼む此の宿も屋賃重なれば、荒れたる棟を其の儘に雨もたまらず、漏りくるを破れ傘にて凌ぎぬ。濡れより起る貧家、此の筈とあきらめ、四五平は鈴つぼ／＼の土細工して、稻荷の前へ投げ賣りして身代の尾を見せける。和甚は花筵もあはぬとて煙草を刻み習へば、琴浦は木綿の枷といふものを繰りて、絲より細き世渡りに氣をつくし、琴浦は人置きの嚊を頼み、都の棟高き町家へ腰元奉公に出て月日を重ねしが、もとより人を使ひし身の果て、善惡の分を飲みこみの好い才覺者と、主人の氣を取ること、それは／＼痒き所へ手の屆くごとく、下々ともによしなに申して、此のお家にはおぎんといふ女なうてはと、諸人に思ひ付かれしは、其の身の賢きゆゑぞかし。傍輩のおりんおさつ、たまなどは素性賤しく、二十二三の時分から奉公しそめて、今まで幾所か經歴り、隨分すれた女ども、いかなる強自慢する男どもも、腰に引つ著けて巾著といふ名取りとも、表向きはまだそんな事知らぬ顏して、久三がてんがうするにも上氣をなし、萬にあどなく見せかけ、主人に心を許させ、月に五七度も目にたたぬやうに隙を貰ひける。其の仕掛の凄まじさ、初夜過ぐる頃に宿

の嚊が表を叩き、おりんを呼び出しに來れば、表へ出でて二つ三つ物語して内に入り、奥樣のお前へまゐり、「在所の母親六條參り致されまして、ついでながら立ちながら逢うて、明日は早々歸り度きよし、宿から只今呼びに參られました。折々お暇を貰ひまして、内方の御機嫌も勝れねば、又かさねての京上りに逢ひませうと返事いたしますれば、宿の嚊の申されますは、母も死なれう端かして、人懷かしがりて、今度も六條參りは假令の事、第一娘共に逢ひたさばかりに上つたと染々いはるゝ。思ひなしか此の前上られた時よりは、いかう弱られたやうなれば、又逢へる事も不定な浮世、つい立ち歸りにお暇貰うて逢ひやれと申されます。いはれますれば明日をも知れぬ老の身、一寸あうても參りたうございますれど、餘りせつ／＼お暇もらひますさかいで。」と、涙ぐみて申せば、さすが下々のひすい事知らせられぬ奥樣なれば、「オヽ親の身で子に逢ひたいは道理々々、然らばつい行て參れ。」のよし。「忝し。」と、直に二階へ駈け上り、下に襦袢上に木綿の袷引つ掛け、日野の二布に仕替へて足ばやに立ち出で、小宿の裏口より入れば、相手は丁稚上りの若い者と見えて血氣男、お御前の下に長う短うなつて待ち兼ね、「奉公して居る所から爰までは何町ほどあるぞ、口もまた來さうなものぢや、今といふてござりたの。」と、噂に忙しう問ふ時、茶屋の前へ静かに上り、「待ち兼ねてござんしよと思うて、いかう氣がせきました。」と、まづ茶を汲んで彼の男へ差し出せば、「何うしてござるやら暮

いふ前から待つて居ました。」と、紙入から壹匁八九分もある小半たい銀を出し、「嗅州酒取つて來て下され、彼方へも進ぜたし、身どもも飲みたい。」といへば、「さてさて是れは現銀に堅いお人様ぢや、酒の取つたらござります。」と、戸棚から備前焼の大徳利出し、いろりへうつし、「おりんどの燗して下されこ」と頼み、佛壇の下より、蒲鉾と串鮑のぶどうに切りし肴を出し、兩隣を憚り聲低にあひのおさへのと、嗅安りに飲み出す。客は相手の女に、一つ過させる合點にて、つよく強ふるも下心をかし。さて密話き酒盃の濟むと、嗅が飛び附いて二階の階子を下し、手行燈に火を點して女に渡せば、手許にある○○○○懐中へ折り込み、勝手知り顔に先へ上り、「是れは天、天井がつかふるわ。」と、呑臍の○○○○○、河内縞○○○○○○○○○○○○○○氣錬し「扨○○○○○御縁もございらば重ねて。」○○○○○挨拶して男は先へ歸りぬ。女は跡を取り置きて下へ降り、「嗅様もはや溫飩屋は寐ませうかな、まだ寢まいなら鄰の岩松なりと雇うて、左分慳貪二つ取りにやつて下され。」と其の夜の花代ほどは食うて仕舞ひ、呑うで夜更かし、内方へ立歸りの約束忘れてつい寐て退かし、主の手前の不首尾どうして繕ふ事ぞと思へば、髮解き亂し、三尺手拭で鉢卷し、大夜著かついて戸棚の前に寐てゐる所へ、内方より長四郎が來て、「おりんどのは一寸いて來ると奥様へ申し上げて、昨夜から今に歸られませぬ。それゆゑなかなか御機嫌惡うて呼びに參りました。」と、嗅に逢うて苦々

夫婦肝煎る男も勝手へ外し、あとは娘と大臣、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇、それとは知りながら女にあうて、いづれか目の見える男はなし。大方は面屋を渡せし親仁寺參りの私銀の殘りにて慰み、又養子に來たる若息子、萬氣兼して橋越えて東へゆく事も心に任せず、謠稽古を出しにつかうて、早業を第一に忍び行くなど、世間恐れぬ人の便るべき所にあらず。今いふも古けれど、とかく銀さへあれば何時何樣な事もなる都ぞかし。お吟かかる淫婦と一所にありながら、なか〳〵其れには染まず、只御奉公を大事にこそ勤めける程に、旦那も奥も一入氣に入り、內藏の出し入れまでおほせつけられ、萬事に心をゆるされける時、此の家の重寶日蓮の曼陀羅を藏より盜み出し、著替への入りし葛籠に入れ置き、和甚方へ此の荒ましを文に認め、辻なる駕籠の者を雇ひて藤の森へ遣はせし後にて、奥樣お里へのお使にお吟を遣はされ、留主なるところへくだんの駕籠舁、和甚返事を取り歸り、「お吟殿に先程の御返事でござります、此の屆け賃が八分參るとおつしやつて下され。」と、表に文を置いて歸れば、手代ども此の文を取つて、「さて〳〵憎い奴かな、我々假初に手を取りても聲を立てて、其のかたいこと石邊のおぎんといひし戀知らずの女と思ひしに、扨は言ひ交せし男ありて、人知れず文の取り遣り、憎さも憎し、明けて見て何れも寄つてなぶるまいか。」と、無分別なる若い者ども封じ目切りて開き見れば、思ひの外なる惡事、曼陀羅を盜み置きしを今日の暮

方に洗濯物と詐り、外より取りに来る手筈の返事、いづれも横手をうつて、「是れは聞き捨てにならぬ事。」と旦那へすぐに申し上げ、吟が葛籠をあけて見れば、小袖の下に一軸、「有り難し勿体なし。」と先づ蔵に納め申し、吟が帰るを待つ所へ、何心なく長文箱持つて奥様の御居間へ参る所を、手代ども兩方よりつかまへ、「晝がんだうの女盗人、よくも／＼曼陀羅様を盗みしな、己一人が智恵ではあらじ、素直に白状致せ。」と、雪より白き細き腕を捻ぢ上げ／＼詮議する半ばへ、時分よしと和甚に表より小腰を屈め、「お腰元の吟におはうと、慮外ながら御しやつて下されい。」といふ所を、下男ども二三人、そりやこそ同類がうせたわ。」と何がなしに叩き伏せ、お吟諸共所の目代殿へ連れて行くとひしめけば、和甚申すは、「人の寶を奪ふからは一命を棄てた夫婦ともに覺悟しての仕業、全く命惜しさに謂解するにあらず。一通りお聞き届けられ、我々夫婦相果てたる後にて、此の首尾を御不承ながら通してたもひたき方あり、此の度の盗みは貧より起つて身の為に盗みせしにもあらず。元来私儀は中京に、隠れなき丸持長入が婿和甚と申すもの、悪所狂ひに身代を持ち損ひ、借銀の方へことわりの品なく、世間へは自害せし分にして藤の森に身を隠せし後にて、旦手代喚兵衛と申すもの、是れなる女をたばかりて、傾城町へ賣つて勤め女となせし所に、[illegible]と申す者、[illegible]とは存ぜず、露命も消ゆるばかりに思ひこみ、即ち此方の曼陀羅を申し請くる代金を[illegible]此の度に打ち入れ、身

情けをなせし科によつて親四郎右衛門勘當を致し、たゞすむ方なく女をつれて、其れとは知らず私隱れ家へ尋ね來り、對顏の上婦妻といふ事を知つて、私へ合力分とて、金子七百兩書付を以て與へし事、此の金子にて女どもを請けかへして永く添へとの深切なる心ざし、夫婦心底に徹し淺からず存じ、もと四五平勘當せられし發りは、親四郎右衛門申し付けの曼陀羅金、此の女に打ち込みしゆゑなれば、何卒此の恩謝に曼陀羅を盗み出し、四五平に與へ親の勘當を免させたく存じ、夫婦内談致し此のお家へ腰元奉公に出せしなり。不運にして存じ立ち無となつて相果て申す所は、前生よりの宿業、更にそれを悔むにはあらねど、我なくなりては四五平一生勘氣の身となり果てむ事殘念の至りなり、よく／＼是れも定まる業、たゞお慈悲には亡骸を見苦しからぬやうに取りおかせられ、此の心底を藤の森に殘り止まる四五平に仰せ聞けられ下されなば、生々の御恩。」と涙瀧をなして語れば、主横手をうつて「扨は聞き及びし和甚殿にておはするか、貴殿の伯父御難波の長島屋の何某、近き頃相果てられ、家をつがるべき子なく、和甚今まで存生へあらば後目に立て、長島屋の家相續さすべきものと、頃日中村屋の四郎右衛門上京にての噂なり、未だ歸宅は致されまじ、存命のよし申し遣はし、是れへ呼び寄せ逢はせ申さん。」と、樵木町の借座敷へ早速人を遣はしたまへば、四郎右衛門夢の心地して走り來られ、和甚に逢ひて悦び涙、まことに親は泣き寄りとはこんな事なるべし。「此の世にあるこそ

幸ひ、父方の叔父の後、汝ならでしるものなし」と大方ならぬ悦び、和甚も邯鄲の夢見たやうな仕あはせ、此の上は千萬兩の金も自由の身なれば、最前の通り千兩にて曼陀羅申し請けたき願ひ、叔父長島屋は淨土宗にて「法華の曼陀羅何にする」と、四郎右衛門尋ねられしに右の様子を語り、四五平の勘氣を訴訟を申せば、「近頃優しき心底、曼陀羅に及ぶべきか、なるほど勘氣免したる」と、是れも藤の森へ人橋懸けて招き寄せ、これ偏に日蓮大菩薩のお蔭と、内證を引とり恩還を盡しぬ。かくて和甚はいにしへの、貧せば人も遁し、あげて過ぎた分散の[illegible]、[illegible]とし、今は世界廣くなりて土藏舊渡に立ち返り、今を春べと榮ゆる時にあふぞめでたき。

風流曲三味線一之卷　終

# 風流曲三味線二之卷目錄

風流曲三味線二之巻目錄

少しはさばけ、氣のつかぬ所ぞかし。長遊びする客にふしよう顔も見せず、追ひ出し茶も立てかけず手のよい仕掛けを見ならへば、いつとても興つきず、次第によい大臣つどひあつまり、おのづからやすい客は手おぢして、上八軒こつほり町、扨は八坂塔の前清水坂にのぼりつめたる大臣、大方は諸職人の弟子ども、節供、正月、御影供、祭、物日の休みに、櫃臭き布子を著し至り大臣の仕出しを見ならひ、西陣織の木綿の小倉羽織の、胸紐しめたは究屈さうに見えてをかし。懷中には半紙一折見せかけ、蕎麥切色の下帯に、濃いかうじの革足袋、拵へともに十匁許りの脇指、生なひの雪踏をならし、おなじ心の友をさそひ、けふ一日に千歳の命をのぶる心地して、夕食過ぎより宿を立ち出で、ゆきつもどりつ五七度もぞめき、今の三河屋に我を見て笑ひかけた山州、いかにしてもかはゆらしい所あれば、そこにせうと戻るを引き止め、「いや／＼我等は庚申堂前の振りそがゑしやく憎からず、どうでも爰にと、品定め取り／＼にて、塔の前に立ちつくし、「かりそめながら一人前に、二匁五分の仕事、心に染まぬ所は一生のつひえ。」と、此の詮議はてぬを、年かさなる男料簡して、「兎角は女の多き所にせい。」と、二三人あるよねに客五人、今二人手あひ足らねど、思ふやうに揃ひし方はなくて、どか／＼と奥へ通り、座に著くと早○○の鬮取りさうがはしく、酒より先に鱆蒲鉾を喰うてしまひ、鹽貝の水に鬢櫛ひたし、髮なでつけて俄に男つくるも腹がいたし。二瀬は紺の布子にあかまへだれ、胸あけて左

の手に臺盞、右の手に燗鍋もつて出で、まづ飲んで、「若い男に上けませう。」と差せば、「人多い中にお心ざし忝い。」といたゞけば、車えびの大ぶりに切つたるをはさむを、口の中へはふりこみ、又其の杯もとの所へきつともどし、紙入出すを、二瀬は我にはすむかとかたづを飲んで悦べば、連れは我を折り、「是れは五郎助、見事に打つか。」といへば、「打つとも〳〵、かまへて此の海老くやるな、餘りうつて胸が惡さに藥のむ。」と和中散取りまはせば、二瀬は聞きかね、「南風が吹く時は肴が臭いもの。」と笑ひ、扨大かた一杯ならし廻る時、此の家の太夫と見えて、しゝら縞著たる山州、しつと〳〵と足音なして牀脇になほり、ふところより下著の褄をおし出し、おとがひを隱し、少し譯らしき顏して雲上にかまへ、白眼がちに客を見なし、折から小溝に鳴く蛙の聲に氣をつけ、「かはいらしい鳴きぶり、昔から小唄にもようはいうたぞ。あの聲きけば、ありし昔の郭住居が思ひ出さるゝ。」とほのめかす。「近頃胸の惡いせんさく、よしや以前は太夫にもせよ、此の身になりくだるからは、いふ程おのれが恥なるを、せんしやうと心得て、我こそ上馬おろしの顏する女、恥しらずといふもの。」と、此の類の惡よねに逢うた人の笑へり。扨一見の客に極つて言葉のはじめが、二瀬をあひ手に、「何と吉、あなたは姉が小路の仁助さまによう似たでないか。」といへば、「されば目元のしをらしい所が其の儘。」と詞をあはす。かの客我になづんだかと心嬉しく、それよりはたしなみて喰ひたきの肴もあらさず、少し思は

れたい氣色を見て、色州きやつが傍に居なほり、背中二ツ三ツ叩いて、「どうした事の縁ぢややら。」と二なつましき小唄をうたひかゝれば、一座同音に手をうち枕を叩いて、「どうせ女房にや持ちやさんすまい、いらぬものぢやとおもへども。」と是れよりわめき出して、なんの張りあひもなく、すは〳〵酒をのむ時、焼きもろこの吸物、十串が八文が物なれど、是れさへ直打を知らぬ客ども小聲にて、「爰は至つた茶屋ぢやぞや、吸物まで出して。」と悦ぶ。次の間には早一座しまうてきて、こゝが二座目と見えこよいきけんの聲して、「ゐるが顔見て一杯のむといぬるが、顔を出さぬか、海月許りで酒のみにやこぬ。」とわめくを、嚊が出て、「奥のお客は追付立たしやります、一向ひろい所でおゐるとあがりませ。」と、調子のあはぬ三味線引きかけ、奥の客をいなせたき心から、ヤレたゝき出さるゝなと無遠慮にうたふ所へ、また一連れに二三人茶釜の際に腰かけるを、これも取り逃さぬやうに、三味線引きさいて飛んで出で、「これはじさま八さまお久しや。」と笑ひかゝれば、「花車是れはきつい御繁昌でござる。」といへば、「あれは苦しからぬお客、さあ〳〵まづ少しおあがりあそばせ、それ中二階へ火をともしや。」にといふ時、山もどいと見えて七八人鳴りこみ、庭に立ちながら、茶の、煙草の、煙管がへらぬのと、芝居の果て口ほど騒がしきを、是れをも物にせんと料理する男罷り出で、「ちとおあがりなされませ、お供の衆提灯の火を消さしやれ。」と仕こなせば、飲みたいほど茶を飲んで、門の戸近き男がよい間を

見合はしひとりはづせば、次の男眞顔になつて、「南無三五郎兵衛が先へいんでは内の首尾がわるい。」と續いて逃げれば、殘りの者ども、「甚兵衛をいなしては物がないわ、やれ甚兵衛々々。」と追ひかけるふりして皆はづしぬ。此の臺所のいそがしきを奥の客は構はず、飲み食ひの半ばなるに二瀬が心得顔して、片隅に○○引き廻し、さし○○ッなほし、「どなたからなりと、おやすみなされませ。」といへば、鬮取りに勝ちたる男鬢掻き撫でて○に入れば、女は古き衣裳に○○○○、○○○○○○すて、まだ○の○にはぬるゝが袖、と口早に歌ひ、○○○○○○○、此の客小歌に氣をつけ、「また○○とは、はや○○○○○○○○おちやつたか、○○○○に何とも迷惑。」といふ時、二番湯は寺でござんす。此の勤めする身がひとりばかりまぶつて居るものでござんすか、しれてある事いはんしよよりや、○○○○○○○○、さてもうたてや、○○○○○○○、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○に、天井の○○○○○で外なる事に心をなしてしまひ、手水つかふと追ひ出し茶を汲みて、とれともいはぬ一杯の香を引いてこれ、其の後に振袖たち著たる小女童一人出しおきて、色らしいものはのぞきもせず、俄に寂しうなつておのづから立たねばならぬ仕掛、銘々一包の金を年かさなる男に渡せば、一つに包み皆々先へ出して、跡にひとりが殘つて、銀やつて出るは、慥に高で二匁ばかり、すくない茶代と知られて可笑しく、是れなれない事知らぬ身からは樂しみ深し、主の大臣の

眼から茶屋遊びの忙しさ、風下の遊興と笑はるれど、こゝに浮かれ來る客大方は○事を專にして、いさゝくも、座ぶりも、酒あひもかまはぬ血氣盛んの人手代、さては出家の○○○○のすてどころ、庚申、甲子、地震、大風の日を除くといふは妻女妾のある人の事、ひとり寐るものの身にしては、大事の精進日もかまはぬ筈なり。されば昔皇帝に素女といふ助州の教へて、庚申甲子に交はりを戒めしより、今に傳へて庚申の夜交はり、其の夜やどりし子は、成人して盜人になるといひ傳へしは、猿猴になぞらへ、手の長いといふ緣によりて、盜人に生まるゝとは申し傳ふれど、更々さうではなし。先づ庚申の夜にとまりし子、男子なれば、慾の深き太鼓と生まれ、女なれば風呂屋者になれり。これ申の日に生まるゝゆゑ、むしやうに搔き付きたがる太鼓持となり、又風呂屋のさるほどによいかげんなる料簡。甲子にとまりし子女子なれば、清水坂稻荷前の遊女となりて、人を見かけて鼠鳴きをいたすか、さなくば寺方に御內儀さまになつて大黑と呼ばれぬ。そも〳〵出家の女房を大黑といへるいはれは、運慶のさくの大黑に槌をふりあげ萬の寶を打ち出さるゝ尊像あり。其のふりあげたまふ槌右の御目の際まであがりて、正面よりをがめば右の御目隠れて拜まれさせたまはぬゆゑ、是れを目かくしの大黑といへり。それより寺方の內儀たちを、妻がくしの大黑と申しぬ。是れ本說なりとさる寺の和尙高座の上にて述べられたり。誠に人には木の端のやうに思はるゝと、淸少納言が書けるよしなれど、

世間僧打ち寄りて、碁もふるいとて讀み歌留多、扨は色咄しうまいせんさく、精進も落鮎のしのび料理、大酒の上の詞とがめ、付屆こしらへて芝居奴の物まね、餘念のない所が極樂々々とぞ暮しぬ。爰に清水近き音羽橋の本に峯右衛門とて逸男の浪人ありしが、器量のよきに合はしては濡れに疎く物堅き仕出し、中國に備前岡山のものにて、七年以前に親元峯を藤浦武太夫といふものに討たせ、主人にお暇申し受け、六ヶ年このかた西國殘らずつけねらへども、敵の住所知れ難く、過ぎし春より都にのぼり、借宅して、召しつれし譜代の下人に鹽肴賣らせ、其の身は毎日人立ちの所を心がけ見まはりけるが、いづくにも借屋する身の習ひ、宗旨請狀なくてはならず、代々禪宗なれども、西の京に知邊の淨土寺あるを、幸ひに頼み旦那となりて、表向きは改宗して、隙なる日は大かた此の寺に行きてかたり慰む。いつもまた彼の寺に來れば、幸ひ和尚も隙日とて客殿へ招かれ、四方山の咄半ばに、和尚の學文所とて、一間隔てゝ奥ふかき所より、十六七の娘花の盛りをいたづらに振袖留めて、まるふん目に立たぬやうにすれど、生まれついての美形、是れはと取りのぼつて、峯右衛門うつゝをぬかし、咄もそこ〳〵になりしが、さて和尚の大黒ならめと心を鎭め、是れに氣のつくふりをするも、和尚に恥辱をあたふる道理、とても凡人なれば、出家とても此の道はやめがたきはずと料簡して、わざと見ぬふりして、道行き長う、なんのおもしろからぬ咄をたゝみかけて、此のしゆびをくろめてやれば、和尚

引き取り、御不便の加へられたまはれかし。生まれ付きも鈍からず、間在る時に學を盡し、心ざしもあしからず。其の身病者にもなく、針手も利くかして新發意等が白小袖もよく仕立てて、朝も疾く起き、夜も睡らず、人事いはず、大食せず、女房にしてすんど持ち徳な女でござる」と和尚のはや仲人口もをかしく、今すこし磨かさせたら○もよいとかいはれむ。とてもの事に○○○聞きたし。案右衞門しばらく思案せしが、國元にてつひに見なれぬ美女に心ときめき、遠きおもんぱかりもなく、近き憂へ事は今宵もしれぬ我が一命、もしかへり討ちにうたれなば、よしや後とぶらはれなば、爲にもならんかしと、獨居の寢覺め寂しきまゝに、「是れはかたじけない心底、世に不自由なる寡人に御身をまかさるべきとの事、かへすぐ\祝著に存ずる。然らば和尚樣、さつそくながら契の杯を仕りたい」と申す「成程々々、愚僧とてものがれぬ身、それ銚子に、杯よ。」と婚禮のことぶき、釋迦以來寺にてはない圖と納所坊主の飛びあがり、式法知つた顔に、「鴫の羽盛が定まつて祝言には入る事」蝶花形はいつも盛物する菓子屋に申し付けよ。」と、臺所は萬日の回向よりは賑ひ、待女郎には墓守が嚊、出入の男ども、門番の花賣るおやぢまで、念佛講仲間の無紋の淺葱上下取出し著して、よし足袋はいて罷り出で取り持ち顔もをかし。新發意智慧を出して、靈供の膳の上に蠟燭立ての鶴龜をのせ、松の眞に竹をくゝりつけて島臺の心持、錫の水呑茶椀を銀の土器になぞらへ、燒麩、たゝき牛房、椎茸のに

見こえてこそ多くのいひ入れを耳にもかけず、一筋におぬしさまを思ひ入れし仔細は、私には母の敵あり。京近き所に其の者居るを知りながら、女の身のかなしさは無念の月日を送りぬ。此の度かくぬしさまとかたらひをなしけるも、御心底を見定め、討つてもらはんと思ひ入れし我が目利たがはず、流石は名あるお侍の果てほどありて、不断のお身持假にも刀をはなしたまはず、馴れ申す程心の剛なる所あらはれ、頼もしいやら嬉しいやら本望とげぬ前から、はや敵は手の下におさへし心地して、手の舞ひ足の踏む所を知らず、是れ程嬉しき事はなし。近頃わりなき事ながら、かう夫婦になるからはお前の爲にも姑御、はや〳〵討つて母に手向けてたまはるべし。母殺されたまひける様子は皆我ゆゑにて侍るなり。御寺へ參る道心者にて西心坊とて惡僧ありしが、城兵衛と申す町人の手代の引籠み我を見染めてほしきよし、かの惡僧を仲立ちにて度々申し入れけれども、母人聞き入れ給はず、其の恨みとてみづから去る方へ奉公の御目見えせし留守の間に、城兵衛西心つれだち来り、母をしめ殺して歸りぬ。聞けば只今は京を立ち退き、大津の町はづれに隠れ居るよし、首尾よく討つて給はれ」と涙を流し語れば、峯右衛門ぎよつとして返答もせざりしが、暫くあつていへるは、「誠に他人だに頼むとあらば、侍の引くべき所にはあらねど、勝負は時の運にして、利の劒ながら又返り討ちにあふまじきものにあらず、然れば我事第一命を捨つる事が嫌ひなり。何が扨夫婦の事、如在にはあらねど、

右衛門睨みつけ、「これはうの癖として頼まぬ事に指出口たたく奴、我が身の上の仔細を女にあかすことにおのれに教へられんや。もと其の女、堺の町人の娘と聞えて和尚よりもらひぬれども、出所たしかに見ぬ上は、此方年來の心當ての所縁やらも知れず、さるによつて武士の畜生といはれども、此方の眞をあかさず、遠慮しする所へ出でて、よしない譫言だまりをれ。」と叱れば、愚かなる心に徹し、「御尤も。」と畏まりしが、此の分にてはお内儀樣、今はや家出をなさるれば、とやせんかくやとうろたへしが、爰は一生の大事の所、日頃は愚かなりとも今宵許りは智慧授けてたまはれ、南無文殊智慧菩薩といそがしき中に祈念せし其の奇特にや、一代にない思案、「先づ以て旦那はやうすあつて大事の御身、末々では知れる事、拙者が露命も似合ひに心當ては致しおきぬれど、どちらもお主のお役に立つ事、智慧こそなけれ、肝の太い事むかしの武藏坊にもおそらくはまけぬ氣、其の町人の手代づれや芋ほり坊主の、五人や七人せしむる分は茶椀酒をひつかけるより、心やすいせんさく、鐵の楯をついたと思召して、拙者めをいづくへなりとも、お供につれらるべし。速かに本望とげて參らすべし。」といさめば、峯右衛門悦び、「さすがは我が家來ほどあり、成程汝は女が供を仕り、首尾よく仕負せ歸るべし。」と豐後國行平の刀一腰とらさるれば、「有り難し。」と、おし戴き、「夜の中に大津へ立ち越え、敵の戸あくる所に押し入つて討ち取るべし、はや御用意。」とすゝむれば、女房更に合點せず、「尤もそちが

よ下そなたにつゝみゐて、早速在家の知れる道を、知らで暮せし後悔さ、いざ此の上はゆきがけの駄賃、心の駒をはやめ、大津の敵を討つて、すぐに江州へ直越え本望を達せんと主従三人心よく、杯して、借宅の氣散じ其の夜に家を明けて、また横雲の引かぬさきに都の内を忍びいで、大津をさして行く雲の、粟田口の茶店にて三人心しづかにしたゝめして、年來の本懐をとげん事の嬉しやと勇みあへり。されば其の頃日の職のつよき燃杭組とて、柴屋町の近所へ、毎夜さわぎ仲間の男風流、闇寺の虎作、坂本の市平、松本の雲助、膳所の鬼丸、閻魔の長右衛門、稻妻の光八などいへるは、日下萬の鳴神も取つておさへて、懐中するほどの力自慢、姥が懐へ賭六の夜道、たとへば娘の丸燒、勢田の橋の蛇の汁、三上山の百足の指身、くうた同士の強藏、世に恐ろしき物は質屋と骨桶より外はなし、これ皆情死の覺悟ならねばならぬ。たゞ遊興は外になして人を打擲し、是れを慰みとなして所の迷惑度々なれど、人皆恐れて楯つく者なく、世を我が儘に暮しぬ。此の仲間のならひ善人を嫌ひ、すあぶれ惡で身をかため、親類に見かぎられ、勘氣を得て行き所のない野郎ども、又は人をあやめ身のたゝずみなりがたく、請人なしに此の組へ入りぬれば、日々に惡人多く集まり、城兵衛西心も溢れ者の組下に屬し、無用の武藝をたしなみ、軟取手の稽古の爲、闇の夜のちまたに出で、往來の人をなやましけるが、後は慾心おこり、男伊達を名題にして衣類を剝ぎとり、それを代なし、すぐに所の色町へ持

お所。」と反をうてぞ、峯右衛門騒がず、「さりとはかゝりがましきものども、一錢にても取りやりをするからは、博奕業ではないか。」といふ。「何、かゝりがましいとは、侍長なる侍、やれ踏め、たゝけ。」と、何がな事にしてつかみたがる諸人ども、白茅の穂の如くぬいてかゝれば、峯右衛門夫婦心得、同じくぬいてわたしあひ、矢庭に四五人きりたふせば、胴取の男編笠ぬぎすて、悦んでかゝるを、峯右衛門女房一目見るより、「あれこそ母樣を殺せし城兵衛、是れぞ天の與へ。」と悦び、「見忘れたるか、我こそ西の京に裏住居せし時といふ女、母人をころせしむくい早くもめぐり來て、今我々が手にかゝる事の嬉しや。」と、勇みにいさみて打つてかゝれば、相どりの中より頬髭ありし男手拭取つて、「我西心がかはれる姿、此の頃女に事を缺き、寢覺寂しき折から、思入れの女招かするに來る事、縁は朽ちてす、京で見しよりさりとは女房仕上げたぞ。」と、いそがしい中にもたはれいうて打つてかゝるを、甚八是れにあわと、下人にはかひがひしく走りかゝつて兩膝をなぎ倒し、おぎんに止めをささすれば、此の勢ひに同類どもわりぐ\に逃げ行くを、峯右衛門おつかけ、城兵衛を後より大袈裟に切りさげ、「先づ一方の敵は討つたり、かかるよい勢ひに片時も早く近江に立ち越え、父の敵武太夫をも此の如く打ちとり、名を後代に殘さん。」と夫婦悦び、其の夜は八町のはたごやに一宿して疲勢をはらし、明くれば近江に下りぬ。

知つた道とて推量の療治して、都は上手の多き所を退きて、江州北村といふ里外れに、藁屋を借りて住ひの柴垣のひまはし、大海武人と名苗字を筆太に、張札柱にあらはし、近郷に急病あれかし、一手柄して見せんと明暮時節を待つ所へ、表へ女乘物を舁きすゑ、若黨らしき男、内へ入りて案内をとふ。下人の百姓體の出で、「どなたからぞ」と申せば、「我は眞野の長五左衛門家來なるが、大海武人老御宿にかと尋ぬれば、「成程内に居られます、まづそれにお待ち遊ばされ」と、内に入つてかくといへば、武人立ち出で、對面して樣子を聞くに、「拙者主人の息女當年十四才になられますが、當春よりふと癇氣になられ、色々療治致さるれども更に其の驗なく、兩親なげき大かたならず、然るに貴方御事名聲の療治なさるゝよし主人聞き及ばれ、即ち息女をさしこさるゝの間、御賢覽の上にて御藥下されなば、別けて忝かるべし。」と、仔細を申せば、武人樣子を具に聞いて、「まづ御息女の御樣體をうかゞひ、其の上にて存じ寄りもこれあらば、御藥を進ずべし。」と、勿體らしく申せば、「近頃有りがたき仕合、それ／＼、お乘物を。」と申せば、靜かに奥へかき入れ戸をおしあくれば、十四五たる美女、肌に白小袖、なかに緋むく、上は淺葱鹿子の兩めん、鼠繻子の帯をつい引きまはし結びもせず、髪はさばきながら中程より下を引裂紙にて結び、この美しさ皆いふまでもなし。都に名高き藝子瀬川竹之丞といへる美君に、今すこし愛の増したる生まれつき、人を恥ぢらふけしきもなく、武人が側へひた／＼とよ

内は、無分別に家出をし、武士奉公を望み、一度武州に下りぬれども、思ふやうなる口もなくて、故郷忘じがたく又都にかへりしが、京の家に人増ありて、萬事是れが支配するよし、今は跡へも先へもゆかれぬ首尾、中にぶらりと只年人になりて、草津の宿に家をしつらひ、奉公構済むまで何とも世の暮しなりがたく、笹の葉にて作る竹細工、さては耳掻、楊枝など當にあてるほどのたよりにほそりて、今日を送りかねて、はや四五日も煙絶え／＼の折ふし、いづくも賣はなくて、近所の煙草やの亭主より見かね、伽羅の油、花の露など、京より下る小間物屋に請け合うて取りよせ、僅かの店を出させ、其の身は編笠被りて效なき商を繋ぎしに、ある日十五六の若衆下人あまた召し連れて通られしが、我が門に寄られ、「さりとは花車な商物。」と、しばらく見入らさせ給ふ風情、小性衆多き江戸にても、かかる花少人つひに見たこともない御生まれ付き、風俗の端手なる所、其のまゝ小野川宇源次が姿ぶりに似て、いさぎよく、御物ごし魂にこたへて一かたならぬ戀の淵、深く思ひこみ、うかうかと○○○○○○○○、夜の小人の僕、きやらの油を調へに来るを、渡りに舟便りを得て、一命を抛つて頼みかくれば、此の僕心知りにて、「それていの思ひならば了簡るべし。」といふに嬉しく、お名を問へば、野々川小吉殿と申して、御居所は是れより北の里離れに、門構へなる大屋に野々川忠連齋と申して、武家より讓らせ給ふ御隱居あり、其の御寵には御養子にて、此の頃御見舞ひに上らせ

たゞ此の二ヶ月あまり對面なき戀しさのみ胸にせまり、幾度由三を見舞はすれどもつき戻し、いま一度あうて思ひを晴れたくとばかりいひしに、さては道立てたる男、我が今の容を見たまはば、年頃の執心もさむべし。されどもそれ程に思ひしめられなば逢ふべし。今宵九ツの鐘なる時分裏門まで御越し、首尾を見て密かに對面あるべき。」と旨嬉しく、其の日の暮れるを待つて四ツの鐘撞く頃うら門に佇めば、我より先に惣髪の男裏門に何やら張り付ける體合點ゆかず、月影にすかし見れば、少人の形を盡さ、面體に處々紅をさして、口の中にて侵ち/\と文をとなふる。是れ曲ものと後より取つたといふて引き倒し、其のまゝ上にのつかゝれば、かのものの聲をふるはし、「私は何も存ぜず、人に頼まれかゝの仕あはせ。」と申す。「然らば樣子をまつすぐに白狀いたせ、さなくば只今手にかけん。」と、喉元をくつろげせめければ、「命だにゆるされなば、始終を具に申すべし、まづこゝをゆるめてたべ。」といへば、少しくつろげ、「さあ仔細をありやうに申せ。」と怒る勢ひに恐れ、ふるひ聲にて申すは、「某は大海武人と申す藪薬師なるが、このお屋敷の御一家に、眞野の良五左衛門殿と申す人のひとり姫あらんどのと申す御方、小源次殿に執心をかけられ、さま〴〵文してくどかるれど男色の嗜み深く、曾て承引きたまはねば、思ひ積りて亂氣せられしを、拙者は療治いたし、ふたゝび本性に仕立てなば、過分の御褒美下さるべきよし、幸ひ我等が家傳に、十年二十年過ぎ行きても疱瘡の裏を打つ呪ひあり、然

中々死なれさうなものでなし、たゞ喰は哀か悲しく、むかし召つかひし下女が情にて、内方さまとあがめて、不斷に出入り申す旦那方殿に見世をまかする手代を尋ねられしに、後々は宜しき事とて、下女が夫頼もしくも肝煎り、始めて奉公の身とはなりけれど、人たるもの、育ちいやしからず、心ざしやさしく、萬の藝に達し、いかなる人の氣にも入るべき風俗、さすがむかしの風殘りて女の好ける男ぶり、お物師中居腰元まで戀を仕掛け、思ひを筆に運ばせけれど、我高橋とそも〳〵より申しかはし、年明き次第に夫婦になるを樂しみにこそ、今人手代ともなりて、昔をしれる人にも顔まぶられて一日も暮せ、是れさへなくば飢ゑ死ぬるとも、おなじ町人なれど旦那に持つ我にあらずと、折角人やとひして書いてもらひし、腰元中居が文どもを封じめもとかず、からげて縁の下へなげ込み、中々笑顔も見せざりしに、賴まぬにお物師は綻びに氣をつけて、針手の用を聞きたがり、中居はつきも構もない茶を見世に運び、煙草の火のある上に入れにゆくなど、飯燒き女はそれ〳〵に飯じやくし片手に、鹽鯖のせんば煮盛る時、骨がしらを選りて藤内へは身所を參らする心遣ひ、さりとは嬉し悲しく、後は奉公も外になりて、帳付けるより諸分の返事に隙なかりき。爰に旦那嘉左衛門姉におかねとて、金子吉左衛門が女形の所體よりはふつゝかにして、三十二所共にどこに一ッ取得のない生まれつき、もとより身上よければ二親存生の時分、千兩の敷金に中立賣の家を附けて緣につけんと、京中仲人嗅を

いふやゝきたふし、「えゝよいかげんな事ばかり、浮氣女と思召してなぶりたまふは御きりやうに似あはず」と、中戸の暖簾上げてはひらんとする袖に取りつき、「日本の神八幡じやうした事の縁ぢややら、あのぶきりやうな所に打ち込み、忘るゝ隙もなう〳〵と思ひくらす」といへば、「眞實それが定なれば、あなた樣に大分價をおかきなさるゝ事、今いうて今埒のあく戀、かなうてから否とはいはでまいぞや」と口をかため、姉御にゑんりよもなう早速申せば、人の泣くよりは見苦しい笑ひ顔して、「それはうれしき心ざし、年こそ長けたれまだ手いらずぢや」といはいで、その思ひのさめぬ内に、今宵夜半過ぎて忍び來れ」といひやり、假に鏡にむかうて、色つくらるゝもをかし。其の夜も更けて家内寢靜まり、今ぞよき時分〇〇〇〇〇〇、姉御は〇〇〇〇〇〇〇、三千歳になるてふ桃の今年四十八になりてはじめて、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、神代以來ない闘なり。是れより藤内を秘藏せられ、〇〇〇〇〇になりみたまひし昔もかくやありけむ、萬の戸棚の鍵をあづけられ、金銀自由の身となりしかば、今此の時久々不首尾になりし太夫をおし出して揚屋へよび、つもりし憂きを語らんと男つくりて色町へ行きしに、なじみの高橋は思はぬ方へ身うけせられて、今行くと女郎侍者に暇乞ひして、釣物へのる所へゆきかゝり、一段の御事と悦ぶ内にも藤内少しせき心になりて、「かね〴〵申しかはせし事もあるに、せめて此のわけ夢ほど知らせたまひても、人の知らぬ事」と怨みければ、

取りし、お笑ひなさるゝ時、目許に鹽がこぼれかゝれば、大黒には打つてつけた君さま」と、出口の茶屋と親方内證にてうなづきあひ、水藥師の近くに表長屋作りに、裏に綺麗なる小座敷かねての引き込み所、爰に内佛にして二六時中おかさま勤められしを、幸ひの所と太夫ひそかに三本木の母の方へ知らせ、何とぞ親の元へ戻りたきよし内通しければ、元よりこんな事に悪智慧のはしる母親、近所に物にかゝりの徳助とて、習ひのない素人虎落を賴み、何とぞ娘の歸るやうにと、今居る所の先さまに様子くはしく語れば、徳助次第をとくと聞きすまし、仙臺紙子に華羽織着て、朱鞘の大脇指、鼻の下に作り髭して、ぶゐぶんねだりくさう顔にこしらへ、くだんの所へ案内なしにつゝと入つて、お坊に對面し、「是れなる女は拙者が妹なるが、寺への縁組とは約束致さず、これ肝煎りし者共あるべし、其奴ら引きずり出して、急度此の恨みを申すべし。其の時分は御苦勞ながら長老様にもお出で下され、先づ此の埒の明くまでは此の女拙者方へ預り申す。」と引き立てかへれば、法師の身の是非なさは、いひ立つて廣うなるほど其の身の不行儀世間へ知れるを悲しく、萬事是れはねだり事と思ひながらも爲方なく、「大分の金を出せし女、たゞ連れ歸るはむごいせんさく、この思入れ外へは行くまじ、さるにても〇〇〇誰を相手にせうぞ、やれ。」と、衣の袖を顔にあて、足摺りしてなかれし有樣、俊寛もはだしそかし。太夫は母の元へ歸るといなや、藤内の所へかくと知らせば、後は夢見た樣な仕あはせと

金銀しこため、外に女をこしらへおき、今よきしほと引くかてん、さうはさせまじ、始めから見にくい我に執心といふからは、金銀の望みとはや其の時から推量して、萬の鍵を汝まかせにさせし事、然とはいひながらおれがやうなものを、ようも○○○○○○こおやと思ひ、其の替りに金銀自由にさせしなり。せひ隙がほしくば、奉公に來りし年より今日までの惣勘定をいたせ、一文でも不足あらば請人へ預け、急度のきたあさするぞ、さなくば首を押へてなりとも己が○にせねばおかぬ」と、眼玉をむきつくりかへし、怒り罵る有様いかな薩もおちぬべし。藤内是れにこまり、何とも返事致しかねしを、傍輩の手代ども、常々あねごにお氣に入り顏に新参の體で高ぶりし憎しみに、とかくは今日勘定せられと旦那へもあしざまに申し込み、此の時京の手代六人申し合はせて、拾兩二十兩乃至二貫匁まで貫匁はつして皆藤内が引き込みにいひたて、惣勘定不足高二十四貫匁餘に上れば、主人腹にすゑかね「姉御をたらし、大分の金銀を引き込む事不屆の至り」と請人へ預けられ、この不足銀たゝぬに於ては、請人共に命も取るべき程の腹立、町衆に不祥な袴きせまして、色々詫びてもらへどもいかな〳〵、耳にも聞き入れず、「とかく金銀づくばかりにあらず、主人をなぶる横道もの」と、姉御の祟り第一にて請人四郎三難儀のあまりに女房を打擲し、「おのやうなならずものを、むかし私が奉公せし御主様ぢや、今おちめなればこそ、わしらがやうなものを人がましう思しめしてお頼みなさるゝ、おいとし

したせど、いづれ其の身にならば死にもしさうなものなり。兎角色の道もよいかげんがよしと、物に懲りたる人の金言、さもあるべし。

## 第五　心中に浮名いながれ川

### きのふは大臣けふは請人やくかい男

常に聞き馴れし烏啼きの分けて氣にかゝるは、藤谷方に何事か出で來しぞ、さりとは心もとなやと思ふ折ふし、此の文見ると其の儘あるにもあられず、高橋は母には近所へと申して走り來り、内に入つて何かなしに藤内に抱きつきて歎きしが、あるじを憚り、流石それとは言ひがたくて、藤内殿の姪と僞り、四郎三にも一禮申せば、ていしゆ眉間に皺をよせ、そなた姪子なら我がいふ一通りを聞いてくだされ、さいぜんからあの和郎の樣子を見れば、刃物とりまはさるゝ體、自害でもする氣と見えたり。さりとはあの人畜生にも劣りし心底。むかしは京に名を知られし人と、女共がいへどさうではあるまじ。我々夫婦が慾でも立つ事か、女房どもがいにしへの御上といふよしみにひかれ、賴母子づくで立つた請けで、今難儀するとも義理を知らねば、あの仁の心一つで此の金の濟方知れてあり。今でも旦那殿姉御のいはるゝ通りにしたがひ給へば、金の段ではござらぬ、其の身まで浮かみ上らるゝ事を、むかし浮氣でいひかはせし傾城に義理を立てて、義理で立つた他人にこんな難儀をかけて、揚句

けれども、爰にありては御夫婦の御難儀いよ／＼増すなれば、とかく短氣な心をしづめたまひ、何事も我次第に遊ばせ。」と、夫婦にいとまごひて我が宿に歸り、母に向うて、「はづかしき事ながら、我幼少より色里にすみなれ榮耀に育ちぬれば、此の侘びすまひ物事不自由にして氣のつきる暮し、同じくは今五六年むかしのやう勤めして、何方へもすぐに請けられたき思ひ入れなり。然ればいづくなりとも今一度身を賣り、勤めの女となりたし。」と願へば、「いか樣太夫とも人に用ゐられし身の、今朝夕の煙さへ絶え／＼なる貧窮の住居さぞ苦勞なるべし。其の上いひかはせし人も金銀のため難にあひたまふよしなれば、これとても末頼みなし、唯そなたが望み次第にせられよ。」と、最前頼みし物にかゝりの德助を招き、次第を語れば、幸ひの入口あり、伊勢古市中の地藏といふ所の遊山宿に、世間は娘分といはし、內證は地の客をつとめさする女、是れを所の詞にて、あんにやといへり。「此のつとめ奉公に五年切れば、金子百兩が外に渡す。」といへば、「太夫ののぞみは十年切つて二百兩ほしきよし。」申す。「成程そなたは西で名取の太夫、器量風俗座配まで打ち揃ひぬれば、十年切つては二百兩は慥にとれる。」と申せば、「然らば急にやつて下されい。」と頼む。「さもあらば、今四五日待ちたまへ、中の地藏に申しつかはし、抱への親方を呼びのぼし、早速埒明け参らすべし。」と、詳しく狀に認め、夜通しに申しやれば、親方二見やの口右衛門罷りあがり、太夫を見て、「成程あの女ならば二百兩出すべし。」と、十年切

の手形を書かせ、名を改めておしゆんとかへ、母にも判をつかせ二百兩渡し、明後日つれて下ると手形取つてかへりぬ。おしゆん嬉しく、件の二百兩の内二十兩肝煎德助に渡し、殘る百八十兩の小判を取り持ち四郎三方へ行かんとするを、「母親咎めて其の金何方へ持ち行かるゝ。」と問はれ、「是れは私西に居りし時の借金の方へ濟ましに參ること」といへば「いや／＼さうではあるまじ、藤内殿金銀の出入り事にて、嚴しく請人方へ預けられておはするよし、それへの合力と見えたり。ひとりある母に此の不自由なる住居をさせ、それを安樂に過さんとは思はずして、浮氣男に合力とは近頃きこえぬ仕方、明日をも知らぬ老の身と、やくたいなしの男と見かへらるゝからは、浮世に居るもおもしろからず。つれあひに離れてより、そなた一人を杖にも柱にも賴み、今こそかゝる侘住居するとも、末にはわがおか蔭で世を樂に暮し、寺道場へもたやすく參らんと思ひしに、今其の金を取りはづして、いつの世に樂をやせん、そなたが丈十年といふ年の明くまでの壽命を知らず、とかくにこれまで」と手元に在りし裁刀もつて、自害と見えしに、驚きあわてゝ縋り、「先づ暫く」と止めまゐらせ、「さるにても此の金四郎三殿に渡さねば、二世と契りしたの命危し、又渡しては目前母を殺すといふもの、是れに付たる因果ぞや」と、五體を地になげしばらく嘆きしが、よく／＼思ひ廻らせば、我浮世にさへあらねば、母の怨みもなしとは思へども、我今死しては藤内殿難儀の上の物思ひ、兩方の樣子を語り、諸

共に死して長き來世で添ふより外の思案はあらじと思ひきはめ、金子を殘らず母に渡し、其の身は伊勢へ下る暇乞のためにとて立ち出で、藤内方へ行けば、四郎三は待ちかね、「なんと金の才覺は成りましたか」と、問ふにつらさのまさり草、露ともろとも消えたいほどなりしが、胸をしづめて、「成程大方調ひ寄りまして、其の談合に只今參りし。」と誠らしう挨拶し、さて藤内にあふとひとしく涙にむせび、うき身を賣りし噂、母の述懷殘らず語り、「此の上はおぬしとても、世に長らへ給ひてから何のせんなき御身なれば、我諸共に死を同じうしたまへ、未來でゆるりと添はうと思ひたまはずや。」と口說き歎けば、「それこそ願ふ所なり、然らばおふくろにも餘所ながら暇乞ひして來りたまへ。」といへば、「宿を出るよりもはや歸らぬ覺悟なれば、片時も早く死を急ぎたし。」と思ひ切つて申せば、藤内聞いて、「近頃嬉しき心底ながら、今といふはあまりに短し、今一兩日まち給へ。」といへば、おしゆんむつとし、「扨は命の惜しさに日をのべて、其の内にはづさんとの心底か。それは年頃死なば一所と契り申せしとは違ひ、卑怯なる御心入れ、今この時に至り何に心が殘りて、暫く待つてとはのたまふ。」と悲しみ歎けば、「さら〳〵左樣な未練なる所存にていふにあらず、我このまゝにて相果てては、つゞまる所が四郎三夫婦が難儀なれば、此の一埒をあけての上心よく死ぬべき爲なり。」と、やう〳〵すかして其の日はおしゆんを宿に歸し、すぐに主人方へ參り、「段々私あやまり申せば、此の上はお

りし所、武士の心根よりは強し。」といへば、「ずゐぶん強い生まれつき、此方樣の〇〇〇〇〇〇〇〇〇して下され。」といふ。「それは今の間の事、先づ今生の見納めに、たがひの顏を見るべし。」と、引き起して顏を見れば、おしゆんにはあらで五十に近き女の、土白粉をへげる程ぬりくり、何とやらわるき香のするまぎれもの、藤內肝をつぶし、「何者ぢや。」と突きのくれば、「ハテ手のわるい、〇〇〇〇〇〇おかうとは、やりやしませぬぞ、さりとては錢二十おいて行かんせな、はなちはやらじとすがりつく。」と、鼻にかゝる聲して歌うたひながら引きとむるは、扨は總嫁と合點して悲しき中にもをかしく、「そんな榮耀な男ぢやない。」と苦々しくいひはなす所へ、おしゆんは黑小袖に裾もやうの著物、かいどりして走り來り、「藤內樣。」といふ聲嬉しく、「さて待ち久しや。」と互に顏を見合はせ、淚の外はなくて前後不覺に取り亂せしが、藤內淚を押へ、「死ぬると思はるゝゆゑ物悲しく淚もつきねば、只今息引取ると其の儘、佛國へ二人ながら生まれ行き、永く語らひをなす事更に悲しきことにあらず、此の世にゐるも暫くの間なれば、せめては夜の中に此の川邊を、手に手を取つて步行納めにゆくべし。」と、手を取りかはし川原をめぐり、「あれ〳〵むかうに高くそびえし山こそ、都の富士。」と、おしゆんに見すれば、二十歲にも足らで今消ゆべしと、袖に淚の露深く、糺の森も程近しと眺めやりて、おどろおどろと鳴神も、思ふ中をばさくる世の中に、存生へる程つれなき事こそあされ、「只一刻も最期急

市の親方へは一倍にして金子をかへし遣はされ、都の内は物やかましと、市原野の奥に屋敷を設ひ、藤内夫婦その身も共に樂隱居して、世のせはしき事を知らぬ身と成り、大晦日にも琴三味線をしらべて、誠に長者の暮し、是れも前生にてよい種を蒔き置きて、今榮える花の時を得けるぞ目出たき。

風流曲三味線二之巻　終

# 風流曲三味線三之巻目録

おつゞき、黒雲と共に舞ひ下り、杉の梢に止りしが、風颯と吹いて駕籠の簾打ちあがり、内より出づる人々を見れば、姿は當流の大臣めきて、鼻高く眼大きにして、上繪なしの紋所付いたる黒羽織の兩脇に翼あつて、足は鳥の如くなる人々駕籠より出でて、一列に並み居し中に、少し勿體めきたる人は天和年中の女護の島へ渡りしと聞えし、一代男世之助と見えたり。右に此の津に名を殘せし槌久、昔の姿其の儘に、むしやくしや天窗に立縞の布子、丸ぐけの單帶、革巾著のあきから、懷中に伊勢天目吸口なしの煙管、とろめんの糀足袋細緒の奈良草履、變らぬものは扇車の紋所、今とても智慧ほなきさうな顔して坐せり。左は昔御町の由緒殘りて、花橘の紋つけし女郎、嘴長く鳶のごとくなれど、風俗は慥に太夫職と見えたり。一樂見るより、これは恐ろしや、我生きながら天狗道へ落ちぬるかと、肝魂も身にそはで、目も放たず守り居たるほどに、又さまざまの異人共來り集まり、すでに酒事はじまり、太鼓めきたる天狗の、氷かきのある手をひろげて、嘴尖がしてもんさくいふも可笑しかりき。杯納まつて後世之助いへるは、さても我も若い時より耳順の年の日まで、色道に身をなだね、凡そ日の本の色所見ぬ方もなし、至らぬ揚屋もなしと、好色一道我知り顔に高慢せしより、かかる魔道に落ちいりぬ。されば此の津は人の心大きにして内證よりは面を飾り、手に鼓を打ち習はせ、娘に總鹿子をきせ、楊弓に日を暮し、萬大やうに見せかけ、權衡に同じ丁銀を天秤書き渡るほど、

黙して、人に增らんといふ心もなし。女郎も又今時にぱつとしたる客も出でねば、暇日多くして、内儀の當言いふも、ねぶり目して聞かぬ顔付、呑みたき煎じ茶も遠慮して、聲低に肩身すぼりて、田舎の土氣の離れぬ、然も片鬢はげたる男も客といふ名の嬉しく、初對面からのなとき、西向になりとも東向になりとも、または〇〇なりとも、望み次第に、女郎の方から機嫌とるやうになりて、微塵慢ずる心なければ、此の時に至つて便りを求めて伺ふといへども、更に眷屬となすべき高慢の人なし。然れば今よりして如何なるものをか我が道に引きいれん。」といへば、槐久聞いて「仰せの如く最早色遊びも末になつて、本大臣のないからおこつて、我等が網にかゝるたはけも稀なり。殊に此の頃は人の心おひさうなつて、少しの仕過しに當惑して、前後の思案もなく、或は水に入り、首を縊り、又は自害に及ぶものあり。さりとは惜しき命、妻子親類に看病せられ、疊の上にて心よく病死する身を、無分別なる無理死と思へど、是れも過去からの約束にて、生まれ出づるから究まつて、きうでん筋といふものあるよし、とても病死せぬもの共に、責めては前生より緣ある女とひとつに死なし、繪草紙に名を殘させ、狂言に取り組ませ、太夫元に錢儲けさせて喜ばし、見物には廻向いたさせ、其の身は一人より二人ゆく死手の旅、話し伽ありて三途の川の深い心中といはるゝが、同じ死ならば、一人よりは死に德なるべし。殊に此の分は皆愛著煩惱より事おこれば、分けて我が方に引き入るゝに便りあ

ると、品こそかはれ心意氣は更に替る事なし。いか樣人間と生まれ、渡世の爲に氣を盡して氣病みて死し、或は食傷して命を失ふなど、聞くも嫌らし。同じくは女の道にて相果てんは順道とやいはんし。一切の人間皆その穴門より出生して、又其の爲に死するは、是れ花は根にかへるの道理と、此の世も彼の世も惚れ込んだ顔して、無分別に仕過し、昨日は曾根崎の宮地を汙し、今日はありする山の傍に枕をならべ、二親に悲しみをかけ、主人に損をさせ、殘金ある茶屋揚屋に腹を立てさすのみにして、無益の最期よみうりの外に悦ぶものはあらねど、毎日の心中絶えず、殊に此の頃は都鄙共に珍らかならず、爰に死し彼所に身を投げ、三世因果の種を蒔き、不孝不智の罪何時の世にかは免れん。爰に難波の京仁德天皇の御代より、今に傳へて堅いしだしの時代親仁、一生女の肌をしらず、朝暮小判を溜める事をのみ面白き業に思ひ、秤目をせゝつて何の樂しみもなう、うか／＼と枡かけ切る年まで、大分の金銀を世の慰み事に使はざるこそもどかしけれ。妻女かければ固より一子もなくて近き頃兄の子を養ひ、萬事我が習慣に教へける中に、此の頃諸方に心中流行りて歷々の男、遊君の爲に刺しちがへては、其の名を堀江の水に流し、世の笑ひ草と成る事更に合點ゆかず、後の世の事兒極めて、來世で添はうといふ心にて、一所に死ぬる合點ならば、是れ許りは當てに成るまじ。今生に有る程だに安き暇なき身の、空しき後はいふならく、奈落の炎に心を焦し、劍の枝にこのみを繫かれ、

修羅の闇に闘爭して、更に浮む期有るべからず。若し又最期の一念によつて、ふと淨土に生まるゝ事ありとも、變生男子ときけば、女其の儘女にはあらず、然る時は折角思ひあげて死んで佛に成つてもらが、思ふ女は男に成つては、極樂へ行きてからが當ての柄が違ふべし。人々此の道理を知らぬにはあらねど、女といふ曲者に本心を奪はれ、うつけになるから起るなれば、第一女色を斑猫の如く思うて、一生女に近づくまじ。汝若き心から女の轉へる形をよしと思ふべけれど、元來汚なき物なり。其女の淫樂、たがひに臭骸を抱くと、東坡唐人も嘲りおかれし通り、よく合點すれば汚なき根元なるぞ。我死せし後までも必ず此の一言を忘れず、假令にても持つ事なかれと、常に戒め、昔より男世帶にして髮有りながら出家の行儀なりしが、內には時節ありて此の祖仁寺参りの歸さに、見せかけの頭數珠を落されしを、向ひなる組糸屋の弟子小ゑんといふ、今年十四になる小女が拾ひ上げて詞をかけて、祖仁樣これ數珠が落ちましたといひしより、何となく祖仁思ひ付いて、それより心を奪はれしに、小ゑんも九十に近き祖仁を面白がりて、忍び／＼に出あひしが、固より祖仁若き時より此の道を嫌ひ、財を貯ひし〇〇今此の時の役に立つて、血氣の若い者より〇〇〇〇〇〇にて、〇〇〇〇〇くて、首尾さへあれば出逢はれしが、或時祖仁小ゑんにいはれしは、「我昔からこんな〇〇〇を知らずして女を卑しめ、義子にまで日頃此の道を戒め、常に過言を吐きて、今其身をかうした事なして、皆

し内抔へ漏れ聞えては、倅又は手代共が思はん手前如何にしても面目なし。さあればとて馴染みたる
それが事を思ひきらんと思へども、いかな〳〵露忘るゝ隙なし、其方さへ合點ならば、諸共に相果て
永き來世でゆるりと添ひたし」と、涙ぐみていはるれば、小まんも涙ながら「私とても主人を始め
朋輩の女しゆに、男こそあらうに、九十に及ぶ老耄と狂うてと、惡口いはれては生きてゐて面白うご
ざんせぬ。幸ひ其の心底ならば、片時も早く死を急ぎたし」と、思ひ詰めたる風情、親仁悦び、「然ら
ば今宵生玉の馬場先にて、見事に相果つべし。」と約束固め、我が宿に歸り、匕首の鞘をおとし、懐に
白小袖の用意、息子を始め手代共不審をなして、油斷なく氣を付けしに、日もくれ初夜の頃に、表に
女の聲にて咳ばらひすると、親仁身拵へして、匕首手に持ち走り出でられしを、後より見え隱れにつ
いて行けば、下間なる女と手を引きあうて「此の世の縁こそ薄くとも、未來では永う添はうぞや」
と、互に泣き〳〵死にに行く、名にも似ず生玉の馬場先にて、おやぢ上にうつぱりし木綿袷を脱いで
下に敷き、小まんを寢させ匕首拔いて、既に危いことをせんとしられし所を、見え隱れに來りし手代
共驚き走り寄りて、先づ刃物をもぎ取り、色々宥めて連れ歸り、「お氣にさへ入つたらば、彼の小女童
程の事如何樣とも我々自由に致し進ずべし」と、息子手代さま〴〵意見すれども、「さう云うてくれる
程猶生きて居られぬ首尾、是非とも死なしてくれ」との望み、是れ只事にあらず、女に惚れられたで

を用ひ、悋氣強き女に龍田山夜半にや君がの歌を御符にして戴かせ、油蟲の多くわく所に、御付々々と書いて札を張れば一疋もなく、開夫狂ひする女郎、業平を信心して名を出さず、寺の有る野郎弘法大師へ願をかけて縲を斷ち、傾城遊女の損じたを、孝謙天皇へ嘆くなぞ、皆それ／＼の機轉なれば、と思案出し、出所も知れず尋ね手もなき心中死の、土に埋りし死骸を尋ね出し、男女の頭の骨を取りて黒燒とし、件の病人に用ゐれば、彼の煩惱魔の脊腸あかね半七三勝が亡魂飛力に足を止め兼ね、此の家に遊びにたれば、親仁夢のさめたるごとく正氣になりて悦ぶ事大方ならず。其驗有りし藥の名を聞へば、淳氣靈天蓋とて、必ずそなたのやうな心中傳尸病に功ありといはれしかば、若き盛りの子を持ちし親達、浮氣な遊女抱へし茶屋の亭主、兼ての養生に用ゐて置きたしと、聞き傳へに諸方より藥をこ築く、文萬にない身と成つて、松屋町に玄關構への家を求め、今は奧物に乘り步かして、心中醫者として、難波に名を高へ榮えぬ。

## 第三　牀の軍法女楠

兩大臣金の力くらべ松を引きぬく堺の兵者

浮世小路の悪所駕籠四人揃ひの單物に、染め込みの水車の定紋、まはれや／＼末社共、前後を守護し大道を我がものにして、幅廣くざめき行く人を見れば、此の津に隱れなき數代續いて有德の名取、

なる樣に思はれ、爰は御一分、あゝ慮外ながら立ちにくき所、太夫樣も堺へござる事、昭君が胡國へ身請せらるゝ如く思召し、此のごろは食もあがらず、御事のみおぼし出でられ、其の樣痛はしさが、中々我等如きが詞に顯はすやうな事ではござりませぬ。さるによつて亭主が働きにて、親方へ內證を根押をして聞きますれば、八百兩にて事すむよし、其邊を丁度十兩につぼめ、横合から無理所望につかむにや、最早今晩夜に入つては其の相談も成りがたき由、我々心の遣る瀨なさ、是れ旦那どうでござりませうと、一座の者共眼をすゑて申せば、大臣更に急かせらるゝ氣色なく、「我を思うてもがいてくるゝ心底過分々々、我千兩萬兩の金を厭うて、此の張合に後れを取るにはあらず、年月爰に暮して世のごとく成りし內に、手代共言ひ合はせ、大分の金銀を掠め、立ち退く思案をせし所を、一家共より心をつけて、家內を吟味して、殘らず古き手代共を追ひ出し、此の頃新規の手代共を抱へしが、此の騷動皆我等身の行ひ宜しからざるゆゑなれば、新手代居馴染む內は、萬事の遊興をやめて、暫く大人しい顏せよと、親分の人の意見至極に思ひ、此の間は虛病を構へ家內の外へ一寸も出ず、身を堅むる最中なれば、身請などの所へゆくことにあらず、當年中謹めば、來春よりは昔に十倍の遊びをしても苦しからず、どうぞ其の玉章が身請の相談、汝等が智謀にて、來る春まで待たされまいか」とあれば、何れも力をおとし、西瓜の中に火をともせしごとく、顏色青光になつて、はつといふより詞なし。亭

の道を絶つべし、是れにて所在なき我が心の中を察し給へ」と餘儀なき言ひぶん。太夫も少しは嬉しながら二人の花と眺めらるゝ上は、一生逢ひまする事も成るまじ、併し御心底に替りなきとの御事、とてものことに御誓言にて聞きましたい」といへば「日本の尊神かけて、今飲む酒が毒となつて、立ち處に呻き死ぬる法もあれ、身終るまで心に替る事はなし」そなたは又我が事をさつぱりと止め、隨分主命に心をとめて、一生裏なく仕へ給へ、是れ今生の暇乞の一杯」と、一ッ飲みてさし給へば、太夫涙ながらに押し戴き「一念器を徹すといへば、一生の中に又逢はれまい物でなし、たゞお心の變らぬを樂しみに、爰はひとつ飲みまして」と、手へかゝる程受け持ち、心よく飲みて大臣へ戻し「隨分御酒もお控へなされまして、只お煩ひなきやうに呉々頼み上げます」と、互に涙の長座敷、末社ももらひさくな止めて、亭主も可笑しき手つきをせず、一座濕りて異なものなれば、何かな興をと目論むうち、大臣仰せ出さるゝは「我傾城ぐるひ今日までにして止るなれば、隨分汝等今日一日は末社心を忘れ、何なりとも仕たき事をして遊ぶべし」と、契約のない隙な鹿戀女郎ばかり三十五人招き寄せ、九軒町も響き渡る程の騒ぎ、是れぞ名殘の大酒盛、亭主夫婦一家の者共殘らず罷り出で、末社も我を忘れ、「我が物いらずに、面々今日程の樂遊びはあらじ、とてものことに何ぞ替りし思ひつきをして、大臣を慰めましたい」といへば「太夫をわきへ引きぬかれる上は、此の座に心とまらず、たゞ汝等業體を

一度乞ふ人の手に渡りし錢なればとて、大川へ捨てける。是れぞ國土の費となめり川の古の事思ひ出して、忠六といふ男月夜影に捨てし錢を尋ぬるとて、差し俯向き川へ手を入れ搜し掛るとて、懐中の紙入を流し、「是れは三百文の錢よりは大事が出來た。」と喚くを、殘る二人立ち寄り「何事ぞや。」と問へば、「錢はとらずして紙入を流した。」と、なげく。「汝が紙入に何か惜しき物あらん、なまなか聲高にいうて、人に拾ひ上げられ外聞失ふ。印判がないとて、借屋請の外に入る事なければ、我々が判を借しても濟む事、其の外の大事の物とては質の札で有るべし、是れも竹さまの召し連れられぬならは、銀の入り所なければ受ける事のならぬ所を天道示し給ひて、流れてのけし物ぢや。」と笑へば、「いや／＼そんなものにあらず、堺の玉重どのが吳れられし、日本名譽の〇〇〇、女に一粒あたふれば、たちまち野干の姿を顯はし、狂ひ出て無量のもてなし、金銀づくでならぬもの、今一つは竹樣と太夫樣別の時にお〇でたかせられた、はつねといふ一燒の餘り、揚卷樣の手づから下され、形見と思うて身を離さず、何時ぞは旦那に燒いてきけまし、「さりとは持ち溜めのよい奴、太夫がことを汝までがそれ程に偲ぶか。」と御機嫌の餘りに、捨てても一はい下さるゝと、心あてにせし伽羅が惜しい。」と云ふを聞きて件の女乞食聲をかけ、「そのはつねの伽羅は竹樣のお目かけられし、長町の忠六殿に進ぜたが、其方誰ぞ。」と詞をかけられ、三人驚き立ち寄つて、よく／＼見れば是れはさて、太夫樣か此の

含み、忠六方に其の夜は明かして、東が白むと忠六は佐渡屋方へ走り行き、「旦那に急に御目に懸りたい」と申し上ぐれば、「まだ御休みなされてをる。用があらば後にござれ」と、小者上りの若い者が伺ひもせず返事いふを、「常の用とは替り、旦那御満足の注進、苦しからずば寝間へ参るべし」といふを、然らばとて旦那へ斷りと申し上ぐる。太臣寝ながら、「忠六ばかりならば直にこれへ通せ」との御意、畏まつて奥に通り、先づ何かなしに、「揚卷様私方まで御来臨、日本廣しと申せども、こんな心中又ない事、旦那に逢はしやりましたいと、一度は乞食にまで御なり遊ばし、菰を召しても昔を忘れ給はず、八文字で瓦器持つての道中、神代此の方ない圖」と申せば、太臣さのみ驚き給ふ風情もなくて、「主重方は九月十三夜に、住吉浦からぬけ出たとは兼て聞きしが、今まで二十日が間は何方に匿れ居たぞ、樣子を詳しく尋ねたか」とあれば、「さてこそは旦那には先だつて御聞きなされましたが、九月十四日より今十月十六日まで、太左衛門橋の下に、見事なる御乞食となられた事、夜前私が悦吉左衛門二人共に見屆けましたこと」と申し上ぐる。「然らば此方より追付迎へに乗物遣はすべし、二人共に付いてまゐれ」の御意、畏まつて立ち歸り、太臣の仰せられし事二ッ三ッ申すうちに、御迎への乗物参り、お姿入れて連れまして歸れば、三人一所にお供仕り付きまかへ参り、奥座敷へ乗物かき入れ太夫様を出し申せば、其の儘旦那に取りつき、是れ正眞の悦び泣き、太臣もかず／＼珍重がらるゝ所

竹さまの御名を立てるやうなお使から抜けて參るからは、魂の此の身に有る内は、玉重樣方へとても歸らぬ心底、併し此の身は八百兩に召しましたなれば、玉重樣の物にして我が物ならねば、何處の浦までなりとも連れて歸らるべし、魂は竹さまに申し交せし事なれば、爰に止めておきます。金子のかはりに亡骸を進じます上は、玉重さまにも此方にも、竹さまに言分はない筈、皆樣さらば。」と使の者がさし出す、脇差の柄に手を掛け既に自害と見えしを、使の男あわてゝとりとめ、「なんと旦那太夫樣の御心中もう見えましたか、此の上は有樣に明かして、安堵させまして進ぜられませぬか。」といへば、「いふまでもない事、さりとは我ゆゑ、今までの憂き苦勞過分々々、さうした心底とは知らず、疑ひ強くさまざま心を引き見しが、是れも憎からぬ心からなれば叱つてたもるな。元來其方に逢ひ初めしより、幸ひ氣にいりし妻もなければ、根引きにして、我が宿の奥樣と眺める心で居たれども、一生添ふからは心中の底を見拔かいではと、いろ／＼思案せしが鞘置きの木刀で心中しかけてみるも、江戸の半留が若山と云ひし事、何卒太夫が智慧に及ばぬ智謀を以て心中を見んと、あの玉重と身共はさし渡した從弟、芝居の子供を好いて、傾城を面白がらず、終に傾國に行かぬ者ながら、隨分の粹なれば、是れを頼み、何時ぞやから我等方より遣はし、玉方へ引き取らせの上の其方の心中を見ん爲に、今までせし事皆方便にして、誠は我疑ひ深きゆゑと、今といふ今そなたの所思面目なし。今日よりし

方への志にてや、詞に出ねば心中の程落着せず、猶疑ひ深くて今までの延引、兎角は一生添ふ者なればこそ、なる／＼に心中を見定めねばならぬ事。」と、後には大笑ひになつて、玉垂方の似せ使も、誠は新地屋敷の屋守の作衛門と名を顯はし、たゞ思召し合ひたる御夫婦の御中、萬年も相變らず、相生の松で芽出度きと、其の夜すぐに御一家までへも奥樣弘めあつて、さゝんすの酒盛納まり、互の心中堅まり睦じく懐妊ありて、翌年の九月に玉の男の子を御喜び給ひ、名も竹松と付けられ夫婦の寵愛限りなく、御家の根繼と、出入り人々喜びの袖をかゝへける。

## 第五　淀鯉水の働き　時々の移り氣女より色ぶかい紫帽子

難波の銀右門は、今都で宗徳といへるむかしを聞けば、小傳次とて花をやりし藝子、其の頃は櫻山林之介未だ幼稚くして、戸川庄太夫といへる、重樣が方にありし時よりたゞものならず、末は名人になるべき器量ありて、此の道の粹嚢めおかれし目利違はず、三ヶ津に名をあげ今立役となつて、若手の上手と難波人の稱美、殊更色男にて女の好ける事態はあやかり物ぞかし。其の頃は物事心安く、客も氣が張らず、勤め子も誠の子供心にて、慾を知らぬ故に、大臣の氣を取るすべを知らず、ようつに誠許りにして僞りあらず、酒も過ぐれば嫌と申して何の張合もなく、人形繪草子枕がへし絲どりな

り入らせられ、素人役者近所の料理屋の亭主など、五七人招き寄せられ、皆の知る如く我等親類の佐渡屋の竹寺、以前から女郎を好いて傾城許りに行きて、此の堀の藝子の面白きといふ遊びをしらぬが不便さに、此の頃勧めてみれども、年穿鑿をして悪口許りいうて此の道に趣かないを、やう〳〵いひおほせて今日是非過ぎから來る筈なり。何卒上手者をかけて引き止め、此の遊びに跡ひかせ、我が若衆狂ひの友となさんと思へり。何れか彼の男が心をとりて、道頓堀へはあおはせる器量の子供は誰にて有るべし、汝等指圖して見よ、渡竹方には誰といふ名指しもなければ、此方等任せたり、玉膳か梅之助か、さては鹽屋九郎右衛門抱への、岩井半太夫などでは有るまいか」とあれば、何れも頭を傾向け顔に鏡を寄せて、誰にかと案ずる中に、和藤が申すは「竹様の心を蕩かす小人は、藤田半次郎殿ならでは、恐らくは有るまい」と申し出せば座中一度に「是れは汝一代の見立てよくぞ申した、此の君ならではないとも〳〵。先づは不斷の身持ほかの子供と變り、心に若衆といふ事を忘れず、手前に使ふ下女が手からは物もとらず、寐道具の上げ下しも小奴子にさせて、女を近寄せず、身を堅めて勤めの外夜の道露を踏まず、朝に寐顔を同じ内なる末々に、假にも見せたる事なく、寝所にて懐中鏡を出して、よく繕うて起き出で、客なき時も湯行水のほか常に帽子外さず、暑氣の時分身は汗すれど肌を脱ぎしことなく、秋は月をも宵から見捨てずして、歌書に心をうつし、手拙からず、ひとつ〳〵能

「先程から幾度か手前へ一杯參りますれど、彼方へは何うした事か獻します事が嫌で、終に進ぜませぬ。明日は知らず、今夜中は嫌でござります。お獻しなされますれば、是非に及ばず戴きますれど、是れも同じくは外へお獻し遊ばせかしと存じます。」と、遠慮なく申し放せば、渡竹むつと氣で、「平次殿とやらには始めてのお挨拶には珍らしい、それが若衆樣の御作法か、衆道不案内なれば存ぜぬながら、お氣にいらぬ方から、お獻しなさるゝ杯は、戴かいでからが嬉しからねば、望む心ではござらぬが、我等に限り獻す事嫌との口上が承りたい。」と、少し氣色をして詞を掛けらるゝ所へ、扨こそして遣つた物と平次ほじやりと笑ひ、「其のお咎めをあはれかし、實にして聞きましたいことがば、一身共も男の切でござれば、嫌はるゝを滿足には存ぜぬゆゑ、其の心入れが聞きたいと申すに、一議が違言がいたさぬため、猶々合點參らぬことであれば、いや〳〵僞々、芥子ほどでも御心にかゝる人にこそ、嫌はるゝは腹の立つもの、若衆嫌ひのお前が、私の一杯進じます事嫌と申さば、かへつて御滿足のはずおやに、年は幾歳にもなれし、若衆を言ひ立てに勤めを致す身なれば、私を立てて、御腹立なされた振を遊ばして下されます意氣が、憚りながら聞きしに勝るお上手、女郎のいくことわりと思はれます。それお詞に顯はるゝ、半分程、御心で腹が立ちまして貰ひたいまで。」と、莞爾と笑うて差し向いたる化粧、たゞ海棠の眠るがごとく、一座の者共〇〇にこたへて感心す。渡竹此の詞に生

召し連れ行きしに、歌連俳茶の會蹴鞠楊弓能囃子、何にしても諸藝一通り仕殘す事なく、彌御機嫌に入ッて藤七と名を替へ、厚鬢の男と形は變へさせながら、隨分顔を磨かせ、紅裏の着物小紋の廣き帶をさせ、不斷の行儀風俗は、其の儘若衆仕立にして、夜も一ツ夜著の中に夢を見て、現にも此の男が事忘れぬやうに、まんまと衆道好きとはなられぬ。兎角人は何が嫌ひと極めていふまじき事なり。渡世も若衆嫌ひとはあんまり言ひ過しと、其の時の人申しあへり。總じて人の物好き、折にふる事によりて替るならひながら、若道許りは壯年の血氣盛りの物ぞかし。老いては心許りにて衆道の首尾調ひ難し。さるによりて自ら女道に模様仕替へて、六十の[illegible]もたる事なるに、渡竹物好き昔に女を好み、年の重なるに從ひ若道を好み出さるゝ事、世間の人とは裏腹といへば、「然らば出家にせい、こなたを小僧にするや、それも今時は聞えぬことと笑うて果しぬ。

風流曲三味線三之卷　終

集か〇〇すゐ詞くして居ながら、流石是非ともいひ難く、「最早お歸りか」と本意ない顔付、そこ〳〵に待遇ひ宿に歸れば、「伏見屋より呼びましに、先程から人橋が懸つて」といふ聲、肝にこたへ咽へ指なぞ指し込み、酒氣を拂つて薄味噌の汁など吸うて、又色惟りて行けば、大和の御出家達二三人、外に子供衆も一兩人居つて精進肴引き散らし、されど強い酒事はないかして、我より先から來て居る子供皆素面なれば、先へ嬉しやと座に着けば、若衆珍らしさうに頤の下へ首を入れて、顔に穴の明く程眺められて、可笑しからぬ奈良の大佛噺、お釋迦の鼻の穴へ日傘さして入らうとまゝよと、よい加減に跡うてば、座敷濕りて酒の上に夜は更くる、そろ〳〵お迎へが來て、ぶら〳〵とふらつき半分は夢見て聞けば、それから薪の能の話になつて、坊主客は若衆馳走の爲に、初日から段々番組まで長長と語さるゝに、折節はとでもない返答すれば、仲間とて外の子供、餘の事いひ出して笑ひてくるめ何の面白からぬ座敷を、だん〳〵だらりとして、是れは主人が日がりがないと、我が草臥れし體に科なき亭主を叱り、〇〇に氣を付けさして、お休みなされませといはせ、屏風の中へいれば、若衆を二つとは殘酷い事ながら、銀が敵と是非なく自由させながら、〇〇〇〇〇を以て參り、夜更け泣き別れ、までに、如何許りの年を寄らしぬ。其れより歸れば早明け方の鳥鳴き渡りて、とろ〳〵と寐ると、二番つゞきの序幕で、平一が只今濟ますと樂屋から告げ來れば、[illegible]樂屋へ差し越せと、いひ捨てにし

隨分に御目付けられ、後見を致しぬれば重き人にして、同じ傍輩も自ら尊めて、古參の手代も從へ
れし程も竹右衛門今年四十二の厄も無事なるを悦び、是れより男を止めて法體し、俗名竹右衛門に準
へ、虎安と付けて、其の名千里が外までも隱れなく別家に隱居を造作ひ、世間を止めて樂しみをきは
め木津の里に虎安嫁緣付きしておはせしが、其の娘子におかんとて、玉のやうなる生まれつき、今年
五つになられしを、末々竹松と妻合はすべしとて、我が方へ取り迎へ、慈愛深く養育せられしが、竹
松九つの年書院へ出で、雀小弓を射て餘念なく遊ばれし所へ、おかん何心なく走り來て、小弓の妨げ
をせられしを、竹松腹立ありて嚴しく叱り給ふを、幼稚けれども女の性は僻める慣ひ、叱られし返し
せんと、的を取つて拋げられしを、竹松堪りかね、引き設けたる小弓を放し給へば、過たずおかんの
額にひしと中り、其處ら破れて血噴しければ、あつとむづかる聲に、姥おさしなど愕き擾ぎ、やうや
う賺して懐き抱へ、次の間へ連れまして入りぬ。其れより竹松おかん中宜しからずして、一所へ寄り
合ひ給へば爭ひ止まず、後には虎安夫婦の耳へ入りて、「我此の姪を養ひ置くも、末々竹松と夫婦にせ
んと思ふが故なり、然るに今此くの如く中惡しくては、自然相性にても惡しきや、占ひの名人あらば
招き寄せて、考へさせ」との仰せ承つて、其の道の上手を訊ね問ふに、難波に蘆屋の道鑑とて、法
道仙人より傳はりし一流、陰陽五行天文地理の事易暦に至りて、又此の津に肩を比ぶる者もなき上手

## 第二　萬福長者二代の大臣

### 家ふるまひの御馳走は大名戻り

器量の能きは母の[illegible]顔を[illegible]つけられ、風流なる身もち至り穿鑿學ばずして知れるに、父親の血脈をつぎ、諸藝に器用なれば、其の身過ぎより持つて來た徳、金銀は固より、家に傳へて何ほどと云ふ限りもしらず、是れぞ諸果報と出入りの人にもてなされ、憶のさく年は十六の春元服なして、名を竹太郎と付けられ御母屋を受取り、萬事重手代の藤七と謀し合ひて家の治まるを、親虎安支配の時より、格別實體にして繁昌尚盛んなり。或時御出入りの御手醫者、花崎梅薫御蔭にて、本町に家を求めし祝儀に、若旦那ならびに藤七殿を茶屋へ申し請けたきよし、手代勘兵衛太々右門を以て、御機嫌の折節を伺ひ申し上ぐれば、早速御出で有るべき旨、家の面目近所への聞え有り難しと、御家の料理人治介新八を頼み、若旦那御好物揃への獻立善盡し美つくし、手を盡しての馳走、暮方より御家へ御出入り座頭澤都城俊など、色絲をならして旦那を勇め奉り、酒も徐々しむ時より亭主梅薫二十一二なる美女をつれて罷り出で、「是れは娘らんと申し候が、十五の年より西國方のさる御大名様方に、御奉公相勤め罷り有り候へども、私も次第に年寄り一子もなければ、何卒似合はしき弟子を取り此の娘と妻合はせ、花崎の家を恙なく相續致させ、旦那へも幾久しく御出入りを致させ申すべくと存じ、さる

の色男、女の好く風、おらんも皆より目を離さず、何うぞ隙間も有るならば、我が所思を通じましたい物じやがと、心を砕きてゐる内に、竹五郎もおらんに近寄りて、口説いて見たいと思ひより、人目を窺ひ折節は、目で所思をして見せ給へど、行き届かず、両方ながら酔ひにもてなし障子を明け、ぬれ縁に地んで、「おらんちと肩を捻つて給るまいか。」との仰せ、渡りに船と嬉しく、尻軽立ちてお側へ参り、お背中へ〇〇〇をやるを〇〇〇〇〇〇、「大方は目の色でも知れさうなものぢやが。」と、小聲にて宣へば、おらんはくわつと上氣し、「そりやわしがいふこと、如何に殿ぶりがよいとて、惚れた女にもがかすやうに、先から愛へこいともいはずに、しや可笑しいまで。」と仕打したる返答。「是れはさてさうした事なら先にから、氣骨折らずに打あつけにいふ折もあつたに、其方の心を知らず、よしないことをひよつといひ出し、嫌といはれては、梅薫手前までが氣の毒さに、斯うして酔うたふりして愛まで寄り寄せるが、なんぼ程の氣遣ひと思召す、そんなら何とおれに逢うて給る心か。」とあれば、「御不承ながら只可愛がつて下さんせ、其の上は命も君に。」と〇〇つく、かたじけなさ、露命をむしるが如く、「互に此の儘消えたい。」と、両手〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇心なくも藤七、「御酒もよい頃と存じますれば、最早お納めよかるべし。」とお側へ参りて申し上げれば、二人は驚き〇〇〇〇〇、「成程成程納めがよい筈、梅薫呼びやれ。」と座敷へ召し出され、御杯をくださるれば、一座の衆中、千秋

巳左衞門承り、「是れは旦那の御身代柄に似合はぬ御一言、妾狂ひなどを面白いと仰せらるゝは、いかう前方なる穿鑿の。願慶町へ入らるゝ程、色里へ遣はせしるゝと、春は櫻に馬繋がせ、秋は月夜に提灯で送られ、夏は替り扇、大團扇に汗をしらず、冬は寒さを女郎共取り巻き、人氣を以て風を防ぎ、其の身は漉め小袖にまかれ、足擦らせて髭拔かせ、僞はれども是れを改めず、我等式の素牢人でも、それ程の積鮫をほふられ、家質の流れ前を知りながら、居宅を大きに申しなし、其の人の心の如く上す、上られながら此の面白さ、又外になし。是れ許りは私に關られたと思召して、郭の一日御出で有るべし、なんと女甫さうではないか。」といへば、固より女甫は梅薰が娘、御意に入りて頃日は人も無氣なる醫者坊が振舞、針立とても同じ職を、下目に見る意恨最中の時なれば、傾國へ進め申して、らんが手を切らしまして、梅薰が鼻を拉げさせんと、「是れは外記殿いはる、通り、第一地女房は酒事になつて、意氣も張りもなうて、牀で味噌鹽の穿鑿して、○○○○御意次第にとらすが能で、慾許りが引張りくさつて、さりとは一つとして可笑しからぬもの、假初にも郭の者は格別の意味あり、況して太夫職は、中々至らぬ口先で、評判のなる者では御座らぬ。旦那のやうな御器量を、によつと一目見せます位なれば、ほんに里中の太夫天神の打ちうるほうて、夫れは〳〵。」と木に餅のなることく、拍子を合はせて申し上ぐれば、竹五郎兩人が口三味線に乘らせられ、「然らば傾國の模樣さつと見

踊り、日馴れぬ百姓は、鍬擔げ手放つも道理なり。難波に住みて、睦の儀いふも甘いも辨へたる諸人、氣をとられてあたぼしい慾の出來て、金さへあらば浮世の思ひ出に、あの身になつて何事も夢の春なれや、飛ぶ蝶それも夢と木綿著物の親仁ども、無用の無常を觀じける。入相近くなつて夕日紅の梢にもりて麓に下れば、日頃御目掛けられし太鼓仲間より、こしらへて持たせ來りし由にて、一間四方の乘物に屋根はなく、八方の隅にて覆ひ、四方の角に四季の作り花を飾らせ、前には風爐釜中棚に入れ子鍋并に魚鳥入れし青目の組籠、杉重にさまざまの菓子を入れ、竪横に棒五本通して、十八掛りの籠の脊、皆紺の單衣の膝節までにして、水車の紋所一樣に著飾り、「是れに召して此の坂を靜かに上られませ」と、つぎつぎ心をつけて申し越されたこと、針立玄甫が取次ぐ。大臣御機嫌かぎりなく、「是りや唐土玄宗皇帝の物好きにて、大酒の揚句肺へいらせらるゝに、醉輿と名づけて、女中方に舁かせ給ふ輿も斯くやありけん、さらば我も其の皇帝の學びせん」と、十二人の中にて愛らしき禿四五人、乘物の内にいれられ、殘る美少女には手をかけさせて、小歌さまざまの音曲にて五十丁の坂を上れば、あたら櫻も此の色に負けて、今日更に見る人もなし、是れぞ奢りの第一なり。我より上見ぬ鷲の尾參詣、春情一日に百兩の入費、惜しや此の儲け悪い世の中にと、重手代の藤七御歸りを待ち請け、樣々意見申せど、「こんな面白いことと、知らぬ先の意見なれ、最早傾國の蟲が總身に染みついて、前方なる物堅い

「立ち歸り、住吉まで連れて拜ませて歸りましたが、在所には大きなる出入事がござりまして、是れが負けに極まりますれば、兄弟共に難儀仕る由、今宵は其の相談が仕りたいと、止めましてござりますれど、内分に如何なる御用の有るも存ぜず、立ち歸りて御用をも承り、又參らうと手筈仕り歸りました、一寸宵の口御暇っ」と申し出せば、藤七少し苦い顏して、「幼少から在所を離れて、御家に住んで樣子しらぬ其方に、出入事等の談合仕掛けたとて、何の足りになりさうなもの」とは思はねど、「相談力にがなせうと思うての事なるべし、其の分ではあまり隙の入りさうな物でもないに、初夜時分には必ず戻りやれっ」といひ渡し、そこ〳〵に聞いて又小宿にて衣裳著かへて行くなど、獨り狂言の如く、「是れでも遊びたいに如才はなし。一杯呑めば可笑しく、二杯呑めば面白く、三杯呑めば理を拔かし、四杯目は儘よ、最五杯めはわざくれといふ、無性氣になりて、初夜に歸るの手筈を忘れ、つい後夜の鐘を突いてから、床入りする間に八ツになるはしれた事、總じての人事で心を改むるものはなくて、一寸切らるゝも二寸きらるゝも同じ事、とても濡れた袖ぢやものと、百人が九十九人までは極まつて惡きはうに力瘤の出るもの、此の手代もうか〳〵と夜を更かして、總立にして一連に、太左衞門橋までは此の面白さ、明日首切らるゝも構はぬ氣なりしが、橋より皆々別れて我獨りになつて歸る時、始めて主人の事を思ひ出し、是れから恐味が付いて、仇口も止めて旦那の町になれば、足音も

勘兵衛も藤七が威勢に恐れ、假令心に合はぬ事をいうても、詞も返さぬ程に從ひしが、古參の身として新參のものに從ふ事、如何にしても悔しく、是れからは若旦那に執り入り讒を構へて、藤七を追ひ失ふより外はなしと思案を極め、竹五郎惡所通ひに付きそひ、彌色を勸めて主人の心を奪ひけり。是れ佞人の隨一なり。ある時竹五郎勘兵衛を竊かに召され、「此の頃は衣木屋のおすまに深く懐みて、來る名月と菊の節供を受合ひしが、例の物堅き藤七、此の中は何か目に見えたか、叱りて意見して中々、金銀など自由でなす、いんへうに事をかいで、差しあたり第一の難儀、いつもと云ひたがれ、どうぞ思案はあるまいか。」と、小聲にていはるれば、「私もそこらに油斷しませず、最早お銀の入り時分がやがてと存じながら、只今まで段々御遣ひ銀、貳百七十貫目入帳の内見えませぬと、私と傍輩の太兵五郎右などと一つに心を合はせ、買ひ置きの有る物に勘定したて、藤七に一杯喰はせまして、七日前に濟ましまして、まだそれから間もござりませねば、どうぞ才覺の手が盡きました、是れからは御祝言あるやうに世間へ申しなして、呉服屋と紙屋を語らひ、絹布卷物奉書杉原延半紙を取り込み、京へ上せて安く賣り拂ひ、當分の御用を達する方便をめぐらし、彼の里の義理を繕ひ奉らんこと申し上ぐれば、「さりとは汝は忠臣かな、隨分賴むぞ才覺せよ。」と、後前しらずの無分別、此の人に限らず、今時の若男色に深く染みぬれば、さまざまの惡心起り、終には身代破るゝ、芭蕉葉の、脆くも

ふの可愛がりて、末々は根引きして我が宿の妻と眺めんと、思ひ入しを誓紙取りかはして、互に心の底を打明け、君ならずばと、次郎も誠を尽し、一日見ねば千度も文して、門で参らせ、戀しのばれしに、揚げ次腐れ隙のはれがりし、夏の初めつかた難波安心無の事ありて、伊勢へ代参に竹五郎を申し付けられ、四月の末出立されて、十日計りの旅のうち逢はぬ事を歎き、我が宿に留守にして先づ郭へ立ち寄り、大夫に暫くの暇乞ひ、引舟遣手禿までに、それぞれの置き土産、吾妻がたへも道中御菅笠にとまされ、餞別、首途の酒盛して夜舟にて都に着し、それより大津へ越えて石部泊り、是れまで大夫様から御見立てにと、平野の雲八禿の市弥をつけられ、名にも似ぬ物堅き石部で、中はなかなか酒事して、大夫様への御書翰に、草津の姥が餅、梅の木の和中散まで調へて、二人を朝とく歸され、追付御下向待ち奉ると立ち帰るに、禿の市弥大臣の御乗物の見える程は立ち止りて「お土産に鯨尺を買うて來て下されませ」といへば、雲八可笑しく、「鯨尺を土産に買うて何にする。」と問へば、「太夫様に、延びさんした客さん達の鼻毛を度すにと」、是れを大笑ひにして機嫌能く郭へ歸りぬ。其の日川口屋方に掛つた客がとれました。その優形なる男、年は二十四五にして形の美しき事、千早振る神代も聞かず龍田川と、詠まれし人の若盛りもやと思はるゝ程の器量、頭巾深く忍び笠を座敷まで著て這入られ、座につきて編笠を脱ぎ、先づ亭主夫婦に貴なる物をばつと下され、少し詞に訛りありて、「皆を頼む、ぞ

しが、何時もの如く揺り起して、「明日又お目に掛らう。」と、お歸りあるを引きとめ、「僞りにもせよ、我御執心にて、お通ひなさるゝと、お詞には出されながら、逢ひましてより今宵まで、終に誠の枕を交し給はぬ御心底の程、いかにしても心得難し。是非に今夜は心の下紐打ちとけ、誠の契りを込めずしては歸しませぬ。」と袖に縋りて中々放さず戯れかゝれば、彼の男心弱くも立ち歸り、又○○入つて言ふ樣、「其方は佐渡屋の竹五郎と深い仲にて、互に誓紙を取り交し、二世までの約束有るよし、それは勤めの習ひにて書かれし誓紙か、又は眞實から竹五殿を、最愛しう思はれて書いて遣られしか、此の誓紙の實不實が聞きたい。」とあれば、「是れは變りし事をお尋ね、誠か僞りかは竹五樣と妾と、互の心底に有る事なれば、今お尋ねなされて申してからが益のない事、それは何にも遊ばせ、先づ方樣の此の頃の御しなせ振り、どうも讀みが解けませぬ、わしが誓紙よりはこなた樣の樣子が聞きたい。」といふ「成程々々不審な筈なり、我は定まる妻も無ければ、其方の心いきを聞いて其の上で、急に請け出し此の世は扨置き、永き來世まで添ふ氣ざしぢやが、何と竹五殿より、身どもを大切に思ふといふ起請を書いて給るまいか。」とあれば、吾妻打ち笑ひ、「御仁體に似合はぬそんな前方な事は、言はぬ者でござんす。今までは奥深う存じまして、心がおかれましたに、今の御一言で御目にかゝる事も一向五月蠅うなりました。」と、手強く申し放せば、「こなた程の全盛の君が、請け出さるゝが嬉しいとて、昨

申し直せど、重ねて色里へ通ふまいといふ一札なければ、許すべきとの事、竹五殿に此の事をいひて、當分親旦那の氣休めなれば、一生此の里へ、足を踏ん込むまいといふ一札をなされて進ぜられ、さて親旦那御機嫌直りし時分、又通はせられよといろいろ申せど、其方が一日見えぬと命がないといふ故、通ふまいといふ一札はならぬとあるゆゑ、是非なく今度勘當の身となり、遠つ國へ下され給ふ。何と其方がいはれし通り、眞實から竹五殿が大切ならば、親旦那御機嫌のなほるまでは、假令五年七年でも、御爲なれば逢ふまいといふ心底は据らぬか。其の心さへ極まらば、我等今より夜に日についで、竹五殿の跡を追ひ、連れ歸つて色里へ、向後通はれまいとあると取りなし申して、當分勘氣許さるゝ樣に、取り繕うて見るべし。さるに依つて其方の心底を聞かん爲に、此の頃買手の大臣となつて心底を引き見しは、極意を聞かん爲許りぢや、斯ういふ我等に聞きも及ばれん、竹五郎の後見役をする、手代藤七といふものぢや。」と、始終を語れば、吾妻は愈けうとがり、「何とやらん此方さんのいはんす事、一つとして合點行かず、しかし御手代の藤七殿とは、逢ひました事はなければ、どのやうなお方やら、御顔は存じませねど、みな御供して來る衆の噂を聞くに、藤七殿とやらんは、四角四面な殿子と聞きましたに、方樣は色白くお公家樣の如く立ち振舞ひ柔かに、お年も竹五さまに餘り違はぬ體なるに、後見役とは何うでもこな樣は紛れものぢや。」と受け付けねば、「是れは尤も至極なり、紅は

うが、愈竹五殿が如何様に文していはれうが、わかされうが、我等指圖致すまでは、眞實逢はぬ氣かこ」「中々日本の諸神をかけて、逢ひは致しますまいが、文の取り遣りは親御様の御耳に立つ事でござんせぬ程に、文許りは遣らして下さんせ、責めてそれなりと樂しみにこ」といへば「それ〳〵其の氣おやに依つて、憚るばかりが心元ない。竹五殿は既に親の命を背き、遠國へ流され者のやうになりても、郭通ひも止うといはれぬが、それほどに此方に深うなつんでおや、それに懐かしいの戀しいのといふ文を遣らせられては、又元の杢阿彌、其の時は今の勘當よりは、中々嚴しい事でござらう。爰は此方が竹五殿を、我等思ふ同前に大切におもひ召さば、ふつと疎遠な振をして、恨みらるゝをお爲ぢやと思うて下されねば、若旦那の爲にならぬ。さう心得て此の節は文が参らうと、御返事もなされな、我等呑みこみ居る上は、末は芽出度う御夫婦に致さう。爰は何なしても方便でござる。」と、あおだて〳〵云ひまはさば、「如何にも〳〵、此の上は、兎角に其方様を頼みあげます、どうなりともよいやうにこ」とあとは涙で脉も浮く許りなるを、さま〴〵諫めて歸り品に亭主を呼び出し「彌此の中先金を渡して極めた通り、太夫事當月中は、假令我等來ぬ日ぢやとて、ほかへ貰ひも借しませぬぞ。」と、主人が口まで堅めて立ち歸るを、太夫も門まで送り出でて「愈彼の御方の事、首尾能くお歸り遊ばすやうに、くれ〴〵頼みあげますこ」と涙とともに頼み「何がさて申し合はせし通りの、愈御心に堅まりし上は、

すぐに今宵是れから打ち立ち、一日も早く伴ひ歸るべし。歸宅以後此の里へ移しなりとも、必ず／＼逢はふ、事は扨置き、文の取り遣りも堅う、無用にせらるべし」と詞を堅めて歸りぬ。揚屋の亭主下野まで、斯かる樣子はしらず、「まだお馴染もないに太夫さまの、今宵一夜の別れをさへ惜しませ給ひ、御淚姿はお敵樣より此方から、大分のおなみやうと存ずる。いづれ物柔かな、女中を見るやうな、御生まれつきい大臣、あの御器量で金銀に事缺き給はぬ御暮しは、太夫殿方の命取りといふもの、道頓堀の野郎にも、あれ程の御器量は有るまい。」といへば、太夫は心の中に其の筈の事、昔が昔ならの上人にはいはず、別れの淚分に引舟にも是れを語らず、たゞ仲五さまのお首尾のよいやうにと、愛染樣へ心での立願等でない心中、人こそ知らねほんに愛しい心意氣ではあるまいか。

## 第五　卜思案が金子三兩

### 揚屋の酒むかひ末社宮雀口

神風や伊勢より御下向お芽出度いと、手代の太郎其の外、日頃お目掛けられし末社共、悦び勇んで門まで迎ひに罷り出で、大臣を中に包み、[illegible]の大座敷へ入れ奉り、早速上座へ直し、[illegible]掛けるに、二川日屋に當月中は留め舟にて、あれに怒り卸され、其の經緯深い客めで、しかたも貸しもせぬとぬかしますと申せば、大臣少し不機嫌にて、「勤めの身の約束有るは道理なれば、下向と聞

さなばちよとなりとも來さうなものぢや。日頃と違ひてちときこえぬではないか。」とあれば、何れも詞を揃へて、「旦那に少し氣をもたしまして、後程寂しい時分、によつとござらうと云ふ事でがなござりませう、外の女郎樣がたは存ぜず、彼方においてはお前許りには、微塵御如才のない所、われ〳〵慥かに請合ひつ。」と、取做し申せば、「いづれさうはない筈ぢや。」と、是れにて御機嫌なほらせられ、「扨長日和は續く、道中賑ひ餘程面白うあつた。」とあれば、おぐらもろこしからすき高間など、一つ所に煙管を揃へて、「われしらもお伊勢樣へまゐる身になりたや、明星が茶屋相の山など噂聞いてさへ、氣が勇むやうな、あはれ夢になりと見たや。」との願ひ、幸ひ酒迎ひがてら、此の家に伊勢の樣子を寫し、參りたがらるゝ女中に見せましてくれ、お初穗は是れからお取り替へ申すぞ」と、兩の袂より一歩四五百出し給へば、末社を始め家内の上下勇み悅び、「先づ旦那が我等が爲の大じんぐう、末社はわれわれさらば宮廻りをなされませ。」と、砂の善六黑塗の紙莨入れを烏帽子に著て、「先づ是れがよい客を釣らせらるゝ、西の宮の夷殿。あなたが身請大明神、根引の松を植ゑさつしやれ、是れなるが茶臼の宮本地は身上り菩薩、隙な女郎樣方は格子に曝され給はぬやうに、十二燈をあげられませ。」と、口を叩けば、「太夫うきなされませうば、○の○○な味のよい所を、御案内申さう。」と云ふ者もあり、料理人の六兵衛上下を著て碁石を籠に入れ、「揚屋方の座敷ふさげの砂になる客を蒔き出す、お白石を蒔かし

ふ鹿戀女郎〇〇〇、天の岩戸〇〇〇〇〇〇〇〇、神樂のすゞ〳〵をまゐらせられといへば、是れは指し當りよい仕出しと、京の太鼓打が勇んで〇〇れば、「キット山城の國素人末社、安陰屋の佐次兵衛殿一番あげられました。」と、大笑ひになつて、是れから太神樂と六挺三味線彈きかけ、さま〴〵の藝盡し、正身の大神も岩戸をひらき、是れは面白の遊びやと、現を拔かし給ふべし。「太夫樣のお越しなさるゝ間は旦那衆寂しがらしますな。」と、末社手だれどもが、色々の事を致して時を移せど、それに御入りかと付け屆けの御文さへ參らぬ、是れは餘りなる持たせ振りと、陰へよつて誹りあふ一座の女中竹五の心を汲んで、取りまはして諫めらるれど、花なき里の心地して、太夫が今に音づれのない事、如何にしても合點行かずと、うき〳〵ともし給はぬ所へ、大坂屋の江口の君立ち寄らせ給ひ「竹五樣御下向かエ、古市とやらで珍らしい酒事してござんしよ。今日は川口屋へ參りますか、御越しと聞きましたゆゑ、お伊勢さまのお杯を戴かうと思うて、寄りました。」とあれば、「お心にかけられ忝い、さて川口屋へお出でとは、若し吾妻と御一座でござらぬか、地の客か田舍者か、ちと聞きたい事がござる。」とあれば、「いや〳〵吾妻さまと一座ではござんせぬ、伊丹の明樽樣というて、馴染のお客で、丸屋の小ふぢ樣、車屋の奥州樣、扨は泉屋のみなぎり樣か、よいうさまなどいつも出合ひまする。今日も定めし、其のお手合でござんしよが、吾妻さまの川口屋にといふ事を、お聞きなされてはや急き

うたふが詰にて聞きまし候。」と、讀みも果てず、文引き裂いて顔色變り、「さりとは心底見損じ、今まで賣たのに積られたが憎い、今日より次郎を替へて面打ちに川口屋で呼ばうか、此の無念さ汝等一代の智恵を出して、吾妻に生きて居られぬ程の恥を與へる樣な、模樣を工夫仕れ、よい思案を出すものには是れを取らすぞ。」と金子三兩前に置き、歯を喰ひしめて逆鱗ある。何れも吸物吸ひもあへず、一思案が五十八貫小判にして百七十四匁が分別、狂言作りの三八よりは上給分ぢやと皆々文殊へ立願かけ、あれやこれや智恵を動かし思ひ／＼に工夫する、中にも十郎次鼻脂を出して、「かうもござらうか、先づ茨木屋の格子の先に、只今札を立てませう。」と申し出せば、「して其の札とは。」「されば其の札の書付けが、憚りながら智恵でござります。」といへば大臣焦れて、「さあ／＼仔細を告げずに早く申せ。」とあれば、「札の表に吾妻がわけて小便だやと、筆太に書いたらば、大事の太夫が藁一把かものになつて、明日から道中がなりますまい。」といへば、「汝はそんな事外申すまい、我等が此の練れた箱入りの思案を聞いて手本にせよ。」と、玄甫が進み出て申せば、「箱入りの思案なら臭からう。」と打ち込む。「如何な／＼そんなしやらくさい思案でない、なんのねばい事はない、我々どや／＼と川口屋へ押し込み吾妻を捕へて、日本無類の不心中もの、大事の旦那をつかうたなと、粧うてゐる衣裳を剝いで、丸裸にして脚布までとつて、胴を打たせて參らう。」といへば、「何れも是れは上分別、第一氣味のよい事な

かのお客の名を聞きまして、興も明日も醒め果てて歸りました。皆の衆も名を聞かれたら、おそらく横手を打ちやるであらう。」といへば、大臣聞かれて「早う聞いて手が打ちたい、誰ぢや。」とあれば、「あづま様を此の頃しめつけて置かせらるゝ大臣は、御家老の藤七殿でござります。」と申しもあへぬに、座中一度に手を打ち、「是れは我がへけるわ。」と、興をさませば、大臣愈腹立ちあり、「さあ〳〵愈點えるわ、此の頃手代の藤七め、頻りに意見をする故親父の悪性に合はせては、我等が遊びは磯た事おやが、出所がちひさい所なれば、狹き心からせわ〳〵しういふと思ひ、勘兵衛とは謗つてゐたが、扨は己が下地吾妻とくさりあうて居る故に、親から讓りの金銀さへ自由をさせず、自分の榮耀を致す事、刻みても飽かぬ奴、此の上は猶以て吾妻を請け出し、藤七めが鼻の先で、さいなまねば腹が癒ぬ。」と、大方ならぬ腹立ちにて酒事も可笑しからず。是れから鹽町の下屋敷へ行きて、彌身請けの催し、勘兵衛太郎右衛門を招き寄せられ段々を語り、「堪忍ならぬ所なれば、譬へば身を賣つてなりとも金銀を才覺し、吾妻を請けて藤七めが目の前で、存分にせねばどうも蟲が靜まらぬ、さるによつて立甫を身請けの相談に、親方所へ遣はしたれば、返事次第に引きぬく合點、何時もの通り火急に金の才覺せよ。」と、切齒をなして仰せらるれば、勘兵衛始終を承り、「是れは我の折れた穿鑿、今おもへば御家の御爲を存じ、御意見申したるにてはなく、己が戀の障りとなるゆゑ、意見に擬へ旦那をせ

す。それは福わかし是れは貧乏の業わかしと、心ある御出入りの者は嘆き侍りぬ。

風流曲三味線四之卷 終

# 風流曲三味線五之巻目録

# 風流曲三味線　五之卷

## 第一　時の用に立つ金の鷄
### 獨寐の牀に氣をやむ娘

御家第一の重寶金の鷄と申すは、人王四十五代聖武天皇、南都大佛殿を御建立ありて盧舍那佛の金銅の像を作らせ給ひし時、陸奥國小田といふ所より、始めて金を掘り出し此の尊像をぬり奉る、其の餘りの金を以て此の鷄の形を鑄させ、すべらぎの御代榮えんと、東なる陸奥山に黄金花咲くと大伴の家持詠みて奉りし、歌の褒美として下し給はりし鷄、仔細ありて佐渡屋の先祖に傳はり、代々是れを祕藏して、寶藏の三階の七重の箱の中に入れ置く。元朝蟲干年中に二度の外出づる事なく、則ち手代勘兵衛例年其の節出し入れして、有る所を知るゆゑ相鍵を拵へ置き、藤七他行の夜を覗ひ盜み出さんと心掛けしに、幸ひ今夜藤七は據なき用事にて、天滿まで出でける間に、難なく藏へ忍び入り、外家共は其の儘にして、元のごとく錠をおろし、下一重の眞塗に、いつかけしたる箱一つ許りに入れ、風呂敷にてよく包み、三階を靜かに下り、所々の錠前を音せぬ樣に竊かにおろし、玄關まで

になほし「なんと此の頃世間には何か流行りますぞ」といへば、「嵐と半四郎がいかう流行ります」と答ふる「拙者は若い時から芝居嫌ひで、十年にも二十年にも見た事がござらぬ。此の前鹽屋九郎右門が花踊りといふを見ました儘でござる。たゞ此の頃流行りますは熱病でござる、小兒などは痘疹の初發のやうにござる、大かた風藥を用ゐて大驗を得ます。」などと、物堅き噺し一ツも胸があはばこそ、扇使ひ、欠伸をいため、さま〴〵窮屈がる身振り、可笑しさを心に納めて、隨分仔細をこねまはす所へ、梅薫家來の角助周章しく参りて、「順慶町のおらん殿が、御血の道とやらで御目か眩ひますと申して、急に呼びましに参りました。」といへば、「是れは參らずばなるまい、承れば若旦那には、娘が方へ不通に御越しもないげな、最初此方の御取持ちぢや、聞えませぬぞ、折節は御出でなさるゝやうに、取りおはせをいうて遣はされ。女でござれば、斯んな事がなくい〳〵存じて、目眩ひがな參つた物でござらう。旦那へもお歸りなされたら、此の通り心得ていうて下されし」と、とつ〳〵として出られしが、「誠に忘れた、只今の薬箱を下されと勘兵衛に申して取つて、隨分早う順慶町へ向けて参れ」と、道より角助を歸さるれば、角助佐渡屋へ立ち歸り、「勘兵衛様に旦那の薬箱を遣はされて下されませ。」と申せば勘兵衛は、「梅薫長居に退屈して近年にない氣をつめた、ちと休息して鹽町へ行くべし」と、喜齋と云ふ小坊主に腰を打たせて居たりしが、是れを聞きて、「こりや喜齋、其處に有る風呂敷に

しなされたか、勘兵衛が今の顔付きでは、てつきり旦那はお留守であらう、近頃嘆かはしい事ぢや。身共がお爲を存じて御意見を申し上ぐれば、勘兵衛に可笑しさうに此の藤七に負けまいと、臂を張つて面白い顔を、一日の中には五七度もして見する。今日はいはうか、明日はいはうかと思へども、勘兵衛は古參の者なれば、我にいはれて默つては居ぬ筈なり、然る時には互に言ひ分となり、言ひ分になれば彼もお家に勤める事叶はぬ、勿論身共も、勤めて居られぬ首尾になつては、私の意地をいひて事を缺かしますといふ者ぢやと、いつからやら彼へは用捨をして物をいへば彌以て勝つに乗り、可愛やな、趙の國の廉頗藺相如が古事を知らぬからぢや。威勢を爭ふはまそつと身共等より、智慧の有るよい衆が古來からした事ぢやが、廉頗がやうに、主人のお爲にならぬといふ所に、眼をつけて、却つて我が非を悔みて藺相如に詫びたとある、兎角眼が明かぬからぢや。皆の者風呂の下の火はよう消えたな、勘兵衛は又旦那殿と一所に夜明けでなくば歸るまい。若旦那の御牀はとつて有るか。其の帳を持つて來い、ちと當つて見る事がある。」と、十露盤もつて奥へ入れば、丁稚小者は吐息をつき、延びなどする所へ、表を叩くを誰ぞと明くれば、勘兵衛隱居より立ち歸り、「藤七はもう寐たか、こちらは何も内證しらぬかと思うて、仔細らしい顔をして、澤山さうに此の勘兵衛を使ひをるが、笑止や今に化けが顯はれう。」と、立聞へ上り、うろ／＼と尋ねて、「喜齋爰に風呂敷包の物があらうが見なん

様の事も心に掛けず、兎角氣を病まぬやうにせらるべし、脈體なければ別條はあるまじ」と、養生の品をいひ聞かさるゝ所へ、角助薬箱を取つて参つたと指し置けば、「今宵は爰に此の薬箱を留め置く、若しも夜中、又目眩ひ心あらば、此の下の重に安神散を入れ置きたり、それを白湯にて用ゐられよ、定めし變はあるまじ、明朝やうすを聞くべし。」と、角助に連れ歸らるれば、おらんは跡にて又目眩ひのこぬやうに、用心に安神散を呑み置くべしと、風呂敷を解き眞鍮箱を開けば、薬種にはあらで、金の鶏に、すべらぎの歌書きし色紙一枚添へてあり。是れは内々聞き及びし佐渡屋の家の寶物、年久しく勤めても下々は見る事叶はず、年に一度より出ぬよし、それが何として此所へ紛れ來るぞと、大かたならず肝を潰し、色々思案をして見る程合點ゆかねば、まづ様子も有るべきに、詮議の有るまで沙汰をよなと、お物師腰元などが口を堅め、長持の中に入れ置き、御母屋のさなりを聞き居たり。斯くて勘兵衛鹽町へゆきて、屋守の九右衛門に誰も見えぬかと問へば、「若旦那様の暮方から、紅甫殿や其の外二三人連れにてござつてござる。」といふを、聞きもあへず座敷へ通り、「さあ〳〵ひよんな事が出來ました。金鶏を鹽梅よう盗み出しました所へ、梅薫がまゐりて、如何に醫者が流行らいで、行く所がないとて、人の心もしらず、可笑しうもない長咄を致して歸りましたれば、藤七が戻つて『私を御隱居さまへ使に遣はしました。其のあとで、金鶏を藤七が取つて置いたと喜齋が申します、まあ是れは

遊ばせたしと下書書いて指し出せば、竹五郎是れを取つて見給ふに、

一札之事

一貴殿留守之内、御内方と密通仕候段御見屆け被成、卽時に重斬に可被成候處を、今一度親共へ今生の暇乞仕度候間、少し之内私一命を御預け被下候へと申し候御斷り、御聞屆被下、暫時御赦し忝う存じ候密夫に紛無之上は、追付立ち歸り如何樣とも御存分に罷りなり可申候爲念如件

竹五郎

鷹野外記左衛門殿

竹五郎讀み終つて「して是れを書いてどうする事ぞ」とあれば、「されば此の一札を、外記左衛門殿に持たせて玄關へ仕掛けさせ、六ケ敷うねだらせ、藤七へは何と旦那の御命を救ふ事ならば、假令十萬兩出したとて惜しからぬ事、此の津一番の長者といはれ給ふ御方の、五百兩や千兩で、此の外聞買はれうならば安い物でござる。後見仕ながらこんな不義をさせてと、世間でさま〴〵申さば、此方までの名が出るでは有るまいか、此の勘兵衛は、金銀づくで首尾よう内證で濟まう事なら、一萬兩でも出して沙汰なしに仕度いものと存ずると、我ら相槌を打つたらば、藤七が金で扱ふは見えた事、さあ

其の節竹五郎が膝の下に敷きて、斯くの如く一札をさせて置いたり、主人の手跡か見知るべし。是れを見よ」と件の一札を投げ出せば、藤七二三返も繰り返し、よく〳〵工夫して申せば、「成程主人手跡にて、面も判まで据ゑられし上は、密夫に紛れ無之所、流石は御侍様程あつて、御神妙なるなされ方、感心致し候。扨竹五郎を御存分になされし上、御内方様は何と遊ばす事と尋ぬれば、「愚かな事ないふものでな、竹五郎を切られし刀にて、すぐに女めもずた〳〵にためす。」といふ。「それでは世上へ密夫の沙汰廣く罷りならず、御爲になり申すまじ。貴公は侍、竹五郎は町人の儀、御存分になされてもらか御高名にはなるまじ、其の上竹五郎と御内方様を御手討ちになさるれば、御自分の御一分相立ち申すや。承りたし。」といへば、「中々不義の者共を手にかける上は、侍の本望。」といふ。「何とも其の段心得がたし、兩人を手にかけられてからが、武士の妻女が盗まるゝ恥辱は、千人萬人相手を切りさいなされてからが、剰へは仕るまいと存ずる。然らば聲高に密夫の詮議なさるゝ程、御身分の御恥辱を觸れてまはらるゝに似たり。殊更御立身の望み武運にかなひて、御親類方の御取持ちゆゑ、近々御身上御片附きなさるゝ御障りにもなるべし。此の度此の妨げにて御片附きなき上は、永々御立身の願ひ相叶はず、御先祖の家名を埋ませらるゝと云ふもの、たゞ穏便に沙汰のないやうに、御思慮あるが肝要と存ずる。」といへば、勘兵衛側にて是れを聞き、よい所と差し出で、「是れは藤七申さるゝ通り

時の間に何萬貫目の埒もあく、大切なる印判のゑ、平生懷中して居らるゝ事、曾て以てない事、それに其方内儀に逢ひに行かるゝに、印判持參せらるゝ段、如何にしても合點のゆかず、是れは貴殿より詮議せられいでも、此方から吟味を遂けねばならぬ所。先づありさまは家持か借家か、讀人の下らぬ人なれば、此方より人を添へ町所へ屆け申し、御内方樣もあるや、又近々丹州への有り付きもあるやの樣子相違ぬべし。若し此の二品相違に於ては、其方を相手にして御代官へ訴へ、有無の詮議速かに致し申す、それ誰にてもあれ仁同道いたし、御宿所へ送り屆け、手寄組中、お借家ならば家主へ屹度屆けて來れ」と、件の一札を懷中し、苦り切つていへば、固より外記左衞門は妻子もなく、宿にははかま一つに二疊敷の小借家住居、歌骨牌の歌を書いて、是れを渡世の種とする男なれば、人に付けられ町所へ屆けられては、化けの顯はるゝのみにあらず、さらりと今日切りに所の住居ならぬ身なれば、前の恥辱になる。」と、或所で至極いたして「此の事沙汰なしにして歸る上は、雙方に言ひ分ないといふもの、先づ身共は罷り歸る、其の一札を返されよ。」といへば「沙汰なしにして歸らるゝ上は、此の一札の入るべき仔細なし、是れは拙者預り置く、是非に詮議をせねばおかぬ。」と、却つてこちらから大きに具合喰ひ違ひ「いやさ人を添へらるゝには及ばぬ、侍の女房を盜まるゝこと、言ひ募る程手ゆすりを喰はせば「扨々濟んだことをむづかしう云ふ男ぢや、そんなら一札も取つて歸るまいわ。さ

女市大きにけでんして「いや／＼、私は夢にもぞんぜぬ、是れは第一よう有るまいと申したれ」とはや告をぬりあひ仲間いさかひになることを可笑しかりき。所へ隣りの善六郎より帰りて申すは「吾妻様身請けの義、親方へ愈〻相談仕掛けましたれば、先達て市殿へ申すとほり、諸事七百五十両で埒が明くと申し進ぜし處に、其の後御返事がない故、ほかよりの御方へ八百五十両で、今日明日に身請け仕る契約いたし、手付金三百両も前請取り申したれば、最早おほし召し切り下さるべきよし、親方も殊の外残念がりましたる」と申せば、座中手を打ち「何處も彼も手筈が違うてくることぢや」と、何れもきたれば、大臣大きに力を落され「是れは只事ならぬ不首尾ぞ、扨其の引きのく先の名は聞かなんだか。」「其の段も承り届けて参りましたが、甚うお匿しなさるゝ程に構へて申すなと、私へ口を堅めて申し聞かしましたれども、旦那お尋ねなされまするに隠しませう筈にござりませぬ。請け手は御手代の藤七殿でござります段、しかと承り届け参つた」と申すと、勘兵衛殿「扨々至極精を仕形、兎角此の段お隠居様へ仰せ上げられ藤七を罪に落され、太夫殿をお手に入れられいでは、御一分の立たぬ所、主人のお逢ひなさるゝ女郎を、家来の身として請け出す事、打物とは申したから、お前も御不便掛けられまして、お枕を交されますからは、奥さま御同前、然れば旦那の奥さまを奪ふ道理、憎かに、鋸引くが物に有るか、是れは却つて旦那御仕合はせの御吉左右」といへば「成程いふ通り最早

せば、勘兵衛悦び、頓て披き見れば、風呂敷包慥かに請取申候、梅薫他出故爲念如此に候、佐渡屋藤七殿、梅薫内鹿田十助とあり、「是れは究竟の物」と座敷へ持つて出で、「藤七が金鍔の事申し出さぬこそ道理なれ、己が隠して吾妻に逢ふ事、終には知れて御家に永く勤める事なるまいと高をくゝり、兼てより身構へをして、種々様の寶をも幸ひにして、他所へ小出しをして置くと存ずれば、是れを言ひ立てにして片時も早く御隠居様へ御聞せ上げられよ」と勸め申せば、「成程我もさは思へども、人の悪事を言ひ上げる此の身が、さりとはすゞしからず、万一藤七と對決に及びなば、我等が悪事も言ひ顯はさん、然る時は互に組んでをらる所が身の難儀となるべし。爰は汝が家を思ふとの言ひ立てにて、藤七を相手にしていうて出るがよかるべし。親仁や母へは我等内證から此の段々を言ひ立て、表向きと内證からと、尾鰭をつけて言ひたてなば、即座に藤七自滅して、それから跡は我等が儘、さあ此の思案に打ち付けよ」と座中摑へて手を打ち、悪い事に智恵のはしりし案者を頼み、口上書を認め、勘兵衛一人にては後便りなしとて、玄甫後に引き添うて、「言ひ落しの所は拙者承る、ぬかりはせぬぞ」と、兩人門出の酒を過し、隠居の前へいで、其の頃は八月中旬より、終に藤七と爭論に及び、一家二つに別れ、藤七方、勘兵衛方と、互に臂を張り目に角立ててりきみあふ、是れぞ破滅の前表と時の人噂きあへり。痛ましいかな〳〵。

すべからく大切なる役目と存じ、晝夜心を盡し御奉公申し、終に遊女町へ参りたる儀曾て以て御座無候。其の上吾妻とやらんは關東の慰名と承りたる許りにて、女に吾妻と申す名、只今が承り始めにて御座候。殊更金鷄の事、一年に兩度の外拜見を遂げず、盗み取りたる證據なく、例年元朝並に二度の出し入れにも、勘兵衛と私と立合ひの上錠を下し、鍵を若旦那に差し上げ置き候。假令ば私盗み取つたればとて、勘兵衛が金鷄の見えぬ事を只今存ぜし事、是が以て心得難し。今些十が元朝かの出し入れの時節にもあらぬに、藤七金鷄を盗みつらんと推量して、御寶藏を吟味せられしや、此の段如何に仕りても不審候」と申し上ぐれば、虎安聞召し、勘兵衛に仰せらるゝは「金藏にあるきを見届けて申すや、然らば一應我に尋ね、指圖を請けて寶藏へ入り吟味すべき所に、汝一人の心得にて、かく吟味致しまし、定めて金鷄を藤七盗み隠せしといふ沙汰を聞いて、吟味仕度きとの願ひにや」と仰せあれば、勘兵衛承り「御意の如く、私とて御寶藏へ入り吟味可仕様に無御座候、ある者金鷄を盗み、即ち福薫方へ預け置き候節、福薫家來方より藤七方への請取手形、手を廻し私取り置き候」と御前に差し置き、「福薫を召し出され御吟味なり下さるべし」と申し上ぐれば、虎安披きて見給ひ、藤七を近く招かれ「福薫方へ風呂敷に包みし物を遣はしゝや、速かに申すべし、少しも偽るべからず」とありければ、藤七此の請取をつくづく見て「是れは日外福薫方へ、葉箱を持たせ遣はせ

逢ひ、近日請け出すべきとの契約せしは藤七に極まりしが、大事の所ぞ恐ろしい事はない、眞直に御隱居樣へ申し上げよ」といへば、市彌堪り出で「成程こちの太夫さんに逢はんして、請け出さうといはんしたは、藤七樣でござんす」といふ、藤七大きに怒つて「おのれは終に見た事もない女童の、何者に頼まれ、此の藤七に無實をいひかくるぞ」と、大きに急いて疊を叩いていひければ、市彌はけうとい顏して「こなさんの事もいはぬに、いかう腹立たさんすお人ぢや。わしは竹五郎樣のおため、太夫さまのお爲を存じまして、藤七さまの事こそ申さ、終に一座した事もないこなさんの事を、なんの意氣筋張つていふものでござんしよぞ」といへば、勘兵衞もかいて「やれ市彌、藤七が叱るとておへとも恐い事はない、うろたへずと心を落ちつけていへ、あれが藤七ぢやわ」といへば市彌更に合點せず「いえ／＼、こちの太夫さんに逢はんす藤七さまは、色の白い女のやうなもののいひで、あんな恐いお人ぢやござんせぬ。根が野郎の果でおぢやによつて、今でも立ち振舞ひに女らしい所がござんす。あのやうな理窟臭い男ぢやござんせぬ」といへば、勘兵衞夫婦其の外、日頃念頃なる者共「是れは市彌何うしたいひやうぢや、佐渡屋の藤七とては、あの藤七より外にはないが、胸に手はないか、酒には醉はぬか」といへば「一つかもない、一度見たお客さんでさへ見そこなはぬもの、まして藤七樣は度々ござんして好い殿ゆゑに、わしも目を放さず見とれてゐましたゆゑ、見損ふ事ではござんせぬ」とい

ふ。禪門つく〴〵樣子を聞召し、「如何さま是れは藤七が權をそねみ、ほかに藤七といふものを拵へ、世上に惡名をいひふらせ、罪に落さんとする佞人有るには極まつた。兎角寶藏を吟味し金鷄なきにおいては、勘兵衛手前より詮議して出すべし。それ〳〵藏を吟味すべし。」と、他所に歷々としてくらせし、お出入りの手代共に仰せ付けられ、母屋の藏を吟味させらるゝに、金鷄なきに極まりし所に、御隱居の表の格子に、何やらん張紙ありと、下々まくりて御前へ差し出せば、一首の狂歌なり。禪門讀みて見給へば、末の世に、家潰さんと吾妻なる、身請けのために金花散るとあり。禪門暫時再吟あつて、涙をはら〳〵と流し、「此の狂歌は全く凡人の作にあらず、察するに先祖の何某我が家の斷滅せん事を未然にしらしめ給ふ御告げの歌なり。今詮議する金鷄に添ひし、家持つすべらきの御歌を飜案して、我に告げ給ふ上は、此の金鷄の盜み手は世倅竹五郎に極まれり、それ〳〵召せ。」とありければ、勘兵衛方には苦り切つてぞゐたりける。所へ順慶町のおらん罷り出で、恐れながら此の度變方の申し分は皆私が業にて候、其の仔細は先年私親方、若旦那を申し請けられ候時分、私に假初の御詞をかけられ、それより御不便を加へられ、順慶町にさしおかれ、わりなくお通ひ遊ばされ、憚りながら世までもと、有難いお情に預りし所に、いつぞの頃よりか同町の[illegible]遊ばし、毎日お通ひなさるゝ[illegible]

いたましく、獨寐の寂しさも吾妻といふ女郎の思ひと、女心の果敢なくも君と吾妻が中を絶ちなば、昔の如く又君方へ、變らず御出で遊ばされんと存じつゝ、女の思はれもなき男の身振りに姿をかへて御家老藤七殿と名乗り、若旦那のお爲なりと僞り、互の中を裂かんと仕り候へば、又此の頃かの吾妻を根から引きぬき、御手前へ入られん催し頻りなれば、斯くありては愈此の身も捨てられまゐらせん事の悲しさに、如何にもしてかの女を我が方へ引き取り、何方へも遣はし申さんと案じ煩ひし折から、御家の重寶金の蕾を、權兵家來計らざるに持ち來りしを、女心の淺ましく、前後の考へもなく、知れぬ人を頼み三百兩の質物に入れ、身請けの金の手附けに遣はし、竹左郎樣方への根引きの御企てをさまし申し候。是れ皆竹左郎さまの御情を慕ひまゐらせ、よしなき惡事を仕る儀科、我が身ひとつに極まり參らせ候、いかやうとも此の身を罪に仰せ付けられ、竹左郎樣藤七殿其の外の御衆中を、御赦免なし下され候はゞ、忝く存ずべし」と、涙を流して申し上げれば、權門を始め皆々ともに横手を打つて驚きぬ。かゝる取り込みの中とも辨へず禿の市彌に走り出で、おいらんに取りつき「是お藤七樣、お前はこりやなにならんしたか、太夫樣を身請けさんして、女ではつまるまいぞや」といふも可笑しかりき。權門委細聞き屆けられ、權兵衛を召され「汝が娘三百兩の質物に金錢を遣はし由早速請け返して戻すべし、さもなくば御代官へ訴へ申し、罪に行ふべし」と、此度仰せ付けらるれば、

引き出す伽羅は掛木のごとく、珊瑚樹は五匁から、百六十目までの無疵の玉二千三百、青磁の道具柄鉄限りもなく持ちつゞく。飛鳥川の茶入斯樣の類はごろつけども構はず、かますに一ぱいづゝ投げ込み何百人か汗をしてかたげゆきぬ。其の外人魚の鹽引、瑪瑙の手盥、水晶の水風呂桶、頼朝殿の頭巾、浦島が庖丁、楠殿の前巾著、大黒殿の千石通、曾我の十郎が百匁の手形、虎殿の胸掛、同じく玉蟲、玄宗皇帝の鼻毛拔、金平が大杯、俵藤太が釣懸升、東坡先生の人間第一の水を進め給ひし、○○のこれも壹斗樽百、是れ許りは欲しや、榮耀な輸人へ半合を、金十兩に極めて手廣く賣つて根本をなし、○○屋の○○と名を取り、時の間に見事な身代になる事ぞやと、難波の慾人寄つて願ひ

## 第四　名殘は盡きぬ涙の酒盛

### 郭の花も散り〳〵になる大臣の身上

一朝の女郎に位のつくは、何時からにても客次第なり。憚ながら男あれば自ら器も重く、一座もでくるものぞかし。昔も茨木屋の吾妻は、竹五大臣の光にて、さながら人間のほかのごとく、雲上に構へ、幅なき男は中々お袖に縋り難く、奎盛郭に肩を並ぶる女郎もあらざりしに、禿市彌立ち歸りて、だん〳〵の樣子細かに語り、竹五さま御勘當のよし聞くより胸ふさがり、納戸飯も咽喉を通さず、涙にくれ竹も染まる許りの嘆き。日頃御目かけられし人々立ち變り入りかはり、御事のみ申し出して悔

て出し、「定まつて鶴のある所に願ひ置き、龜の居る若細に蛙を置く事、如何なるいはれとぞ。」とあれば、亭主畏まつて、「上に歸る時の心、蛙は歸るの緣をとり、是れなる雪中の梅は寒氣に止みて、榮華の春に逢はせ給はんと、祝ひ申しての事。」と申せば、「是れは亭主きめ細かに氣を付けられての祝ひ、此の褒美に。」と、懷中に手を入られ心は昔なれど、「はつかしながら、懷中の鼻紙さへない仕合、氣を張つて馳走せられても、今日許りは主人が自分のもめにならうもしらぬに、勤めずと其の儘にしておいて給ふ。」との御意。「此の幾歳か貰ひ重ねし御恩、今日許りは何をして上げましても、飽き足らぬ。」との主人が心底、揚屋の聖人なるべし。「隨分汝等座を持つて、座敷を寂しう致すな。」と申しつけて、勝手へ入りぬ。「此の心入りの嬉しさ、再び歸宅せば、千金を以て禮をすべし。」と悦び、今日限りの酒盛、三草山にて道盛、小宰相、局太郎に、名殘を惜しまれしも斯くやありなんと、吾妻は一つ祝うてみつゐには涙、「それは近頃不粹千萬、別れを惜しみて嘆くは古代からあれば、此邊は氣を替へ、一銚子あげ、一投げなげて大和の百姓が心を勇め給へ、命さへあれば千萬里を隔て、何の樣な住居して居ても、逢はれまじきものでなし、其方心底次第で大和の奧のとろくに、土を弄る商賣せうとも、一生女房を持つまいが、其方も假令請けられ、いか樣な榮耀な身にならうと、我より外に、誠の契りをこめまいといふ誓言聞きたし。但し是れからが我等まだ、嫁狂ひのまへかたなる言ひ分と申し出して愧

ますれば、愛想の盡きることが出來るが、苦しうござりませぬか。」といふ。「扨は刃物三昧か、劒の舞も用心すれば怪我はないもの、申しかゝつた事ぢや、爰は我等を立てて、是非其のかはらけ二つで呑んで下され。」と、愈望めば、「然らばどんな事があらうと、愛想つかすまいといふ御誓言が聞きましたい。」「さてもむつかしい御酒でござる。何が〳〵愛想つかしたら、松尾大明神の御罰を蒙り、永く小半酒も呑まぬやうになりませう。」「そんなら飲べて進じませう。」と、金銀二つの杯にて、たんぶと受けて、二つ共に一息呑みにつゝと干して竹五にさせば、「忝い、命あらばまた御目にかゝらう。」と、是れも二つ續け呑みにしておけば、太夫酒が回りしと見えて、顏色櫻に異ならず、日頃は見えぬ額に、大疵赤みばしりてあり〳〵と見ゆる。竹五不審して、「其方いつそれ程の怪我をして、生まれもつかぬ艷顏に疵を付けられしや。」と驚き給へば、「されば最前愛想をつかし給ふなと、口を堅めしに此の面疵の事なり、私日頃酒を好まぬにもあらねど、酒過せば此のごとく、其の疵跡の赤く顯はれしを、此の幾歲か方樣に見せまじきと、下戸分になつて終に見せませざりしを、日こそ多きに今日名殘といふ日、何時ない無理を仰せられしに、呑まねば不心中に當るのみか、はや心も變り身をかばふかとさげしまれんも悲しく、疵の跡を見せ參らせしこと、返す〳〵も慚かし。」と、涙ぐみて泣く〳〵語りしは、「私が親は大梨田庄五右衛門とて、武士の引込みにて、木津の里に田地數多買ひ求め、百

鑑と、今こそ思ひ合はされけり。

## 第五　三百兩にかづき物

### 身は賣りながら儘にならぬ女

唐土の玄宗御在位の時、天下の父母たる者、娘を産まん事を佛神へ祈りしとかや。我が朝の中より下つ方、長屋掛け向ひに暮すほどの者は、男子をまうけて末々我が世渡りの業をすけさせ、老いて少しは樂をせんとの願ひはなくて、小見めのよい娘をまうけたがる事道理ぞかし。下々の男童は、必ず生まれつき不骨にして横道なる事を見ならひ、親の助けとはならいで、惡性狂ひに金の才覺、人さへ合點すれば明日顯はれて迷惑に及ぶ事も構はず、當座賄ひの僞りを申す。後には親一門へ難儀をかくる世倅幾人か見及びし。然れば下々の願ひとても、譲るべき金銀家屋敷もなければ、同じ腹の痛さ、同じ造作ならば、一つ取りに娘の子こそよけれ、琴三味線舞など教へて、十五六より取り親をして、お大名樣方を憚りながら婿に取り参らせ、其の身の仕合せにて若殿樣のお袋樣になる事、二親に昨日まで肩に置きし棒を止めて、俄に置頭巾、嗅は夢に見たることもない、娘が方から呉れし著古しの縫入りの著物著て、五十年もならぬ齡にせし髪を、筆齡にするも可笑しかりき。但し一槪に娘を持てば出世するにはあらず、疱瘡の神から運上取るやうな、黒菊石一面に引き張りし顔のみか、澤山な

るゝに、「何がさて三百兩の金を、呉れられなば、假令鯨よる海邊になりとも參るべし」との事。「此の上は何もなし。先様より、金子三百兩だに給はらば娘は遣るべし、首尾よく肝入り呉れよ」とあれば、徳右衛門悦び、急ぎ立ち歸り暫くして又參り、「先様へ段々申し入れましたれば、私次第にて御器量御覧なさるゝにも及ばず、申し請けてくれよと、即ち三百兩差し越されし」と、金子百兩包三包梅薫に渡し、「ここで急なる事ながら、明後日愛元御立ちなさるゝ筈、世間を憚り給へば、本名も御在所も高うは御沙汰なされまじ。江戸に本町二丁目絲屋織右衛門様と申して、御商賣は手代衆に任せられ、其の身は芝とやらに引き籠りて御座あるよし、筋目は成程よいお方、先づ當分は娘子の親様達へ御意に得られまじきとの事、只今お逢ひなされませぬとて、斯様に御縁御取り結びなさるゝからは、御一家幾久しく、追々御目に御かゝりなされませ」と、巨細に申せば、「萬事其方を頼むぞ」と三百兩の金に目がくれ、何の念をも入れず、「明後日の御下りを、今一日延べて下さるゝ様に、ならうならば申してくれらるべし、一門とも又はおらんが妹なりとも、篤と暇乞ひさせて下したし。」と頼まるゝ。「それ程の事はどうぞ申して見ません、まづ御用意あそばしませ」と、徳右衛門は歸りぬ。梅薫は門出の祝儀の料理など申し付け、おらん妹お園といへるは、四五年以前曾根崎森右衛門といふ、武士の浪人方へ嫁らせ、天滿の堂島におりしを、夫婦共に呼びに遣はし、おらん江戸へ下りなば、登りの程も計り難し、

及ばず、此の幾年か思ひに沈み、我一生の中此の思ひを晴らさではと、思ひ詰めし念力届き、今我が方へ迎へ取りし事生前の本望、然れども、當地の住居は虎安方への遠慮あれば、一兩日中に江戸へ罷り下る手筈を取つて置きたる所最早先達致しおきぬ。戀女房なれば、命に替へても大切に致すべし、又其方も一生添はるゝからは、可愛がつて貰はねばならぬ。」と寄りかゝれば、おもん突き退け「是れは思ひもよらぬお戯れごと、そもやそも、此方の心に從ひ添はれうものか、添はれまいものか、よう分別して見給ふべし、竹五郎樣今御難儀にお逢ひなされ、大和とやらへお越し遊ばし、不自由なお身でお暮し遊ばすよし、儘なる身なれば尋ね行き、お茶の給仕にても致し、志の御奉公を致し度いと思へども、金子を取り戻し虎安樣へ返さねば、親梅薫の身の難儀是非に及ばず、身を賣つてなりとも金銀の才覺せねばならぬ首尾のゆゑ、大和の御配所へも尋ね行かれず、心に込めて嘆き居る身の、此方に添うて竹五さまに何と言譯たつものぞ。」と思ひもよらぬ事を打ちふし嘆けば、助兵衛むつとした顔にて「それは言ひ分筋たたず、其方は既に三百兩の金の才覺の爲、勤め女になりともならんと、此の頃新町又は島原などへの、口入りする肝入りどもを賴まるゝよし聞きしが、何と勤めの身となられて、大勢の男に逢うても、竹五郎どのへの心中になるか、大勢の男に逢はれうより我等一人が心に從ひ、お内儀さまと呼ばれて樂いたされたが、遙かに増しかと存ずる。」といへば、「それは愚かなる言ひ分、

れし難波を跡になして、武州に下りぬ。是れや世間に云ふ、心中なるべし

風流曲三味線五之巻 終

# 風流曲三味線六之卷目錄

流るゝを見て、此の水のごとく〇〇〇〇〇あらまほしと、〇〇〇〇の行く日を重ねて品川に著きて心も勇む乗掛馬の鈴ヶ森を後になして、兼ねて手廻致し置きし淺草の借家に行きて、爰に居所を極め、當分商賣もあらねば、昔島邊阿彌陀の時分庵安ともに連れられ、能囃子謡連俳諧茶の湯を見及び、目なれて諸藝大概に覺えましは、今牢人の種となつて、謡の師をなして近邊の子供に指南し、其の名も仔細らしく難波江左衛門と替へて、昔は瘦馬にも腰をかけし者と、よいかげんの嘘を申して、手鼓茶の湯などに心がけなき人に教へければ、重寶なる人と、近所の者に用ゐられ、小者男二人を召し遣ひ、おとなしく際におけ置き、折節蟲腹の起るやうに口說けども、いかないかなおそろしき氣色はなくて、口を結ぶ程に、愈口喧くなつて、後は優しき詞なくて、互に毎日喧嘩じゝに聲高になれば、隣家の人様子をしらるれば、武士に似合はぬ不遠慮に、毎日めた爭論をする人と、蔑視みしも道理ぞかし。おらんは長旅の疲れの上に江左衛門に毎日せめられ、心重く氣を病み出し食も進まず、次第に色わるく瘦せて牀につけば、江左衛門驚き是れを死なしては三百兩を捨てるやうなものなり、とても心に從はずば、つまる所は吉原へなりとも賣つて、少しなりとも金を取り戻して腹をいねばならずと、謡の弟子共を頼み近邊に御醫者衆あらば、肝煎り給はれといへば、幸に近所の竹下葉安とて功者なる人ありと、早速人を遣はせば、隨分際なき醫者と見えて、使よりの先へきたられ、江左衛門に逢うて「御病氣とは貴殿事

御療治作りの事を仰せられて、何れにても早う本復いたす薬を遣はされ」と請ひつかれて譫言申すゆゑ、とりあへずされて、常人と同じやうに合點のいかぬ事をおつしやる。拙者は難波江左衛門と云うて、町人の手代なぞ致した者ではござらぬ。左様な胡亂な事をいはるゝ御方のお藥は、心元なう存ずれば、大切な女房共にたべさする事はなりませぬ。最早そなたは頼まぬ、お歸りなされて下され」といへば、おらんは藥安の袂に縋り「今申したる事に、少しも僞りはござりませぬ。國の親元から御申し遣はし下さるべし」と、押し返して頼めば、成程其の段心得ました、先づ御暇」と歸らんとするを勘兵衛おさへて「熱にうかされ申すやら知れも仕らぬ容言を、女が親元へ仰せつかはされなば、八幡こなたを當惑とはいはさぬ、急度お恨みを申す、いらぬ事の聞きやうお持たなされずと、似合ひしやうにお藥を調合して、病人にあたへ給へ」といへば、藥安勘兵衛が氣色におそれ「何がさてあのごとくなる譫語を、なんの誠にいたす物でござるぞ、成程御藥しんじ申さん」と、下人が持たせし藥箱取り寄せ、藥一服あはせ「明朝までに是れを進ぜられ、又明日御見舞ひ申さん」と、是れを機會にして歸られぬ。勘兵衛後にておらんを引き起し「こりや女、今までは胸を擦つて堪忍せしが、最早今日といふ今日堪忍袋の口が切れた、何といよ／＼我が心に從はぬ所存かやな、常とは違うた、心底を極めて申せ、悪い返事を致さば今日切りの命ぞやと存ぜよ」と、大脇指を出し枕元へくつろげ、腕まくりして

みな申し、勘兵衛が立ち退きし在所も聞いて参らう。」と、歸らんとするを引き戻し、「これや徳右衛門そんな事を云うて爰をはつさうや、いよ／＼以て憎き仕方。兎角妹聟森右衛門へ人を遣はす間、森右参られ指圖せらるゝまでは動きもするな。」と、堂島へ件の樣子をいうてやらるれば、夫婦共に驚き飛ぶがごとくに走り來り、先づ詞はなくて妹のおそのは父に取りつき、聲をあげて泣き出し、いうて歸らぬくどき言、森右衛門なだめて、「兎角は火急に武州へ立ち越え、勘兵衛を討つてすてるより外はない事、めそ／＼泣く所ではない。」といへば、おその涙をおしぬぐひ、「さて／＼忝き御心底、しからば何方までも召し連れられて、姉の敵を一太刀うたせて給はれ。」といへば、「いかにも／＼さうした所存すわらいでは、武士の妻女とはいひがたし、徳右衛門儀も憎きものとはいひながら、又傳手とあれば我がわざにもあらず。然し人の娘を仲立ちするからには、先の貰ひ手方へ参りて、直につめひらきすべき所を、休古とやらの口許りの使ひに、肝煎いたせし條不屆の至り、其の替りには我々勘兵衛めを見しらねば、敵に廻り逢ふまで、汝を何方へもつれゆくぞ。」とあれば、「何がさて／＼私とても佐渡屋へ出入り仕れば、旦那お家の怨敵願ふ所の幸ひ、たとひ勘兵衛身に墨をぬり、形を變へたればとて見そんずる事でなし、はや御支度。」と申せば夫婦悦び、藤藏にむかひ、「此の度吾妻に罷り下る身に定めがたし、萬一返り討ちにあひなば、是れ今生の暇乞ひなるべし。」と涙を流せば、藤藏常と替り眼を

いふやうは、「假初ながら、大事の門出に不覺の落涙、未練の至りなり。討つも討たるゝも過去よりの定まり事、反り討ちにあはば父生を替へて、本望を遂げんとは思はずして、心おくれしたるいひぶん、敵をねらふ者は理の劍、即ち首尾能く討つて、先き立ちし姉に手向くべし。」と、奥より長刀一振取り出し、是れは汝が母我が方へ嫁せし時分、持たせ來りし長刀にて、女共の先祖杉村の何某、信玄公川中島の戰ひに、此の長刀を以て甚だ高名せられしよし聞き傳へてあり、是れにて本意をとぐべし。明日をもしらぬ老の身、汝等が首尾の歸國をまたず相果てなば、長き形見と見るべし。」と、勇める眼にはらはらと、涙をうかめて申されければ、おそのをはじめ森右衛門、徳右衛門涙を流し、「追付け本懷を達し目出度く對顏仕るべし。」と、暇をこうて罷り出で、其の日は枚方に泊り、それぞれに姿をかへて、日を重ねて吾妻に著し、先づ竹下薬安方へ尋ねければ、薬安立ち出で對面あれば、森右衛門おそのを引き合はせ、先づ以て早々姉の敵の儀、御知らせくだされ忝し。今程敵住所を變へ候よし、何方へや尋ね申すべき、萬端御指圖に預りたし。」といへば、薬安申さるゝは、「拙者推量仕るは、元敵上方生まれにて、關東筋不案内と存ずれば、當地はなれてさのみ遠國へ、立ち退き申すべきとは存ぜず、當分所を變へたる許りにて、此の近邊に忍びをらんと外存ぜねば、おその殿はおばら神子に姿をかへて、家々へ入つて様子うかゞはるべし。又御自分は堺町木挽町、さては吉原の傾城町、又は

門の戸けはしくあけて、「御宿より御急用の由にて、御人が参りました。」と、師の許に寄り来て、「何事ぢや是れへ参れ。」といひやれば、「由兵でござります、ちと隠かに申し上げ度き事あり。」といひかねるを、「勝手に誰もをらぬか、太夫事は汝も知るごとく、ひさしき馴染にて互に心底をあかし、此の頃彼の女に頼まれた事まで具に話し置いたれば、此の女郎に遠慮する事はない、如何なる事ぞ様子を申せ。」といへば、「されば其の、此の頃お頼まれなされました敵の有家がしれました。難波江左衛門と申す名を改め、薫邊亀内と申して茶の湯の師をして、御家中横町の温飩屋の裏に住んでゐられまし、只今萬屋の忠六殿の御知らせなされましてござります。忠六殿は前方江左衛門と申した時分に、諸稽古に御出でなされてお近付きでござるゆゑに、見損じはござりませぬ、慥かに仰せられます。早うお歸りなされまして、おきく様の御本望を遂げられてしんぜられませい。」といへば、「扨々、追付けそれへかへるべし、汝は早く立ち歸り、かの温飩屋の門口に立ち忍び、他出する節ならば、何方までも行く所まで付けて見るべし。いそげ／＼。」といひつくれば、承つて走り出づる。森右衛門一間にかくれにて委細を聞き届け、難波江左衛門といふは此方ねらふ勘兵衛が替名に紛れなく、殊に先だつて露の師をせしといひしも、他の者の事にあらず、我より外に其の者を、ねらふものはないはずなるが、彼の女に頼まれしといふは、手前の女房共おはなが神戸にて、師をなせし時分頼みおきしにや、さも

在所を見當りませぬ所に、今晩はそなたから承れば、貴公の御狙ひなさるゝ敵と、名苗字が同じ事でござる。殊に有家もどうやら御聞き出しなされたやうな、御家來の物語りの體でござるが、御自分のお爲には、どうした敵でござるぞ承りたい。此の節の儀でござれば御用心と存じ、御覽じ付けらるゝ通り、態々と大小も腰にはさみませず、是れにさしおきまするごと、持つたる大小を件の男がまへにさしおけば、彼の者聞いて、「家來が最前申した儀、御聞きなされたうへには包みませうやうはござらぬ。成程今晩、敵の隱れ家を見屆けてござるが、そなたの覘はるゝ敵の本名は何と申すぞ」「されば以前は勘兵衞と申して、佐渡屋と申す有德人の家來でござつたが、御當地へ參りては難波江左衞門と申して、謠の師を仕つて居つたと承つてござる。」「成程々々此方の敵も其の通りでござる。身共は勝山奥之進と申す者でござるが、去んぬる卯月の初めつ方、目黑の不動で女と行き逢ひました、近頃お恥かしい咄でござるが、終に見ませぬ器量でござつた故、未だ拙者に定まる妻もござらぬゆゑ、若し夫もござらずば、たゞ妻に致したう存じて、武士のござるまい事ながら、戀は分別の外と申せば、他の譏りも顧みず直に口說いてござれば、身に望みあるものでござれば、是れだに叶ひませう事ならば、いかやうにも私心底にしたがふと申したゆゑ、あたりの茶店へ伴ひ、隱かに仔細を尋ねてござれば、當地に難波江左衞門と申す姉の敵がござれば、後見をして討たせて下されなば、成程拙者が妻女にな

成程こなたへ參つて、兎も角も分別をきはめませう。」といへば、奥之進聞いて、「何とやらこなたの言ひ分胡亂にござるわ。手前の女は最前も申すごとく、去る卯月のはじめつかたより、目黒から誘引いたし、歸つてから終に他出はいたさぬが、こなたは卯月のはじめ頃から、旅宿へお歸りなされぬか。」と尋ぬれば、「此方は何とも合點のゆかぬ穿鑿、女房共は今暮是れへ參るまでは、宿に罷り有り、先月まではおはら神子に姿を替へ、町中を吟じあるき、毎夜宿へ歸りし。」といふ。「是れは互に心得がたき儀、然らばこなたの御旅宿へ、拙者を召し連れられ、御内室御宿にならば、御夫婦共に私方へ御供せん。」「是れ尤も。」と兩人打ち連れ立つて葉安方へ立ち歸り、表を叩き先づ森右衛門内に入れば、おその立ち出で、「大事の身を持ちて夜更くるまで、どれにか遊び給ふ、敵を狙ふといふ、よいかこつけの禰宜こしらへ、私には恩がましういうて、大方は遊女町での御榮耀、人には寂しい留守をさせ、眞にあほでござんすの。」と、濡れをこめたる挨拶、森右衛門聞いて、「敵の有家聞き出した仔細は、此の仁よく御存知ぞ。」奥之進をよびいれおそのに引き合はせ、右之段々を語れば、葉安をはじめおその德右衛門も、是れは何とも心得がたしといへば、奥之進はおそのを見て、「扨々世には是れ程に、似たる女中もあるものか、物ごし顔だち、此方に罷り有る女に生き寫し。」といふにぞ、いよいよ不審はれず、「兎角こなたへ參るべし。」と、森右夫婦德右衛門諸共、勝山かたへゆきて内に入れば、件の女奥之進

にしばりつけ、大音上げて「花崎菊薫妹娘蘭、姉の敵龜内起きて勝負をいたせ」と、寢間口まで切つて入れば、勘兵衛肝をつぶし、枕もとにありし大脇指の鞘をはづす所を、おその長刀を以て左の腕を打ちおとせば、森右衛門、男之進、徳右衛門、立ち並んでずた／＼に切りすて、今ぞ本望とげたりと、四人一緒に笑みを含み、扨最前の二人の繩付を引き出し「おらん死骸を殺せし時分、何方に隱しぞ」と責め問へば「前方をりし借宅の、椽の下に埋めし。」とよし白狀すれば、かの家へことわり申して、埋め所を掘りかへし見れば、不便やおらんが死骸土にまぶれて、中々二目と見られず、靜かに棺にうつし入れ、葉安しるべの寺におくり、亡き後をとぶらひける。おらん幽靈成佛うたがひ有るべからず、賴もしや／＼。

## 第四　再び歸宅の悅び

### 持ちならひの太鼓ならぬ世渡り

大名の元には久しく居るべからず、功なり名遂げて身退くは是れ天の道と、功ある身さへ大祿辭して小船に棹さし、湖月に心の濁りをすましけるとこそ聞きしに、我何の功もなく、しかも後見せし若旦那を他國へ移し、若代の家を潰さし、何の面目あつて今までうか／＼暮せしことぞ、かく思ひ立ちし念を飜へす、御家を離れて遁世の身とならばやと思ひしが、よく／＼思へば、われ此のお家になく、

いふ事はおかしたる事ぞかし。此の錢は路錢にして、江戸に色友達の念頃に申し遣しおきにして、儀におもひ立つてお江戸に下り、呉服町の綿屋の七二方を心ざして、近所の店守りの手代に七二が宅を尋ねれば、「身共は京から今罷り下りて、委しい樣子は存ぜぬが、お尋ねなさるゝ綿屋の七二殿とやらは、嫡のほとゐしき身代なりしが、性惡の大將にて八年此の方に、およそ一万四五千兩ほどつかひはたして、可惜浮世に親は淺ましく、其の身は色より捨て坊主になりけるよし。承り及びしが、世にはおかなる阿呆もあるものかな、末々の語りぐさに、そんな仕果ての惡性ものゝお顔を、一目見たい事ぢや」といへば、心にこたへて赤面し、是れから靈岸島の唐物屋の太助方へ尋ねよれば、下女が出でゝ「太助樣は、三谷狂ひと堺町通ひに、大分のお金を減らされし咎によつて、親旦那の勘當を請け、長崎通ひなされし時、大坂にて御念頃になされし、佐渡屋殿とやら申すお歴々を頼み、はる〴〵お上りなされて、今は此のお家にはござらぬ。」といふ。「さては太助も我をあてに大坂へ下りしか、是れもあての極が違ふべし。」と、それより淺草の寺町の横筋に、世にありし時召し連れし草履取、髮月代もして重寶なる男と、極めの外に度々物とらせし事思ひ出して、そこにゐる由、ほのかに聞き置きしを便りにゆきて見れば、伽羅の油見世を出して、につごらしきくらし。まづ内に入つて、「角助が所はどこぢや」とあれば亭主立ち出で御姿を見て肝を潰し、「扨々變りし御顏、先だつて御勘當の樣子も承り、御若年に

竹田からくり人形にして慰むまいかと、矢庭に裸體にして下帶ばかりさせて、碁盤の上につくばはせ、おなじ太鼓が後へ廻り、「是れは大坂の竹田が細工時計、ぜんまいを以て此の人形に只今杯のしたみをのませまする、首尾ようまゐればお慰み。」と、ぜんまいぬくまねをすれば、是非に及ばず、人形のごとく身振りして手をあげ、杯の臺を取つて口のはたまでよせて、是れは許せと立たんとするを末社共とらへ、「旦那のしたみがいやか、常住樂をして甘き物をお蔭でたべて、面白い座敷へ參つて、指のまたをひろげてお金をもらふ程な、結構な商賣が外にあるか、其の替りに夫れほどの事があればこそ、旦那衆の太鼓商賣なされね、此の上にふしような事さへあらずば、末社の身過ぎせぬ者は阿呆の中であらうぞ。我々は只今一角給はると灰吹きでものお氣ぢやわ、氣にくはぬ事があつて、むつといへずこたれぬ氣ならば、太鼓をやめて旦那になれ。」といへば、無念ながらいへば其の通りと、飲むまねしてさしおきぬ。何れ太鼓持の役目とて、夕は無理酒のあひをさせられ、埒もあらぬ加賀津節を褒め、女房共が親にもかくすまたぐらの痣を申し出して、人樣を笑はせける。世に身過ぎほど悲しき物はなし。我世にありし時、心なく末社をつかひし罰かと、思ひ出して悲しかりき。或時法師竹五をめされ、「其の身になりても何ぞ望みありや。」と尋ねらるゝに、「是れは憚りながら愚かなる御一言、人は高下によらず、生を請けし者に望みなきものあるべきや、私隨分色にこりて此の顏でござります

ばす、四人の姉達(女郎)をぬかし、皆此の男が側に居寄りて氣に入り度き風情、外の末社共何れも氣をもむ
の中に、闇の夜の勘八と云ふ太鼓取分けなつとがり、竹五がする程の事を打ち込み、「あんまりなあす
ぎな、今日も旦那に目こひばかりして、やう／＼女郎ひと口買うてもらふ、取り付きの素人末社の分として
て、人もなげなる座ぶり、あまり過ぎて見惡い、おいてくれ。」といへば、打ちこまれて竹五返答なく、
目瞬しき顔付きにて、しを／＼として片傍へ立たんとするを、四人の女郎袖をひかへ、「是れ何處へい
かんす、今日の一座の花なれば驗へはなりませぬ、其のまゝこゝに。」と取り止め、異國勘八に向ひ、
申されけるには、「こなたも同じ身でゐながら、末社よばりさしやるが、何とこなたは見事太鼓持の座配
を知つてか、其の日のお客のお機嫌のよいやうに、をかしうなうても作り笑ひして嫌の間をきらし、唄
ひしわない小歌でもうたうて座を持つが、太鼓衆の役めでないか。それに先から一座の興をなくして、
法師樣を惱め給ふ竹五殿を打ちこみ、遊びの先をやりて興をさまし給ふが、末社の仕方でござるか、
竹五殿のこなれぬお人なれば、今のこなたの云ひ分では興のつきぬるのみか、喧嘩になりますが、其
の上かうてもらふ上郎とは、逢ひます私が身にして心ようござらうか、外の太鼓衆なれば斷り申して
歸る氣でござんすれど、竹五殿許りは、此方から戀ひしかける程の所思、私のみに限らぬ事、此の座
の女中方に、いづれか嫌と思召すお方はあらじ。」と見廻し給へば、殘る三人の女郎、大臣の前も憚ら

竹五は自由にゆきしが立ち歸り、座敷へ入つて新艘を見れば、順慶町にかゝへおきし梅薫娘のおらんなり。是れはと互に肝をつぶすといふは大抵の事、横手をうつて氣を取り失ふ程にて、開いた口をやゝ久しうふさがざりしが、「是れは先づ變りし御形、何として此の里へはおこしあそばせしぞ、我事此の身になりしをさぞや憎う思召さん、さりながら是れには、段々樣子有つての御事。」と、「百兩の代り、勘兵衞に誑られ此の地まで下りし所に、是非に心にしたがへと申せしゆゑ、ある夜隱かに勘兵衞方を拔け出で、大坂へ歸らんと思ひたちしに、路金の用意もなく、況して一人口をかさねて、上らん事も道をしらねばかなはず、其の上勘兵衞方へ、少しにても金子を戻さねば、萬更かたりて金を取りしにあたれり。兎角此の身を吉原に賣つて、身の代を勘兵衞方へ遣はし、暫く此の里につとめて、頼もしき人もあらば、其のお方を頼み參らせ、始終をかたり大坂へ二度かへしもらひ、方樣の御行方も尋ね參らせんと思ひしに、是れは思ひもよらぬ御見、滿足ながら此の身になつての對面は、さりとは〳〵面目もなき仕あはせ。」と、人目も恥ぢず聲をあけての歎き。竹五段々聞いて「扨々勘兵衞めが仕業、人倫の道に背く人非人、先づ彼奴が方へふんごみ、此の鬱憤をはらし、其の上にて兎も角も思案を極むべし。」とあれば、「されば私の身の代百兩を人頼みして、勘兵衞方へ遣はせしに、今は其所にも居ず近所にて尋ね問へどもしらぬ由、妾此の里にゐるとはしらず、上方への歸り

に以て、七八十両にねぎつて見よ」といふ、竹右聞いて、是れ〳〵法師、我數ならねども、佐渡屋の百九と、京大坂の色里にて、昔く名を知られし身が、此の里へ始めて來て、女郎一人請くるにねぎつてうけたといはれては、傾城買ひの名折れなれば、千両百両の外に、百両は祝儀にやつて、諸事わけよくいうて引き拔きたし」。第一は隨分小道な事いはずとも、且は難波津が外聞なれど、物事大たばに捌けよと、今一文も手に懸けぬといふのとて、このとは廣き心と法師感じて、「我等此の里で、恐ろく、物事大様に捌くと、或ひは自慢心なりしに、汝が今の言ひ分大臣に備はりた心根、中々此の法師が及ぶ所にあらず。昔時頼朝すらも未熟な時分、上總介廣常一萬貫目餘持參いたし、大分の銀子お取替へ申すと自慢顏に申せしを、土肥次郎を以て、纔かなへそくり銀を遣う持つて參りたと、大きに叱られたが、ひ、廣常此の心の廣き事を感じ、一定日本の大將となり給ふべき御器量と、恐れしと聞きしが、汝もそれにおなじ。今迄でも此の法師が太鼓持ちの身なるに、はや昔氣になつて我が物顏に大様なる言ひ分、追付け勘氣許され、三ケの色里にかくれのない、大臣となるべき心根頼もし。此の上は十ケ両でも、此の法師が取替へるぞ、心の儘にさばけ。」と、ねぎる事をやめて、先づ法師持たせ來られし、有合ふ金子百両を、難波津身請けの手付に渡し、今宵は爰にて飲みあかし、明けなば祝儀とゝのへて見すべしと、揚屋第一の両大臣、今宵一夜は他の客いたすなと申し渡して、廣き八丁の大騷ぎ、此の

家内繁昌と、揚屋仲間に是れを羨みぬ。

## 第五　○神の御利生、家繁昌

### あづまが嫁入庭には金銀の島臺

金龍山の戀しらずと、萬人の客にそしらるゝ突き鐘に、こりや夜があけたと杯をさめて、亭主が千秋樂先づ以て目出度し。宿へかへりて追付け祝儀をさしこすべしと、兩大臣末社共にそれ〴〵の女郎に、暇ごひて此の家を立ち出で、持越し酒に足も定まらず、くるわをねりて歸る所に、鎌倉屋の客が見えて、亭主がおくりて侍まゐりに三四人、名殘をしき顔して地藏の道行き語り出し、跡ふりかへし見てあれば、和國不雙の女郎、金輪際すてぬ氣と、戲れてかへる男をみれば、我方へ久しく出入りする、料理人の德右衞門ではないか。」「是れは若旦那様、何としての御下り、若しはおらんさまの御事、御聞きあそばし御當地への御越しか、先づはおいとしい事ではござりませぬか。」といへば、「されば〳〵段々の様子ら〳〵にきいて不便さに、今日請け出して難波へ連れて歸る筈。」といへば、德右衞門合點のゆかぬ顔して、「それは何とも其の意を得ぬお詞、おらん様は勘兵衞めが手に掛りてお果てなされ、それ故是れにござるは、曾根崎森右衞門様と申して、おらん様の妹聟、御夫婦共に姉御の敵をお討ちなされんため、此の元へお下りなされ、是れなる[illegible]之進様の武勇を以て、早速敵勘兵衞を、

頃日首尾能く討ちおほせられ、明日大坂へ御歸りの名殘に、夜前から此の里へ御出で、只今御歸り」と兩人の人々に竹左等を引き合はすれば、「是れは何とも呑込まぬこと、其方達は昨夜の酒がまださめぬ物であらう。成程おらんは息災にて、今は名を難波津とかへて此の浦の女郎、即ち是れにゐらるゝ、法師の當分世話にて、今日引き拔くはず。」といへば德右衞門頷き、「さうした事も此方にござりまして、森右樣と奧之進樣と、いかい料簡違ひなつめひらきがござりましたが、終にはそれで敵の有家がしれまして、本望をおとげなされてござります。今おまへの逢うたと仰せられますおらん樣は、幽靈でござります。」といへば、森右奧之進も詞をそろへ、「それは成程おらん亡靈にきはまりました、此方でも只今御自分の御肝つぶさるゝ程、横手を打つた事でござる、即ち死骸を面壁庵といふ禪寺へ葬りし。」とあれば、法師此の咄を聞いて、「さては幽靈に二百兩の手付け金渡したか、消えぬさきに取り戻したい。」といへば、竹五聞いて、「各を疑ふではなけれども、餘り不審に存ずれば、その葬つたとある禪寺へ我を伴ひ、しるしの墓を見せてたべ。」とあれば、「いかにも是れより程も近し、いざ御同道申すべし、前代未聞咄の種に。」と、法師も共に打連れて面壁庵へ行き、「是れぞおらんが塚。」と教ふるを見れば、未だ石塔はあらず卒都婆許りたててあり。「是れを見た許りではしれず、土を穿ちて亡骸を掘り出しみるべし。」と、鋤鍬を取りよせ塚を掘り返して見れども、骸はなくて横へ深き穴あり、是れは不思

# 傾城歌三味線

安藤自笑
江島其磧

# 傾城歌三味線序

花の都、京の難波に時花淨瑠璃、さく狂言のおもしろき所々をあつめ、世の人の慰みに、折節落の櫻木にちりばめ、本屋に初卷五冊に著はし、おさくは後篇となし、如實處前を合はせて十卷となしぬ、色にかけては身を打ち、家を失ふ形勢、狂言から意見と心得、見る人は身の鏡にとなへし。ことに勸善懲惡の助けともなれやせむ、といふが噂なり。

享保十七子のとし

花の三月

作者　自笑

其磧

# 傾城歌三味線一之巻目錄

# 傾城歌三味線　一之卷

## 第一　三國出村ではい利きし　男自慢の玉屋の一子

和漢共に、色道に染まりて身を失ふ事を、昔より賢き人の諸書に著はして、浮世の爲に殘し置かれぬ。今以て此の道に迷ふ人、中々人の意見、我が分別にても止りがたし。諸國其處々々の遊女に絆され、身代を潰し、樣々の難儀に逢へるを眼前に見及ぶ事、其の數限りなし。人間一生の中に、一度は傾城狂ひに取り亂さぬといふこと一人もなし。何卒面白き中程にて、氏神のおさへありて、此の遊興を止めさせ給へば、居宅を賣り殘し、商賣物を小體にし、渡世に取り續き、身を捨てて働けば、町内世間の人、親類の末々までも、今までは若氣の至りと料簡して赦しぬ、たゞ慎むべきは此の道ぞかし。昔日酒宴の戯歌に、たらふ、つるてん／＼、夕は格子に紺の尾、若兵衛殿と唄ひし小歌の出所は、越前國三國近き、若保といふ所に、玉屋新右門とて、綿商ひ手廣く、數多の手代を置きたるたる、算盤の桁を走らする算、年々に金子銀子の子增りて、所に隱れなき有德人、久しく子のなき

きを歎きしに、適男子を儲け、花にも月にも眺め、大事に育て、命定めといふ疱瘡な氣遣ひがり、所から湯尾峠の孫じやくしの守をかけさせ、都の西松尾大明神は、疱瘡の守神とて毎月代參を立て、輕く疱瘡をさせたまはば、氏子となして倅一代は、年まゐりを致さすべしとの祈願、神慮に通じ、輕く仕舞ひて跡さへなく、二親の悦び、偏に松尾大明神樣の御蔭と、氏子の印に玉やといふ家名はあれど、倅新太郎には、松尾といふ苗字を付けて秘藏せしに、ひとりもひとりからと、賢く生まれつき、諸藝に達し、しかも美男なれば、世の讃草も離れず、親仁も我が子自慢して、此の上の富貴に何にても望みなし、此の子が嫁になるべき容儀もがなと、漸う尋ね、隣國加賀の大正寺の鄕侍、轟軍右門といへる、筋目よき人の息女を緣ぎはめして、表屋作りて大普請、萬事に淸らを盡し、離れに隱居拵へ、此の霜月の吉日を待ちし。滿つれば缺くる世の習ひ、一子新太郎元服して新兵衞と改め、よろづ上方の至り風を學びぬれば、女の好く風我が身の仇となる始め、頃は五月の半ば、雪國なれど熱い時はあつく、神鳴なしのざつとした夕立上りに、川口の枝川ともに俄水の濁り、幸ひ十五夜月の光に、細網持たせて夜ぶりの川狩と、新保にて名を知られたる遊人共二三人、新兵衞さそひて川端に氈敷かせ、薄鍋かけて酢の醬油のと、生きながらの料理、命をむしるわと口の隙なく、小者諸共喰ふ時は、罪も報いも疝氣の事も忘れ果て、腰切り水に浸り、コリヤ堪らぬわとすくひ上ぐるに、月に白く閃き

や、悴が川へ陥つて居るわ。」と笑はれ、三方持つたる男が一杯なる口にて、酒を見るから咽を鳴らして、「旦那一杯お燗〳〵。」と飲みたがる程に、「誰ぢや。」と見て、「汝は東後屋の料理人、鹽梅の市助奴ならずや、著つけもせぬ今宵の上下、日頃の體と違うて甚う賢う見ゆるぞ。成程一杯飲まして遣らう。其の替りに今夜の様の因縁を申せ。」と言はれて、酒故の白狀心を、遣手共笑止がりて、「是れ言うて叱られものか。」と止むるを、市助頭ふり、「悪洒落仲間のお客には、斯うした事見付けられたが因果、閙さねば尚此の沙汰が廣まる。女郎様方のお名の出る様なことはせぬ、我次第に任せたまへ。」と、口がましき遣手共をおさへて、「是れは女郎様方の、起請誓紙の燒拂ひと申す呪詛にて、毎年五月中の末の夜、其の女郎の持ちなされ給ふ、定紋の付いた燈を流す事、江口の君からの秘傳事。」と申せば、三人手を打ち、「田舎にて商人の、年中の誓文を十月二十日に拂ふと聞きしが、其の格にて女郎共が、賣り付けう爲に書く起請なれば、罰拂ひの呪詛も憚うはなし。叔末の日に極めたるは奈何に。」と問へば、「羊といふ獸は、紙を喰ふもの、起請の書いた紙を、喰はすといふ縁を取りての事、節分の夜祀に貘といふ字を書いて、悪夢を喰はす呪詛と同じ格。」といへば、「夫れも内證聞けば樣々の因縁あり、然らば次手に聞く事あり、暇の女郎の寢道具の長持の尾に、灸すゆるといふ事あるよし、是れも因縁の有るや。」と聞けば、「尻輕に餘所へ行く樣にとの秘密の呪詛。」と、共と笑ふ聲に夢醒め見れば、東後屋の

立つなo 總鹿子の打被搔い取り、揚屋へ入りて、亭主夫婦に立ちながら、「今日は妾が忌明け、娘を連れて氏神なれば、山王樣へ御禮がてら參りましたれば、嘸な客もお待ちかねなされて御座らう、一寸お杯して歸りませう、御引合ひ賴む。」と、靜かなる座敷入り。末社共口々に、「先づあれへ。」と正座へ直せば、脇傍に裕かに直り、「子供くさい妾を、ふるめかしうも思召さず、名を指してお招きの段、澤山嬉しいわいな。」と、大臣に杯さし、又戴いて、「寛りと是れでお遊びなされませ。」と、詞殘して立つ所を、亭主お袖に縋り、「是れはすけないお歸り、お前にかう申すは釋迦に經、兩替屋に算盤教へます樣なれど、申さねばお客の手まへ宿屋の私が立ちませぬ。福井から三四里の處をお越しなされ、大切な金銀をお出しなされて、お杯ばかりでついお歸りなされては、大臣樣の御身にしては、憚りながら御一分の立たぬ事。又かう申します私、此の儘で歸しましては、揚屋のわけも立ちませぬ。御心に入らずとも、今日の大臣樣の御たんのうなさるゝ樣にして、御歸りなされ下されませ。」と、實事を申せば、「ム、すりや杯ばかりぢやお客のたんのうなされぬ程に、妾に○解いて寢よかえ、腹は立てさんすな、色宿の亭主樣には似合はぬ、玉屋新兵衛樣と子中までなしたる小女郎と、お客が呼ばうとあらうとも、彼方は勤めの御身ながら主ある花も同然、お會ひなされてからが底が面白うない女郎に、何故止めては下んせぬ。呼びに來れば、行かにやならぬが勤めの身、爰まで來て杯いたすが親

いやしくも彌益しに思ひが濃うなりました。然らば戀を離れて、我等此の里で遊ぶ中は、太鼓を持つて下さるまいか。」「コリヤあんまり痛み入つたお言葉、何が扨戀を離れてとの御事なら、何時までなりともをりまして、お座敷を持ちませう。」「そりやまあ嬉しい、此の座にさへ居て下さるれば本望。汝等太夫樣のお精の盡きぬ樣に、何なりともしておいさめ申せ。」と、夫れから入り亂れての酒事、小女郎は我が娘を膝の上に載せて「我が身に自墮落のない、新兵衛樣への證人には其方立ちや。」と、娘愛して勤めける。前代未聞の太夫職と、今に傳へて越路で是沙汰々々々。

## 第三　あれ〳〵あれを見や　吝い親父が高利の算用

昔より色里に深入りして、家を潰す人に、愚かなる生まれつきは一人もなく、發明過ぎて女郎に思ひつかるゝ魂膽して、我許りには眞を盡すと深みへ陷り、思はず首たけ、借錢の淵へ沈む人多し。色遊びは、心を養ふ慰めと思はぬ人は、必ず深入りするものぞかし。若き時は渡世に油斷なく、親から讓りの家業を勵み、主の蔭なる商賣を勉め、其の家賑かに繁昌させて、世間を息子に渡し、渡世隙になりて、六十過ぎて年月の氣晴らしに、傾城狂ひはするものなり。必ず色道には仕すぐし多し、血氣盛んの時行くべき所にはあらず。玉屋新兵衛腹の中から世の忙しきことを知らず、二親の寵愛に乘つ

はなかりき。小女郎は此の首尾聞くより、悲しさ餘りて寢室より外へ出でず、涙の淵に沈み入つて、約束の日も更に揚屋へ行かざれば、親方腹立して、「第一勤め女の有るまじきは、我が子を抱き奉公を疎略にする事不屆の至り。」と、酷くも乳呑子を引き離し、表の煮賣茶屋の嚊に預け色々折檻すれば、尚拗ねて勤めに出でねば、流石の親方も持て餘してあぐみぬ。新兵衞小女郎二人が歎き、天にや通じけん、此の間續きし日和、今朝からしつぽりとした雨になりて、樋かけた駕籠二丁の先へ、末社の文六東後屋へいき〳〵として走り入り、「わつと呻つた大臣樣を、御兩人御供して來たぞ、御氣に入つた女郎あれば、勤め十年を、目出たう親の内へ歸り給ふまで、お買ひなさるゝ根強いお客、隨分御馳走なされ。」然し人目をお忍びなさるゝ御慰みなれば、樋かけながら二丁の駕籠をお座敷へ、直に舁き込み給へ。」と、いきりきつて申せば、女夫を始め家内の者共勇み出で、手繰りにして駕籠を座敷へ舁き入れ、床傍に二丁を直し、亭主夫婦罷り出で、「いざ是れへお出で遊ばしませ。」と樋共を取れば、駕籠の中より一人は、糟毛の四方髮、見るから浪人らしき男、大脇差を提げながら出づる。今一人は揚屋の座敷などには、萬更白髮の親父、花色紬に同じ色のふとりの首卷して、濃いこうじの革足袋はき、白柄に刻みぐるみの目貫の相口、數珠つまぐつて出でたるを見て、亭主夫婦ぎよつとしながら、「始めての御來臨辱い。」と手をつき、それお杯といふ下より、上する女の吸物持ち出で、「殊勝なるお客の

花車は引取つて、「先づお賑やかなやうに、女郎樣方借りましてお目にかけんことゝ、初崎、八重山、千里、浦風など借りて、親父が心をうかしける。軍右門かりたる女郎共に向ひ、「聞けば玉屋新兵衞とやらいふ有徳人の息子が、揚錢を濟まさぬ故、此の家にて桶伏になつて居ると申す沙汰がある、定でござるか。」と問へば、「さればおいとしい事でござんす、僅か五十兩に足らぬ金ゆゑに、半年より苦しい桶の中に押し籠められて居さんする。此のうちは物もしなく\/まゐらぬよし、親御樣はお金持で、しかも獨り子ぢやげなが、此の噂は御耳へは入らぬことか、入つて其の儘おかんすは、鬼よりもむごい親父樣ぢやと、出入り人が惡う申します。」といへば、浦風といふ奴風な女郎、「ハテ初崎樣の、親父樣と樣付けていはんすが聞き惡い、何時まで生き通しにをらうと思うて、分のよい新樣を桶伏にさせし、おのれが勘當したによつてかまはぬと、ようも\/默つて居らるゝ事ぢやまで、眞に其の親父奴が顏が見たい。」と罵り出せば、其の尾に取り付き、口々に惡ういはねば損の樣に、齒にのせて噛む樣にいふ時、軍右門涙をこぼし、「あれ聞かしやつたか新右殿、此所は舟つきにて諸國よりの入りこみ、玉屋新兵衞が揚代濟まさず、桶伏にせられたといふ沙汰は、日本國へ廣まります。若い者の色狂ひするは、新兵衞一人に限つた事ぢやござらぬ、四十兩や五十兩の金で、此の惡名を取らるゝは、子の新兵衞よりこなたを第一人間の樣にはいはぬ。今聞かしやる通りぢや、身共は新兵衞爲には男、娘のおぎんを

渡しませう」と、口にある蛸と共に飲み込めば、「さあらば亭主此の手形を、玉屋新右門殿方へお供して參り、金子請取り揚代算用して、新兵衛を片時も早く、桶の中から出してたもれ」と、手形を渡せば、東後屋の源六よろこんで、天晴見事な男太夫樣と感心して、新右門と連れ立ち金請取りに勇み勇みて、急ぎ行きけり。

傾城歌三味線一之卷　終

# 傾城歌三味線二之卷目錄

はじめての珍客にお吸物は出しやつたか

粋な客程手おもいやる年増の太夫

たすけませんと、次の一間の居風呂桶の上なる石を、男共に取り除けさせ、「さあ御出なされませ」と桶取つて出せば、新兵衛にはあらで、料理人の鹽梅の市介なり。軍右門を始め、花車も下々も肝を潰し「其方は此の中親の年忌の心ざしにて、高野へ参ると書置して、十日ばかり前に出で行きしが、何とて新兵衛様と替り、此の桶の中へ這入りて居ることぞ」と問はれて、市介はうろうろと涙を流し、軍右門に向ひ「旦那様お久しうござります、私前髪の時分小者奉公勤め居りました、市平奴で御座ります。お国元のせがれ、御家御法度の不義を仕りました落度によつて、結構なお家を追ひ出され、是非なく男になりまして、此の東後屋へ料理人にありつき、八九年も季をかさねて、奉公を仕り居ります處に、此の中お前の御息女、お吟様の隱かに呼びにくだされ、新兵衛様はおぬしの殿御、相伏になりて御苦勞なされてござんせと、親御の勘當受けてござる御身なれば、諸一門もかまはれず、纔かなれども揚錢の滞りを、誰すまして御難儀を救うてやらうといふ人もなく、心にかけて悲しむ者は、おれ一人ぢや、男の身ならば其の揚屋に行きて、ぬしの身に代り、苦患を援けましてと思へども、新兵衛勘氣をして家を出た内は、人に名ざかを立てられては、親の面が汚るゝと、今は父様の方に引取られしやつて、部屋より一寸出さぬやうに、人に人を付けて置かるれば、思ふ様にもならぬ。何卒金を才覺するまで、其方新兵衛様と入り替つて居てくれ、此の恩は忘れぬと、勿體ないお主様の手を合はし

故、彼ばかりに我儘させて默つて居ては、大勢抱へてある女郎共が、皆行作がわるうなるゆゑ、殘る女郎共へ見せしめのため、責め殺してものける氣で居た所に、たつた今小女郎がいふには、私を何處へなりとも賣つて遣つて、其の金で新兵衞樣の桶伏を宥して遣つて下されとの願ひ、幸ひ京の島原一文字屋から、仕替へたい女郎があると、上方の肝煎が下つて居るによつて、早速に談合したれば、五年を百兩といふ故に、さらりと手を打ち、小女郎を島原へ遣る筈に極め、半金取つたによつて、先づ新兵衞殿の桶を明けて、小女郎にも悦ばせ、機嫌ようあす京へ上らうと思うて、それで金を持つて來た、早う新兵衞殿をいなしてやりたいとの樣子を聞けば、重右衞門始終を聞いて、「寄るほどの者が皆他人なれど、頼もしい情深い衆ぢやに、現在肉身を分けた親の心の邪見な故に、大勢に難儀をかけます。此方で金は調へました、小女郎とやらいふ傾城の、又奉公に參ることは止めて下され。かう申す身共は、新兵衞が女房の親でござる。夫の難を救ふは妻女の役、それに差同然の傾城に、連れ添ふ夫の難儀を救はせて、本妻の身で如何默止つて居られませう、御自分の金は取つて歸つて下されい」と斷り言へば、「イヤそれは小女郎に代つて申して見ませうには、新兵衞殿放埓の身持にならせられたは、皆小女郎からなれば、大事の壻樣をそこなひしと、各樣の思召しを存ぜば、此の度鬼往の譜へなりとも身を賣つて、新兵衞樣の御難を救はねばならぬ所、殊に肝煎と議定いたし、半金取りました上な

内儀樣御聞きなさるゝ通りなれば、御事かけではござりませうが、今日からお暇を下さります。給銀の借り過しが三十五兩ござりますが、其の代りには帷子二ツと半櫃を置いて參ります。」と、律儀な男とて内證あらはして暇乞へば、「すゝ、何の其所までの事をいはうぞ、旦那殿戻らしやつたら好い樣に、いはう程に、お幼兒を介抱してしんぜましや、煮賣屋五兵衞が何とぞいはゞ、東後屋のいひつけぢやと此方へ顏を向けておいて連れまして行きやれ。」といへば、市介悦び、軍右門に暇乞して勇み出て行けば、其の跡へ東後屋源六いき〳〵として立ち歸り、一金子請取つて參りました、女房共早う請取つて、新兵衞樣の御苦勞をやめてあげます。」と、今朝とは變る亭主が情ぶり、早速にききめの見ゆるは、藥よりも金ばかし。軍右門市介が入れ替りて、新兵衞ははや十日以前から郭には居ぬ樣子、又は小女郎が島原へ年を切りまし、奉公に行く筈にて、金も調ひ雜用代も拂ひし譯、殘らず語り「兎角肝心の本人新兵衞が、居所を聞かぬ中は安堵しがたし。我等は國へ立ち歸り、手分して尋ねさせねば、どうも心落ち付かぬ、居所知るゝまでは金子は其方へ預け置く。」とかへらんとするを、源六次第を聞いて、「御氣遣ひなされますな、新兵衞樣は慥かに京へ上つてござる、地でさへ外の客へは勤めさゝれぬ太夫樣が、島原へ年切り增して勤めに行かうとあるは、こりや新兵衞樣と、親方遣手がせいて思ふ樣に逢はれぬ故、内々から市介と肌を合はせて、此の里をぬけてお出でと、此の源六が睨んだ眼取りは違ひ

の道の學問の島原にて、十年ばかりに諸分おぼえ給へ、十萬億土たゞ黃金なり。金銀の沙汰いへばさもしく聞ゆれど、元來は是れが根なれば、いはねば聞えず、いへば口舌になりて人のはしかるものは是れなり。萬事にわたれど、わけて此の里にては、是れならでは可笑しからず。北國の峯を越えて此の里へ入相の鐘と共につき出し女郎、小女郎といふ名は何うやら太夫めかぬとて、名をば變へて越路と呼び、引舟つけて(一)上の日より隙なくて、聞き傳へに通ひくる客樣方の情爭ひ、久しく此の里にありけるが、人は移り氣にして、つき出しの太夫から外の色まで若やぎ、てゐくれたる大臣もとつて出づれば、居成りの太夫天職十五までも、自らはやり出で、雪國の姫に負けまじと、女郎一入作りなし、外の親方も氣をもち、はやり衣裳の仕出し、素足に雪駄の音高く、禿も鼻紙目に立つ程入れて、浮世巾着に一歩の二三十も入れて、内の宜しきにや、上り膳の燒物に氣もうつさず、遣手と布子の色上げして、前垂も常に變りたる樣に見えける。萬の商人後前知らずに掛賣りすれば、當座の苦界つとまり、無性に福をやりて、中低なる顔も鼻高う見えぬ。一切の女郎に位のつくは、いつからにても客次第なり。慥かなる男あれば、自ら張つよく、一座もできるものぞかし。夫れ／＼の商賣人も後に銀親丈夫にあれば、手廣く商ひして、店つきも賑々しう、手代共も發明に見ゆるが如し。北國問屋の若い者、桔梗屋の刈藻といへる女郎に馴染み深く、折々通ひて西島の分知り自慢、幸ひと此の度越

置けば、遠國の色里と違ひ、小判珍らしからず、此の前京賣の倉川といふ大臣、唐土様に未だ馴染まぬ
ない中に、桃の節句の祝儀とて、何心もなう百兩進ぜられけるを、我も人も見し事なり。此の程此の
里に金子の見えぬ折節なればこそ、一兩の小判も二度三度いたゞきける、流石は田舍出程ある。」と、
客あしらひの女共、立ち並びて是れを笑ひけり。何れ女郎狂ひの極まる處は金ながら、又は又仕掛も
あるものぞかし。さのみ物つかはれぬ粋な客にはまはりて面白がるに、かく又ばつとした仕掛け、つい
て來る問屋の手代が物なれぬ故から、金は蒔きながら沙汰は悪く、さる程に島原狂ひもむつかしの時
なるかな。越路が全盛、中々十日や二十日の中には明日なくて、然らば當地にゆるりと逗留すべし、
其の内亭主がはたらきにて、もらひかならば頼むぞ、先づ一寸借りてなりとも一目見せてくれまいか
との、大臣の深いお頼みに、花車が心付きて、主人が腰をついて、「親方殿の越路には、三國で深い間
夫があつて、大分名が立ち、それ故所ではやり女郎なれど、此の里へ賣つて越しぬれば、北國筋の客
は吟味して、太夫に逢はせてくれとの内證、始めから金の下され様があらいに心を付けさつしやれ。」
と、女鳥につゝかれて、ほんにそれよと、ついて來た手代を勝手へ招き、「大臣様は越前の、何と申す
所でお名は何と申すぞ。」と、小聲にして尋ぬれば、「ハテ亭主、身共がお供して參る客衆に、御歸りに尻
殘いたさしておき、揚屋に損をかけらるゝやうな、不埒なお方は誘引はして來ぬ、氣遣ひなしに、萬

嫌のよき顔色ござなし。内儀お袖にたよりて、ちよつと假の御來臨、先へは亭主が悦び、御座敷へ通しますれば大臣三國でしこなし頭巾、「來たか／＼。」となめてかゝるを、挨拶もせず引返して表へ出るを、主人夫婦兩方から取り付き、「お國元の大臣樣の由にて、君お隙のあくを、今年中も京に御逗留で御待ちなされ、數々の御詫、私共夫婦へ御せがみあられ、我々が身の爲になる事、御不承ながらせめて一度あはせて下されと願へば二役の人樣故、わしはこの國で名が立つて、思はぬ此の里へ來やした。見るもうらめしい、旦那殿の聞かれては、女房でも手管して逢ふかと疑はれては立ちませぬ、重ねてからでござんす。二役の人樣には逢はぬでござんすと、振り切つて出づれば、夫婦面目失ひ、「扨こそな關夫に極まつたと手代を呼び立て、「エ、お前は聞きませぬ、かうあらうと存じて關夫ではござりませぬかと念を入れましたに、わけもない揚屋がすでに上つたりやにならうと致した、早う連れて歸つて下されませ。」と、夫婦は顔ふくらかして、座敷から手をたゝいても返事もせねば、銚子とめて出さず、こりや如何ぢやと、鐵太は樣子知らねば、太夫を借れば彼の樣にして歸るか、島原のならひでがなあらう、さりとは面白うないぞやと、不首尾にして、其の日は居たがる手代を引き立て、機嫌惡うお歸り、金費ひながらようござりましたと謂ひ人もなく、正眞の島原狐にばかされた心地して、もうこん／＼、こんどこんどといやも尻聲、なく／＼花に打つた六七兩の損と見えける。

## 第二　二人連れるが嬉しさに六三になつて　朱雀の細道

都のお女中は物見だけく、傾城といふ者は、人に變つて背中に穴もあいてゐる樣に思うし、島原の女郎見にくるわの中に内縁ありて、歴々の奥樣と見えて、當世模樣の絹かづき氣高く、朱雀の野風に煽たつ樣な紅裏吹きかへさせ、お腰元と下女に下りて、悧根なる下男共のだいなしに、尻も目立たぬ程かゝげ、蒔繪の提煙草盆持つて行く。町の女中には華車れたる奥樣、旦那殿の盡さるゝ相方の太夫がな、見にござるであらうと、燒印の編笠着たる大臣には目もかけず、出口の編笠茶屋の門まで、前垂仕更へて出て見るこそ一興なれ。上京から三木樣と申すお客、此の聞傳へて、揚屋をあげつめ、お友達と見え此の里始めての大臣を誘ひ、こゝに目なれぬ器量の若衆御同道にて、昔過ぎからの御噂し、町の女中の女郎見にとは、其の身能く〳〵の器量自慢にて、見られにゐる奥樣のお顔を拜見し外より道付き笠の中を一寸覗いて、僅かに見た樣な顔ぢやがと、供の者に目をつくれば、下男と見えしは、日頃三木がお目にかけらるゝ、太鼓持の山越の利兵衛奴なり。「何時から末社になつて、與七奉公なさるぞ。」といはれ、返答なしに己がてに腹を抱へて笑ひるる。こりや何事ぞやと眞顔でなさるれば、「消かべきは妾が女房ども、人形も衣裝ともに、日ずるしやうなる旦那内、見違へられたが可笑、

いつ迄供奉仕るは、今日一日切の雇ひ腰元雇ひ下女、拙者も久しうなりまして、女房共を主あしらひ、是れはしたり、門も広うなるやら島原の氏神も、是ればかりにはおはしますまじ」「さりとは變つた仕出し、様子はいかに」と問はるれば「されば不断は手づから飯を炊かせ、寒の中にも外井戸の釣瓶縄をたぐらせ、私は居ながら湯の茶のもてなしで呑み、あのおなは一寸ださせずに、男を大事に白、雪の日、風の立つ時は、飯櫃を包んで火燵に入れ置き、夏は寐入るまで枕に扇をはなさず、毎夜更けて歸れども、一度も戸を叩かせず明けてくれて、今宵はいつもよりは、待ちかね内に早きお仕舞ひ、旦那様方の御機嫌にお首尾はと、世間内證共に心をつけ、物一ツいうてこちにては、こちの人こちの人と、大切に致す心ばせが可愛さに、私が貰ひ溜めあれば金性、今日は有卦に入つたと申しまする程に、せめては人のおか様なみに、かづきを被せつゝ出掛け、氏神様なれば、幸ひ稲荷のお旅へ供して参り、次手に爰の氣色を見せて、歸りには表の三星屋の座敷へあがり、彼の姿を其の儘横にころがして、好い茶の思ひをなして、たんのうする程悦ばす合點で、かうした趣向、いつも一人寐の恨みいはねどこそなれ、太鼓持の女房にはなりまじきものと、心の底には思うて居りましよう」と、恰好よりは涙もろき男。「見掛けたこと幸ひ、ちかづきにする連もあれば、夜に入るまで夫婦ながら上げる程に、水入らずに丸屋が座敷で娯しめ、かへりにて夫婦共に、三枚肩でおさせて遣られ。」との御意なれ

は、何ぞ一ッ人に増れる徳あるべし、今の世の賢き人うか〳〵と無益の揚代は出さぬ筈なり、是非その女郎に逢ふべき。」との御見立、山越の利兵衛夫婦も、蓼喰ふ蟲もとは思ひながら、「何れ大臣の仰せある〻通り、さのみ勝れた器量でもなくして、太夫職を持ちかため居らる〻は、御内證によく〳〵よい事があつては、さなくてはこちの嬶がましぢや。」と、うぬが女房の尻をたゝいて嬉しがる所へ、「遠路様の御越し。」と云ふ。三木少しひぞり顔にして「ちつと折にふれては来てゐて待つて御座つても、きつい科にはなりますまいに、何時でも待ち退屈して、欠伸の五六百も出さねば御出でなされぬ。始めた客には勿體を付けらる〻も道理、殊更今日は珍客を同道して参つたれば、連の思はくも、何うやら太夫が不興なと思はれては、未熟な心からきつう面目がないやうに御座る。この三國にはお馴染のむいち玉屋の新兵衛とやら申す、古い男があるげなが、せめて其の爪の先ほど可愛がられたさに、毎日かうして参る、女郎に孝行な男、ちと心して下され。扨是れなるは我等無二の友達、十八公と云ふ二分知り、今日から折々連立つて参る程に、随分と氣に入つて、都でも噂の好いやうに頼ましやれ。貴様始めなれば、此の女郎の譯を知られまい、越前の三國といふ里で、全盛した女郎なれど、間夫狂ひで浮名たち、此所へ近い比からわせたが、我等あふのふに贔屓して云ふではないが、好いものは何うでも流行る。すつと出られた日から、先の盆までは手がつまつてある、見事な事ではないか。」と吹聴す

ほしてしまはれ、何うやら座敷がしめつて來たと、三味線取つて引きうたひ、音色のよき聲のよさ、つこりや十八公のお見立、天晴口上りのきいた程な太夫は諸事あふたものじや、それから座も賑やかになりて、あひの又おやゝ、絲あひなど申して、酒になりますましたしやんく。

傾城歌三味線二之巻　終

身請が極まつてふたゝび返る事なくどろ／＼
あらぬ男を見捨て東への門出振舞
都に色づける吉野の櫻もちりかゝる袖の涙

様と申す程有つて、強い蛇の介、座に就かるゝより○前まで、大杯を離さぬ上戸と見て取り、先づ此の御方を片つけて終へば、次々の衆の大酒の難を救ふと云ふものと、一座の心を汲んで取る玉の井、底の知れぬ上戸なれば、上手を云うて遂に三木様を息つかし、山越夫婦も女郎買うた心になりし、今宵は○でしけましやれと、さりとはお心付けられて忝い、と、嗅が手を引き次の一間へ入れば、十八公酒に痛みて、片隅に轉けて、湯の水のと切なかるを、越路は醉ひの醒むる藥など參らせ、側に付いて居た相な氣色なれど、玉の井が御相方なれば遠慮して、正體の無い三木が腰元を離れず、見て居て世話計り燒くを、玉の井越路が袖を引いて、十八公が側へ連れて來て「お前のお相方には私が付きして居ますれば、云ふ事あらば三木様が醉ひの醒めぬ中に、一寸云はんせ。」と、扨も恐い見通し。「左様なら頼むぞ。」と、十八公が○○○○○○○○より「知らぬ所に勤めて、何かにつけて氣勞する可愛さと云ふて下されず、大盡に揚げられて、國方の開帳の事は忘れた抔とのあて事、去りとは聞えぬ、憎くは明けて云はれず、憎さに、皿鉢で酒を進ぜうとしたは、此方さんへの面當、花の都へ登つて居ても、お前のお顔を見ぬ時は、鳥が島に住む様にござんす、是れ顔見せて下んせ。」と、○○○○○○、聲をも立てず恨み泣けば、十八公は玉の井を手を合はせて拜み、「只今の御志生を變へても忘れは致さぬ。私も日利に遣はされ、斷わる青柳が様を呼びましたればこそ、小女郎に言葉も替しましたれ、私事

私が招きませうほどに、形になつて人知れず小女郎に會はせて下され。」と、是れも涙を溢して頼めば、「八ツ目の醒めぬ内に、積る○○○○んせ、其の段々が無駄臺詞おや。」と、○○○○○○○○○○、勝手から人の來る目見して居る内に、二人は○○○○○、今の嬉しさ、「彼の君七代まで太夫冥加あれ。」と、玉の井を拜むも道理ぞかし。「扨聞けば福井の錢太、其方が登つた事を聞いて、早速買ひに登つたとありしが、彼奴は親はなし、身は暇なり、意見すべき重手代は頓死する、金銀は自由の身なり。定めて來せたら、頭から今年中揚げ詰めにして、我が物顏に手に入れ、自慢で遊び居らうと、是れのみ嫉ましかりしが、未だ會はぬか」と問へば、「さればいな此の間、問屋の手代を案内にて、柏屋へ來て一寸私をかりて、餓頭から、頼めてかゝりし故に、是れに會うては貴郎に立たぬと思ひ、彼の人が世方のでかある、、馴染の間夫おやと申したれば、粹の商賣して居る揚屋の夫婦が眞請にして、厄病の神の樣に追ひ出して揚屋々々へ内證云うて遣られし故、どの揚屋へ行かれても、あなたに越路さんと、お國に名の立つたお客で、太夫樣の勤めの邪魔する男だやと云ひ立て、客に僞ぬけに御座んす、聞いて氣味のよい事。」と、二人笑うて居る處へ、勝手から上する女が出て、「十八公樣、どなたやら一寸お目にかゝりたいと、待つて居られます。」と云へば、小女郎はちやつと立ち退く。新兵衛早合點で、「男軍右が登つて、我等を尋ねらるゝ」と聞きしが、定めて爰に居る事を聞いて、人を越されしも

亭主もこけの顔つきにし、暫く思案し「聞えぬ。本様なり、此方が昔に聞く、桶伏の新兵衛殿なら、お客にすることはなりませぬ。今から直に行んで貰ひましよ。これや女共、預つた脇差彼方へ渡せ。」と、座敷に脱いで置きし羽織取つて著せて、最早奥へもやらず突き出せば、為方なく座敷を見入りて悄々として出づる所を、鐵路此の由を聞くと其の儘奥より驅け出で、「斯う露顕れては包む事はない、是れ新兵衛さん、揚屋の金負うた人が、世界にこなさん獨りではなし、盗人かかたりの様に名たてがましい。ここ三ケの津で色里の總本地とも、世の人の賞める島原の揚屋殿には似合はぬ。さりとは戀も無情も知らぬ情ない仕方、けふやう今親御の勘當受けて、不自由な身にならんしたればこそ、揚錢の少しも負うてござつたれ、今でも御勘當ゆりると、其處にござんす錢太さん抔は、ア、慮外ながら下に見る御身代ぢや。お前も男ぢや、揚屋に突き出されていなうとは、世に連れてお心までが後れましたか、一分立てていなんせ、左様なければ小女郎が留めていなしませぬ」と、新兵衛に取り附いて、聲を立てて泣きける心の中、何れも推しはかつて貰ひ涙を流しけるも、流石土地柄なり。

## 第二　獨り手前の手鍋　弦音を聞く間夫の噂

色里は何事も鷹揚なるがよし。揚屋の料理する男が、煮方する杓子數入るれば、粉になつて座敷へ

方のものにして遊ぶ内、十千貫目持つた長者でも嫌はれし、一寸かわしてから、兩方の詞の止む事暫しあるは、見ねども少しは腹が立てども、何方も女郎の習ひと高くとつて居ればこそ、能い事させうのかりと、悉相手にして居る、身から心をかし。我等も前の花さきとは、人の口の端に掛る程の隠れ會ひ、眞に其の時は金貢ふ男は、阿房の様に思うて來た事もありぬ。但し今は間夫の僉議は揚屋夫婦がする役か。然らば揚げてある女郎を、馴染の客が來て、一寸と云うてもかりて會はされぬか。揚手があれば其の日は其の客の者、縦ひ馴染の客でも、かりて會ふは間夫と云ふものなるか。今からたかも此の家では寫ぬか。十八公は新兵衛やら儀兵衛やら知らねども、斯うなつた上に、身共が知らぬとは云はれぬ。同道して來た不肖なれば、亭主に突き出されしては身が分が立たぬ。コレ夫婦能く聞きや、わごれ等より吟味して、新兵衛なれば唯置かぬは此の三木だや、此の間揚げ詰めにして會ふ越路を、玉の井と云ふ餅の形をこしらへ、身が鼻毛をよまれた所は、宿屋夫婦の一倍腹も立つなれど、其處に戀ぢや。親方がねらくさう云ふなら我に會はしや、其方夫婦の落度にやせまい。さア越路おぢや、十八公様御出でなされ、わつさりと叉酒にせう」と、兩手に二人の手を引いて座敷へ入るれば、錢太は云ひ出して仕舞ひが付かず、こそ〳〵として犬の遁げ吠え、揚屋の亭主は三木が料簡聞いて、三木も世界の戀知り、此方は此の商賣しながら、戀の道に未熟なつたと、獨り恥ぢらるゝ道理ぞかし。三木座敷に

め、流石首の由緒として、香包に少しの伽羅の有りしを取つて、又逢ひまするまでの形見に此の木を買かまへの時も嗅ひの物を買へば、銭かないたやら、絶えることやら申しますれば、替へを遣つて買ふ物ぢやと、人毎に申し傳へましたれば、私も逢ふまでの形見序に、替へて上げませうとて、件の十両を包んで差し出せば、「そりやさうな其處をなをへ心を付けしの御志、唯下されたら、今落ちて居ても新兵衛といふ男でやるの、女郎の貰うた金は貰はれぬと、取らぬであらうとお心を付けられ、あすこに残るれを取つて、余の金も替へとは嬉しい、男を立てて下さる、御志、貰ひまでいではこと歳す、帯はしなさいるのでのこ、夫等には別れける。ただ人が心意氣、是れぞ貰うた浮世の伽羅なる。

## 第三　一日なりと連添ふて、ありや身をした思出ぢや

其の上君に流行りし、小六ついたる竹の杖と、節をこめて歌ひし小歌に、関東に隠れなき伊達男小六と云ふ優者が弟に大六とて、三野にて名だかき太夫格子に、帯解かせぬはない御両知りの槍の川、流れの身に奔走せられ、可愛がらるゝ中に、きてうと云ふ艶と親しく、緞子三本紅絹を疋、綿の代まで相論へてと、歌に浮名の立つ年は、都の富士と同い年、暫く諸一門への口塞げに三野に通ひをやめて、俄に思ひ立ち始めて都一見の爲、吉日に武州を旅立ち、道中十三日目に京著、三條の福

と、其の儘枯れ凋みたる花を、夥くる大寄せの座敷へ引舟に持たせて、太夫座に付き、大盡を待ち受けて居れば、彼方此方の暇乞に間入り、大盡客方から御出で、今日太夫様の郭の名残と、旦那の御門出との大寄せと、一家の女郎花を飾り、亭主が下袴も智恵有り顔に見えて、花車も腰に提げしよろへの鍵を取つて除け、黒羽二重に縫紋の小袖に著かへ、お方めいたる粧ひ、一家の女郎を始め、揚屋夫婦下々までも思ひ〳〵に太夫様への餞別、大座敷に並べ立て、金銀の水引光り渡り、目出度い盡しの酒宴最中へ、越路件の眼付きの懐を禿に持たせ、大盡の前にさし置き、「最前お目にも掛り、御賞美の詞もと御目に守つて居りますれど、お目さへ遣られぬゆゑ、私の志を無下にせんも本意なさに、御前へいだしてお目にかけます、是れは今日の大寄せの御慰みに、態々吉野へ人を遣はし根掘りにして取り寄せ、今日のお饗應に、石臺に植ゑ替へて御目に掛けます、花の都の花所をさし置き、吉野の花を根引にしてお目に掛けますが、私が心のもてなし。」とあれば、末社共言葉を揃へ、「花を根引とは、今日の御門出に御身を祝はれて、何よりの御祝儀、こりや目出たいは打つて置け」とさばけば、大盡花の枯れたるを見て、「吉野まで人を遣はしたとある志の花を打込むは、愛想のないやうなれど、太夫様が聞かれよ、何處の花で有らうが、花は盛りの色香あるを賞美して眺むるに、是りや吉野の花にもせよ、枯れ凋みて色もなく、樵園然なや、座敷の塵になる。これや林彌よ、臺所へ是れを持ち行き、

大釜の下へくべ。堺の前の魚とて賞翫する鯛さへ、腐つては鼻持ならず捨てのけられ、悪い思ひ付きぢや。」と、不興顔にて打込まるれば、其の時惣踏はお側へ寄り、「此の度私を根引にして、吾妻には何の爲にお下りなされます。」「コリヤ太夫、改まつたお託宣、其の美しい花の顔になるを、手折りし手活けにし、故郷で我が物にして眺めん爲でござる。」御志の花をうち込んだに因つて、御心に随つて、拙者をひやうふつかしやるか。」「されば其處をお聞きませうならば。此の花も名にしおふ吉野山にて、盛りをなした花故に、根引にして道中も、御乗物の前に置いて、眺めお歸りなさる様にして、斯う[illegible]に土までを念入れさせて、植ゑさせましたれども、吉野の馴染の土を離れ、都の地なれども、此土へ植ゑ替へましたゆゑ、忽ち枯れて色もなく、萎にして、大釜の下へくべよと、御見捨てに預りまして、さぞ花も悲しう口惜しう思ふでござんせう。私も身受なされて下さるゝ御心底は、忝うおもひますれど、馴染の土性の男に離れ、心も知らぬ吾妻の土に植ゑ替へられましたら、此の花の如く、色も褪めまして、御慰みには成りますまい。御料簡なされて下さりませ。」と、ほろりと泣いて、涙に六はこぬ櫻に寄せての言ひ廻し。大盡つくづく聞かれて、「如何にも全盛の太夫なれば、引く手あまたの中に深う云ひ交しの馴染の男が有るまい物ではない。あらうとも／＼、夫りや其方に限らず、此の座に並み居らるゝ一家の女郎衆も、ついと馴染の男はあらうが、其處が勤めの悲しさ、金が敵の浮世ぢや。

# 傾城歌三味線四之巻目錄

傾城歌三味線四之巻目録

る間がない、親元を半助に聞かして、彼の男なりと違ふて、今に在所に居る事か、但しは何處へぞ又勤め奉公に出たか、落着きが聞きましたい、分別してたもれと、くれ／＼頼まるれば、夫婦ながらい額に皺よせ「イヤ／＼、今まで國元にはござりますまい、お前のお目に好いと見て、夫れ程までお馴染深い女郎樣なら、天晴の御器量と存じまするが、手のびにして人が今まで見ては置きませぬ。折角お物入なされて、半助を尋ねに遣はされたとて、跡の祭でござりませう、もうこの事はさらりと思召し切りまして、戀を仕更へられませいと、見は致しませねど、ハテ世界に其の女郎樣ならで、外に逢ふ人は御座りますまいか。面影の似た女郎に、今日から切りかへて、戀を若やがしてお遊びなされませ。斯う申しますからは、お前のおなさけに、御指圖遊ばす女郎は、是れに並んでござるなる、御方で御座りませうが、見事に貰うてあげませう。この太夫樣方、寄つて大樣へどなた樣なりと、おつさりと御仲人なされて進ぜられませ」と云ふより、若達勇み出で、まあどうならうと、今日のお客の見えぬ内、わしらが仲間へお前を借りますると、取り卷いて座敷へ連れ行き、亭主夫婦交りに見事な酒事、下地ある口とて御意はおもし、たべます／＼。

## 第十一　月見の夜十九さんと島原で惡口

さて一つあけませう」と存んで獻じまして、「此方は遅うござつた故に何とお聞きなされまい」殘りの女郎衆は聞いて居らるゝ。三年以前京で請出して來た、越路と云ふ女郎が顔付から風俗から、此の娘が生寫し。眞に瓜を二つに割つたるに其の儘、慥かに越路が娘と見極めた故、近寄りて樣子を見ますに、是の紺は我等京を立つ時分、道中駕籠の中で上に著せうと存じ、調へた唐茶孝縞に紛れ御座りぬ。而も柏屋と云ふ揚屋へお針を呼び寄せ、立つ前晩に仕立てさせ、長の道中を著せて來て、覺えのござる茶孝縞。是れを帶にして居るからは、今の半助と云ふやつは、京からの間夫で、見え隱れに我々に附いて下り、我等不首尾にて鎌倉へ追ひ込まれた跡で、手代共へ斷り云うて、太夫を貰うたか、又奪ひ取つてのいたか、何にしても彼奴めが手に入り、丸屋の萬が久しう郭につとめ、よい大盡共から大分花を貰うて、因果なと云ふ事を聞いて、其の身は噯にはひり、越路は他所に隱し置き、丸屋の物を以て育み居るには違ひがない。それ故に最前太夫が事を裏問へば、生國なれば越前の親元へ歸つたなどと、身に縺ねさせまい隱し偽りをぬかした、弓矢八幡堪忍ならぬこと、切腹をして云ふを勝山制して、「こ、それやお前の皆違ひ氣ぢや、彼の子の母は、新町の彦右衛門殿の抱へ、前の西尾さんの、本町の傳さんと云ふ御方と、年を重ねて逢はんした時の隱し子、そりや知る譯が有つて、私があけて行く程留つてゐやすと、今の半助に末の嫁にならう程に、養うて置きやと、蔦屋の出入の八百屋が頼つ

に引きかゝへ、へ、臺所へ飛んで出ければ、勝山もつゞいて出でんとするを、並み居たる女郎共取り留
め、「先づ客さんのござんしたに。」と諫むれば、是非なく勝山衣紋を直し、笑顏を作つて顏を直せば、
其の日の大盡六人、どか〳〵と奥へ通り、「さぞ何れも待兼山の郭公で御座らう。俺達の一節が聞かま
ほしさに、ござれ〳〵色絲彈いたり〳〵、銚子々々のと、頭から騷ぎの客、何處で呑んでござんしたや
ら、至つて好い御機嫌のこと。

第十一　粹方も女郎を失うて　餘程愚痴に　なりやつた

臺所は料理最中、俎板の音燒物の香ひ、釜の下の大くべ、小さい目から見ては、氣の滅ることぞか
し。大六小座敷へ娘を連れて來て、半介を呼べど、「只今貴方に掛つて居られます、暫く御待ちなされ
ませ。」と斷るゆゑ、急きにせいたる大六、しく〳〵泣く娘を捕へ置いて、亭主を呼び寄せ、「最前噺
した、京で請けた女郎の間夫は半介にきはまつた、即ち太夫と懇して請けをつた娘、勝山が加勢し
て、身が請出して連れ下つた越路をぬすんで、隱し置いた樣子が知れた。是れへ肩入れ奉公するから
は、其方は半介が親方なれば、何處に太夫を隱し置いた、屹度僉議して急に太夫を身に渡しやれ、左
樣ないと思案が有ることと、むづかしう云ひかゝれば、亭主仔細を知らねばぎよつとして、私は努々

たる縁に付けて仕舞へとの、御意なれども、御當地で縁に付けては、あすか日若旦那が御勘氣宥されうつしやつて、鎌倉からお歸りあつて、又た越路に執着離れず、縁に付いた所へ行かれ、ひよつとした無分別でも出來れば、御家の名が出る、とかく所を去つて遠い越前へ歸して仕舞へば、若旦那の歸らしやつても手が切れて、一つはお爲によいと思うて、幸ひおや兄御へ進ぜる程に、國へ連れて行て、忘れ男へ添はしたいとも勝手に召され、さりとは親故に憂き苦勞をめされた、孝行な女郎ぢやと感じ入つて、金三十兩附けて汝に渡したりや、國元へ連れ歸り、親共に對面させましたら悦ばせうと、連れて歸り、越前へ歸つたと思うてゐたりや、兄弟と云ふは僞りで、まことおのれは傾城町の言葉でいふ、間夫と云ふ者で、色事に疎い我等をたばかり、若旦那の大分の銀で請出された文郎を、唯取る山の郭公、ゑさし町の裏にかこうて置いて、うぬが樂しみにしてゐると、家主が來て委曲に咄したに因つて、去りとは腹の立つ、御家の番頭職もつとめる長右門が、文作られたの鼻毛數まれたのと、知つた程の人に指さされては、此の長右門が立たぬ、おのれを表向へ引き出してと思うたれど、夫れでは寢て吐く唾で、大事の旦那方のお名が出て、身に掛ると思うて胸を撫り、何卒此の返しに、おのれにハアと口があかせたいと、樣々思案した處へ、大坂から諸國へ遊女を肝煎りてやる男が、歌舞伎子の事に付いて、木挽町へ來てゐると云ふを聞いたゆゑ、是れ屈竟の事と思ひ、次第を語り汝に渡した金

の歌、背中からの出來分別、是れにござる關助と申すは、誠に御聞き及びもござらう、越前で玉屋新右門殿の御子息、新兵衞殿と申す有徳人の御子息、越路と申すは、御國で小女郎と申した女郎、此の君に心を盡され、親御の勘氣を受けられ、所々方々との御艱難、御當地へ小女郎殿請けられて御越しなされた故、京から見え隱れに御下りなされ、廓知りの粋な女郎と聞かれ、勝山殿へ始めてなれども參られ、首尾の話致されたれば、「其の小女郎にお逢ひなさるゝまで、私の者と云ふ下人になつてござれ」と、引受けての世話。其の跡へ拙者も罷り下り、此のお娘子を育み、新兵衞殿一所に、小女郎殿の在家を聞き出し、奪うてなりとも手に入れて進ぜうと、丸屋の萬が後家を幸ひににじりこみ、御息女を養ひ申す内に、小女郎殿の容子を聞いて、此方へ參り詐僞事を申して女郎を伴ひ、ゐさし町に隱し置き、忍び〴〵に新兵衞殿に逢はせまして、下されたる三十兩を路銀にして、殘らずうち連れ古郷へ歸り、勘氣の願ひを仕らうと申し合はせ、二三日中に爰元を立つ筈の處に、未だ新兵衞殿御連來らぬはゐるか、此の仕合せ」と段々を語れば、おの〳〵手を打つて、兎角一時も早く其方は本國へ歸り、萬事の談合を早うして進ぜられ、新兵衞殿には、急々大坂へ御越しなされたがよからう」と云うて居る所へ、勝山奥座敷より走り出で、「容子は聞きました、今宵は私が方で新兵衞樣の門出祝うて立てませう、先づ目出たいことゝ、大六も愛念を切つて、共々新兵衞が首途を祝うて遣りける、天晴浮世の通り

稽の寄り合ひ／＼

傾城歌三味線円之巻 終

傾城歌三味線円之巻

# 傾城歌三味線五之卷目錄

傾城歌三味線五之卷目錄

養子に遠慮有馬の人形筆書いた手形の斷り

髮切つたおやまが代りに拜む天晴な貞女ぢや

人に知られた榮華の家子孫繁昌萬歲樂

郎、滝鯉と云ふやうな龍門の瀧へ、登りつめる大盡になる様に、吾妻と名を附けて出すとはや、鰯しといふ大盡が見入つて、晝夜ともに十日揚げ詰め、此の上を行く北濱の鰐と云ふ大盡、手廻しにして鰐に先を越されたと、廓雀中で人の知つた、名代の末社共數十人召し連れられ、越後町の扇風方へ乗り込み、廣座敷を我が物にして「汝等今日は、世界に無い圖な趣向を思ひ付いた、太夫天神を揚げて遊ぶは常なり。我等は替つて此の郭中の遣手共許り、何十人なりとも揚げて、附いて居る女郎共を誹らしめ、圖いて遊ぶ趣向ぢやこと、亭主に言ひ渡されて、夫れ／＼の太夫衆に断り申し、呼び集めらるゝに、流石角金の威光に等さは、小判の光で何んな事でも爲うと儘な浮世、のこらず參るの由、これや神武以來聞きも及ばぬ遊興と、末社ども浮かれ出づれば、遣手共も揚げらるゝ心とて、面々絹の衣に著換へて、五月蠅やぬくい白粉など、是れは宥せと笑ふを叱り「隨分汝等酒の上にて戀を仕掛けて、何といふぞ、當つて見よ。」と、大盡の御指圖を受けて、そゝらずらゝめにして控へゐる。そりやこそ君達の御出でと見るに、何れか横へ肥らぬは一人もなし。思ひ／＼の打扮、皆太夫様の召し下し、紅絹裏著る程に可笑し。貰ひ貯めがないかして、前にさげたる巾著も、秋の比からふら／＼と、夕霧様に付いてゐた杉といふ遣手の古狐、如何な客をも罠に掛けぬ事なく、一切女郎を進めこみ、賢うなすも是れが業とや。次は奮の河原の國といふて、此の里にて出生し、二歳の時酒湯かゝりてから、あ

ござつた土産ぢやと、おれや推してゐるゆゑ、旦那殿へ内證いはうと思ふことといへば、古狐の杉が聞いて、其方を遣手仲間で、佛の玉といふは、其の貴い心を見ていふ事ぢや。遣手といふ者は、正直に氣を持つてはならぬぞや、隨分太夫樣の爲を振舞に氣を付けて、螺の尻程捏してゐねば、無いものゝ手間毛數まで、もうおぢや。嫁へでも赤子の下繕ひでもない、間夫へ心中立てて、外の客に打解けて寢ない爲の手管ぢや。ヽヽ、齒痒い、おれが附いてゐるなら、そんなちよろい手は喰はぬに、有難い人ぢや、その位なら太夫樣に廻されてゐるやろ。」と、たつた一口に言ひ込めば、大盡此の話を聞きあり、そりや突き出しの吾妻事か、可哀や鱶めが可惜金を費うて、吾妻を食はう／＼と思うて、間夫に呑まれた鱶ひ居るこ。眞に身共は惡い癖が有つて、こんな事聞けば人の事でも齒痒うもどかしい、且は難波の色情を握る男共の恥さらし、鱶が遊ぶ揚屋へ行て、身も女郎呼んで、一所に繋いだ體で、其の吾妻女郎が手管を見出して、此の津の客を飴にしをつた所を恥かかせて遣らうこと、さりとは物好きな事と思へど、おれが無用と止めてもおかず、眞鳥がそばの獅子王虎王で、惡い事でもこりやたまりませぬわと、そやし立つる次々の末社共、且は此の里の女郎樣方の、行儀を直して遣らせらるゝといふもの、幸ひ鱶樣とは魚と水との鰐大盡樣、打ち込んでの遊びとあらば、御滿足でござりませうと載せれば、載つて直に揚屋へ行き、鱶と一所になつて、吾妻とおかうきになり、我も手相の太夫を呼びに遣れば、今日

あれを聞いてか、ハテ腹に子が有るとは、抑始めから睨んでおれど、俺が逢ふは跡の月の二十日からなれば、他所の子なかうく事ではないに因つて構はぬ。ェヽ上手い男ぢやな、其の腹に子の有る様にして見せらるゝお卿の手管で、我に誠の枕を酔すまいとの作へ事ぢやが氣が付かぬか。但し二十日から今日までは十八日ぢやが、○○○有難い○に逢うたか、未だ左様なのに逢ふまいがな」「御何にも○○○○たれども、聞いが甘いが○○○○○○」「それ／＼其處に氣の附かぬ結構な男故に、金許りかお女郎までにつかはるゝ、ことはもどかしい男ぢや」と無れば「いか様己も餘程面長な所が有る」「コレ太夫おれが外聞ぢや、腹摩りを爰へ呼びや。」と、百の口が六七十も抜けた大盡、猫撫聲していはるゝ」此の容子を聞いて花車は、腹取りの元徳を連立つて座敷へ出で「たとひ太夫様の手管なさるゝとも、揚屋が目を塞いで、隠し男が腹さすりになつてござつたを、だまつて太夫様に逢はせませうか」「コレ私方へ常住ござる腹摩り、頭巾取つて頭も見せて下され、此の里で爵様として金貰ひながら嫌がるも道理ぢや」と、花車に打ちこまれて、皆の者爰も面白うないぞやと、替りに取つた女郎なれば、残して置いても念がなく、是れから氣をかへて、南へ行て騒がう、来い／＼。

## 第二　太鼓持の世渡りは　沈む瀬あれば うかむ瀬あり

たやあらうの。夫れに書いた通り、月の出を相圖に忍び込み、連れて郭を走らうと思うて來た所に、親の罰か其方と縁がない故か、今宵から飛び下りし時、葉山のこの岩角で、右の股を突き抜き、動く事も成らぬからは、連れて退く事はおいて、此の儘捕へられ、生恥を曝し、憂い目に逢うて死ぬのであらうと、痛む處を抱へて泣きければ、「ヤア、それ悲しい事をさんした。」と、膝を捲り月影に見れば、鮮血流れて葉山の草木を染め、時ならぬ紅葉の如く、「いとしや私故に有徳な御身が、難行苦行を遊ばし、剩へ斯うした怪我にて、獨りと郭の者共の手籠にならんすやうには、皆私がさせました。許して下さんせ、もう私も覺悟しました。火の中、水の底へ入るとも、かう取り付いた手は離しませぬ、こなさんと共に、どうした憂き目にあふとも離れはせぬ。」と、しがみ附いて泣いてゐる。折から嘉大盡お目覺され、太夫はと尋ねさせらるゝ。一座の者共始めて氣が附き、「こりや太夫樣の見えさせられぬわ。」と、今宵からの醉ひも興も覺め果て、手分取り／＼に庭へ下りて、彼方此方を探し、「是れ爰に誰とも知れぬ男と咄してござる。」といふより、亭主驚き「先づ男め逃すな。」と、男共に言ひつけ無體に太夫を引き離し、親方へも斯くといふて遣はせば、客は驚きかけ付けて、「今宵は夜も更けぬ、僉議は明日の事、男めは亭主に預けた、太夫はお客へ御斷り申し、此の首尾なれば明日まで爰には置かれませぬ。連れて歸つて穿鑿致す。」と、引き立てゝ歸れば、大盡も遊び難く、末社共を連れて御歸

誰も小女郎さんにはあやかりものと、流石上地柄にて俄に祝儀物を調へ、樽杉折の山をなし、獻々の杯事、相生の松風、小女郎さんは九十九まで、千秋萬歳の、ちよこの玉屋新兵衞が、身請こそにぎはしけれ。

## 第三　親子の緣離れぬ中は石より堅い情分限

世の人身の脂を出し、晝夜油斷なく稼ぎても、溜るはとけしなく、減ることの早さは金銀ぞかし、假令百貫目持ても、身代自慢せらるゝ人も、傾城に深く戯れ、家に疵附けずやまれたる人は、世上に少なし、費ひ果してから合點してからが、目の覺め時がおそし。必ず血氣盛んなる時分に、分別なしに行く所にはあらず。玉屋新兵衞勘氣を宥され、再び親の家へ歸りければ、舅軍右衞門、新右衞門に逢うて、先づ以て此のたび新兵衞勘當を宥され、親子の對面萬々歳目出たし。我等とうから存じをりたれども、新兵衞勘氣を宥させ、元へ戻さぬ内は、取交ぜていひ出す事も如何と遠慮し、兎角首尾能く家へ入つての上に、申し出さうと存じ今まで控へをりました。一旦身共が娘を、新兵衞妻に遣はしてござれども、親父殿此の度取り戻して、一家の緣を切ります程に、左樣心得て下され。新兵衞殿暇の狀を書いてくりやれ、舅が方より緣を切つて、取り戻さうと云ふは、定めて小女郎請けられて還入つたか

うと其の時から見限つてゐた。そなたは身共が新兵衞の世話燒くを、物好きなとをかしかつたか、そなたも獨り子、身もひとり娘、兩方共に大事に思ふ親の心は同じ事ぢやと思うたに、恩愛の心ない、人間の情のはなれた親父ぢやに因つて、人畜と云ふが無理か。コレ世間の親はの、折檻に振り上ぐる杖を、脇から留め手がおそければ、側にゐて心ない人ぢやと、心の中に取りさへ手のないを恨むに、人たる者の親の習ひ、夫れに此の世話は誰がためにしたぞ、お主の子の爲でないか。夫れに子より金が大事で、此の軍右門が持ち傳へた田地を、ようは質物に書き入れさせて、證文とりやつたの。おれが倅が事に入られた金なれば、跡で不埒にするであらう、其の時二言と云はせまいため、田地を書き入れさせられたの。其方のやうな義理も法も知らぬ人非人を、緣者ぢや、一家ぢやといはるゝが無念なに因つて、義絶する。」と、是れまで堪へし鬱憤を一度にいひ出し、暇の狀をとりたつれば、新右門は腹の立つ氣色もなく、「軍右門殿、ようおつしやる事ではないか、お胸さへ晴れたらば、我等が申す一通りを篤と聞いて下さるべし。生として子を憫まぬものはない。新右門も木石ならず、たつた一人の倅が不便にならいで何とせう。金銀家財は皆あいつが物、惜しみて金を出しかねたではなけれども、世の中の義理といふ物は是非がない。此の度倅が勘氣の詫人、こなたがたゝき廻つて賴んで下されたと見えて、御町衆は申すに及ばず、五重相傳まで授けて下された、大事の導師の來迎院の和尚までが、

捨られし時、産の子なりや、養子じやとて、別け隔てする新右門ではない、養子は他人の子といふ義理が有る故、五百兩費ふまで用捨もした、明日か日新右門が眞實の子が出來た時、仇錢に文費うたら只おかうか、勘當して目に見る我ではないと、本子を持つて眞底から不便なといふ味を知らざる故、はねけん放しで云ひ置きし、其の時の過言が、可愛う思ふ今の新兵衞が怨となつたは、いふまい言葉を云つたゆゑと、後悔しても返らぬは、養子を勘當してから、其の翌年此の新兵衞が出生して、四十過ぎて始めての子、日々に可愛い程、追ひ失うた養子が事が思ひ出され、其の時の實の親の勘兵衞が心の中を思ひやつて、恥かしうござつた。新兵衞成人してそろ／＼金銀を費すゆゑ、町所の手前、又は實父勘兵衞が思はん所を計つて、度々內證勘當したは、世間への言譯、夫れでも惡性やまぬゆゑに、是非に及ばず表向へ出して、久離を切つたも、此の新右門が本心から出た事ではござらぬ。皆勘兵衞へいうた過言の恥かしさに、其方へ田地を書き入れさせたも、我が産み出した子の事にも、去りとは酷い親父やと、わざと世間で沙汰に逢ふばかりに致した。何の不便な子の爲に、世話して下さるに、禮をこそいひたう御座れ、抑や質物に入れさせたうござらうか。此の度和尚へも密々に內證申して、和尚の心得の分にして、仕代勘兵衞を證人に入れさせ、勘兵衞の詞を立てて、勘當を宥したに、養子をいひなした言譯、旁、皆以て新兵衞が勘當を、宥したうてならざりし身共が方便、子ゆゑの闇に

# 傾城禁短氣

安藤白笑

## 第四　女郎買總廻向の鐘木町

付り　粹の教化に靜まる亂氣

此段は　下心を悟りて間夫ある事を察し、萬事を案思て見て受け付けず、本心の實を見する女の粹の有り樣を肝門を具に爰に記す

誓無間茶屋傳馬町人謀客風呂獄卒と、諸〻の流身派の女道門をうつ事、至極の僻事笑ふに堪へたり。前巾其の上流派に、なべて僞り飾りの更に實なしと詰りて、女郎未見眞實といへる由、可笑しいかな。近頃著の小錢を以て、丁稚小者をたらす樣な、小乘の苦道宗が口先から、廣大無邊の流身派の沙汰、慮外の至り。數萬億の功を積みて、上品女郎屋の座敷に至らずして、何とて傾城の實不實の評判思ひもよらぬ事。總じて女郎に實なしといへるは表向一通りにて、内證にいはずして眞のあること、中々各方の端金でかはれし分にには、有り難き西方女郎の内心の眞を如何で見つけたまはん。假初ながら此の說法にむつかしき事ながら、勤め女はなべて僞り計りいうて、實のないものと心得給ふ。愚癡無智の野暮達の爲詳しく說いてきかせ申す、大事の所おや、篤と聞いて悟道せらるべし。▲女說實顯運に困く、昔日御室町通に熊本屋といへる肥後問屋、何れ長者に似たり。皆客の物にて外聞へ、む丁銀毎日宿に出なして、勘定はあはずと女郎にさへあへぼと、お池の久左衛門が忍び駕籠、のりたへて止度はなく、一文字屋の古唐土になじみがね、紋日役日も一人してつとめけるが、此の大臣本は二百兩もつて熊本屋へ入聟、未だ養子親堅固にて近所に隱居し、娘おぎんと娶はせ、五年以前に面家をわたされしに、養子聟の惣助けしからぬ島原狂ひに肝を潰され、一家をよせて家を追ひ拂ふ相談、娘おぎん一人悲しみ、「私意見を仕り、向後不通にやまるゝやういたすべし、此の度の惡狂ひは若氣と

氣骨を折らせず、言うた事の違はぬ客には、朝から來て待つてゐやつても大事ない筈。」と、大きにおつとがる所へ、「太夫樣お出で。」と、申せば、大臣ひぞられて花車を相手に、「惣じて女郎に勿體のつくも、後に根強き大臣柱のすわつてあるからなり。賣物に拵へおきたる女なれば、其の時の相場のよき人におもひつかるゝが、商賣上手といふもの、言ひにくけれど皆の衆が悦ぶ上をする霜先の男、どうなりと氣を取つて繋ぎおかれなば、正月のつかひ物になる大臣、急によい鳥もかゝらぬものぢや、頭にぼつと出ても後のない新規の客より、馴染の慥な男にまはられたが、好からう樣に思はる、」と當言いへば、太夫はそれには構はず、召連れられし末社の與平次が耳つかまへて何やら私語かるゝを、大臣手前迷惑がりて、「大きな聲して仰有つても大事ないことを、何かありがましうお囁き遊ばすことよ、いかにも／＼お出で遲しとて旦那先程より御機嫌惡く、餘程御取りなし申してをりし。」といふをさりとは粹めと剃りたての月代叩いて座になほり、捨ててある杯取り上げ一ッ飲みて、「妾が遲いが今日に見えた樣に新しうござんすの、全盛の太夫と思うていたゞいて下さんせ。」と、僅かな言葉の内に千萬の思はく籠めての言ひ廻し、よい機嫌の直し機會と、「ちと待つ身にして見て、此の退屈さを思ひしらせたい。」と、是れから口がほどけて來て暫くの酒盛。夕飯過ぎて日も西に、座敷も入りめな時分、人顏もそろ／＼見えず、勝手には燈火の用意する頃、大臣用にゆかれ、歸りに庭の作り木詠めて

心をつくすは世の中の阿呆なりと、今までの身をかへりみて、それより此の里狂ひ物の見事に止みぬる事、是れ唐土があてどもない方便の一枚起請を見せて、實のない仕方をして見せ、里通ひを止めたるは内證の眞實、心中をたてゝ末々までをあひ通せしより、遙かに優りし心意氣、身の爲になる客を取りはなし、我が身を不心中者になして大臣に思ひきらせし所、女郎に實がないとは申されず、是れ表向は僞りあるに似たれども、内心の眞何といふれも、有り難い心いきではござらぬか、なむあみだ。

## 第二　三野の女郎安心の身請

### 付り　揚屋に有り難がる千兩の光後光

女郎方便品に曰く、人間遊山のうはもりは色里に增す事なし。此の有り難き道に入つて、八宗兼學女色一道上人のすゝめに、女郎買は抑より太夫にかゝるがよし。其の故は又上もなき職なれば、限りを知つて止る事はやしと、生まれながらの水道の水呑込みのよい大臣、身上は根強い礎、石町の丸七樣とてかくれもなき女郎買、始めて吉原へ通ひ初められし日より、三浦の太夫職花紫に色濃くも染み付き毎日の泊狂ひ。血氣の團助が二挺だて、上下二人あきれし舟の平常より格別あし入りて、艪は急けども遲きを不思議だつれば、大臣下人に持たされし風呂敷包の中より、革財布を出され、「少しの物が重りにかゝる事よ。」と取り出し給へば裸金にて千五百兩、「是れは何になる小判。」と、船頭肝

いかしき顏付。「さりとは此の里通ひするほどにもない角のとれぬ男かな、さのみりきまるゝ事にあらず、我等只今訊ぬるは別儀にもあらず、若し本妻にする合點ならば、大きなる思案ちがひ、必ず無用にいたされよと、それを止めうばかり。」といへば、「その仔細は。」とたづぬれば、「さればは最前もいふごとく、花紫と我等は太夫なりの口明より、大方は他の客にあはせず、五年が間は單に妻女のごとくなれなじみ、互に偕老の契り、えびや半兵衛座敷にて、其の初秋の七日の夜空を眺めし、假令此の身天竺浪人の身となるとも、見すてまいかはるまい、命のうちに一度は夫婦になりてと、天に誓ひし二人が指の血を絞りて、神々を證人にたてて、眞のあるほど書きつくして、灰にしてつけざしの酒の肴となし、二人が腹の中にをさめおきぬれども、遣ひくづして今一錢もなき身となれば、逢ふこと稀にして互の心ばかりを筆にいはせて、今朝までも便りをせぬといふことなし。しかるを貴殿金の威光にまかせ、太夫が花の姿は請けられても、底心は我等が請けておきぬれば、女房にせられてから底氣味はようあるまじ。尤も登りつめたる客共には、望みにまかせ誓紙も書いてやるよし、是れは勤めの中にして、請け出さるゝなら大きなはまりなるべし。太夫が眞の分は此の男が皆浚へこんでおいたれば實に二ッはないはず。いか樣見れば貴殿も壽命はながからう、鼻の下がながい程に。」と、好い機嫌聲

忽、御免なれ」と面をなほし、互に一禮の腰をかゞめて、海老やハ丸七大臣は御來臨「太夫さま今朝から御出でにて、此の里の名殘よ今日をかぎりと、お暇乞ひの御杯ごと。年がまへな女郎樣方はあやかりたいと、遊行上人の御札いたゞくやうに、御杯を頂戴遊ばすこと、何とて旦那遲きお出で」と、御機嫌取りの男共取り廻してそやし申せば、「遲きには仔細あり」と、下人にもたせし皮財布を取り寄せ、千五百兩の金を五包づゝ三列びにならべ、「太夫是れはさもしき物ながらも、命の代りになるは是ぞかし、此の大切なる金銀を出して、其方の身請をする我が心底に、實か虛かいうて見やれ」とあれば、太夫莞爾と笑うて、「是れは改まつたる御一言、眞の御心あればこそ、憂き勤めする郭の苦患を救ひ、此の里をお出しなされて下さるれ。そりや實なうてかかるお心遣ひのなるべきや、それは申さぬまでも知れてある事。」と、小指をそらして小杯取上げ、「かうした座敷でこな樣と酒のむも今日許り、コレ旦那殿あいましよ。」とさす杯をおさへて、「まア一つ聞きたい事あり。我等眞の心底は今ので知れたが、其方が實の根本を聞きたし。我にそうて一代碇を下す心か、船町の喜田に末につながるゝ心底か、此の思入が聞き切りたい。」といふ時太夫座敷をたつて、「さうはいはずとも身請の變替はなるべきことなるに、淺ましきお巧み、皆樣おさらばや。」と歸らんとするを、大臣はしりよつて袖を扣へ、「身請の變替とは丸七に疵をつける樣ないひやう。小判の山をついてくる男に變替とはどうした言ひ分、

の面手代をだきこみ、本妻に入れたき願ひ披露させしに、何れも別儀なくすみて、母方の伯父靈岸島の江戸屋道齋老親分になられ、近日あらためて婚禮ある筈。花紫も悦ぶべき所をさはなく、大晦日に算用のあはぬ顏付。「是れは太夫樣御一生のかたまる時節、いそ／＼あそばせ。」と、つき／＼の女共いさめ申せば、「おれは大分心當ての違うた事あり。」と、髮頭さへなりしだいに、櫛の齒も入れず亂れ姿、何しらぬ太夫が仕方と、丸七不審をなす時、太夫申すは、「私お前の奧樣となりますことならば、心に籠めしねがひ事あり、是れを御聞き入れ下されぬ内は、御手にかけらるゝとあつても、おかた樣に成る事はなりませぬ。」と、思ひの外なる事を申し出さるれば、丸七も流石の粹にて、「夫婦になりて一生我が内をまかすからは、心底に少しにても隔てありては打ちとけられず、成程願ひあらば包まずあかして、何事も心に懸らぬやうにして、本妻になすべし。」といへば、「近頃かたじけなき御心入、申し出すも恥かしながら、船町の喜田樣とは末々夫婦になるべき互の堅め、誓紙まで取り交して今とてもわすれがたし。身は賣物なれば金にしたがうて、何れの宿へも靡きゆくは習ひながら、外におかれて當座の花と眺めらるゝ分は、金が敵の世の中それは是非なし、極まつて御内儀樣と呼ばれては、言ひかはせし男の貧なるを見捨てて、榮花の家の奧樣となりしと、喜田さまに思はれては、假令大名の御前樣になりてから本望にはあらず。願はくばおかたなりの前に、喜田さまに逢うてぬしの心底き

き、互の起請を取り戻して、心よくこなたさまと夫婦になりましたい」との願ひ、逢はさにくいものたから、此のおもはくの心算用をすまさいでは、手中が野邊に庇を抱いて寝る心、底氣味すぐれねば兎も角もとゆるして、喜田がかくれ家へ人をやれば、此の男も來にくき所をおめおめ參りて花紫に對面し、「大夫こなた樣をよびましにやりしは別儀にあらず」と、いふ口上のききをありて、「皆まではいふまい、そなたなればこそ此の節に人をこして、一通りの言譯、一生添うた同前、言ひかはしたる言をたてて、是非夫婦にならねばならぬと、立身する其方に邪魔をなして、我等昔の起請をいひたてにして、無理に我が宿へ伴ひゆけば、手鍋を提げさせ永く貧苦の苦しみをかける是れ眞の情にあらず。かう落ちて來るからは志は互にかはらねど縁がないといふもの、隨分丸じ氣に入りて、見おとされぬやうにし給ふが肝心なり。我事其方の請けられし日より、男をたてては其方が行末の障りと思ひ、かうした姿に樣をかへたれども、取り交しの起請をかへすまでには、佛神の恐れあれば付髪をして、今日まで表向は男を作つてゐたりしが、是れより後は有り難き身の取りおき、見收めに見給へ。」と付髪とれば剃りたての青入道、淺草縞の破小袖屑をぬけば、下には鼠色の木綿衣、是より信州善光寺參り、それより上方へ歸るなれば、菩提の障りと誓紙取り出し、大夫に戻し、「我等が起請はそこにて燒きて捨てたべ、命あらば重ねて逢ふべし。」と、留むる袖を振り切つて立ち出でければ、太夫暫くは狂女のご

とく泣き狂ひしが、我と心を取り直し、既に機嫌をつくり、首尾よく婚禮すみて二月ばかり過ぎて、度々亭主に出家の暇をもらひかけ、つひに身を墨染となして、鎌倉の尼寺に、行ひ澄ましてゐるまそかりけり。

## 第三　難波の太夫郎身根引の成佛

### 付り　引船にひかれて彼岸に至る大臣

下心僧都の與女要集に曰く、女郎に嘘の眞、眞の嘘といふことあり、是れ傾城買の大事、肝心關門の所でござる。何れもよく聞かせられい。譬へば女郎の嫌と思ふ男なれども、勤のうへで嫌なる顔もならず、折節は愛しいふりして、善哉々々よい男ぢや、諸事あまるはなどと燒手を見しらし、逆上せのぼされ、此の女郎に添はでは、浮世の中にすんだ甲斐はないことと、力瘤を出し根引にして、遂に夫婦になつて永く添ひはつた所を以て、嘘の眞と申す。又眞の嘘とは、末は夫婦にならうと、八枚起請を書いて心を堅めても、思はぬ方へ根引にせられては、言ひ交はしことも嘘となる。こゝを以ていにしへの粋達も、眞の嘘とは說かせられた。何と有り難い事ではありないか。此の類の事近き頃難波に有馬屋の山といふ大臣、女郎は新町の茨木屋の半太夫を物すき、一日も宿に枕をさだめず、每日々々通ひつめて、三年は愛に住吉屋の、二階座敷を不斷あけさせ、他の客を入れず、南の端の口輕な役者二

事のおおしそよく取つておけ、死して冥道へ行く時六道錢となして、あの世までお情を忘れぬ種に」と大事さうに渡せば、山は是れを見て我ををり、「初心なる女郎ならば赤面もすべきところを、半太夫なればこそ大道の眞中にて、ようは頂きしことぞ、是れはもう溜られぬ所ぢや。」と、挾箱持ちし下人を呼び寄せ、蓋を取つて五十兩包を出して、今の一錢の替りに是れくれなるの、ばつとしたる仕打、半太夫に悦ぶ氣色もなく、手に取るより五十兩の小判大道にばらりと撒きて、「眞ある一錢には劣りしもの」と見かへりもせず、すぐに越後町の扇風方への御來臨、此の見事さ夕霧以來の御太夫様と、山も我ををり住吉屋に驅け行き、「我暫く親の勘當をうけて、兵庫に忍びて居たりしが、近い此親父はてられ、跡取るべき子とては我一人にて、母一門より人橋かけて、再びよい身になりぬれども、太夫が以前にかはらぬ心ざしか、見屆けての上に引つかき、一代地をふませぬお家様と、そなふべき心入にて、此の頃かうしたやつしをせしが、今日といふ今日、見事な心いきを見て感にたへたれば、親方手前を悪しからぬやうに、汝計らひて根引にしてくれ。」と、挾箱の中なる金の山を、亭主に見せて頼まるれば、「是れは八幡ない國、そも／＼仁德天皇此の津に都を定められし此の方、かうした身請はきかぬこと、太夫様へも此の大略を知らせまして、お心用意もさせませう。」と、扇風方へ参りて内證を吹き込みければ、「女を見違へられて、知れてある心を探られ、お姿をやツされて、さま／＼心をひいて

がつて、見事なるあそばされかた、どうでも愛しい子には旅をさせいぢや、少しの内の田舍住居に、是れ程分がようならせらるゝものか。」と、そやしたてる所へ、「半太夫さまから御文が參りし。」と捧げ申せば、大臣披き見給ひ、「何々今日の客は田舍の堅い衆にて、少しの間も動きがとれぬとの言譯狀、奧まで見るに及ばず、かうした所を名擧呼びよせるが我等が得物ぢや、ちと見ておけ。」と自慢たらふく仰せられて、硯取りよせ返事書きてやらるゝを、亭主下心あれば罷り出で、「憚りながら何と仰せつかはされます。」と伺ひ申せば、「されば半太夫、そも〳〵新艘の開眼我等いたして此のかた、末は根引の約束、恐らくいふではないが、廣き難波にあの女郎を、ひつかきさうな大臣外に覺えず、請け出さうといふたらば、さんたもしさうなものが、少しの間勘當せられて落ちたと見すゑたかして、兵庫から度々文していひつかはせしは、我が身勘氣にあふは暫くの中なれば、追付ゆるされ、めでたう立ち歸りて、約束のごとく請けてやらうといふてやりし返事に、かならず我が事おぼしきらせられて、たゞ御首尾よくお歸りのみを願ふと、身請の事とては、なほ〳〵書きにもかいておこさぬは、とても歸りてからが力に及ぶまいと、あの女が見すゑた所が憎さに、此の頃立ち歸りて以前の身になりぬれば、わざと淺ましく姿をやつし此の里へ來て、彼奴が心底をさぐるに、どうも實を見つけぬゆゑ、今日一文の錢をあたへて心を見しに、天晴なところを見出したれば、最前も汝にいふごとく、今日中に親方

取り寄せられて、太夫さまを箱入にして、其の夜に取つてかへられぬ。「さりとは氣味よし是れでこその都の大臣なれ。」と、難波の水をのんでゐる樽共が、我が國ならぬ京を褒めけれど、山にはかゝることはしらずして、三筋の瀧を見たらば、太夫が定めし飛んで來るでござらう、所を我等は物いはず少しひぞゝ着て、ゆるりと三味線ならしてゐるよう程に、主人は苦止がる顔して、まうし太夫さま何をしてござります。お前に貧乏神と念頃してござるかして、吹き付ける仕合を後から澁團扇で招くやうなこと、私が先程から、甘い口の酸うなるほど、お前になり代つて詫言いたせど、中々旦那の御機嫌がなほりませぬ、太鼓衆をお頼みなされてなりともと、なりかゝつた身請のきえぬ樣にあそばせと、實らしう申すべし。其の時末社共に、頼みますと取りかゝらば、私共が力におよびませぬ、取次よりは直談あそばせ、つき離して、然らばせう事なさに、例のならひの涙をこぼし、ようござんす妾さへ死ぬればよいものといふ、てつきり變へごかしであらう。そりや人音がする默れ。」といへば、太夫ではあらで、やあこれのさごろもといふこんはく走り來つて、「半太夫樣に、都の吹き出し大臣樣が、金とつりがへにして只今抓んでお歸り、お前は一筆殘されたき御心入なれども、もうかうなる上からは、定まつた男ある身、旦那殿へ手前遠慮すれば、何事も見た通り心得ましてくれとの、お言づけ申しに參りました。何としてお前にはおそまきにして、馴染の女郎を餘所の花にはなされしことぞ。」と、申

いも女に文をわたして歸りぬ。八雲此の文を見るより、何か書きてありしや、俄に泣き出し、單に狂女のごとく、笑ひつ嘆きつしまふ〳〵の身振、つきぐ〳〵のものたご共恐ろしがりて、付け置かれし助右衛門に此の段々をいひて、八雲が様子を見せければ、是れたゞ事にあらず、最前の在所の噂といひしは、紛れもなき眞なるべしと、近所の山伏祈禱坊を招きて、色々と祈らす程日ばしり、髪おしみだき恐ろしき有様、其の夜の明くるを待ち兼ね、名葉法師方へ人橋架けて呼び申せば、法師更に急ぎもして整くる四ツ過に來られ、「何を騷がしうするぞ、山伏などの祈りでゆくものにあらず、我らが祖の秘密にて、此の狂氣をなほして見すべしと、座敷へ通り給へば、眼すわり意氣さし荒く、美しき姿にもなくて凄まじき顔相、鐵漿つけし齒をならして様々の譫言、聞くに身の毛もよだつ許り。法師は少しも騷がず、懐中より香引き寄せ心静かにいぶく煙らせ、おどしつけて「是れ八雲、所に居て多くの客に接まれても、まだ粹といふ人を見しられぬと見えたり。なぜ打ち破つて、我が身には深い言ひ交せの男あれば、お情に來れにもはせて給はれと、包まず心底をあかし、我が手前を首尾よう隙に貰はれずして、騷がしい狂言をはじめ、能かれて隙やらうとは、そりや前方なる若手の男にして見せたがよい筈。此の古法師はそんなちよろい手をくふことにあらず、念頃な男は郭にあるか客にあるか、ありやうに白狀めされ。出しおくれにさつて其狂言させらるゝと、其方が身は買ひ切つておいた物なれば、死なる

るおかには」と、尋ぬるを見とむれば、太夫の左門にまがひなし。「是れはさて今少し早くば、半七に逢はさうもの、探ぎの爲に江戸へ今朝ほど下りしが、其の御方の事のみくど／＼申して出でけるが、不便や」と泣き出せば、「さりとてはおいとしや、最早逢ひ見ることはなるまじ。我事三六樣と申す歴々人にくぜられ、傾城の身となり明日より鳴瀧のお下屋敷へ參るはず。是れも身の爲ばかりにあらず、實は半七さまの貧苦を救はんために、是れが敵の世の中」と、兩袖より五十兩包二ツ出し、「お情に追つき、此の金を進ぜまして下され」と、涙ながらに一筆を金とともに殘してわかれぬ。小六夫婦心哀を感じ、さゞに打ちなき跡を慕うて、江戸まで行きしに終に逢はず、又立ち歸りて其の身の活計、隨分悲しき中にも、此の金一兩も手をつけず、半七を心がけて近き頃まで尋ねしに、今の賢人と、知つたへし情感ぞかし。左門は其の後鳴瀧の棒林に花のあぶらをのせて、終に極樂へ手引にせられぬ。

傾城禁短氣一之卷終

き、淫亂居士といへる、若女兩道を兼ねたる色道者を判者と定め、女男の兩宗立ち分つて、各座につかれて後、▲計案和尚問うて曰く「男色一道の中に貴若衆あり、上品なるを名づけて、太夫子、端太子、役付といへり。」▲計案のいはく、「貴若衆あらば、なんぞ傾城無間、茶屋傳馬、白人謀客、風呂獄卒といふ異名を付けてあざけるぞ、其の惡さまに罵りし異名の由緒をきかん。」▲甘尻答へて曰く「先づ傾城無間とは、世間浮氣の大臣、傾城にたらされ身代をつぶし、程なく乞食になる故、傾城買ふものは乞食に間無しといふ心にて、傾城無間といへり、又茶屋傳馬とは、一切の茶屋の遊女、座敷へ出でて客を勤むるは、たゞ傳馬にとられしごとく思ひ、戀も情も意氣も張もなく、眞實の契りにあらずといふことなり。白人謀客とは細かにいふにおよばず、白人といへども内證はすさまじき黒人にて、白人らしき顏をして、客を誑るといふ義理なり。風呂獄卒とは、風呂の湯娜どもが、客をやいたりはぬたり、眼をむいたり、偏に罪人を責むるが如くするゆゑに、獄卒といへり。されば勤め女にかぎらず、一切の女、眞なく僞り多く、よく人を迷はし、身上をつぶさす大魔王なり。世に女道あるゆゑに、うつけし人種つきず、喧しき赤子のこゑ、雨漏を難儀がらせ、是れよりして取揚婆々、仲人嚊も出來、嫁入の長持葛籠、親々の厄介となり、悋氣喧嘩に道具をわり、月水に家内をけがし、老いて、山の神と變じて下々を叱りまはし、腰ぬけて鬼婆々となつて嫁子をいびり、一生もてあつかひか

ねて、男の難儀するは、何故ぞ、是れ皆女道の業ならずや。男色には假にもかかるわざなきは、實あつて慾なきゆゑなり。然るに女は第一大慾ふかく、眞すくなき證據は、世盛りの時は其の夫が心にしたがひ、姑にもおそれて孝をつくし、ながく縁ある事をいのり、萬の始末も心から大事にかけ、人ににもよきといはれたき嗜み、下部にあしくあたらず、世の業に油斷もせず、朝疾く起きて髪結ふ形を見せず、夜の行水暗きをおそれ、夫の疑ひをはらすめり。かかる身持は其の家業ゆゑによつて、我が慾を深く思ふ故ぞかし。少し身代薄くなつては男に殿もつけず、世の挊ぎをやめて下女とあらそひ、長箪の傷に霜をつくり五節句にも髪頭をみだし、亭主に舗の破れし着物を其の儘にてきせ、揃うた皿も九枚になし、諸道具ふ手あらく、大黒柱にはくろ吹きかけ、箱枕におしあて一[illegible]をけづり、腰張を捲つて縫屑をつゝみ、接木の初咲を捨て、下折り、書院の軒端は洗濯物の竿持たせとなし、とても人の物となる賣家と住みあらし、肴掛の鶴も煎じ茶の菓子に引き裂き、何もなければ其の通りに晦日二十八日も精進にして、佛壇の下も書き出しの置所となして、門口より其の家をつぶす樣にするは、慾あつて實なきゆゑにあらずや。愛を以て衆道の祖師弘法大師も、女を捨て男に傾くこし、若衆道がらずして、毎夜相逢ふといふとも、子を孕むといふこともなく、只眞實の傾もしづくの念比にて、曾て慾なし。慾にければ人の家を潰すべき道理なし。若衆は天性の美形、女色は白粉を以て面を彩り大つ

くゐじふのなるぞ。かかる淺ましき女道門の口さきより、辱くも一切衆道の有り難き道を、捨閉閣抛と捨つるはいかに。總じて男子出生して十四五才までは、前髮をゆひて貴賤共に若衆の形なり。その若衆を捨つるならば、女宗の分は、何故生まれおちから剃下げ鬢の男にはせざるぞ。なくして若衆を捨てては世に男といふものはあらじ。男あらずば何を以て女道門を立つるや、返答は。」と詰め懸くれば、計案さわぎ、「愚かや若衆を捨てよといふにはあらず。いはけなき、小兒を捕へて苦しめ、子孫相續の○ひ、無益の事に費す、衆道といふ若衆とのかたらひを捨てよといふ義なり。又世に男あらずば、何を以て女道門をたつるやと云ふらん、しからば汝等が賤しめる女なくんば、何れの所より人間出生せんや、近頃をかたはらいたし」其の上傾城買は乞食に間なしといふ心にて、傾城無間といひする條、野郎狂ひの大臣は乞食にならざるや、傘一本にて寺をひらかする類多し。女は慾深く實なしといへど、傾城遊女ほど無慾なるものはなし。藝子の慾ふかく僞り多き品は、古來より經々に大分說きおかれた、野郎蟲といふ書に、山本萬之助を評して曰く、此の子客をたらしてとることは好き、とらす事は大きに嫌ひ。歌に「おちやの湯で何とかせんや萬之助、せばかうたいのいとちやわんにて」とあれば、慾ふかくして情の道かけたり。傾城には一座のいきわるければ、恨みて重ねて來ぬをいとはずふる事あり。是れは意氣地とて根本は戀路の切なるところより出づるなれば、何程ふりつけても心ざ

買たがうてやいるゝ此の志嬉しがなしく、一度も續いてはきかず、貰ひ溜めて近所の香具やへ安く賣りて、銀にしてしこため、若衆の手づから十露盤はじき、物際に肴やよびつけ、通ひの高じめが違うたと、正眞の生男蜂を出してにえかへられ、自らがねかけてわたさるゝに、眸日せらるゝ程こそあれ、四拾貳匁貳分の内にて壹匁五分五りん輕いとて、とられぬとは何うした事ぞ。六十貳匁小判にして金崩しに、豆板銀をへて取られうよりは、銀の方が其方の取徳といふものぢやといはるゝ。魚屋もにくさに、「お若衆さまにはあんまり酷い拂ひ方、お情でなければ立ちませぬ、向ひの太夫さまからも、百日參るところへ常に出入りする者とあつて、小判貳兩つかはされ、過上は春通ひの頭につけ出して遣せと、優しい、鷹揚なる栄耀、殊に内方はお馴染深し。」とたしなませば、「コレあの衆は儲けどもでのびる身代、此方とらは、ふくと食はうといふ子供が五六人こそあれば、鷹揚にしては間があはぬ。」と、美しい顔を縮めていはるゝ所へ、井筒やから只今御出でと、駕籠の者が申してくれば、「いかにも行かうが、子供衆はおれ許りか、誰ぞ外にゆく衆が有つたか。」と尋ねられし。かかる身にても白身子供衆といはるゝは、優しきとやいはん、女郎に斯様の事を見きかす。天竺にては、男色を非道淫戒とていましめ給へば、根元道にあらず、蟻の唐渡りの道をかへて、今より女道門に改宗し給はば、永く窮屈なる目をのがれ、尋の道のわづらひなく、情の道をよくしられん、惜しいかな血氣のお上人達。」一

であ、しかも此の見分未の役者にして、我と引きよせる程の爲になる男にもあらぬに、かかる志、女房のかたには怪我にもあるまい、但し勤めの身をすてて、男を助けしためしやある。日比勿體つけて墨も禿にすらせ、奉書も引舟にもたせおいて、ありべかかりの文章さらさらとかいて突き出し、太鼓女郎に封じさせて、上書ばかりしてやるわろが、盆正月節句などいふ大紋日の仕てのない時は、小間へこの手ずからの墨も濃くすり、奉書五枚ほどに三島暦ほどこまかう、愛しいの思ふの忘れぬの、言は其方様へまかせておく身などと、二三百も書いて、不案內の芝居の紙札配るやうに、心當りの客共へ、値出して足の達者な男共を、五六人も雇うて方々へくばらるゝ。それも野染を重ねし大臣達へやらるれば、まだしもなれど、田舍の判金の、請取普請銀山の仲間、遊び客十人の中へ呼ばれ、揚屋に會つてあはれた男までに、今にノ\御うつり忘れ参らせず思ひ出し、御懷かしき神ぞノ\を書きならして、紋日を拵りつけに、配符を廻すやうに、毎日五六十の届けの文、是れでも仕手のにぶい時は、先から好みもせぬに押し付けて、二世まで契約の誓紙を書いて、○○すうて血を取り、血判して配らるゝときいたが、今の世では中々くふまいことと存ずる。いふではないが、禿子の方に先づ紋日の役目のと定めて、銀を取り込む慾な宗躰はおんもなく、身あがりとやらいうて、我が躰を我が金出して買はるゝやうなおきい意氣は、曉の夢にもない事、我が宗旨にこんなことがあらばいうて見られ

きけんに、むごく思はるゝは道理なり。男女共に我に惚れらるゝと思へば、其の人を見れども憎からぬ物なり。増して大切なる金を出し、隙をかいてその太夫など、名をさしてあげるゝ男を、何しに酷うせんぞや。利を出して我にあはんとて、銀を才覚せらるゝ、貧なる客に情深うあひなば、身上の潰るるもわきまへず、急に逢ひて目の前に、手と身にならるゝところを愛しうおもひ、是れ程に思ひおもうて来る男を、うらとに馴染など、一度にて思ひきらせ、重ねて逢はれぬやうにするは、其の男の身上末につぶれんことをいとひて、辛くあたるなれば、是れ至極の情なり。野州は我が心にあはぬ大臣か、又は鼻の高い坊主客かには、〇〇〇〇〇〇〇法を行ひ、相手を喜ばせて、ひたのぼせにのぼせた、由、是れを憎いとも情なしともいふべし。〇〇のある時は、〇〇〇〇〇〇〇時ことわりをいうて遠慮で、これは断りをいふもよし、聞くもよし、たゞ向後は〇〇〇〇〇を行はるゝ事、遠慮あるべし。戀にもあらず、情にもあらず、客を欺くといふ物なり。女郎にはかかる事聊程もなし。ふるとは格別に思はく違ひ、對する事にあらず」と有れば、▲南江院道頓くつ〳〵と笑ひて、「女郎の物にならぬといふ客をふること、其の人の身上をいとひ、わざと酷くしなす体、情の至極といはるゝ段甚だ心得がたし。誠に其の男の身をいとふならば、心よくあうて、重ねて逢はぬ言ひまはしいか程も有るべし。それに折角金銀を出し、それ一種を樂しみに来る人を、よい事させずにかへすといふは、鵜に魚をとらせて喉をし

たし。但し兒分又は大臣にもせよ、逢はるゝ度ごとに、印籠紙入、金拵への脇指扠は衣類の無心いはるゝが心中にや。若衆の指切りしとは、弘法以來きかぬことなり。名をとる舞臺子ほど少年なるは稀なり。しかれば稚くして其の辨へなく、指を切られぬとも思はれず、とかく分別盛りの年ゆゑに、若輩らしいに大人しき思案にて切られしや。然らば日剃の髭くひそらして、若輩らしう、客の内懷へはまいられぬはずなり。何とも此の段心得難し。」とあれば、▲日尻答へて曰く、「少人に慾なし、慾なければ僞りの飾り、人を誑す巧みなし。たゞ懇する人に身をまかすを眞とす。心に眞あるゆゑに人の疑ひをしらず、女郎は内に僞りあるゆゑに、あふ男の疑はんことを知つて、指爪をはなして眞と思はす作りものなり。そのよしあしは、難波へかよふ都の商人、新町のさる太夫に二月ばかりの馴染を重ねし中に、指を切つて此方ならでは我が實に思ふ人はなしと、こまごましき文をそへてこしぬれば、此の男悅び、我が宿の京にゐる空なくて、又大坂に下り船、伏見の乘合に一間かりて下りしに、同船の男おなじ京の者とて、心やすく物がたりして行きしが、もの堅き咄は根がつゞかず、氣をかへて京大坂の色咄、いづくの者も馬があうて、今まであくびしたる人々、一所へこぞりよりて、鼻つきあはせて語りけるに、京の商人船中の人の風體を見て、高が十五より上をかはぬ男共と見極め、大ひれに出て、一世に高い物のわるきといふ事なし。勤め女は實なく、僞りにて堅めたるやうに評判すれども、太夫

分あの世へふんごんで居る此の禪門に、何所に思人がござるやら、あとの月御門跡樣を送りまして、大坂の御堂へ參り、逗留の中間行衆に誘はれ始めて新町へ參り、死んで閻魔の前で咄の種にもと、老をうかして太夫を二人よんで、酒のうで遊ぶうちに、此の度御堂の御普請に、僅かなれども千兩さし上げましたと、揚屋では似やはぬ咄を不圖いたしてござるが、それがな太夫の耳に留り、よく／＼殊勝に存ぜられたかつい指切つて、是れおの／＼と同じ香箱に入れてくれられました。」と、數珠袋から紋付の香箱を出されけるにぞ、大概ならぬ肝を潰しぬ。是れさへ大きに我を折りしに、後から慥かに百姓と極印うたぬばかりの男のびあがり「あり樣達も指いたゞいた衆か。身共は是れが高い物についてござる。それゆゑおの／＼とは違うて、君ならで誰にかきらん中指、爪をも血をもしる人ぞしると、自筆の添狀がそうてござれば、正眞に紛れはござらぬが、女郎の指は恐ろしい物でござる、切れてはなれた指先の力で、持ちつたへた野山竹木までかきよせられ、今は在所の住居もならず、京の姨が許へ合力請けに上つたれど、中々はけしい姨で、今までうち込んだ太夫に合力してもらへと、擲き出されて、又すご／＼と津の國へ罷りかへる。」と、合羽の煙草入より、香箱に自筆の一首取りそへさし出し、「物はためし、在所へかへりて畠に此の指を植ゑて見たらば、蒔いた種ぢや程に生えうかと存ずる。」と、その律儀さを見たてて、かかる仕掛にあはれぬと、何氣もない乘合の男の手をたゝいて

笑ひければ、指をかへりきし四人の者共、ひとつ所へより合うて、僅か十人許りの乘合の中にさへ、一人の太夫が指を一本づゝかたげて、四人あれば四つの指、此の連中の外、何程か戴いたるものあるべし。然れば人間の指の總高、どうつもつて見ても、一人前に十より外はない指、是れは合點がゆかぬと、とられて跡に氣がつき、四人船よりあがり、手を廻して此の太夫の内證を聞きしに、季指一本此の前浮氣で手管の男に切つてやられ、それから其の指の一本不足したをいひたてに、野暮其の外行倒れの死人の指を買ひ廻し、少し面長なる大臣共へ、心中の遣物にせらるゝと、色里にかくす秘事を聞いて我をばをりぬ。然れば女道門に自慢せらるゝ女郎の指切りも、根を聞いてからは有り難からず。

すべて生得傾城の酷きといふ證據には、吉原の夕暮に四十あまりの地女房、髮はなりきまはけにして、薄汚れたる木綿布子、破れかゝりし前帶、古き高崎足袋に足をくるみ、三つ許りの娘の子を年切女に抱かせ、揚屋に尋ね入つて、ちとせ樣といふ女郎に、少しお目に懸りましたいと密かにいふ。何事ぞと太夫立ち出でられしに、彼の女、涙をこぼし、此方の姿を見るも恨みながら、思へば勤めの身なれば是非なし。恥かしながら云はねばすまず、そなたに鼻毛をよまるゝ、紙屋の清九郎が妻子なるが、こなたゆゑに大分の身代を皆になし、しかも今日は此の娘が姉を、さる屋敷方へ妾につかはし、道六にねども一つの世帶への便りともと思ひしに、その取替へ銀を取つて、はや皆にして是れへ參るまじ、いかに流れ

身にて、跡に構ひ給はぬとて、此の始末の男に身を賣り給ひては、後の世とても恐ろしきことぞや。最早よい程に取りて、愛へ來ぬやうに、今までの馴染中妻には意見をして下されゝ」と、涙片手に語れば、太夫は笑止な顔もせず、「さればいな、遊女の身と成りて、人の身代つぶさせ、又それ〳〵の内儀方の執心恨みを構ひましては、此の勤めがなる物でござるか。しかもこなたの御亭様には、ふつ〳〵いやなれど、銀のあるの浮世ごと、跡は小歌で取りあはねば、此の女房恨みしさうに、顔を眺めてかへりぬ。かかる醜き女の心底、ふかく見る程おそろし。唯くどけれど男色ほど美たる弄びはなきに、女道といふ宗門に迷はされて、此の妙なる所をしらず、若道のふかきこと、和漢に其の類友多し。悉く云ひあらはすべきも物堅くなればさし措くなり。たゞ慾と讒との女道をさつて、有りがたき衆道門におもむけ」と、膝を打つて勸めらるれば、▲島原寺の朱雀上人頭をふつてのたまはく、「それ程汝等が賤しみ汙む女道門を、何とて男色門の野郎に、女の學びをさせ、女形といふ一派をたてしぞ。」▲日尼答へて曰く、「女の體を學ばせしは、男色の一宗未だ廣く弘まらずして、女色に傾く人多ければ、これをわが宗門におもむかせんため、當分歸依する女色の形を見せて、是れより法に誘引せん手がゝりの方便なり。さるによつていにしへは葺子町の女の風を似せ學びしに、今は町の女、みな芝居の女形の風を似せ、髷の丸をはやらかし、字源次染など名づけて、專ら女色より學びぬれば、男色の至つてあり難き所は、是れを以て知るべし。

を聞かんと思はゞ、外を求めず、我が男色の中の藝子に問ふべし。今三ヶの津にあまねく太夫子供、かくし女房又は妾にして、專ら女色門を貴み、古來よりの役者付にある紋所をやめ、皆白人の紋に付け替へてありがたがること、汝しらずや」と女道門此の返答にあたはず閉口す。▲評案又曰く「白人は野州の内佛貴み唱轉する女色ゆゑつるか、捨てさるか。」と、扇を以て叩くと雖も、猶擬儀す。其の時判者浮世居士を始め、滿座一同に哄と笑ひ、前髪を切つて男色の形を失ひ、則ち女道門色論に勝ちたるしるし、末の世まで遺すべし。」と、男色方の負けたる者共の中間より、揚屋の牀入の間の夜着を傷に ていたさせ、末代までも損せぬやうに拵へさせぬ。まことに女色門繁昌の浮世ぞときこえける。

傾城禁短氣二之卷　終

# 傾城禁短氣三之卷目錄

第四　情深い誓ひの海にお陷りの男

付り　戀の闇に迷ふ座頭の思はく

此段は　凡夫の買手の身として女郎をはめんとかゝるは、我と身上の廻向を急ぐがごとし。假令大臣何程賢う立ちまはつても、女郎の陷るといふ例なき事を記せり。

# 傾城禁短氣　三之卷

## 第一　巾著山白人寺に弘むる新宗

### 付り　色茶屋の娘かいびやくの大臣

抑當院巾著山白人寺と申すは、陰嚢五十二代、金玉大王の御宇に、空より唐皮の巾著さげ下り、天竺浪人の最愛の妻の懐に入るよと忽然として懐胎し、程なく一女をうめり。此の娘うまれだちより品をやりて、たゞならぬ色好み。末に至つては色道一種を、新たにひろむべき淫奔の美相ありと、新三本の木をきり、土手をついて、此の寺を建立せしに、果して白人といふ新宗をひろめ出て、此の一種傾城にもあらず茶屋女にもあらぬ遊女の一體、此の土手の西筋にあたつて大黒町、枡田町、袋町、鎰町といへるあたりの裏借屋に、東の野作り、又は大根壹把鹽貝田原取の娘、或は少し顔だちのよき子の、父の極まらぬ下女のいたづらから儲けて其の時なく、給銀の中から二十匁付けて親しらず子しらずの里方にてもらひ、育てあぐる其の品をきくに、朝夕の煙もはそん〳〵としたる、黒木など取りあつかふ者では、きのこにしふとこゑ、指のふつゝかなるをいとはずして鍋にたかせ、大和豆の漬けた小貫

しにはやらず、同じ年ばへの子供近所に多けれども、物にせぬ鼻垂娘共とはあそばせず。第一小さき時から人に見しらるゝを遠慮して、十一二より外へ出さずさいたうして、狭き内にたゞもおかず。薄暗き片陰の、奥土藏の細形したるあかりをうけて、矢はずにかけて眞綿しかせ、髪は壹匁掛の、羊羹見るやうに長き島田にゆひならはせ、爺が若い時小相撲取りし、晴れにしたる加賀の下帶の古きに、鼻の黒き帽子の切など綴りて、肌のよくなる爲とて常に下著にさせ、布子も汚れぬをきせて、かねこの禮は顔の色黒くなると、大角豆を粉にして吹出しの銀みがくごとく、歯は白言が香ひみがきにて何時となう白くなり、雪の夜も二襯はさむきを厭はず、破れし袷を落てねれども、娘には古夜著きせて十五六になるを正月待つやうに樂しみて育てあげ、成人すると、彼の白人にしたてて出し、捨へも貸家の娘、苦界勤めさすべき衣類なければ、都の自由それ／＼の請込屋有つて、貸著物としてなんとやうな寸尺も揃へ置きてかすことなり。併し是れも始めては、貸著物屋の亭主來りて娘の器量を見て、白人に出しても人の合點するやうな、生まれつき育てがらにあらねば飲込まぬことぞかし。縣の諸分は如何にそれに仕立つればとて、母親の口からをしへもならず、近所のそれになりきつて、功のいた娘をたのみ、又は相借屋の嬶が相互とて、新枕の鹽梅男への挨拶、身振の品、其の外あらまし噂そらして喋つてをしへ、新艘のけん、のかなどいひて、諸方の遊び宿へつかはし、物ごとあどなく初心

はず、節季に難儀して貰ひためし小袖ども質に置いて、是れではならぬと世智賢きお物師問屋はずはの慾巧者の入りし、前のはげし古狐共が、小宿のお婆と談合して、顔の出來に應じて〇〇〇極め、銀高兩三匁と相場をたてゝより、遊女のごとく男の數にあうて、てつきりこに銀を取つて、小宿へ内引わたし、懷の巾着へをさめられしより巾着と名づけぬ。されば此の巾着へかねをしこだめるは、在所なる兩親への助けに貢ぐか、但し宿下りの時分敷銀にして、よい所へ嫁入りする、兼ての心懸に、かく金銀をほしがるかと思へば、さうした實な慾にもあらず。出替りの小宿あそび、女ながら美食を好み、肴屋呼びよせ、さまざまの料理させて、同じいたづら仲間打寄りて喰ひ盡し、奉公の口はきかで、歌舞伎芝居へ駕籠でやらせ、當座拂ひのかり棧敷、見てかへりての役者なづみ、帆の丸抱鏈むかう樣、丸に封じ文は喜世三さまと、無用の紋所をうつし、姿つくりに一生夢の暮し、人にうかされて親の日をかまはず、兄弟の死目にも遊びかゝつてはゆかず、身はぞんざいになつて、たまかなる奉公いやになつて、二三日勤めて精がつきたと小宿に歸りて、をのみち屋の名酒取り寄せ、德利切にのうで仕舞ひ、横寢するを高鼾して、奥樣と御契約申し、少しの間といひて歸りし時刻ちがへば、敷居高く歸りそゝくれ、儘よ此の季は浪人してと、おのが心まかせに身を持ち、是れより本間の奉公勤むる心はなくて、巾着をよい事にして、次第に面の皮厚くなつて小宿をはなれて、盆の時分に祇園

八坂の踊にゆきて、鬢の厚い男をつり出し、煮賣茶屋へ誘ひ、大きならめをつけてかへし、それからそろ〳〵目見えの妾ものの小詰に罷り出で、いつともなしに白人仲間へ、はひりてよい所も見ぬなりしての梓顔、是れ正眞の悪洒落といふしやれにて、歴々人の弄びになる物にあらず。元來白人寺建立の思ひ立ちは、世間に強手なる大臣共、遊興よりは〇一つを樂しみと心がけ、勤めする女は、人の數に當れば、男にあきて、〇〇〇〇の喜悦なし。同じくはそれにこしらへぬ、地女の首尾するのがあらば、少し花代むつかしからうと、望みといひ出せし客共多く有りしより、扨は町屋物でない、素人女をすく事よと、此の故に元祖白人寺をたてて、白人といふ新宗を弘め給ひぬ。然るに此の古巾着共、勤め女よりは繁く男數に當り、黒人寺に立つ事淺ましきかた。此の道の末になれるしるしと、此の宗門に歸依する人々は、悲しみの涙に下帶の下をぬらし、なほ手入らずの法をしたひ、懐子を尋ねられしに、誠に此の道廣大無邊にして好む所にしたがひ、衆生信心する其の氣に應ずる法を說きあらはして、導き給ふぞ有り難し。爰に色茶屋の家々に、養子娘の手入らずをこしらへ、隙付の早い上臈臣に仕掛け、亭主花車はしらぬ分にして、一家の山州情知り顔にて、密かに取りもつ手くだを掘らせ、人なき所にては口の思はくまでは濟ませて、未だ〇〇〇〇〇〇を殘して、娘も此の大臣ならではと、深くなづみたる體を見せかけ、透きがなと心がける有樣、いつぞの首尾には取つてしめてと繁く通ひ

て、いよ／＼つのらせ、さあ客がもがきが來る最中ぞと見れば、年がまへなる色州、分別らしく申すは、「あのお子もお前の事は、いとしげに陰でもあしうは思召さず、首尾もがなと、年のゆかぬには、さま／＼の賢い心づかひども、おるるさまとも申して、さりとはお愛しい。何うかなして、逢はせましたいと、色々思案して見れども、花車さまは御存じの熊手性、旦那どのは此の商賣には似やはぬ堅いお人で、中々かくして猥りなことなど聞いてはゐぬ、行儀づよい堅氣なれば、ひよつとしたこと耳へ入つては私共の難儀よりは、第一お前のお名の出ること、兎角はあかして花車さまに申しまし、聞く耳立てらるゝ耳の穴を、小判で蓋する思案より外はなし。それも旦那どのの耳へ入つては、當座のことならばほつてもならぬと、末々の落付のお仕方をきかれずば、とても同心は參りますまい。さあれば大分お金の出る事、兎に角内儀の片つらの耳を、五はいづゝで塞いでおき、聞かぬ顔させて、隱かに逢はせらるゝ御分別ならでは、何ほど毎夜お出でなされても、本の首尾はとゝのひますまい。」と、微塵も笑はず眞顔になつて、實らしくおためづくを申す時、何かのぼりつめて居る娘は、「兎角さうしてなりともあなたに眞の契りをこめたい。どうぞ其方達情にたのむ。」と、調子低めてうれしへがゝりの身ぶり、「是れが跡先の思案がなるものか、明日はえんぶの塵ともなれ、十はいなどは風前の塵芥よいやうに頼む。」と、耳ふさぎ代十兩、是れがつのりて大金になつて、引きぬく衆もあるぞかし。今

時の浮氣大臣ども、なるよねはをかしからず、たゞならぬ物をくひたがらるゝゆゑに、道行に物つかうて、揚句に大分のはまりあり。それしやの色宿にかぎらず、町の貧家の娘にかゝり、餘所の男の種をかづき、或は筒もたせにあうて、大分の金出しながら外聞を失ふなど、皆かはつたる思ひつきより事起れり。むかし／＼在原業平時代に、三十字一文字の歌を聯ねて、戀しらぬ大内の女中がたを靡けられしとは違ひ、今時金づくでなる女色に、仕掛けものでなきはなし。安い物には第一戀も情もなし。同じ勤めといひながら、太夫などには馴染かさねて、意氣さへよければ歴々の地女よりは情ふかく眞あり。色道は遊興と心得たまへ。眞實の情せんさくあると、深入りするはしれた事なれど、今の世には有徳人の息女、深窓の中に養はれ、假初の物參りにも、乘物にのりて、奥からつきそひの女共に舁き出され、下々に微塵姿を見せ給はぬ娘達にも、懐子の白人のといふは稀なり。眞の男の分こそしられね、大方心が粹で氣がしやれて、昔の物せし娘よりは、今の懐子が巧者なる時代に、男の中に聞夫しておく下々の女、ひとり口の開くまで待つてはゐず、自然其の中に、年たけるまで律儀に此の道知らぬわろは、地もちあげもならぬ阿房なるべし。それは容美しいとて戀してかゝが、蕎麥切に湯をかけて食ふにひとしかるべし。

## 第一　流儀を立つる色の諸末寺友吟味

### 付り　悴だては半分聞いて我と手はまり

近年白人寺の色法、元祖好大師の流儀にそむき、黒人派を雜へ一種混亂すると聞いて、三ヶの本色は申すに及ばず、諸國遠境橋々、裏々の小錢色遊の諸末寺、我先とおひ／＼に土手の白人寺に著せら、先づ京にては祇園八坂石垣穴奥數の下、繩手清水五條坂、北野稻荷の茶屋を始め、扇や組屋綿帽子や、すあひ女、廓子のひ、縫女比丘尼籠藪、其の外念佛講の道心者、惣嫁夜發坊、ふんばり反つて址に居れば、他國の末寺、勢州古市中の地藏のあんにや寺、北國のしやくかんひやう、西國船の伽やらう、納屋の陰の十錢寺、切支丹ついころびの、總堂の夜鷹坊まで聞き傳へに馳せ登り、巾著の口までつゐかけ、一種をたてだし、白人といふ名號を混雜さしなる、仔細をきかんと聲々に罵れば、白人寺の功頂和尚、口の本のことはさておき、一歳入唐までして唐傘をゆるされ、勤め一通りはくらからぬ闇和尚些とも騷がず、寺中の上白安白出相者、仕懸者の名人共を連れられ、靜かに本堂の牀にあがつて申されけるは、「我江口流のながれを汲んで元祖の法色を守り、白人一種の新色を立つる所に、黒人派をまじふるとの咎め、一向に初心なる事と思はるゝ。今時の衆生惡洒落になりて、大方の事にてはすゝめがたし。此のゆゑに白人の新色に方便をくはへ、此の道を繁昌させんとするのみ。更に元祖

高二十壹匁、是れ又鹿戀の上に立てば、本寺島原寺の歷々の能化達のゆるしもなくて、九品の蓮の花代に高く至る心ざし、且は傾國をはゞからする行跡頗る本意にそむけり。其の上土手の中、宮川寺の邊、僅か壹町にたらぬ所にても、壹匁五分の駕籠代を取る事、男色野州門の流儀にして、女色門には紫衣色衣の大た職にさへ曾て是れなき行状、皆以て元祖の掟に違せり。是れにてもしろとといふ宗門にて有りや否や。」▲白人寺開和尚答へて曰く「中古は衆生前方にして、勤めの人數に當りたる女を忍ばす、人なられぬ白人を好めり。是れは其の比の客共、黒人にこなしかねて、我が自由に廻しよき初心者をすけり。此の故に親の手前より外をしらぬ娘なれども、浪人の世渡りなくて賣買となしに、隱かなる事なればとの事故、忍びに是れへ招きよせ、密々にあはせまする、必ずお友達様方へ、御噂は御無用と、眞らしう宿の嚊が申すを實に請けて、律儀に白人と合點いたし、此方から無心申さぬに、○○細金などくれられ、ほれなことの有りしに、近い比よりは衆生粹になつて、中々初心にしかけても、いかないかな請けつけず。是れひとつまゐれ、飮まぬとは白人らしい、かうした勤めする衆の下戶と、念佛ぎらひな道心者とは、呼び手がござらぬ。かうした苦界なさるゝからは、酒參ると、わらはせらるゝと、○○嫌な顏なされぬが、商ひ上手といふもの。慥か此方は大坂で見たやうに存ずるが、京生まれとは、跡の月からのことでござるかと、おしこなして白人顏をさせず。そこをこたへて其のまゝ初心

あけば、大事の銀を出しておの／＼方をよぶは、面白う酒をのうで慰まう爲ばかりおや。〇〇種の望みあれば、そも／＼から手入しておいた內の噂が氣がはらいで、しかも眞あつて、皆の衆のやうに天井の板數よんでござるよりは、大分增しな相手を手活に致し置きぬれば、此の邊へは參らぬ。花代をお取りなさるゝからは、其の夜の客の氣にいるやうになされたがよい筈。どれよぼうとまゝな世界、御不承ならばいんでもらひませうと、早よびかへる顏つき。せうことなさに白人めく風をやめて、自然と黑人な風になつて勤めて來りしは、此の道のはやく絕えん事をなげき、京も大坂も粹がましうはなりゆきぬ。扨二ッ詰三ッ詰にせんために、座敷を急ぐはにくからぬ、內證上下の小袖帶脚布までの借代、一日一夜が十二匁九分、火の雨がふりても出さねばならず、それに花代の內門匁宿へとられては、一座勤めた分にしては、未だ手前からそへてやらねばならず。是れゆゑに一座つとむれば、少し息がなり、二座つとむれば見事な身、何時とても秋の夜のながいに飽きはない。爰は歷々の太夫衆も、紋日役日其の外無心の種蒔に、賣つて居るから横ねきらせにゆかるゝ。本寺さへかくの行作あれば、末寺の色方にあるは道理と見ゆるしたまへ。是れは圓鶴といふもの、正月買は此方よりきはめたるにはあらず、懇の客方からお心ありてなさるれば、強ち定めたる事でもなし。茶屋の宗旨から白人寺へ改宗せらるゝ名女達おほし。おの／＼我等ごときも、其の職に久しうあれば、氣が變らでをかし

からず。名をかへ所をかへて色々と化して、白人にて得道すべき者には、白人と化して客の爲に謀を說き、茶屋呂州妾ものにて得道の客には、其の氣に應じてかへて見ねば、同じ顏して同じ所に、幾久しう勤めはならぬ物ぞかし。額の小さんは綿屋の勤め、それから京へ上り、今神風をふかさるゝに、誰か古しといひ手もなく、難波入江のかしからぬ評判、とかく商ひ見世は所を替へず古きがよし、勤め女は所をかへて顏のかはるが、おいには極まれり。されば町方のなまれ子、やう〳〵這ふ程になりて物いひならふにも、大方が乳母婆などといふに、色里の幼稚子供には、假にも是れをいはせず、嫉々とのみいひならはせり。假初のことながら氣を付くるも尤もなり。繩手は色茶屋と、常の商賣人と打交りの所なれば、元結屋の赤子が、むかひの茶屋に抱かれて行き、年かくして細眉に振袖着て、花をやつしてゐらるゝお山州にむかうて、婆々といふは恥辱をあたへる道理、萬事氣をつけねばならぬ時代とて、揚屋に鼻毛鑷をたしなます、野郎宿に年穿鑿を用捨し、色茶屋に酒の醉ひの醒むる藥をもたぬも道理ぞかし。大臣の醉ひを覺しては呼びにやる無分別やみて、是れには大きな損あるべし。今時の色宿の男女、中々機轉なくてはならず。今も言ひし額風呂の小さん勤めらるゝ門口へ、乞食來りてひだるい腹をたゝき、額の小さんはナァわたやの勤めと、聲おもしろく唱ひしを、這出の男さしあひを氣の毒がりて、とほれといへど唄ひやまねば、此の男腹を立て、五十年も前に流行りし小歌を、

新しさうにかしましい、とほりをれといひ放して、跡でひとり赤面せしも、氣がつき過ぎて迷惑、如何に機轉なればとて、藝子の居る町に、痔の療治の看板も、あんまりあてじまひと氣疎かりし、あれ時難波の遊人達、濱側の茶屋にゆきて、我々がしらぬ顏の、新しい白人共があらば呼びよとて、指紙僉議して見し内に、朱鞘の小龜、名物のお石といふ二人、名を聞くも今が始め、これ等を急によべとあれば、下男承り、御存じなきは道理、やう／＼此の四五日以前から、此の川なみにぼつとお出で。元は浪人衆の娘御達とやらと、早しのぼしく詞のこして、[illegible]しかたへ走り行き、工面して立ちかへり、追付御出でと申しもあへぬに御兩人、昔衣裳のしつこい模樣の濃ごのみして、御來臨あるかたく、酒面白うのむうちに、篠塚があたり狂言、四十八人の敵討の噂を仕出せば、名有のお石、座下において、涙ぐむこそ曲者なれ。一座の客共見咎め、四十八人の噂聞いて、落淚の體は心得ずと不審たつれば、私は此の噂聞く度に、父さまの事が思ひ出され、悲しうなつて包むとすれど溢るゝ涙、一座の興をさますとは思ひながら、是れ許りはゆるし給へと、猶々切りに歎きの體、何れもお石といふ名に氣をつけ、人の行方と水の流れはしれぬもの、若し其の四十八人の、其の家の由緣かと、根をおして尋ぬれば、お石涙をおさへ、如何にもよき御推量、其の四十八人の衆中相果てられて後、大分の石塔出來、私が親は其の石細工名人にて、其の石屋から聞き及びて呼びに遣りしを、細工の冥加に叶

ひしと、はる〴〵の道を經て東へ赴き、未だ武州へ下り著かぬ内に、假初の煩ひ、次第に重りて、悲しや知らぬ國の土となられ、母ひとり過しかね、かうした勤めの身とは成りぬと、さめ〴〵との口說き言。是れは大きな石ちがひと、歎きが客方の興になりて、聞かぬさきからはや合點して、手ばまりの大臣是れにかぎらず、何程か多き世界と笑うてはたしぬ。」

## 第三　表向は佛の白人金色の花代

### 付り　あとのはげぬ塗師屋が手管

▲呂州猿如上人問うて曰く、「白人巾著暗者出相者は、一體か別體か。」▲白人寺答へて曰く、「別體なり。白人は幼少より大名奉公を心がけて、二親主の子を育つるごとく大事にかけ、小歌三味線舞ををしへ、立振動派手めかず、のつしりとゆたかなる風俗、顏色すぐれたるにはさのみ諸藝はもみこまず、器量中位の娘には、藝をいひたてにして、御奉公に出す合點なれば、舞子にかはらず仕入れ、度々の目得えに緣遠く顏をさらし、成人するに從ひ、近所の若い者に目を付けられて、小さき時から世話と金とを入れし娘に、蟲がつきさうにて内にはおかれず、町家の歷々へ、地道の奉公に出さんとすれば、針手がきかず、文箱持つて顏むき出して、町を步くこともいやなことと、前々より目見えしらせに來し、肝煎の嚊が、爲つくいうて近所へ沙汰なしに、つい白人に化することなり。又巾著といふはいたづら奉公人のすり

からしにて、内儀のない若息子、二番ばえの手代などに、此方からしかけて物をとり、半季滿足につとめず、家内をさわがし、何時とても出尻あらして數百軒も經めぐり、後はいひつぎまでお出入の家のふさがるを恨み、出替り時にも口つぐ者もなく、大方人も見しりて奉公すべき行く先狹くなり、浪人せねばならぬやうになつて、たゞもゐられず、いつともなしに暗宿へ立ち寄り、巾著といふ曲者にはなりぬ。暗者といふは奉公の心がけもなく、不斷小宿に見世出して、あたまから賣る合點の女、物見遊山に人立のある所へは、風俗つくりて浮氣さうなる男を見かけては、むく拍子に○○○○○○、○○○○○○○○○○、是れにうかれて男餌をかくれば、こはさうなる風をして、人なき野道の方へ行くを、是れは釣れさうな物とそろ／＼ついてゆきて、其の身のつらゐ、事はしれず。我等がいひ廻しでは、てんと白癩、いつかな女も釣らぬといふことないと、いはぬ許りの顏付、是れを綱にして度々あうて、大きにしてやる女なり。居者といふも一體、仕掛者といふもそかし。與出相者といふは、奉公してゐる先々の傍輩の手代などと約束し、懸をはなれ、茶々の宿ばひの時、一所につれて二疋に夫婦の契約、微塵外の傍輩には、手を握らせぬためにて、盆正月の小袖帶、其の外小遣銀まで貰うて、人目を忍び、宿を極めて隱かに逢ふを出相者といへり。是れも一人にきはまつてゐる事ながら、巾著のやうにあらはして、男かずにはあうて、錢とる女にはあらず。總て此の類に限らず、

今時の扇屋の折手、すあひ綿摘、絲屋鹿子結等、みな白人寺の末寺ともいふべし。これ等は爾前の賣女とて、本色の遊女の座にはならべがたし。自今以後此の類女は、當寺の末寺たるべし。」とあれば、

▲扇絲綿庵の數女債つて曰く「われ／＼も白人寺の末となし、而も爾前の賣女といひて、本色にあらぬといふはいかん。」▲白人寺答へて曰く、「例へば、辻立の藥賣、兵法物眞似曲手鞠、さまざまの藝をたてにして、藥を賣るに同じう、色をそへて商賣をし、表向は萬更白人めきたる仕出しにて、遠國の侍、町人の歷々、遊山作猜の逗留の借座敷を心がけ、目にたたぬ色つくりて、相手次第の御機嫌をとりて、浮氣を見すまし、酒の友となりて醉ひにもてなし、たはぶれ云ひて〇〇〇〇〇〇〇〇、九匁五分の抱帶一筋、十八匁に賣るも、買ふ人も其の合點づく、お國へお歸りの節は置土産とて、壹歩の二切も貰ふ事、此の一軒にもあらず、川原町樵木町、知恩院の門前町三條の宿屋町、毎日五軒七軒賣り廻りて、手をしめ口の思はく、人は早業の首尾、旦那どのへ取り入らんとては、賄人に添へてやつて悅ばせ、ほらたる商ひすることも、色といふ添物がある故なり。此の色粹らしく、酒落仕立てにては、買手の旦那あたまから恐がつて取り付かず。さるによつて隨分田舍染に合ふやうに、白人めいて大口いはれては上氣して見せ、手を握れば鄰へ聞えぬほどに、聲を立てて初心なる仕掛け、是れ白人の體相を第一に學ぶにあらずや。然る時は我が寺の末寺にせんといふも、由緣なきにあらず。又爾前の賣女とて、本色に

あらすといふは、すべて勤めをする女、鳥屋につきたる中に、本色の遊女とせず。いろ〳〵の色商賣する女に抱ふるにも給金やすし。鳥屋をしまうたる女は本色の遊女とて、給金高く出し召し抱へて重寶しぬ。さるによつて鳥屋せぬ女は簡略の賣女とて、遊女の中へはいれず。鳥屋といふは一切の勤め女、男數にあへば、必ず定まつて濕氣を煩ふ。此の病中を鳥屋といへり。是れ遊女の苦海難、のがれぬ身の大事ぞかし。養生あしければ命をうしなふ。霊薬妙薬の煎薬を飲んで急に本復すれば、間なく〳〵毒氣の爲にうまれもつかぬ腰ぬけ、鼻なし、聾になりて、一生癈る身となれば、此の鳥屋をしまはぬ女は、高給出して抱へ難し。何時患ひ出さうもしれず。是れによつて親方共鳥屋を仕舞ひし女は、年永く切つて高給を出し、氣遣ひなしに先金も大分出して抱ふることなり。此の煩ひをしまうたる女は、石の○○○○、○○○○○○○○○○○○○、○○○○○事なし。此の故に鳥屋をしまうたるを本色の遊女といひ、未だ是れをしまはざるを簡略な賣物とて、簡略の賣女とは名づけぬ。殊に此の道に錢銀を皆に梨子の木町の邊に、閑風といふ蒔繪師、小水邊の色茶屋のかんといふ山猫と、年をかさねて懇し、行末は夫婦にならうと互の契約、命さへの堅さは、角なきまでもこそそかうて、水も洩らさぬ中と契り、商賣の蒔繪細工もやめはてしに、貯へ取物も皆つたりはけたり、うて聞えれはせ、おかんに皆うち込みて買掛りもすまさず、人にはすり盗のやうにいはれてをかまはず、毎日通ひ

てたゞ此の君をよしのの花となかめせしめ、いよ／＼つぎもののはなれぬ中と成りしに、何時の頃よりか五條の古手大臣、おかんにうらなく思ひしみて、あたまから心の底を引つとき、僞りならぬ腹腸の包みでない所を見せて、今一年の年を親方に三十兩で貰ひかけしに、是れはよい鳥が罹つたと慾にはきりがなく、今すこしのぼせなば、五十兩は出しさうな大臣と思ひ『只今あのもの一人が働きで、家内も日々に賑ひますれば、根からお前へ進ぜますことも、差當つて迷惑、あれほどの器量者の替りを置かうと存じますれば、中々端金では參りませぬによつて、畏まつたとは當分何うも申しがたし。』と、いはぬ顏して金をせりあげる言ひ廻し。ある紬の古手や大臣、此の上は五十はいで『こりや主人領け。』とそゝり出せば『然らばどうぞ相談いたして見ませう。』と、亭主が口ぶり大方同心なる體、是れは悲しやとおかんは筆をはやめ、さら／＼と書いて出入の男をやとうて、塗師やの勘風方へしらすれば『南無三寶。』と塗りかけし重箱の、ふた／＼としてはしり來り、段々の樣子をきいて、智慧にも力にもおよばぬ金ぜんさくひとつに、脈のあがつた顏して、二人しめりなきに泣くより外はなかりしが、勘風涙をおさへ『此の場は古金買に見せても、好い心中の仕所ながら、見えもせぬあの世だのみに大事の命をすてて、萬一一所に手を引きあうて死手の道を越えぬ時には、勝手をしらぬ來世で、まよひの上の迷ひ、高が命をすつるときさへ合點して、其方と我等が心さへ眞あらば、何卒引きとられす

に、古手大臣を手ぶり大臣と、させ樣のありさうなもの。」と思案して泣く歸り、其の夜父來て隱かにおかんに蛤貝をわたして歸りぬ。それより一日過ぎておかん惱み出し、面體手足に瘡出でて腫れあがれば、親方驚き、「其方は鳥屋しまうたといひしゆゑ、高給出して長年切りしに、我はまだしまはずして、我等に一ぱいくはせたな」と、顏色かへて腹立てゝからが、取り返しはならず。「さりとは物は見切が大事ぢや。古手殿の先度から、三十兩でくれといはるゝ時分に、慾おこさずやつて了へば、此の鳥屋はかづかぬもの、出入六十兩のもらひがあるに」と、齒切なして後悔する所へ、古手大臣御出でにて、「おかんは氣色があしいとあるが心もとない。去りとは醫者はあるまいか、巧者な醫者衆に見せて藥でも飲ましてみるか、病氣は何ぢや」と問ふにうろたへ、亭主苦い顏して、「面白い事ではござりませぬ。風ほろしで身内が痒いと申します。爰元はよい醫者の稀な所で、殊に客がしげければ、養生する所もなく、今朝からもおかんが五條の古手さまの所へ喚うやつて下さるれば、同じ煩ふにも心遣ひがなうて、篤りと養生するにと、病氣の片手に第一これが苦になるさうにござりますれば、さても御不便な、さすが女の事。人の氣といふはこんな所に、願ふらしう引を取つて、養生さしてやらせられませば、必ず永う思うて、末々をなぶらしうない物でござります。私も斯樣なところが情ぢやと存じますれば、五十兩とは申しましたれど、三十兩はおれが養生代に、前のなからお前へ私がはずみまして、三十兩で一

年の年季を負けてあけませう。」と、急ににじりつけたがれば、「成程〳〵頼もしう〳〵といふは、病み痛みの時ぢや、おかんにあうて様子次第に引き取りませう、まづ逢はしてたもつ。」と、裏の化粧部屋へ行きて様子を見れば、昔の顔はなくて一面に瘡出で、目の上はれて中々二目とは見られぬ有様、「是れは先づけうとい煩ひたるが、瘡ではないかや。」と、古手大臣も傍近くへは、ちと斟酌心にてよりつかれず、遠くから問はるれば、おかん鼻へ聲を入れて、「古手さん、私は恥かしい事なれど、年々の濕氣のおどもの出まして、總身は斯様に瘡にみしやれ、目は見えかね耳は遠くなる、鼻もおつ付けおちませうが、よい中へは早ううつるものぢやと申せば、嬉しいことはこなた様と末かけて、お約束の通り添ひましたら、女夫ながら鼻がなうて臭い物身しらずと、二人が中がよからうと思うて悦んでをります。爰へ來て抱きついて下さんせ。」と、山椒魚のやうな手をあけて招けば、古手大臣身をふるはして表へ走り出で、「亭主〳〵今までは色にめでて、金にかへて引きぬかうというたが、三十兩出して瘡うつらうといふ約束はせぬ、勿體ないことばかり。」と、足ばやに歸られぬ。主人氣の毒の頭をわつて思案する中に、おかん殿は耳が聞えぬさうな、イヤ目がそろ〳〵見えぬ、鼻もおち下地かして、今朝よりは一倍ふが〳〵ぢやといふ程のこと、亭主が胸にこたへ慾の段は退けておいて、外に座敷を借りて出し、此の仕舞の付けやうを案じふくれてゐる所へ、勘風來りおかんがことを問へば、主人かくさず

女共、鳥屋で舟して手を燒きし親方に一はいくはせ、目が見えぬの耳が聞えぬの、鼻が半分おちるか、るのと、嫌がることのみ聞かせて、粋の亭主をこかしぬ。蟹をみしやぎて、餅米を噛みくだき一つに合はせ、漆にまけたる者に付くれば、卽座になほること神のごとしといへり。此の妙藥より增つたる手管、誠に色茶屋の氏神もしられまい、奇妙々々

## 第四　情ふかい誓ひの海にお陷りの男

付り　戀の闇に迷ふ座頭の思はく

▲白人寺重ね「總じて今時の大臣共、世智がしこう惡粹に成つて、先智慧を廻し、女の方から實をもつてゆけば、何で無心いはうといふ下心にて、俄なる懇ぶり、爰は遠のいて樣子を一まづ見るか、但しいひかけた時手をよくはづす言草に、前方から遠過ぎ行かれし親仁を、內にまさ〳〵るらるゝやうにいひなし、此の頃は何が目に見えたか、こくうに親仁がにえかへる、餘所の親のやうに昔作りで堅いばかりなれば、小勝のとりやうもあれど、其の癖若い時磯ぜゝりして來たわろで、四も五もくはぬ粋だけで迷惑すると、末で陷らぬ前垣をして、何ぞもたれめいたことといひかけると、心よう當座は請けて立ち歸りて、佛になつて持佛堂に、抹香喰うてるらるゝ親仁をいひたてにして、何うも不首尾ならぬと筆の先にて返事仕捨て、それから又所をかへてゆかるゝなど、中々今の勤め女うつかりとし

ては、客に眉毛をよまるゝこととなり。然れば深うはまる大臣もなく、深う思ひ入る實のある遊女も稀なるべし。此の行末は方便事や、手管事をやめて、何事もしらけて、萬を有りのまゝに語りあひて、客を不斷の○○汚れしまゝに、身の立つことを第一にせんしやうらしき事皆て有るまじ。總て色所はせんしやうをはなれし大臣は、のぼすにのぼされず、何うもせうことのないもの、是れ色里の持て餘し客とは是れなるべし。又來て遊ぶ大臣も、せんしやういふ氣でこそ面白うもあつた物なれ。我が身代より物毎内端にいうてはをかしからず、此の前都のひんがし門前町に、世盛りの過ぎた大臣借宅して、京中に賣殘しの家一軒の宿代を萬の當てにして、腰の二重になりしめくさの婆を一人使うて、左子のない身は心易く、友達が誘へば、假令大晦日に長崎へなりとも飛び歩行く浮氣男、持ち傳へし道具も大方皆になれど、身の廻りは今見ても大臣なり。殘る物とては言ひつけし昔からのせんしやう、此の身に成つてもやまず、世にある時より夥しきせんしやう言ひにてありし故、せんしやうの上をいふとて、異名を萬しやうとつけて、色里にてをかしがりしが、ある時色友達に誘はれ、水邊の村茶屋にて夕飯くうて、其の上の酒が長じて、好い機嫌にまかせての無分別氣さし、先づ[illegible]思ひ立ちに、三味線引の役者二人召し寄せ、酒のつのるに從ひ、つい夜になつてのけて、大臣手を揃へて白人三人とりよせ、二人は馴染の御方、今一人は萬しやうのお相手、始めての御げんお名はときけば、

おのが名におの字をつけて、「おきちと申します」と早口がましき末社共が、片陰に寄りて囁き、「何と久しぶりおや、萬しやう殿をのせて珍らしいせんしやうを一ふし承るまいか。」と、太鼓持つ身の大臣を嬲つて、面々が樂しみにするもをかしかりき。其の中に文平といふ末社、「貴方は以前から、我等がそやしつけし口あひ覺えてゐるなれば、せんしやうの口明け此の鼻にさせてくれ」と罷り出で、「コレ旦那、あの女郎はお見知りなされませぬか、お前程のお方が御存じないのは不思議々々々」とそやしかくる。其の時萬しやう、おきちが顔を穴のあく程ながめて、「さりとは世には似たる人もある物かな。近い比まで我等になじみて、てんと女郎の指切るは珍らしからぬとて、眞の心中見せん爲、右の足の親指切つておこせし難波の太夫職、花紫が引舟の小蝶にそのまゝ。こなた卒爾ながら姉妹ではござりませぬか。似たりや／＼、杜若、花紫のゆかりと見て、其の親指きつた時の、我等が凄まじうもあのついたこと思ひ出さるゝ。今々の大臣共が大きな顏すれども、身共がしたやうな思ひ切つたことは中中せまい。先づ足の親指切賃に十貫目箱一箱、其の箱常ではをかしうござらぬによつて、たかやさんの木目の見事なやつでこさせ、内を朱塗は古いによつて、蠟色に春正が月夜の松のとぎ出し蒔繪、かうした見えぬ所に金をいれいではをかしうない。てんとびやくらい、其の時の入目細かう算用して見たらば、小千兩は入るべし。何事もむかし／＼。」といふ時、文平莞爾ともせず、「誠にさうあつたと

ぎたには、不繁昌の基、人の憎む物ぞかし。遊女は物やはらかにすゝどからず、人さへ見ずば末社にも手を握らせ、出入る人にも情らしう詞をかくれば、物もらふ慾をすてて、客の手前へよしなに申しなし、蘭燒く人あれば身にかへてひくものなり。ながれをたつる身は萬人を請けて勤むるものなれば、親にも見せぬ○○よしあしまで、人中で噂せらるゝ身ぞかし。全盛なる時なればとて、それを鼻にかけて、座頭又は太鼓持、宿屋の夫婦下々までに横柄にして憎まれ、惡く云ひたてられて、流行りやみし女郎多し。必ず初心なる時には、下々までに詞をかくるは其の身に勿體なく、人がかるしなると心得て、雲上に誇りかまへ、曾て情らしき品なく、身に覺えぬ惡き評判にあふ物ぞかし。備前から三味線稽古に上りし野羅都といふ座頭、都の大臣に召し連れられ、土手町はんじやうの時、廣座敷の宿屋に至り大酒の亂れに、野羅都醉ひにうかれ我を忘れて、大臣ふびんがらせらるゝ、小さつと云ふ白人にしなだれ掛れば、妾は手引もやござらぬ、人に取り付かうより、似やうた樣に杖に取り付き給へこと、さいとは色ある身には情なき一言、すゞにのどぶえに喰ひ付きたき程に思へども、お世話になされくださるゝ、旦那の手前を思ひやり、胸をさすり其の夜はかへり、明けると其の儘、三味線の弟子に高ぶしのこぶといふ、惡智慧の上ぼしりした男を呼びにつかはし、夜前小さつが情なき憎いひの段を語れば、三味線を彈方と共に腹をたてゝ、一是れは聞いて堪忍のならぬ所、今宵我等其の白人をよ

うでから、酒をしひて醉はした上に、牀をとらせて此方を呼び寄せ、〇〇〇〇〇〇〇、其の上で恥辱をあたふる仕樣あり。萬事我等にまかさるべし。」と、日比遊びに行く色茶屋へ暮方より押し掛け、小ざつをいうてやれば、幸ひお隙にてお出でうれしく、花車出てお杯の引き合はせ、お定まりを申して勝手へはひれば、三ぶは元より巧みて來る事なれば、あたまから無理をいうて小ざつに酒を強ひ出し、「今一つ參つたら、終に出さぬ私が三味線、お肴に引いてきかしませう。」と調子あはして、野羅都が引き出した暮の山といふ一手、色音其のまゝ野羅都が風柄、扨は件の座頭が弟子なるか、夜前の我がつらき仕方の咄を聞いて、三味の師匠の恨みの返報せん爲に、態々今夜爰へ來りし物なるべし。是れで宵からの無理酒の謎が解けたと、はや飲込みて、すこし醉ひたるふりにもてなし、三ぶが側へ近よりて、一世に勤めの程をかしきものはなし、我いやな程思うて下さるお客には心とまらず、態と逆うて無理仰せらるゝ殿子の慕はしうなるは、縁といふは大抵ふく〳〵の因果なるべし。何いうても勤めする身の悲しさは、皆僞りと眞ある心を擇られ、口惜しきことのみ。昨夕もさる不便がられます大盡、座頭を連れてお出でなされしに、田舍座頭とて酒をすこし、お客の前にて私へのはづかしめ、勤めの位職しきこそこなしたる仕かたといひ、殊更其の夜の大臣に對しての不禮といひ、旁もつてむごは、い、京風を知らぬとおもひ、心に思はぬ惡口いひしが、嘸や我が身をにくう思うてかへらるべし。

假令目の見えぬ人ぢやとても、我に心のある人をどう憎う思ふべし。實からのおもはくならば、人なき所か又は隱かにしれる人を以て通じたまはば、我が方から手を廻して逢うてやる心底なり。座頭なればとて人間に違ひはなし、難波の夕霧は此の職の極官松の位なれども、座頭に一度の情あり。及ばずながら我とても木石ならず、戀ならばいかなる者にも情をかけてこそ、怨めしきは同じながれの身ながら、至らぬ遊女の位、界境こそ淺ましけれ。妾が今宵の心ざしを、竹ならば打ち割つて見せたい人が、近くにあるに、さて。」と、じろりと尻目で見て所思らしう、頤を襟の中へさしこみし粧ひ、三ぶが魂へきつしりと徹へ、扨は我等に來てゐるかと身に嗜み出來て、鬢さきを撫であげ、人の心は鏡のごとく、眞がうつれば此方にもにくからずと、それから無性に攫みつく程可愛うなつて來て、心の底を打ちあけ、「今其方の嘲されし昨夕の座頭の我等は三味線の弟子なるが、坊主殊の外に根みて我等を只管たのむ故、今宵其方を爰へ呼びしは、酒に醉はせてうつゝの樣になられし時、野羅都を呼び寄せ〇〇〇〇〇〇、小ざつこそ座頭と手管して人しれず出逢うたと、ばつと浮名をたてて一分をすてさす其の巧みの、我等は今宵惡人方をつとめに來りしが、何事も見ると聞くなり、今の嘲の通りなれば、さりとは見限りはてた法師が所爲、明日から師匠あげてのける。」と、折角たのまれた座頭を、却つて譏り出すこそをかしけれ。「兎角爰に長居して、野羅都が來てからは不首尾なり、是れからすぐ

に其方一所に宿がへして、外で隠かにあそぶべしことと、花車を呼びて小こつか跡をつかへてもらひ、一少と氣を替へに此の君をつれて、外で一杯たべて参らう、自然是れへ野羅都といふ座頭が、我等を連れて來る事があらう程に、今宵二ぶは爰へは見えぬというていなしてたもれ、ひよつと太鼓につれたれば、行く先々へ追ひ驅け來て、いつとても取りつき蟲に、ほうど困りはてることと、かならず汝等も我等が來たと申すな。」と、二瀬料理人までの口をとめて出で行きぬ。是れを思へば賢しい今のやうとて、女のいひまはしによつて、男は何のやうに使はうともたゞことと云ふ。兎角女は智慧あつて、神ならずしては勤め難し。然れば向後鳥屋をせぬ山州は、此の勤めの者ぞ山州連たれば、青山衆と號すべし。又鳥屋をしまうて、客何百人にあうても、○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○、唐に今より申し合はして、女色執心の衆生を本等にすくふべしことと、申直りの一杯して、百人寺に暇乞ひ、諸末寺は里々へ歸られぬ。

傾城禁短氣三之卷　終

# 傾城禁短氣四之巻目録



傾城禁短氣四之巻目録

傾城禁短氣四之卷目録

第四　教への駕籠にのりの道連

付り　なきがらの肌につけた千両の金佛

此巻は因果の道理をしめして、諸大臣仕果ての輩に、くはねばひだるいといふ所をしらしめん
ために、柴屋町の故事を引いて爰に記せり。

ら愛い幸いあに青暖簾の住居せられし女郎限りなしと、氣の短きを禁めたまふは、何と有りがたいことではないか。心中なして死ゝるといふも、今少しの耐へぜいなく、多くは短氣からなすことと、たゞ堪忍づよきが勤めの肝心、能く辨へて愼まれたが好うござる。然れどもむしやうに長いも氣がなうてわるし、たゞ一概にはいひがたし。女郎は寛闊にして短氣なもよいことあり。上方の三木といへる大臣、おもやいよいと聞えし上林の金太夫にあひぬ。いやともおうともいはれぬほど美しきもの、二三座首尾して後、亂酒の上にて一步一ツ取り出し、女郎におくれば、是れはと嬉しき顏付にて、隱かに頂きけるを、何が鄙のしやれ者なりと見て、さも有るまじきことなれど、此の太夫のすたる程さもしく見えける。それより四五日も過ぎて熊谷の大ぶりなる金の杯と、珊瑚珠の杯と重ねて太夫にとらせければ、更に悦ぶ氣色もなく、金杯は庭掃く男にとらせ、玉の杯は雙六盤の下に敷きて微塵に碎き捨てける。罪も慾もなき此の心を感じ、是ればかりの思入何の仔細もなく請出しぬ。また長崎の鹿といふ大臣、太夫の吉野と年をかさねて逢ひけるうちに、酒機嫌に我儘をいひける。つね〴〵物とがめせぬ女郎と手に入れて、身振に島田の髮先顏に觸りしに、髮あればとてさのみ美しうも見えず、我が思ふまゝならば、坊主にして抱いて寢たいものといふ。吉野耳にかけて、「方樣は髮のないがお好きか。」といへば、「如何にも頭のまるい髮のないが望み。」といふ。「お氣に入らばやすいこと。」と床

より飛び出て、行燈のひかりに髪さき撫しける。大臣鶴をいみ〳〵、詫び言して揉み消し、此の心の手づよいところを見出して、千三百兩に根引の松、相生のお內儀さまとあふぎぬ。是れを思へば何氣なき事によりて見事に見え、思ひの外の仕合になるぞかし。されば此の吉原寄の中興のなれの聞出高雄といふ太夫は、衣裳に紅葉の紋をまとひ、裳に花をさかせて、盛んなる時揚屋の晝をつとめて身仕舞に御歸りの道中のたかに、鶴高帶に身をすゑての足取、又上方とはちがひ、一際目にたち、めつしりとして、おかつきにも嗣をかけず、右左に對の菖蒲きたる禿をつき連れ、遣手六尺までも御紋の紅葉夕日にてりかゞやける裝ひ、馴れる程靜かに傾をとつて、其の至つたる風俗、往來のぞめき者共も身を忘れて渡を留めて通るくらゐ、同じ勤めの女郎共さへ、高雄さまのお通りと言いて、引きかけた三味線やめ、くはへた煙管下において、噂をしあうて執しぬる。此の太夫が全盛古今有るまじと、心の廣き武藏野の人さへ目を驚かしぬ。爰に其の僅十貫目ありなしの身代と見えてすきた男、日野書家に客小紋の古き一重羽織を著て、こいかうじの皮足袋にき、作らば當世風の大臣とも見るべき器量を、惜といや風に仕立てて此の里に入ること、大概の圖宵にてはなるまじ。而も顏をさへ手おほひてゐる、高雄が至り道中を待ちかけ、近くになれば此の男、お手をとりてちつとしゐるに、いな顏つきもせず、麁相な衣裳に心をつけ事ありける。何と私のやうな貧な男がにもお情ありやといへば、一貧な男

に逢はぬとは、誰が申して名たてがましや、こなさまは何にもせよ、情の道に貴賤のへだてはなきもの、況んやお慰みにこしらへてあるわしが身、お目にとまらば不便がりて下さんせ。」と、莞爾と笑うて申されければ、遣手のたゞ先のお手を取りはなし、戀を兩方へわけて、太夫さまは宿へお歸り、男はすぐに松葉や藤兵衛方に行きて、此の揚屋におめかけらるゝ一谷の歷々より、客にいたして御馳走申せとの添狀持ちて來て、亭主に渡せば、狀を見て姿をおどろき、「頓狂ひあそばしますはお前でござりますか。」と、念入れて問ひ反すもをかしかりき。「我等は靈岸島の小さい商人なるが、老いての語り句に此の里の太夫職に逢はせて」と申さるゝ。主人承つて、「太夫樣方は半年も前から申し込まねば、中々心よき御對面は叶はず、格子女郎と申すもさのみ太夫樣方に代らぬ御器量、お心やすう是れに遊ばしませ。」と當てがうて申す。「いかにも／＼左樣こそあるべし。しかし只今是れへ參りがけに、紋所に紅葉を付けたる女郎に行き合ひしが、慥かお宿へお歸りと見えたれば、今宵その君を此所へ是非に迎へまして」と賴む。「それは高雄さまとて、東三十三ケ國にかくれもなきはやり女郎、俄と申すはおろか、今から申し込み置きましたらば、來年の今時分首尾いたしませう。さりとは宿仕ります私が惡いことは申しませぬ、ひらに格子女郎にあうて御覽。」とすゝめるを、「成程その格子とやら連子とやらは、かさねてのことにいたして、たゞ其の高雄樣とやらに、今道中でお手をとり、お情と申した

貧な男かと、知らしましてもらうてくれ」と申す程に、亭主はならぬことゝは思ひながら、お客の仰せ默止し難く、遣手に斯くというてきよく／＼と頼んで見れば、高雄此の樣子を聞きもあへず、思ふ仔細あればこそ今宵のお客に斷り申して、松葉やが方へ行くべき」よし、先づ今夜の大臣へ斷りの文遣はしおいて、善兵衞方へ御來臨、是れは古今にない有り難き仕合はせ、亭主は嬉悦びの色をなし、お座敷へ罷り出でて先づ御引合の酒事、いつにない太夫さまの、初會にお盃の數を重ねられ、お顏の色も御紋の紅葉にまがひ、初めて會へる男の膝を枕に、ヤレ／＼おやすみなさるゝ此の里のならひとて、初手は寢道具さへ出さず、床などの事思ひもよらぬに、太夫方から○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○、其の上に暇乞の盃までしてお歸り。是れは合點の參らぬお客、此の里始まりてよりこのかた、遂に初會にかうした圖はない事、若しはふるものゝ黑燒にてもあふりかけなされたかと、揚屋一家不審たつるも理ぞかし。此の男太夫が仕方を感じはやることこそ道理なれ、恐らくは日本にかかる太夫は有るまじ。貧なる男にお情ありやと、貧といふ字に對して今宵の首尾、天晴御女郎、諸事あきるゝわと是れより深く思ひ入り、我も又世の中の大臣買ひがせぬ圖にはづれたことをせんと、亭主夫婦をまねき、凡そ高尾は何程で親方がくれうぞ。内證を聞いてこいと急に仰せ付けらるゝ、承つて主人くつわが方へ參り、委細に聞いて立ちかへり、千兩餘ではくれさうな口ぶりと申す。それは

思ふたよりも心やすいせんぎ、今宵の中に諸事の埒あけ、明日此所を出すべしと、手代方へ一筆かいて、揚屋の男に申し付けて我が宿へやらるれば、暫く有りて手代二人夜道とて用心し、下男三人に五百兩づゝ持たせ來て、揚屋の座敷に千五百兩ならべおけば、さながら小判の小山を見るがごとく、小さい目からは肝をつぶして、氣を取り失ふも道理ぞかし。かくて萬事を仕舞ひ、ざゝんざ唄うて、夜の明方に太夫諸共我が宿に立ち歸り、身上小體に取りおき、內證の世話なき暮しやう。昨日は上野の花の暮に、水いらずの二人づれ、今日は角田川の月に舟を浮め、女房共に酌さして此の味甘露の杯事、命をのぶるとは此の樂しみの外あらじと、見る人舌打ちして羨みぬ。昔は太夫其の身の重さに、目替にして代銀わたしけるさへ、世間の取沙汰またもなきことといひしに、今此の高雄はしかも小づくの女、十三貫目ありなしの姿を、千五百兩に身請おつ取つて、銀になほして九十貫目なり、七たび目にかけての重さなり。時代とて是れにも奢りとはいはざりき。大臣高雄請けだして三年目に算用して、右の九十貫目揚詰めにして相濟み、今より末々大分の金儲けと悅び、一日も長生する程德のあることをしつて、若い時から好んでくうた鰒汁もやめし。二八月に灸をすゑて夜道をあるかず。町內の喧嘩にも人より後に出で、平生身の養生おろかならねば、命の爲にも德あり。よく〳〵思案して見る程高きものにはあらず。此の差引をなして見てや、近年三ヶの津の松も梅も、根引にする事はやれり。

此の賢き世の人、うかとしたる算用にて身請はせぬ筈なり。おもへばむかしの大臣は、かかる十露盤をしらず、女郎請出すといふこと稀としられたり。其の時は女郎もうか／＼年の闌くまで勤めける。今時は遊女も身の行末を思ひ、中ぐらゐなる身代の、内儀のない男にしたしく仕かけぬるも、盗人の昼寐ぞかし。銀さへあらば思ひきつた色遊びは、若い中にして見給へ、必ず初心な中から利口だてして、錢を大分出さぬやうに立ち廻れば、末々までもその形氣うせず、遊び小さくなつて物毎小ませり、本大臣には至らぬと心得、隨分金銀を惜しまず、ぐわつたりとした遊びをして、色里にも名をのこす程にあがりをやりて、しやんと短う通ひやむが此の道の粹と觀念して、只明けても暮れても金銀をまうけためて、大きな遊びをして往生せんと願ひたまへ、南無阿彌陀々々々々々。

### 第二　紫雲の紫小袖女郎の御來迎
付り　太夫が姿絵物くはねで持てる身上

扨昨日も說き申した通り、とかく色里に何時までも言ひ出すやうに、見事な遊びをしてしやんととまらるゝが、色道安心の粹と申すぞ。二十より中のさわぎは此の道に入る踏足代と、三代目の世傳上人も說きおかせられた。それより四十年大興に入つて、太夫の有り難いところを覺え、四十より内にとまることを悟いでは、揚錢の淵にしづむことは目のまへなり。爰に本町に名高き絹商ふ春路といふ大臣、

親の目をぬき我が物を盗みつかひのはかゆき、一年半に一萬兩つかひすてて、親父始めて目をまはされ、一家町中の扱ひをきかず、永く勘當せられて、今鎌倉に引込み、内證から母の貢ぎを請けてかすかなる暮し。夕に米唐櫃をかすり、朝に薪たいて、何喰ふまいとも儘な中にも、太夫の浮雲事をわすれず。世にありし時菱川に筆力をつくさせし姿繪を表具して、是れを牀にかけて不斷我がたのしみとなして、物いはず笑はずと歎かれし、むかしの人こそおろかなれ。是れを繪と思うて何か嬉しかるべし、其の儘生きた太夫と思うてこそあれ、只今につとお笑ひなさるゝわと、ひとへに狂人のごとく、獨り喜び打過ぎぬ。女郎はまゝならぬ身とて心には飛び立つ樣に思ひぬれども、其の身行きて逢ひぬることもなりがたく、籠の鳥かや、うらめしき郭のすまひ、殊更繁昌して、一日も隙なく戀ひ慕ふ人しげく、此の君を見て始末氣をわすれ、假令身をつめて十千貫目ためたればとて、とても死んでは持つてゆかず、帷子ひとつですむこと、人間萬事は夢の見殘し、たゞ緋綸子の長枕、誠の極樂遠きにあらず、紫雲と見えしは江戸紫のそめわけの、襠の褄風にひらめき、浮雲さまの御迎へに作助がまゐれば、腹りと背中へ乘りうつらせ給ふ結ひ、しま黄金の肌胸高にあけかけ、縁ある衆生はあの御懐にすくひ入れ給ふべしと、有り難く簾越しに茶屋より拜み奉り、知れる人の聲して詞をかくれば、豐かに見返り、「久しいなア。後にえ。」と、少し訛りのある一聲を聞く人感にたへて、御後影の見ゆるま

へて、ぬれのうつゝ仕出しにあらず。「扨は其方が心入れは、此の太夫が何うした望みをいひかけうも底がしれねば、なまなかあうてから嫌とは言はれぬ義理を辨へ、聞いてから我が心におよぶことならば分をたて、及ばぬことならば今までの所思をすてて、逃げうといふ所存にや。さうしたさもしい心底ならばあうてから嬉しからず、よしない人にたばかられて、女の一分をすてたることの悔しや。」と睨まれし眼の中に涙をうかめ、身をふるはして恨みらるれば、作助胸をたゝいて「先程から道すがら申し上げし通り、一命を差し上ぐるといひし詞、今とても違ひはいたさぬ男め、如何に賤しき奉公いたせばとて、左樣の不所存なる心をさげ申すべきや。お情にあづかりたる上にて働き申しては、私が眞の心がしれませぬ。まだ眞の契りをこめませぬさきに御用に立てましてこそ、眞實におもふとも申すべけれ。抑惚れ初めまゐらせしより此の方、命はお前から預つてをると、ぞんじつめたる作助め、何事も御遠慮なく仰せ聞かされ下されかし。」と、實なる心底面へ顯はれ、頼もしく見えければ、太夫悦び「しからば樣子を語るべし、われ深ういひかはせし春路さまと申せし大臣、親御の勘氣をうけさせられ、今は鎌倉にわびしきすまひして、朝夕我を焦れ給ふと聞きしゆゑ、郭を拔け出で鎌倉とやらんへ尋ねゆきたく思へども、勤めの身なれば心のまゝにもなりがたく、思ひ暮すばかりなれば、こなた我を盜み出し、その鎌倉の春路樣のござる所まで送りとゞけて給はらば、生々の御恩ならめ。」

と涙玉をながして語らるゝ。次第を一々承り、「左様なうてはかなはぬ筈、拙者は眞にこなた様へ心をかけしにあらず、元來私はその春路の下人にて、旦那世にある時から、殊の外不便を加へくれました志を忘れず、何卒此の節の御奉公に浮雲さまを盗み取り、鎌倉に罷り在る旦那へ渡し、行末にかう添はせませうと存じ立ち、此のくつわへ當三月より下男にありつき、透きがな此の様子お耳へいれんと思ひぬれども、御盛んの體を見ては、中々旦那のことなどは、おぼし召し忘れし事もやあらん、然る時は私やたけに存じ、盗み出さうといたしてかゝるが、御本人の御心ざし變りては、思ふやうにもなるまじく、却つて仕損じ主人までの名を出してはと存じ、冥加なくも旦那の御情深いお前に、執心なと申しかけ、御心底の實不實をさぐり、いよ／＼過ぎしに替らず眞なるお心いれならば、命をすてて此の里を盗み出し奉らんと、憚りながら心をかけしと申し上げしは僞り、まことは旦那へ一奉公仕度き存念。」と様子を語れば、「さても頼もしき心入れ、此の上はとかう言ふに及ばず、何うなりとして此所を連れて、立ち退く思案を頼む。」とあれば、「何かさて其の御心ざしなれば、如何樣にも此の里は連れまして出らるゝこと。まづそれまでは遣手にも、随分色を悟られぬやうに遊ばしませ。」と謀しあはせて作助は我が部屋に歸りぬ。それより四五日も過ぎて、稀なる隙の夜を幸ひと、浮雲はとり籠りて灸をすうるよしにて、歌三味線のなる末の女郎を一兩人招き、灸の伽にいろ／＼の音曲つく

させ、すゑしまうて此の熱き跡のひらつき忘るゝ程、酒のみて紛らかさんと、伽の女郎にも無理いひかけて酒をしひ、我が身も醉うた風して三味線の胴枕に鼾し寢入り、宵に聞きし小歌は鼾とかはり、一家の中の女郎の心安さ、それなりけりに小夜著うち被せ、親方女郎の數改めて門口しめさせる時、作助表に出でて高聲かけて「やらぬぞ。」といふを内より聞きつけ、作助ではないか喧嘩さすなと、親方せいたうして呼びこめば、内へはひりて「いや喧嘩は仕りませぬが、何者か内かたの軒下に、いまいましい早桶を置いて逃げて歸りましたゆゑに、あとから聲をかけて一町許り追うて見ましたが、何處へ隱れしか見失うて殘念千萬、先づは夜明けて人の目にかゝらば、口がましき此の里の若い者共が評判もいかゞ、今宵の中に何方へもすてて參らう。」と申せば、親方聞いて「親一門もなき貧なる亡者は、寺へ遣はすべき錢の出し手なくて、それ程の世話は仕兼ねぬ者の門にすてて、夢にもしらぬ死人の厄介をかけぬる事いにしへもありつると、年寄衆の咄今思ひ合はされぬ。此の門へすてしも、其の死人に我等が何とぞ因縁ありてのことなるべし、中戸へ入れ置き明方に早々持ち行き、羽柴の煙となしてこい。」と、流石大勢つかふものは、心さばけてきつぱりと料簡して、早桶を中戸より外へ入れさせ、「人のことをすると思ふな、面々の後生ぢや、作助大儀ながら夜明前に持つてゆけ。」と、燒賃の鳥目までを渡して、親方は内にいりて休みぬ。夜明前に作助起きて、大戸をあけて出づる音、傍輩

早うお供申してかへれとの御事と、手代共四五人來りて申し入る「是れはおもはざる外の幸ひ、然らばとてものことに太夫一所に歸りたし、其の旨母に尋ねくれて、自然同心なき時は他人に家をやられようが、再びかへる心底ならず。」と、思ひきつたる申し分。「其の段もお心の粹なるお袋樣にて、定めて太夫を請けて一所ならばよからう、さなくば厭といふであらうほどに、直に請出し、二人つれでかへり來るやうに、我々にさはい仕れと、金子千兩御渡し。」と、財布を出しお目にかくれば、「八百兩では自由ならず、作助是れから三谷にゆき盜みし品を語り、八百兩を渡して來れ、殘り貳百兩は此の度汝が比類なき働きの褒美にとらす。」と現金にて下さるれ、鎌倉より二人揃ひ駕籠にて本宅へのお歸り。是れぞ仕あはせなほる時、人は只心ながう何事にも時節をまつべし。盲龜も時にあふ浮雲が仕合、今は奥樣と仰がれて、居すわりの雲となるぞ嬉しき。

## 第三　萬德圓滿釋迦の私金

付り　痛うもない腹さぐりに來る太鼓が方便

弘誓の一挺立に乘つて彼岸に至り、御機嫌取りの末社まじりに面白う酒のんで、壹歩小判は山吹の實と許り心得、始末の二字を忘れ、萬を大名氣になつて寄るほどの者にそやされ、金の花を撒き散らして餘念なき遊び、爰を以て極樂とは申すぞ。されば一切の女郎買ひ、明日のことを案じてはをかしか

汝等行きて此の旨を喃し、つれて爰へ來れ。」とあれば、「承る。」と末社の茂兵衛、亂遊法師、勇みにいさんで清十郎方へ走りゆき、間もなくかへりて、「彼方にもおぬかりはない、はや今晩此の里を出されれ、直におぬしの御居宅へ御入り、郭の名殘日出たづくしの大酒盛、御祝儀とあつて、一寸まゐつた私どもにも一兩づゝ下され、大分のお悅び、太夫さまは夜に入つてから、お駕籠にて御出でなさる筈、萬德さまに追付けこなたへ御立ち寄りあそばし、急かぬお顏で、跡からお歸りなされうとのこと。」と申せば、始めぶしやうかまへでお使に參らざりし、平田蜘の勘八壹兩づゝを聞いて、「私もお悅びにまゐりてまゐりませう。」と立たんとする所へ、萬德大臣御出でにて、「只今はお氣付けられて、歷々の末社衆を下され忝い。元來帶の祝ひをも此方へひき取つてからいたさうと存じつれども、申しても勤めの女、世間の噂を聞き合はして居るうちに、貴殿の推量の通り、此の頃は頻りに我等が子種に紛れなき評判、尤も拙者其の覺えはござれども、妻子のない我が事なれば、此のたび生まるゝ赤子が假令女子でござらうとも、跡取にいたす合點なれば、心を付けて念をいれる間がとれて今までの延引、此の座中の人々も此の里の粹達、拔目のない御推量、隨分かくしたるによくは御存じある事。」と、又爰にての悅びの御酒盛。「御平產の御祈禱に御茶引いてござる、惡所達をあけてつかはされ、物もらひはづした太鼓共に見事なことをなされなば、非情の大赦おこなはるゝよりは大きな善根、慥か

氣の毒に存ずるではござらうけれども、親方と金に勝つことがならないで、心ならずこなたへ參つたでござらう。併し大分の金銀に替へて引きとり給ふ太夫事なれば、どうして私が深い約束をいたし置きぬればとて、こなたの物になつた女郎に申し分はないが、腹に宿つてをる倅は、拙者が種に紛れござらぬ。外の種を斷りなしに、御自分の子になされうとあるは、おしつけわざのやうに存ずる。こなたで平産させられて、出生の子を此方へつかはさるゝか、但し此方へ母共に預り手前にて安産いたさせ、倅を取つて產んだからを戾しませうや。御ふびん〳〵はへらるゝ太夫事なれば、外へ遣はさることとは心元なう思召さう。其の段は拙者も同事。こなたの種でないとお聞きなされたらば、自ら疎略におぼし召して、食物何かに御心つくまい。然る時はどうした喰ひ合はせで消產いたし、大事の私の種が流れてしまはうも存ぜぬと、氣遣ひいたすも一致なれば、此の段をぢきに相談いたさうと存じて只今參つた。こなたには如何おぼしめします。」といはれて、萬德當惑して返答出でかね、「とかく太夫に左樣の覺えがござるか承つて參らう。」と辷り逃げにしてはひらんとせらるゝを、「是れ〳〵萬德殿、それは御人體に似合ひ申さぬ。今太夫にお尋ねなされたとあつて、こなたのお蔭で榮華の身となつてゐれば、さしつけて成程さうした覺えがござると、どう申すものでござらう。こなたの揚げ詰めになされて、他の者に逢はせられぬは過ぎし五月からのこと、拙者が逢うたは四月末かたまで度

度の事。しかれば懐胎いたしたと慥かにしれたは五月、其の前に數度〇〇〇〇〇男でござれば、腹の中の子は身共が種にまがふ所はござらぬ。太夫にお尋ねなさるゝにおよばぬ。此方へ引き取つて平産を致させうや、こなたにおかせられて産ませうや、此の二つの中篤と分別して、只今御せ聞かうれよ。」と、むつかしうねりつけるを、日比お目かけられしお出入の中す彦六右衛門といふ牢人、これな時こそ御奉公なれと、朱鞘に大鍔かけし大脇指をさして罷り出で、「最前より勝手で委細を承り、千萬御尤もにぞんずる。旦那太夫に離られ、こなたの種を孕みながら、主人にかへつけて身請せられ、此の家の奥樣とならうとふつくりました女、うかうか爰にさしおきませうやうはない。御自分にはよくよく深う申し交されました證據には、子までできる程の御中、他にさんせかるゝは御無念にござらう。御勝手次第に太夫やこなたへ御ひき取りなされ、爰はよい値上げ所でござれども、さういたしては足元を見るやうであしうござれば、旦那請出しました通りの金高、九百兩つかはされ、誰ぞ手代二三人彼方の御宿へついてまゐられ、金子請取つてかへられ、小紋どもは我等が金とひき替へにしてお供申して參る。なんとよい料簡でござらうが、是れにはこなたの申し分はないはず、早々金子遣はされよ。」といへば、この男ぎよつとして、「いやさ身が子をはてつぱらに宿しおきながら、身上の手厚いに目がくれ、日比の契約をたがへ、萬徳殿の子種と拙者を見かへて、こなたへ參る不心中な女めは、此

方に望みはござらぬ。世の諺に腹は借り物と申せば、不所存なる女の腹に宿りましても、種は私がに極まつてござれば、どの道産みおとしますと、子は此方へ請取り申す。こなたで平産させられうならば、必ず子の滿足に生まるゝやうに頼み存ずる。少しでも疵がつくか、又は流れたなどと仰せらるゝと、外の人は相手にとらぬ、萬德殿何時もお相手でござる。安産の時分は左右をなされ、又近日見舞にまゐらう。」と、嫌な一言を殘してかへりぬ。萬德内に入つて太夫に此の次第を語らるゝに、日本の神をかけ、更々さうした覺えはなし、併し爰に存じ當る事は、去るお歴々について參りし、橘の六郎平といふ太鼓持、我が身に執心なるよし、大臣の目顏をしのび、しつこい程口說きぬれども、女郎をなびけ自慢の粹だてが憎うもあり、又ひとつには、我が身を不便がらせらるゝ大臣の召し連れらるゝ末社と、うしろぐらきことをして、若しあらはれては戀の品にはならで、惡性の仇名たち、此の身の一分すたることを思ひわきまへ、つひに心に從はざりしが、其のにくしみに今わしが出世の障りとなる程のことをいひかけ、こなさまに愛想をつかさせ、此の家を出さんとの巧みかと存じます。なる程春中は、折節そのお歴々に六郎平がついて參りぬれども、二親を誓言に入れて、眞に手を一度握らせた事がない。さりとは憎いいひかけ、お前の思召しも迷惑。」と、涙をながしてのことわり。「何がさてさうした事であらうと思へり。是れには何卒よい分別がありさうなものぢや。」と、不斷お出入

り申す末社共を殘らず召され「汝等が知つた中に橘の六郎平といふ素人末社はないか」とあれば、牛込の和平といふ男が、「成程それは堺町邊に罷り在るもの、即ち私が家內に親んで居りますもの。元來は金持に隨分ゆうむう暮した奴でござりましたが、われ〳〵が仲間へ入つて、先橘の六郎右衞門が後家へ後連に肝煎り、三年以前から堺町の家を我が物にして、此の比は幇間身持揚げを仕り、仲間でもあんまりようは申しませぬ。あいつが事をあきさせうたら、六郎平が外に懇してゐる深い女房があるとて、內の噂につけますと、其のまゝ家鳴して山の神が怒り出し、撲で出ていきやと、それはもう前の見事な大目錢、いかな六郎平も頭に鷹。」と話せば、萬德悅び、「是れはよいことを承いたこと、倍のお目かけふゐ、牛人彥六右衞門を招き、和平今の噺をしてきかされ、何卒よろしきことにいふて、一思案して見られよ」とあれば、畏まつて立出し、再びお出入の日傭が女房が夕產をいたしたと、猿が內かへ鐵錢を貰ひに來たと聞くより、其の生まれ子をとのませ、懷に抱いて堺町の六郎平が所へゆきて、案內をしにすつとはひれば、六郎平それと見るより、すつと立て表で樣子を聞かんとするを、これ此方に合點をやと、則と內へ入つて、「是れは御內儀樣でござるか、此男子は六郎平殿の深う言ひ交されて、女房にもおもひかへぬと、愛しなされます女郎の腹に宿つた子の事、先程平產いたしたゆゑに、お約束の通り赤子を連れてまゐつた、慥かに請取つたとの一札をしてこうれよとい

へば、六郎平は迷惑さうに尻が下におかれず、「これやくたいもないことばかり、女房が誠ぢや思へばわるうござる。じやれごとも好いくらゐなことがよい。日比其方がおれを大切に思うて悋氣深いなしつて、腹立てさしに悪劫な衆ぢや。早う連れていんで下され。」と、じり〳〵とまうて氣の毒がる。彦六右衛門小氣味よく、「いや是れ六郎平、それは何うした言分、最前態々來て、子は此方の女房共が手育てにする程に、疵のつかぬやうにして連れてこいとはいはれぬか。契約の通り連れて來たに、大儀などいふ男への一禮もいはず、何うした事ぞ。」と臺所へにじりあがれば、花車はくわつと上氣して、眼をすゑ齒をならして、「これ阿呆、又外で女房三昧して、子まででかしやつたの。何處の牛の骨やらしれぬ女の腹からすべつた餓鬼を、おれに取つて育てとや、そりや成るまいわいの。兎角さうした悪性な男を、此の内には一日もならぬ。其の上な鼠小紋の布子も、此方で出來たのぢや。夫れぬいでいんでたもれ。」と、鄰向ひをはゞからず、大聲上げてわゝり出せば、六郎平迷惑して、彦六右衛門にさまざま詫言し、「重ねて此のことについて御家へ足を踏込むまい。」と一札して、やう〳〵と彦六をかへし、跡は花車への斷り、脚布で縛られたもしれず、いかに色の道なればとて、分際に不相應の戀はせぬもの、濡れもよい加減に、相手を見てしたがようござる、必ず若い衆よう聞かせられい。

軒にたてゝ、茶煙草になやみをたすけ、とても見合はせてしめてやつてから、最早替へも來まいに、御幸東の橋までゆきてしまはうと、駕籠を昇き上ける時、此の乘手思ひの外慈悲者にて、「錢出して極めたればとて、橋まで心なく乘りても行かれまじ。是れから汝等には隙をやるぞ。」と、駕籠の前の風呂敷包手ぐからわにかけ、草鞋しめはき茶の錢拂うて出でらるれば、駕籠の者共夢見たやうな仕合、世の中の御善根と申すは外になし、有り難き御心入りと悦び、直に駕籠ひき擔けて歸るにつけても、昔をおもひ出し、稚き時は荒き風にもあてられず、假初の物詣でにも、お乳やめのとにいだかれ、若子若子と育てられし其の報いかと、過ぎにし事思ふに付けて、ゆかしき姥が懷といふ所を通るに、これしも霜月八日の夜、月薄く物の色は慥かならねど、京の人の聲して、空駕籠ならば八丁まで賴むぞ、一足もひかれぬと歎くを、二人共に哀れに思ひ、「とても歸る道なれば、如何にもやりましよ。三百だすが合點か。」と、駕籠をおろして件の旅人を乘せんとするに、嵐はげしく、北時雨もいたくふりて、手足も冷えわたりて、此の乘手おもこたのたつこともなり難く、世の限りなる聲して、「汝等にいひおくことのあれば近くへよれ。」といふ。氣の毒なる人を無用の慾にて乘せけると、後悔跡へも先へも行きがたし。「さりとはよわき御事、今少しゆけば人家もあり、養生なるべきことなれば、是れ口をあき給へ。」と、七兵衛は後よりかゝへ、六兵衛は岩根のさゞれ水を手にすくひて參らせしに、此の男

息をつぎ、「我は今宵親の金をぬすみ、柴屋町の女郎をひそかに請けにゆく心ざし、元來病後なれば寒風にあてられ、空しく爰にて相果つるに極まりぬ。京の所をいふまでもなし、死骸をもかくし、又其の女郎も身請して、郭の苦患も助けてくれ。此の肌著に小判千兩と、委細の樣子の書付を縫ひつけてあれば、直に二人にとらする間、柴屋町の歌仙といふ女郎、大方三百兩では身ぬけなるなれば、其の餘は汝等が德にして、我が跡をとぶらひて得さすべし」と、是れを最後にしてはかなくなりぬ。六兵衞は肝をつぶし、是れは先づ何とすべきと狼狽へ、死人の耳元へよつて、呼びいけんにも名をしらねば、「旅の旦那殿〳〵」というてからかへらず、さりとは氣の毒なるめにあふことと、頭を掻けば、七兵衞はそれにかまはず、かすかなる懷より金襴の守袋取り出し、其の中なる書いたるものを出して大道になげつけ、土足にかけさん〴〵に踏みにじり、僞りもののやり傾城め、此の姿になりしは誰ゆゑなるぞと、齒ぎしみして腹をたつる。「やれ何をいふ、先づ此の亡者はどうするぞ、おればかりに世話させずと、とも〴〵思案をしてくれい、狂氣したかうろたへたか」といへば、「われらかやうに身は腹からの傾城界にあらず、近い比まで色道一通りには、恐らく垢のぬけた、風呂屋の關の萬作といはれし大臣の、なれのはて、柴屋町の歌仙とは、によつと郭へ出でし日より我が物にして、假令どんな身になりても、木の火の中水の底までも、はなすまい、はなれまいと、七枚つぎの起請を取り置き、

此の身になりても年の明くを樂しみにして暮せしに、京に斯うした深い男のあることを今まで我に包み置いて、ぐつすりと請けられ、我等がことは空吹く風のやうにのせをつた所が憎い」と、眼をすゑて腹をたつれば、六兵衛手を打ち「さては其方は聞き及びし萬作大臣か。我も歌仙が片腕にもなる程な、糀屋町の俵六といふ大臣。それ日外揚屋遣手に金をくめでのみこませ、歌仙を連れて石山の螢見も、見もむすばぬ縁で、銀を積んでもたまらぬさわぎに、すつへりほんの棒一本、女郎にのせられた代りに、人ののせる身過とはなりぬ。其いと言汝は氣を持つて、一日措いて明の日、高觀音の舞臺にて、暮れかけての涼みの趣向、我が方へ見よがしの全盛、世にある時は名のみ聞いて逢はざりしが、不思議の縁で相客になりて、今までいはずかたらず、さりとは我もふかい物ぢや。兼ては其方もきいて居よう。我歌仙を請出さずば、再び此の町へ足をもふんごむまいと、はちけんをはなし急に引き抜くおもひ入りなりしに、怨めしきは御天道様、俄に風雲丑寅の方より矢をいるごとく、是れは一勝負と買ひこむほどに、藏々は大概我等が米であつたに、惡口からの上日和、浪靜かに松枝をならさず、次第下りにおちて來て、うけうと思ふよねは買ひこまいで、思はぬ米の買ひおきに、五千兩の損金、下帶までもはづし、三歩半に詫びて、今此の體になつてのけ、歌仙が手前面目なければ、我は女郎に少しも恨みはないこと。」と語れば、萬作も息杖の折れるほど逆なうつて我を折り、「知らぬとて今まで

たとて、結びなほすふりをせしは、汝が餘所目をするうちに、眉間を打ちわり此の金を一人して取らふんと、彼取りなほし打ちつけんとしたれども、其方もその心がけ故に、油斷の體も見えざりしゆゑ、首尾あしくて打ち損ぜしが、是非此の末ではおのれやれ、醉たてばたてしだい、思ひこうだる此の小判、我が徳にせではおくまじと、今までも思ひ込みしに、其方は我より罪淺く、早く懺悔をせし事、近頃はづかしき心根、汝が懺悔をきかずば、中々我は大慾の思ひ立ちやうはせまじ。口惜しや貧になれば、是れ程心が邪にもなるものか。我元來は都立賣の三代長者、子林靜閑といふ有徳人の妾腹の子なるが、靜閑は親ながら淫亂なる天性にて、すぐれし美婦を二十人召し抱へ、子宿ればこれより飽きて、平産すると男子にても女子にても、すぐに母につけて百兩づゝの敷金そへて、他所へ緣につけられし。我は靜閑祕藏の第三番めの妾、おるりといへる腹にやどりて、風呂屋の闇の萬助方へ、母ぐるみにゆきて、萬助跡見をつぎて萬作と名乘り、兩親果てられてから讓りの分を皆になし、新く賤しうはなりたれども、本種は町人ながら、京育ちの歴々仁の筋目として、かかる淺ましき所存はつけることの恥かしや。」と、淚と共に語れば、六兵衞大きに肝を潰し「我も其の靜閑の五番目のお花といふ妾腹、即ちぬしの手代米屋町の傳八に我と共に使はれ、跡職取つてなくなし、養父はしなれし母は都へ立ちかへり、靜閑方の臺所の世話やきてゐらるゝよし。是れは大方ならぬ因緣、先づ其方はいく

候ゆゑ、妾共の子供の儀は他人の様に存ぜられ、打捨ておき候へども、曾て承引無之く候ゆゑ、父の御恥一家の面目を穿ぎ申すべき為、金子千両盗み出で申し候、私儀本妻腹とて、末子ながら跡目に御立て下され候御高恩有り難く存じ候へども、假にも親に断りなく、面なき仕業仕り罷り出で候上は、再び歸り申す心底にて御座無く候に付き、爲御断り此くに候以上。」両人讀み終りて、一度に手を打ち、「扨は此の亡者は我々が為にも弟なるが、討たずも兄弟が手にかけて、野送りのまなびをなしこそ不思議なれ。」と、先づ持佛壇に燈明點して其の前に死人を直し、香花を供へ廻向して後七兵衛いへるは、「最早生きては居られぬわ。如何に知らねばとて、現在の妹に契りを結び、其方と我とが買論、其の上に誓紙まで書かせて畜生同然の所行。汝は我に面目あるまじ。我は汝に面を合はすも恥かし。いざ刺し違へて死なん。」といへば、「いかにも〳〵御心底察し入つて至極せり。さりながら歌仙を請けずにころし置きなば、弟が存念たち申さず、草の陰から恨めしうも存ずべし。まづ妹を請出され、其の上にて如何様とも、二人一緒の相談次第に、覺悟を極め申すべし。」と道理をつくし申しければ、「成程是れも尤もなり、しからば汝かの里へ立ちこえ、首尾よく請けて來られ。」といへば、「夫れは兄甲斐にこなたござれ。」と、此のせりあひ暫くなりしが、七兵衛思案を仕出し、いにしへ連れし石橋町の、なにの四郎兵衛といふ末社を呼びよせ、「此の比の風容に思ひの外の仕おはせし、、六

# 傾城禁短氣五之巻目錄

第四　禿も水揚してから即身上ぶつ

付り　内からの分別あらたまる新町の入口

此段は　昨日までは、下品下生のあかり顏に目をつけし無心の童女も、太夫の果に至つては自然と位備はつて諸客を引き廻し、其の氣に應じて道を施し給ふことを記す。

は我が家と定めて住する所なく、萬吏の丸裸にて、親方からの仕著の衣裳も、我が物とは定め難し。はやらぬ時は位をおろされ、或は所をかへられ、三界を經廻り、無緣法界の客に身をまかすを以て流女といへり。然るに同じながれをくむ女の身と生まれ、三ヶの津の色里に出世し、居なりに勤むるといふは、遊女冥加にかなひたりと、有り難う思うて間夫狂ひをせず、心まめに客衆の氣をとり、如才なく勤めば、追つつけ黄金の光と共に身請せられ、安樂國に坐して、西方の御臺所とあふがれんこと疑ひなしと、内方の花車如來の御教へ、何と何れも有り難いお示しではござらぬか。」▲姉女郎問ふて曰く、「何と花車如來の教へにまかせ、其方は間夫狂ひをせぬ氣か、但しする氣か。」▲新艘子答へて曰く、「抑傾城の身は貧しき親の爲に普く主取なする事親方も金銀に替へて世を渡る業は何れも同じ。それに疎略をして勤めを缺き、かくし男を拵へて逢ふことは勿體なし。客樣方は心を慰める爲とて、さりがたき日を爰に暮し給ふに、其の氣に反きて我が物つかうて間夫狂ひ、浮名の基勤めの妨け、更にすることにあらず。」と答へられければ、▲姉女郎教へて曰く、「弱氣かな新艘子、其の律儀さでは太夫の職は久しくもてまじ。尤も今時金つかふ大臣は稀なるに、それには如才して、我が物をつかうて男不便がるを、初心な女郎はうつけのやうに沙汰せうけれど、間夫する程の女郎に、昔から弱きは一人もなし。勿論ぬるき人の隱し男はならぬものなり。總じて間夫せぬ女は、物の哀れもしらず、面白きこともなく、又全盛もせぬものぞ。

都の吉野さまは鍛職に枕をならべ、江戸の尾崎さんは病難人に身をまかせ、此の里の夕霧さまは座頭に一度の情あり。これ等こそ誠の太夫ぞかし。色を事として、情を商賣とする女郎が、貴賤に限らず執心なといひかけられ、親方の手前がこはいの、遣手が聞くが恐ろしいとて、情なくいはば、戀しらずと噂せられん。是れを思ふに、控ふれば一分すたれし、寡れば身もたつる樣に濃うなる。此の好い加減といふことを悟るが太夫職の肝心ぞかし。親方の手前を思ひやり、手かきくる嗜り、一生惡性せずに、旦那の氣に入ること許り心にかけて、客のいふやうになる〳〵と應りては、粹なる大臣はしるゝ太夫と見すかし、つい餘の太夫に仕替へて長う榮昌はせぬものぞ。數ある客の中に、根強く見ゆる大臣あらば、是れを取り離さぬやうに繋ぎおきて、外のはいく〳〵、客には張つよく出ると、自ら手にいれたがりて、我人戀ひしのび、お敵の方からあき日を傾み、慕うて來るは知れたことで、もう勢ひに乘つて來ては、したいことしても浮名は立ちながら、三十日に四十五日も買へば、親方の儘にもならず、遣手も見ぬ顏して、太夫さま〳〵と八方から用ゐて威勢を見することぞかし。親方遣手の手前をおそれ、浮名を厭うては全盛はならぬものなり。客に内甲を見られこなさるゝと、太夫の位がなく、張がきかぬものぞ。大臣の方から機嫌を取るほどに、しこなさねば嬉しからず。又物にもならぬものなれば、能く是れを勘學せらるべし。扨正月をはじめ年中の紋日をくゝりつけて、夜安くねるうち

に、約束の大臣宿にかへりて熱詰め、十杯機嫌で請合うて戻つたことの悔しうなり、時の間の風のなびきに替るは僣上大臣の心、忽ちに女郎へ難儀を持つて來て、口說仕舞に、手をよく紋日を遁れんとする男を、何うして其方はまた本の物にして、其のまゝ紋日をくゝりつけるぞ。此の仕掛聞きたし。新造子の水揚の新談義といふは、こんなことを稽古させうためぢや。其の仕こなしを說いて聞かされよ」といへば、▲新造子いはく「それは其の大臣、女郎に何にもせよ、難題をいひかゝるとき、さりとはさもしき御心底、よしや我が身に誤失あるにもなされませ、今日口舌して御退きなさるゝと、九月の紋日の御世話をやかましう思召してのことと、口がましき遣手のかめが郭中をふれあるかば、妾がわるいとは申さいで、お主さまのお名が出ようとぞんじて、たんと氣の毒に思はれますと、紋日のへらつかはるゝ爲の仕掛の口舌ぢやと、耳こすり申しなば、自ら恥ぢて、よい〳〵いはうと思へども、今いへば物日が嫌さに、四の五のといふと輕侮まるゝが無念なり。見事に節句しまうてから申さうと、出直しますは知れたことでござる。」といふ。▲姉女郎かぶりをふつて曰く、言ひ廻しの魂膽が若い〳〵。たとへば大臣無理を以て來さうなる顏付の時、しみ〴〵と深う仕掛けて、今申すもいまめかしきことながら、尤も外にも不便がつて下さんすお敵樣も多けれど、妾が身の上の事うち解けて語り、心便りにいたしますお客は、主さま除けて外にないゆゑ、ちと御相談申したいことがあつて、此の比はそよと吹く風の音信

も、もしやお出でかと心待ちして居ましたに、能うこそ今日は來て下さんした。少し御内談いたしたきことは、此の程兩度住吉屋で逢ひまする、西國の大臣が、此方嫌な程上りつめ、髪を切りたらば、九月から正月まで揚詰にして逢はうと、無分別に言ひつのるを、何れも爰は切り所ぢや、節句ひとつさへしかぬる大臣多い時に、半年近う揚詰の大臣、又はできまじ、是非に切れと遣手の嚊が、額たれの剃刀あてがへど、假令根引にする大臣なればとて、氣にいらぬ男に切ることは嫌ぢやといへば、我儘な太夫さまぢや、指髪切るは女郎のならひぢや、身に瑕つけずに勤めがなるものか、手前にきびしうないやうに遊ばせ。男好みしてよい客を取り離し、流行り止んで太夫から一疊敷の住居、今まで幾人か見たこと。房つき枕が丸太の引つ切り枕に變るは浮世、今見るやうなと、人中で遣手の嚊が、扨も酷いことをいひまする。私も太夫といはるゝ身ぢやもの、すいた男なら髪はいふにおよばず、命でも何の惜しかろと、男の膝に凭れかゝつて、習ひの涙をこぼし、人も聞く程に泣き出せば、大臣胸元がしわ／＼としてきて、是れはあんまりの詮議になりける。今日は何でも見事に日頃の仕掛けて退くか、さなくば髪か指かを切らする心底にて來りしに、思ひもよらぬことを聞くは御目出たやぞ、我を便りにして斯く打明けて語りかゝることこそ因果なれ、こゝは八幡見捨てかたしと、まんまと一はい食うて、數ならねど我等が居るぞ、そんな白痴な客は、蹴ねてはねらるゝせ、節句も正月も此

の男が請け込むからは、世界にこはいものはないぞと、頭から大きに出て、我一人して萬事を勤むるものぞ。仕掛ばかりにて男は何う上さうとまゝなものなり。ついしたる文引きさき、掻い丸めて是れを打ちつけ、分あるやうに見せかけ、男に喜ばすやうな仕打、不斷心懸けて上手を盡さるべし。されば客によつてしたたるきを好むあり、しやんとしたをすく人あり、大勢の付きあひの中にて、手入つた風をして見せ、ひけらかしたがる男あり、連の手前を憚り一座はさらりとして、○○しめやかに咄したがる大臣もあり、此の代りめの人々の好める風は、……會出あふと大概様子の知るゝものなり。しやんとしたを好み、○○しつぽりとゆくを悦ぶは粋なり。したたるきをすいて大勢友達の中で、是れ見よがしに○○○ながら、目を細めてじやら／＼言ひたがるは、いかう前方な素い人と心得べし。此のしたたるいを好むわるは、しら／＼しうべつたりとした事をいへば、殊の外悦ぶものぞ。こんな男は女郎の氣骨折れず、何のやうに廻さうと、のぼさうと、手に入れよきものぞかし。只しやんとしたを好み、何時も位を取つて○○○○○○、此方からいひさうな事を、彼方から皆いうてしまうし、これは我等をつもるさうながと思ふ事があつても、的面にそれを打ち込まず、却つてその調子に乗つて請け返答して、女郎につもらしたい程、つもらしておいての揚句に、なんと太夫おれをそれ程前方なものぢやと思やるか、此方は一分粋のやうに思へど、其方達の目からは未だ薄う見ゆるかし、折

郎はぞんじませねど、妾がお取持ち申しまして、もとへもどして中をなほさせませうと、此方がはまつた顔をせずに、すぐに粋をするにたてゝかうつけいらねば、粋の心はとれぬものなり。第一客を見こなすは女郎の大事、不案內の基と心得られて、勤めらるゝが肝心々々。」

## 第二　外面似菩薩內證は振るに極めたる女郎

### 付り　一番太鼓は情しらずのばち當り

新艘子水揚の新談義も大方に述べらるれば、もはや苦界を勤めさせてもくるしかるまじと、姉女郎に深間の大臣、表向きの水揚をしてやらるゝはずに極まりぬ。然れば今すこし手の屆かぬ所あれば、とてもの事に高間和尚をたのみ、勤めの巧者談義を一七日說いてもらひ、今出の初心な女郎衆をはじめ、此の新艘子の後學に聞かせおきたいとて、姉女郎の世話として此の里の年も明きて、禮奉公つとめてゐらるゝ高間和尚とて、女郎のするこつひを招待せられ、今日より一七日が間、色道奧義の說法約かにのべ給へば、偏に江口の美君再來あつて、愚癡の遊女共を粋に引導き給ふかと有り難くおぼえ、郭の中はいふに及ばず、此の津の橋々に隱れなき名題の呂州猿如上人、歷々の住職をはじめ闇者の月妾坊募守の總右衛門まで未明より詰め掛け、巧者談義を聽聞す。誠に好色繁昌の時とぞ知られける。高間和尚松の位の高座に身上り遊ばして、萬客になみさせし舌を動かし、說法有ることぞ有り難

ものなり。かうした男は追付上々の粋になる下地と心得、ずいぶん眞めいておもはくらしうもつて參れば、馴染みてから女郎の爲になる事多し。又不粋なる生まれつきは、ふると面白からずと、女郎を替へてこなたの顔あてに、しかも跡ひくものなれば、あつたら大臣を餘所の寶にするといふもの。總て初心な客をふるは、情の道に違へば女郎の本意ならず。ふるといふは終に太夫にあうたこともない男が、新地堀江或は道頓堀邊の、磯ごゝりの學問のぶんせきにて粋顔を仕り、初對面に太夫に逢うてもおめずして、能くしこなすといふふりをする粋だてがにくさに、三匁取りの遊女にも、格別違ひのあることを示さんために、○○なこうふりつけることぞかし。是れも座敷から其の顔を見すれば、敵かんづいて郷つて○○入つてから、こなたのはまることなれば、成程一座はするだてどのにまはされておいてから、○○見事に見せつけてやるものなり。併し此の粋だて、紋日をも勤めさせまい大臣と見れば、ふつての上に此方の秘傳で、又來るしかけあるぞかし。是れには初心の女郎衆は、よう聞いておかせられ、大事の所でござる。扨くだんのするだても思ふ程ふつておいて、一番太鼓うたで、お客たたしやりませいといふを聞いて、身拵へして立ち出づるに續いて、相客の見る所にて、耳とらへて囁くは、今宵は仔細あつて態としみぐ\としたる○○もかはしませず、かへしますにはわけあること、重ねて御縁もあつてお目にかゝらば、其の時には知るゝこと、誓文くこれ此の頭つ

慇に請け返答して、此方から物かずいはず、〇〇結び目の堅き待遇に取りつく島なく、つい太鼓時分になれば残念ながらなれど、是非なく人並に起きて出で、尻目にかけて怨めしげに女郎を見て、友達共の寝を惜しむを急しく呼びたて、ひとりと帰りを急ぐものなり。我苦界を勤めてまだ間もなく未熟なりし時、京の野風さんの愛しがらんす、新在家の芳助さまといふ大臣、北濱の千石さまの御誘引で、此の里へ始めておこしなされ、扇風方にて彼是太夫達を見させられし中に、我が身お目にとまりしとて、其の夜お目に懸りしが、京にて分よき大臣ともしらず、紬のうこん染の肌著に、手綾縞と見えて絲太き飛白縞の著物、其の仕立の律儀さにあはせては粋らしき座敷つき。都の祇園町より外しらぬ人であるべきが、座馴れたる擧動、さらば一ふりふつて困らせてやるべしと、寢前の身拵へに、外の女郎立たるゝをも構はず、杯の納まり所を改め、座配よく見せて座敷に間を入れ、扨〇〇〇〇〇例の煙管を啣へ、煙の輪など吹いて隙を入れ、禿を呼び寄せて何の仔細もなき事を耳囁談など仕掛け、兎や角して隙を取りしに、案の如く此の大臣座敷での見事さとは違うて、〇〇〇有様中々愚かなるせんさく、さもあるべしと、可笑しさを胸に納めて容儀して、其の夜はふつてすましけるに、猶捨てずして明の日もお出で。昨夕にかはらぬかうとうなる仕出し、花色紬に茶小紋の日野の羽織、隨分いや風なる出立、地の人ならねば跡をひかれてからが、高がしれてあると、中括りに括つて、又今宵も物

は、大臣こよない御機嫌にて、封じめといて、文押し開き見させられ、我等此の里へ此の度が始めといふこと、誰がつたへて太夫が耳へはいれしぞ。歸りなば新町行のなれこ舞をさせませうと、どれどれもお上りを待つてゐるとの文體、汝等なれこ舞の仕様をもくろみおくべし。扨是れなる女郎こそ、見てややなたん高間さまといふ太夫職、我等逗留中殊の外お情にあづかつた、皆の者もお近付になつて、お禮申してくれとあれば、彌七追取つて申し上ぐるは、かたのごとく旦那は涙もろうございますれば、大概にお情かけられまして、折節は京へもお上り遊ばします、お心のつくやうに頼みあげますと、是れを都の者共が詞の口明けにして、さあのみだしてとめどはなかりき。扨夜に入りて○○○られけるに、其方の女郎は爰で折れて来て、打解けてかへりを喰ふものぞかし。我つく〴〵思ふに、今宵○○○○○○○○大臣此の中のかへりに、慥かに彼方よりふらるゝにしれたこと、爰はなほ〳〵手強きがよい筈と、分別堅めて○○○、今宵は珍らしき都の殿達と飲みあひまして、夥しう醉ひぬれば、不躾ながら御免と、大臣へ○○○○醉うたる體にて○○ぬるを、芳助我をゆすり起し、こなたは今宵で三夜おふりなさるゝが、とてものことに、その由緒を仰せられて振つて貰ひましたい。様子をぞんぜねばお詫び事申す手掛りもなく、さりとは此の二三日は痩せることでござる。根から嫌と思召す男ならば、御遠慮なく左様仰せられて、是れ程にものをおもはせて下さるゝな、と

しいほどの運びぶん、是れ一ぱいの難波土産と、口のきいた惡口仲間が、尾ひれをつけて京の揚屋で言ひ立つるは知れた事。さすれば都のあらゆる粹共の口の端にかゝり、笑はれんも無念なれば、爰は一代一世の大事の所と、姉女郎に隱かに此の仕舞のつけやうを相談せしに、姉女郎きかるゝと、先づ其方は昨日どういうておかれしぞと有りしゆゑに、大臣のいはれしは、今宵で三日ふらるゝは何とぞ樣子もござるか、お氣にいらぬ模樣を存ぜねば、お詫事申さう手がゝりがないと申されしゆゑ、勿體ないお前のやうな粹樣を、ふるといふことがござらうか、都へお歸りなされて笑ひ草の種にもならうかと、恥かしう存じてと、返答を致し置きしと申したれば、姉女郎夥しう叱られまして、左樣の弱き返答があるものか、其の大臣三日ふられても腹もたてず、結構にいうて絶えず來るは曲者なり。初會にふられて恨みず、今宵は／＼と三日までつられたもの、そこで心弱くなりてうち解けると、大きにはねらるゝは目前にしれたることなり。此の客其方が打解けると、其のまゝ返報して、すぐにその翌の日都へのぼるは、見えすいてあることなれば、如何やうの上手いはうと、ふりづめにするより外はあるまじ。佛の顏も三度とやらにて、如何な氣のながい大臣もむつとして來て、是れは太夫どの、あんまりでござる、身共も數ならねど、京の太夫にも相應にかはゆがられて、揚屋禰も握る者が、大坂の高間殿に五日つゞけてふられたの、十日ながらにねられたのと言はれては、何とも男の一分が立

ぬ。今宵はどうなりと方樣の御心まゝに、此の身を任せまするしに、髪を切つてお目にかけしは、今いふ此の心底に僞りのない證據、心中では切りは致しませぬと、言ひやうにて襟元へ顏を押し入れると、如何なる粹も縺しかゝる仕掛ぞかし。かう名乘りかけて此の中の返報に、丸になつてとなされ、恨みに存じますと、手を出しておくからは、如何やうに返しても此方の恥辱にならず、其の上かくる節にいはれて、腰骨の折れぬ男は一人もなし。先さまが粹ほど、よう請取る手にて、嫡女郎の教へを請けて、其の通りにもつて參りしに、案のごとく流石の粹なれど、是れは思ひの外なる御心底、よし僞りにもいたせ、お心入りを反古にはいたされまい。暫く此の里に逗留いたして、飽かれて歸りませうと、又續けて十日の約束、其の夜しつぽりと逢うて、上手のある程つくさしほどに、大分の喜びにて、お上りの節土産とて、今の世の鹿戀女郎の身請のなるほど金下されて、近い比までは懇にして下されしが、是れは初會に其の客の樣體を見ちがへ、粹だての男とおもひ、慥すにつよつとふり出して、どうも仕樣のつかざるを、巧者なる姉女郎の智慧をかりて、上首尾にせしことなり。然れば女郎は仕掛が大事と心得て、常住不斷、たゞ有り難き方便の仕掛を工夫し、月の凡夫を教はんと心懸けらるべし。粹の客にすればけなを以てこかすべし。月の男はなつまれたる風をして、のほらすが肝要なり。▲新艘子飼ら一紋日役日の仕手のなき時、素い客にくゝりつける仕掛、とてものことに

きよいせんしやうが嫌ぢや。太夫さまのお爲になるお客ぢやと思へばこそ、あの二才にはい／＼といふうし廻れ、横柄くさいやい玉よ、我が宿もらつたら、亭主に見世出さす程の元手はかしてやらうぞ。隨分ぢやうめな男を見たてゝもてと、仔細らしい置頭巾で、のびもせぬ髭ぬきながら、ようも／＼いはれた事ぢやまで、世の中の女郎買ひの騙者と言ふは、此の客づらかことでござる。もう此のわろも手が見えたれば捨てておいて、彼の賴もしう被仰る、眉目のよい鼬堀の六樣の方へ、賴みにやらしやれませといへば、上杯機嫌の客が聞いて、玉何の事ぢやと問ふ時、女郎は、いやお前のお聞きなさるゝことではござんせぬ。さあ／＼今の杯をおさへておいたが、一つあがりましたかと、よのことに態とそらすを、遣手は此の客に、お前なればこそ大事なけれ、まあお聞きなされませ、太夫さまのお賴みもなされぬに、此の來る紋日をいたしくさるとおつしやつて、今樫に馬乘りかけたやうに、田舍へ行く程に外へたいあと、是れがまあいはるゝ場でござりますか、それに太夫さまの今のごとく、またとやかくと人の譏らう所が氣の毒ぢやと、是れ程のふつゝかなお客を、おいとひなさるゝによつて、はたから一ぱい腹が立ちますと、角めだてば、大方十人が九人までは、是れはつまらぬ、其方がいふ通りさう堅う約束して、今へら所ではない。世間にはふつゝかな男もあるものぢやと、同じやうに譏るを、はてなにを玉はわけもないことをいやるぞ、御用があらば田舍へござるまいものではないと、

見るといふ邊がよい節ぢやと、中々此方へ顏も向けぬ男は、背のはげた粹と心得て、大概にして譏りやめてしまうたがよし。此方の嗤の頓著させうとて長々しういふと、是れ太夫おれは大切な日を缺いてそんなこと聞きには參らぬ、內證の談合事ならば、一歸りかへつて來て、內でして來て貰はう。誰ぞ來い座敷が寂しい、亭主に出てひとつ飮みやといへと、ふくれて來るものぞ。兎角女郎の魂膽事は變に應ずるが專要、手過ぎぬれば裏をかかるものと心得て、隨分信をとつて嘘をつかるべし。

## 第四　禿も水揚してから卽身上物

### 付り　內からの分別あらたまる新町の入口

▲新艘子問ふて曰く「惡じやれの大臣、過ぎし物日は手をよくへらを遣うてのがれしが、此の來る節句さしうも、我等に言ひかゝるは知れてあること、此の度はたのみかけられては、最早どうも拔け句がないによりて、此の節口舌をして、暫く退いて居て外のとろい客が請取り、見事に節句をしまうた時分、外の女郎にかゝつて見て、おもしろをかしう此の女郎に取りもたせて、又本へ戾れば一つは慰み、一つは物入を脫るゝためぢやと、口舌の種を拵ふるに、差當り何もいひたてにして口舌すべき種なく、幸ひ此の二三日田舍の素い客が取り付き、吉田屋に今日も明日も約束して隙が入るといふことを聞いて、是れ幸ひの口舌の種と、さしあふをしらぬ顏で揚屋に來り、是非今日逢ひたいとならぬことをい

すべき女郎の計畧なり。時に男は、さてこそ我等が心算にたがはず、よい口舌になりかゝると、いよいよ氣をたてさすやうに、是れは新しうござる、こなたのやうな御全盛の女郎に、我等式の貧じん僧都が、お目にかゝらうと仕れば、何時とてもおさしあひで御目にかゝることがならぬ。さるによつて向後貴公にあはねからは、お急きなさるゝことはないはず。こりや左吉、此の中越後町でお詞にあひかつた、此の方にいたさうと、太鼓を相手にしていふ時、少し肩にて息をなさるゝやうに大きに急きの來た身ぶりをして、なに妾にも早逢ふまいとや、聞えたく、外によい太夫どのを見立てゝおいて、それに託惚して、今日妾が身のならぬをしつて、無理をいはんすものぢやの。此の上からは自ら妾が手に貰うてあふ。ようそんな自由なことをさしませうにやと、床柱に靠れかゝり足投げ出して尻をすゑて見せる時、遣手揚屋の花車などが、此の手を大方合點なれば、尤も太夫樣のが道理ながら、左樣では吉田屋が手前が悪うござります。兎角は私共がお詫び言申します。先づ今日は旦那にはお歸りなされて下さりませ。他のお客ならばこちの人が働きで、貰ひましてなりともあげませうすれども、田舎の堅いお侍さまで、明後日お國へお歸り遊ばす由にて、今明日はどうもならぬところは、神八幡太夫さまの御如才ではござりませぬ。先づ太夫樣には吉田屋へお歸りあそばしませと、中酌に入れば、いや詫び言は妾がしておきました。それを聞かずに彼の樣な無理を仰せらるゝからは、是非にか

太夫さまには御歸りなされませ。旦那とは私中立ち仕りまして、中々のがしはいたしませぬ。是非にお歸りなされませと、手を取つて意地張るを無理に引き立て、これ旦那さまちと笑ひ顏を見せられまして、安堵させて歸しまして下されませといふを機會にして、大概の男が、よい〳〵今日は堪忍いたす、明後日お目にかゝつて此のつめひらきは仕る。こりやたね同じことなら、先の首尾のよいやうに、早う連れてゆけと大口香いことに忘れて、むすをれがして女郎をいなすものでござる。時に歸りしなに男には物數いはずに、花車さまさらば、ぬし樣のこと頼みますというて出て、又小戻りして左吉樣妾がゐぬとて、あんまり主に酒進ぜて下さんすなと、言ひすてにしてゆきし跡にて、花車がのぼす一句あり。まうしあれお聞きなされませ、今の程胴慾なこと被仰つても、お前のことを頼むに、酒を澤山あげましてくれなのと、半分よりも大日愛にお心は殘つてござんす。鼻のさきに親父がゐられますけれど、太夫の中でも今の樣な愛想づかしをいはれては、眞に亭主の顏など二目と見たうもないものでござりますに、只どうした御縁やら、陰でもお前のことばかり仰せられて、一日二日お便りがなければ、禿をたづねに下されます。かう申せばいなものでござりますが、有樣が彼方がそれ程の全盛のお身でもなければ、お前程の福な旦那を取り離してはと、慾で被仰るとも存じませうが、皆お客方から閑日をお頼みなされて、お隙というては微塵ない御盛んのお身で、お前お一人にあのお心遣ひ

つになる顔して、遣手宿屋に萬の媒を付けさせて、ひとつの上手仕掛がなしと、昔のやうにいとしう思ひまいらせ、逢はねば命もないやうなのと、へつたりとしたことをいうて、今時の客に請け付けぬものぞかし。すぐ化けにしれた事をいうて、喜ばす仕掛を工夫せらるべし。退屈な望みさうな大臣には、かう深うおもひまする上は、互の心中のために、誓紙の五枚も十枚も、書いてやりさうなものなれども、それは皆の身を思うてあふ客衆の事、これさまと我がやうな粋同志の、勤めはなされて、懇ろ致す中に、初心らしい女郎の習ひの起請を書いてしんぜては、それ程おれを素い客ぢやと思やるか、誓紙などを取りあふやうな挨拶ではないわいのと、お氣に入るまいかと思うて書いてしんぜませぬか、何と思ひか見立ての通り、書かして取る氣さへも有るまいがなと、敵を粋にしたててそやされば、いかにも〳〵されは古狐の中でこそ、其方とおれが互に心中を見拔いて逢ふ中に、何の起請がいるものぞと、嗜みうれて書かしてはとらぬものなり。女郎の心事は逢ふ客の氣を見てとるが肝心なり」と、高開和尚の色道義の種を口仕掛の秘密を開いて、新造子忽ち手管の悟りをひらき、禿の苦患を脱れて、上品女郎の松の位に上り給ふは、有り難かりし出世とかや。

傾城禁短氣五之巻　終

# 傾城禁短氣六之卷目錄



傾城禁短氣六之卷目錄

第四　女郎買五重相傳一重紙子

付リ　仕掛の淵に深入りせぬ大臣の觀念

此段は一　よい程といふほどを知つて早く止むを情道の棒といへり。只色道は思ひ一遍と思ひ深く染まるを此の道の大棒法とするのみ。只信を起して此の卷々を味ひ見給ふべし。

しのし、皆に些ぬ中に粹にしてとらせんと、此の度思ひ立ち、島原近き水藥師といふ邊にて、太郎買ひの粹になりやう、太鼓持の諸大臣に氣に入りやうを敎へ、猶信心の輩にも、色道五重相傳あいたさうと存じ立ちて、卽ち諸方へ札を出し、もろ／＼のつかひ手共みまねかるゝに、扨も色の世の中とて、素人る者の繪日かけし、大臣仕立の衣裳を著る男共、有り難がりて聽聞のため諸方より集まり、頭を下げて聞きにくる。▲色里三通大人示して曰く　一それ世間の色の道に立ち入る浮世男ども、わたくしなる大金を遣ふものにあらず。内證はともあれ表付けのよい、親にかゝりの息子に似合ひたる太鼓がつきて、茶屋遊びある風呂や揚屋で、是れらしきところあるとて、おし出して十五女郎を買ひ初め、又格別ともいふ時、禿の木綿布子目にしみ、又は襟垢のつきたる衣裳も、後には氣の付く折節、天職の位たかなる道中を見て、又是れに心をうつし、次第に奢りつきて、人も名をしる太夫職に馴染みて、此の道にしやれるほど、揚屋の下々までも粹きところへ手の行くやうに、ぐわら／＼と嬉しがらせ、太夫を手に入れ自慢して、外の男をせきて、金銀の費えをかまはず、無理なる日替を仕出しても、一度もまくるといふことなく、それは／＼面白うなつて來て、宿へ歸れば鼻の先に、まざ／＼太夫が居姿ちらつき、身をつかまへたるやうに思はれて、人目も恥も親のことも妻子のことも、況して商賣のことなど忘れはてて通ふ段になつては、中々釋迦の意見でもとまらぬものなり、かなしいかな此の時、太夫

は申さぬ。さう心得て費えをせぬ樣にし給へ」と教へらるれば、聽衆の中より、▲取出の大臣すゝみ出でて曰く、「上人に申すべきことの候。只今の御教へにては、傾城買ふには費えをせずに、始末して遊べと仰せらるゝ事にや。此の段何とも作法の教へと存ぜず。始末しては片時もをかしからぬところ、費えといふ心からは女郎買ふはずなし。内に居て十露盤惱みて、味噌鹽の僉議するが增しなり。大臣といはるゝからは、萬事麗揚にかまへ、今日は何日ぢやと、いふ程になくては嬉しからず。ぬかれまい、たらされまいと、遠國の順禮が、京の町で買ひもりするやうな氣をもたで、萬にひすらこう立ち廻りて、傾城買うて何の益かあるべき。未だ上人にも皮のとれぬ所がござる。」と打笑へば、▲上人重ねて曰く、「こなたは初會二度目までも女郎にふられさうな人ぢや。それが世間に多い粹だてといふのでござる。費えといふは、金を遣ふなといふ示しではござらぬ。こなたの聞くやうな費えのことなれば、色里へによつと足ふんごむからが費えでござる。さうした譯ではおりない。無駄遣ひとて女郎も宿屋も、傍ばぬ金を捨て給ふなといふことなり。つきづきの末社、又は遣手揚屋の下々までにつもられて、阿房にしてそやし立てられて取らるゝは腹の立つことぞかし。よいことは粹にしてとられて、物入ばかり此方に擔はぬ費えといふ義なり。斯くいはば此方のやうな粹だては、今時の色遊びうつかりとはならず。遣手が笑ひかゝれば、扨こそ花をしてやらうとの會釋と心得、今日は太夫に急に逢ひたいことありてつい

出て來て、紙入さへおいて來て、さりとは不自由千萬と、銀持ち合はさぬうつりを知らせ、太鼓末社が近付けば、汗はかけども羽織をぬぎおかず。宿の男が山上參りいたすと、いひも果てぬにさりとは止めにせよ、鐘かけの飛岩、取りつき石の大行、勿體なやなうとおどせど、浴衣菅笠も此の通りと見せければ、是非なくもはやたまられぬところと、どうで銀でとゞしてからが、錢買うて持つてあらうによつて、其方が勝手のよいやうに、亭主錢三百取り替へて遣つてたもれと、世智賢うなり過ぎて、遊びが次第に小さくなり、末社には疎み、遣手には憎みて氣のつきるせんさく。本粋といふは、爲べきことを、ぐわつたりと目にたつ程しておいて、小まかしきことには一向目もやらぬものでなし」只惡賢いいきかたは太郎の好かぬもの、何處でもふらるゝ下地と、心得たがようござる」とあれば、▲前方な大臣問うて曰く、「傾城のふると申すは不器量の男をふることにや、但し我等式のやうな、福のない大臣をふることにや、此の樣子承りたし。」といへば、▲上人答へて曰く、「總じての男ふらるゝは、初對面からしこなし顏にてふらるゝなり。京も大坂も變ることなし。はじめての◎には、彼方次第に構いはぬがよし。內證は人の知らぬことなり。譯でなりとも拜うてなりとも、分を立てねば心惡いものなれば、惚といはれてふられうより、月と思はれてふられぬ方が、差し當つての德ぞかし。世に我が物つかひながら、女郎狂ひほど氣骨の折るゝものはなし。生まれつきたる風俗を俄につくり直しても、鼻缺はなほ

らず、好き風の羽織も着たし、わつさりと物を仕替へたし、如何にはやればとて、明けても暮れても似せ八丈の羽織見せかけて、女郎買ひとはいはれじ。三枚袷着る程になくては、奥ぶかには見えず。いかに女郎の氣になればとて、末社もやめにして、其の物入りを太夫に内證でやれば、上を下へとまはる事氣味よしと、只ひとりのきして、さしに囁すこそ面白けれと、卸が駕籠にも乗らず、沙汰なしに行くなど、神ぞかうしたことでは、曾てなかしからぬ事ぞかし。大臣と待遇さるゝからは、一座ものつしりと、つぎ〳〵の末社に面白う酒のませ、なり〳〵袖に焼きすて、〇〇も味やることぞ分知りなれ。女郎に位をつまれ、廻すはずの身がまはさるゝやうに、あちら、こちらになつて來て、大臣の詮はたたず。必ずこんな男には横もきらせぬものぞ。つい聞いた時は、心の暖しい樣なれども、横きる程又此の道の中の一興はなし。されば人のつとある日、其の男の來ぬうち、此方の物にして遊ぶなど恐らく長者でも嫌は有るまじ。其の心を昔から知つて今に變らず客引き込みて、女郎の道具おとしは是れなり。かつくまいと思ふ大物日も、つい請け合ふ氣になつて來て、千度の文より一度の横が能くきくとは、如何なる發明の女郎萬客の心を見すかし、粋月共に末代までも、嫌といはれぬ仕掛をしておき、年中の紋日身あがりなしに、それ〴〵にしてが絶えず勤めて通りぬ。

## 第二　女郎買ひ大善根の施主の企て

鹿戀女郎より又局女郎は、一口に○○○○○では足り苦し。太夫天神にあはるゝ大臣は、然のみ○ばかりを心がくる人は稀なり。遊びを第一になさるゝゆゑなり。鹿戀女郎を離すくらゐの男は、それ一種でわせれば、達者わざ格別ぞかし。局女郎北向きは、一日○○○○○か知れず、是れはおつもりの外と申さば、誠に是れは久德がいへるとほり、假初のやうなことながら、是れにて年中に五貫目の差違あり。倂し思ひ立ちぬる上はいよ〳〵永代○○の寄進すべし。此の功德によつて、又の世に傾城の好く男に生まれて間夫となり、女郎に金出さして手も濡らさずに樂しむ事もあるべし。諸山の靈地に常燈を點し、知れぬ道に印の石を立て、橋なき川に橋を架けるも、心ざしは同じ事、まだ此の方が深き慈悲となりぬべし。大形に聞えて、心の廣き大臣のつもりにしては、又心安き事ぞかし。譬へば遊ぶ銀五百貫目是れを慥かなる兩替へ、月八にして預け、其の利銀にてなることと、前代未聞きゝもおよばぬ大善根を思召したたれぬれば、勤めする女共是れを聞いて、萬の世話を此の大臣に內證から賴み申し上げ、身あがりの苦しみ、呉服屋のきつしくなる氣の毒とも、大概引き請けて世話にしてやられければ、色里にては知るも知らぬも、此の大臣を厄介長者と崇め申しぬ。明暮十露盤枕にして儲け溜める事を第一に心懸ける、手代上りの旦那が聞いては、阿呆のやうにいふべけれど、色柄離りて此の道に身を委ねる男共の仲間にては、此の氣でこそ大臣なれ。儲け溜めるより人に物とらす程心の

を聞いてなかしさを胸におさめ、名題の太夫膝をまかして枕にさせ、禿に腰をうたせ、宿の嬶に酒つかまつせて、寝ながらのみて様々の我儘申し、若い女郎を呼びつけて、革足袋をぬがせといふ大臣、如何に金の威光にて、自由に太夫をするといふとも、これ等を粋とはいはれまじ。其の女郎勤めとて、いとしい顔はいたされうが、根をおしてきいたら、さだめて此の客に逢ふことは嫌なるべし。粋といふは金銀を遣うた遣はぬには因るまじ。金持たぬ男にも女郎の思ひつく證據は、我が物遣うての間夫狂ひ、大分つかふ爲になる客よりは、格別に愛しがらるゝときけば、金つかふ大臣よりは遣はずにかはゆがられて、眞の情にあづかる錢なしの間夫が粋なるべし。如何樣自由過ぎたより、盜み會ひの女郎程世に面白きものはあらじ。然る時は粋といふは金蒔く許りをいふにはあらず。是れ許りは上人の御心得違ひと存ずること、不審をうてば、▲一通聞いて答へて曰く「愚なるかな大臣、盜み會ひの女郎を面白からうよりは、何とぞ福な大臣になり代つて、女郎が人に盜まれて遊ぶ身になり給へ。譬へば銀借りてすまさぬ心に、貸し損してもいたさぬ程の違ひあり。盜みて中戸のくるしみより、うつけになつて○とらせて、燈火で顔見て、○○○○○○喉が渇けば堪忍せず、禿に運ばせて茶を飲む自由こそ、面白きともいふべけれ。茶人の根から叶はずぶしに、侘數寄とて樂しむよりは、自由のなる身代にて、足らはぬ體をして侘びたる茶事こそ、樂しみも深かるべし。中京の烏徳丸といふ大臣、過ぎしかなる

寄せ附けねば、太夫が不義する志か、心ざしでないかがしれず。かまへて此の事人にいふなと、塵揚ぐる心の廣さ、天晴大臣といはるゝほどの器量格別と武兵衛も我を折り、宇内が見舞に來る時分には、氣をつけて窺ひしに、太夫と宇内何時とても、敷居を隔てて慇懃なる挨拶、中々旦那の御出での時との挨拶とは違いことなり。或時太夫、庭の草花をながめに、馬下駄はいて出でけるに、蛇の胴中を踏みて、踏みけるゆゑ、苦しさに蛇足に纏ひつきて、しめけること甚しく、つき／＼の腰元下婢驚きおれども、女の身として恐ろしがりて、あれ／＼と聲計り立てて近付かず。お物師のぬひが、是れ宇内どの男で居てからぬかつた、取つてしんぜて下されといふを、太夫しめつけられて苦しき中に、いやいや宇内どの、御出で御無用、はやう旦那殿方へ申しやれと、宇内を傍近くよせずして、大臣の御出でを待ち兼る段を武兵衛見屆け、鳥徳殿に申せば、さも有るべしと座敷に行きて、何としたることとの詞を聞いて、旦那さまか、宇内どのに仰せ付けられて此の蛇取らせて下されといふ。是れは今までそれを取らせぬこそ不敵なれ。それ宇内取れとある。畏まつて頓て庭におりて件の蛇の口に貫のやにをさしこめば、苦しみて木のごとくなつて、巻いたる足をひとりと離れ死にければ、太夫夢のさめたる心地にて座敷へあがりて、何事もない祝ひに、銚子もてこいと、おちついたることども。何とて最前より宇内には取らせざりしぞと、鳥徳丸問はれしに、おぬしのござらぬに、假令一命を蛇にとら

るればとて、男の手して妾が身を、いらはせまする事不遠慮と存じ、恐ろしながら御出でまで待ちしとの、此の行儀なる心いきを聞いて、さうなうしてこそ、我等目鏡に違はぬと、殊の外の褒美なりしが、大抵の人ならば、屋敷守の内證を聞いては、我來ぬうちに男の出入無用ともいふべきところを、太夫所存を見ぬきせいたうせられて、行儀を嗜むは本意にあらず、行儀といふは、平生の仕馴落なるうちにある事といはれしは、尤もなる事ぞかし。間夫ならうとままよ、それは女郎の心入次第、請け出して我が物にせず、郭の中にゐる間は、内證はともあれこととあらうが、我が身にあひたる女郎ならば、面白う遊びて、見えぬ所までかぎ出しての吟味は、本性のせぬこと、盗みてあふ人より、ぬすまれて氣兼せずに遊ぶが、面白さはまさるべし。何れも隨分ぬけぬけとしてのけるも、我が思ふ樣にして、面白で遊ぶやうに仕給ふべし。是れが命の本の洗濯ぞ」

## 第三　不案を打つたる太鼓の音響

付り　無間の酒株をめて悔しき約束の銀

▲色川一遍上人門。「さて今日の色談は、上下京の素人太鼓持まゐりあひまして、大臣へ取り入らうや う、一座の目かり無心のいひがゝり、地の客と田舍大臣へとり、親方たちの戦へも達せし間の世との望みによつて、先づ只今說きまするは、太鼓一通りの要を申すでござる。指の上にならひおけて、旦那

是れ／＼しほらしき手つきを仕出したは、何れも聞き及んでござらう。花垣左吉と申す至りの末社が、都の遊山所で大分あてした所作でござつた。此の男もそのおかしは、肩で風をきつた大臣でござつた。これによつて座配萬事が、しつとりとしてざわつかず、疊ざはりの格別なもので、歴々の御意に入つて、今に其の名が高うござる。總じて今どきの太鼓持は、淨瑠璃小歌のはした物をおぼえ、役者の物眞似し、少し調子を元手にいたして、御機嫌とりにまゐるゆゑ、第一一座やかましう、大臣より先へ酒にのまれ、旦那の羽織を足で踏み出し、お歸りさへ知らずに、不仕付なる身持にて、太鼓をもまるゝやうにござる。其の上智慧自慢して、旦那の指圖をもどき、賢だてを仕り、御供申して參るにも、先をこして、天晴の御奉公ぶりの顔をして、花車が出やうがおそいの、銚子がぬるいのと、二瀨料理人を叱りまはし、隣座敷の淨瑠璃小歌を笑ひ、供先で旦那にひけをつけぬ氣で、稍もすれば肘捲りして、喧嘩眼になつて怒りを出し、大臣の逢はるゝ女郎の癖を見出し、同じ太鼓と一座にて鞘す、又は女郎に思ひのまゝ、目元などして、人知れぬ情に預る下心、下されものが遲いと、しらん／＼しい壁訴訟、貰ふとけうとい顏ぶり、皆是れ今の細工末社の風俗でござるが、是等は至りの末社共の耻に致して、中々忌な事でござれども、大臣が本大臣でござらぬゆゑに、太鼓といふものは、皆こんなものぢや、と思はるゝによつて、それ／＼に口過ぎしてとほるぞかし。上々至りの末社といふ者の心いきを、聞い

今末社で口をすぎようと思ふからは、さうしたことでは間があはず、未だこなれぬところあれば、我等師匠の虚悦と云ふ、至つて末社の方へ連れゆき、此の所作の一通りを傳授さすべしと、すぐに其の夜虚悦方へ伴ひて、向後弟子になされて御指南頼み入るといへば、虚悦樣子を聞いて、先づ以て人柄よく、立振舞も賤しからず、何ぞ藝が有るかと問へば、淨瑠璃端歌少し仕ると申す。酒はと問へば、藏がございませぬといふ。それは氣のどく、太鼓持で身をすぎようと思はれなば、禁酒と合點せらるべし。一ツなるふり見すると、あひをいたせ、おすけを仕れと仰せ付けられ、いやはならず、度々杯も重なりて、お客より前方にかたづけられて、一度で飽かるゝものぞと、又格別なる敎へかたと、市兵衛も心の中に感じてゐれば、虚悦かさねて、聞けば其方は古道具を商ふ人とや、幸ひの事、是れ此の赤繪の皿を今朝程藪の下で買うて來たが、拙者心には恐らく掘り出しをしたかと存ずる。目利きして給はれと、棚より皿を出して見するに、市兵衛取つてひねくり廻し、お求めなされた値打をさして見せませうかと云ふ。如何にも何程に買ふと思はるゝぞ。されば此方のお買ひなされうなら、高々で銀壹兩、五匁まではござるまい、六匁にめしたらば、大きなかづき物といふ。其のとき虚悦打ち笑ひ、その樣體では旦那衆のお氣にはいりかねられう、それを聞かう許りに此の皿を出して見せたり。成程目利きの通り四匁五分にもとめしが、四匁五六分と見られたら、是れは銀貳兩拾匁にめしました・

かと、心の中で四五匁も、錢をきせて、そだてる氣にあらでは人の心はとられぬものなり。いかな萬貫目持つた長者でも、掘り出したといはれては、滿足せらるゝはしれたことなり。四匁する物を、四匁するといふうては、永代人の氣にはいられず。兎角此の職になるからは、賢だてを止めて我より鈍き人に、いかい阿呆者おやと譏らるゝでなければ、御機嫌取にはなられぬものぞ。無念なの口惜しいのといふ氣がさゝば、太鼓持に貧乏神のあやかしがついたと、觀念すべしといはれしは、有の儘き教へならずや。すべて太鼓持の役目は、色里の者共大臣を無性にのぼしてそゝりあげ、大分にはめこうな時、心をつけて無益の金を遣はさぬ樣にするが肝心ぞ。然るに今時の素人太鼓持は、一つになつて育てあげ、つい大臣を捺ねつぶしてのけることと、大きなる僻事なり。其の上男つきな飾り、色たる身に思ひつかるゝ仕掛し、是れ又太鼓の本意ならず。譬へば大臣がはつたる羽織をあざうと、氣をつけて褒むべからず。大臣の身にしていかう聞きがるしいものぞかし。旦那女郎と口舌なされしのかせらるゝを、御意見申して、中直りをさせますがよし。但しそれも女郎の方無理ならば、引舟遣手にましこみて、詫言をいたさすべし。女郎未だお出でなく、お座敷しめつて見ゆる時、もんさくつくして一座の興をなして、賑やかにすべしと、段々の魂膽を陳べられければ、▲下京の素人太鼓申すは、「有がたき御教化信服いたし候。殊に氣の毒は、總じての女郎買は一座の興に、太鼓の者共までに、塵慮

のひとつも買うて下さることと、何とも思しめさぬやうなれども、此の銀とても拂ひは同じことなれば、此の十八匁を願はくは一角生で給はるが拙者共が勝手なり、此の時に至つて此の心のつくやうに大臣への言ひ廻しを、とてものことに教へてたべ。」と願へば、◎上人答へ曰く、「各に限らず、前々よりも不合點なる太鼓業か、さう申さるゝことでござる。其の日鹿戀を我が爲に買うて貰ふと合點せらるゝゆゑに、正味で欲しがらるゝ慾が氣をさすことなり。さら〳〵太鼓持の爲にかうてやらるゝにあらず。太夫引船の外には、女といふものゝ座敷になく、皆生男の寄り合ひなれば、一座に色を竝べて、賑やかにして遊ばうとおぼしめして、大臣のお慰みのため、それ〴〵に天神鹿戀を呼うで下さるゝことなれば、面々の慰みと思はるゝは大きな違ひなり。太鼓なしに大臣一人行かれても、女郎はかはるゝなれど、五人三人の替えぬ顏なす、其方達の樣な太鼓を連れらるゝもお慰み、又此の上に五人三人女郎を呼ばるゝもおなぐさみ、然れども相手なしには、女郎も來てから一座がをかしからず、一人づゝ相手取りにあてがはるゝと心得らるれば、生で一角といふ慾はおこらぬことぞかし。本大臣の大腹中といふものは、端太鼓の目から見ては、氣のへるやうなこと多し。女郎を揚げておいてゆかず、芝居の棧敷をからしておきて、道寄の腰かけ酒が面白いとて、三番續きの果てるも構はず、賑かに飲んでゐらるゝなど、此の要る銀が何と欲しいとは思はれぬか。是れも皆達に女郎呼うでやらるゝも、費えは同じこ

は買ふ人有て、四貫目にはなることといふ。それこそ汝が望み次第、聞き合はせて參り調へ次第申して參るべし。其の時銀子四貫目とらすべきとの御意有り難く、氣をはつて段々御馳走申しければ、御機嫌よくお歸り。其の車に乘合はせし、獅子頭の亂齋といふ太鼓の功者が呟きしは、さりとは素人大臣かな、其の買ふといふことを手ぬるし。かはりやすきは當世の大臣心、それは／＼あんなところの取りやうは、格子に古い太鼓持の、小ぎりあな利發見せたしと、獨り無常を觀じて歸りけるが、此の大臣思ひの外仕通しせられて、長崎へ買物をして下されぬゆゑ、國元の親父不審して、俄に詮議にのぼられ、惡所狂ひの段々を聞いて、即座に勘當せられ、身代は底ぬけ大臣となつて、何處ともなく迷はて行かれぬ。親父京の問屋に恨みをいひ、腹立して長崎へ歸られける。哀れや勘吉が酒錬、飲まぬさきから醉ひはさめてしまひぬ。兎に角に約束して物買ふも、手にとらねば當てにならず、延びるとてせはしうも申しがたし。紙花下されなば宿へ斷り申して、壹匁引いて取り替へてもらふが手廻しなるべし。冬室と大臣の心は、時の間にも變れば、日和を見て手延びなる穿鑿は、必ず／＼無用なり。抑色道信心の輩には、五重相傳を仕らう。〇〇〇の内陣へ入らせられい。南無阿彌々々々々。

## 第四　女郎買五重相傳一重紙子

付り　仕掛の淵に深入りせぬ大臣の觀念

さらりとしたがよし。いふことの少し殘りたるは、明日の慰みの種にもなると、何としても惜しまるゝ程にして、歸る心いきの男。

かうした五ツの個條の中に、いらざる男は本大臣とはいひがたし。さるによつて此の五重相傳をせざる大臣は、銀あつても抛き捨てながら、女郎も思ひつかず、宿やの下々も、買うてもようはいはず、必ず樣のいき方を惡うのみこんだる大臣、今洒落分になつて、太夫にあへる身をもち、末社もつれず、時の風俗とて、木綿の仕立着物で出かけぬる人あり。此の氣からは神ぞ傾城かはるゝに無分別なり。女郎狂ひといふは、人も見返る程の華麗なる衣裳を飾り、色つくることこそ其の甲斐あれ。同じ米を噛みすに喰ふやうに思ひ、賣物ながら女郎も嫌がる事いふまでもなし。女郎の着物に襟をかけるさへ、能き目からは餘程氣詰りなり。髮つき許り大臣にて、日野の洗濯着物、褌のかきかへもなき人、行く所におかず、表向五重相傳の外、第一の相傳は是れなり。通ひ出して馴染のかゝる程、遊び大形になりたがつて、如何な賢き男も跡先なしに遣ひはたして、我等がやうに紙子一重になるは間もない事なり。いふかいはぬか、今時の大臣何の仔細もなく、銀に氣骨を折らず、心よく遣はるゝ大臣は、廣い都に物が五人と有るまじ。後には火になることも構はず、恐ろしき口入に書付を出し、闕の半分の借り銀、或は手をよく呉服物を買ひ懸り、是れを賣り損して揚屋の付け屆けをしたり、又は切の延び

り大分物の入ることなり。總じてすこしの張合にて、せんしやう一遍にて請出し、我が宿のお内儀さまにすること、是れ又大いなる無分別なり。女郎はあの里にてこそ慰みにもなれ、請けては常の女に少し取りなりの好いぶん。世にある人の請けるといふは、下屋敷に入れ置き、折節の通ひ女にして、飽きの來た時分つけて家督のある所へ、緣につけてしまふべし。是れも心安くとて必ず手代にとらせて、朔日二十八日其の外もお見舞ひ申し、絕えずお出入して、顏を見する所へは、やるべからず。人の花になつては、しのばしうなるは世の常の人心、必ず後にはひよんなことが出來て、主從の仲惡しくなり、ぱつと世上に名のたつものなり。よく〳〵分別して、濃うならぬ中に見事なことをして、止めるが至極の要なり。此の道の元祖の敎へなれども、必ず金銀手にある時は、此の里の諸分前方にて氣のつかぬ事多し。萬事人の指圖を請けず、賢くなる時は内證不埒にて心許り至つて、一つも物にならず。只此の二つをよく〳〵工夫して、永う樂しむやうに取廻しせらるべし。江戶は張あつて、強くして情ふかし。難波は禿だちの太夫許りにもあらず、同じ大坂にて心安く御意を得たお方も、何うした果にてか、松の位に至り給ひて、諸分のはしたなきせぬな女郎もあれば、よいとも惡しいとも其の女郎にあうて見て、譯知らぬ中は、なべて此の風と定めがたし。たゞ遊女は物柔かに、客に身をまかせ、氣に入る物と覺えてさもしからず。都の風俗に何れかますべし。一切の本地も爰なれば、

此の道の學問の島原にて、十年許りに諸分覺え給へ。十萬億はたゞ黄金なり。爰に古今女郎の開山吉野の名君上人の、一枚起請といふものあり。此の度おの〳〵へ結縁に拜ませ申す。」と、蒔繪の掛物箱より一軸を出し、掛けられける。

女郎一枚起請

唐土我が朝に、諸々の女郎達の沙汰し申さるゝ、懇の念にもあらず。又古手太鼓に習ひて、文の心を學してやる文にもあらず。たゞ大臣いきあんためには、何心もなく打ちとけて、疑ひなく懇するごと思ひとりて、ありのまゝを申すより外、別の方便はなし。但しさま〴〵やり手と申す事の候は、皆けりやうにして僞りなく、懇する道と思ふ中に籠り候なり。此の外奥深き手管を存ぜば、大臣の憐みにはづれ、物日にもれ候べし。懇に思はれん人は、傾城一座の客たりといふとも、一文扶持に新ざうの禿あがりと同じくして、智恵の振舞をせずして、只一向に懇すべし。

うかれ坊主が心企て、是れにすぐべからず。

されば意氣がよいの、わるいの、愛しいの、憎いのと、さま〴〵に品はかはれど、つゞまるところは、〇〇〇〇一つの樂しみと、觀念の牀に寢話の法問をなし、上人自ら今までのばされし鼻毛をほつすにして、終には無師自悟の石佛となつて、郭の高塀の外にもたれかゝつて、毎年七月二十四日に

は、禿共が手にかゝつて地藏祭に花をやりぬ。誠に悟れば粹、迷へば月、八萬寶藏の金を以て此の道をあきらむべし。自ら無量の手管をはかり見る、分知りとはひとりなれり。只夢の浮世に無念無想にして、遊ぶところが極樂々々。

傾城禁短氣六之卷　大尾

# 鎌倉諸藝袖日記

安藤自笑
江島其磧

# 序

往昔の淨瑠璃に、鎌倉袖日記とかやおもひ出でて、諸藝の風骨を、及ばぬ筆に書き分けて、いつゝの巻の笑ひぐさとはなしぬ。おろかに文拙きは、これも亦作者の風骨と見許したまへかし。恐惶謹言。

寛保三つの春亥正月二日

作者

# 鎌倉諸藝袖日記卷之一目錄

第一　座頭に成つた三味線で引事過ぎた儒學

　日朝鮮の御まへには諸藝の競

　掛合の世間咄に長言の退屈欠

　千里あなたの古語をくりじめの二上り

第二　腐儒の智恵自慢校合の違うた身代

　唐音での返答につまる禪僧のくわらかけ

　出して見りにくい色道の悟り

　粹になりの樣を指南車の積りをしられぬ唐物商ひ

第三　和尚の相撲ずきは四十八願の手取

　行司の團には依怙のないうき足

　水鳥のやうな身の上追ひ立てられてから

　こりはてぬ獨相撲がつい一人すまふ

# 鎌倉 諸藝袖日記 巻之一

## 一　座頭は杖より三味線を引事過ぎた儒學

偉いなるかな武徳、凶徒西海に亡びて後、天下の威鎌倉に一統して、靡かぬ草木もなかりければ、御大將源二位賴朝卿、諸大名をめされ、「夫れ治まれる時には、文藝を以て俊鍵とし、亂れる時には、武術を以て功樞とせり。今四海波靜かなるに當りて、鎌倉中の谷々に於て、一藝に名ある輩を書き記し指し上げよ」と仰せ出されければ、因幡介大江廣元、「謹んで仰せかしこまり奉りて候。諸藝の妙手、あまた御座候といへども、藝を業とする者は、やゝもすれば一癖ある者にて候。ひとつは御慰みの爲、一座の面々聞き及ばれし中にも、一興あるべき物がたりもあらば、申し上げられ然るべし」と申されければ、土肥の次郎實衡すゝみ出て、「是れは御尤もなる趣向、先づ某が承りたる噺を申し上ぐべし」と、思ひ出して申されしは、「此のまへ宇都宮の彌三郎[illegible]、工藤一萬左衛門尉、和田新左衛門尉など十七八人、攝者ともに招かれ、終日の饗應美つくしたるうへ、暮れ[illegible]たれば、亭主實平、めでたき出あひ、本膳も相すみたれば、懇友のまじはりなれば、今宵は打混じて、底

意なきしるしに、大磯化粧坂へ申しつかはし、白拍子少々召しよせ置きたり、御杯の酌とらせ申さんとの事と、斯樣の事も武門のつきあひはかたくるしく、いづれも八無禮になりぬやうに、ことわりての上に呼び出せば、手越の龜菊、大磯の虎を初めとして、名題の遊君あまた、撫子あやめ花か物いふ座敷のさはい、きいたれさへたあいきやう有りてぞさゝめきける。中にも黄瀬河の龜鶴といへる、十八九なる當世女、舞の上手隱れなしとて、客がたより一さし所望仕りければ、何ぞやはらかなる歌事をまひ候はんといふに、工藤は鼓の上手、下河邊莊司は横笛の名人なれども、三味線の彈人に事を香久山勾當、呼んでこいとはしらず、使は大名の勢ひ、間もなく勾當參上して、いづれも御目見と、行儀よろしくなさるゝに從はず、座頭には實面なる取りなり、元來此の座頭は、谷崎匿頷といへる偏屈儒者の子にて、七歳の時疱瘡にて盲となりたれども、幼少より儒書の講釋數年聞きたれ、およそ儒門のいきかた覺えながら、親のあはれみにて後の渡世とて、琴三味線を教へさせ置きける故、勾當にまではなりたれども、三綱領八條目の教へ心にわすれず。もと固必の質なれども、うそつかず大酒せぬを取得に、誰々へも招かれけるが、上座より香具山一曲との所望、三味線ついで調子あはする内に、宇都宮はや唄ひかけて、きぬぎぬの曙の睦言いまさらにと、はり上げてやれば、勾當撥をやめて、「おそれながら彌三郎樣は、申しもかるからぬ御身、何ぞやその小歌は、男と女が寢てゐての、わかれ樣

れかし、せめて平家を語らんと思へども、句切々々が喉につまる樣ななまり言葉、いかに座頭になり果てたればとて、鼾かいてうなるやうな事を、大事さうに語りませうやうも御座りませぬ。此のころ承れば、わしはお前に引きわかれ、片時いきて居られうかなどと申す、淨瑠璃もござりますれど、鄭聲の雅樂を亂る事をにくむと、孔子も仰せおかれたれば、口のはに懸くるも氣の毒に存ずれども、只今三味線にて黄鐘の三の端を、彈いておなぐさめ申しませうことと、騷ぎ立ちたる中へ、一緒めしめに愛を大事と彈きければ、一座皆々、是れは當麻のねり供養に參つた樣なと、後生心になりて來て、ふところより數珠取り出してつまぐるもあれば、亭主彌三郎氣の毒がり、さらばわつさりと一さし舞ひませう。と立ち上り、幸はからくの橋柱、立ち出でて峯の雲。とうたへば、一座同音に地をつけて舞ひ納めし時、勾當しかみ顏にて、此の謠も大悲應護のうす櫻と申す、文句がいやでござりまする。あつたら櫻を、虛無寂滅の異端へおとして、佛くさいつくり樣、第一地獄極樂はない事でござれば、末々の人でさへ小學問あればとりあへぬ事を、申しても御身から不相應の文句にて、御舞ひなさるゝは、外聞もいかゞと存じ奉りまする。總じて謠と申す物は、おとなしき人の口にかけて、仔細らしう謠ひませう物ではござりませぬ。高砂の類は松のばけ物でござりまする。兼平や箙は、此のなさまれる時に戰鬪なして何になる事とおぼしめすぞ。賴政が罷り出でられて、しかつべらしう自身の高名

を、語らるゝ事かと聞いてゐれば、門頭の又太郎が手柄ばなしを、我が事かなんぞの樣にいきほひ猛にかたり、ついまけて仕廻うた所が、あはれなりけりとの事、死んでも敵は敵ならずや。其のかたきの軍勢から手がらしたゆゑ、味方が負けたの物語は、自身の恥をならべる樣な物と存じまする。又山姥と申す謠は、やすむ重荷に肩をかしなどいうて、謠でには、山姥が山めぐりするぞ苦しきと申しまするが、夫れ程苦しくば、人の頼みもせぬに肩をかさいでも大事ない事。その上山姥は生所も知れず、宿もなしとの事なれば、そのまねを各樣がなさるゝは、以てのほか不吉な事と存じまする。然ればばけ物か幽靈か、子を失うたきちがひか、又は道理もつまぬ僧の謠か、木曾殿の跡をとぶらひに出でて、兼平が事許り聞いて夜明けて仕舞うたは、たはけのまねか、隨分傳授事と申すが、陰氣深いあらうがあつて、鐵輪は供養に参るとて、石壇でおだゝだ踏む所を、いきづゑまはつて鼓打つを、よいや〳〵と、褒むるも舞ふもかたはらいたし。猩々といふけだものが、酒にくらひ醉うてひようつくまねを、みだれと名づけて、足もとはよろ〳〵と、弱りはてたる姥のゆあみ、さすると思へば泉はそゝまい、つきせぬ宿こそ久しけれとは、さりとてはいやな事でござりまする。禮記に猩々よく言へども、禽獸をはなれずと見えたるさへあるに、渇しても盜泉の水を飲まずと申すとおなじ、猩々に酒をきらうて飲むを、よい事と覺えたるは、にが〳〵しき業かな。其の上が石橋とやらん申して獅子の狂ふ體、

高で昔から日本にない物なれば、どの樣にほだえても、あれが獅子のくろふ體かと、鼻毛ぬかずにおく衆が、棧敷から感じいりたるかけ聲、所謂獅子に似た似ぬは、褒められまじければ、舞臺であがくあがき樣の、よいのを褒むるばかりなるべし。舜を學べば即ち舜と申し候間、かやうの眞似はふつふつ御やめ遊ばされ然るべし」と、少し膝を直して、柴崎がゝりにて撥をしやに構へて申しければ、嘉三郎大いに立腹して、「うぬ人のなぐさめにこそ呼びたれ、其の上うぬが藝をせぬのみならず、其の身にもかまはぬ諸の議論一座へ慮外、それ程小歌淨瑠璃が心にかなはずば、人の座敷へ招くとも來ぬがよい。御客がたへの無禮、此の過怠として鎌倉中をかまふ」と、座敷をほい立てければ、まだへらず口にて、「三度いさめて聽かざれば去る」と、はふはふ玄關へはひ出で、宿へは歸りたれども、鎌倉中に住む事かなはず。まことに座頭の杖をうしなうたるに、如くの字のいらぬ身のはて、食ふ事のならぬ樣になつて、一端豁然と合點がゆき、小歌のだんか、池のどんがあならば、すほんほはんほへを唄ひて、在々の門に立ちて、「過つて改めたる日くらに、一錢下さりませい」と申し歩きたる由、承り候」と申し上げられける。

二　腐儒の智慧自慢破合の違うた身代

次に比企判官まかり出でて、「いかにも土肥殿申さるゝ通りに、儒學と申す物は、五倫をわかちて、

人の人たる道を教へたる物なれば、上もないよき教へにて、めい／＼の家業を第一にして、其の家業のたつが道と、心得候へばよけれども、悪しくすれば人参が人を殺し、佛たのんで地獄へ墮つるやうな事あるべし。此の境をさへ知れば、聖人の教へ身にしみ／＼とためになるべき所に、近き頃鎌倉桐が谷邊に、風閑といへる儒者の息子、閑才といへる者ありて、學問をこのみ、次第に長じて莊子に耽り、莊子もまだ前めなる見識ありとて、老子經に心を委ねて、道の道とすべきは常の道にあらずと、めつたに高上なる事計りいうて、商賣からとて、何見ようと任なる唐本に博く渉りて、詩文は盛唐の風なければと、今の文をいやしめ、日本古來は白樂天を用ゐて手本とせしゆゑ、詩文が俗なぞと、世上の學文を三文もせぬ樣に見くだし、少しにても我にまさる學者あればいみ嫌ひて、顏向がちなる文に作りて、それるを學問と心得、自分には韓退之柳子厚より上ゆく心の高ぶりは、親ゆづりの數萬卷の書を貯へ、隙に任せ讀みたればとて、學力自慢に高くなるべき鼻より、其の鼻の下の長き故とぞ知られける。ある時四方髪の侍、年のころ六十許りと見えて、「ちと御尋ね申したき事あり。」といひ入れけるに、折節弟子共は讀書に取りこみ、いそがしきに任せ、亭主閑才罷り出で、「お尋ねは何でござりまする。」といへば、「論語の片かな抄は、役に立つ書でござりますか。」といひければ、「扨々御人體とも存ぜぬ。日本の人が假名書に致したる物が、何の益に立ちませうぞ。點のある本さへ人品のそこ

ねる物でござるに、左樣な文盲な書物を、とりなやむ拙者とおぼしめすか。」と、眼玉ひつくりかへして叱り付くれば、其のはたに日頃したしき醫者一人、のり物立てさせて、假名つきの衆方規矩か、醫方口訣を借らんと、待たせてゐられけるが、此の言葉にびつくりして、物をも言はずかへれば、四方髮の侍も手もち惡しく、大器なくもぢ／＼すれば、「ア、笑止や。形は君子にして心は小人なるかな、唐本を讀むには直合、倒合、儞合、奇合とて四つの手びきあり。是れをさへ合點すれば、たとひ新渡の讀みにくい物でも、よめぬといふ事なし。御所望ならば敎へて進ぜう。」といへば、「有樣は手前も讀書指南いたし、少々づゝは講釋いたして暮すものでござるが、恥かしながら左樣の事は存じませぬ。向後は御弟子になされて下され。」といふ所へ、禪僧一人侍者二三人つれて、「聞き及んだ講釋師は是れおや、始まつたらば聞きたい。」と腰をかくれば、「異端を學ぶ浮屠に聞かす講習ではない。一切經というて冊數の多き經、うその數もおほく、うそをあきなふ此の閑才ではおじやらぬ。」と叱り付くれば、出家もむつとして、「さう言ふそなたが宗旨は何宗ぞ。」と問はれて、返答にこまり、宗旨がないとは言はれず、唐音にて、「ヒンカンテン。ヒヤアァンツァン。」といひければ、此の禪僧もとより不學にて唐音にうとく、知らぬとはいはれず、合點いかぬながら御尤も千萬というてぞ歸りける。くだんの四方髮も是れをしほにて、「其のうち弟子入りいたしませう。」と立ち歸る。あとにて閑才弟子共にむかひ、

ところと言ふを、とてもの事にお物ずきをと、よつてこてすゝめ立てられ、家都が三味線にのせられ、曙といふ太夫にさだめて、愛は實の愛にあらずとあれば、一通りの愛は理外なりと、ふとかはゆがり初めて、いふ程な事が皆道にかなふやうにおぼえ、傾城に實梨子地にふたつ紋附けた香合こしらへておいて、太夫がくれた時の嬉しさ。鎌倉にゐる母者人や女共に誠をつくすは常の道なり。道の道とすべきは、常の道にあらずとは愛の事なりと、喰ひしばつて見るほど裏に入りたるたのしみ、世の人の心惑はすは外の色にあらざればなりと、一向高ぐゝりして、本より物にかゝはらぬを道と心得たる教へよい、人のそしり世の嘲りをかへりみばこそ、通ひける程に行きける程に、鎌倉より取り寄する金の緒もきれて、呼びにくれども故郷に歸らず。鎌倉の弟子共は師命をまもり、出家に物かさねば、おのづからさびしく、高弟に閑者が女房と密通して、金千兩ひつかたげ取りて走れば、お袋は七十三にて、息子の性根の入れかはりたるを病として、死んでしまはれ、内人の者共とりしまりなく、身代ばら〳〵になるをもかまはず、親の死日をも何とも思はぬ、無爲の心得そこなひながら、母の死なれたと聞いてすこし陰氣になりしより、元のかたくろしい心になりさうな所を、佐左衛門末社共に下知して、今もえ杭には火がつきよい、またもとのかたい物になるまい物ではない。こゝがそこの上の大三重ぢや。」と、太夫に血起請書かせて、ころりさんせう味噌、あへ物になりて財布のいかのぼり、行き

たうても行かれず、鎌倉の家は家質へ流して仕廻ふ。後には佐左衛門とも不和になり、すべき商賣はなし。傾城買のら指南所と看板を出し、子息弟子などの粋になる樣に、敎へけるこそをかしけれ、おもての方に「一物まう、粋になりやう御相傳賴み奉る。」と、二十四五なるきれいな若い男、黒羽二重の引きかへしの羽織小袖、下に淺葱がのこに黒い襟かけたる紅うらに、脇指に金目見えて幾あつく、役者の樣に髮さきやうとうなるが、手をつかへて弟子になりたき望み、閑才うち笑ひ、「商賣は何をなさるゝ。」と聞へば、「親共は唐物を致しまして、さや縮緬類の取りあつかひをいたし、手代も五人ござりまする。」といふを、「ム、それはよい御商賣でござる。してよい八ひろくらゐの縮緬に、何程いたしまする。」といへば、「左樣な直段はわたくしは存じませぬ。』といふ。閑才大いによろこび、「手代の四人や五人つかふ唐物屋で、その總領がちりめんの直段を知らぬとは、先づ以て我が一流をもつべき仕出し、隨分精出し給へ。おつつけ上達なされ、稽古の功によりて力もつき、十間口や十四五間の家屋敷は、棒にふりかねはさつしやるまい。あつぱれよき弟子。」と、それより盃をいだし、師弟の約束をぞかためける。此の閑才が傾城の文どもをあつめて、はりぬきにしたる老子の像、今に京都櫻の辻に御座ある。」由、御はなし申し上げられけり。

### 三　和尚の相撲好きは四十八願の手取

朝比奈三郎うち笑ひて、扨々をかしき御噺共、君にもさぞ御一興におぼしめさん。此の義秀も順能でござる程に、聞きおきました噺を申し上げませう。前角鎌倉中のわかい衆相撲はやり、それなる俣野殿をはじめとして、由比が濱にて勸進相撲の寄りかたへ出られし頃、梅が谷の蓮臺寺の住持天外和尚、年四十二三なるが、生まれついての相撲ずきにて、若い時より在相撲と聞いては、缺かさず附髮のすみまかづらかけて、名のりを十念南無右衞門といひけるが、頃は建久元年八月二日、星月夜の觀音堂修覆の勸進相撲、勸進元よりおびたゞしき小屋をかけて、諸大名へ棧敷をあてける故、繁昌しきりなるに、西のかたより件の和尚、紋白のまはし三重に引きしめ、土俵へ上り、ちから足をどう〳〵とふまるれば、東の方より中村山の神主中臣内藏權頭、是れも隱れなき相撲ずきにて、下禰宜一家衆いとゞむるをもかまはず、名のりを千はやかけ右衞門と、しかつべらしうとん〳〵四股をふめば、行司すりこぎ義太夫唐團扇をあげて、東は千はやかけ右衞門、西は十念南無右衞門、やつ。と合はせけるに、南無右衞門はかねだがけにすくうて投げんと、攝取不捨につきかくれば、かけ右衞門榊おとしに卷きおとさんと柏手打ちかけ、組まん〳〵とまはるといへども、四十八手は四十八願、第十七八の願でころりとしてやらうと、袈裟がけに足をまとへば、かけ右衞門も、よる所をはらへたまへと、飛

ばさんと打つ手を、ほとけ倒しにおとされて、おたやの關へとほかゑゑたあらひ難く、だうと倒る
れば、南無右衛門は自慢おもてに顯はれたる所に、行事義太夫團扇を東へあげて、かけ右衛門と定め
ければ、南無右衛門大いに腹を立て、「眼前に投げられたるかけ右衛門を、勝とは其の意得ぬ」と、は
だか身にて觸髮なで上げぎしつければ、相撲のならひとて、よりかたの角力皆々立ち上り、「コレ〳〵行
司、まなこ玉がとんだか。南無右衛門勝にきはまつたことぢや」と、しめく時、行司驚かず、「改め投げられた
は見えた事なれども、最前の袈裟がけの足どり、右の方のらいたる所を、踏みも直さず入れて投げら
れたれば、勝負は其の時にあつて、勝負の後の投げらるれば勝にはなりがたし」といふに、かけ右衛門
も面目をすゝぎ「生存も得食はぬ形をして、神力のかゝつた身共に勝たんとは、おろか〳〵」と、身
についたる土をはらひ〳〵いへば、南無右衛門もはやこらへかね、大いにせいて「生存食ふやら食は
ぬやら、内證の事をそちが知つたか。世間の人もほん職とはいへど、禪宗様とはいはず。禪宗殿とい
ふがせいさいの事なれば、格式からが違うてある。緋の衣まで著する一寺の聞取に、ちめ過ぎた言ひ
分、ま一言はき出さば、たふとい所へすゝめ込んでくれん」と、顏に筋をはつてわなゝくにぞ、怒り
ゐれば、見物の内に、此の右衛門信仰の旦那講中十四人はせ、皆々土俵へかけ上りて、「是れは和尚
樣の御教化が、御じもと存ずる」と取り巻けば、此を講中二十人ばかり、人脇より飛び出て〳〵、

神主をかこうして、「くそ坊主めが」と悪口すれば、「かすり宜めが」と返答し、既に喧嘩に及ぶべき所に、北條殿の棧敷より御使たち、「一寺の住職として裸になつての力わざ、一社の神主に似合はざる腕だて、相撲は武藝の一つといへども、社人は社職を勤め、神事をさはめ、神書にこそ心を用るべきに、それを次にして、弓矢の道はかりか、相撲を好む事不相應の致しかた、兩人共に改易」との御沙汰、力なく／＼兩人は、方屋々々を引かんとするを、「放蕩なる出家社人のみごらしめたれ、此まゝにて裸にて追ひはらへ」と時政殿の下知によつて、ふんどし一つのまゝにて和尚には鬘をとらせ、神主はなでつけ頭にての丸裸、たとへん方なき姿なれども、泣く／＼木戸口へ出でにける。念佛講中は和尚のふんどしにすがり、「又いつ御目にかゝるべきも知らず、お十念をさづけ給はれ」といへば、はだか身にて數珠を手にかけ、「南無あみだ／＼南無あみだ」と門なかにて唱ふるも、興がるわざにこそ有りける。又々講中は神主にむかひ、「思ひもよらぬ相撲より、神やめにやめられ給ふこと」と、して程な涙をながせば、和尚も神主も、「斯樣になり申す上は兩人中よくいたし、共稼ぎに致すべし」とて、連れだち所を立ち退き、男にはだか百貫が一文もなければ、兩人申しあはせ、京大坂へたて分つて、ひとの角力を取りありきける。か程の變にあうても好きの道とて、兩人ながら角前髪になつて、神主は岩戸傳十郎とあらため、方々とかせぎけるが、世はもとしのびとやらんにて、神道の辻講釋、あつた佛法を

たゝきくだく辯舌に、人の山をなして、評判もつよかりけるが、和尚に鬼が崎と改めて、かせぐにも寺に居しとはちがひ、色事も遠慮内儀をもたれけるが、扨此の内儀と申すは、海に千年山に千年、川に千年苦界を勤め、誘ふ水あらばいなんとぞ思へども、つれて行き人のない黒やみの果てともしらず、ふと鼻聲な所に、かはゆらしいと思ふ心がおこりて、ひとり相撲がつゐふたり相撲になつて、鼻の色はうつりにけりな、あつたら男にかざりがなくなれども、たれ角力は四十八手と申せども、取りわけて十二手を四つにからみと言ひたてて、ドッコイヤラセイと都の町々取り歩きけるに、むかし和尚様とかしづきけるとき、理も非もわかず、此の和尚をいき如來と心得てゐる、正直屋又右衛門といふ扇子屋、本寺參りして序に洛中見物しけるに、辻中に人だかり有りて賑しければ、立ち寄りて見るに、姿は替れども和尚に紛れなし。是れはと數珠取り出しけるが、やすしばし、和尚にはたしか鼻があつたかとおぼえしが、即身即佛と兼て宗法に御座られたが、佛に其のまゝ御成りなさるゝ哉、五體が所々替つて行くかも知らずと、思ひ切つて「もし和尚樣ではござりませぬか。」といへば、「是れは是れは又右衛門殿か、恥かしい對面いたします。」とあるに、「お恥かしい事はござりませぬ。北條様が無體な仰せ付けられし故、佛菩薩を斯様におちぶれさせて置くべき様なし。幸ひ丹波の笹山と申す所に宜しき空院有つて、私と同じはたご屋に、其の旦那衆が寄つてゐるて、相應なお住持を尋ぬるとの物語、少し

の物入は私が呑込み入院させませう。」といへば、「近ころ嬉しき志、旦那衆ならばこそ。然らば其の寺へすわりませうが、折々すまふは取らせてくれらるゝ様に、肝入衆へ頼んで置いて下され。始めにきはめぬ事は、跡でいおむおか出来て済まぬ物でござる。」と、まだ懲りもせぬ相撲の執著。それより宿もとへ同道しければ、底のないはしりにみぞ板をあてて、菜刀より外に庖刀は見えず、ふた〳〵する様な古畳の角に、丸の内にみの三と焼印のすわりたるは、何ぞ芝居の拂ひ畳にやとをかしく、「和尚様御出で。」といへば、さすがは昔わすれず、誰にもらうて置かれけるにや、布の破衣取り出し、「畳の縁にと存ぜしに、昔にかへる錦の衣。」と引きかけたれども、あたまはいまだ角前髪、おしもんでそり〳〵いはせ、火宅の門を出でんとすれば、女房衣に取り附きて「おまへはどこへ行かしやんす。」「おれは丹波の篠山へ。」「わたしも連れて行かしやんせ。」「女連は邪魔になる。」「胴慾な和尚様ぢや。」と、わつと泣くに心ひかされ、「それなら来い。」と手を引かるゝを見て、さしも信仰の又右衛門も肝つぶし、「扨は和尚様には此の相撲までお好きか。」と、見限り果ててぞ帰りしと、申す噺を承りし。」と申し上げられける。

鎌倉

# 諸藝袖日記卷之二目錄

## 一 茶人の俄慇懃丸裸の亭主

時政は、御座の右にひかへられしが、只今朝比奈申さるゝ通り、その和田の弟は、蜂房屋の伊右衛門とて、攝州池田邊近くに住みて、有徳なる町人なるが、茶をすいて、明けても暮れても釜のたぎる音に、千年をのぶると心得、雪に月に薫物くゆらせ、炭に所がらとて、香ひわたらせての樂しみ此の男生まれついて潔癖つよく、かやうの事にも手を數十遍あらひ、障子ふすまも自身あけたてする事、何とやらもきたなくおぼえ、召しつかふ奴輩にあけさする程なるに、其の兄に市郎右衛門といふは、第一茶湯嫌ひの天性好きにて、根が正直なれば、熊手まではゆかねども、こまざ[illegible]るは嫌ひなる生まれつき。或時弟の伊右衛門を招き、其方萬事にしおいて、茶湯致す事心得がなし。其よく思案してみるに、茶湯といふ物は、至極の無器用者のする事にて、ある業が少しもならず無器用になければならぬといふ物なれば、世界に茶人も少なかるべきに、三つ子がしてもなる事故の繁昌なり。其の譯といふに、代金の百兩もする様な、結構な茶碗を次へ見て廻すにも、只今廻しますといふて、

中にほの上にて渡せば、次の人受取りたりというて中にて受け、指の先にてくる〳〵〳〵と、廻し見る様な事なれば、中々大體の稽古では參らぬゆゑ、此の道の數寄人澤山にはなき道理なれども、茶椀ひとつ下に置くとても、そつと大事さうに置く手つきのにぶさ。茶椀へ茶をうつす手元は、南京人形が太刀に手をかくるが如く、にじりあがりを上つて、我がはいた草履を取つて立てかけ置き、其の手もあらはずに會席につき、飯を喰ひ酒をしてやり、日頃はとうせい斷うせいといふ程、心やすき友だち同士も、にはかに慇懃になつて、炮碌の缺けた所が面白いと、心にも思はぬ追從たら〳〵、客のどじあする様な料理の盛りかた、大食は腹にみてず、小食はのこす事のならぬに腹をそこなひ、炭がとゝく出來ましたなどと譽むる事、無益な藝ぞと見込んだか、脇眼から見れば、恥かしうもなうて、能くもあの様な事がいはるゝ事ぞと、氣の毒に思ふに、中立の後になつては、どこの乞食がのんだやら、齒拔のおやおかしらいで、一生茶漬茶椀にしたやら知れぬ古茶椀を、かいで見たりひねくりまはしたり、入齒の落ちさうな人とひと口で飲んでまはすも、あまりさつはりとしたる業にはあらず。ひらに茶湯をやめにして、三一天作の五厘三厘でも、つもれば山となる。』と、意見すれば、『かりそめの物も帛紗さばきして、ふいて用ゐる清淨の業藝、夏は活花の水際に心をのべ、冬は爐邊の暖かさに、うきをわするゝ水さしの底意なき出會、また有つたものではござりませぬことゝうけがはねば、市郎右衛門擴

嫌あしく、すきの道とて十露盤のつぶやき奥に入りにける。伊右衛門は手代善五郎を呼びよせ「今宵は栄村の妙禪寺の上人を正客にて、能太夫松田弾之進、帯屋の道順老を茶にて招く約束、申し附けおいた通り、それ〳〵の用意せしか」とあれば「御夜食の拵へことごとく出来てござります。」「ソレおもての掃除に念入れさせ、露次も随分きれいに掃かしや」と自身は數寄屋まはりへかゝりける折ふし、勝手の方より「英倉隆泉様の、急にお目にかゝりたいとて御出でござる」といへば「これへ通しませい」と「何の御用」と問へば、隆泉「されば餘の事ではござらぬ、貴様には客のある度ごとに、料理の加減がわるいの、煙管のなほしやうが悪いではないかと、とかく目に角立てて、家来衆をお叱りなさるゝ故、参つても座敷にゐる心もせぬ故、其のお叱りなさるゝ事をやめませすば、いづれも今宵はえ参りますまいとの儀、客方からは申しにくいと存つて、つねに参る青者の事なる、手前へたのまれて参りし」と聞きて「扨それは御深切に忝うこそ存ずれ。たしなみませうと存じても、又してはもや〳〵と短気がおこりまして、思はず知らず、客へふしつけになる事ともかへりみず、手代共をきめましたる段、あやまり入りましてござる。向後は屹度相つゝしみませう程に、よろしく頼み入る」とのうけに、隆泉も「その通り申してすゝめ申さん」と立ち歸りし跡にて、座敷をはりへかゝる手代奴を、いつもは呼びならべ「料理の不加減給仕の手ちがひ、その外様々のきかぬ事どもあれば、一度

一度にしかり附けて腹のいた癖を、お客がたより座敷にて、家來なしからば參るまじきとの難題、案するにおのれ等がしかるゝを迷惑がりて、手をまはし頼んだ物であらう。此の上は叱るまいと申してやつたれば、氣にいらぬ事があれば、次の間へ立つて手へなりとも肩へなりとも噛ひつく程に、聲をたてなとといひ付け、困り入つてぞ見えにける。客既に案内して、妙禪寺の上人より、手水してにじり上りより上られたれども、此の上人つひに茶に行きたる事なく、始めての會席心元なきを、やう〳〵ならうたまゝにて床の掛物を見る内に、つぎの客能太夫辨之進麁相ものにて、わきざし指しながら入つて座につきしが、ふと心づき、南無三寶ととこへ脇差を、拔かん許りにはひ出でけるに、妙禪寺、さては爰にて一邊はうて出づる物かと、大事さうに這ひ出でられける。辨之進は脇差をば物陰へかけて又はひれば、妙禪寺もおなじくはひ入る。ぐる〳〵まはる體をのぞきゐる亭主の心ぞをかしけれ。酢屋の道順は中にても巧者ぶんにて、三人のために三疊臺目、料理もすみて中だちしけるが、三人の客待合に知らせを待ちゐける折節、何にて有りけるや、くわんと物をおとしたる音を、正客の妙禪寺、たしかにあれは知らせならん、いざ行かんこといふを、殘る兩人とゞめて、知らせの銅鑼にては有るべからず。物を墮したる樣な音でありしことといへども聞き入れず。妙禪寺にじり上りへかかりて戸をあけんとするに、亭主は丸裸になりて越中犢鼻褌ひとつの體、花をいけんと床へかゝつて

居る最中、明けられては叶はじと、左の手には古備前の花生、右に萩薄持ちながら壁へ掛つてゐて、右の足にてはにじり上りの戸をふまへ、左にてはふんばり居るとも知らばこそ、正客の妙禪寺、無理無體に戸を明けんと、手をかけてこじて見れども、力足つよくふみつけたればあかぬ難さを、南無妙法蓮力を出して押してみければ、内よりふんばる力足と、外から押すいきほひにはずみて、にじり上りの戸ぐわつたりとんとはづれ、亭主は裸に越中ふんどしのさがり長く、花生持ちながらすとんと倒るれば、名物とうれしがりし花生は、微塵にくだけて、戸より外へ足をぬつとふみ出しけるに、妙禪寺の上人のひたへ踏みつけて、上人は眞あふのけに飛ばされし、手水鉢の角にてぼんのくぼをしたゝか打ちて、やれ氣附よ、打身の藥とさわげば、取りあへず初昔といふ、濃茶の挽きだめを持つて來てのますに、上人くるしき息の下よりも、「結構な御茶」と申さるゝに、扨は正氣がついたとよろこぶ内、亭主は腰をいため、頭を床柱にぶちあてたる故、流るゝ血おびたゝしながら、すでの手代男が布切もつて來てふかんとすれば、袱紗さばきがさうでないと、痛い頭かゝへながら、しかりくゝ戸を立て直させ、花生取りかへて上下を著し、しらせを打ちければ、上人も起きあがつて、頭をなでく法の如くに戸をあけ、三人ながら座につけば、亭主仔細らしく罷り出で辭宜しけるに、正客も挨拶なくてはと、「最前は珍らしい足をいたゞきまして、御馳走忝い。」といへば、亭主もゐ手をして、

「ふと致したる儀で、兼て心がけませなんだ故に、足袋さへ履きませずに、麁末な足を進じまして。」といふて、袱紗をさばくもをこがましかりき。相客ども、是れが茶湯でなくば、踏んだの踏まれたのと、喧嘩にもなるべき所を、茶湯の徳にて互に慇懃なるおれそれと、醫者が藥違へにて殺しながら、藥代取る格に心得、慇懃の有りたけつくして、其の口の茶席は相すみけり。佛法に外儀の莊嚴をいましめられしはかかる事にや。茶をすかば、人の見ぬ所が猶大事なるべし。上下著て出でし人の丸裸は、後に茶を調ふる時も思ひ出して、客方いか許り笑しからん。」と、咄の冗をぞさされける。

## 二　能囃子を好額の若衆盛り

江間小四郎、「只今同名申されし通り、總じて藝術はおもてより、内々の心がけこそ專一にて候へ。此のまへ拙者在所伊豆國邊にて、殊の外猿樂の能囃子はやり申したる時分は、歴々の諸士大名まで、是れを習ひてたのしみけるに、鄰國の大名にてありし老松民部左衛門、此の道に深くたのしみ、明けても暮れても扇の手に工夫をこらし、鎌倉へ出ては辻能まで見ぬといふ事なく、其の上男色ずきにて、左な手のきはりたる衣服を著せず、大名なれば小姓あまた召しおくべきに、しはきが上のまよ衣、素袍のしめきへ、汗ねたりの物にかまはぬ性質、傍輩出會の間に新冠あれば念がけ、事缺けには五六十歳の隱居おやぢものがさや、鄰と男色にうき身をやつしるり、紙子同然にて繼目のはなれぬ代々の家

筋なれば、あまたの家老の意見諫言、『御跡目なくては御先祖への御不孝、何卒奥方樣を入れたき。』由申す程勝にのつて、『それ女は第一油くさく、心根かだましくて、すはといふ時の足手まとひ、士たる者の持つまじきは妻なり。昔より妻にひかれて、忠義を缺きたるためし少なからず。』と、かぶりを振りかゝりの事にて、或時廣岩といふ所にて、仕舞囃子の有りけるに、三番目を頼まれ、小袖大小かざりたてて出かくる所へ、取次の侍樽日彌次郎罷り出でて、『見なれぬ若衆一人お玄關へ參り、憚りながらお上へ直に貴意得たきよし願ひ申すことの事、若衆と聞いて急な出所をやめ、それこなたへと招かするに、年は二八ばかりの大振袖、一條院時代の若衆ぶりにて當世めかず、茶字の裏つけ袴立派にをり付けたる、飛驒の工が百日かゝつて、天王寺の塔をたてたる體休みごとに、ほつておいたる太秦八景の一印籠、髮の生えぎはは、水仙に白梅あしらひたる水ぎはより綺麗に、手に鷹もすゑず、藤の花もふりかたげざれども、古風なる仕出しは男色のたゞ中、民部左衛門やまめになつて『お若衆名は何と申すぞ。何方よりの來臨ぞ。』と問はれて、『わたくし儀は小春林齋と申して、河津殿につとめました所に、河津殿なくならせ給ひて後浪人いたし、何卒能を仕覺え、能太夫になつて一生をくらしたきのぞみ、こなた樣にはお能の上手と承り、人頼みにてもいたし弟子入のぞみなれども、いつそおまへ樣へ慮外をかへりみず、不屆な奴ぢやとて御手打にあはば、ハテおまへ故とあきらめて參りました。』

お前のおやご老松権軒様より、此の六年以前に結納を下され、親と親とのとりむすび、お前とわしはシチサヤの中に極まりしに、男色に御心をまりて、いつ輿入ともなく、さびしき閨は班女が扇のかなめ、しめくゝりのよい此のお家の執権熊坂松左衛門と、手前の家老黒塚鬼太夫申しあはせ、みづからを若衆に仕立てて今日の次第、二世かけて替るまいとの御誓言。恭うござんす。」と聞いて「ヲソリヤ若衆かと思うての誓言。」と逃げんとするを「いか様なびつくりなさるゝ事があらうともと、言葉をつめましたは爰の事。」と、取りつき給ふ内に、一家中兼てしめし合はせたる事なれば、千秋萬歳をうたひかけて、熊坂松左衛門島臺を捧げ出づれば、次の家老田村鈴鹿之丞おさへをさゝげ、女中頭玉かづらが木鉄子の長柄、井筒がくはへのひさげにかざる陰蝶陽蝶の三々九度。芭蕉の間より木賊の間、夕顔の間迄居ならぶ一家中の面々、「三國一ぢや。嫁になりすまいた。」さつと御祝言は角田川、是れまで隣家の家老中、いか計りのかんたんをくだかれし事なるに、やがて玉津島のやうな若殿様も出来て、御家は萬々歳の御繼。」と悦べば、いやおうなしに御さかづきごと、雜煮の望月高盛の海老のしら髭、ながき日もはや吳羽、男舞ばかりすかれし民部左衛門、女中とあふは序の舞にて、次の間にきほふ琴三味線、樂のしらべともろともに、酒の石橋の上手にもられ、一座いづれも足もとは、よろ／＼とよろうたるかざり居風、つい夜著名香寝屋の春風、遂に夫婦となり給ひぬ。民部左衛門次第に女すきに

なり、妾ばかりが十八人、ふるき友だちが出あひて、「若衆はいやかつ」と問へば、「辛風呂も、年よる程精の毒でござる」との返答。男の子が八人、女の子が六人、餘り子が多いとて、三男を出家させて、是界坊と名づけしなり、眞言寺にはよき大地ありけれども、これはてて法性寺の修行、俊寛の跡目にすゑて妻帶にきはめ、「たとひ硫黄が島から有王丸がもどつたとて、油斷すな」と申し付けて、入院させし由承りし。」と申し上げられける。

三　無に落つる見識は色の水上

闇山月落ちて分披遠く、流水閑かに清む仙翁の家と、昔の宗祇が作りしも、實にさる事にや、諸歴々の詰時移りて、日闌なるころ、和田義盛出仕あれば、「例とて御出仕おそかりしこと」と、人々問はれけるに、「さればの事、今日は國苗の内、佐藤平太方に召しつかふ譜代の侍、三界無右衛門と申す者方へ、振舞にまねかれ、只今まかり歸りたり。扨世の中には、さまざまの人があるものでこそござれ。今日の合客、結城七郎朝政にもきかれ、通り、亭主無右衛門古今の變人にて、儒をあざけり佛をわらひ、神道ををかしがり、天地にただ無の見より外には無いとすましきつて、儒者の講釋するに、下手な藥のいひたてよりは劣れりと心得、名僧の談義も、傾城のくぜつ程にはきかでもよいと高か、り、色氣なければ後生氣なく、女房持つたれば、子は二三人あいうらの物と、雷がなれば柱にとつ

もちて、中よく出で合はせけるに、無右衛門いよ／＼さえ返りてのぼりつめ、來る正月は三日より十五日までを、揚げづめの約束、節季の内證拂ひ、受けこんでしてやる筈なるに、此の女郎いまに密夫をのかず、あまつさへ無右衛門が出かけてゐる、揚屋の階子の下での逢瀬を見附け、大きに立腹しておこりちらしけるを、幇頭仲居がいろ／＼に止めてもとまらず、連になつて來たる澁谷瀧右衛門穗長文庵といへる醫者諸共、宵の大酒に行きついて、火燵にふんぞりかいて目のあかぬ内、無右衛門は駕籠にも乘らず歸りけり。小伊勢はどうもつまらず、瀧右衛門が醉ひつぶれて寐て居る布團の内へはひり『申し／＼。』とゆり起し、『わしはとうからお前に心はあれども、無右衛門樣へ對して。』といふを、むつくと起き上つて『皆まで言ふまい、最前から寐入つた顏して委細はよう知つてゐた。それに今おれに惚れたとは、おれを喜ばせて、又中直りの世話かかする下心か。己が方から疾うから鼻下なれども、無右衛門へたてて逢うてはくれまいと、さし控へたる折柄には、是れまで外に女郎を呼ばず、こなたに密夫があつても、己がまことをさへ聞いたらば、こりやしてやらうといふ事は有るまい、いかにも無右衛門との中はおのれが取持つて、金は無右衛門につかはせて、しのびて逢ふ夜のたのしみ、それさへ合點ならば受けこんだ。』といふに、『粹なこな樣にいつはりは申すまい。』と、此の粹といふ字に、大かたの智慧者も、ふかみへ行く意味そこにある挨拶なれども、[illegible]りて逢ふとはちがひ、味なは

りあひにて、無精にのぼり掛り、「一旦起請で納得させた物なれば、今度は起請ぐらゐではゆくまい、血文なりとも書きませう。」と、かぶろに髪剃取りにやれば、瀧右衛門にはかにかはゆうなつてきて、「其方のその、楓のやうな手の指は切らされまい。ハテどこぞに相應な血はあるまいか。」と見廻し、「よい所に血こそあれ。」と、豬口一つとり寄せて小伊勢に受けさせ、火燵に夢になつて寐てゐる文庵が足のおやゆび、つめよりむかうをすかと切つて血をしぼれば、文庵はおびえたるやうに足をびりびりとさせて、とろつへきの沈酔、火燵の火のつよさに、疵にいえて血もおのづから止りにけり。此の血の内へ糊を入れて、文をたくみにこのみて書かせ、おもはすよいめにあうて、火燵にての添寢、あかつき方に醫者の文庵をゆりおこし、同道して歸れば、門口の橋わたる頃ちんばを引きて「何としたか終にない爪あかぎれがきれた。」というて、つぶやき／＼立ち歸りぬ。それより此の血文にて無右衛門をうれしがらせ、連立ち行きては、ぬすみての逢瀬、小伊勢は一生つれ添はんとの男はほかにあれども、勤めのつとめに、無右衛門と瀧右衛門、この手がしはの二おもて、心苦勞しけるうちに、誰か告げけん、醫者の文庵へ足の血の事もれ聞え、もつての外に腹をたてて無右衛門に合ひ「瀧右衛門と申す人は、人の血をとりめさるゝ、昔話のやうなお人ぢや。」と、くはしく語らるれば、無右衛門はじめて大きに愛想つきて、此の世の事は皆無の見ですませば、腹もたたすと昔にかへり、一向武士を

もやめて、傾城の誠と座頭の物ぐひのよいのに、無いに極まりしと發明して、無一軒とあらため、隠遁に仕りたきとの願ひ、主人侄柄へ申して相かなひ、そのふるまひとて、主人筋の面々までいこらす申し入れたるとの儀、何といづれもかはつたる振舞ではござりませぬか。」

合類

# 諸藝袖日記卷之三目錄

第一　比丘の五百戒は芝居の看板

觀音の淨土に普陀落山なれども

今は自墮落借錢[illegible]の信心

さ[illegible]てくやしき飲酒戒の沙汰

第二　陰陽師の律儀は見せ物の坊に

長次郎が茶椀わつていはれぬ女の化物

祈禱にしづまるたくみの段々

くひちがうた牙で新渡部のをば御前

第三　劍術の達者二流のあらそひ

すさまじい名を月夜に釜のたぎらぬ

兵法の極意は逃口にこそあれと

恥はかゝてもかかぬ武士の下帶

鎌倉 諸藝袖日記　巻之三

一　比丘の五百戒は芝居の看板

「雲ならば嬉しからまじ假初の浮世にそむる紫の袖」とは、鵠默上人に紫衣許されし時の詠歌となん。官位高き出家は、名聞にながれて徳をうしなふと、世のおしはりを好まず、利害の界をはなれて、布の衣の破れたるをきらはず、本より袈裟は佛在世の糞雜衣と心得、つぎ／＼の木綿つゞれ、つゝしまざれども法驗つよく、當時鎌倉にかくれなき、五百戒をたもつ大比丘、快譚律師と聞えしは、辭しても許さざる祈禱の謝物納戸に充ちてや、外から申づもりにしても、およそ四五千両はたしかなる内證、時齋の正食に物入りすくなく、納所房の無駄に、小僧三人下男二人、何不足なく富みさかえ、折々は佛すでにみづから、鉢をさゝげて人々にめ給へり。我も錫をとばして行脚せんと、小僧の一人も連れざれば、まして下男とてはおもひもよらず。五日六日づゝありきては寺へ歸り、われこの頃文殊の淨土にいたりしなど、其の淨土のありさまを說いてきかさるゝ故、信仰の檀那次第にまして、生佛と崇め奉りけるに。頃は文治二年の事なりとよ。

「われいまだ觀音の浄土に至らず、それ觀音の浄土を普陀落伽と號して、佛界に近き所なるに、日本の備惠夢といふ人海上に是れを摸して、今普陀山と名づけ、萬國更を觀音の浄土に擬へて、參詣する事なれども、我は實の普陀にいたらん事をいのりしに、觀世音菩薩は三十三身の應化として、三十三體に分身して衆生を濟度なさるれども、皆集一體彌陀如來と說きおかれたれば、たゞ／＼阿彌陀を信ずべし。三十三身の内、馬頭觀音の果を得さすべき由、ありがたき靈夢をかうぶりたり」と披露して、三七日が間大法事を執り行はれければ、近きものは入りつどひ、遠きものは聞きつたへに參りかさなり、「生きながら、馬頭觀音にならせらるゝ比丘樣へ結緣申せ」といふ程こそあれ、紀の熊野まゐりする程、どやつきけるほどに、庫裏も方丈も錢の山高く聳え、齋米の峯ふかく積みたり。さらば寺再興の望みもなく、錢は賣つて千餘兩となり、米は俵に直して四百五十石、法事首尾よくなされまりてからは、凡夫の眼にこそ見えね、もはや馬頭觀音にならせられて御座ると、愚にうやまひ信じける。ここに那落十兵衛、まかせの八兵衛といふて、ならびなき金口入のこなれ者あり。いかな樣なむつかしき金も借りいだし、口錢步割の外に、借方よりしたゝかの禮物を取りおぼえ。第一に寺方の祠堂銀を心かけて、かり出す調練に妙を得たる事、あたかも天狗のごとくなりけるが、兩人ひそかに談合しけるは、「當時方々より金子の事申しきたれども、借り人は澤山にて貸し人のすくなき世の中。われ／＼

祈禱も、二つ三つ取次ぎければ、比丘も心とけて何事も打ちまかせて相談し、『俗用はことのほか不案内なれば、萬事おの／＼をたのむ。』との一言。サアしてやつてた物ぢやと、いよ／＼口車に乘せんとのたくみ、殊勝一ぺんの比丘、世にならびなき旦那衆とぞもてなされける。よい時節を見あはせ、『紅葉が谷に千部の經がござりまするが、お參りなされませぬか。』とすゝめ、前鬼後鬼のやうに、四人が比丘をとりこめて供し、先づ星月夜河原の芝居側を通りければ、『ヤアはじまつた／＼。是れぢや／＼上の始まり／＼』と呼ばはる聲に、比丘はおどろき、『市と申すが是れでござるか。』とあれば、八兵衞もゑ手をなして、『是れは芝居と申す物でござりまする。』といふに、『其の芝居には何として、あのやうに繪馬はかけてござるぞ。』との不審。『あれは繪馬ではござりませぬ、狂言の看板と申す物。』といへば、『ア、氣の毒や情なや。アノ赤い顏ななでつけ男を、りつぱな侍が殺して居るわ。假にも殺生戒がやぶるゝ、扨わけもない物を見せられた。』と機嫌あしければ、『はゞかりながらアレは、惡人の家老が家國をみだすゆゑ、善人の家老がころして、太平にをさむるを書いた物でござりまする。』『ム、扨はそれなれば勸善懲惡と申して、地獄極樂の道理、さて／＼芝居と申す物は、煩惱を勸むる所と許りおぼえて、只今まで見なんだは此の愚僧があやまり、ナント見まいか。』とは天の與へと、四人の者ども、そのころ星月夜の芝居茶屋にては、名題の開遣屋へいひつけて、にはかの三軒つゞき、勸め込む

壇上に立てたる劍一振をさづけ、「是れを本人の枕に立ておかるべし。是れは斬魔切邪の劍とて、七十二符を切りこめたる劍なりとて、渡しつかはしける後も、いよ〳〵怠らず丹精をぬきんで、修法ありけるに、七日滿ずる朝、三人の手代いそ〳〵して來り、白臺にまき物二卷、鯛二枚白銀三枚、五升樽と共に、よき舌にて禮にきたる體とは、名いらぬさきに見えて、かの貸しつかはせし劍をうや〳〵しく返納して申すやうは、「此の御劍枕に立ておきしより、かのあやしき女、窗よりのぞけども内へはいらず、これ故長次郎儀も次第に達者に心づよくなり、夜ぜん七日にあたれば、大事の所と存じ、劍を夜著の内へ入れて寢申し候ところに、くだんの化女窗を蹴破り内へ飛び入つて、長次郎を引つたてんとする所に、すはや不思議や、にはかにどろ〳〵といふや否や、此の劍おのれと夜著の内よりぬけ出で、倶利伽羅のごとく、不動のごとく、火焰をはいて、件の化女が右の腕をづつはと切つておとしたり。それより長次郎、夢のさめたる樣にて、今日は常にかはる事御座なく候。一兩日中に御禮には參上つかまつり候はんが、先づとりあへず御禮申し上ぐる。是れがすなはち化物の腕にてござりまする」とさし出すを見れば、鬼の手のしかも乾干たるにて、血の氣は見えず、樺之進横手を打つて、「是れひとへに我等が行力のいたる所、その腕在家にさしおかれては、渡部の伯母がやといふて、取り返しに來まいものでない、行力にて得たれば、此方の寶物ともまかりなる物、この方において預ら

れよ。』とあるに、三人は仰天して、本より此の三人は、見せ物芝居へかゝる者共にて、此の狸の手、つい見せては錢にならぬ故に、龜浦樺之進殿の行力によつてと言ひ立てにして、件の化物話を看板におかせて、由比が濱の大開帳に、錢の五六百貫もしてやる分別、名の高い樺之進を、名だいにたてん許りに、からくみたる事なれば、置いて歸れには困りはてて、『是非とも持つて往なう』といふに、『この方行力にて得たる腕を、むりに欲しがるは其の意得ず、しからば上野國へ拙者が立ち超え、その方たちが主人、喜瀨戸の長次郎に直に決談せん。』といふに、元來喜瀨戸といふ所も、長次郎といふ主人もない事なれば、いひ上るほど尻よわくなりて、のちには品によりて御代官所へ訴へてなどと出る故底氣味わるく、迷げぼえにして歸りける。されより此の腕を由比が濱の開帳へ、さし加へてをがませけるに、おびたゞしき羣集にて、賽錢五十貫文を、開帳場と二つわけにして後、樺之進懇なる浪人、戸田治部八といへるに頼みけるは、『斯樣のけだものの腕には、蟲のつく物なれば、鰻のやく煙にて薫べておけば、蟲つかずと申し傳ふ。しかるに拙者うまれついて、鰻の匂ひあしく、つひに内にて燒きたる事なし、御世話ながら其のもとにて、ふすべさせて下されまいか。』とあるを、心得たりと件の腕を受けとり、十五六なる青二才の、二三郎といふに言ひつけて、『鰻でふすべておけ。』とて渡し、外へあそびに出でけるが、二三郎はこゝを大事と、鐵橋にかけて眞黒にやきたてて置きたり。治部八立ち歸

まだならぬ所を、僧傳物ごとに無骨ならぬもの故、ふきに取りそこめ、かへつて大藤内をしかり、「互にその一理あればこそ、一流も立つことなれ。いはれざる取沙汰、未熟のなすわざなり。そのうへ此のいう流儀は鞍馬流とて、所謂外から手ざしのならぬは知れた事を。」とまけぬ挨拶。太郎兵衛耳に掛りたれども、僧傳が劍術およばぬ所ありと見込んだれば、よい加減に聞き流し、「イヤハヤわかい衆は、得ては斯様の取沙汰いたしたがられまして、氣の毒に存ずる。互に遺恨のなき儀、お心にばしさへられて下されな。」と鹽合よき時分、弟子もろとも立ち歸れば、「手前とても其の通り。」と、僧傳もわかれて宿所に歸りける。然るに誰いふともなく、朝霧が崎にて八幡太郎兵衛と、鞍馬山僧傳と劍術の論あつて、太郎兵衛さんざんに負けたるといふ噂、鎌倉中に滿ちければ、太郎兵衛無念なる事と思ひ、安藝宗右衛門にいひわたし、大かた是れは大藤内めが所爲なるべしとて、大藤内遊君あまたあげて、竹が谷の庵室へあそびに行きたる歸りを、二十人ばかり待伏して、いづれも目ばかり出づる黒き頭巾にて、遊君もろ共くらがりまぎれにばたばたと取りこめ、たゝくやら踏むやら、違ふ違ふの目にあはせて歸り、僧傳が弟子を、太郎兵衛門弟が大きなめにあはせたと、かくれなく取りはやしければ、堪忍なりがたき事なれども、時節もこそあらめと、僧傳せかず見合にせ居ける内に、日々此の沙汰やまざりければ、最早是非におよばぬ場なり、さりながら兩方の弟子がまじはり居ては、それがしと太郎兵

衛、直に勝負に妨げやあるべき、何卒只兩人餘の人まぜずに立ち合ひ、眞劍の上にて、いづれが勝れたるを極むれば、弟子中の面目なるべしと覺悟をきはめ、よい場もあれかしと待つとは知らず、太郎兵衛太刀作りの大小ぼつ込み、大島の茶字の馬乘袴、たうけんびたひにぬき上げ、鬼神も拉ぐべきいかつさ、道行く人も見かへる風體、いかなる用事にてや、供をも連れず只一人、僧傳の門前とも知らず通りけるを、見つくると否や、是れ究竟の事よと、人を走らせ呼び入れければ、「其の邊にちかづきは持たねが。」といひながら、立ち歸りければ、思ひがけなき僧傳、門口まで出でむかへ、「是れへ。」といふにびつくりしたれども、今さら逃げられもせず、「久しう御目にかゝりませなんだ、御堅固で珍重に存ずる。」と言ひすてて行かんとするを、「イヤ密々に、御目にかゝらねばかなはぬ儀これあり。」と内へ招じ入れ座敷へ通し、女房娘などを呼び出し、「身どもことは、只今太郎兵衛殿と打ち果して相果つる、尤も太郎兵衛殿に遺恨あつての事にはあらねども、世上の取沙汰、是非におよばぬ場にいたつた。しかれば太郎兵衛殿は、名だかい劍術の名人、さだめて身が討たるゝであらう、もし運にかなひ、太郎兵衛殿を身が打つたりとも、立ち退く料簡にはあらず、當座に切腹するなれば、手前一流花牛若之卷を、娘にめあはせて相續すべし。武藝指南の身は、常に此の覺悟なれば、今さらおどろくべからず、用はない程に、一人も覗くな。」と次へやつて、藤の戸に錠をおろし、尻ひきからげて庭に下

を拾ひし、また詞のかはらぬ内にっと逃け歸り、それより子供を一間へまねきて「子々孫々まで下帶いたすべからず、但し夏も餘所へ行くときに、女のゆもじをば借つていたすべし、是れすはといふ時はたしあはぬ命の親にて、兵法の奧の手なり」と申し傳へしとかや。何といづれも世上にはいろ／＼の事の有るものでは御座りませぬか」「イツレモハヽハヽハヽヽヽヽ」

鎌倉

# 諸藝袖日記巻之四目録

第一　浄瑠璃物眞似も年功のいひ立て
　師の手拍子を内輪どしの意見
　きかぬ異國のことば遣ひちんぷん／＼
　かんじんの商賣をとらやあ／＼

第二　醫者は療治より詞の匕加減
　耆婆より嫁へやられたる醫書は
　かなはぬ醫者ほんのうちばかり上でも
　かなめ石とは違うてぬけぬがあいわい

第三　細工は上手は自慢を言ひ勝の座敷
　長口上をくりかへす平家さぶらひ
　刀の目利と古鐵のきはめ札は
　人のかたに始もたせた身のうへ

いなど言うてくらし、朝から晩まで禪寺の念經聞くやうに、近所からも寐言の八右衛門と、異名せらるゝほどなるに、其の鄰は酒屋の太郎右衛門と云うて、年つもつて七十三歳、おやまの鏡にうつる所を看板に出して、おやま紅屋と名だかく、身上もよしりうるしりかたい金の、六七百兩もたくはへ、娘に養子壻取つて孫も三人、宗領孫にははや五つになる曾孫もあれば、一家一門の鹽土の翁とうやまはれたが、生まれついて踊好きにて、翁になれば白髪を塗り、若やぎ打ちぞめいて、夜の明くるまで、そつこでせい、まかせてせいコレやあとなアた、しやべり歩き、町の參會に出ても、今どきのわかい衆はをどりの手がのびぬゆゑ、見ぐるしいとあざけり、いづれも酒がしゆんで仕舞小うたひが始まれば、「待つた〳〵、待たうぞ、わしは大和國源九郎が家來、青葉半之助、さいた刀は宇多の國宗、門をあけい。イヤあけいと言ふにあけぬか」と、扇をかざして聲はり上げ、大むかしの役者のせりふ、自身には、似せると思はるれども、四五十歳までの人は聞いた事もなく、殊に拔けたる齒よりすりいうて、きちがひお意見する樣で興をさませば、大茶屋にての參會なる故、仲居むすめ共はわらひもえせず、面白かるべきやうもなくて、五年目か三年目には、えてはあのやうな理窟のくだらぬお客があるものぢやと、あきらめてはめて通せば、「茶屋でさへはめた。としまかりまつたれども、男は隱し藝がなうては恥かく物ぢや。ヤァ十年も年が若ければ、此の物眞似で、一座のをなご共もびた〳〵

とんびけて見せるに「とといへば、茶屋の嬶共が「今でもおちやわいな」というたは、たしかに曲ることばとは聞きながら、どこやら底心にかゝつて、そのあくる日より、七味匂ひ歯みがきを買うて來て、六七枚のこりし歯をみがき、はけ果ててなき鬢髮に、床髮結たのみて、かけがみをかけ、役者の若後につてを求めて、かしらに塗る青黛のこしらへ方をならひて、今日より、物眞似で色をとる氣にて、あつきりと金を遣ひ出し、夜どまり日どまり、身上不相應のおごり、一門一家もてあつかひ、たび〳〵意見しても得心せず、跡つぎの養子聟、太郎八もこまり入つて、古夫婦して金をお遣ひなさるゝ事は申しませぬが、おとしにこそよりましたもの、せめて顔と物眞似は、やめに致されて下されませい。子供が門を通れば、踊子共おやと人が指さしいたしますること、しみ〴〵と口說けば、「不祥々々、雀は百になつても、踊わすれぬといふ詞も知らぬか。そち文盲では人つきあひも心もとない、そんな窮にもたゝぬ事いふ手間で、孝行を思ふならば、黒繻子の裏がへしで羽織をたて、四寸五歩幅にして、眞には毛氈を入れた帯を一筋してくれい」と、羽織引つかけ出かけられける故、いろ〳〵と氣のあうた浮氣おやぢどもを頼み、踊物眞似をわびごとしければ、「しからば年より相應に、淨瑠璃に致さう」と嘲りよるかも、御簾にしや蟬丸は、何のむくいか浮世のやみにと、うかひしたから語り、是れもかうじて來て、床へもあがつてやつて見たい心になり、養子聟にかくし、これもから銀三百目出して、座

先へのみこむ故か、其のしるしいちじるく、はやる程に乗る程に、京中へ出て療治せんと、白川の屋敷三十八貫目に賣りはらひ、京都はどこうぶくらの、紗綾の小路廣町通り上ル所に大玄關、朝脈は夜の内から取り込むつもりにて、掛行燈もたしかなるを張りたて、代脈にあやかせる心得にて、弟子三人六尺六人、腰元下女下男上下十八人、在所ではやつた格に京中から呼びに來ては、朝は五つに出で、晩は七つに歸り、暮れてからは急病の外は、出まじきとのあらかじめにて、藥も大抵では追はれんと藥盤五面まで用意し、兩手のきいた庖丁さへ五六本かきたてて、今や呼びに來ると待てども、頼みませうの聲なく、たまたまかるい所から頼みに來ても、始めが大事ぞと、六枚肩で乗りちらして行くゆゑ、たいそうな醫者殿ぢやと後をこはがり、身を持つた家からは、飲みつけぬ藥に急にはのまぬ物ゆゑ、折角のつて出ても、清水北野の繪馬はおろか、森の松の數、三年坂の石の數明細におぼえて、今の療治は本草にうといの、萬病回春に、あつらへでのあまい療治本なりなぞと、責りかけてみる程、あのやうに理窟にかゝはらしやつては、心もとないと呼び人のないに、こちらからも行かれず、北白川は京のたる事までわかき所なれども、學問ばかりではゆかぬ世上を知らぬ故なり。此の根精かなければ、藥もよはるべきにあらず。すこしの風にもさわぐ故、藪醫者と名のりかけても、のみてのあるが上手なるべし。同じ町内に八百山菜安とて、醫道重寶記を讀みたれば、藥師如來を信仰して、霍亂とは

ゝらんとおぼえ、人がにはとりのたまごを、鶏卵といふを聞きて、あひるのたまごは、あひるらんと言うて、仔細らしく病家での自慢には、『今時の醫者、學問の何のといふ事を、近年こしらへ、本草綱目とやら申す書物を、あそこへもこゝへも寄り合うて讀んでゐられます故、わたくしが若い時は、根からはやらなんだ物でござれども、見ておいたがよいと存じて、本屋で損料借りにいたして取り寄せましたれば、何やら御經の様な字を並べて、日本人の讀めぬ事許り。さらば繪の所を見ようと開いて見ましたが、あれは確かあつちの植木屋か、魚屋の手帳さうにござる。其の上綱目と申すはめくらの事なれば、誰が讀んでも讀めぬといふ心で、綱目としておいた物さうなを、無理に讀まうとは皆呑込み違ひと存ずる。』と、賢さうにしやべれば、病家にて『しからばお前は、學問なしに御療治なされますか。』といへば、『手前はいさゝか仔細あつて、天竺にて釋迦如來の合醫者、耆婆といへる名醫の、自筆の療治本を持つて居るゆゑ、中々學問におよばぬ、斯様なものは拜んでおかれたがよい。』と、薬箱より取り出すを見れば、中條流の平假名の本なり。人々おどろき『天竺では、梵字と申すを用ゐますると承りましたが、是れはどういたした事でござる。』と不審がれば、『その筈〳〵、これは耆婆の娘子へ、かたみに書いてやられた本ゆゑ假字でござる。』と、につこりともせずいふに、興もあすも醒果どほり五條邊に、春雨屋の諸助といふ、かくれなき大酒屋の旦那、町人のいらざる事と、人のとむる

をも用ゐず、天文を見ならひ暦數を考へおぼえ、誰がいうてきかしたか、暦のはじめに書いてある玉の様な物は世界の圖にて、世界も此の世界を出て外から見れば、あの玉のやうなものに見ゆれども、いづれも世界のうちに居るゆゑ、見えがたしと聞きて、何とぞ世界の外へ出て見たい物ぢやがと、毎日面屋の大屋根へあがつて空を考へ、踏みはづして飛石の上へどうと落ち、したゝか打撲のいたみつよきゆゑ、「ヤレ此中引越してござつた醫者殿、近所ぢやに呼んで來い」と、北川佐仲をまねき、「打撲の藥を下されませい。」といへば、しばらく考へ、「此時是れ春分陽氣すゝんで蒼陰しづむ」とひとり言いうて居るゆゑ、家内は「申し御醫者様、八卦のやうな事仰せられませずと、うちみの藥」とせけば、病人は腰のつがひ、したゝか打ちくじきて痛みながら、醫者の高上ばるに負けまじきと、「毎日屋根へあがる事三十一度、四分度の一度もおちた事は御座りませぬに、いつも十一けたの梯子をさしまするに、手代共が取り違へて、十三階の閏月の梯子をかけました故、算用の餘る所を踏みはづしました。あいた〳〵」といへば佐仲眼をとぢて、「皆の衆是れ見さつしやれい。いづれも當分の事とおぼしめさうが、此のうちみは梯子をのぼりしやれぬ先から催した事ぢや。是れ餘ほどむづかしい病なれば、養療をしてはすむまい、内證から仕かけませう。」と匕おつ取り、「七十八の轉に困く」といふを、手代共あきれはてて、「いかにもつたいを附けるとて、屋根から落ちたを、梯子のぼらぬ先からとおぼした

事とは、あまりな事ぢや。」病人を座敷へかついて行き、のまさぬ心で藥はもらうて歸しける內、おのづから痛みもやはらぎ、立居もなれども、用心のため八百山菜安を呼べば、しりがるに飛んで來り、『おまくれた療治ではまゐるまい。たしなみに覺えてゐます程に、針一本いたして進ぜう。』と、くわつちくわつち打つほいの、鍼の音はよかりしが、此の針引いてもしやくつても抜けねば、菜安せかるゝ程抜けず、外に一本たてて又たてたれば、それも抜けず、又一本たてて三本を一所に引いてみれば、病人こたへかねて、そろそろ色がはりかする故、內儀も手代も、『是れは菜安殿、手前の旦那をば何とめさるゝ。』と、ちと詞に角を立つれば、菜安すこしもせく氣色なく、『食椀一つと元結一把に、編笠杖錐一本出さるべし、抜きやうあり。』との事ゆゑ、心得ずながらこれを出せば、菜安もつともらしく、飯の椀の兩はたを錐にてもみ、それへ元結を兩方より通し、よき加減に切つて、此の椀を病人の腹なる針の上へおほひ、背中へ元結を廻してむすび、扨立たせて帶をさせ、編笠をきせ杖をつかせければ、家內きもをつぶし、『是れで針が抜けるとは合點が參らぬ。』といへば、病人の手を引きて、『鍼を習うたる師匠の許へ、抜きてもらひに行く、サアござれ。』というたる由、はなしを承つたる。」と、上肥次郎物語いたされける。

## 三　細工の上手自慢を謂ひ勝の座敷

主景清申し附けられまして、六波羅後藤にほらされましたと同じ形でござる、卒爾ながら御脇指の身を見ませう。」とすこし拔きかけ、「あつぱれ見事、これは備前物と見ました。もしも澤瀉守光ではござらぬか。」といへば、「驚き入りました。其の子の額光でござる。」といふに、清六一座へ、「何とお聞きなれたか、鯉口を放すかはなさぬで、見わくる事はならぬ事でござる。自體わたくしを芝居茶屋させて置くは、惜しい事ぢやと申すげにござる。」との詞に、其の座に居あはせし、笹屋の平七といへる茶器商人こらへかねて、「外の舗で三分に沽る茶杓も、手前の舗では貳匁づゝにはゆきます。それはなぜにといふに、手前が店へさへ出てゐれば、口上に感じ、ひとつは手前が人品のよいのに恥ぢて、まけよとは言はぬやうになりましてござる。それゆゑ次第に金がたまりまして、皆よろこんで下されいは、去冬も仕まひしまうて、銀が貳貫三百貳拾三匁貳分五厘のこりました。其の外に一歩も三つか、錢も四貫八百二十一文かのびになりました。是れと申すも亭主の發明と、不發明でちがふ所でござる。かやうに申しても、いづれも譃であらうかと思しめせばわるい、ちよと歸つて金を取つて來て見せませうか。」と、是れは又身上を持自慢なれども、「夜中と申し餘程間もござるに、誰疑ふものは御座らぬ。ひらに御無用。」と止めけるとなん。されば唐土の孟嘗君といへる人は、一藝さへあれば、いか樣なる輕き藝にても、お客分とて格式よく、あひしらひ、扶持して置かれし故、函谷の關を通る時、雞の鳴

く眞似をする者、召し連れし内にありて、高き木へのぼり一聲鳴きければ、誠の庭鳥も聲々鳴きつたへて、關をあけけるゆゑ、後より追手のかゝらぬ内に、なんなく關をのがれ通られしとかや。此のともがらの自慢はのけおいて、召しかゝへ置かば、何ぞの用には立つべき者共なり。」とこそ語られける。左の座にひかへたる、佐々木高綱横手を打つて、「扨々左樣なもの共の、有るといふ事を存じたらば、宇治川の先陣は、かねて鎌倉を立ちける時より、思ひまうけたる事なれども、梶原殿は聞ゆる弓取、既に乘り勝たれさうな所を、馬のはるびがのび候、鞍がへされて怪我あるなと、たばかつて乘りかつたり。其の今御はなしなさるゝ遠江屋の清六が樣なるものに、前かたに近付にもなりたらば、鎌倉をたゝぬ内に、梶原殿へ入りこませ置いて、まづ今日宇治川といふ朝、梶原殿用かけらるゝ所へ御見舞ひ申させ、長噺をさせて、京から難波へ行くに舟から河内が見えまする、それについて河内の山のうしろは、大和でござりますと、わき道へかゝる内に、先陣をすまして仕まはうが、よい道理ぢやものを。」と笑はれければ、堀藤次まかり出でて、「其れでさやうど思ひあたつた事がござりまする。拙者が存じた浪人に、高楊枝左平次と申すがござるが、手習子を取つても六七人に過ぎず、ありつくべきいひ立てはなく、貧朝夕、すこしづゝ療治して、自分に風でもひけば、手療治の藥煎じかくる所へ、鹿谷三左衛門といふ友達が來て、「御自身の藥をまゐるは、自薬をなさるゝ道理でござるに、御無用。」とい

こしい、笑ひながら、「今時身共ほどに、道具の目利するものは又外にござらぬ。それゆゑ方々から頼みにまゐる。」と、一角の根附を出し、「かけ目三匁七分あり、千貮百雙かへにまけて、およそ三貫六百目ふ所。」と見すれば、三左衛門つひに一角をみたる事もなく相場も知らねば、「象牙に似て、ちと色にあぶらの見ゆる物ぢやが、扨々高直な物でござる。」と取りまはして見、「わたくし肝煎りて賣つて進じませう。」といへば、「是れを賣つてさへ下されば、御禮として古筆とも見えず、新筆とも見えぬ状が一通ござる。掛物になされたらば随分やすう取つて、金でならば十七八兩、銀でならば壹貫目餘りが所はたしかに御座る、是れを進じませう。」と取り出すを見れば、煤けたれども、文字あきらかに王羲之とあり。「是れは結構な物といたゞき、猶奥をひらいて見れば、平野屋の七兵衛これをうつす、と書いてあるにぞ、三左衛門も力をおとしければ、左平次眼玉をむいて、「ハテ扨貴様には、道具のすぢが不案内と見えました、王羲之が筆は又も世にあるべし、平野屋の七兵衛といふ古筆は、つひに古筆鑑にも載らず、聞きおよんだる事もないに、此の様な惡筆で、此の結構な紙に王羲之の書かれた物を、うつして置くといふのぶとい所は、又と有るまじき名物。すべて道具は世に稀なるを以て、重寶とするにあらずや、嫌ならばよしにめされし。」と腹をたつるゆゑ、いへばさうでもあるかと、三左衛門感心にあやまり入り、「先年越前の敦賀へまゐりました時見ましたが、さる法華寺の石塔の内に、亡者の戒名の

ござれども、瑾物でござれば、墨が抜けませう物ならば、壹歩位に致しませう。あつたら紙に物が書いて有つて氣の毒な。』といふ故、三左衛門もほつとしてゐる内に、一角見せて置いたる先から、『此の鯨の蟬骨は、錢で二十八文ならば買ひたうござる。』と言うてきたるに返答なく、二色ながら左平次方へ持つて行き、『世界の者が皆盲で、埒が明きませぬ。』と云うて戻せば、左平次は佛書も少し讀みたる人にや、『エヽ、縁なき衆生は度し難きぢやナア。』といつて濟んだる由承りし。」と申されける。

# 鎌倉 諸藝袖日記卷之五目錄

# 鎌倉 諸藝袖日記 巻之五

## 一 山伏の墨色を見事な頼み人

大江廣元すゝみ出でて、「おの〳〵、先刻よりの詮、すでに時をうつせり。我が君にも御退屈あそばさるべし、今日の物語はこれまでにて然るべし」と申されければ、頼朝卿きこしめされ、「廣元申さる、尤なる事なれども、いまだ其方話をいたさず、御所望」の由なりければ、謹んで「御退屈さへなされずば、はゞかりながら物語一つ仕るべし。これは各々へ對して申す間、御聞き候へ」と諸大名方へむかひて、「前かど拙者いまだ京都にまかりありし時分、名譽法印といふ山伏事の外はやり、生不動のやうに取沙汰いたしたる所、此の法印のなりたちを尋ぬるに、最初は町人の手代なりしが、ふとしたる思ひつきにて浪人ぶんと立てて、侍にはなりしかども、差しつけぬ刀のとりさばき、よそへ行きて座敷へ直るにも、刀を抜くすべを知らず。是れは芝居にては、大殿のお前も家老が刀をさいて行くを見て來て、抜かぬものと心得しより、侍はつつぱつてゐる物とおぼえ、人により、め込まれて山伏となりけるが、修驗の道はもとより不案内なれども、口辯舌にまかせ卜なひける程に、運やよか

りけん、工面やよかりけん、門前に市を那須與一家來、口扇船右衛門とは、わかい時分より懇なるゆゑか、ある時船右衛門法印方へたづねて、久々にて對面して「其方ことに若い時より、かやうの事を知らぬといふ事は、それがしよく存じたり。何として俄に、うらなひの名人にはなられたる事ぞ。尤も三日向顔せざれば、其の心はかりがたしとは申せども、近頃もつて不審に存ずる。」といへば、「御不審もつともにて候。第一賢い者が、うらなひを頼みに來るものには有らず、釋迦でも孔子でも、たのむ心で此方の門口踏みこゆると否や、手前よりは五歩通りも阿房になるは知れた事なり。嫁取り家屋敷もとむる事などのよい事は、あの方より氣色がちがうて、わつきりとして來るに、その外來るほどの人仕合よくて、うらなひを頼みに來るは一人もなきものなり。座敷へあがると否や、御自分にはよろしからぬ事にて御出でと見請けたとかけるに、十人に十人ながらあたるものにて、それからはのりが來るゆゑ、いか樣にも問ひおとしてうらなふ事なり。」といふ所へ、ものまう嚴重に、裏つけの上下着たる四十歳ばかりの侍、若黨二人道具持挾箱にて來り、「さる方の家來で御座るが、ちとお頼み申したい事が有つてまゐりし。」との儀、すなはち玄關より通せば、腰もと共がうしろ帯長々と結びさげて、煙草盆御茶とはこぶ體たらく、かやうの渡世もかざりがおもと見えたる内に、件の侍、「外の儀でもおりない、書判が見てもらひましたい。」と、はさん箱に入れさせ來りしを取り出させ、奉書

の紙に書きて、上を大直紙につゝみたるを出せり。法印是れを手に取り上げて、見てむかうへ投げすてて立ちければ、侍あわてて取り納めける時、法印は手水して「只今の御判いま一度是れへ」と受取りおしいたゞき「最前麁相にうけとりましたが、これはたいていの墨色ではござりませぬ。高位高官、さては大名の御判と見ました。御自分の判ならば、今日中に大名に御なりなさるゝ墨色」と、おし戴き〳〵敬へば、侍大きに肝をけし「さて〳〵承り及びしよりは、不思議の御名人かな、何をかくしませうぞ、わたくし事は念非の大夫が家来でござるが、主人大夫儀近ごろ病気おもく、さまざまに薬祈禱しるしなきゆゑ、書判を見せて来る樣にと申し附けられましたれども、大名の判とあつては沙汰もいかゞぢやほどに、その方が判のやうにいたして、見せて来いとの儀でござるに、おどろき入りましてこそござれ」といへば、「左樣で御座りませう。したが此の御判の墨色をかんがへまするに、長命はなされぬ所がござる。是れは五大力明王の法を修して、邪氣をしりぞけたれば、長壽はおぼしめす儘」といふに、此のすさまじうあうたる物のふ「しからば罷り歸つて、主人へ申しきかせませうが、その御修法にはお物入などもある事か」と問ふに、「かるい事ですみまする、金子三百兩程ではとゝのひます」といふに、「大名のいのち、三百兩は論にござらぬ、さだめてお頼み申さるゝで御座らう」とて罷りかへりぬ。法印手を打つて、「サア何でもよい鳥がかゝつた、鴨のいり鳥でもして御客

をもてなせ」とよろこべば、腰元ども酒の燗してもつて来るに、日扇船右衛門一圓合點ゆかず、「あれはどうして考へられし物ぞ。」といへば、法印あざわらひ、「あれほどの侍が、我が判なればこゝへ来て、直に書くはずなるに、大事さうに封箱へ入れて来たからは、主の判であらうと存じたれども、念のために向うへなげて見たれば、主人の判故びつくりせしつらつき、そこへ附け込んで、其の上は辯吉次第の斷」といへば、船右衛門も大笑ひして歸りし由、主人の輿一物語にて承りたる。」とぞ申されける。

## 二　繪師の下手は襖に恥をかく山

結城七郎朝まさ打ちわらひ、「御物語おもしろくこそ存ずれ。某もひとつ話つかまつり、御なぐさみにもいたしませう。此のまへ結城部の内に、狩野茂信といふ繪師あり。是はそれなる上藤殿などの御一家、狩野介茂光の弟子にて、隨分と精を出し畫いてみても、兎角墨色さつぱりとゆかず。山をかけば枯木のやうになり、梅をかけば枝ぶり桃にまぎれて、これからは掛物にさするつもりに、大かた立に書いて、朱印をおして人にやれども、先きまではもみくしやにして取つて置き、半紙なれば紙屑になりとなるにと、引き裂いて棄てらるゝとも知らず、名からきさへ號いたる心から、自分には上手ぢやと心得て居れども、畫名日々にひくかりけり。或時おもての方に案内して、歴々の侍、御目

れし樣な物でござれば、向後大看板に出し、小山判官樣御免、須波利流繪所と、隨分世間へも臂をはりませうと、有りがたうこそ存ずれ、宜しく御禮仰せ上げられ下さるべし。」といへば、此の侍もてあぐみて『それは主人の名が出て迷惑な、無用のいたり。』といふほど「お大名よりくだされたる名、何の內證ですましませう。」と合點せぬゆゑ、繪代は銀拾枚の約束なれども、段々付け上げて金子三十兩にて、すばりの流といふ看板を、出させぬやうにあつかひて歸れば、茂信繪にては所詮渡世ゆきがたく、ちつとなりとも我がかいた繪に非難いふ人あれば、夫れをとりこにかゝつて、ねだり取りにしける程に、身上めつきりと仕直し、斬髮になつて狩野分德と名をあらため、京へのぼり、繪は次にして蠅取豆の傳授といふことを工夫仕出し、夏になれば大鋪を張つて、かやうの物を沽るには鋪附あしくては位がないと、奥の間まで見えすくやうに仕立て、金襖銀襖かざり立て、萬一此の仕方手代などよりもれて、外に贋がつくまいものでもない、折角身共が三四年かゝつて、枕をわつてあみ出したことを、人々に仕てとられてはたたぬと、國々のこる所なく出店を出しける。此の物入かぎりもなき事なれども、すばりの格にて仕たあげる金銀のこらず入れて、何でも大あたりの胸算用。そもく此の工夫といふは、四國には犬神といふ物ありて、犬に美食を見せながら數日くはせず、ころしたる靈をまつりて人につかす事とかや、それより思ひつけて、蠅虎一疋箱の內へ入れて、其の中へ白豆二三

十粒入れおき、かたく蓋をして置く時、彼のはへとりぐも食物なき故、此の豆を食はん／＼とあせれども、堅き物にて力およばず、日数ふる中に蜘蛛は死するなり。其の蜘蛛の一念その豆へいつて、此の豆おのづから蠅を見れば、走りまはつて蠅にあたる。其の氣にあたりたる蠅ことごとく死するなるべしと、工夫はして見たれども、つひにして見たる事もなく、屑から大見世のくはだて、其の上やすく賣つては人の信仰がないと、一包にはひとり豆三粒入れて唐紙につゝみ、一流神法排蠅豆、洛陽分德軒製と朱唐紙にておし、代金百疋、四つゝみ金壹兩と定め、家々になくてはかなはぬ物なれば、四十萬軒で拾萬兩とつもり、扨日本國中へひろめある段になりては、金の置きどころあるべからずと、さまざまに才覺して、借錢をすること八十三軒、ササといふ段になつて、間にあふまじきと、見世出さぬ先から金銀を借り置く、嚴しきおびたゞしき事にて、四月五日といふに、京の本店をはじめ、諸國の出見世同日に商ひをはじめけるに、たとひ能書の通りに蠅がとれてからが、金壹分に誰が買ふぞと添法らせれば、國々の手代どもせいて來て、め々から蠅を取りませ、見世中へあらし、豆を其の前へころばせて取らせて見せたらば、思ひつく事もやと、近所の牛馬おほき所へたのみ、蠅の二三百づゝといけ取りにして來をかけ、扨其の蠅とれ豆を、見世へ人の寄る時蒔いて見せても、豆もはしり廻らねば、蠅は其の豆の上へあがりてぶう／＼といふ聲、近所まぢかに、あたゞたはい、人のいやがる蠅を、

わざ〳〵取り寄せて町中へ來び歩き、不屆な商賣おやと腹たてて、つきあはねば、買ひ人のないと人の惡み出したとに、身代踏へも先へも行かず、いかゞはせんと思ひける時、さすがは繪師の果てとて、或寺の開帳に不動の繪像を見てよこ手を打ち、「明王でも火にやけてござれば、凡夫の内證に火のふるは無理でない」と發明して、本町出見世ことごとく仕まひ、大津へ宿がへして、其に衣瓢箪で鯰のおさへしたる世わたり、袷時にも裏につける木綿に事を缺き、古かたびらをつけて、是れは袷かと思へばかたびら、かたびらかと見れば袷にて、どちらへも附かぬ物なればとて、前かどのすぼりを思ひ出しあはびらと名けづて、著歩きしとなん。」

三　連歌師の櫛商賣ひいてみる友達

一貂は白象となりつゝ、白雲にうち乘りて、西の空に行かれても、あとに金子を置いて行かれねば、有りがたからぬ利勝かな。今の世にも風雅とやらんになづみて、數代の櫛問屋しながら、連歌師となりたる古牛といへるは、生質優美にして、雪月花にのみ心ありて、商賣の筋はなはだ疎く、朝夕附句のさしあひぐしをのみくりて、少しにても風流な事をすきぐしなりけるが、次第に門弟ひろまり、名もたかく聞えし。爰に鳥羽屋の長右衛門というて、同商賣なれども、是れはまた風雅といふ事は、貧乏になるまじなひの事かとおぼえて、渡世の軍配かしこく、櫛の齒をひくやうに手代をまはし、もた

吟ずる程、十八匁六分五リン、十一匁三分八リン。』といよ〱嵩高に帳合するにこまり、こちらが夜食の段になれば、あちらも帳あひをやすみ、すべて斯様につきあひ悪しかりけるに、兩家共にはかに中直りして、當正月二日兩方の女房子一門共に、町内の衆を客にして、大座敷を借りての出ぶるまひ、酒宴おびたゞしく、舞子が舞へば太鼓笛のねいらぬ一興、町の年寄申さるゝは、『是れまでほど互に中の悪かりしに、何として和睦はなされたる事にや。』といへば、兩人うち笑ひ、『手代おほくつかふ身上に、鄰同志の事なれば、やゝもすれば兩方の手代がなれ合ひて、あそびにもまゐり、また主人にかくして内證商ひなどいたすから、大方親方の身代はつぶすものなれば、かねて古半と此の長右衛門申し合はせ、大きに不和なる體に見せかけ、そしり合うて古半方の手代は手前にてこゝろみ、わたくし方の手代は、古半方にてこゝろみさするやうにいたした故、悪いやつとよいものが段々知れて、ぬけめがない故、兩人の身上、此の七八年にめつきりと仕上げて、拾萬兩以上の身上と、互にまかりなりたり。いつがいつまで面むきを背いてはいかゞと存じ、只今うちあけてお話し申す。最早十萬兩といふ物をとらへては、此の謀におよばぬ。』と語れば、町の者共いづれも横手を打つて感じ入りけり。これより兩家次第ににぎはひ、藏に藏をたてならべ、鄰同志の兩長者、櫛の齒のほそき商ひも、商人は仕廻しひとつにて、兩家ともに家名をあらため、子供にゆづりて、長右衛門方は大黒屋の槌右衛

門、古牛がには夜屋の鶴兵衛とて、寶をうみ出すと、金をつみ寄するとに隙なし。只今もつぱら繁昌いたす。」由、五郎丸申し上げられければ、君御感なゝめならず。よはひは長き鶴が岡、光をみがく鎌倉の、をさまる時を祝せし和談、いづれも御褒美くだされて、御寵ふかゝ入り給へば、いさみよろこび退出ある、春心こそ目出たけれ。

鎌倉諸藝袖日記 大尾

# 世間子息氣質

江島其磧

# 序

人生まれて、八歳より小學に入り、十有五にして大學に至る、古の法なり。今時の子供を見るに、八歳にて煙管を咬へ、十有五にして死一倍を借つて、傾城を請出す魂膽、是れ人たるものゝ道と思へり。宜なるかな。教へずして人生まれながらに知るものにあらざれば、若子様ともて囃されて我儘に育ち、無性に高うとまつて、己が家業に心を寄せるは、至らぬかなと賤しめ、諸藝色遊びにかゝつて放埒に身を持つを、銀持の風俗は斯くこそと思ひ込んで、自ら非を改むる心はなくて、分際不相應の遊びに親の譲り銀を皆になし、昨日までは大臣と呼びし男、今日は太鼓の鍼立坊となつて、老いて辛勞する人あまたなり。是れ皆幼少より父子の禮儀たがひ、親は子に孝行をつくし、身の脂を出して儲けてあてがひ、子は親を不粹なりと見くだし、今あの堅さでは世間はつとまりませぬ、隨分意見致せど、誰に似てか片意地で直されぬに困ると、彼方此方に變つたる世間の子息氣質、様々なる事を書き集めて、すゞに題號として梓に彫め、孝にすゝむる一助ならんかし。

正徳五ッの年の秋　　其磧

# 世間子息氣質一之卷目錄

# 世間子息氣質　一之卷

## 木賊賣は心を磨く正直な百姓形氣

昔時誰か云ひけん、親苦勞する其の子樂する孫乞食すると、世界の子供の行跡が未然に符へ、いひ置きし言葉は拙けれども、信なる金言、今なほ是れを感じぬ。世に愛する月花にも心をよせず、胸に算盤を忘れずして、常住香の物菜、此の外にはいかな〳〵正月の睨鯛を壹枚、松茸十本貳分する時も目に見る許り、咽が乾けば白湯に香煎、油火も眞中に一つ點し、是れを寐さまに消して、鼠があれても、膳棚にたしなみの香置かねば氣遣ひなく、盆正月に着るものせず、夏冬内では袖なしの襦袢一つで暮し、年中始末に身を固め、金をのばして取込んだやと、子故の闇に黒き髮の白くなるまで其身を使ひ、倅子に榮耀させて我は手代同然に働き、萬貫目の銀に世間の面白き事を見せず、歳々に呻かせ一生狂ひ死して、一家一門家來まで、著古しの布子一つ形見とて、遣る事の嫌ひな親父なれば、箸おたし外へ散らさず、金銀家藏釜の下の灰まで手も觸らさず、一子に讓りを請けて、住に置かれし商賣、又は棚賃、貸金の利積りして、これ程年中はひれば、商ひせんと、世間をつとめ大勢の手代を

引き廻し、氣骨を折らでも緩りと暮さるゝ世を、親父無分別にて無益の世話を燒かれし事よと、高ぐくりして二十の前後より商賣やめて、無用の竹杖おき頭巾、長柄の傘さしかけさせ、世上構はずのたかなる顔附、いかに己が金銀遣うてすればとて天命を知らず、人は十三歲まではわきまへなく、其れより二十四五までは親の指圖をうけ、其の後は我と世を稼ぎ、四十五までに一生の家をかため、遊樂する事に極まれり。何ぞ若隱居とて男盛りのつとめを止め、多くの家來に暇を出し、外なる主取りさせ、末を賴みしかひなく難儀に逢はし、世の人の請拂ひする二季の際に、手飼の座頭に三味線引かせ、女房に琴、腰元に茶を運ばせ、萬しまうた屋の氣散じ、心積りの算用よりは毎日の奢りに、親の儲け溜められし金銀そろ〳〵減り出し、程なく內證に穴のあく屋根をも葺かず、孫の代には古家一軒殘らぬ樣になつて果てる物ぞかし。爰に奧丹波より都へ木賊賣に出る親仁、本卦に還る年まで、夫婦の中に子といふもの無くて、我等女夫は一代者と觀念して、物を貯蓄へる所存なければ、其の日拂ひにして心の樂しみ、世にいふ清貧とは是れなるべし。今日も木賊荷うて京の方へ賣りに出でしが、去年よりは辛勞に覺ゆるは、一つも寄る年の加減と、老の坂に杖して息む所に、十一二歲なる小賢しき小坊主、大きなる鼻毛拔を持つて跡より來り、不審に思ひ近づけて樣子を聞けば、此の小坊主木賊賣の親仁を見て、「そなた身には辛勞すれども心に勞する事なく、女夫中よく惡念のなきは、子といふも

人目になつて病つき、蟲など出て後々までの煩ひとなれば、幼少の時は息災なを勝にして、ありたき儘に育て、骨身も堅まり物の心も辨へる時分より、萬の事を教ふれば、早く合點し、意見もよく聽き入れる物なりと、それなりけりに育て上げて、後には持て餘して勘當する事、是れみな親の科ぞかし。木竹を造るにも、若き内よりそろ〳〵矯め造れば、思ふ如くなれり。ひねて後矯めんとすれば、枝折れ枯れ凋むが如し。又其の子成人して己と恥かしき事を知り、惡しき曲を直さんとすれば懶く、元氣を減らし、或は窮屈にて癆瘵となり、親より先だち父母一生の思ひとなれり。又己と發起もせず意見をも用ゐざる時は、親は怒り子は恨み、互に憤り惡人となつて、家を失ひ身を亡ぼす人多し。凡そ世界の惡人親の仕業ならずして、誰が業といふべき。殊更近年は親の心から上歌舞伎になつて、身代不相應に奢り、子供に遊藝を勵ませ、家業の事は親父が捌き、年中打囃子に掛らせ置き、町參會に御子息のお鼓、此中東山の稽古能で承りましたが、中々扶持人の役者も及ぶまいと、是れのゝ評判で御座つたと、賞めそやすを喜び、いよ〳〵親父乘つて來て、内縁を求めて貴人の御能の役を勤めさせ、家の面目世の外聞と、無性に金銀入れて習ひ事を傳受させ、身共が倅子はもはや亂道成寺を許されましたと、子自慢せらるゝ中に、此の若子樣よい事にして、不斷よい衆交際して、浮世の揺ぎを知らず、打囃子と好色に身を染め、數年親の貯へ置かれし金銀我が物と盗み使ひ、隱居の心當の小判

勘當は請太刀親の家を鞘走る侍形氣

見せ掛け数珠に、世話と念佛をくり混ぜて、人目に後世願ひと思はするも商ひの一手なり。是れ正眞の鬼に著せたる衣の棚、家造り綺麗に袈裟衣の商賣手廣く、江戸大坂に店を出し、次第分限となつて、何不足なき身上なれども、年久しく子のなき事を嘆き、諸佛神へ祈誓をかけ、偶男子を設け、花に月にも眺め大事に育てし甲斐ありて、十六歳にて元服させ、甚七と名を改め、お華主の知行寺其のほか問屋方をありかせ、天晴器量の若い者と、兩人の親は我が子自慢して、此の上の富貴は何にても望みなし、此の子が嫁になるべき容儀もがなと、是れを聞き立てらるゝより外なく、成人の子を甚七々々と猫撫で聲にて、寵愛限りなかりしが、甚七町人に似合はざる武藝を好み、我が内に木馬を拵へ、知恩院門前に馬上の達者の牢人あるを師と頼み、朝暮馬に乘り習ひ、秘傳の手綱の大事を傳はり、是れより兵術を稽古し、座敷の疊を上げさせ、板敷にして毎日手代小者を寄せ、竹刀打の相手とし、萬事を止めて此の藝を勵む事大方ならず。或時は卷藁をたて、弓を射て手前を試み、是れが募りて御幸町の具足屋へ鎧兜を誂へ、縅し立てたる物具を大床に飾り、平生も武士行儀に身を堅め、湯風呂へ入るにも一腰を離さず、軍書を讀みて古の良將の軍立をさみし、「甲斐の信玄は智謀武勇を兼ね備へて、思慮深き名將といへども、信州川中島の合戰の時、山本勘助を頼みにして、徒らに謙信

の陣を西條山に見やつて、川端に備へを立てられず、夜の間に川を謙信に渡され、敗北せられしは油斷にあらずや。其の時我等居るならば、云ふではないが、恐らく北越無雙の猛將と聞えし、長尾謙信の首を取つて見すべきものを、近頃殘念の至り。」と、腕を撫でて話するを聽かれ、愛子の事なれば、今までは見ぬ顔して居られしが、此の頃怪しからぬ行跡、親父もはやたまりかね、表へ立ち出で甚七を呼んで、「汝は知行取には爲るまいし、無益の武藝を嗜むこと曲事千萬。殊に家業は衣屋にて、出家衆を相手にせねばならぬ商賣、其の代りに佛書でも見れば、僧正衆のお咄の側にもなつて御意に入り、七條の袈裟でも、幢幡の一流でも、つい請取るまい物でない。向後急度兵法を止めにして、袈裟衣の誂文を請取るやうに致せ。」と、嚴しく意見して奥へはひらるれば、甚七親父の跡を見送り、若い手代を近づけ、「今のおれが居すまひを見たか、氣の短い親父なれば、意見の上で擂木でも振り上げられまい物でない。所をしやんと身を捻れば、此方には三分の強味あつて、親父方には六分の弱味あり。兎角にてうとせられても、あの構へでは中々喰はさるゝ事でない。是れが黄石公が秘せし、一打還身と云ふ虎の卷の大事なるか、なんと身共が心掛けの程を見て置け。」と、額に皺よせて臍を採んで云はれし意見は他所に聞き、只兵法の自慢して、いよ〳〵さかんになつて來れば、寵愛の倅なれど、親父分別して見らるゝ程、怖ろしうて夜が寐られず。世にある若氣の至りとて、傾城狂ひ野郎遊びは、金銀を

皆になし、末々身代がつぶれうかといふ案じより外になし。然るに我が子の甚七が行作は、明日が日何の樣な血腥い事を仕出來して、親の首に繩を掛けうも知れ難しと、是れより氣遣ひ絶えずして、町衆を頼み意見して貰はるれば、淺ましや偶うけ難き人身をうけて、町人となつて朽ち果つる事、此の世に生まれし甲斐はなし。是れ許りは釋迦如來がお出でなされて、四十九年が其の間、長々しい意見を述べ續けに仰せられても、聞き込む甚七では御座らぬ。手前商賣の衣の墨が白うなり、木馬に角が生ひて跳ねあるかうが、男と生まれ一旦思ひ込んだ事を飜す物でない。夫れ勇士の本意は心を變ぜざるを義とす。素町人等が分際で、一方の大將もせうと思ふ甚七に向ひ、武藝は商賣の邪魔で御座るとは推參なことと、爲思うて意見せらるゝ町衆に向ひて切刃廻せば、年寄も組中も我を折つて、さても一騎當千のたはけ者、相手にはならぬと、親父に向うて「大事の御子息で御座れど、甚七殿をお手前に置かせらるゝ御所存なら、御親子共に他町へ御座つて下されい。あの無分別の旗頭を、此の町に置きましては、何樣な災ひが出來て、年寄組へ難儀掛らうも存ぜぬ。勘當なされうとも、內證勘當の分では、親一門の難儀は遁れますまい。御思案なされ。」と、會所にて口々に申さるれば、親父も覺悟極めて、子を持たぬ昔と思へば悲しみもないと、母親にも諦めさせ、世間晴れての勘當、身から出した鏽身の脇指一腰許りで、親の家を立ち離れ、伏見の片脇に崩れ次第の家を二十五匁五分で貰ひ、漸う

こゝに獨り住み、微なる朝夕の煙を立て、蚊屋なしの夏の夜を凌ぎ、布團持たずの冬をおくり、扇の要を刻みて三年三月の日數を經る中に、西國大名のお通りの折柄、御祕藏の名馬と見えて、馬取七八人口について來りしが、何にか驚きけん馬取共を跳ね倒し一散に驅け出し、崩れかゝりし在家へ入りて跳ね廻れば、祖母嬶稚い子供ども怯お怖れてこけ廻れば、馬取どもおひ〳〵に馳せ來り、止めんとするに止らず、倦み果てて居る所を、甚七まかり出でて「御許されも候はば、憚りながら私乘り靜めて進ずべし。」といへば、侍分の者跡より來り「あの馬は古の小栗判官でも、とねに爲かねられし鬼鹿毛に似たるとて、横山栗毛と名づけられ主人の祕藏、是れに首尾よく乘る者は、廣い家中に僅か一兩人ならではなし。然るに己賤しき身として、乘り靜めんとは慮外千萬、得乘り靜めずば、此の馬の餌食とするが合點か。」と睨み附くれば、「成程乘り損じましたらば、如何やうにも御存分になるべし。」と、木綿布子の褄端とつて腰に挾み、寄るよと見えしがひらりと乘つて、兩鐙をしかと踏まへ、祕傳の手綱を持つて引き靜むるに、さしも猛かりし馬、弱々となつて自由になれば、侍大きに感じ、陸のお乘物に走り附き、御近習衆をもつて右の次第を申し上ぐれば、「其の者にも奉公致す、承れ。」との御意有り難く、御乘物の前にかしこまつて、早速御目見へ仕り、最初から主從の御契約申し上げ、栗毛拜しに召され、直にお國へ召し連れられ、段々御意に入りて、願ひの如く五百石

どりとなつて、年月嗜みし武藝の功、今此の時に顯はれぬ。

取附き世帶は表向を張つて居る太鼓形氣

世盛りの金花、山吹色の眞劍商ひ、兩替店に紺の長暖簾下げたる家の主人、預け金にて壹匁も損せず、肩のよい人と呼ばれ、次第に繁昌の軒を竝べて鄰を買ひ足し、十年以前とは格別の暮し、加賀笠著て下女につぎ〳〵の袋持たせて物參りせられし内儀は、おくさまと呼ばれて假初にも大乘物、兩脇に花やかなる腰元連れて、年がましき手代が附き、萬事を花麗に上歌舞伎なる最中に、生まれ合はせし總領の萬助が至り形氣、稚い時から辛い目を見ず饒かに育ちて、己が家業の日廻し銀の算用さへ知らず、覺え帳は上書する時に見たばかり、讀みおほせても公家にもならぬ三十一文字に首を傾け、韻字をふみて花を眺め、釜を煮やして雪を樂しみ、裏借家を毀つてかゝりを拵へ、夕暮の鞠に魯陽が戈を羨み、楊弓の射場で大金貝の看板に乘つたとて、一町へ強飯を配り、旦暮の遊び事の透には西東の色狂ひが仕事、今日は靈山の稽古能見物の歸りに、祇園町の文字方へお立ち寄り、例のお側去らずの太鼓共、お出でと聞くより招かざるに集まり來りて、喚り上げ奉る中にも、筒拔しの傳七といふ末社が、「此の頃西川端に宿を持ちて、はたご茶屋を仕る。あはれ見苦しくとも旦那お還りに、お腰を懸けられ下されなば、外聞かた〴〵有り難い仕合。」と、額を疊に摺り附けて申せば、御機嫌の善い折

にて、幸ひ此の座の色まじくらになりこむべしと、直に一座の者共を殘らずお供に召し連れられ、傳七方へ御來臨辱き仕合と、亭主は槌で白人まじりに、樣々の饗應に取附き世帶の借り道具、此の椀折敷の見苦しさ、きらりと仕易へてくれまいか。」と頭へ性なき旦那の御意、畏まつてお側に控へし飛び上りの休古、分別なしに握つたる吸物椀、前なる川へぼつと流せば、面白の有樣やと、大臣浮かれさせ給ひ、「とてもに折敷も流して見よ、氣が變つて可笑しからう。」と、無性なる御機嫌、是れはよい事仕出したと仕澄まし顏に、休古は又折敷をも流さんとするを、亭主驚き勝手より走り出で、こりや家主から只今借つて來た道具なるに、よい年をして何事ぞや。」と、むつと爲たる顏附、大臣見給ひ「借物でも金で返したら否とはいふまい。今の流れた氣色の面白さ、何よりの馳走ぞや。道具代は出さう程に、まそつと流して見せてくれよ。」との御意。「何が扨道具代としてお金を遣はさるゝからは、此の家なりともお望み次第にお流しなされませ。孰れもしておふさおふになされて、道具の混雜せぬ樣に景氣よう流しませうぞ。如何樣これは變つたお慰みごと、物馴れた透さぬ亭主なれば、半紙へし折り帳に綴ぢ硯引き寄せ、「へぎめの折敷五枚代金壹兩、さあ帳に附いた流した〳〵。」と聲を掛くれば、一座興をさまして手に〳〵川へ投げ込み、罪も報いも知らぬ顏附、亭主は道具に倂うつての直打書ニ此の赤繪の皿十枚銀貳百拾五匁、かな鍋が五十九匁、さし枕九つ三歩二朱、昨日買うて來た鯉一疋き

ら盥柳なる板代八十六匁、杉箸百ぜん二十三匁、友治杯金二兩、煙草盆煙管五本添へて壹兩壹歩、柱かけ插六十五匁、擂木壹本代八匁、杓子三本拾匁、女房共が櫛箱おはぐろ道具一式、合はせて五兩一歩四匁五分。されば是れぎりで家内の道具は、御眞向樣の表具が殘つたばかり。帳の附け序に、鄰の取揚婆の世帶道具も一所にお流しなされまいか。」といへば、殘りの末社詞を揃へ、「汝が日來旦那衆に貰ひ溜めの花を入れ置く、前巾着も出せ。」と取り附くを、「是れは許せ。」と嫌がれば、「其れはしこだめた壹歩が有る故出さぬか。壹歩ぐるみに代附して旦那から申し請くれば同じ道理。」太鼓持の前巾着は、よい客衆の土藏同然ぢや。其れを流させねば可笑しからず。」と、興がる程面白がつてせがめば、傳七手を合はせ「何を隱さう此の内には、女夫が物を預け置いた質の札が二十三枚、流すといふ縁が惡い。汝等が世話燒かいでさへ、流れさうで氣味が惡い。」と、大笑ひになつて、跡は亂酒の無性立ち、お籠輿に乘せまして直にお宿へおくらせ申し、さあ仕合の川流れと、亭主算盤はじいて見るに、時の間の道具代金銀合して五拾三兩貳歩貳朱と、大黑棚の悦びの鈴を鳴らす所へ、料理人下男濡れたる道具をさし擔ひて、松原からかたげて歸るは、此の趣向始まると、亭主其の儘川下に人を出し置き、箸かたしまで洩らさず上げさせ。帳附の代金は此の川に手も濡らさずの儲けと聞きぬ。されば人間一生の中に一度は色狂ひに取り亂さぬといふ事一人も無し。何卒面白き中程にて、神佛のお扣へあつて、此の

遊興をやめさせ給へば、居宅も賣り殘し商賣物も小體にして、渡世に取りつゝき、身を捨てゝ働きければ、町内世間の人親類の末々までも、今までは若氣と料簡して容しぬ。必ずさう善きかたへは歩まずして、大概が貧乏神に腰を押されて、とても續かぬ身代、今から通ひ止んだとて、遣ひ棄てた金銀が戻る物ではなし。僅かに知れたる此の世界、詰る所は腹切の仕舞ひと覺悟極めて、通ひ〳〵して行き當つた所では必ず死なぬものぞかし。萬助親父が表向嚴しういうても、内證の甘い所の窩を見透し、僅か貳三千兩など遣うたとて、耳八釜しう意見々々が聞きともない、ちと方便の狂言して、重ねて意見させられぬ樣に、懲しめの爲親父にちつと薦を踏ませう上、箱置きの木刀拵へ、郎[illegible]の仁兵衛が婆の血脈をもらひ來て、白小袖一つに百八の數珠一つ入れ、挾箱に一つに入れ置きなして封をつけ、腰元のくめに袖の下から黄なる物を握らせ、我が身の上の狂言の仕組を吹き込み、女共の髪結ふ二階につくね飯を上げさせて置き、四五日は一寸外へ出でずして、朝食、晝食、夜食、時々に据うる膳に向うて、苦い顔して一口も喰はず、先づ膳をやとさし置きて二階へ上つて、件のつくね飯をしたゝかせしめ、腹の城郭堅固にして置き、据る膳に佛樣か白人に据ゑた樣に其の儘さし置き、物案じ姿にて折節は欠伸をし、可笑しき事があつても隨分堪へて笑はねば、傍人は目を附けて、お物師のおひ腰元のくめを招き、「萬助が此の頃の體は合點が行かぬ、何所も惡いとは云はぬかと、氣の毒さうに問はるれば、お

物師腰元口を揃へ、「お心悪いとは仰せられませぬが、朝御膳夕御膳、お夜食共に微塵も上らず、人の
見ぬ所では涙を零して御座ります。」と云はせも果てず「其れを今までこちらが耳へ入れて呉れぬは胴
慾ぢや。正眞の世界に子といふものは繪にかかうというても、あの萬助より外にはない。旦那殿の朝
から晩まで世話焼かしやるも、有る上にも金をふやして、あの子に遣りたい〳〵と思うてのお世話ぢ
やに、何時からやら少々金を遣ふゆゑ、がみ〳〵と云はるゝも、あれが物が減らうかと、皆萬助を可
愛さの儘仰しやる事ぢや。先づ何にもせよ、夫れ程不食しては身が堪るまい。あの子が好物の料理を
して、先づ飯数を増してたも。」と、母人の心遣ひ、是れを何とも思はぬ倅子は、立ち所に罰も當り、
冥加にも竭きさうな物ぞかし。腰元のくめ萬助と仕組なれば、「とても生きて居ぬ身ぢやもの、何故に
飯くはうと、獨言を仰しやりましたれば、何うして進けましたとあがりは爲されますまい。此樣申し
たら萬助樣の、口がまめなとお叱りなされうも知らねども、おぬしのお部屋に挾箱に封附けて、大事
さうに取り廻して置かせられますは、私は胡散に存じます。」と口びら反らして申せば、「其れは心元
ない。」と萬助部屋に行きて、件の挾箱封切つて見給へば、死拵への一式なれば母親驚き、「此の頃は心
中が流行つて、荒神川原で米屋の子息とやらも死ぬる、唐崎濱にはびやうぶ屋の娘、鳥部山祇園林、
彼方此方に名を流して死んだ者が多ければ、これもてつきり其れであらうと、親父の耳へ入れられれ

ば、子がゆすりといふ仕掛を知らぬ、時代違ひの親父驚かれ、「外聞かたぐ\家の破滅、倅子がすいた女房なら、卑しい者の娘で有らうが、命には易へられぬ、今なりとも呼び迎へて取らすべし。」と、重手代に云ひ渡し、萬助に樣子を尋ねらるゝに、太夫花崎身請して添ひたいとの願ひ、「世に無い慣ひではなし、隨分直切つて請けて遣れ。」と、千兩の小判耳を揃へて聽いたりく\、息子が心中の狂言。

世間子息氣質一之卷 終

# 世間子息氣質二之巻目録

# 世間子息氣質 二之巻

## 意見はきかぬ藥心を直さぬ醫者形氣

倩世間を見るに、親より其の子萬事に劣り、其の孫愚かに、親に優れるは稀なり。第一今の人間往古とは氣根劣りて、諸事の藝者も極意まで習ひ得る事難し。醫學も一人に足らずして、俄剃の頭を振り、武士の具足とおもひ拵へたる淺葱縮緬の長羽織に、小脇指襞錦丁寧に拵へ、我を見知れと他國の大場に住居して、名字を御由たる藤氏門弟にあらはし、化粧造りの玄關構へ、押しだしての療治するなど、人の命は大切なるものなるに、此の生死の境二つ一つの大事、藥師人を殺すとはこれなるべし。また茶湯は和朝の風俗人の交はり、心の花香になるのひとつなり。これに入りての徳は、常住萬事に氣の隨く所格別なり。今の町人茶事は榮耀と心得、諸道具に金銀を費し、數寄屋長露路に前栽昌の道をせばめ、美食を好み、衣服を更め、萬に淸らを盡し、此の奢りに家を失ふ人、かしこき都にも數多あり。さはいへど此の事辨へなきは、人間不意にして口惜しき事のみ、或は[illegible]にしても其の志一つなり。元これ作意なれば、一通り手を引かれ、其の上の道理さへわからず、何事にても

昔しからな世の樂しみなるに、皆人心盡せし振舞に逢ひながら、其の座を立てば、花の生けやう炭の形を議り迄。これを習ひ得て茶人の名を附けて見る程には、押取つて十年の稽古なくては成り難し。惣て連俳、立花、獨り狂言、彼樣の類は銘々の自慢、さし當つて善惡の沙汰もならざる事ぞかし。手跡、碁音曲などは、忽ちに知れて人に目あり耳あり、殊更世間に有德仁と、持て囃さるゝ程の子息の惡筆なるは、內證に何樣な藝が有らうが、見落さるれば、人たるべきもの嗜なべきは、第一は筆道修行の後、學文の外なしと物知れる人のいへるを、子息殿聞いて歸られ、今まで百色も習ひかゝりし藝能をさらりと止めて、俄に書物とゝのへ、浪人儒者の許へ通ひ、四書の素讀大方に濟むと、我等儒學仕るとて、はや鼻の先へ現はし、人を非に見て我が智を振舞ひ、親父朝暮の看經を聞いて、何をたはけな事さるゝ、極樂の地獄のといふ事、今日を食はう爲の賣僧のいへる虛言といひ破り、佛法を異端と貶しめ、今までの形氣と變り、無性に仔細らしう爲つて、出入の者が銀借りに來て、「是れは若旦那には此のお日和のよいに、何れへもお慰みにお出ではなされませぬぞ。內方に許り御座りましてはお氣が詰りませう。さりながらお前の事は近所の御子息方の身持の手本と、陰で人每に甚う讃めます事で御座ります。」と追從を云へば、其の返答はせずして唐扇子をしやに構へ、「巧言令色鮮矣仁」といふて、其方が樣に輕薄を本とする者は、我が本心の德を失ふ、厚顏者とは汝が事ぞや。下代共が見習へ

ば惡い、重ねて出入無用。」といひて、可笑し氣なる顏をすれば、數年入り來る者もそひよりなくて、盆正月の禮にさへ來惡がり、賑やかに有りし家滅切と寂しうなりて、手代共氣の毒がり、「若旦那の學問は、此の家の破滅の基ぢや。何やら五倫の道だていうて、身分も商ひの助けになる事はせいで、子の曰ふ仰せらるゝ手間で、ちと算盤を稽古なされたら、お家のお爲にならう。」と親旦那の耳に入れば、親父尤もと點頭き子息を呼び附け、「汝學問立をして、商賣の道を脇にするは大きなる誤り、其の上儒道を學ぶ者が、夕も茶屋へ行きて夜半八つに歸り、己が酒機嫌にまかせ、湯の水のと寐て居る家來共を起し、たはけを盡すが儒者の教へか。論語讀みの論語知らずめ、重ねて書物を止めにして、帳合を大事に掛けよ。」と、額に皺を寄せて叱らるゝ詞の下から、子息は又物知り顏を止めず、「父爲レ子隱、子爲レ父隱、直在二其中一といふは孔子の語なり。父の罪をば子として隱し、子の罪をば父として隱すは、親子自然の道理にして、人の心の至極せる所なり。道理に從ふを直とす。然るに今手代共勢揃く前にして、茶屋狂ひする子の罪を顯はし給ふは道理に背けり。如何で直とせんや。」と云へば、親父苦々しい顏にて、「猪口か皿か知らぬが、其の陳ぷんかんぷんが家業の妨げぢや。假名で算盤稽古召されよ。」と教訓を致されぬ。或時讀書の師匠件の子息に向ひ、「伊川先生の語に、貴賤共に生を請けたる程の人は醫道を知らでは適はざる事とあり。其の仔細は、我が親又は子供などの病み煩はんとき、

其の身其の道理に暗くして、藥師の善惡をも見知らず、無學の醫者に打任せ、療治させんは誠に比類なき不孝不慈なり。」と、いひ聞かされしを聞きて歸るや否や、俄に結構なる藥箱を拵へ、樣々の藥種を調へ、療治の手習ひに、家内の丁稚久三郎下女のたま抔を反故として、疼うもない腹を擦りて、無性に藥盛る事を、月花にかへて面白がれば、藥代の出ぬを悦び、お名人とそやし立てて、借家の亭主出入の髮結、療治を頼みに來れば、おき掛けた十露盤棄てて脈をとり、仕掛けた商ひ差し置いて藥を合はし、家業を外になし療治にのみ心を盡せば、商ひ見世へ夜明から物買ひに來る人かと、手代手水もつかはず立ち出でて、「何が入ります。」といへば、「昨日のお藥を食べさせますと、ゐつきが出まして足が冷えて、小便が通じませいで難儀仕ります。どうぞあの世へ參られませぬやうに、加減をなされて下さりませ。」というて來れば、又其處へ横町の角の七兵衛が女房が來て、「夕のお藥から腹が頻りに下り出しまして、大熱がさしまして、狹い所を夜中くる〳〵廻つて、昨日の旦那殿は善いお人で、奴茶屋で酒飲めとて、兩人へ二十づゝ増しを下されたと、譫言申されましたが、夜明方からがつくりとなつて、最早寢反りも得いたされませぬ。あれ程にはかに弱られませうとは存じませなんだ、何卒元のやうになされて下さりませ。」というて、見世先に腰を掛けて待つて居る所へ、貸屋の嚊が涙片手に、「如何に貸屋風情の子ぢやとて胴慾な、一服で物もいはずに、目を白黑して居るやうに、あたる藥

を飲ませしやるものか、貧乏人の子は殺しても大事ないか。なんぼ大屋殿でも、あの子が死ぬれば遁しはしませぬ、相手で御座る。」と涙と共に喚けば、手代氣の毒がり、「只今は若旦那寐て御座る、起きられたら擽子をいうて、名人の小兒醫者を此方からかけて能いやうに致さう、先づ歸なしやれ。」と賺すれば、「一人の大事の子を殺しかけて置いて、朝寐して居らるゝ場か、起しまして下され。頼みもせぬ薬を無理に盛つて、慰みに殺して見るといふやうな、世界にむごい事は御座るまい。」と、隣方へ聞えるほど高聲上けて泣き叫べば、親旦那耳に入り、これは大方ならぬたはけを盡し居る事と、近所の手前を思うて、寢所から直に勘當をなす。

内證は知らぬが佛有り難い出家形氣

昔日は少年より見立てて、發明なるを出家になすが故に、名僧も出來て衆生を利益ありしが、今時は智慧才覺に構はず、武士の家にては弓馬の藝に疎く、又は病者にして公儀勤めの難きを斟酌て衣を著せ、町人は算用おろかに帳目讀まず、日記附さへならざるを、とても商人には思ひも寄らず、世を業に醫藥にさへ疎しと、親類仲間の上にて髮をおろさせ、法師となせる事なれば、衆生を勸むる事は置いて、其の身の取り置きさへ覺束なし。沙門となれる見せしめには、衣著して晝夜精進勤むる分こそかし、爰に若い時不仕合打續き、生國木津を分散し、身代仕舞うて都に上り、漸う鰹一つにて釜の座

に小家を借り、門は印の杉を靡かし、僅かなる酒商賣をせしに、正直をもつて世を渡る事、行く水に數かく通樽もつどひ來て、十年餘りによい身とはなりぬ。仕合に從ひ味ひ外より勝れ、猩々もちろり下げて來、劉伯倫も得意となり、次第に笹の葉茂りて、竹の林に有らねど七けん口の家を求め、京の住人となつて銀貸中間の座に連り、二條より下にて福人の名を取れり。成人の男子二人あれども、未だ孰れを跡目とも定めず、黑き筋なき頭を振つて、親父世間を勤めしが、ある時女房に近づきいへるは「我若き時大津にて身上しもつれ、妻子を引連れ爰に來て、僅かなる酒を商ひしに、先妻果報なくて乏しき渡世の中に相果て、總領重四郎を練粉地黄煎にて育て居る時、合借屋の内儀が其方を肝煎りくれられて、夫婦になつて次男重五郎を儲け、兄弟共に分け隔てなく愛しみ、身を捨てて共に稼いでくれられし故、今此の富貴の身とはなりぬ。さあればこれからは其方と一所に法體し、未來までも一つ蓮と、後の世を願ふが女夫の本道なれども、添はれぬ仔細あれば、其方には只今隙を遣つたれば、不承ながら此の家を去つて、尼法師になりともなつて、後世を願ひなりとも、又は相應の年寄男なりとも持つて、世をたてなりとも心次第にし給へ、暇の印にはこれを參らす」と、小判千兩並べ立て、「此のほか衣類諸道具何にても欲しき物は、心任せに取つて行かれよ」と、思ひも寄らぬ一言、女房興を醒し、二十餘年の艱難を經て、老のいりまい時分に、俄に隙をくれうとは、目に餘る見落し無く

てはいはれぬ筈、家富み榮え榮耀の餘りに、妾足かけ置かるゝとて、悋氣する氣でもなし。兎角は暇を下さるゝ、樣子を云うて聞かされよ」と、涙を流して恨みければ、親父聞いて、「今暇を遣らうといふは、世間の人に其方を惡ういはせまい爲、そちを思うての離緣なれば、構へて我をうらみ給ふな。樣子をいうて聞かすべし。總じて世間の大法なれば、家の跡目は總領に繼がすが極まつたる事なれども、身共が家督は次男重五郎に讓り、總領重四郎は出家させて、一代樂に暮す程金銀を附けて、寺役のない寺の後住に遣はさんと分別を固めしが、左樣した時には、總領は先腹ゆゑ、繼がすべき親の跡を繼がせず、今の嫁に目がくれ、弟に家を繼がせたと、世間に評判あつては、其方は繼母の惡名を取り、我等はまんざら妻子に迷ふ鼻毛といはれ、人に後指を指されん所が氣の毒さに、離別さへすれば夫婦の者に難がなし。總領が器量なき故、代繼にならぬ物で有らうと、何の讒も附かずに濟む。其方の目には掛つてあらうが、なさぬ中ゆゑ遠慮していはれぬと見えたり。兄重四郎は町人の家業なる、天秤の目盛帳面見る者にてなし、盆正月になればとて、世間の若い者の樣に伊達な氣色も見えず、頭は髮結放題にして衣裳も好まず、人が誘へど芝居へも行かず、不斷持佛堂の香を盛りかへ、夏花を摘み、身を食らふ蚤すら殺さず。淺ましき者が酒買ひに來れば、錢取らずに量つて取らし、假にも嘘つかず、酒飲まず、葬禮の通るを見て、世は皆あれぢや物と無常を觀じて、常に物も高ういはぬ性質

歴々の寺から十餌持つて、禮に御座る程の出家に落附いたる形氣。弟は是れに變つて渡世の事に精を出し、大勢人を使へど旦那顔せず、朝から晩まで胸前垂を掛けてとうじ並に働き、帳日記に心を附けて、商賣人に生まれ附いたる器量者、是れに此の家督を渡せば、明日目を塞ぎても、跡の事に氣遣ひなし。さるに依つて總領重四郎は幸ひ北山の近里に、永代寺領のつきし所あれば、敷金持たせて後住に遣る約束して、近日旦那寺の和尚の御剃刀を頂かせ、新米坊主にする筈なれば、此の相伴をして此方も尼になりともなり召されて、重四郎坊が寺に行き、世話なりとも燒いてたべ。」と、所存の通りを話さるれば、女房納得して、二十餘年添うたる亭主に離れて、河内の道明寺へ行き、尼になつて後の世を願ひぬ。斯くて重四郎には此の旨を云ひ聞かせ、俄に頭こそけさせて、約束の寺へ後住にありつけ、九族生天と親一門、悦びの入院振舞ひ事濟めば、其の身も日頃より願ひのまゝの道に入りしと、心まめに朝水手向けお經讀み習ひ、心に何の慾もなく、世間に十露盤彈きて金銀の取り遣りする物前にも、木挾刀持ちてゆたかに、庭なる白横龍に作つて、天にも到りし心になつて、不便や下界の人間共書出し時分に氣骨を折り、夜も碌に寢ぬ事よと、今此の身をば滿足せり。されば光陰流水の如く花散る梢に蟬なきて、萩の枯枝は雪に埋もれ、年々速かに暮れて、重四郎法師になりて、六年經つての春、跡取りの弟重五郎に手代の加兵衛つき添ひ、此の寺に來つて重四郎入道に對面し、一救も重五郎

様已前のお志と變り、商賣の事をお構ひなく、御宿には尻が坐らず、野郎狂ひに晝夜出歩行き給へば、親旦那目鏡が違うたと、以ての外の御腹立にて、御勘當なさるゝ所を、我々漸う宥め申し、御機嫌の直るまで先づ此のお寺にさし置き、御町衆を頼みまして詫言を申して、首尾能く御家へ歸しませんと、手代共相談致し、是れまでお供は仕つて參りたり。御世話ながら暫く御寺に置かせられて其の内もよく御意見をなされて下さりませ。」といへば、法師聞いて、「近頃不孝の至り、向後心を改め隨分家業を大事に掛けて、無益の金銀を費さぬ樣に致されよ。」と、眞なる教訓は流石御出家と申し兄御樣程ありと手代も感じ、其の夜は加兵衞も逗留して、夜と共に意見を加へ、夜更けぬれば一間に入つて休みぬ。重五郎は親父が怖い顏を思ひ出せば、目も合はず寐られぬ儘に、こそ〳〵と出て見れば、客殿に大勢の人聲する。何事かと引手のぬけし襖の穴より覗いて見るに、大蠟燭を輝かし、近邊の百姓又は血氣の道心者、車座になはつて壹歩小判を蒔き散らし、重四郎入道諸肌脫いでどうを取り、かるたを頂戴き、「南無釋迦無彌陀、娘の子でも苦しうない、まあ一番見事な事を頼む、奉る」と興のさめたる體たらく、是れさへ肝が潰れしに、蛸蒲鉾を下して摑み、茶碗酒を引つかけ、「此の美味さが下田村の彌八が女房に百倍じや」と舌打する所へ、外門あらけなく敲き、「小松村の五郎作母親、病なりしが、今宵相果て申されしに、思ひもうけし死人なれば、夜の中に野邊へ送り申したし」との使な

と、重四入道聞いて頭を掻き、「邪魔のときに業人めが、今夜でなければ死ぬる夜さは無いか。野布施の壹歩や貳歩には代へられぬ。和尚は晝から京へ出られて留主おやといふて、西念坊其方行いて、よい加減に經讀んで來てくれい」とあれば、「私は宵から大分負けて居ります。如齋坊を遣らしやりませ」といへば、納所坊腹を立て、「そなたが行かぬ癖に、人までの指圖をしやる。愚僧はお身達の樣に手味噌に附けず、正味の負が夥しい。こなた行きやれ」と睨め附くれば、「佛は見透しおや、手味噌といふものは、佛祖かけてせぬ坊主おや」と、不仕合の兩僧負け腹立てていさかふ內、和尚鎭めて、「內に居ながら見す〳〵留守遣うて、檀方に下ぬきも食はされまい。わぬしと燒香して歸らう」と袈裟衣を引つかけ、「それ乘物よ」と三枚坊主、七二小僧等を連れて乘り走らかして行かれぬ。重左郎此の體を見て、「これに合はせて我等が科は淺い事、兄坊と罪の輕重を計つて見れば、亭坊地獄へ落ちらる、なれ、我等は揚屋に居る程の違ひ」と身を顧みて親父の勘當を恨みぬ。其の夜明くれば手代加兵衞は、早朝より重左郎を起し、亭坊の前へ出て申すは、「若旦那を此所へ連れまして參りしは、暫くも御寺に御座らば、殊勝なるお前の御行儀に恥ぢさせられ、自とお心も改まり、昔の正道なる御形氣にもならせらるゝ樣に、御意見をも致して貰ひませう爲、お供して參りしが、夜前の行作のお前に預けて歸るは、偏に上戶に封せぬ樽を預け、歌祭文の上手な美男な手代に、若い內儀の供させて、松茸狩

に山へ遣る様な物で、悪性な若い旦那を片時も置かるゝ寺でなし。」と、重五郎を伴ひ立ち歸つて、親旦那に兄重四郎入道の身持の様子を具に語り、「法師様の御行儀に合はせては、重五郎様は聖人で御座ります。一年に五百兩などお遣ひなされた分では、御身代の痛みともなりますまい。只我々にお任せなさるべし。」と、手代中詞を揃へ申しければ、「然らば隨分五百兩の上を遣はせぬ様に致せ。」と、思ひも寄らぬ許容を請け、心の儘に遊びしが、元來重五郎女嫌ひにして、一生婦妻を持たず、器量よき前髪達を置き並べて、愛する事甚し。其の後親父果てられてより、居屋を手代に渡し、一年に千兩宛の末でおひを取つて、知恩院門前の下屋敷に引込み、目に入りし歌舞伎子を請出して、戯れの餘りの相手になつて狂言し、又は浄瑠璃の會に日を暮し、思ふ儘なる榮華の春、暮し[illegible]男世帯、律儀楽さへ女をすく浮世に扠。

大力は身の蛇身體投げた相撲取形氣

中京に棟高く大名貸の總大將と呼ばれ、一家講の正座を張つて銀貸仲間の口利、日々に繁昌して世の人の知る處く、六十餘州の名物の土産は、お出入り申す御大名より拜領し、御紋附の時服は江戸鑑な衣桁にうつし、和漢の書畫何百軸といふ事を知らず、蹴鞠建盞井戸三島、粉引熊川などの茶碗は[illegible]絡けにして、幾箱の内と書附し、名物の茶器は長持に押し込み、古金襴の[illegible]、印[illegible]の[illegible]、印子

の狸百疋、珊瑚樹の棒百本、白銀の天目百杯、瑇瑁の箸百膳、金銀米錢はいふにや及ぶ、廣き都に肩を竝ぶる人もなく、男子三人榮耀に育て上げられて、孰れも智慧の足らずめは金銀で教へてゆくを、其の苗の大いなるを知らぬ親の眼からは、利發な子供と心うれしく、追附隱居して老後の樂しみを極めんと思はれしに、總領孫太郎何時の頃よりか、島原に通ひ初め、晝夜を分かず三枚肩にて脇目も振らず、一文字屋の唐土船に乘つて來て、沖を漕いだる大騷ぎ、然も其の身器量よく、不斷の樂しみ、當世衣裝に名の木をとめ、華奢事を專らにして女の好ける風俗、太夫が方から賃かいてなりとも逢ひたがる美男に、銀子自由の身なれば、何れか女郎になびかぬはなくて、戀のきく最中なれば、此樣な面白い事天竺にも有るまいと、算用なしに遣ひ棄つれば、親父驚きおも手代を以て、樣々意見せらるるに、總領殿女郎に揉まれてより口賢うなられ「富んで足る事を知らぬとは親父の事なり。京で一二番限りの銀持といはるゝ身をして、まだ此の上にも慾を構へ、朝は星を頂きて、お屋敷方の留守居衆へ下袴にて勤め、大分の金銀をお取り替へ申して、濟むまでの中の心遣ひに命を削り、又は高利に日が暮れて、家書き入れての證文の通りには渡りかねたる世の慣ひ、反故一枚捻くり廻しても金にはならず、あかの他人に、多くの金銀を苦勞して取られうよりは、現在の子ぢや程に、せめて面白い程遣はしてくれたが能い筈、親の慈悲といふは此樣な所をいうた物ぢや。今まで手形箱にある、いかずの

古證文の金銀の高程、まだ己は遣はぬぞや。」と、意見を聞き入れる段へは行かず、却つて思ふ程に遣はしてくれぬとの不足いうて、中々止る氣色なければ、親父爲方なさに一門と相談して、遂に内證勘當して、三井寺の伯父坊方へ押し込め置きしに、燃え杭に火はつき易く、近ければ柴屋町へ入り浸りて、湖の首たけ泳ぎぬ。總領斯かる身持なれば、親父名代にお屋敷方の勤めを、次男孫次郎にさすべしと、呼び附けて其の旨言ひ渡さる。此の孫次郎は兄が美男に似もやらず、色黒く背高く、手足の筋節くれ立ち、小さい時から力自慢して、軟取手取は相撲取る事を好みて、勸進相撲はいふに及ばず、近在の祭に在郷の力強に出合ひ、一度も不覺を取らぬとの自慢、下帶に綾絹をして、朝々のいか物喰ひ、兩の腕は反故染を見る如く色々の入れぼくろして、額は眉間尺の如く拔き上げ、久三小者を取つて投げ、近國に隱れなき荒浪孫次と名乘つて、下屋敷の馬場の柳に拔き土俵を拵へて、假初の遊びにも相撲取共を招き、これより外に人間の遊興はなきと、四十八手の外を工夫し、大名の金は濟まうが濟むまいが、相撲にさへ勝てばよいと、外の事には微塵目をも掛けざれば、親父額に皺を寄せ、總じて人の玩弄には、琴棊書畫の外に茶湯蹴鞠楊弓、謠なとこそ汝等が慰みともいふべきに、なんぞや裸身となり、互に藝なき勝負を面白がる事、大名貸する歴々の町人の倅子が所作といふべきや。自今是れを止めて相應の遊びをいたせ」と、色々意見せらるれども、只世の中に相撲取るより外に、何

か遊興なしと中々止むる氣色なければ、父母一門談合して、兎角は緣組を取り急ぎ、艶なる妻を持たせなば、自ら志も直るべしと、中立貰の呉服所の息女を貰ひ、祝言目度たく事濟んで後、一度も部屋に入る事なく、父母氣の毒の頭を撫でて、嫁に附き來りし乳母を以て、此の事をいはせければ、孫次郎氣色をかへ、「女と枕を交しては、男盛りに力が落ちて相撲が取られぬ、愛宕白山身が燃えても女は厭」といひ切つて、可惜花娵を生きながら後家にして寂しがらせ、我獨り寢間の戸の明暮すまふより外に樂しみなしと、愈ましに肉食を好み筋骨逞しくなりて、二十三の時三十四五許りに見えて、前の形はなかりき。斯かる身持にては御大名方への勤めはさせられまじと次男も久離切つて追ひ出し三男孫三郎に名代をさすべしと、手代共と内談極め、此の男を跡目に仕立てて見るに、兄々の如く惡所へも行かず、力業もせざりしが、幼少より今に人形廻しが好きにして、八疊敷の我が部屋に、操芝居の如く手摺をかけて、金襴の幕を張り、平次が作の人形數多調へて、金入り染込み樣々の衣裳を著せ、町の髮結に淨瑠璃語らせ、常來る瞽女に三味線引かせ、出入の肴屋、青物屋、豆腐屋の丁稚共を呼び集め童の如く、親の役にも立ちさうな時分、さりとては罰當り、太鼓敲き立てて、始まり〳〵と、朝から晩まで人形使うて躍り跳ね、何時が盆やら正月やら、此の慰みに氣を奪はれ、夜も蠟燭點し立て、しくみになそらへ、代り淨瑠璃の人形稽古、さる程に世の中とて樣々のたはけ有り。いと

# 世間子息氣質三之卷目録

# 世間子息氣質 三之卷

## 世間の人に鼻毛を讀まるゝ歌人形氣

武藏野の廣き心の商人、晝夜家業の油斷なく、我と我が心に鞭打つて、傳馬町に綿棚を出してより、暫時も無爲居せず命限りに挊ぎければ、天理に叶ひ次第に分限になりて、助太郎といへる子を持ちけるが、ひとりも獨りからと利發にして、親の氣を助け諸人の譽めらるゝ者、親の身にしては一しほ嬉しかりき。十八の春に元服して、器量骨柄に並ぶ者なく、發明にて身代よし、何に不足なければ、聞き傳へに諸方から花聟に星月夜、鎌倉河岸の材木屋の美なる娘と縁有つて、婚姻首尾よく相濟み、此の上に思ひ殘せし事もなく、表屋の裏に座敷作りて、親父是れに引込み、萬の鑰を助太郎に渡し、商賣は數年馴れし、律儀なる重手代二人に後見させければ、此の身代重金持たせし根強いこと隱れなし。此の子息律義にて、三野狂ひの事はおいて、隱し色女のある所さへ知らず、渡世を大事に掛け、費なる銀を遣はず、一類の悦び若き子供の手本となれり。他へ出ては惡しき友に交際はず、常に歌學を好み、二十一代集を殘らず暗にて覺えたる程になりぬ。或時隅田川の舟遊山に、舅より誘はれ行きて、夏川の

涼しく、所から武藏野の月水に映つて、此の景氣何程もいはれた物でないと、自分より馳走人に階けられし出入の者共、酒を勸めて瑠璃盞を饗應しける。「助太郎好ける道とて、月のいと面白きに心を寄せて一首綴りければ、道樂にいふ太鼓醫者、酒機嫌に任せてこくうに讚めそやし、「私も醫を學ぶ暇には、敷島の道を學び、及ばずながら耳底記に便わし、歌の讀み方をも心懸け、上方に有りし時より、お公家樣方の御歌を何程か承りましたが、只今の御詠歌程なお歌を聞かず。天晴秀逸、此の儘讀み捨てになされん事は、珠を淤泥に隱すに等し。幸ひ我等女房共は、都去る公家方に宮仕致した者で、今に奧方から便り毎に、御懇なるお文にあづかれば、此のお歌を上方へ上せ、此の御公家樣の御目に掛け、とてもの事に御添削をお願ひあつて、序に撰集の中へ、入れてお貰ひなされませぬか。」と奏せれば、助太郎乘つて來て、「何と地下の歌でも、あなた方の撰ませらるゝ集の中へ入る事がなるか。」と問へば、「いはずとの事、古今集に三國の町とあるは其の町の遊女なり。賤しき流れの女さへ入らるれば、お前の樣な風流はなほ以て確かな事、總じて讀人知らずとあるは、皆歷々の町人の歌人達の事。」と申せば、「其れならう樣なる生涯の思出、千萬兩の金にも代へられぬ有り難いことぢや。然らば御内室の文の分では埒明かない、假初ながら大切な事なれば、大儀ながら御自分京都へ上られ、彼の御公家樣に直にお賴み申してたもれ。」とたつて賴めば、「畏、京へ上りましては、仕掛けた療治が缺けます。」とい

こほつやら、渡世の事には日も遣らず、奥に取り籠つて心を澄まし、歌を案ずるより外はなし。親一門意見すれども更に用ゐず、剰へ心も形も公家にならではと月代のばして、儒者やら按摩取やら知れぬやうに、總髪になつて歯黒をつけ、堺町に伽羅の油屋に、にはかに商賣仕替る白粉屋の受領を買ひ取り、一首讀んでは、武藏目藤原安次上、墨黒に書いて悦び、和歌といふ大病に犯され、親父死なれてより間もなく身代潰して、金杉といふ所にかすかなる裏棚の長屋住居、ちはやぶる紙子さへ破れて、久方の天窓浪人となつて、あふさきるさに借錢しちらかし、鬼一口に食はうものなく、猿丸太夫のやうに、顔に皺寄せて案じて居ても濟まず、あら金の土を起して、三十葱を荷うて、根深き歌好きの心ばせを賣つて通りぬ。

## 正直な親父を一呑にする上戸形氣

伜子は鈍魯けれども道統の傳を繼ぎ、石川五右衛門は利發なれども釜煎にあふ例、身上よき人の餘り發明過ぎたるも心元なし、少し許り愚かなる方こそ益しならめ。利發餘つて大氣が出し、智慧立てで無事なる家を潰す人あり。兎に角智あるも愚かなるも、持つて出た果報にて、相應に世を渡つて、通町中橋邊の上文字屋とて錢見世出して、若い者數多使へる手前しやあり。若い時から始末の二字を忘れず、人の身を持ち損ふは酒に増したる物はなしとて、三十年來禁酒にて、我が内には燗鍋ちろり

とかく血氣者共扇子にて煽ぎ立て、いさめ申せどたゞたゞ弱りに氣が弱り、次第に眞面目にならるれば、太夫本憾束ながら「一意先ほど御契約申した通り、三千兩の金子お遣ひなさう、明後日お貸し下さるべし」といへば、十助聞いて「最前から能く／＼思案仕るに、素人の私芝居事に大分の金をお取替へ申さうと、お請合ひ申したは我ながら無分別。宿へ歸つて親共とも相談致し、此方から御返事致さう、先づ其れまでは的になされな。」と、始めとは格別の申し方。太夫本むつとして「扨は粹方共を素人めこなたが嬲つて見るのか、愛宕自由堪忍せぬ。」と、一腰に手を掛くれば、頭取押し止め「貴下も通町で人の知つた御身上、何しに各を嬲りにはお出でなされまい。最前から十助殿の體を見るに、御酒も大分上つたに、次第に御氣勢弱く見ゆるは、隱者上戸と申して、世間の酒呑に此の一手が御座ります。私前方長崎の客業から、百杯丸と申して奇妙に醉ひの醒める藥を貰ひまして、懷中して居ります。貴下のあいりは醉ひの盛りに募つたで御座ります。物の試しに進ぜて見ませう。」と丸藥取り出し十助に飲ませければ、忽ち醉ひ醒め元の如く貸す筈にて「明後日金受取に頭取同道にて參るべし。」と約束して立ち歸れば、太夫本は悦び契約の日に手形認め、上文字屋へ來て、十助に逢うて證文に判するを、手代共見て肝を潰し、總て此の旨親旦那の耳に入れ、如何仕らんと伺へば、親父嬉く氣色なく「又倅子が持病が起つた。常例の通り濃酒を熱燗にして、大盞にてたて掛けて塗れ

木挽町邊に店を借りて、始めての宿はひり、纔かの絹見世出して歌舞伎役者の衣裳を請取り、段々仕合心の儘になつて、十年立たぬ中に百貫目といふ銀を延ばし、古主の家を買ひ戻し、其の家に住んで二十年餘、當正月の棚卸しに、代物除けて金銀の高凡そ千貳百貫目、一代の出來分限とは拙者が事、親の讓りは御覽の通りの高なれども、これをくれられし故に依つて、是れほどまでの身上とはなりぬ。さるに由つて此のごろ表具致して、今日の年忌の佛事に合はせ申す。これ私しの家の系圖の卷物、定家の色紙百枚よりは重寶」と披露せられぬ。此の太郎兵衞貳百匁の讓り銀を以て、今千貫目餘といふ身上になりし事、町人の出世商人の手本ともいひつべし。幼少より親の手を離れ艱難を經て、一代の中に是れ程の身代になりし男なれば、萬に拔け目なく、一子太郎市に諸藝を習はせずして、小さき時より十露盤を彈かせ、なみ〳〵にて世は渡られぬといふ事を、骨も固まらぬ内から、身に染み附く程いひ教へければ、親の世智なる形氣を見習ひ、八歳より寺入して手習するにも、他所の子供と違ひ、淸書に書き損ひとて判紙壹枚麁末にせず、墨に袂を汚さず、雪踏のはなを踏み切らず、大勢の子供の毎日使ひ棄つる、反古の圓めたるを拾ひ取り、一枚々々皺伸ばして、日毎に屛風屋張貫人形の細工人方へ賣つて、人知らぬ錢を儲け、其の錢にて内より持ち來る外に判紙を求め、紙遣ひ過して不自由なる子供に、一日一倍增の利にて是れを借し、萬事惡ひすゝこく、不斷も臺所を離れず飯炊き男

か朝夕の餘り物を、澤山に乞食に取らすまでの制たらなし、其の小頬憎き仕形親父許りは悦びて、一生身を持ち損ふ者にあらずと、手代共に末々頼もしくいひ渡されしに、彌十六七の頃世の人に變りて、兎角外へ交はる事なく、義理を缺きて細かなる算用して、終にあだ錢一文遣はず。七歳の時かき始に桃色の積鼻紙買うて、石町の姨より贈り給はりしを、今に其の一筋にて埒を明け、朝起きるから寢るまで始末の事をいひ止まず。鹽肴も日に懸けて直段をし、計り芋も百を何程と數讀みて買ひ、親の仕來りし家來出入の者までの、盆正月の祝儀さへ費えの至りと止めさせ、隅々まで眼を配れば、大勢の召仕ふ者も、一日物見遊山に出づる事もならず、命有つての奉公と呟くを聞いて、「頬へば奉公を缺くといひ、譜代を出さねばならぬ、夜隙な時隨分灸をせよ」と、不斷灸箸で目を突く如く、小道なる事をせゝかくいへば、番頭を始め歴々の手代共愛想をつかし、大家の旦那に似合はざる心ざしと見限りぬ。下人の角介が在所の親へ見繼ぎの爲に、給銀四十匁借りたきよし、手代を以て若旦那へ申し入るれば、太郎市十露盤控へ、「あの者は當三月より九月まで八十匁にて置いたれば、一ケ月が凡そ拾二匁三分五厘に當れば、今五月の初めに四十匁貸しては、未だせぬ奉公の給銀を先へ渡すの道理、なるまじき事ながら我等取り持ちなれば、聞き屆けて貸して遣らうが、三四の兩月分二十六匁七分引き落して、殘つて拾三匁三分は壹歩半の利をかけて、九月節句の出代りの時、給銀の殘りにて利足算

ありに、明くる中々御座つて、御親父樣をお頼みなされたが好いわ。今夜持佛堂の御燈明に、何時ない蓮花が立つたは、此方の寺にこんな好い檀那が有らうとの、如來のお知らせであつた物ぢや。」と、寺僧は我が寺の事として獨り悦びしは、殊勝なる事ぞかし。明くれば智元坊、大杉原壹束に三本入りの扇子箱取り添へ、案内乞うて常心に對面し、上葺の奉加の事、永々と口上捻つて頼み入れば、常心腹立て、「抑も日蓮宗が、他宗の奉加について法義が何樣立つ物ぞ。忌々し、此の進物共早く取つて歸れしやれ」と、以ての外の挨拶。智元驚き、「夜前御子息辨七殿に、伊勢町の七兵衛殿にてお目に掛り、親常心に頼めとの御指圖を請けて參つた」と、顔を赧めて申さるれば、常心愈立腹して、辨七を呼び附け、「身共が堅いを知りながら、奉加を頼みに御座れとは、何樣狼狽へて申した。」と、齒のない齒莖を喰ひしばつて、夥しく叱らるれば、「されば夜前、七兵衛旦那寺から奉加の足らずめを、四五十兩借せとの事なれし、何とも返答に迷惑する間、私に間に合ひをいうてあの坊主を歸してくれよと、たつて頼まれました故、當分座なりを申したが、眞實に請けて參られたと見えました。これ御出家、此方は代々堅い法華宗で御座る。假令我等が奉加につかうとまうしたとて、念佛無間といふ方から奉加を請けさせられては、御寺の御本望では御座るまい。」と夜前とは格別の口上、兎角聞えぬは伊勢町の七兵衛がやと、智元は面目失うて我が本坊へ歸られぬ。其の跡へ下谷筋の屋敷方から、歴々

あれど、折節毎に惡る蚊を樂しみて食とする。又蚊の多き高き梢を望んで巣を掛くる蜘は、度々嵐に落され、其の身も遂に濡川に流れて死し、家も損ひ巣も風に破られ跡もなし。これ蚊の多きを目掛けて大慾を起して、高き所に巣を張る蜘は、風の爲に身を失ひ、慾に闇らす蚊の少なき低き垣根に巣を掛ける蜘は、無事にして樂しみ深し。人間も右の如し。一時に大分儲けんと大慾に闇れば、必ず身を打つ程の損をする物。只大きに徳を取らうと思はず、地道にして損せぬ調儀をすれば、何時までも家は失はぬなるべし。上手の素は勝つ事を思はず、只負けまい〳〵と打つといへり、これ則ち勝つなり。損をせまいと思ふがこれ儲けなり」といへば、親父手を打ち「我今六十になつて、汝が詞を聞いて、始めて我が一生の運の好き事は知りぬ。若き時より慾深くして、千里一は有なる買ひ置き事に闇つて雙六拍子よく一度に利を得て、どか儲けせし事度々なりしが、今の蜘の譬へを聞いて、以前の事を思ひ出せば、天性元がぜんごとする。今よりは末子源八が金言を用ゐて、殘る兄弟共も構へて買ひ置きする事なかれ。」と、有銀貳千貫目を、千貫目末子の源八に、材木商賣付けて本宅を讓り、殘る千貫目を總領と次男におし割つて、五百貫目宛に、外の屋敷を一ヶ所添へて與へられ、其の身は法體して世を樂にして往生せられぬ。末子源八は親の跡を踏へ、一つも變つたる事にかゝらず、親の仕にせ置かれし材木商賣許りして、段々に銀を儲け、所の好き大屋敷共購めて宿賃を取り、大和の中に儲かたる田

は如何な事というた許り、各惘れ果て、老母の歎き一方ならず。女房も四年の馴染なれども子の一人もなく、先づ近所の同行四五人驅け集まり、「是非なき浮世の中、一度は斯樣なるに定まりし事、歎きて還らぬ事に念佛の一聲が、最早此の上の爲なり。」と、老母内儀を慰め、先づ片脇に押し寄せ、屛風引き廻し、燈火を上げ、寺へ人遣り、脇指に紙を卷き、中通りの女は經帷子縫ふなど、尻も結ばぬ緣莨れに靜まり返りし所に、勘七周章しく、子の勘太郎七才になれるに、親子の肩衣に裏付袴の大きなるを胸高に著せ、自身横に抱きて微塵も氣の毒なる顏はなく、座敷の眞中に勘太郎を下し置き、「今宵の位牌を持つてからは、此の家屋敷をみな我が取る程に、嬉しう思へ。」としかつべらしき顏して、邊を屹と見廻しける所に、其の弟勘介涙押し拭ひて進み出で、「扨も太い人、此方は何時勘當容されて來り給ふぞ。兄者人死なれたとても、筋目なき事はなるまじ。我斯くて有るからは、此の跡敷を誰が取らん。是非欲しくば死人と中直りしてからの事。」といへば、勘七眼を見出し、「其方は知るまじ、過ぐる七日の夜竊かに勘九郎殿來りたまひ、今までの勘當は御公儀へ訴へたるにもあらず、されども一端町の宿老へ斷りたれば、十年の中は表向往來なき分に待遇せ。若し明日が日死んでも子はなし、勘太郎は孫子なれば、己が跡を遣るべしと、頭撫でられかたぐの約束、左樣なきとて兄親に理窟立て、はや敦賀に賣られ筒落米拾ひし事を忘れたか。」と、伸び上りて氣色するを、女房此の有樣を見て奥に走

ざるぞ。其の心底より此の憂へを顧みず、跡敷の諍論をなし悪人め、向後勘當ぢや」と叩き出せば、誤る道理に責められて、一言の返答もなく立ち出づる。次に、「掛硯は誰が直せし」といふに、老母を始め知りたる者なし。「好しく鐵火を握らせて穿鑿すべし。」といふところ、女房赤面して聲を振はし、「それは私が長持に。」と、しぶ／＼と取り出す誑惑なる心底いはずしてあらはれ、勿論剃髪の志より、即座に元結拂ひたる様の潔さには似合はざる仕形、さりとては水臭き心根、行末思ひ遣られぬ。是れまでの緣なるべしと、夫は此の世に有りながら、後家姿となつて直に親里へ送られける。皆是れ慾心より起りて慙愧の甚しく、熟觀ずれば既に財寶も黄泉の旅の糧にならず、今より死したる心になりて、有銀三百貫目祠堂銀に入れて、常念佛を執り建て、老母諸共に後の世の願ひ、本來の都に歸る山の邊に庵をむすびて、行ひ澄ましける。

世間子息氣質四之卷 終

# 世間子息氣質五之卷目錄

る事を知らぬ大臣、廣き難波に見事な名を取り、吉野屋の庄五右と誰知らぬ者はなし。意見するとは脈のある子息の事、腹中に相手なければ、怪我せずに銀遣はるゝを好いにして、二親のない氣散じは誰引き案めて教訓する人もなくて、心の儘に遊びしぬ。或時踊大臣役者末社を召し寄せられ、額に皺寄せて、氣の毒な事がある、皆の者共智慧袋の口を開けて、一分別してくれよと、仔細ある樣に、小聲にて申すは、何れも目と目を見合はせ、心の中に算用して、極月が近づけば銀の才覺ならぬ程に、茶屋共に諸拂ひを待たせてくれよとの事なるべしと、いひ合はさねど面々が心に高括りして、「お前の事なら喜び一際や二際遣はされませぬとて、待つまいと申す者は一人も御座りませぬ。其處らはお氣を入れられず、さあ何れも用意が好いか。」と、はや手拍子を打ちかけて分別なしに踊り出せば、大盡暫くしと留を聞い、頼まれ、茶屋共へは來年中遊ぶ程は先金遣つて置かねば、そんな事に屈託は微塵もない。汝等が智慧が借りたいといふは、此中左右がいへるは、師走の二十五日からは、面々掃ひなど仕りますれば、お客の事でも算用合の邪魔になれば、素遊びは格別、をどりは正月三ケ日までは、御無用になされて下さりませと、總茶屋中からお前へ願ひで御座りますといふに依つて、二十五日から正月三日まで踊を止めずばなるまいかと、今から其れが胸先へ支へて苦になつてならぬ。何卒此の師走の末に至つて、世間に構はぬ踊場は有るまいか、夫れを思案してくれよと大事さうに云

の所、いざ今から行くまいか。」と、俄に旅用意させて、隙なる役者太鼓持、此の極高で仕舞はれぬと金の足らぬ茶屋の亭主、かれこれ以上十八人肩を揃へて通し駕籠、日那の御蔭で借錢乞の顏見ずに、大晦日を越ゆる事、嬉し有馬の湯に入りに、病なしどもうち揃うて、行くより早く萬事を棄てて、二階座敷で踊り出せば、相客の病人共、枕に響きて折角癒つた頭痛が起ると腹を立つれば、奥には耳が又鳴り出でると苦しがれば、宿の亭主氣の毒がり、二階へ上り、「皆樣には血氣よう踊らせらるゝが、此の所は弓手も妻手も御病人で騷がしいとて、最前から何方も難儀なされて御座ります。有馬始まつてこの方、お前方の樣な御氣象な御病人は御座りませぬ。皆樣は先づ何病で、此所へ御養生にはお越しなされましたぞ。」と問へば、末社の新八元來口輕な男なれば、「我々は此の踊が病ひぢやが、なんと湯が中つて、ねいもにはなるまいか。」といへば、亭主もすれ者にて、「ねいもになつたら、有馬より湯の尾峠の孫じやくしをお頼みなされ。」と笑うて立ちけり。

### 遊興に草臥れて養生に引込む隱者形氣

世界の若い者一度は直通りのならぬ街といふは、色里の事ぞかし。脇からの添智慧にては、中々悟らるゝ道にあらず、自身工夫の心の駒の手綱、一生浮沈安否の戰場油斷する事なかれ。此の意域に至る事稀なるゆゑ、只一向に無用々々と諫むる、人の親の心汲みて知るべし。中庸を知りて遊ぶ事、節

ゐ、却つて子の心を僻め、重代の家を亡ぼさせ、身を沈むる事、此の比類數へ難し。此方の身代は其方も知る如く、有銀二千貫目餘の店卸し、この銀を一年一割に廻して利足貳百貫目餘あり。この利にて世帶の入用五拾貫目引いて、百五拾貫目延びるなり。此の内にて五右衛門が遊び代を引いて見るべし、序に其の積りして聞かすべし。あれが逢ふ女郎は太夫か、然らば此の太夫が客、五右衛門一人許りでも有るまいほどに、一月に十五五右衛門に買はすべし。其の跡は手柄次第に外へ賣る樣にさすべし、此の入用六拾三匁宛、十五は九百四拾五匁よな。これを十二合はして一年に拾壹貫三百四拾匁なり。扨五節句に金貳十兩宛太夫に遣るべし、凡そ八拾匁金にして一年に八貫目なり。此の外折節宿への附け屆け、太鼓に遣る花代、供の者の料理代、駕籠賃抔百兩許りにて好し。扨連には手代共の内一人宛隨いて行くべし、これには梅君を月に十宛買はすべし。此の代一年に三貫六百目。總高〆て凡そ三拾壹貫目なり。これを延銀の内にて引き落せば、殘り銀百拾九貫目は毎年延びるなり。利に利をかけて見よ、鼠の子算用方圖もない銀高、死んだる時は此の銀を持つても行かず、銀は生前を樂しむ道具なるに、愚癡の衆生はこれを集めて却つて苦を求む。其の心は貧僧より、遙かに淺ましき有財餓鬼といふ者なり。人間の身上は現銀五百貫目までを願ふべし。五百貫目になる時工面よくすれば、一生樂に過ぎるなり。夫れより千貫目になるも手間入らず、高歩を望まねば損もなし。必ず大銀をわしる

銀儲にたる族は、生まれ付かぬ運に任せて、千里一に私の買置き物に損をして、不仕合重なれば、公なる天を恨み、罪なき人をも咎めて心を砕き、魂を惱ます事極めて愚かなる見解なり。其の身善果なくして如何ほど願ひ請りても、貧者が俄に福者にはならぬものなり。貧福は天地の道具にて、駕籠に乘る福者有つて、是れを舁く貧者なくては世界は立ち難し。硯になる石あれば火打になる石もあり、孰れも石の役を勤むるぞかし。人も其の如く銘々の役を勤め死するが人なり。何處に住みても儘ならぬは、身代の善し惡し難波の大湊繁昌の場は、宿賃高くて小谷といふ所に裏屋借りして、久しき浪人孕石浦右衛門とて、ぎへはなる男なりしが、近年孔子頭に變へて、名も無塵と改めける。不幸にして寄る年の口惜しく奉公の望みも絶えて、六十歳にて入道し、其の後は丸腰になつて武士の顔付もせず、木綿著物上に縮緬の單羽織を掛け、三十年の夏を勤めし古編笠、折目を裏より紙子にて綴くり冠れば、日影者と云はれて、我が身の善惡は知らぬ人の身を占うて、夫れを渡世の種にして毎日町へ出でけるが、一子丹三郎にもさすべき業なくて、古文の一道を傳へ、親子して大坂の町中を、占ひさんというて廻りぬ。易道を知つたにもあらず、昔日伏見に檜屋孫左衛門といふ者、醍醐の聖寶尊師より夢中に授かりし、花月の占ひとて、調子を聞いて吉凶を知る事神の如く、近國に名を取りし其の術を傳へて、大方に占ひ合はすれば、少しの錢になりて其の日を送りぬ。或夜表の戸をこと／＼と敲

守ぞや」と素氣なくいへば、「是れは仕たり贔屓に思うて、島屋町から爰まで走つて來れり。さる有德人の奥樣より、娘御の御緣邊の事に付き、相性其の外勘考へて貰ひたいと我等をお賴み故、唐にない上手の樣にいうて、一廉禮銀を取つて遣らうと思ひ、態々と呼びに來た。留守なればせう事がない、これから谷町へ行き、占明院なりと同道して行かずばなるまい。戻られたら島屋町の木八ぢやが、好い銀取つて遣らうと思ひ、辛勞した甲斐もなく、お留守で殘念なというてたもれ。」と、表より戸をさして歸りぬ。親子の者は長持の中からこれを聞いて飛び出で、「どちらへ行きやつた、今歸られましたと跡から追掛けて行け。」と下女を走らせければ、闇の夜なれば行方も見えず。「扨も占ひ倒れに倒れた木屋の八右衞門とて、日頃懇にしてくれらるゝ人にて、皆人家名と其の名の頭字許り呼んで、木八木八といへるが、八木と上下へ考へ損うたは、米唐櫃がひつくり反つて、好い銀を取り外さう卦體の惡い占ひ樣。」と、親子目と目を見合はせ、舌打して殘念がれど是非もなし。其の後丹三郎我と我が所作を見限り、易道にも外れたる鳩飼の商賣して、一生よい加減な譃を吐きて世を渡らんは、人たる者の本意にはあらずと、書置殘して少しの知邊を便りにて、長崎へ下り、始めの程は十禪寺の日雇中間へ入りて、唐人の小使に雇はれ、丸山の文の通路、或は上方の商人共の御用承りて味に仕こなし、三四年の中に働き出して、五十兩といふ金を溜めて、これより此の津の形氣となつて、てんぽ儘よの

買置き事、木香硇砂の思ひ入れを合はせ、當荷に節むのよく好く、大坂よりの銀見事なる仕切状を下しければ、僅か五六年の間に五千兩の小判の身となり、夫れより一株立てて唐人出島の商ひでなく、運に任せて強氣を出し、諸方の商人に商切させければ、段々手廻しよく儲け溜めたる金銀を、大藏五棟に積みかさね都に上り、二條通に借宅して、藥種の商賣手廣く新見世とあふがれて、大坂よりの親父を迎へ朝夕孝行を竭し、人の鑑となり、先祖家業として目出度なる世を渡り、聰明なる子供を持ちて、世に不足なく京に安住して、商賣益重れける。

# 世間子息氣質五之卷　大尾

# 浮世親仁形氣

江島其磧
安藤自笑

# 序

年々花は替らず、歳々人同じ姿にあらず。昨日は若髪の聟といはれ、今日は天窓に毛のない親仁と呼ばれて、壯年人に恐ろしがられ、色ある身に離されて、せう事なさの談義まゐるに、をかしからぬ日を渡るは、年寄の心のとりおき鈍なる故なり。形は鈍なるとも、心さへ古めかしう拵たずば、誰かおやぢとて蛞蝓のやうに、拂ひのける人はあらじ。世は次第に進み、意見きく息子が、意見する親仁になるは、今の間の事ぞかし。爰に一度かはりたる親仁どもの形氣を画き備へて、すなはち題號として五冊に集めて、世の老人達に示す而已。

鶯のはつ音の日

作者　江島其磧

八文字自笑

# 浮世親仁形氣

付り　若い時の無分別撥げにくい腕の入れ黑痣

## 一之卷　目錄

宮川町への忍び奢をかかする恋清文

盗人をとらへてみれば親父ままの仕置

商賣の冥加ここにある衆をの敵 目の武士蔵

# 浮世親仁形氣　一之卷

## 一　食を樂しむ速者親父

善く游ぐ者は溺れ、善く騎る者は墮つ。このゆへ其の好くする所を以て、反つて自ら禍ひをなすといへり。誠に川だちは川で果つるといふ世話の如く、己が好ける道によつて身を果すは、人間のならひぞかし。出所は江州守山の仲作りの親かゝる草の屋に育ち、後家親を侮り我儘に暮し、小力有るにまかせて農業の透には、在郷の若い者と夜々の喧嘩、所のさわぎと一人ある母に疎まれて、都の娘をたのみに、夜ぬけにして京へ上り、荒働きの奉公を望むも、生まれつき堅くして、岩神通りの米屋にありつき、年を重ねて奉公に私なく、年季の給銀延ばし溜めた八百目を[illegible]はひ、色氣のためにはあらで、稼ぎの便りに、我にひとしき深山木のやうなる、身にかまはぬ手速者なる女房を、仲人なしにつれて來て、夫婦もろかせぎに身代を踏みかためたるからうする拍子よく、商ひ事に幸ひ有りて、米は夜の中にあがり、夢みたやうなる分限になりて、次第に吹きつける仕合の風、相場者に利を得て、六十八の年今に長者といはるゝ程の身上。一子九左郎利發者なれば世帶をわたし、その身は法體

して足休と改め、布の十德は著れども、昔ぬき入れし額、角大師を見るが如く、今に角の跡すさまじく、眉間尺の法師になれる體相、心も此の如く、世の人に銀持とあがめられて、都のよい衆と參會すれども、若い時からの男伊達形氣はやまず、折ふしは端手なる物いひ。息子の久五郎はよい時に生まれ出て、若旦那ともてはやされ、世間ひろく公儀を勤むるにしたがひ、年に似合はぬ親父が力自慢うたてく、内證で意見すれどいかな〳〵聞き入れず。久五郎が大鼓稽古して、指の先を打ち破つて血の出るを見て、親父大きに腹立し、「同じ疵を蒙るならば、いさぎよい口論をしてこそなれ、役にもたたぬ鼓に打ち負けて、親の滿足に産み付けし身に、疵を付くるは無分別の第一。鼓の皮を買ふ手間で、筋鐵の入つた樫木の杖か、鼻捩を求めて置けば、町所の喧嘩の爲にもよいに。」と、七十に餘つて子供への教訓。是れにかはつて息子は、都の分限者共につき合ふ程に、疊ざはり格別に諸藝を嗜み、それにつれて自ら心も優美に、花車なる事を好む程、親父の不斷の心ばへを氣の毒がり一題目講中を頼み、親共私へ嫁をむかへてくれらるゝ相談極り、則ちたのみのしるし遣はし、近々婚禮有るはず、むすめの親もとは大名方の呉服所にて、根生のよい衆と申し、歴々の一家ひろきと承れば、祝言振舞等の一門づき合ひの節、親共が兩の腕に、命入　叶八幡大菩薩などの入れ黒痣、いかにしても見苦しう存じ、灸にてもすふられ消して給はれと、母諸共に樣々申せども、中々聞き入れなく、されとて

お掛物の御筆は存じませぬが、あの櫻咲く遠山どりのしだりをのと申す御歌は、自讃歌の冠頭後鳥羽院の御製じと覺えましたが、先づ以て御掛物も數々ござらう所に、私し親共が壽命をお祝ひなされて此の御歌をかけらるゝ、御亭主方の御心づかひ淺からぬ御事、俊成入道釋阿の九十の賀に、御いはひなされた御歌とやら承りましたが、手前の親共は無骨物にて、此の御挨拶も覺えていたすまいの處、外ながら御問ひ下さへ、御心付けられし所の御禮申したと、仰せられてくだされませ。」と座馴れたる挨拶。舅方の息子共も、始めての付合、面々ないもせぬ腹の中の店を飾り、年老のついでに、「昨日東山の稽古能に、檜垣の鼓をうたれしは幸清の弟子の由、慰み鼓にはなか〳〵。承り事。」といへば、それからむしやうに至りの咄、十種香の噂、連俳茶湯楊弓の沙汰をして、しつぼりとそゝけば、人がらを作つてゐる。一間あなたの上座に、親の是休は舅太夫、諸一門の禪門達を相手にして、「身共も若い時は貳升の食に鮓は付けませなんだが、無念にござるは年の加減で、此の頃は汁椀に一杯程はたべ殘します。」と、喰ひ自慢を高聲に語らるゝ。一座の人々亭主の手前を笑止がりて、「いざ碁にいたさうか。」と碁盤取り寄せ、野卑なる咄を碁にうつして、「是休老ちと碁を遊ばさぬか、淨入老には石丸門弟程でござつて、碁立が三左でござる。いざ先日の也阿彌の意趣を晴らしませうか。」と整へかゝるを、是休さし出で、「我等も血氣な時分に碁盤の角を持つて、十四五づゝは苦もなうさしましたが、今としてもさのみ力

を出し直りければ、是体も人に脊をせられて、だまつてゐるは無藝なものぢやと、一家の出合に見立てらるゝは無念の至り」と「さらば拙者もお脊に、若い時みがいて置いた、取つておきの藝をお目にかけん。」と、その儘着たる小袖を脱いで赤裸になつて、蕎麥切色の越中ふんどし、遠慮もなく手を振つて眞中へおしなほり、「昔は相撲に四十八手と申せども、今程はさまざまの新法の手をあみたて、凡そ八十八手の餘藝をぬいたる此の男、なげに取つても負ひ投げかけなければよき投げこと、永々との言ひたて」其の後手あひして一人相撲に、皿鉢八挺島臺おさへを踏みくだき、小股取つたる身ぶり一なんといへれも、見事々々。」と、ようする顔を見て、むすこはその儘消えたい心、舅方にもしつぼりと汗をかいて「御年の上に御風をお引きなさるればわるい、著物召しませ。」久五郎殿には御果報な、おやぢ様は中々御氣力がつようござること」と座成にいへば、おやぢ悦び「倅がやうな卑弱い奴は片手でも難でござる。」と　さる程に持て餘したる親父どの、意見すれば逆になつて、猶々力業をやめず、不斷の思ひが、下男の久七を相手に相撲の稽古、どういうても聞かぬに極まれば、倅と母が内談して、とてもやめられぬからは、怪我のないやうに相手の久七に負けてくるゝやうにと、給分増して内證にてたのみけるが、これ却つて爲にならず、年若な屈竟の久七めさへ、幾度取つても我には及ばず、此の位にては勸進相撲に出でたりとも、さのみ不覺は取るまじと、彌增に盛んになつて、力の爲の肉食、

ねゝねゝ、うき事におうて宿に歸れば、妻子悲しみ跡やまくらに立ち添ひ、「痛みますか。」と尋ねければ、痛い所を抱へながらまだ口はへらず、「おれほどな者をかう投げた力石めは、天晴な手取めぢや。」と、中々痛みは苦にせざれど、流石は年の上とて、療治しても果敢どらず、次第に重くなりて、今ご臨終と御上人がゝのに來られしが、藥師は有りて、此の親父が日比の形氣を知つて、枕もとへ寄り「是休老、もはや此の世のお手が見えた。」といはれければ、おやぢ目をひらき「西の方はソレハ極樂、いまここだ。」と、相撲の手にて落ち入られぬ。

## 三　野郎を樂しむ男色親父

世界に身過ぎほど悲しきものはなし。萬につけておもひかなふ事もなく、見えわたりたる中にも、殊に更色茶屋の亭主、心永う物ごと堪忍うよきがもとでなるべし。悋氣深き男の此の商賣はなるまじ。大かた女房は客のなぐさみものと覺悟して、「是れは旦那、我等がだいじの所の付けさしを召しあげらるゝは。ちよつと三百目かいこ」と笑ひにしてすまし、近比氣の輕い亭主めと、多くの客の氣に入る、宿はひとりして間もなき新茶屋なれど、門前に内人野郎の駕籠絶えず、名題の茶屋よりは繁昌し、軒並びの同商賣そねむ位に客しげく、女夫心よき世帯を經て機嫌よく、愈大臣達へのあしらひよければ、招かぬに人集まりて、十年たゝぬ内に三十貫目生きた銀をまうけ、もはや身上かたまりしと夫婦談合して、

我等を兄分に賴み、大切にいたすべきとの起請書かせてくれよ。」と、鬢髭白髮たる口から、おとなげないといふは大抵の事、これは見事なうまい親父とは思ひながら、御客なれば笑はれもせず、畏まつて門十郎を勝手へ呼び、「大臣樣御望みなれば、眞の兄弟のごとく大切に思ふとの、起請を書いて進ぜられよ。しからばその替りに何にても、そなたの慾しきと思ふ物を、旦那から貰うてやるべし。」と、公界はすれども、年のいかぬ若衆なれば、正眞の童たらすやうに、言葉を盡しいひ聞かすれば、門十郎笑ひ出し、「誓紙を是非書けならば、書きも致しませうが、あの親父樣と兄弟分とは迷惑でござる。ただもさへ町方では子供は年をかくして、舞臺では十四五に見ゆれど、あれももはや二十であらうと、まことの年を申しても合點なされぬ客衆の多いに、七十にちかいおやぢ樣を兄分に賴むと書きては、わしが年をむしやうにふけたやうに沙汰せらるゝも氣の毒、爰はおまへおとり持ちなされまして、私と祖父孫のかたき契約いたしたとの起請ならば、書いて上げませう程に、是れで御機嫌のなほるやうに。」と、至極なる事を申し出せば、亭主もをかしさは止みて、自然と尤もとうなづき、座敷へ罷り出でて、「なるほど若衆誓紙を書いて旦那へ奉らうとあれども、ちと好みが御座りまして、拙者への內證あり。」と申せば、「指までいふな、其のかはりには地衣裝五重、金拵への脇指一腰進上いたす。今時かやうな大臣は稀にあらうが、すさまじき儀か。」と、酒きげんに任せ、むしやうに聲高に申しける時

からおやぢ樣の拂ひはなされぬ。損をせられたと此方には存ぜぬ。」と、亭主に斷り引き立てて歸りぬ。扨もひろい世界かな、子は三界の首械といふに、親を二階の藏へ追ひ上げ、それから後は此の茶屋へも見えざりき。是れは親の爲にならぬことが身代たふすといふものと、女夫我ををりて噺する所へ、山もどりの御客三人ばたばたとおはひり有つて、「これは花車久しう、お目にかゝらぬ内に、仕合につれて大分女房衆になられ、白癩どうもたまりませぬわ。」と後抱きにするを、折節亭主がおやぢ膳棚の下に居ねぶりして居たりしが、客のどやめきに目を覺し、此の體を見て、やがて客を取つてつきのけ、「人體に似合はぬ、人の女房に不仕付千萬な、抱き付くとは法を知らぬお人ぢや。嫁も又不行儀な、あんな事するものを其の儘だまつて居らるゝは、常とは見おとした心底、武家なれば生けては置かぬ所ぢや。」と、客共をねめつければ、浮氣大盡共肝をつぶし、一言もつがず立ち歸れば、亭主これはと走り出し、色々とあやまつても歸られず。「すてても今宵百目のまうけを、おやぢ殿のりきみで取り損うた。これが商賣ぢや程に、重ねては何事も見ぬかほして御座れ。」といへば、親父氣色をかへて、「やい人でなし、女房をあの如く他人のなぶり物にせられて堪忍してゐるか。身どもは若い時から武家の食を喰うて來たゆゑ、あの樣な不行儀な事は見て堪忍はしてゐぬ。商賣が是れ許りか、總體われが常の行儀からが惡い、來る程の者に追從輕薄いうて面を飾るは、人たる者のせぬ事だ。言を巧みにし色を令く

浮世親仁形氣二之卷目錄

# 浮世親仁形氣　二之卷

## 一　金を樂しむ高利の親父

都の繁昌清水の西門より詠め廻せば、立ちつゞきたる軒端かゞやき、内藏の氣色朝日にうつりて夏ながら雪の明ぼのかと思はれ、豐かなる御代の例し、松に音なく千年鳥は雲にあそび、限りもなく打ち闢き、九萬八千軒といへる家かずは、とつと昔の事にして、今は土手の竹藪も洛中になつて、それぞれの家職つとめて、其の透を樂しみ、遊山遊藝に年をよらせぬ事にして、これ家業の御蔭にて、相應に金銀をまうける故に、妻子も樂に養ひ、其の身も心を慰みて、よろづに自由なる京に住めば、何を習はうと諸藝の達人多き中に、たゞ無藝にして金ためる事ばかりを樂しみに、其の生まれつき堅き事、巖に根をおろはせし、松永貞德花咲町に、年久しく住まれし其の鄰に、小石屋又右衛門といふ錢見世出して、身過大事と心得たる親父あり。春みる櫻きらひにて、身は花色布子のつよきを好へ、明暮のもてあそびに、二十五桁の十露盤を枕にして、四十年以來同町にゐるながら、貞德の俳諧せらるることには、諸國の目安の寄合いたさるゝ分別者と許り合點し、近い[illegible]殿なれども、一代公事訴訟いた

こねば、貞德が類な俳諧書いてくだされいと、御無心申す事もなしと、花の都に住みながら、かかる親仁もあれば、また田舍人は、たとひ衛士籠を雛の綿の塵よる物かといふとも笑ふまじ。此の親仁年の寄るにしたがひ、身は干鮭の拔け目のない男、後生よりは始末を第一に心がけ、若い時からたゞゐざりを、わけたるまゝるの皿をたゝいて百錢のたしともなし、捨つる塵塚までも錢さしにこしらへ、年來錢をためて溜め、今部にて大名借する、上から二番目の銀持、世間から三萬貫目の身代とさゝれながらも、いかなる分限になりても、そのまゝ親からゆづり受けたる、取葺屋根の二間口の家を建て直さず、今に小さい小者と、徒らに氣のつかひけのない、六十に近き下女とをつかひ、常住香の物菜の外には、いかな／＼正月の雜煮も一枚、松たけ十本に分する時も、目に見るばかり。咽がかわけば白湯こがし、油火も寛中に一つともして、これをねさまに消して、鼠のあるゝをかまはず。絹の下帶さへせずに、不斷古布子で暮し、町振舞大名借の相談の有德人と、二葉講の付會には、此の心にても少しは世間を思ひて、銀をかしたる古手屋にて、權づけにのきたけの合はぬ絹物をかりて、其の家から身拵へして、鼻紙までもらひ行き、歸りにはすぐに又爰に來りて、元の古布子に著替へて戻り、たゞ利銀取る事を、世の色人の傾城狂ひする程に面白く思ひこゐて、橋東の茶屋役者に、左割の利を取り、しかも三ヶ月宛の切に極めて、其の切に返辨せぬものには、盆でなうても利足を一割りづゝをさらせ、

一年十二ヶ月に十七ヶ月の利を取つて、たゞ金銀の溜ることのみを悦び、頭には雪をいたゞき、都の富士の二十にたらぬ若い者より氣丈に、毎日借し付けし催促にかけ廻り、念佛講の同行の死なれたる葬禮の輿かつぐ人に行くにも、一割の口錢はねて、鬼の目をもくじり、佛の箔でもはがしてなりともたゞは通さぬ慾人なり。世間の人の金銀ほしき願ひに、身を安らかに相應の遊山遊興に心を慰め、身の樂しみを思うての慾なるに、此の男第一妻子は世帯のつひえと見かぎり、女房持たねば子もなく、誰にとらすべきとて金をためけるぞ。とても死ぬるとき持つては行かぬものを、「養子をして、なき跡の問ひ弔ひをせらるゝ思案あれかし。死ぬれば他人の物になるが。」と、旦那寺の和尚の教化に、少し心つきけるにや、甥を養子と極めながら、それも内へは入れず、そのまゝ外に丁稚奉公させて、「我等死ぬると皆おのれにとらすれば、冥加の爲に盆正月の禮に、錢自づから持つて來れ。」と、中々何一つ存命のうちにやる氣はなくて、仕著でる丁稚の物までせぶりぬ。ある時旅役者の立物此の親仁に金十五兩の無心いはんため、何かなしに呼び込み、そばきり振舞う追從のある程いひての上句に、五兩のねがひを申し出しければ、親仁盃持ちながら、呑みもさらず聞えも切らず、返答も此の金と、[illegible]はすしては、舞臺衣裳の質を出す事ならがたく、これ程抱へられし座元へ行く事ならず[illegible]と、朋輩の役者衆へ、又々親仁へいひ込みければ、晩程參りて談合せうとの返事、[illegible]此の事に[illegible]

うとはいはぬ筈、今宵はすこし馳走に氣をはり、いたみ入らして嫌といはせぬ仕掛の網にかけて、鯉の吸物小づけ迄に、鰻の燒物、蛸に串貝の煮物など取り合はせ、御出でなさるゝと、お主あしらひにしてもてなし、あたまから盃替へて強ひつけ、「御肴には先日申せし五兩の事、ひとへに御取り立てと思しめし、是非おかしなされて下されい」と、手をついて頼めば、「旅役者衆には貸したる事はなけれども、先度から餘儀ないお頼み、かしても進ぜうが、此方のいはせらるゝ霜月切にしては、當五月より七ヶ月の利足を、あたまで引いてわたしますが、合點でござるか。」といへば、迷惑ながら、いやといはば、元からやめにもし居らうかと、「どうぞ御料簡がなりませう事ならば、利足は霜月に元利ともに一所に御取りなされて下さりませ。」と頼めど、情といふ事を隨分知らぬ親父なれば、「いかな／＼、ならぬ事、十露盤持つてござれ、算用して、とてもの事に早う役に立つて進ぜう。」といふ。「これはかたじけなし。」すべて役者は不算なる者なれば、いかやうとも宜しきやうに頼み奉る。」と、十露盤を渡せば、親仁引き取り置きたてて、借手の役者に呑込ませ、「先づ利足は小判壹兩に付き六匁づゝと合點なさるべし。金壹兩六十匁がへにして、元銀三百目、此の利壹ヶ月に三十匁づゝ、これに一割口錢三十目、只今元銀の内へ引落しつかはせば、高貳百七拾匁といふもの。それに二ヶ月に一度づゝ、をどりをかけて、霜月までの月數十ヶ月なれば、一ヶ月の利分三十匁づゝ、合はせて利足高三百目を、あたま

で引いて渡す約束なれども、元銀貳百七十匁なればどうも引かれず、まだ銀三十匁足りませぬ程に、其の方から只今三十目の不足銀お渡しなされ」と、十算盤置きたてて見せける。貸手は役者附をつぶし、一文も貸さぬさきに三十目たらぬとて、此方から出しましては、合銀をお借しなされて下さる事そこと腹をたつれば、おやぢ不審がほにて、「十露盤が物を申す、不算な人を相手にすれば、呑込みがわるい」とつぶやきて歸りぬ。さりとは借らぬのみならず、氣ほねを折りて、此の比兩度の振舞ひくはれ損になつて濟みけり。

## 二　色を樂しむ血氣の親父

京も田舎も親父といへば、諸事分別の世界から渡つた人間のやうに、若き人は忌みおそれて、仕懸けたる浮世噺をやめて、それ毛蟲などと自墮落なる居住ひをなほして、彼に智慧有り顔にすることぞ、しんぞ年寄の身にしては、あいわくなる事ぞかし。人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ故に我とてもすかぬ孔子面して、いやながらも不斷行儀かたく、嫁にこそ言ひたいさへ口を閉ぢて、息子にはがらする看板掛上へひろまり、なとくへあいて色事の仲間に、入れてもくれず、他人の若い奴等まで除け者にすることを恨みなれ。髪は霜の行末に、百年經つても人の心にすかりはなし。むかし伽羅の油にていためつけたる、頭も白き鳥も通りに、組糸髷の垢れ兵衛とて、蟬折の鬢やありしが、中比

内證の繰もつれて身代ゆだれ、分散にもなるべき所を、息子の甚介發明者にて、一家町内を頼み年賦の断り、負せかた聞き届けて、つゝがなく家を立てけるに、いよ〳〵甚介商賣の繰を一筋にはげみ、十年もたゝぬ内に、以前よりは格別身代仕上げ、同じ町に大屋敷三ケ所まで求め、中々商ひ手廣く、江戸に棚店を出し、世の重宝となりて、銀持ちたる有徳人、聞き傳へに聟にほしがれども、此の息子いかなる心入れにや、今年三十五になれども、いまだ妻を迎へず、都に住みながら、島原といふ所は西陣と同じ綺を織り出す織物屋と心得、祇園八坂の茶屋ともに宇治からの出見世ことゝ合點して、つひにあだ錢一文もつかはず。常住革足袋に雪駄で得意がたをかけ廻り、商賣の外なる事はた、見る辻放下にも目をやらず、晝夜油斷もなう稼ぎけるに、世には目のあかぬ親もありて、是れ程までに身代を立てなほし、始めの百層倍商ひも仕出して、しかも性よしの息子なるを、まだ總束ながりて、隱居屋敷の棟が建つて渡せしに、それへは引き籠まずして、七十有餘まで法體もせず見世に出て、目かねをかけ算盤を持つて鉢の節を取つて、若い時にかはらぬ有様、近所からそしるもかまはず、四十に近き息子を叱り廻して、當世にあはぬ商ひの指圖、邪魔にはなれど見世の爲にはひとつもならず。これゆゑ甚介氣の毒がりて、廻日講の相口なる禪門を頼み、世話をやめて隱居せらるゝ樣に意見をすれば、一徹な嫌うて追ひ出すかと、たつた一口の返答にさひなく、その後は隱居の沙汰をいひ出す人もなくて、

指すなとは、人間の樂しみはこれより外はなし。しからば向後組手共に手ざしはいたすまじ。その替りに、いづれも一門がひには、急に二十四五許りな究竟の女房を御肝煎りなされて、私方へ入れて下されい」との願ひ。「これは尤も、もはや四十に近き息子なれば、嫁をとられてよい筈、いかにも我々宜しき娘を聞き立て、近日に肝煎らん。」と一同に申さるれば、「いや／＼倅が段ではござらぬ。先づ我等が女房持たねば、組手がたまりませぬ。」と、あたまには白髪絲をいたゞき、扨もつよい絲屋のおやぢと、一門衆も興をさまして、笑はれもせぬ老のふるまひ。

三　殺生を樂しむ佛嫌ひの親父

室町通りに御所染の絹商賣して、大菱屋といへる身代よし、子供を多く先立て、度々の愁へに無常を觀じ、一人取り殘せし大切の一子、三郎四郎に跡敷をゆづり、我若き時に小鳥狩鰻頭の釣を樂しみ、ことに大分の殺生をなし報いにて、子を失ひしと思ひ合はせて、吹筒打ち破り釣竿へし折りて、大釜の下へ燒いて捨て、夫婦もろ共にあたまをまろめて、夫は常覺、内儀は妙覺と名をあらため、毎日の寺まゐり、さりとは殊勝なる取り置き。先立たれし子供衆は善知識といふものなりと、此の仕舞をうらやましがらぬ者はなかりしに、ある時姨の娘果てられて、七條への野送りの供して、歸りには此の身になつても死ぬる事は忌みて、一家衆と分れ道をかへて戻るとて、東川原へ廻つてかへられけるに、案山子の

法師のあてまる振りたてし給ふたる〻事、世の人の笑ひぐさといひ、第一に先立られし子供が、未來の罪の重くなるべかることと、内方涙ながらに教訓あれば、禪門却つて腹立し、「我世帶を伜に渡し、浮世を樂に、したい事して遊ばんために法體せしを、出家同前に思ふは、その方共があやまりなり。川狩したる罪によつて地獄におつるとも、そち達がやつかいにはなるまじきに、重ねて意見無用」とそれからは内へ遠慮なく持ち出しての殺生、これより上の世に樂しみは有るまじ。たとひ來世に無間の底におちてもと、釜が淵に網をうち、若い時より血氣まして、今木村にかへつて、いよ〳〵罪をつくれども、此の家の大旦那なればおしへける者もなく、内儀と息子夫婦の事より、先づは當前の世間の聞えを氣の毒がり、町内の年寄五人組の内儀達を、おやぢ川狩の留守に招き、酒など勸めて、「常感禪門へおつれあひ様からの御意見で、向後殺生をとまらるゝやうに。」と、泣きしみ〳〵いて頼まれければ、宿老の内儀涙ぐみ、「こなたの殺生は世間の人のするわざ、お恥かしとも申すべきが、私の夫は今年六十七にて、年寄役を持ちながら、町内の若い息子たちをそゝのかし、傾城屋狂ひの太鼓を持つて、内に一夜もいられず、これを意見すれば、四十五年添うてゐる此の妻に出て行けとのあいそつかし。今日は内方の常感様を頼んで、意見いたして貰はうか、明日は御寺の御上人様に、しかつて貰ひませうかと思ひしに、世はさま〴〵の思ひあり。」と、しを〳〵として語らるれば、組頭の内

朝から晩まで佛の事にかゝつてゐられ、たま〳〵見世に出て所作くりてゐらるゝ所へ、見世の道具を買ひに來る人が、此のたばこ盆いくらと問へば、むすこ藤兵衛、それは三つ道具揃ひて八匁五分といふを、親父目かほに皺を寄せ、やい藤兵衛、あれは本直が五匁なるに、三匁五分の僞りをいふ事もつたいなし、五戒の内にもわけて妄語戒を佛も禁め給へば、假にも虚言を申すな、八匁五分と倅申すは僞り、五匁でござります。南無あみだ佛といはるゝ故に、藤兵衛腹をたて、商人はそらねをいうて利をとらずして、何を以て今日を送る物ぞ、商ひの邪魔をなさるゝと叱れば、扨も凡夫かはいや、利慾の爲に僞りかざるは、佛も無間の業といましめ給ふ。淺ましいかな歎かしいかな、利を貪りて地獄の種を拵ふる。汝貪慾の心ふかく、商ひばかりに精を出して、ありがたい經說を知らぬ故とはいひながら、一字を學ばずとも、其の一心まことなる時はこれ佛體なり。調達が六萬藏の經を誦せしも、奈落をまぬかれず。慈童が一念の悲願を發して、兜率に生まれたりとあれば、學德あらずしても、心さへまことなれば、佛になる事は疑ひなし。只願ふべきは後世の一大事、觀念をこらして商ひをするともみぢん譃をつかず、一錢にても利を取る事なかれと、貧僧を見ては、昨日折角洗濯してきせた布子をぬいでとらせ、今日も佛へ御奉公申したと悦び、むすこが心あてにしておく金銀を取り出しては、寺がたへ持て行き、こちの旦那寺でもある事か、行がたも知れぬ田舍からわせた、みせ出しの開帳の奉加

に打ち込み、倅が精出しまうけためて置く錢銀を、いつの間にやら取つて出て、佛の事に皆仕果てらるゝ故に、どうも是れでは身代がつゞかぬと意見をすれば、汝等財寶を惜しんで、三寶にほどこす事をとゞむるは、これ慳貪愚癡とて、佛仲間にきらはるゝ事なり。西天の貧女は、夫婦の中に一衣ならでなき衣裳をぬいで、その身は丸裸になつて、僧にほどこせし功徳によつて、釋迦世にましまする時、舍衛國の大長者と、夫婦共に生まれしと、賢愚經に出てあり。身どもが今金銀を寺道場へなげうつは、未來でわいらを大福長者にしてやらうためなり。重ねて惜しむ心はなはだしくならば、是れ我が罪業のいまだ深き故と思うて、隨分有りたけの物を出して、三寶にほどこせよと、毎日錢銀米を持ち出で蒔き散らさるゝによつて、今晩より息子と談合をして、座敷牢へ入れて寺参りさせぬやうにいたす筈」との話に、皆々我を折り、これは佛の道を願ひ過ぎられて、妻子の難儀と、勘當親子は此の元西の次第を聞きて、こちのおやぢが殺生の好かましと、喜ばれしは、時にこそなし。

浮世親仁形氣二之卷 終

# 浮世親仁形氣

付り　六十の手習色涙の手本揚屋の筵破り

## 三之卷　目錄



浮世親仁形氣三之卷目錄

## 浮世親仁形気三之巻目録

# 浮世親仁形氣　三之卷

## 踊を樂しむ子自慢の親父

繁昌の難波津や、入江も次第に埋もれて、水串も見えずなりにき。水鳥は陸にまどひ、蜆とる濱も抄菜の畠とはなりぬ。むかし棹さして舟ならでは行かれぬ所も、瓦葺の軒高く、白壁づくりの家建てつゞき、色めきたる町も見えわたりて、ながれを立つるも、いにしへ川にてありし緣によれるにや、今に榷をはめる商賣の地とはなりける。抑新地始まれる地ならしの時、三間口の家をたてて、荒物見世を出して、次第に金をまうけ溜め、萬屋の德左衞門とて、所にても古き人とてもてはやされ、少し殘れる髮さへ黑き筋なく、年もはや家に吹つきの、乃の字をだに知らず、一生文盲にて暮せしと、金銀といふ諸藝をさす、重寶な物を持ちしゆゑに、此の親父が詞を用ゐて、町にても口を利きて通りしが、本卦還りに初めて男子をまうけ、世にないものを我ひとり持つたる心地して、寵愛ふかく我儘にそだてて十三歳になりける。ある時町衆二日寄會に、借屋中の判をとりて仕舞ひ、組頭の立花屋の淨閑隱居して、倅十助に向後町儀をつとめさする、披露目の祝儀に、樽肴を出され、幸ひにかたい衣食

ふ拵へ、能い加減に酒のみ、座中打さゞめいて世間咄をせられし中に、亭主分の淨閑、少し酒も廻りて心やすい機嫌にまかせ、徳十助が自慢咄、「今はいつぱしかつかう大體にござれども、當年うそなしに十一になりますれども、おとなな役をいたし、帳相算用萬事引き受け致すゆゑに、我等は表の事、構ひ申さず、奥の下向にかゝつて居るが、見事見世商ひも仕り、その透には御宿老殿の裏座敷を借つてゐるが、兒醫者の徳隆老がへ參り、四書を讀みならひ、論語孟子を中でやりますを、此中も齋に參られた旦那寺の常坊聞かれて、肝をつぶされ、今文殊とほめられました。これから文選とやらいふ物をよむ程に、發すゑた質に六臣註を買うてくれよとねだりまする」と、涎をながして申さるれば、いづれも今宵の馳走にめでて、「ひとりも一人かなと發明なる生まれつき、子寶と申すは御子息十助殿事、淨閑老にはあやかり物」と、座なみの挨拶を、寐してゐたる徳左衛門聞くよりむつとし、すく／＼と起き直り、「これ淨閑老、いかに心安い出合なればとて、親の口から我が子をはめるはたはけの内なり。いうても爰は町の會所、人もなげなる息子自慢、此の徳左衛門が倅の徳三郎程な器用な子をもたれたらば、どのやうな人中で自慢めされうも知れず。そちの子が物讀みすれば、こちの子はならはずに鐵輪の手うま、まくらがへしの祕曲、それは／＼はなれ切つたるせんさく、荒神拂ひにわせる無學院といふ山伏が、此の比も來て徳三が鐵輪の手品を見て、あの子は飯綱つかひではござらぬかと、錫杖

しけあらるれども、互に片意地のはつたるおやども、中々聞かぬと角めだつを、年寄制して漸うになだめ、又改めて杯を出し、雙方の子供も呼びよせ、「町内の事なれば、互に子孫まで念ごろになされねばならぬ間、向後魚と水との如く仲能くいたさるべし。」と、徳左淨閑中なほしの杯事、「めでたう十助肴に小謡うたへ。」と、淨閑指圖すれば、倅畏まつて四海浪を獨吟に謡ひ納むれば、年寄きげんよく、「どうでも十助は器用な、第一聲がようて。」とほめられければ、徳左衞門せいて來て、「徳三郎十助に負けな、肴に槍をどりして、町中の目を驚かせ。」と、みづから臺所にかけてある棕櫚箒取つて來て、我が子にかたげさせ、尻もつまげてとらし、「隨分あほをやつて親の名まであげてくれよ。」と、ふらして出し、おやぢは扇拍子取つて、歯のない口を動かし、しほからい聲をはりあげ、「長い刀をさしたはおさき。」と、地をつけて唄ひ出すことをかしけれ。息子は愛を大事と片肱いからし踊りけるを、心ある町衆は笑止がりて、側からさへ汗をかかるゝに、親仁は餘念のない顔にて、「ま一つかへしてふれさツさ。」と、白髪頭打ち振つて、子故の闇にねもせで迷うたヤツサ。

## 二　飛行を樂しむ仙人親父

攝泉の堺は、千代の松原萬歳の浦浪靜かに、人の住みなしも表向よりは内證奥ぶかにして、京にまされる樂人あり。物毎内端にかまへ、身持しとやかにして、十露盤現にも忘れず、諸事こまかに、見

かけ綺麗に、萬の義理をたて、随分花車に世智がしこく、始末を第一にして身の養生よく、澤山なる鱠を喰はず、大酒を好まず、色遊びに錢をつかはず。男は紬縞の富士絹一つ、三十年も洗濯せず、襟垢つけず、紬ぶくりんも紅皮にして、編笠も破れを内より厚紙の反古にてつゞくり、幾度かこれをかづきて、灰よせの時もあたらしきを著る事におよばず。女もまた嫁入著物をそのまゝ娘にゆづり、孫子までもつたへて折目も違はず、費をわきまへ、鼻紙も二枚かさねて、幾度も火にあぶり、重ねて目になるまでは、紙屑籠へ入れぬ程に、萬事に氣をつけて、元日より大年までを一度につもり付けて、其の外は一錢もあだにつかはず、諸事の物年々に拵へて、僅かなる世帯なれば、身代の事のみは苦もなく、奢りがましき遊興もなければ、不斷宿に在りて物の末見て、心を慰むる人おほき中に、藤井元徳といへる有徳人の親父、つねに列仙傳を見て、仙人の身持は第一世帯に拘はらず、好色をはなれ、美食をくらはず、世路に氣をつひやさず、松の葉などの輕食を喰らへ、正月著物も木の葉のつづれにてすまし、髭月代も剃らざれば、髪結錢を出さず、行きたい所へ、錢のいらぬ雲に乗つて飛行する事自由なれば、仙術を行うて、樂しみにせんと、ふと思ひこまれしを、手代のうちに目のきその抜けたる油斷のならぬ者ありて聞きつけ、さいはひの事と瀧の山で申しけるは、山師には實し仙術を學はんと思しめしたつ由、はゝかりながら御自身千年萬年御たもちなされたとて、何とて御一人其の術

を知り得たまはんゞ萬のことも其の通りなれども、別して師匠なしに此の道は行がたし。昔も此の道に心をよせて學ばれし人々、皆々深山幽谷に分け入りて、それ〳〵の師匠を取り、又は秘書を得てよく見きはめ、仙人になりたる衆中、日本にも多く見えたり。役の行者久米の仙人、宇治山の喜撰法師、扨は現に私母方の伯父が、江戸の三井店にしばらく奉公いたして居りし時分、心願有つて富士禪定いたせし砌、常陸坊海尊にあひ申し、判官殿の悪性咄、辨慶が女房嫌ひの噂、伊勢三郎が道中で護摩の灰になつてゐて、熊坂の長範が方へ上米はねりし昔物語聞くにあかず、しばらく足をとめて聞いたる間が、我しらずに五日たつたと、去年の春伯父がのぼつて咄をいたしました。その時分拙者に、仙人の手代にもならば、海尊方へ肝煎りてつかはすべし。いま入りの新米仙人は、霞を喰ふ事が日向くさうて食はれぬ物じやと、常陸坊が語られし故、私伯父が申せしは、只今は年を切つて仕取りいたしてゐる身なれば、重ねていとまを貰ひ、痩世帯でも持つた時分、大晦日に借銀乞ひが来てせがむ折、世帯道具を腰に付け、鶴に乘つてこなたの方へまゐらうと約束をして、仙術の祕傳を書きし一卷を貰うた由にて、今に伯父が所持して居りますれば、旦那の御所望ぢやに、我等に授けてくだされと申さば、いやとは申されぬでござりませう」と、見た樣にうまう咄せば、元德悦び「誠に學ぶ門に書來るとはこれなるべし。われ久しく仙術の願ひ深ければ、念願とゞいてはからずも、汝さい

住吉の方に向ひ、觀念の眼をふさぎ、一代の大願此の時なり、今心ざす所は生駒山までの飛行ぞと、兩の手をさしのべて飛びければ、棒樫の枝をこすり、捨石のたゞ中に落ちかゝりて、そのまゝ腰をぬかし「やれ仙術が生煮えにて、まだよく熟めもせぬに飛んで、腰骨を打ち折つたわ。これや目が眩ふわ。出合へ／＼」と呼ばはる聲に、家内の者共驚き、手燭ともしつれ庭に出で、これは／＼と騷ぎたち、母屋へ人を走らせ、醫者よ針立よ、へうたんの黑藥よと、隱居と母屋の大騷ぎ。町内までも家々に行燈出して、元德仙人が輕業の仕そこなひなされて、腰の骨が折れたげなと、堺中に此の沙汰ひろまり、それより大坂に傳へて、これはかはつたせんさくと、今に咄したねとはなりぬ。されば此の元德、若き時より俳諧を好みて、其の名ひろく手鑑にも記して、表德號を社樂齋と申しぬれば、及ばぬ事をする者をば、しやらくさい事と、世話にいひしは此の因緣ぞかし。

### 三　酒を樂しむ賢人親父

何事も其の人によりて、風俗のかはりたるも一興あり。昔連歌師の牡丹花は、牛の角を金銀の箔にだみて、紅の引綱付けて、心の行く所へ乘り廻られしも、人がらそれに備はり、世の人指はささざりき。津田休甫が紅鹿子の女小袖著て、白晝に大坂の町を通りしも、其の身道者の德あらはれ、目にかくる人もなし。此の人々はその心より發らずしては、まねてならぬ事ぞかし。見ぬもろこしの親仁

たる詩を引き出し、辯にまかせて申しければ、南禪門聞き込み、いかにも七賢人の學ぶからは、下戸にてはすまぬ事として先づ保命酒、甘きより呑み初め、師匠なしに次第に位があがりて、後は生酒の辛口なるを好みて、中椀を茶椀となし、下地からの上戸より増しに呑み出し、これよりしばらくも酒なくては、精がつきるといひ出して、いつしか川岸に毛氈しかせて、素酒を樂しむ折から、川舟に紫の帽子かけたる野郎あまた乘りて、諸囃子の役者まじりに、都の大臣を夜もすがら、佐太の天神まで送るよしにて、のみかけ引つかけ、しやみせん胴拍でをどり歌ひ、水主までも顏の色入日にうつろひ、猪口にて赤き顏を振つて、義太ぶしをうなる。此の酒をされし潯陽の江の心地ぞかし。又少し跡より小御座の幕をしぼらせ、いかにも大臣顏して北國者と見えたる奴が眞中に坐し、ゆんでめてには、新町のわけらしき女郎禿取り廻して、伊丹屋の四季延命酒、春桃花夏は菖蒲、秋は菊花冬見ざれ酒、さまざま呑み騷ぎて、あたりに人もなげにあれける。心を付けて見るに、根引して行く女郎を、新町の揚屋遣手末社、是れまで送ると聞えける。挨拶は「國もとの母親も、ながう取つて今年來年の内には極樂か地獄へやるべし。したらば此の君をおか樣といはして、大黒柱にもたれかゝらして、わきから見るやうなことといへば、いづれも「その仕合を、此の上ながら願ひ奉ること」といさめける。何處も金持の威勢にて、かかる浮世の面白い事にあひぬ。七賢人も餘所の呑酒につられて、手前の酒もいつより

に染み、燗鍋で通ふ事もとけしなく、後はじりん取り寄せ、五升樽も大形にかたぶく月の須磨の山の端に、今少しと見しまでの遊びしが、詞ではどうもならぬ此の風景、世の樂しみとはこれなるべしといへども、其實心にには、宵の内遊びの色まじりの酒ほど、半分も身に染みて面白うないには極まれり。富田屋の親父つくづく世を觀じて「此の身をかへりみれば、いままでの作り賢人の樂しみは、ひとへに氣ちがひの沙汰なり。世間に名をほしがるは、宵に見しやうな榮耀をせうが爲なるに、我等金銀事缺かぬ身にて、七賢人とそやされ、名聞にしばられ仔細な顏して、をかしからぬ無色の酒にくれて、此の儘死なん事、人間に生まれたる甲斐はなし」と、そろそろ六十の筵を破りかゝられし時、伊丹屋の法師がほつと息をついて「今に知れぬは人の身、月雪花は假令の樂しみ、歌をよみ詩を作りて、我人仔細らしい顏はすれど、根をおしてから臍より三寸下の無分別にきはまる所、人間の榮花を[illegible]の[illegible]になし、拙者は今宵[illegible]いたした。明日から此の七賢仲間をぬけて、今より思ひ切つたる色道ひとすぢ、世を心のまゝに過ぐべしと思ひつめたり。」とあれば、富田屋の禪門うなづき、拙者も其の通りに思案をきはめてござる。」と、互に[illegible]年までかためたる身を忘れ、兩法師いひ合はせ、後に色狂ひの思ひ立ち、[illegible]つぶして、一生人の子供の[illegible]給へ。」と、あたまから古格な意見、「これでは氣がひけて思ひつかるゝ色道ではなかるまじ。[illegible]は[illegible]なる[illegible]」といひもあへ

す、三十四五年添ひたる女房に、いとまの狀添へて、皆々親里へ歸しぬ。定め難き世や、二人の內儀は白髮いたゞいて去られて歸り、又外へ緣付きする年にもあらねば、すぐに尼になりて墨染の身となられぬ。諸白髮まで馴染み、然も世帶を大事にかけて仔細もなき女房を去る事、道を背きし奢りの初めぞかし。今までは夢に見し事もない新町通ひ、これ六十の手習ひ、半太夫かをる此の二人を何日のつゞけ酒、後日も常も外へやらず、前より逢ひ馴れし男を寂しがらせける。兩法師のむすこども、親仁金をほしがる故、何程まうけても尻も結ばぬ絲にて、針を藏に積んでもたまらぬと、二人の子供申し合はせて、町內の年寄組中へ斷り、むすこが形見分として、金子千兩づゝ親仁にくれて、親でない子でないとの證文取つて、二人の親仁を勘當してのけ、家を無事にかためける。前代ためしなき浮氣親仁と、笑うたもむかし〳〵。

浮世親仁形氣三之卷　終

# 浮世親仁形氣

付り　娘に甘い地黄煎付いて離れぬ花見の宰領

## 四之卷　目錄



浮世親仁形氣四之卷目錄

浮世親仁形氣四之巻目録

仁共集まり、諸國の大名衆へ御用銀の借しくれの内談を、酒宴遊興よりは増したる世の慰みと思ひ定めて、寄合座敷といふ遠き所を去つて、下寺町の容庵をかりて、毎月銀まうけの評議にくれて、命の入目かたぶく親仁共、後世の事は忘れ、たゞ利銀のかさなり、富貴になるを樂しみけるに、一人の親仁が此の壽命藥の事を聞き出し「いづれも御歴々への預け銀、十年符の斷りを聞き屆けて、慥かなる證文は持ちながら、七十八十になつて、今十年の皆濟までの命心もとなし。これを飲んでいま四五十年も生き延びなば、高利にして二十年符の、あたまからなしくづしの借しやうに、魂魄の有るべき事。」と申し出せば、「それは慥かに藥の驗にて、命をのぶるに極まつたる事ならば、五匁や拾匁の銀は惜しまじ。」去年さるお大名様から、稀なるものの由にて、西瓜の大きさに見増す許りの御所柿五つい たゞき、その核を鹽町の下屋敷の庭に植ゑて置きぬるが、昔より桃栗三年柿八年といへば、八年過ぎなば其の樹になるを見て、言ひし如くに出來なば、一ッは御門跡様へ指し上げ、殘りは大坂のない物くはうといふ榮耀人に、一ッ三匁づゝで賣らうと思ふ胸算用なれども、命の程は始末しても、思ふにならぬ物なれば、おぼつかなく思ひしが、延命藥にて慥かに長生する事なれば、柿に限らず新田の開き、又は水つきのあれ地に貸なたてて、末々繁昌の時に至りて、高家賃取るやうなまうけの道のもくろみに、大分益の有る事なれ。いざこれから其の壽藥とやらいふ醫者の方へ行き、まづ試みに一

服つゝ買うてのむまいか。」と談合を極めて、堺筋の唐者にあうて様子を聞けば、「若き衆中なれば薬料大分取るに及ばず、命の根つぎに手間をとらず、津液燥いて元手の少ない老人達には、元をたすに大分の藥味入るなり。おの／＼がたのやうなる銀を持つたる人は、何商賣に取りつかれうともさのみ手間も入らず、氣骨も折れまじ。元手のないものにその取りつきに隙の入る事、面々今日の世渡りにてなそらへ知るべし。今十年早く仰せらるれば、金壹兩づゝにて調合致し進ずれども、元手すくなく、しかも此の内に當年中にいきつく老人も見えわたれば、おほかたにてはなりがたし。」と、氣にかゝるやうに申せば、此の内に今年中に死ぬる老人もといふにつけ、面々俺が身の上かも知らずと、闇の夜に鐵砲の音を聞く如く、どれにあたらうことと互に顔を見合はせ、おしやうに氣づかひになつて、「少々高き分は苦しからず。」とまうせば、「一服金十兩づゝ。」と申し出す。いづれも肝をつぶすを、「さのみ驚き給ふな。六十目小判にして六百目、十年の日數凡そ三千六百日を小判にして、一日いくらに當るぞ算用なして見給へ。一日の命が壹分七厘五毛づゝに當れり。おの／＼の家の繁昌の銀にて、一萬兩にもかへられぬ一日の命をのぶる事、いやならば御勝手次第。このかたから此の賣藥を強に願ひは致さぬ。精の味について頓に命がたすかりたいとて、一度に五百目一貫目の人參湯を飲んで、苦悩して死んで仕舞ふ無分別者世に多し。只今も申す如く、此の内に一人は追付けたふといふ人あり。必ず

其の時命がなしいとて、私などを當てになされて呼びになど下されな。其の時節になつては、藥師如來が御來臨あつても叶はぬ。さあ身代の尾が見えては銀が借りたうても貸し手のないと同じ事にて、冥途へ片足ふん込んだ人は、どうも拙者が療治にも及ばぬ。用心は無事なる内なれば、いづれもの無分別次第。」といふ時、勝手から人手代と見えたる若き者が、下袴を著し罷り出で、「今朝も伺候仕りました北濱の熊本屋の手代でござります。今朝ほど申し置いて歸りましたとほり、當春旦那こなたへ御藥申し請けにまゐられました時分、當年中には死病に取りつかるべしと、未然に仰せ聞かされしを違はれ、御藥代高直なりとて、不調法を申して歸られし所に、御見立の通り、今月始めつかたから重病を受けられ、大坂中の名醫達六七人に替へ申せども更にしるしなく、次第に重りて、今は臨終を待つばかりの仕合、妻子一家の氣づかひがり御察し下さるべし。然る所に病人おもき枕をあげられ、日外殘溪樣の仰せられし事をうたがひ、一服十兩の藥料を惜しみ、今死にとむないに冥途へおもむく事、さりとは殘念千萬、いひ出すも面目ない事ながら、私に參り御詫言を申して、せめて二三年命ののばはりますやうな御藥があらば、百兩貳百兩でも藥代の高き分はかまひませぬ。今此の節の命の惜しさ、金銀にはかへられぬと申して、血の涙をながして申し付けられました。以前の不調法を御免くだされ、十年延びませぬ事ならば、一兩年にてものがれますやうに、延命の御藥を御意にかけられ下さ

少年をかさね、三十三にて初めて宿ばひり、親方より元手として銀二貫匁貰ひ、家業にゆだんなく其後精を出して、六十に及びて大分の身代となり、通町に大屋敷を求め、今老樂に節季のねざめも氣づかひなしに、明けゆく春を祝ひぬ。殊更ひとりの娘美形にして、おつやと名付けて姉の寵愛、ことわりなるかな、鳶鷹とは此の事。二親の不器量にはふだん似たる所もなく、其のうつくしさは吾妻をだてには縁なる生まれつき、わけてよい世に生まれあはせて、寝もと使ひはしたまで大勢つきそひ、歴々方の息女にかはらず、豐かなるそだちなり。母の親の才覺にて、京より御所方の作法心得たる女の諸禮者を呼び下して、おつや十一歳の頃よりこれを付け置き、萬事都をうつしけるに、物ごしまで優しく、かりにも鄙ならず、風俗花車に、見し人思ひの種とはなりぬ。嬰兒あけまきの程過ぎて、當流のたけ島田、女は髪かしらといひ傳へし如く、此の娘十五の秋の盛りを見ては、中々角田川の月も及ばぬひかりわたる容顏、おつやとはよくもつけしぞ。綿屋の角兵衞が四角四面な顏して、あんな娘はどうして儲けしぞ、親に似ぬ子は鬼子といへど、これは鬼の子に天人なるべしと、江戸中に名を知られたる有徳人の嫁にほしきと、時分とて母の親の返答に迷惑せらるゝ程、仲人を以ていひ入れければ、申し來りし中にて、すぐれし身代宜しき先々を、十六軒書き付け、親角兵衞に「おつや緣付きの事、此の内いづれへやるべきぞ」と内談有りしに、角兵衞かぶりを振つて「我が娘ながら今の世の

美人といふはおつやが事なり。それを外へつかにし、荒男の慰みものにさすべきいはれなし。いつまでも大事にして内におかれよ。」といへば、「しからば手前へ養子婿をとりて、此の跡をゆづる合點か。」と、母親がきねて尋ねらるれば、「美人に大分の家財を添へて、何婿にやる積ぞ。跡めは仙臺に居る甥の木工三郎を呼び寄せてする合點なれども、おつやを女房などにはもつたいない事、持たする事にはあらず。さあ又あんな娘を、ま一人産んで見ようと思やつてもなるまじ。世界にない物を、人手に渡さうとは、心のない事をいふ人ぢや。」と、中々縁付きの相談には取りあはず。たゞ外へつかにする事を惜しみ、するぶん姿をかざらせ、世にはやるといふ程の模様衣裳を、一番にとゝのへ、これを著せて品をやらせ、今日は上野の花見につれて出て、明日は淺草の觀音へ伴ひ參り、下向の浮氣男共にこれはと肝をつぶさせ、立ち止まつてうつゝをぬかし、さてもよい娘と魂を失ひ、うか／＼ついて來るを世になき嬉しさに思ひ、少しも人立ちのある所へは、風俗を作らせて年中つれて步行き、人にひけらかす事を悦びて、十六七八の盛りは過ぎぬれども、いかな／＼縁に付ける合點にならず。堺町木挽町の芝居を見せては、荻野だの女形の風俗はよいと見ては、あの如くに姿をうつさせと、毎日着物をよい嫡著せて步かせて見て、今少し腰をひねりて、足どりこならず大樣にあゆみて見よと、野郎屋の親方が舞臺子に女形の風を教ふるごとく、萬事を捨てて娘の容體を指南し、菱川が繪本を買うてあてがひ、

ものお娘方贔屓の綱く、身嗜みにかゝらせ、結句縫つむなどいふ女の藝は、みぢんも習はせずして、只今方の御息女の御慰みになさるゝ花車事の藝に、師匠を取つて習はせければ、歌の道も覺え、手もつたなからず書いて、聞き傳へに短冊に歌を書いて貰ひたいと所望に來れば、親仁悦び、隨分結構に拵へたる色紙に歌を書かせ、こちの娘は器量計りでござらぬ、手跡も是れ程には見しましますと、後は寺社の繪馬に、娘が細工にせし衣裳繪に歌をかかせ「通町錦屋角兵衞息子の娘つや筆。」とあるは、世間の人のお目にかけ給ふ。御寶前參詣の男共是れを見て、いよ〳〵戀ひ忍ぶもの多かりき。兩親を始め一家の人々意見をなして「いまだ振袖の中に、いづ方へなりとも緣に付けらるべし。」としきりにいへども承引せず「世界に我が娘のやうな美人に、かけあふ聟がなし。あたら美女に男持たせて所帶染にする事、いかにしても惜しし。」と誰がいうても聞き入れず。只あけくれ連れて出で、人の見かへする今日まうけるよりは滿足がりて、次第に娘自慢つのり、若い時から行かぬ吉野(太夫)に行きて、今の花紫が道中を見て歸り、小袖も太夫が著るやうな仕立にしたしとて、郭へ出入するお針をやとひ、腰に綿入れず、すそひろがりに裏をふかせ、しんなしの大幅帶をしどけなくつい結ばせ、緋縮緬の下紐見ゆる樣に歩かせ、三つがさねの衣裳ひとつ前に小づまをとらせ、素足に黑緒ほどな二つなひの鼻緒の太き雪駄をはかし、八文字の足どりを教へさせて、祭のねり物の如く先に立てて歩ませ、

親父跡から編笠にてつい〳〵てまはり、歴々人が立ちどまりて、「あれは上方の傾城か、三野では目なれぬ女郎、何にもせよ美しいものぢや。」とながめ入れば、おやぢ跡より、「おつやに、しづかに行け、爺が追ひ付きかねるといへ。」と、腰元共を呼びかへしていひ付くるは、我等娘といふ事を見る人に知らすべき僭上、さて行く先の寺社にて、毛氈敷かせ幕もはらずに、わざと諸参詣に見せるやうに構へ、花なき時にも古歌など短冊にかかせて、木の枝にかけさし、色も香もある娘ぞと、人に知らしがらする一ぱいの楽しみ。酒の上にて琴三味線一節切まで吹かせて、尺八ほどな[illegible]をたがして、親仁自慢に[illegible]も見せず、後世も浮世も忘れ果てて、娘をつれてひけらかす事を、又もなき楽しみにして、つひに身代棒にふつて、通町の屋敷を拂ひ、後は芝の神明あたりに、わづかなる小家を借り、娘は三十二になれども、その儘白歯に振袖、脇さへつめさせずして、一文が糊買ひにやるにも跡からついて行き、昔の如く人が見るかと気を付けしに、其の時とは立ちどまる人の見やうがちがひて、夜鷹にしてはまたつれが尋常な、品川辺のおぢやれ〳〵かと、遊女よりは一段おとして見る事は知らずして、「布子着せても美人には人が目を付くる、くさつても鯛とはよういうた物ぢや。」と、此の身になつても一ついうて、二つめには、これが娘々と娘自慢で、身代仕崩したる親父は、廣いお江戸にもこれが初めと、語り傳へて笑ひ種になりて果てけり。

## 一　兵法を樂しむ陽氣親父

親の代から武家方へ出入りて、まうけ溜めたる白かね町の、刀屋治五右衞門とて、富貴にして子供三人持ちける。いづれも利發者にて、渡世にゆだんなく精を出しけるに、親父治五右衞門幼少より御屋敷がたへ出入の、武家の行儀を見て、男ならば武士なり。ことには商賣人といふものは表裏をいつて世を渡り、殊に平生の行儀じだらくにて、人たるものの身持とはいはれずと、その身も腹からの町人にて有りながら、町人を嫌ひ、惣領治左衞門を跡目に讓し、次男三助を足輕奉公に屋敷がたへ出し、我も不斷侍の行儀に、一腰さしはなさず、水風呂へ入るには湯殿に脇指を立てかけ置いて、故井間道の行跡、行儀がたうて町人の付合ひたいとて、商賣のためには宜しからぬ身持と、女房きのどくがりて、念比なる相口の人に頼みて意見をすれども聞かず。「刀物を賣りて過ぐるものが、武士をまねるが僻事か。書物屋の亭主が文盲なるは、藥種屋の十露盤知らぬにひとし。その道にて今日を送るものが、其の道に心をはこばぬは本意ならぬ事。」と、更に聞き込まねば、「それは不料簡といふ物、しからば酒屋の亭主は大酒して醉狂し、傾城屋の親方は淫亂にして腎虚して死ぬべきや。刀を賣つて過ぐればとて、その刃物の切れあぢをためさんとて、人を切つて見らるゝか。町人は町人のやうに、隣ありきは丸腰にても人の笑はぬことなれば、向後侍氣をやめらるべし。下細工する職人共もそなたを恐れて、ま一度間

ひかへしたき細工の物も、きめつけらるゝをこはがつて、そのまゝ受取り歸る故に、好みとはちがうて、又仕直させ、互につひえなる事おほき。」とて、むすこの治五平や、内儀などのきのどくがれ尤もに思へば、詞つきもなよらかに、「かりそめの事にも、一腰を取りまはさぬ様に致さるべし。且は家業のためなり。」と、段々道理をいひ聞かせど、いかな／＼耳に入れず。木馬にて手綱の稽古をし、小鼓をついて城取りの形をなし、兵法居合を習ひに行き、女房に品柄（竹刀）を持たせ、やつとうとの稽古しきりなれば、むすこ治五平難儀がり、夜中思案して、朝むく起きに牛込の旦那寺へ參り和尚を頼み、「後世にもとづき、急に法體せらるゝやうに、御すゝめ下され。」といへば、和尚もつともと同心有つて、其のあけの日刀屋へ行かれ、親父に對面して、「今日は御近所の米屋に往生人がござつて、今臨終をすまして參つたが、日比達者な亭主にて、米商賣は力業が第一だやと、よい比な息子のあるに押しのけて置き、年寄りて俵物を持ちなやみ、七十になつても力の落ちぬ所を、倅共ゝ見ておけと、五斗俵の中程つかんで、持ち上ぐるとて取りはづし、腰をうたれ、それが病の元となつて、腰痛と云ふ煩ひで三日三夜うめき死にめされた。人間も其の身の年の程をかんがへて、六十過ぎなば萬事子に渡し、法體をして後の世を祈る心がけが肝要でござる。米屋の親父も達者を頼みにして、不斷力業のみにて、佛とも法とも知らずに死なれ、臨終の時もむしやうに空を摑まれしが、笑止や地獄へ參られう。人事

うな料簡はいたさぬ。」と、言葉をあらせず、此の女氣の毒がり、「爺あたりへ聞えては、兄樣の御一分もすたります。御料簡がなくば、此の着物を其の代に取つてくださりませ。仕立ててから昨日今日、二日ならでは肌につけず、これで御不足ならば帶も添へて進ぜませう。」と、ぐる／＼と解いて投げ出し、「指もあたつて銀子もなければ、これにて御堪忍。」と涙ぐみて、丸裸になつて、紅の二布許りになりし其の身のうるはしさ。しろ／＼と肥えもせず痩せもせず、灸の跡さへなくて脂ぎつたる有樣を見て、白髪な時からつら取るやうな親父も、おた／＼とふるひ出して、「そもやそもこれが取つて歸らるゝ物か、風がな引かうと思うて。」と、かの着物を取つて着せしなに、おもひのほか老をうかして、尻をちよつとつめり、「御浪人とあれば諸事御不自由にござらう。これで正月の拵へなされ。」と、前巾着から壹歩二つ出して、「これには限りますまい。」と女に渡して立ち歸り、これよりなづみ出して、兵法稽古に行くよしにて宿は立ち出で、此の浪人方の仕掛者にはまつて、刀屋の娘がむねへ廻り、七十古來稀なる好色に身を持ちそこなひ、待行儀も總のやうになつて今は子息にしかられても、まじまじとして聞いてゐる心になりぬ。とかく人の心は、棺桶へ入るまでは定めがたき浮世々々。

# 浮世親仁形氣

付り　年々の始末に花の咲いた老後の世盛り

## 五之卷　目錄



浮世親仁形氣五之卷目錄

浮世親仁形気五之巻目録

氏なうて玉のこしに乗つて來たる仕合娘

日傭中間の茶碗酒一いきに俄長者

八十八の升かけはかりとる知行の新米

# 浮世親仁形氣　五之卷

## 一　獨り樂しむ偏屈親父

人の行方と水の流れは知れぬ物なり。王城を去つて津國に世帯して、妻子をはごくむ者もあれば、奥州街道の塵と跡をさして來た山家者が、花の都の室町に家を求めて、壺の口切とて人を招き、しならしき手前にて、茶を立てて樂しむ人も有りける。更に難波の本町に、古手屋の太郎右衛門とて、五百貫目あまりの身上とは、人の指さすに違ひもなく、豊かなるくらし、兄弟二人の男子成人して、惣領太郎助は智慧才覺ある様なに、色の道に目が見えず、晝夜新町通ひに、親の身代半分明けて、久離きられて此の家を追ひ出され、諸親類へもよせ付けられぬやうに、親父からきびしきいひ渡し、立ち寄る蔭もなくて、惡性友達中間へ奉加帳を廻し、金子貳兩二分の合力を得て、これを旅に引きつけ、終に思ひ立て江戸へ下り、親の手前に有りし時、古手を賣りし本町の贔屓の手代をたづねて、身の不首尾を打ちあけ「御當地に何奉公してなりとも、足をとめたき。」と願へば、此の手代一年大坂へ行きて、古手を買ひし節、太郎助案内にて、新町の夜見世を二三度見て、少しもあかれたる恩もあれば、

心やすく受け込み、つとめる主人に、太郎助親の身上向きをかたり、「當分のこらしめと存ずれば、勘氣ゆるさるゝまで奉公人分に召し置かれて、きりとは役に立つ生まれつき、種性よければ、他人の金銀など取つて走るやうなものにはあらず。」と、取りつくろうて申せば、「さいはひ手代共も一兩人さはり有りて隙を出し、人もない時なれば、汝さへ呑込んだらば、先づ五年の年を切つて、只今より召し抱へう。」と、早速に埒明き此の家につとめて、奉公にゆだんなく、古參の手代共よりは、旦那に大分金銀まうけてあてがへば、主人悦び、太郎助といふ名はいはずして、白鼠々々と呼ばれ、十年無事につとめし故、親方近所に店を借りてあてがひ、元手銀二百兩とらせ、同じ絹布屋をさせられしに、年五年立たぬ中に、貳百貫目といふ銀をのばし、手代四五人つかひて、次第に家さかえける。旦那死なれてから忌日々々に主人の家に行き、持佛堂に一禮して、年忌々々の弔ひにも、主人淨土宗なれば念佛の中で題目も唱へてゐられしと、代々の法華宗なれども、先づ後の世を助け給ふ日蓮上人よりは、今日かやうの有德の身となるも、皆是れ旦那上人のお蔭なれば、親方の宗旨に改宗して、主人の法義になるが道と、主人の寺を旦那寺に頼み、念佛申して朝暮親方の位牌を拜みける。段々仕合能くて、本町の店を居なり買ひ取り、萬心のまゝになつて、大坂の親に勘當のがねひを、手代を以てなげき遣はせしに、親太郎右衛門は次男太郎八に跡をゆづりしに、兄とはちがひ色狂ひはみぢんせざれども、

その替りに智慧うとく、商賣に無精にして、手代共に盜まれてはたし、二三年の間にばた〳〵と身代潰れ、太郎八もこれを氣にして相果て、おや太郎右衞門一人、松や町通に纔かなる裏借屋借りて、片目のない小女童一人つかうて、悲しい暮しの所へ、勘當願ひ申し來れば、太郎右衞門はじとへに、七世の孫から便宜せし心地にて、「勘當許すの許さぬのといふ所にはあらず、あつぱれ手柄者なり。然らば爰を仕舞ひて、太郎介が方へ行きたいが、如何せん。」と談合あれば、「それは猶以て日頃祝著いたすべし。」と早速に旅立ち、身代の小さうなつたもこんな火急な思ひ立ちには重寶、疊鍋釜二つ、明半櫃にやぶれ夜著一つ、當年半の宿代の滯りの方に家主へ渡して、古郷なれども、ふつゝかへ難波に心とまらず、江戸に行きて太郎助に對面すれば、淚をこぼして悅び、隨分孝行をつくして安樂に養ひける。太郎右衞門は邯鄲の枕して、よい夢見たる心地にて、野でも山でも持つべき物は子なりけりと、古い事をいうて悅び嬉しさのまゝに、難波で泣かしなに看經したるまゝと、心の落著くにつきて後世の事を思ひ出し、朝とく起きて手水をつかひ、御燈をあげんと持佛堂をひらきて、大きに肝をつぶして、寢てゐる太郎助をいうとく起して、「今佛壇を開いて見れば、阿彌陀如來がゐらるゝが、彼は何者にすゝめ込まれて、代々の禪宗を改宗して、無間の業と日蓮大菩薩の嫌ひなされた、念佛宗にはなりけるぞ。我等先祖代々法花宗にて、他宗の者さへ遠慮して、わざとは付けず來りしに、如何ない宗旨を

かふるといふ事があるものか。早々あの佛壇を打ち砕き、此方の有りがたい多寶如來に移しかへ奉れ」と、眼色かはつて申さるれば、太郎助聞いて、「樣子を知らせ給はぬゆゑ、法々替へたる御とがめ御尤も千萬ながら、私事はすでにお前に見限られ、御勘當をうけ、一門一家まで寄せ付けざるによつて、乞食同然になつて御當地へくだりし所に、本町の旦那不便をくはへて養はれ、大分の[illegible]までを賜はり、今日五千兩近い身上になりしは、皆もつて主の御蔭、その御厚恩の旦那の問ひ弔ひを、親方の宗旨でない題目では弔ひがたく、御恩送りに主人の法に歸りなり申したれば、拙者が事は自今以後、淨土宗なりと思召して下さるべし。こなたの儀は御恩もない主人の宗門に、改宗なされうやうなければ、佛壇は別になされ、代々願ひ入れられたる題目をとなへたまへ。佛壇の拵へ料はいかほども進ずべし」といへば、おやぢ頭をかいて、「不便や我が主人から無間に落ちてゐられうが、なんと旦那の妻子方へ我等をおはしてくれまいか、法華の有りがたい事を申し聞かせて、此方の宗旨をすゝめん」とあれば、太郎助親仁の堅法華を知つてゐるゆゑ、木をりにならぬといふては、わせてから間もなきに、親子喧嘩になつては、家來の思はく外聞わるしと、「成程そろ〳〵と御勸めなされて下され。」と、さからはず挨拶して、別に法華の持佛堂を拵へてあてがひ、親の心をやぶらざる孝心のほどを、聞く人感じあへり。ある時太郎助、二大名の御息女御婚禮の絹布一色請取り、縫箔鹿子染物類、其の

殊のほか忙がしく、宗門所ではござらぬ。金子請取つて早々かへりて下され。」といへば、「愚かや無間の業人、今でも閻魔王から迎へに來らば、商賣が忙がしいとて行かずに居られうか。一切諸佛秘藏の法、但し菩薩の爲にその實事を演ぶ、我しかも斯の眞要を說くとあれば、はやく其の念佛無間の宗旨を改め、題目をとなへて、寂光淨土に至り給へ。」と、ふところの中より守り經の小さき八軸を出し、亭主があたまをたゝき、「今身より佛神に至る此の經をよく保つべし。南無妙法蓮華經。」と無理にいただかして勸めければ、亭主以ての外に腹立して、「おしつけ業なおやぢがある。そちが尊がる日蓮坊こそ念佛をきらへり。諸宗の名僧古今念佛を信用し給ふ事、諸書に顯然たり。されば法華經の所々に、以深心念佛と說き給へることを知らずや。親父其方達は、謗法邪道の僻者といふものぞ。いま／＼しいに早く歸つてくれられよ。」と、にが／＼しう言へば、親父大きに腹をたて、「忝くも上行菩薩の御再誕なる大事の祖師を、おのれ如きの大凡夫の口から、日蓮坊とはするさんな。ま一言いうてみよ、頭をはり碎いてのけん。」と、氣色してかゝれば、亭主も片意地ばつたる淨土宗の宏才者、貸借の穿鑿は脇にして、居丈高になつて、「しやら臭い。上行菩薩の再誕とは慥かな證文があるか。こちは[illegible]、證文のない事は胡亂に思ふ。日蓮坊が我が身を慢じて自身上行菩薩の再來といひなば、自稱顯他は人倫の法にあらず、我慢強狂にして他宗を謗り、餘經を蔑に言ひなす謗法の賊と、取りやりせん事穢

らはし。手形は返す、手代共向後相屋の太郎助と貸借無用。小判表へ持つて行け。」と色を變へて罵れば、「汝が貸りてくれよと頼んでも、無間の業人が金は唯でも厭ぢや。忌々しい借りはせぬ。」と、讃文引取る亭主をねめつけて、「題目を嫌ふは追付分散にあふべき前表、南無妙法蓮華經。」と高らかに唱へて歸れば、亭主耳を塞ぎ、「題目で家内が穢るゝ、手代共箒で掃き出せ。」と怒れば、若い者共見世に集まり、「今日は法問諍ひの相場が立つた。法華宗が二リン方も弱かつた。」と、手を打つて笑ひぬ。

## 二　經を樂しむ信心親父

親の心子知らずとはこれなるべし。子息の太郎助かくとも知らずして、十露盤ひかへ諸所へ渡す金のつもりしてゐる所へ、傳馬町の綿屋より、お金を少し借りたいと手代が來て申せば、「節句前の歩を引いて、先づ百兩わたさう。」といへば、「貳百兩お借しなされて下さりませ。」と頼む。「しからば二歩半の利で渡すべし。後程請取の手形したゝめて來られよ。」と手代をかへし、「これは何を駿河町に隙入つてゐるゝぞ。」と、少しは待ちかね欠する時、親父不機嫌にて立ち歸り、「いま／＼しい念佛めが所へ金借りに行てのけて、一代にない宗旨の恥辱を取つた。重ねてかのあいつが所よりは、只くれうと言はうとも、借る事は無用ぢや。あんまり日蓮大菩薩を嫌うぬかした故に腹が立つて、借らずに歸つた。これそなたの手形ぢや。」と指し出せば、太郎助化算し、「今金がすりの最中に渡うと断りいうて、七恩

八思にきて借る金を、借らずに歸つたとは興のさめたる詮索。總じて商人は手廻しひとつにて利を得るものなるに、皆にはめたる八百兩を、役にもたたぬ宗旨詮索で借らずに歸らしやつては、どうも太郎助が身代の尾が見えて、世間の人に内かぶとを見られ、大分身上の障りとなります。人の内證は張物提灯、たゝんだ様につぶれた時にはこなたまでが難儀なや。此の金が参らねば、義定した所へ不埒になつて、明日より商ひがならぬ。われらが参るはやすけれども、兩替に手を見られては借りたい時に猶かさぬ物なり。こなた大儀ながら今一度駿河町へござつて、日蓮をたとひ一れん半といふとも、蟲をしなし斷りいうて借りてござれ。」と頭をかいて申せば、「淨土宗にむかうて手をつかね斷りをいふ事は、首足をもがるゝというてもせぬ。此の金が調はずして身代がつぶれたら、それこそ宗旨ゆゑの滅亡本望の至りなり。不自惜身命とて、法義の爲には身命を惜しまぬが、此方の宗旨の掟なれば、身上つぶしてなりとも、宗門を守り、淨土の兩替から金からぬは、日蓮大菩薩への御奉公ぢや。第一つねから他宗と貸しかりするが聞えぬと思うてゐたに、雨降つて地かたまると、今からあの念佛門の兩替屋と、懇がさけうと思うて、是れ程滿足な事はない。」と、子息はなけ首して案じてゐるに、親父は勇んでひとり悦び、酒のかんさせ手酌にて引き受け吞むを、太郎助見て、「酒をまゐつたら是非兩替屋へござつて下され。御年寄られたれば、宗旨を大事に思召すはことわりながら、こなたをやしなひま

ゐもせぬ、是非に借らうと思はゞ、我を殺して其の上にて借用せい。若い時から命を法華經に奉れ
ばかり、少しも親は厭はねど、筈にはめた金を借らせぬ親父の、ねちれん宗には困り果てける。

三　老を樂しむ果報親父

惡女の娘を年子に産みし、因果の道理ことを聞くに、十月の苦しみも、生るゝ時取上げ婆の骨折
り、餅も鰹も味噌汁も同じ物入なるに、少しの思ひ入りにて、娘の子を悦ぶ程一代の損はなし。我が
子の可愛さまゝに、顏付きのむつかしい聟の機嫌を取り、大分の物を入れ敷金まで付けて、夜のもて
遣ひ者にやりながら、さられぬ樣にとお髭の塵をとり、五節句の祝儀物に氣を張り、臺所賄ひの口
の惡い者に、折々の心付けして、よしなに取りなしをして貰ひ、年中の氣あつかひ、母親の苦勞の
たねとはならぬ。せめて人並に生まれつきて、當世風俗に色作りて、裸なりとも貰ひたいといふ程な
れど仕合なれ。必ず男の子は美しく、娘の子は大かた顏ふくれ鼻ひくく、胴合みじかく、尻ひらたう
よつと出て、耳の小さきもいぞかし。是れ一體たる母の言ひ分。世に男子を重寶して、其の子惡事を
なし、夢にも知らぬ親まで難儀に及ぶ事を思へば、取りかたには惡女の方が増しなるべし。男の子の玉
の輿に乘りて、親一門うかみあがりし事を聞かず。中より下の町人は、器量の善し惡しはかくべつ、
娘の子には世話すくなし。郭巨が金の釜よりは、寶をほり出したる嫁娘の姿形といふ所に、口錢取を

にはゐん〳〵の都からくだりし手かけどもには、御目さへやられず。さしてよい器量ともいはれぬ中椀の又兵衛が娘の野菊に、寵愛の夜から御不便くはへられて、度々御部屋へ御入り有つて、此の上の果報、懷妊して、旦那の滿足かぎり「四十餘に及ぶまで子といふもののなかりしに、出來したり。隨分身を大事に持ちて、安産をいたすべし」と、殿の御扶持人醫者をかけられ、御祈禱の山伏に、子安の祈りを頼せつけられ、月笠なりて玉のやうなる男子を生みければ、一家中の悦び、幸若丸と名を付けられ、御家の跡目とかしづきける。それより野菊は奥樣ひろめ有つて、御前樣とうやまひ、奧方の親御達を、御屋敷へ入れ奉れとて、家來沼田瀨平治旦那の御意を承つて、乘物にて野菊が親を迎へに來り、谷影の賤が家に、半分かぎれたる簾をあげて「中椀の又兵衛樣所はこれにて候か」と尋ぬれば、折節又兵衛中間の日傭取二三人寄りて、互の草臥やすめに、酒五合買ひて、伊勢天目の缺けたるにて呑んで廻し、世にこれより上の樂しみあらじと餘念なき所へ、見なれぬ侍の美々しき體にて尋ね來たれば、又兵衛動轉して庭へ飛び下り「私身において何も咎を仕りたる覺えなし。去年與助殿の大文字屋の帯解にやとはれし時、穴藏をほりしに、赤銅の生の目貫を片し断りなしに拾ひましたより外、人の物は錢壹文もよみまかした事、日本國中の神々を誓文に入れござりませぬ」と、手をすつて申せば、瀨平治をかしく「いや〳〵御氣遣ひなる事ではなし、御自分の御爲にはよい分よい

事なればお悅びなさるべし。御内方樣御堅固でござらば、さぞお嬉しう思召さんに、去々年お果てなされし段、奥樣にもいか程か殘念におぼし召し、委細の樣子は御屋敷にて申し上ぐべし。」とて、つゞれを著たる又兵衛を乘物にうち乘せ、飛ぶが如くに屋敷へ歸り、すぐに奥へ入れ申せば、多くの女中方乘物を手ぐりにして、奥樣の御部屋へかき込み、乘物の戸明くれば、又兵衛人心地はなくして、郎座に氣を取り失ひしを、漸うに呼び生け、氣付などなめさせ、心をとくと靜めさせて、奥樣側へ寄らせらるれば、現在の娘を見違へ、尻しざりして疊へ頭をにじり付け、何をいふも耳へ入らず、「御慈悲に御助けなされて下さりませ。」と、ほろ／＼啼いて申せば、「これ私はこなさんの娘お菊でござる。」と詞をかへして申さるゝに、漸う合點して、「扨もお菊か、生をもかへず其のやうにもなる物か。」と、これより安堵して悅びぬ。「さらば親御樣に御小袖召し替へさせませう。」と、黃無垢の下著に黑羽二重の紋付の著物、「御肌の帶も仕替へられませ。」と、龍門の下帶をあてがへば、おし戴きてかきかへ、始めおはしてゐる虱のわいた木綿のふんどしを袂へ入るゝを、「それはお捨てなされませ。」と、女中がた笑止がれど、「これもたゞでは出來ませぬ。」と、小袖に著替へて俄に身をふるはして苦しがる體、「何となされました。」と野菊氣遣ひして尋ねらるれば、「我等に馳走ならば、此の小袖をぬがして、今までの木綿の袷をきせて給はれ。身中がこそばうてどうも著ては居られぬ。」と、色靑うして苦しがれば、「召し

つけて御肌馴れし御著物なればさも有るべし。」と、下にはその儘木綿の襦袢を著せて置きぬ。扨昔から御酒がお好きとて、高蒔繪の大杯を出せば「これよりは茶碗で。」と望む程に、「いかやうとも御心任せ。」と、其の日は行儀を改めず、段々野菊が作法共をいひ聞かすに、「とかく本の住家へ歸して給はれ、爰にゐて朝々結構なる生食を喰うて、疊の上に荒働きせずにくらしては、中々命が續かぬ。」と、夜も紫の布團の上には寢ず、人寐しづまれば音せぬやうにそつとぬけ出で、庭に荒筵一枚敷きて、裸身付けてこれ極樂と悦びぬ。然れども若殿の祖父樣なれば、家來の人々も此の行舞を笑ふこともならず、とかく御機嫌のよいやうにと、樣々もてなす程苦しがりて「たゞ古巣の埴生へ歸して給はれ、美食を給べて只ゐる故、骨々いたみ迷惑いたす。」と難儀がれば「然らばお慰みに千本築きをさせませう。」と、俄に黑塗に高蒔繪の地築棒こしらへ渡せば、これ〱と悦び、身には小袖を纏ひ、置頭巾にて、「ヤアレ、天滿の、ヒンヨエ。」と、月花にかへて面白がり、一生安樂にくらし、八十八の升掻切つて孫の殿に奉り、百歲まで堅固にて、多くの人に御隱居樣とかしづかれて、大果報の親父、嬶樂目の時にあひて心のまゝの榮華、めでたかりける老の人の前。

浮世親仁形氣五之卷　大尾

# 世間母親容氣

多田南嶺

# 世間母親容氣序

花は芳野、豆腐は二軒茶屋、子は母の心得によりて、善し悪しを別つとなん。父は陽を養ひ、母は陰を育つ。やゝもすれば、姑息の愛に溺れて、人の行末と、水の流れの譬へにひかれ、先祖の業をも失はしむ。甚に江其碩、親仁形氣を著はし、戲言以て頑愚老翁の心を寫せり。未だ母親容氣なき事を如何はせんと、五卷にしるし、我もあまき母に育てられし身の上の憂草、根から誰がしが事と、指して云ふにもあらず。作意に任せたる、十五件の品々、教へとも笑ひ種とも、讀む人の情に、まかせ給へとしかり。

寶曆二壬申初春　　南圭梅嶺翁著

# 世間母親容氣目錄

## 卷之一

茶香の道にさし出の神様は仕損ひの元結

## 卷之二

### 第一　武勇なる母を持ちあぐみたる若者

父親の容氣を請け流しの立花あしらひ

花瓶の水際、流石武士より出過ぎたる母親

三十兩の小判の、切れ繋りし無心のいひ様

### 第二　母親の惡性は慮外成種の兄弟

役者の種を孕み句、不埒なるかなどめ

石橋の牡丹は作り聲の所作事

親類の意見に治まつた跡先

### 第三　嫁が姑に形風流の當言

學者にまで悋氣とは、よめにくき書物の字

一點一畫くへまいとの夫婦が枕言談

割口說の多きお袋の手の中

卷之五

世間母親容氣目錄　終

# 世間母親容氣 巻之一

## 第一　高雄の紅葉より顔の照るお敦女郎

人間萬事塞翁が馬乘羽織、鐺支へず豐かなる都の樂人、辨當に華麗を盡し、人數より酒樽大きに、詩も歌も連俳もなる友どち、五六人さそひ合はせて、道々飲み行く高雄の紅葉、山より早く熟れもの顔照りて、まづ太秦にさしかゝり、ちよのうが戴く桶の底抜け仲間、水も溜らず樽をあけて、十輪寺の嗜み酒を、無心云ひて又詰めさせ、山寺の春にはあらねど、心浮き立ちて日既に未に傾く頃、高雄に登りしに、天地を蜀紅にて織りなし、四面を錦綾にて包むかと訝り、溪に渡せる橋梁、水に映ずる紅波、龍田は遠し、牛瀧は田舍びたり、九重に近きこの眺望、喩へん方なく、皆々水茶屋に腰掛け、發句を案ずれど眺め入りて、韻礎定まりがたし。中にも堀井賞風といへる儒醫、「あまり面白さに猶山深く分け入りて見るべし。各は暫時是に待たせ給へ。」とて、唐詩を口吟み、唐音にて心よく謠ひ登る坂の半ば、嵯峨たる巖に苔ふりて、歸雲谷を堆み、紅葉なほ麓に勝り、是より上は遊人も見えず、人路尋ね難く鳥語やゝ幽なるに、怪しや二十四五と見えし美女、玳瑁の櫛山を射て照り、珊瑚の簪

楓葉に妬まれ、當世風の素縫の小袖、白綾のあはせ物にうち重ね、蟬川草履の三がいのくゝ緒、袖香爐に名香を薰らせ、紫檀のこし硯に、水晶の軸したる卷筆を携へ、短冊を持ち添へながら、徐かに四方の景色を眺め、靜かに步み行く跡より、十六七なる女童の、唐織の袋に敷物や入れけん、片手にいさゝかの酒重を提げ、世づかぬ體にて從ひ行くてい、賞風心もそゞろになり、巫山の神女とは古めかしけれども、仙家の娘にあらずして、いかでかかゝる麗婦あらんや。われ思はずも、張文成が故事をつぐにやと、茫然として醉へるが如く、怪々として夢に似たり。然らでも言はじ已みなんを惜しみ、やゝ袖を控へて「いかなる御方なれば、女儀のこの奧山には樂しみ給ふぞや。」と云ふに言葉はなくて、

とはれては何と答へん紅葉する顏な見知りそ行くへなき身を

短冊に書き付けてさし出す手のいつくしさ、「小町が筆も見も及ばず、小野のお通もなどか是れまでは優しく書きなさん。」と、卽時に七言律の詩を賦して、答へとせられしなれども、文祿二年の事にて、年ふりぬれば傳はり難し。女も筆を取りて其の和韵を作り、人目もあればさらばとて別れぬ。賞風物に犯されたる樣に覺え荒氣遣ひ、「今の間に百年の壽命を經て、家に歸らば腰も三輪組む樣になり、妻子もはや百年忌などといはんや。」と、覺束ながら麓へ出づれば、日いまだ申の半ばにして、連れだち

来りし春原朱英、大中臣李秀などいふ連俳の達人、「是れはく\何とて遲なはりしぞ。」と怪しむに、先づは鰐嘗入れし插箱の棒の朽ちざるに落ちつき、ありし次第を語りぬれば、「それが仙女ならで何が仙女なるべき、共に行かずして殘念。」といふ所へ、彼の女山よりそろ\/と下り來り、賞風を見て莞爾と笑むゆゑ、皆々是れへ招き、酒を振舞へば上戸なり。飯を振舞へばいさゝかも辭せず。夜に入れば男の中に包まれ、都へ歸り堀川邊にて、我が宿はとばかり云ひけちて、あとの言葉定かならず、見失ひぬ。其ののち角山良雅といふ和歌の師のもとにて、此の仔細を話しければ、「それも此の春嵐山の櫻の頃、其の女に逢ひたり。その後よく\/聞けば、中納言朝忠の子孫にして、即ち名もおあさといへり。風雅の女なりとて、數々よみし歌を見せられしに、誰も嵯峨にて出逢ひし、彼も御室の花見に近付になりしと、とりどりの沙汰繁く、一説には親の仇讐を討たんと思へども、腕太刀に頼むべき人なきゆゑ、歌に事よせ男子と交はり、心を試して頼まんため。」と云へば、「いや\/さにはあらず、おひさき小女郎を連れて、山深く夜に入るまでの遊びは、女の武者修行なるべし。それよりは筒物方御用心」などと、異說さま\/なるも道理なるべし。別して賞風との出合ひは詩歌の風雅より、都中に噂れなく、その詩も歌も又謄寫にして、次第にはびこり、洛陽これが爲に紙の直段騰りたる程の義、後には田舎遠國へも傳へ寫して、一寸の事も一丈に云ひなす世の習慣、知らぬ國もなき樣になりたり。

ある時賞風の扉をたゝくものあり、誰なるらんと露路より通せば、「お朝と申す女と、高雄にて詩を詠じ歌を取り交し給ふ、堀井賞風樣は此方でござるか。近頃卒爾ながら、お朝自筆の短冊を御見せ下さるべし。それを證據に致し、ちと御尋ね申し度き事あり。」と云ふを見れば、二十歳許りの屈強の侍なり。南無三寶強請に來たるに紛ひなし、さりながら餘程女よりは年若なれば、假に夫になりてゆすりに來たるなるべしとは思へども、今更隱すべき樣なく、短冊を取り出し見せければ、彼の侍覺えず涙をはら／＼と流し、「その女三十五六にては候はずや。」と、ふところより守袋をいだし、「是れ御覽候へ、此の守の上書と見まがひもなき同筆、私儀十三年以前拔け參りの道にて、人商人に拐され、さま／＼の苦勞致す内、不思議に播州の大莊屋の養子となり、本國石見へ下り父母を尋ねしに、父は傍輩の事につきて浪人いたし、何方へ去りしとも行方知らず。明暮戀しく存じ、神佛へ祈りし處に、都にてお朝といふ女、歌を詠むとの沙汰隱れなし。私が母の名もおあさと申して、和歌を好まれしゆゑ、もしやそれかと尋ね上り、その贈答の主と聞きて、本屋を數多尋ねしかば、貴公の町所まで相知れ、只今母が自筆の短冊を見申して、此の上の悦びなし、何卒御引合はせ下されかし。」と歎くにぞ、賞風も喫驚せし心を收め、さま／＼詮議して引きあはせける、親子の緣ぞ目出たけれ。おあさは賞風に禮を述べ、「夫松原左五右衞門殿は、五年以前に死去なされ、それより手習子を取りて世は

渡れど、伊勢參りより再び歸らぬ其方が懷かしく、其方に別るゝ前より、國元にても歌を好みしとい
ふ事は、兒心に覺えあらんと、花紅葉に事寄せ、世上の交際多かるべき人と見れば、歌を詠みかけ
此の短冊一枚にても、廻り〱て其方の手へ渡る樣にと、昔の卒塔婆流しより思ひつきし、女の智慧
も朝夕願ふ佛神のお蔭にて、其れをしるべに名乘りあふ事、高雄の紅葉嵐山の花よりも、見飽かぬは
我が子なるか。」と、嬉し涙にくれかゝれば、賞風は暇申して歸りぬ。是れも母親の深き惠み、和歌の
神の道しるべなるべし。

### 第二　按摩車廻りいよ〱高利婆

眼のなき人も撿校勾當になれば、官銀の割にて十三人口緩々と暮し、家藏を構へ、貸金の利を樂し
み、其の子は歷々の町人となりて、兩眼は明らかながら、つかひ果して仕まふ類多し。眼のある出家
然も瞳玉を引つくり返して學問しても、誰殿の養子と云はれねば、僧正には任ぜず、僧正に任ぜられ
ば、紫衣は猥りに著られぬ事なるに、後小松院より、僧正といへる盲人に御免ありしより此の方、總
撿校の紫衣に、珍らしからぬ事になりたり。實にも世間は目明千人盲目千人にて、何が産業になるま
じきとは云はれず。應永の頃、大坂砂場といふ處に、かつ〱なる針醫者西口仲才とて、一生供も連
れず、勿論十四經一部貯へぬにも、手先柔軟にて、たゞ婦に子一人、可成がけに世を渡りけるに、無常

の風は醫者の軒を避けても吹かず、仲才一昨年亡りての跡、何とも濟まぬ物といひしが、後家のおやのかひ〴〵しく、七ッになる子を育て、裏貸屋へ引きこみ、按摩を取り覺えて、過ぎにし夫が療治得意を廻り、內證方へも取りいり、捻る片手に似合々々の嫁の口を聞き立て、相應に媒介もしける故、思ひの外緩々とせし身上、その子佐十郎にも襤褸さげさせず、我が身も古奉書を引き張り、流行につけて療治もおぼえ、女中方の撫下には重寶となりけれども、一つの氣の毒は、口喧しく問ひもせぬ鄰の內證話、西町の酒屋の嫁子、里元の筋の惡き物語、あちら町の紙屋は、京の島原口の茶屋の息子おやけなとの噂。只くちなきは、大方斯かる身の上の風習とぞ見えし。或家の親仁殿肩を揉ませながら「總じて按摩といふは、經絡を覺えねばとられぬと申すが、此方も習はれたるか。」と問ひしに「まお其れを知らずして、この業がなりませうか。死なれました仲才殿に習ひ置きたり。その經絡と申すは總名にて、腹の方を洛中と申し、背中の方を洛外といひ、此の洛中洛外には、所々に急所灸跡といふ事あり。小さき子は腹の內にてもがくゆゑ、母の毛の穴動き、毛が內へ入る事あり。誤つて其れを呑む故、その毛終に癇の蟲となる。是れを散らさん爲にすゑる灸を、散毛といへり。又肩がつまれば働かれず、働かれねば親を養ふ依り處なきゆゑ、肩に灸をして、達者になるを孝行といへり。扠腹のまん中を中官といふは、朝鮮人より起りたる事にて、下官は髭澤山なる所をいへども、其れよりは上

の方と申す義、三里にも上三里下三里の二つあり。合はせて六里の灸と申すが、三十六丁一里にいたせば、餘程の道程なれども、上古は六丁一里にて、六々三十六丁、人間三十五六よりは、此の灸を絶すべからずとの事なり。富士をすゑ給うての當分、必ず淺間丸を飲み給ふべからず。富士淺間は敵と敵なり。かやうの禁穴をも知らねば、按摩は取り難し。」と、誰に習ひしや、耳取りて鼻は愚か、蒟蒻を積んで石垣に築く樣な言分、聞く人もをかしなりに、其れが伽となりて、其處へも此處へも呼び迎られ、遂に小家一軒の主となり、一子佐十郎も早十七歳に及べば、京の學問にのぼし、我が勢と人の肩を、揉みに揉んで書物を買はせ、入用をつゞけ、六七年の内に佐十郎天晴の學者となり、富小路邊に、玄關を構へ、大坂の母を迎へ取り、さあ利くといふ段になつては、殺しても、あなたの手にかゝれば怨恨のこらぬ。」と、藥代をさし出し、人の七分も直しかけた跡へかゝつて、あなたに換へたればこそ」と、しつかりと禮を努め、凡て今時の醫者、學問あれば匕が廻らぬといひ、學問無ければ滅多的の當てる樣に噂をする。箱屋の弟子が俄に乘物にのり、飛脚屋の男が、若黨連れて歩く。彼の女按摩の洛中洛外にはあまり負けぬ和郎達、繻子帶子の小袖、長羽織、寸關尺の押し所も知らず、腹の内の事を見て來た樣にいへば、病者に乘せられ、虎豆腐見たやうに切れたる藥を食ひ、大黒屋で木香丸一匁が小を調達へ、二十包にも分けて、熊膽奇妙と書きつけ、家傳大切の丸藥として、これは一熊の胃の苦

味は、又格別と、思ひなしにて、痞へも下り、平胃散の粉藥を、我等先祖唐人より直傳の名方、人參萬金散とて送るに、甘草の甘味を舌に味ひ、人參と心得て、禮銀に氣を張るなど、鰯の頭も信心からなるべし。異國より渡せし諸々の醫書、いづれか唐人直傳ならざるや。愚かなるは人情にて、佐十郎俗醫にして、思ひの外藥禮を取り込み、不圖川東の療治に行き、大長のあきといふ色を見初め、通ふ程に盡す程に、流行醫者にて慥かなる客と見るより、幇間末社の次第に多くなり、取り込むよりはかり出すが多く、藥大盡とて呑込まぬ茶屋無く、お出でを願ふ事、歳德棚を釣りて福の神を俟つが如し。母のおやつ剃髮して、妙寸といひけるが、深く是れを歎き、さま〴〵に意見しても聞き入れず、嫁を呼んであてがへば、夫のさす杯を、戴いて飮んだが不粹とて去りこくり、妾を置いて機嫌にいる樣にと勸むれば、「東の色と違うて、針手が利いて嘘が下拙で、口說を仕掛くれば、誤つて許り居て面白う無い。」とて追ひ出してのけ、「勿論母者人の貢ぎで學問はしたれども、醫者といふもの、我等學問ありとて、此方から勸めに廻らるゝものでなし。畢竟る所は、わが才覺にて、今六枚肩にも乘る身となりたり。恐らく我が金にてわが使ふに、點の打ち人もない筈。母者人も女使うて、樂々としてごされば、此の上かれこれ仰せらるゝは、時を知らぬといふ物。」と、淸盛片氣となつての我が儘。妙寸も力無く、見あはせて居らるゝ折節、丸山にて女郎野郎八九人、幇間五六人仲居茶屋の娘まじくら、

大寄せの戀ゐ、大盡乘物より出で、何か無しに小判一歩をまき散らし、奪ひ取り勝ちにこけるやら、緣から落ちるやら、どつと笑へば、「われ等代々の福醫者ぢや、父親は八枚肩であるかれ、母は千石取の娘、流石その子なればこそ、かかる大氣。」と贅いふ最中に、何時の間にか來られけん、母妙寸與の襖を明け、繼の當りし古小袖、憲房小紋も、七度ばかり目を返したる褪げ樣、手に小さき車を持ち、「如何にも其方の父親仲才殿は、丹波玄醫法橋樣の六尺にて、八枚肩の人數なりしが、針を立て覺えて仲才と改め、食ふや食はずの夫婦、番ひ果てられて後其方を育て兼ね、此の婆が女の身にて、夜々按摩痃癖と呼び歩く時も、さの川萬菊に似たるとて、萬菊婆と呼ばれ、女の手先にては濟き難く、是れ此の樣に木のくる〳〵、廻る車をとゝのへ、肩を撫でし昔語、千石取の娘とは、嬉しけれども、北濱中の島の家々へ雇はれ、餅搗の臼取り、千石の事は扨置き、萬石まで呼ばはりし此の婆、此の擦り車一つを持ちて、佐十郎が學問料をつゞけたれば、家の寶といふは此の車、これ程の大寄せに、家の寶を出さずしては、佐十郎の外聞もいかゞあらん、お住持樣を頼み、最前より忍び待ちたり。さあ〳〵何方もよつて、佐十郎が家の寶を拜まれよ。」と云ふに、皆々興をさまし、誰からともなく逃げて、佐十郎は面目を失ひ、それより川東へ向け入れぬ太鼓と、よるせを頼み、島原へ入り込めば、妙寸又跡より行きて、見たところさうなりこの當座の最中へ、按摩車の因緣を違けば、自然と色所へ行かれぬ樣

になり、去りたる女房を呼び、もと〳〵仲よく契りて、あぶなかりし身上を取り直しけるとなん。清盛に乳母が出でし蛇、佐十郎に母が見する按摩車、卽ち是れ智慧車なるべし。



## 第三　母の口ゆゑ仕替へらるゝ古手女郎

契情の實と、琴箱のそこぬけはなき物といへども、爲になる大盡の心に隨はずして、貧しき男に密夫狂ひする事、浮氣斗りにて、太夫より端女郎に引き下さるゝを、厭はざる理もなし。七ッ八ッの時より苦界十年と定め、十一二より禿に仕立てられ、太夫樣の惡性を見習ひ、幼稚きより魂膽といふ事、手管といふ筋を覺え、十五より新造樣と冊かれ、全盛につれて發明なる樣に見え、尻眼一つが千金の身請の種ともなる事なれども、容色よく手跡すぐれ、何に付けても不足なき押立にて、とんとうれぬ女郎といふは、親方の強意見をも屑とせず、遣手が目を忍び惡戲せぬ女郎にある事にて、兎角女郎は惡戲が因なり。惡戲ならねば面白みも無く、伊達がなければ客の心も移りがたし。色も香も知る人ぞ知る梅の、難波阿波座、鹽屋の女郎小紫といへる太夫は、昔の夕霧吾妻にも勝れ、一たび笑めば、客の掛け座敷を傾け、二たび笑めば本宅をあり切に傾くる、漢の李夫人のむかし、ゆかしく、されば反魂丹賣の娘にて、小野郎に藥荷擔がせ、越中富山と、詐りの數々、口上にいひ述ぶる辻賣も經世にあひ難く、一人の娘を此の里へ賣りけるに、今は鹽屋の端利き太夫となり、二十日も前にいはねば約

やかに彈きながら、太夫そこの紙入に香包があらう、深山木に火加減させて、燻かして下され。赤き小包流しは船おや、などと云はんす時の高上さ、氣の毒は身上がならぬとて、居宅まで家質とやらに入れさんしたとの噂。黑八丈の羽織、相も變らねどいとしらしい殿御と、又しても〳〵聞くまいと思うて居やらうが、此の年まで大勢の女郎を、抱へ來たる我が身なれば、はて氣の毒や其の七二樣こそ眞實のお客なれ。その樣に萬事高等にして、身代を大事になさるゝお身が、せつ〳〵此の里へお通ひといふは、よく〳〵太夫に心がある故なるべし。聽てよき身となられんと、いか程か悅び居るに、當座の浮氣より、若しや七二樣の手前惡くなりてはと思ひ、今日といふ今日心の丈を云ふ事ぞ。其方も兩親あれば、何卒七二樣のお蔭で、親御達の老の入り前のよきやうにして進じや」と、しめ〳〵との言葉身にこたへ、いかさま兩親の爲といふに心づき、頻りに七二大盡の機嫌をとりければ、是れまで無き太夫が誠を見屆けしと、律儀一遍の心より、急に相談にかゝり、千二百兩にて請出し、石町に座敷を設ひ、腰元茶の間仲居端人年業なる手代下男、何から何までうち揃へたる活計なれども、太夫は痞持おや中らぬ樣にと、古米の二度飯、つとめの內勢なく飲みし無理酒の毒を解するまでは、せめて三年は禁酒とて、酒屋を入れず、町風に遷さん爲とて、滅多にめいったる衣裳を著せさせ、一町出るも半白の手代がつきて道寄りさせず。里にばかり住んで、俄に人立ち多き處へ行かば、驚く事もある

べしと、物見遊山堅く禁制、只開奥より臺所口を見せねば、心の詰ることかぎり無きに、「旦那のお出でにて今宵はお慰みの爲、淨瑠璃語を召し連れられし。」との儀、「平假名盛衰記の、千鳥の段か、蘆屋の道滿の、道理ぢやや狐の子ぢややものと、人に譏られ笑はるなといふ段が聞きたい。」と云へば、「義太夫節は當世淨瑠璃、況んや國太夫節は淫聲なれば、兎角京の加太夫節も古風なるを。」と、藤流の道行、出世奴の三段目を、三味線なしに語らせ、禁酒なればとて、薄茶を點てさせ、羊羹は甘過ぎて太夫にいかゞと、外郎餅を以て酒の代りとし、四つが鳴るとて、淨瑠璃語を返すなど、「しよせん是れでは身が詰らぬ。」と、飽かるゝ身持のみなして、氣隨八百憔へらるゝだけは憔へしかども、已む事を得ず、親元へ渡して暇を出しぬ。反魂丹も賣り溜めなき身上、兩親懸け向ひまへ、煙を立て兼ぬる所へ、思ひよらぬ娘が歸り、今一度勤めさせんにも歲は老け過ぎたり、ぼつとしたる風は目に立つ、如何はせんと思ふ所に、世は案じまじきものなれ、長堀に古手大盡といふ客ありて、一旦請出されて、其の客死したるか、暇を出されたるか、年の明きて片付き場のなき女郎なを、尋ねくて妾やらの内儀やらに置きて、少しにても其の親無心がましき事を言ひかゝるを相圖に、何の情も無く暇を遣はし、取り換へ引き替へ、樂しみける方より、小紫が暇取りたると聞きて、僅かの金にて呼び取り、見れば見る程よき女ゆゑ寵愛甚だ深く、家督を一子左太郎に渡し、手代共に後見させ、近所に隱居をかまへ、庭の

清水に末長の契りを結び、築山の岩動かぬ仲のためしをかため、臺所の見まつべ旁とて、小紫が母を呼び迎へしかば、自然とお袋様と扱ひになり、腰元丁稚も此の母親をぞ敬ひける。母親おかんといふは、茶船こしの二八といふ者の娘にて、反魂丹賣の忠七が妻となり、天人の糟漬を飲むと夢見て、旦那此の小紫を孕み、思ひもよらぬ家へ來り、お袋様と冊かれしけれども、上品たる事夢にも知らず、旦那心安き醫者などを招き、濃茶を點て振舞はるに、客が茶椀を少し振廻して飲むをさし覗き、知らぬとありては娘が恥とおもひ、「こまのやうに振廻しが緩うては、茶椀の底に豆が殘る物。」と笑ひ、十炷香あつて、隔筒へ皆々思ひ入れの隔を入るゝを見て、「いまだ場の錢が出ぬさうなこと」と、言はねど苦しからぬ事を知つた顔に嘲るは、輕き者の癖とて是非なし。後は小紫に吹き込み、家ひさしき出入りを停め、我が身寄りのものを多く引き入れしかば、宿持の番頭手代ども相談して、お爲にならぬ段々を諫めしかば、旦那もとより身代に拔目なき生まれ付きゆゑ、來いよと手代どもを呼び寄せ、又此の女郎の古手をも仕替へられたり。

世間母親容氣卷之一　終

# 世間母親容氣　巻之二

## 第一　武勇なる母を持ちあぐみたる若者

具足は練物の爲に拵へたる物と心得、鑓は小見世物の木戸より始まる物と覺え、軍配の金の塵を見ては、金持の所の塵埃拂ひと思ふ世の中、太平の化に誇る四海の民、誰しも欲しがる財寶は、背子を思ふ闇にも提灯いらず、頭は禿げて光り輝く金銀の箔、土藏に積み上げたる都の有徳、是れとても身代を仕上げたる事、内證の手前は數々の樓の小路に、權力屋德左衞門とて、僅かの銀口入よりのきく／＼と大金を出かし、何不足無き暮しなれど、吝き事鏡磨の水銀の如く、交際せざる事、絶法華の他宗と交はらざるが如し。女房呼べば自ら下女も置かねばならず、舅が出來れば、一升伏せの鏡餅も身代柄にて嫌と云はれず、兎角物の入らぬ男世帶と心を堅めけれども、商賣の手廻し廣くなるに隨ひ、人の家に女と俎板は、なければ叶はぬ物にて、互に取り遣りの物入なきを兼ねさせけるに、豐後國なる御大名の家中の娘、主人の御意に付いて都に勤めしが、三十七八になりける故、相應の所へ御片付け下されんと、御出入する呉服屋の主人といふ者に仰せ付けられしを、德左衞門方へ勸めければ、

御主人より下さるゝ百兩の金子に、女一代三人扶持の副ふといふに、寶の上にも寶を重ねたく、彌呼び迎ふるに極めけるに、嫁のみさを町人の妻となる事、不得心なれども、可成かけなる二本插の所へ行きて、著衣を皆無にせんよりは、寐醒の樂しみなるは町人の身の上と、御年寄を以てお姫樣の仰せ辭し難く、吉日良辰を選び、婚禮目出度く整ひ、半年も立たぬにお腹の形の膨れあがり、青梅を好み、十月滯り無く、然も男子出生、徳左衛門が悦び家内のさゞめき、みさをも今は名を換へてお勇といひけるが、一種こそ町人なれ、代々殿の御扶持を蒙り、弓矢取つては先祖より、一度も不覺をとらぬ我が筋目、せめて此の子には強さうな名を號けて下され。」との願ひ。徳左衛門も餘念無き餘りに強藏とつけて、寵愛更に限りなかりき。六ツ七ツになる頃より、外へ出て近所の子供とされ合ひて遊び、草履隱し迎鬼をするにも、父は「必ず他所の子供と喧嘩するな。叩かれて戻つても大事ないぞ、町内の犬を通る衆に嗾し掛くるな、乞食やなども怪我させては、養はれうと強請られては、何程物の入るべきも知れず。少さき時から損のゆく事をせぬが、町人の子の嗜みぞ。」といひ教ふれば、母親氣色を變へ、「扨々理も無き仰せられ樣、其れではあの子が臆病者になつて、成人の後さあといふ時の役に立たず、近所の子供を叩いたとて、高で子供同士と挨拶して濟ますまでの事、道邊に犬を嗾しかけ噛まれたかとて強請り込まば、少々錢金を遣つても、あの子が一分は立つにあらずや。噛まれて錢を

取るは強請者と云ふ物、いかう高高に申さば、妾が出て父に習ひ置きし、竹内流の手際を見すべし。強藏必ず負ふ取るなと言ひ含むるにつき、子心にも氣味よき事に覺え、十一二よりいろはを學びしに、手習屋の師匠殿も鬼若遇ひにして、隨分切諫を加へらるれども、強く言はば硯をも擲げつくべき眼ざし、善い加減に避けて通されける。正月には松囃子とて、師匠の許へ手習の童聚まりけるに、「強藏殿にも御出で下さるべし。」との廻狀、正月小袖に麻上下。「若し鞘走りては誤ちも心元無く小脇差の鐔に、紙捻をかけて、止めなしては。」と云ふを母親、「扨々氣の毒や、子供同士とはいひながら、如何なる退かれぬ事あるまじきものにても無し。其れ戶棚の下の引出に、我が身の守脇差あるべし、歲の首の祝儀に、一昨日ねた刃を合はせ置きたわ、其れを帶させて遣はされよ。」と、莞爾ともせず言はるゝ顏付、入らぬ物といふたらば、また例日の如く、夫ながらも流石は素町人といはれし、腹の立つ始めともならんと思へば、つきて行く丁稚に、「怪我さすな。」と、能く〳〵言ひ含めてやりける。強藏成人するにつけて、自然と父の容氣を受け繼ぎ、物事丁寧に始末心深く、名とは相違して物怖れ強く、弱氣なる事我が影法師にも喫驚する程の臆れ者ゆゑ、人交際も小むつかしく、ちと晴々しき所へも、丸腰にて行きたがれども、母に叱られ町內の床へ髮結ひにゆくにも、其れ又脇差と母の言葉煩けれども、さむかれぬ迷惑、臑入羽織の內へ鎖を仕込み、夜は是れを着し步けとの儀、脇差も二尺一

寸、胴金入れて飛脚造り、是れを帯いて歩く恥かしさ、内より帯いて出ては近所に預け置くもむかしさ、或時表より案内して「是處の御子息強藏殿へお目にかゝりたし。お目にかゝれば、御存じの者」といひ入る故、取次ぎたる者に如何樣なる人ぞと問へば「古編笠に破れたる紙子羽織、藤柄の長き大小を帯し、雲を突く樣なる大男。」と申すにぞ、父聞きて「いや／＼、名も言はず左樣の扮裝、逢うてはむつかしかるべし。倅は留守と詐り、手代共善き程に挨拶をせよ。」と云ふを、母又さし出で、「町人でもある事か。大小を帯して逢ひたきといふに留守を遣ふ事、如何にしても男の立たぬ仕方、強藏出でて逢ふべし、後詰は母ぞ。」と、店の間へ強藏を出し、母は屏立の此方に立て膝して、事と言はゞ飛び出でん體たらく、徳左衛門心ならず、是れも後に控へたり。強藏顫ひ／＼「何方樣にて何の御用。」と問へば、件の侍「お見忘れは御尤も千萬、三年以前三月、大坂の下り船の乗合にて、お近付になりし者なり。其の節も申せし通り、拙者儀は關東浪人、此の度故郷へ罷り歸り、古主へ歸參を願はゞ、家老どもも取持ちて、本知に有り付かんとの書状、此の間到著致したれども、擦り切りの身の上、たちまち先祖の家をも興す時節なるに、何を申しても調達料路金に詰り、無念の臍を嚙むといへども、為方涙に暮れながら、今更切腹しては、彌苗氏の恥辱進退こゝに谷まりたり。唯一度御意得て、御頼み申すとは、よもや御得心も下されまじき儀ながら、武士一人御取立てと思しめし、金十

といふ小判、銀にしては壹貫八百目餘り、片手にては提げられぬ程の儀、其れ程に思はるゝならば、後錢二百文思ひ切つて合力せられよ。」と、聞き入れぬ心を見抜き、「その樣な心を強藏が見習ひては、後後持ち腐りといふ、仇名をつけられん口惜し。我が身も武士の娘、言ひ掛りし事一寸も跡へはよらず、さらばというて今更暇取りて國へ歸りては、お仕付け下されし御主人樣へ立ちがたし。我が身死してもあらば、可愛や強藏父親の賤しき魂性にそまり、金銀に眼くれなん。強藏をも差し殺し、我が身も此の場を去らず自害して、武士の娘の身の成り果ては憐れなりけりと、名を殘すべし。」と疊叩いていふ故、德左衞門も力なく、三十兩といふ小判の、耳朶のよきは無心に來りし浪人にて、百度程禮をいうて歸りぬ。何に付けても此の行き方に、德左衞門疎み果てながら、殺すの死ぬのに困り、ぶらぶらと病ひ出し、一年ばかりの後夢と消えけり。お勇は後家となりて、強藏が後見し、夫死して忌服明けて後、横町の塀の普請させけるにも、強藏一分の城郭なればとて、内に堀を掘らせ、柔術兵法を勸めて稽古させけるより、何時となく連も多くなつて、遊女傾城に身を委ね、思ひのほか強藏大盡と呼ばれ、五年も經たぬに家屋敷は言ふに及ばず、年々の大福帳まで紙屑買に賣り放し、七疊敷の裏住居、母は年の寄るに從ひ、武勇の心は息みけれども、口は耗らずして、「賴朝の伏木隱れを思へば、汝が今日の艱難は事にもあらず。伏見街道へ駕籠を舁きに出るとも、息杖に槍を仕込むべし。」と、一二

枚殘りし齒を食ひ縛りていはるゝ所へ、進物夥しく、乘物引馬堂々と入り來るは、三十兩合力に

遇ひし侍、「御蔭にて本知千石に歸參、偏に御志ゆゑ。」と、金三百兩に樣々の卷物卷樽二主君へ心

底を申し聞かせたれば、町人ながら頼もしき者とて、五十人扶持下され、呉服所に申し付けらるゝ「

との、家老中の墨附を渡しぬ。如何したがよからうやら、末の見えぬが世間々々。

## 第一　母親の惡性ゆゑ外戚種の兄弟

芳野の山を雪かと見れば、雪ではなうて、花の吹雪でやあ是の後家御は、散りかゝる花の顏、香

ひ滿つる掛香、當世小袖はきかけは、黒繻子にてかくし、紅絹に二つ紋、過ぎ行きし亭主は、[illegible]屋[illegible]右

衛門ときこえしは、五條通りに並び無き大福長者、野郎すきにて芝居への[illegible]、祇園先斗町を案内と

心得、名ある太夫子も折々我が内へ招き、内儀も自ら心安く、茶屋か[illegible]しに、惜し

や四十そこらにての病死、内儀當分の悲しみ、尼ともならんの心を[illegible]、親類手代ですゝめに止め、

髪とを切つても名は元の儘のお律なれども、寺參りに暇無く、つまぐる數珠の珠の[illegible]兄弟と

て、十一歳になるを育てて、紅白粉をもつけられねど、生まれ付いたる美顏、近所の若い衆に[illegible]打て

ごするも罪障なるべし。總じて若後家の美しきと、風吹きの桃櫻は、落ち[illegible]にて[illegible]に、

夫に別れし一二年は、心も殊勝に、色話聞くとも、耳の穢るゝ樣に思ふものなれども、[illegible]のは日

日に疎く、獨り寢の寂しさより、色香はのけて置いて、六十許りなる疎瘂痕の手代、さては心安く入り込む醫者の、坊主頭も可愛うなること、世になき例にもあらず。今日は夫の命日とて、墓參りの歸るさ、腰元のりんが、二の替りの看板なりともと云ふを取り付け所にして、「新太郎內へ歸つて、手代共に言やんなや。」と口止めをして、夫存生の時よりお目懸けられし、芝居茶屋へ立ち寄り給へば、珍らしき御出でを悅び、貸り切つてある棧敷を差替へて貰ひ、西の七間目とはきつい働き樣、中の色事最中、二年振にての見物心も沍え返り、盃取り上げらるゝを舞臺より見つけて、新右衛門に心安かりし、若村松江といふ立物の女形、樂屋へ入ると、舞臺の儘の衣裳にて、棧敷へ來り、「新右衛門樣の、いかいお世話になりし私なれば、眞におまへ樣を見ましては、なつかしうて淚が溢れまする。」と、しめ／＼といふ言葉が戀の種となり、獻いつ酬されつおさへました。「兎角新右衛門殿もこなさんの事は、格別に大切がられましたれば、我が身とてもいかう身にこたへていとしうござんす。」といふ內、早役前と棧敷を退き、向う棧敷の下より、傾城の道中、後家御は餘念なく見恍れ、「役者の育て樣程美しきものはなし、新太郎も何とぞ野郎育ちに仕たき。」とは、千貫目確實なる身代に入らぬ物好き此の上無し。賀茂川へ釣を垂るゝ、戀の取持ちは、よほど氣の長い者のすることなれども、石を嚙み割り、火を握る觀世物さへあれば、何がなるまいとも言はれず。何ほど氣強なる女にても、媒人の辯

否仕入れの魂膽にて、やるにやられぬといふ事なし。誰か棧橋しけん忍び／＼の出會に、お律後家は松江が種を懐妊し、如何せんとの思ひ草も、根が家の娘なれば、怪我させては如何と、伯母御意見片手に「腹形見苦しくもなりたらば、隱居へ呼び取り、世上へは病氣と披露し、安産さすべし」との可愛さの慈悲も、仇がましき世の取沙汰、後家は兎角役者育ちを羨み、新太郎に紫帽子を著せ、おしろいさせて若手代どもに衣裳をかけさせ、明けしも暮れしも芝居事しての傳のご世樣、是れ母親の身持なるべきや。つひに安産しても、町内の手前いかゞと、大坂の知己へ遣はし、いよ／＼松江とは深なりける。新太郎は年の經くに從ひ、狂言の替り目を缺かさず、身晴れ人に勝れしゆゑ、女の囁く事草に風を加ふるといふべきか。女郎を請出す事五六人、そこにも座敷、こゝにも妾宅、母親のお蔭にて、手習はせず、謡は習はず、茶の湯は知らず、算盤は手に觸れたる事なし。何故煙とはなし給ふ、恨めしやと歌ふより外藝なければ、町内の婚禮振舞に行きては、皆々若き衆立ち出で、峯の雲と扇取つて立ち上るもあり、小鼓打つて賞めらるゝもあるに、皆々「新太郎殿にも何ぞ」と所望せられ、座頭に三味線を頼み、扇取つたりといふまゝに、「投物好きの役者には」と、身振り物眞似素人の拍子にて全盛し、「加賀に菊傘よい／＼よい子の花傘」つりとは氣の毒な顏付して、上座を占められし年寄、「お草臥にもあるべし、おやすみあれかし、最早見えました／＼」と、相撲を分くる樣な挨拶、まだ

此の上に市川流の荒事を、御覽に入れたし。」といふを、皿鉢の用心もいかゞと、町中がよつて止め、「それは貴樣の御内儀樣呼ばしやつた時、拜見いたしませう、何分今夜は是れ限り。」といふに、「いやいや御辭儀なされずと御覽くだされよ。荒事がいやならば、はねに石橋をお目に懸けませう。」と、勝手へはひられれば、最早夜食が出るといふには構はず、何ぞ頭に揩ぐ物をと取りに人を走らせば、母親も心嬉しげに、これを大事と取つて置きし、髢三つ四つ一しよに括り合はせ、壬生で買つて來たる鬼の面を添へて、取りに來りし町の用人にわたして、「何とこれの新太郎は、大時藝者であらうがの。」と、自慢たら〳〵いうて歸せば、戻るや否や面と髢を押取り揩ぎ、「獅子唐天の舞樂を謠うてたもれ。」と、座頭に彈きかけさせ、鬼の髮洗ふ樣なる所作事をいたう、後の吸物までに杯事も畢りて、「さらば御暇〳〵。」というて、町衆殘らず立たるゝ時、獅子の座にこそ直りけれとはたゞ仕舞ひ、跡に獨り殘れど、夜食にも外れ、すう〳〵というて腹を抱へ、手持無沙汰に内へ戻り、茶漬を六杯喰ひつけては止められぬ物にて、母親も然江にしこり、暫しも忘れず、親子共にやけとなり、人の嘲りも構はぬ樣子、一家親類見かね聞きかね、寄り集まつて後家御を呼びに遣はし、新太郎の次第を語り、「これ身持にては、三輪屋の相續に心元なし、はや〳〵勘當の思案極めらるべし。」と、後家御にも耳擦りの口上、皆々口を揃へて申さるれば、後家御も初めて心付き、我が身も何とやら氣味惡くなり、「成程成

程御尤もに信じまする、早く鯨の新太郎に篤と申し聞かさんと、其れよりして我が身持を改め、松江が出あひもふつ／＼と止めにして、新太郎も外へとては一寸出さず、騒ぎ事もやめさせて、身持大事と心をそへ、家内質素に暮しければ、次第に繁昌しけるとなん。悪に強ければ善にも強しとは、これ等の後家御をやいふならんか。

## 第三　嫁が姑と形風流の當言

姑御の嫁を譏ると、紺屋の日を延ばす事は、古よりの定まり事となり。我若かりしとき、世上の古風にして、江戸鹿子の昔模様、一尺八寸の振袖に、紫裏を随分の風流と极し心を、今時三尺にちかき大振袖、錦繡の裏縫ひの流行世界、持つて生れし嫁の取り形に非難をいひ、わが生み落せし子息の事を、同行衆に遇うては、「第一倅のたはけが鼻毛延ばす故」と、血を血で洗ふ陰言。それはお腹の立つが御尤もと、寺谷中の百萬遍も、半分は嫁を悪くいうての念佛、佛も氣の毒に思ひ給ふべし。都ぞ春の錦の小路、高倉邊に伊勢屋總兵衛といふは、山城谷々の莊屋宿にして、代々家富み、客の思ひ付き他に異にして、利徳に賢く、假令兄弟同然の人に物を買ひ遣いでやるにも、一割か貪ねば置かぬ程の町人氣質なるが、八幡より女房を迎へ、夫婦心を合はせて、渡世に油斷無ければ、老母妙仙兎角嫁のおゆかを憎み、「あの嫁に神が寄うては、總て總兵衛も追ひ倒さるべし」と、客來の思ふ前

まれるに、暇さへあれば火燵に差し向ひての小咄、見て居られぬ」との言葉に、嫁も氣の毒の山々、心を盡して大切に仕ふる程、客追從らしいと顏で切めて見せらるゝ悲しさ。夏痩と答へて忍ぶ涙かなと、嫁といふ題にて西村宗因の一句も思ひ出でられき。昔は客遇ひと姑御への氣兼に痩勞れ、闇室に入つては身の幸さへ夫に任ては、兎角差抱してたもれ」と、心を慰む種數々重なり、十二歳を頭として、今年生まれまで七人の子寶、「嫁御の餘り可愛がつてたもる故、總兵衞の顏には癇が立つ」たこの當言、總兵衞もきつてあつかひ、心の惑ひを開かん爲、學問に志し、近邊に星野清助殿とて、名高き學者あるに入門し、左傳を解し、漢書を議論し、得意の莊屋方へ、これまで遊びし京草履を贈めにして、書翰紙に歳旦の詩を書き、朱唐紙のかけ紙をして、晋上　春詩と表書して持ち廻りければ、在々の莊屋百姓、直に神棚へ納め、燈明とぼしける心、何と心得たるや知らまほし。女房おゐが是れまで悋氣せず、假にもはしたなき言葉をいはざりしに、俄に悋氣強くなり、「何處ぞに學者の娘がな圍うて置き、假名文では目に立つ故、わしらが讀めぬ文の取り遣りの稽古かな」と、文をつくり詩を作る事をいきどほり、平常見ゆる客衆にても、逗留の内に遊び處へ行かるゝにつけて、「御亭主はいさこされ」と、誘ふ人を睨みつけ、兎につけ角につけ、夫婦爭ひやむ事なく、毎日の言ひ分に、内はさわだち、さしもの嫁憎みの姑も、此の挨拶に侘ゐはて、嫁の悪いふ所へのかず、子息が迷惑がるを氣の毒に思

溜内に投込み置き、あてさする敷布は小女郎に任せ、船こそ片手に縫うたる物ゆゑ、うらおもては来内へ引撮り、裾ふきに出入り小島茂く、亭主が他所へ著て行きては、裏もお内儀は手つゝと詐るも構はず、勝れてよく縫ふ手を夫婦にわなませ、針取つた事三年もなしと、萬事投げやりに暮すゆゑ、去りて退けたと思へども、七人の子のことを思ひ機嫌取つてこの朝々に、總兵衛も精根盡きはて、お袋もげつとしてされけるが、何時となく日頃の嫁誹り心とんとやみて、何卒嫁女の心の直る様にと、神佛への願立て、別して過ぎゆかれし總兵衛父の、釋の彦仙大信士の位牌に向ひ「是れと申すも、あまり嫁を悪く思ひし罰いたるべし。向後わが娘と思ひ、大切にいたすべし、何とぞ悋氣嫉妬心のやむ様に守らせ給へ。」と、涙を流して口説かれければ、子息の總兵衛女房のおゆか背後に立聞きして、「勿體なや惡れ有りことゝて總兵衛申しけるには、「あまり女房どもを御いぢりなさるゝ故、夫婦申し合はせ、わざと是れまでゆしたらば、皆おまへのお心を若けた爲の狂言なり。さやうに思召し下さるゝ上は、何が扨いよ／＼和熟して、目出たく暮すべし」と悦ぶに、母妙仙背を張りて「大方其の手であらうと思うて、其方達が聞く程に今の通りの懺悔、あの女に母親を見かへて、ようも／＼一杯やらうとしたなあ。」是れからは昔し上掛倍、嫁女に此の怨みを朝から晩まで言はねばならず。」と、花車形にして極上々の姑ゑ心、初めの間は口でばかりいぢめられしが、是れより後は腹の立つたび毎に、指へなりと

も雁ハなりとも、背なつゝこそ悲つしき。

世間母親容気巻之二　終

# 世間母親容氣 卷之三

## 第一 繼母の慈悲に物を反す不孝

忠臣二君に仕へず、貞女兩夫に見えず、石臼箸にも刺されねば、豆腐藁にて繼ぎ難し。日月は天に位し、草木は地に生じて、昔も今も變つた事はなき筈なれども、少し許り模樣を付けて出せば、見世物芝居に錢の山をなし、兩國橋にての女相撲も、相變らぬ孔雀ほどにはなし、世界の繁昌江戸に勝る地なく、人の立身も此の地にとゞまり、人氣頼もしく、何をしても渡世のならぬといふ事なきに、淺草にて燒餅をして、夫婦つがひ終に千住鮒を喰うた事無ければ、下直なる最中にも、深川牡蠣の味知らず、程近き芳原の入口は、東向やら西向やら見た事もなく、こゝを大事と渡世しける、大の字屋の作右衛門といふは、一子作太郎三十年以前、大船町の問屋衆に傭はれ、上方へ上す大廻しの船宰領に行きしが、その舟遠江灘にて難風に遭ひ、船人をはじめ十八人行方知れず、伊豆浦に知己ありて、大坂までの濱々を詮議してもらひしかども、船糟も揚らねば、生死共に知れず、船に乘りし日を命日と定め、父作右衛門今年六十八にて、子の三十年忌を弔ひしも、いたつて貧しければ、法事とても心に

任せぬ故、燒餅一ッづゝ非人二十人許りに施し、三十年の昔の悲しさを、又繰り返す涙の上といふ女房は、後連にて十五年以前に、此の家に來り、四十ばかりにして小間目もよく、手拭頭に戴き、競賣の利錢に僅かなる臺所を賄ひぬ。一子作太郎は、遠江灘より晝夜小止み無き風に、覆るべき船を、船人巧者にして、辛き命は助かりしかども、東南へ吹き付けらるゝ事凡そ百日ばかりにして、一つの島に吹き寄せたり。山のかゝり巖の佇ゐ、草木皆日本にては目馴れぬ有樣、皆々怖ろしながら此處に上れば、色々の怪しき大鳥飛び通ひ、人を見て笑ふ有樣、何とやらん氣味惡く覺え、それ〳〵元の船に乘らんとするを、「待て〳〵」と言葉を掛け、飛び來る大鳥、羽は鶴に似て足にしたゝかなる[illegible]足、顏は猿の如く、羽を伸ばしたる大きさ、半町ばかりもあるか、日本の言葉を使ひ、「汝等は日本人と見たり、此所は禽王國といふて、異鳥集まりて國を治む。わが大王を鳥冠尊と申し、御寵愛の后をさゝんか皇后といへり。左右に大臣ありて、鳥々化の間、萬鳥化の間といへり。かくいふ愚鳥事は、如何なる國の船や寄り來らんと、大王の仰せにより、三千世界を飛び廻り、國々の言葉を聞き覺え、即ち此の國の通詞鳥なり。汝等を日本人と見たるゆゑに、日本言葉をもつて申し聞かすよ。わが大王[illegible]第一にましませば、汝等が吹き流されて此の國へ來る事を申し上げ、再び日本へ歸すべし。是れより日本は西北に當りて、逆浪強く、海上凡そ日本迄に積りて五千七百里、中々船にては通ふ事能はじ。大鳥

の羽を手速かなるを運び、一人づゝ引つつかんで、本國へ渡さるゝやうに申し上げん間、此方へ來れや〳〵〳〵。」といふに、皆々船にては還られぬと云ふに困り、是非なく誘はれ行きけるに、金門王樓華麗にして、大王目見えをうけ、「摑まれて安穩に還るべし。」とあれども、皆々鳥に摑まれて六千里に近き道を、ゆかん事あぶなし。「とても死ぬる道ならば、定業のありたけ、此の國にて相果て申したき」との願ひ。「其れもさる事なり。」と、住居を許されしに、作太郎一人は兎角故郷忘じ難し。「中途にて落ちば、其れまでの運命、然らば御世話ながら、摑み給ふ業を御添へ下さるべし。」といへば、海飛鳥守は僞盤鶴といふを召し出されしに、この者大鳥にもあらず、咽喉の下に大きなる袋あり、大王、三年丸といふ藥を、此の鳥に三十粒飲ませ、「是れを咽喉に貯へ、羽を休むる時一粒宛吐き出して、其の人に飲ますべし、大概三年の壽命は、此の藥にて餓ゑず。」との仰せに任せ、其の座より作太郎を引き摑み虛空へ揚るに、島に殘る者共、名殘を惜しめども言ひ甲斐なし。翼に雲霧を拂ひ、三十餘日にして、伊豆の大島へつき、山陰に下りて作太郎に暇乞の體。作太郎熟〻思ふに、是れまで送りし恩は謝しつくされざる事なれども、故郷へ歸りても、何をあてどに渡世すべきや、此の鳥を捕へ見世物にしたらば、天晴の儲けあるべしと、一禮する體にて近寄り、やがて羽翼をしめあげ、襷掛にして引きかたげ、三島の宿へ出て、辻駕籠に入れ水を當へ魚を食はせ、淺草指して立ち歸るに、鳥は恨めし氣に淚を流せ

へも持たせて上りしが、大慾の賭事に敗けて、此の鳥は人の物となり、その身の鳥の飛ぶ眞似をして狂ひ、大熱出て水を吞む事一度に二三十ぱい、容を損んで空しくなりけるを、母はみな聞き及び、一夫の種なれば、わが腹はかさねども、などか弔はざらんやと、三年が間寢食をわすれ、作太郎が畜生道をまぬかれて、成佛するやうにとの念佛おこたらず。おのづから人々是れを信じて、廢寺を建てわたし、佛閣莊嚴にて積み上げ、弟子尼も數多したがひ、豐かに後の世を念ぜし事、後の母たる人の鑑なるべし。うつ蟬のまへ、子、河内守が戀せしを、うるさく思ひて尼となりし、昔を今におもひ出せり。

## 第二　得生極樂之居の中川

歸命無量の世の中に、易往而無人、往き易くして然も人無し。然るに斯くの如く愚癡無智のおのおの、我等を救ひ取らずんば、われ正覺を取らじと、第十七十八の御願疑ひ無く、息引取るや否や、あの光明の内へ攝取せらるゝと說きかくれば、南無阿彌陀といふ聲さへ出です。うろ／＼泣き出す聽衆も、手つぎの寺の本堂普請の奉加帳には尻込みする事、一向一念更に疑ひなし。世帶佛法腹念佛、我が家の事をさし置き後生の事に大金を出すは、死しての榮華を好む大慾、その慾を持ち越して、極樂往生するも、合點のゆかぬ事と脇ひら見す、此の世の身上を稼ぎ出し、たしか三萬兩と見立てられし

八町堀の伊丹問屋攝津國屋善五郎といふは、親より讓り受けし金子を三層倍に仕溜め、澤村が京から歸つたやら、中村きよ三が下つたやら、堺町葺屋町を通つても、看板さへ見ず、五尺手拭の歌を聞いては、あれは近頃の流行歌かと尋ね、池田伊丹鴻池大鹿より積み出す酒樽を大切に取り廻し、荷主に損の掛らぬ工夫を第一として、極まりの口錢より外は、少しも目をかけず。「われ三萬兩と呼ばるゝ身代なれども、道理なき金に眼をかくれば、天道の冥加に盡きて、樽より我が身の菰をかぶらん事、まのあたりなるべし。」と、正直の聞え隱れなく浪路を押し放して、任せ置くに、氣遣ひ無き問屋なればとて、次第に荷滿まさり、家内にぎ／＼しかりければ、前なる川を船にて賣つて廻る貝の柱さへ、朔日十五日の外は濫りに買はず、商賣を樂しむ事、色男の契情を愛するより強し。母妙順は唯一向一念に他力本願を頼み、朝路參り怠らず、二十五日講二十八日講にも人に勝れて世話をやき、萬事を若き嫁に任せらるゝを、さしも始末なる善五郎も、一お年寄られては尊きお樂しみにて、孝行の心より佛壇に夥しく金を入れ、莊嚴美しく、偏に母の心を養ふまでの仕業、妙順はいよ／＼有り難く思ひ入れて、聽聞も惡念無かりけるが、或時極重惡人無他方便唯稱彌陀得生極樂といふ經文は、極々の重惡人とても、外の方便はなし。唯一向に彌陀如來の名號を唱ふれば、疑ひもなく極樂に生るゝ事を得る、況んや善根の人に於てをやと、申す事と聞き入れ、宿へ歸り熟思ひめぐらし見るに、假令

極重惡の人にても、阿彌陀如來をだに唱ふれば、極樂へ生まるゝとある上は、如何なる者にても救ひ取らずんば、われ正覺をとるまじきと、阿彌陀如來確然としたる御誓言を立て置かせ給へば、世間を憚り善人と言はれんとて、嗜みは氣骨を折るゝが損といふもの、われ若き時より、殊のほか芝居が好きでありし故、旦那殿息才でござる内は、せつ／＼見物に行きしが、後家となりては世間を憚り、芝居側へも通はぬやうに嗜み、一つには子息善五郎偏屈にて、物見遊山嫌ひなれば、ふつ／＼芝居行きも止めにして居たりしが、さらば是れから此の世の樂しみ、行きたい所へ行き、仕たい事をして往生し、息引きとるや否や、極樂へ阿彌陀樣待ち受け給ふべしと、それより連れて歩く下女に呑みこませ、佛參りをかこつけ内を出ては、芝居へ行き野郎交際を樂しみ、一向一心に遊び暮さるゝこそうたてけれ。

或時善五郎伊丹問屋の客衆、此の地へ下り逗留の内、芝居へ誘引れいたとも言はれず、同道して行きけるに、向う側の棧敷を見れば二間續きにて、母の妙順野郎立役者を呼び、其の外幇間末社打交り、酒盛して見物近邊へ目に立つ風情、善五郎大きに肝を潰し、日頃後生第一に、寺參りのみにうちかゝり居らるゝとおもひしが、あの體たらく、扨々不埒なる身持ぞと心に思ひ、見るに忍びず、客衆へ斷りをいひ、「私は殊の外頭痛いたし不快なれば、自由ながら先へお暇」と、棧敷を立ち内へ戻りて、すまぬ體にて居らるゝこそ尤もなれ。其れとは知らず何心なく妙順は内へ戻り、今日の御法談は殊更有

り難き事、兎角に善五郎も阿彌陀樣の御恩を疎かに思やんな。」と、そらさぬ顏にてお念佛。善五郎心をかしく思へども、まづ一通りの挨拶。其の後もお袋は、兎角芝居の替り目を缺かさず「今日は尼講の寄合ひ、ちと相談もあれば、早う來るやうにとの講頭よりの賴み、もどりも暮になるべし。」と云ひ捨てて出て行かるゝを、見え隱れに人を付け、「芝居へはひられた。」と篤と見とゞけてかへるとは夢にも知らず、何ごゝろなく見物して居らるゝところへ、棧敷の戸を明け來るは日頃堅節といはるゝ、六十三になる作左衞門といふ手代、袴羽織を著し、「是れは〳〵妙順さま、今日はよき御慰み、御精に盡きませぬか、旦那よりお見舞の御使にまゐりました。」と、提重に銘酒菓子をとゝのへ、口上を述ぶれば、妙順も何といひ出でん言葉なく、「ようこそ見えた」とばかりにて、うじ〳〵して赤面「私も久しぶり、見物いたし歸りませう。」と、割膝して居るにこそ、今日は野郎一人呼ぶこともならず、損々究屈なこと、はてるを待ち兼ね退屈して、妙順は作左衞門連れ宿に歸れば、善五郎機嫌よく、「是れは母人、早お歸りなされましたか。御精は盡きませなんだか、若し御用もあらんやと、作左衞門を遣はしました。兎角御出でのたび每には、作左衞門をあげませう、左樣ばかりにては氣づかはしく存じまする。」と、痛み入つたる息子の挨拶。其れよりしてどう拔けて出ても、あとより堅節の離れぬに困り、何時の程より芝居もとんと面白からぬ樣になり、もとの一向一念に戻られける。親の心に障らぬ意見

の仕樣、お袋も流石に恥ぢたる心ありて、それより信心怠らず、朝夕お眞向樣に、顔見せの御禮申して暮されけるとなん。

## 第三　舞子の老いたるは運を開くさし扇

蚊帳は縁に、湯具は紅絹、鐵砲あれば据風呂もあり、男あれば山姥も子を生む。坂田公時が熊を採ぢ据ゑたとて、仲居に足の指引かせて、太夫の膝を枕にしたる、樂しみには如くべからず。女郎に賣るゝ無念なり、嫁入させうにも調度なり難く、幼稚きより舞を習はせ、お歴々を目當に、雲をあての小娘、尾羽打ち枯らしたる浪人か、藥屋と仲違ひしたる醫者か、御燈の油微なる社人か、名題は手代へ讓りし呉服所のはてか、月に金壹兩の内外とれるかしやで暮す商賣なしの、次第衰へに衰へて、娘を此の道に入らせたるもあり。女房から肥り過ぎて、痘痕が引きはつて、髪目出たからず、研げども白まぬ娘ゆゑ、遊女には取り手なく、お妾奉公には抱へ給ふまじと、元より賤しき者の娘を、夫婦は食ふや食はずに、舞三味線にて世に出し、末をたのむ仕立もあり。都はなんとなく女の生まれ付き美麗しく、横平たき女も田舎の柳腰よりは窈窕に、鰐足も鄙の美人達より歩行振よし。樵木町高臺寺前安井前などにて、師匠々々の會を催し、田舎より抱へに上らるゝ、武士方、幾度か目見えをするに、お袋が著換の包を持ち乳母の樣に付いて、麁相無き樣に心を配り、歳月經つ内に、勝手つまらず、少し

しの衣裳に疵が付いてはと、口惜しながら月蔵ひといふ者に出し、兎角有り付きの無きまゝ、是非も涙ながら、遊女になるも例多し。それと引きかへ、たつた一度の目見えにて事濟み、捨金給金過分に下され、都にてはかい垂目なりとて嫌ひしも、芙蓉の雨氣顔ともてなされ、釣眼にて狐の樣なと誹りしは、屹として武家に相應の顔と遇せられ、無許りかは御子を生みて、京の親もお國へ召され、昔の息杖を刀にさし替へ、若殿外戚なればと、家老衆までに心を置かれ、駕籠舁のはてとて知行二百八十石下され、又は其の儘京に住みながら御扶持下されて、俄に乘物駕籠釣らせ、丸頭巾に鐘木杖つき、覗き機關を止めたる身なれば、さらば閉帳と目を瞑ぐまで安樂に暮すもありぬ。其の上親の手に居たりし時は、さあ目見えといふ日になりて、お袋は質屋へ走られ、爺は貸物屋へ紺繻子の帯を借りに行き、相手によつて新しき駕籠に乘せてやらねばならず、緋繻子の駕籠布團も、一日六匁五分とは、さりとは高值なる心柄なればこそ、きもいり／＼より五人七人づゝ引いて行けば、何方か極まるべきや計り難し。三度も四度も行かねば見直しも濟まぬ故、相談の出來ぬ時は、此の入用皆損となれども、誰を怨むべき樣もなし。衣裳も五六番、總鹿子著たるは先づは見あたらず、緋綸子千草の細染、藍天鵞絨に縫入れ、丁子茶薄香、紫は江戸の名物、麴町のさし掛りに、盃の紋左衛門といふ儒者ありし。芳原には鬢を入れず、八官町にては頭巾を被らず、視聽言動の四つを謹み、初めは深川に居た

れども、近所に石屋ありて、石槌を以て石を割る音を聞き、「我如き堅き身持も、割るれば割るべし、是れ我が住む處にあらず。」と、柳橋へ宿をかへしに、猪牙船のぐれつくを見て、「不義にして富み、且貴きは浮べる雲の如し。今の人間の相場ありきなひ、皆ちよき船の危きに似たり。」と、今此の麹町にて三錢の事にも巾着の底を叩き、食を絶つ事三日と、ひだるい腹を抱へての減らず口、あいて居る所へ近所より勧めて、「さる御屋敷方よりのお世話にて、四十二年にならせらるゝ女中、金三十両つけておかたづけさんとのお頼み、何と悦び給ふお心はなしや。」といふに、軻左衛門も金に望みは無けれども、云うた許り心の内はいかゞ知らず、早速相談なりて呼び迎へしに、容色は男勝りにして、昔の土佐繪にしては淀人相なれども、下膨らなる顔付、額は數少なけれども、二十七八にて顔中を引張り、向う歯反つて猿眼、義理にしては倫無く、禿げたる鬢を眞菰にて黒め、寶盛にしては錦の夜具なし。手を書く事能書とも言はるべく、手本を書かせて見れば、思ひもよらぬぐるくしたる事、朝顔の蔓の如く、都長谷川流の引抜き、琴は三曲の上大和舞の八曲までを覺え、もとより其の親、都にて鉢を仕込み、奉公に出したるゆゑ、昔々此所に、まなごの莊司といふ者ありと、扇取つては日高川をも渡り、野濡をも巻き兼ねまじき器量、此の女房人りてより、手習子琴の弟子、夥しく繁昌し、一子を誕生し、父の業を継がせんと、孟の軻七と名づけ、讀書に油斷させず。然るに此の母法華信仰淺からず、

一、歌ふも鳥へも納まれる、御代の民こそ豐かなれ。

世間母親容氣卷之三　終

る事、大方此處にての出會ひ、西陣花菱の辻子の織殿唐草屋萬右衛門娘、洛中にも雙ぶ容色無く、歳は十七歳にて、父萬右衛門勝手宜しく、十三荷では大抵善き拵へ、方々より申し來りぬれども、壻の歳が老け過ぎたの宗旨が違うたのと、兎角暇取りて相談なり兼ねしに、五條融殿町に名高き酒屋、松尾屋松右衛門子息藤吉明けて二十八歳、美男にして香合に巧者で、楊弓にては龍車といふ名高く、琴を好み尺八を吹き、遊藝優しき上に身持氣遣ひ無き由、言ひ觸ぶる媒人の言葉、萬右衛門合點せず。「一生を見る事が上手で、算盤が達者で、遊藝は嫌ひとあらば、相談もして見るべきに、五條邊は兎も角も、西陣にては流行らぬ事許り、甚い世話でこそござれ。」と遇はねば、女房おさよ差出で、「可愛想にたつた一人娘、男が善うて身體が善いとあれば、相談なされかし。」と勸められ、段々聞き合はせて見るに、四條おたび町にも出店ありて、如何にも確實なる家との事、手が入り足が入つて相談極り、松槻二軒殿の諸藝を嗜まるゝとの事なれば、交際も嘸かし。總鹿子疋田も、今一つ拵へて遣りたし、幸ひ室町から變改せられた、あまる龍を金絲にて織り入れし大藏絨をとら、急に織り上げさせ、袷にして緋縮緬の裏を付けませう。」といへば、萬右衛門顏ふくらし、「ひつたの鹿子下地のが、銀六貫百目あまり、其れに又一つとは奢りの至り。あの金天鵞絨は著尺で八百目に受取りし織物、室町より變改ありても何れの大店へ遣つても。直賣になる物、下地の拵へのまゝより外は無用。」といへども、夫に隱し

てさまぐ\の物入れ、世間の母の心皆斯くの如し。さあ今日は結納と騷めき、上下いためつけし手代が、目錄を携へ、對臺に並べしを見れば、干鯣鹽鯛雜喉に、九升の卷樽二つ、其の外に卷物は取置き帶地さへ無く、「目出たく御納め下さるべし」との口上。取次の者ども、是れは餘の些少なる仕かたと思ひながら、運び入れて見せければ、母親氣色を變へ、「是れには輕蔑りがましき賴みの致し方、輕うしても銀二十枚に織物五卷、第一五升樽とは近所への外聞も氣の毒、突き戻してしまひ、何卒娘を遣らぬ樣にして下されい」といへば、萬右衞門顏に皺寄せ、「西陣と違ひ左樣の酒屋とあれば、交際も伊達にあるべきと思ひしに、質素なる賴みの入れ樣、末永く出あはるゝ聟と見えたり。道理好きと聞いて氣の毒に思ひしに、存じの外善き緣を組んで、娘が後々の爲に宜しかるべし」といへども、母親泣き喚きて得心せず、「此の樣な吝嗇な所へ遣つて、娘が氣を詰めて煩うたらば、取り返しはなりますまい」と娘此に行き方なれば、顏見せ二の替りも見せには遣るまじ。花見遊山は愚か寺參りも滅多にさせまじ。折角おもひ／＼て拵へて遣つた、當世染の衣裳ども、箪笥の外を見せずに、置き古しにしてしまはれん悲しさ。此方ばかりの子ではあるまいし、是非とも緣を組ましてやるならば、娘は宿に還しますまい」と、袖を顏に押し當てての泣き喚めきに、萬右衞門も倦みはてて、「先づ一旦は受け取りになるまい」と相應の挨拶して賴み持て來りし者共に、無益の包み銀を出し、其の後種々と工夫し、聟の權兵衞へ手

を入れ、いざおざいふを無理暇取り、兎角する内十八にもなれば早く片付けたき念願。或方より一本屋町に座敷付きの家を求め、貸金なし暮さるゝ歴々の浪人衆。若黨許りも三人、何か十四五人の家計。兩親もなく氣兼のなき内方、殿御には三十一歳にて、馬の名人呼り上手。手は大橋様の唯中、千行にの下では有り付かぬとの儀、お娘御様の事を聞き給ひ、拾貫目宛ならば拵へ無しに呼びたきとの儀、筋目を承れば戸隱山にて鬼を退治なされし、余五將軍惟茂の嫡々、其の時の劒今にありとて、方々の問屋にも損料貸になされし、鬼神の眞中を差し通し給ふゆゑ、劒の銘を眞中丸と名づけ、頭を掴んであがらんとせし、鬼神の爪痕代々傳はり、お頭に高低あれども、金札今に御所持のこと、渡邊綱が事まで、取り付けて勸めければ、母親は飛び付くやうに思ひ、一娘が若黨連れて歩くのを見たらば、何程か嬉しかるべき、是れに極めさつしやれ」といふを、萬右衛門頭を振り「金貸して暮す浪人が、拵へはいらぬ拾貫目、先づ呑込みがたし。大方其の家も質に入れて買ひたるなるべし。鬼神の掴みし頭の高低、身代の言ひ立てにはなり難かるべし。身をも放れまじき先祖の名劍、損料貸にて高は知れたり、呑込めぬ／＼」と、煙草を輪に吹けば、母親「はて其處が聞き合はせといふもの、その近所に房屋といふ木屋あり、堀川の柴屋の徒弟の由、柴屋の彌七を聞きに遣れば知るゝ事」と樣々に勸めて、柴屋を竊かに招き、一妻は遣る氣なれども、旦那殿の不得心、ようそ遣るやうに聞き合はせて下されと」とあ

れば、柴屋呑込み、どうご遣るやうにとの一言に漏れぬ程に、宜しく言ひなせば、萬右衛門も始めて合點し、彌 縁を取り組みけり。母は夫に隱し、蒔繪の長刀、緋天鵞絨の鞘袋を誂へ、娘が一世一代町人の娘なりとて、内の者共にけなされぬ樣にとて、守 刀まで拵へたて、猶も武家の嫁入、不案内なれば勝手を知りたる人もがなと、尋ねさせけるに、七本松の邊に屋敷方出入る、お針婆のありけるを聞き出し、人頼みして呼び寄せ、樣々に馳走し、屋敷方の嫁入の譯を尋ねければ、此の婆夢にも知らぬ事なれども、遂に逢はぬ程の馳走に遇ひ、今更知らぬとも云はれねば、當推量に思ひ續け、「町方と違ひ嫁御のお乘物へ、大小が入りまするが、嫁御座敷へ御通りの時、脇差は裲襠の下にさし、刀は手に提げて座につかせられ、居合腰になつて、三々九度の杯をなさるゝ事でござりまする。長刀はお部屋へいれ、突棒刺叉はお次の間に殘され、御寢屋におはいりなされては、お婿樣と嫁御樣と割膝になつて、因果御懇意に御意得ませうと、兩手をついて切口上、少し訛つて仰せらるゝが善し。高[illegible]喰ふも町人衆の娘御と違ひ、箸おつ取り十三口半に上りますが、武士風なれども、その樣に召上りにくい物なれ、一箸は大口にくはされ、後はさら〳〵と汁かけて、上る事でござりまする。色直しの時長刀を使うて御見せなされませねば、扨もとは申しませぬ。町方の婚禮には島臺の拵へに、尉と乳母とが乘りますれども、武家方では中々見馴の事にはござりませぬ。[illegible]慶か、公平門[illegible]かの人形を乘せて出し

なことぞ、絶ず追風匂ひ来る、其の心こそ都馴れたれ、踵くるかぎりは春の越路に歸らず、折々は笠りけるにや、一度とれし朧足も、有り難がりて待つ男もあるらん。近江國三上郡よりお三が母親、六條参りして同行諸共、主人の中戸口まで来り、「能登屋の宇兵衛様は是れでござりまするか、近江から参つて居りまする、お三に逢ひたうござりまする、お三が母親でござりまする。」と云ひ込めば、お居間が呼び入れ、「お三はたつた今出られました。もう暇が入りませう程に、明日でもござんせ」と云へば、「連もござりまして今日半分道も歸りまする、最早八つ半なれば暮れまするまでには、八里は参られまする。お世話ながら先が知れてあらば、一寸呼びに遣つて下されませい」と云ふ時、臺所衆ひの六十八になる爺、「其なお三が母親とは合點行かず、お三が婆は一昨日二階から墮ちて、腰が抜けたと有つて、兄が薬求めに上りしとて、逢ひに行きたり。今から日の内に八里も行くといふ達者な母を腰が抜けたといへば、お三は主人へ詐りをいふと云ふもの。又お三が云ふが定なれば、留守を知つて入り込み、内方の案内を見て歸り、盗人の引き入れせうも知れぬ者共、動かしはせぬ」と、今時の奉公女の出遇ひを知らぬ昔爺、腕捲りして罵れば、母親も聞いて驚き、是れも在所暮しにて、其の譯を知らねば、「お三に兄はござりませぬ。大方其れは人買が参つて、生まれ付いて正直な娘を拐かしてがな、参つた物でござりませう、どうぞ御詮議なされて下され」と泣き焦るれば、奥より内儀出ら

れ「いや〳〵最前我が身の聞きしはさにはあらず、在所にあの様な兒があれば善けれどもと、心安うする男衆が呼びにおこせしゆゑ、大方今日は腰を拔かして、歸るでござりませうと云ふによりて、さいさい腰が拔ける事おやなうと云うて、遇はずに遣りました、もはや程もあるまい待つて見ごつしやれ」と云はるゝ所へ、お三何心無く立ち歸り、母を見て喫驚し、「在所の鄰のおか樣善う上らしやんしたなう」と目配せすれども、母は合點行かず「是れ奧樣が、お三は腰が拔けて戻ると仰せられたが、其のかはりに上り詰めて眼が惡うなつたか、現在の母を見て鄰のおか樣とは不便ものやこと」、土産に携へし白木綿一反、お内方へとて小豆一升、何事も知らぬ身の佛參り、歸命無量壽如來南無三方、日がたけた、然らばお暇」

### 第三　戀い兵部とは白髮のお袋

栴檀は二葉より芳しく、頻伽鳥は卵の内より、其の聲有りといへども、生質に器用不器用ありて、萬の事一概には云はれなし、都東山の邊に年月を送り、中年の頃夫に別れ、髮先は切れども、名は元のお雪とて、一人娘お松といへるを育て上げ、今年十七の花盛り、誰か折らぬ時無く、紅白粉粧を見せず、今様の風俗を遷さず、生得器用にして、小さき時より諸を好み、香盛華といへる人の弟子となり、稽古するに從ひ、天晴當世の上手となりぬ、其の外詩を作り文を作り、女にしては古今の

孫右と、人々持て囃しぬ。母親嬉しきあまり「こちの樣な娘は、日本に二人とあるまじ。」と、自慢するも道理なるべし。抑此のお松の師範と頼みける、嘉平といへるは、元來大明國の生まれにして、父を五將軍韓信といひ、母は錦繡君とて、名ある唐人の子なりしが、五歳になりける春、鞦韆をして遊び居たりしを、天狗が引攫みて、暫時の内に長崎の丸山邊へ落し置きけるを、其の頃唐物商ひなする嘉介といふ者、京都より買物に下りあはせ居けるに、此の者五十歳近きに一子も無し。是れ幸ひと所へ斷り、此の子を貰ひて連れ上り、大切にして育てける。幼少の時より才智人に勝れ、六歳になりて千字文を大字に書いて、人々の眼を驚かしぬ。成人して自ら風雅亭と號し、都の傍に獨り住みして、書畫を敎へて恆の產とし、寢間の戸の明暮詩文を樂しみ、身體髮膚父母に稟けたる明風自然と備はり、よろづ唐めきて暮しける。女ながらお松は、格別器用にして、書畫に秀でければ、外々の弟子よりいと懇に敎へける。お雪は娘の譽あるを悅び、いよいよ精出し、「嘉平樣に淸書をお目にかくべし。」と、日々稽古に通はし、筆意大事と學ばしける。風雅先生も門人の手前は、チンプンカンにて語れども、流石日本に育ちし神風、獨り住みの閨さびしく、お松に心あるなれど、いひ出でん折もなく、戀の假名文一生書いた覺えはなし、おもひ餘り何とぞよき返事をといふ事を、七言の詩に賦してお松の袖へそつと入るれば、態と知らぬ顏していぬる道すがら、繰りかへし早速起承轉合の出來た佃

理の達せぬ事多し。茶の湯で候とて、露次入りして蹲ひに掛り、手水遣うて後躙り揚りへ上り、我が懐きし草履を手にて取り、立て掛けて後は其の手にて、飯も食ひ茶も飲み、亭主の秘藏する茶入茶碗を、草履摑みし手にてひねくり廻し、事に依りては、濃茶を二口三口飲みて次へ廻す時、汗や穢や其の指にて、我が飲みたる茶碗の小口を拭うてまはし、仔細らしき顔するもあり。神道者と名乗りかけて、渡世する家には、常に七五三繩を門に張り置き、葬禮にも行き穢れある人も入る、常に七五三を引きては穢れは避け離し、格別に神事する時々にこそ張るべき事なれ。弓の代りに三味線を彈く武士、父の喪を勤むるとて、引き込んで居る内に子を生ませる儒者。經は嫌ひで淨瑠璃は好きな出家。老僧の中言。小兒のさし出口。歌舞妓子と懇意な能太夫。石橋道成寺も、石川五右衛門に千兩の金を持たせて、使に遣るよりは危き物なり。昔よりいふ瓜實顔は氣のかた病みに多く、遠月の眉は遊女めくべし。當世風の女の姿を、三百年も前の人に見せたらば、化物の風と嘲りなん。唯何事も移り變る、川瀨文藏といへる浪人相果て、後家一人の男子を育てしが、文藏息災なる時子無き事を歎き、松尾の明神へ籠りしに、七日滿ずる曉の歸るさ、野あひにて大杯を拾ひ、其れより孕むと覺えて生み落せしに、十一歲の時父相果て、一子丹藏母の力にて、十四歲までは育ちしかども、末の賴邊心元なく、富野仙亥といふ連歌師の許へ奉公に出で、生まれ付きて正直なる上、繪を畫く事を好み、四書

ひにて是れまでの立身、米は元より諸事の相場にもかゝらず、ますく高利のある事を見付けても、
晒布より外の商ひに心を寄せられたる事なし。又末子孫吉色狂ひの事、若き内はあるまじき事と云は
れねども、大坂の太夫と馴かくるは程の知れぬ奢り遣ひ、此の事共爺殿方へ云うて遣りたらば、律儀一
遍にて稼ぎ出し給ふ身代なれば、二人共勘當となるは定の事、何卒心を合はせ、しつけた晒布商ひに
も心を盡してたもれ」と、様々に掻き口説かれければ、孫太郎も御意見はする事なれども、我等總領に
生まれたれば、弟共に案内を捌かせて、おのれは西京へ下り、爺様を上げまして、永々の御苦勞を慰
け、御隠居しなされて、ゆつと樂しみをもなさるゝ様に致す料簡。然れば長の道中を往來致すに、山
賊海賊の難へ心元なし。やい京人酒代置いて行けと云ふ處を、手も見せさせず、谷へも海へも取つて
投げ、又田舎の事なれば、押入や盗賊が入るとても物にても無し、心得たりと一々捕め取らば、町人
にはあるまじき働きと、其の所の代官所より褒賞に預り、南部者は格別と、處の名まで揚ぐる道理、何程
商ひ事がありても、弱身を見られては掛も取られず、是れ皆家業を大切に致す故にといふに、差續き
て二番息子孫七、商ひ事は高利を取れば費えぬが知れた事、一刻のうちに立身はならぬ者なり。凡て町
人の身代といふ物は萬貫目ありても、明日の知れぬ物なれば、さて後へも前へも行かぬといふ時、
後前見ずにとつと一纏めにして取る仕來事、其の米事もさうには行かぬ物にて、一年中の風を考へ、雨を

窺ひ、別して七八月になれば、夜も寐ずに空を眺め、吹けがしと風の神を祈り、二百十日に靜かなる雲行を見れば、茶も咽喉へ通らず、放生會に枝も騷がぬ木を怨み、泣や大抵の事にてなる仕事にはあらず、哥兄は爺樣の跡を守り、晒布商ひ、我等が米事は哥兄の後詰といふ物、孝行の一つと思ふに御意見に遭はれたとは思ひもよらずと、聞き入れぬ顏色。末子の孫吉しかつべらしく、兄々達が如何樣の事で、大損せまじき物でもなし。百萬兩の家にも百の錢に事缺く事あれば、何ぞの時是れ皆末子の孫吉が、投情狂ひに身を持ち崩し、思ひの外大金を明けし故是非無く勘當致せしと、我等を追ひ出されれば、色の方を掘るといふ段になつては、何ほど使うても限りの無き物、兄達の身の上にも、人の憎みか、し、再び取り立てる人もあるべし。我等一人惡者になつて終へば、爺殿の心を盡したまふ此の家を立つ道理、にはかに色狂ひするとありては、其の時人が呑込まぬ故、兼て世上へ廣め置くと存じて、親兄を大切に思うての新町通ひ。」と、鹽辛喰ふとて水の飲み置きする樣な言ひ分。何も甲の下の息子供が返答、此の心得では、所詮改まるまじき者共と、涙含みて座を立たれしとなん。

## 第三　思ひ〳〵心は互に乘合船

蜈蚣も毒蟲なれども、毘沙門の使はしめにして、福を與へ給ふ媒と聞きては敬ひ、蛇も嫌らしきものなれども、辨財天の愛し給ふと云ふ故、恐々ながら懇に祈りたき戀の世の中に生まるゝ衆生

も。頭巾と草履下駄を挾箱へ入るべし、出入の時是れが無ければ同じ出入にて、本出入に立ち難し。」と、三人打連れ立たんとするに、二男の孫七が云ふは、「伏見へ廻りて京の相場を聞いて下りたし。私は長池道へかゝりませう、哥兄と孫吉は闇路越えにお出でなされ。」との言葉に、孫太郎合點せず、其方も定めて金を持ちて行くべし、道中如何にしても氣遣はし。一所に伏見へ廻り、船にて下らん。」といふに、「實にもこと」と同意。母も途方なく、止めたりとも止るまじき心と、「隨分怪我せぬ樣に。」と、ばかり見送られければ、三人は取り急ぎけれども、祇園の邊より、日も暮れかゝりければ、孫太郎腕捲りして、「是れは追剝が出でよかし、弟共に手練を見せん。」と夜通しに伏見へ着きし所が、夜の九つ半、何れも問屋へ寄り、二人はとろ／＼と朝舟を待つ間の夢を見、孫七郎は京の相場大津の譯を伏見中間は聞きて、其の筋々にて聞き合はせ、ほんのりと曙離るゝ頃、朝飯を食ふに、思ひ依らず奈良の本家へ出入する仲仕の八兵衞が出て、「お袋樣夜道心元なし、息災にて伏見へ着きしか、問屋殿で聞いて歸れと仰せ付けられ、唯今參りましたに一刻も早く立ち歸り、お袋樣に安堵させませう。」と、いひ捨てて歸りぬ。孫太郎うち笑ひ、「公時もどきの此の孫太郎が付いて來りしに、入らぬ錢を入れて八兵衞を遣はされた、流石は女儀。」と云ふ内、「早船が出ます。」と知らせ。乘合の内一枚敷を仕切らせ、船の内を見廻さず、愛宕參りもあれば、伊勢參りの下向もあり、三條通へ大坂の道修町から、藥の

意見するもの更に無ければ、弓長刀馬の稽古、町人の武藝は御禁制として、諸道具を取り上げられ、所を拂はれしかども、柔術の指南、身上は次第に手廻し悪く、然れども弟子の祝儀に年月を送りたるに、六十七八なる白髮爺、然も小男にして弱々とせしが、短き大小に破れ損じたる紙子羽織にて、杖をつきよろ／＼と、西之宮の道にて出會ひ、我等は二尺三寸の大脇差、細道にて此方より避けといへば、彼の爺刀が眼にかゝらぬか、浪人なれども武士に對し慮外者といはれては、堪へぬ我等が若盛り、唯一撮みと襟ぐに取つてかゝれば、彼の爺徒戯するなと片手投げ、物に當りしとは思はざりしが、翌日より骨痛み強く、左の手上り難く、片足何とやらん伸ばされぬ故、外科に見すれば、膝の番ひ打ち折られて療治なしと。其れより方々の湯に入りたり、大坂難波の接骨へ掛りたり、樣々の事少しも效なく、其の内に食物さへ無くなり、我より半分程な爺に投げられ、腰が拔けしとの沙汰廣く、弟子になりし人も皆見放し、落ち／＼て右や左と門立の今の身の上、八瀨の釜風呂を聞き及び、種々と膝行りて行きたれども、見苦しければ外の障りと、浴れられもせぬ今の歸るさ、乘合のお衆樣お慈悲に一文づゝ下されませい」と歎く。後の方に頰冠りせし五十許りの男「我獨りの憂き身と思ひしに、世には似たる事もあるものかな。私は神崎近き食満といふ在所の者、代々家藏田畑おほく、二十三人暮せし百姓、不圖大坂の米市にかゝり、一年許りはして取りしが、買へば下る賣れば上る、田畑書き入れ

昭和三年九月十二日印刷
昭和三年九月十五日發行

（非賣品）

近代日本文學大系
第五卷

編輯兼發行者　東京市麹町區內幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社

右代表者　東京市麹町區內幸町一丁目六番地
野中次郎

印刷者　東京市本所區番場町四番地
井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麹町區內幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話銀座　一八三番
一八八番
六八六番
振替東京五二二九八番